

青年英雄記

mZu

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

青年放浪記の続になります。

未読者でも読めるようにしています（いや、したい）が主人公の癖が強いのでご了承下さい。

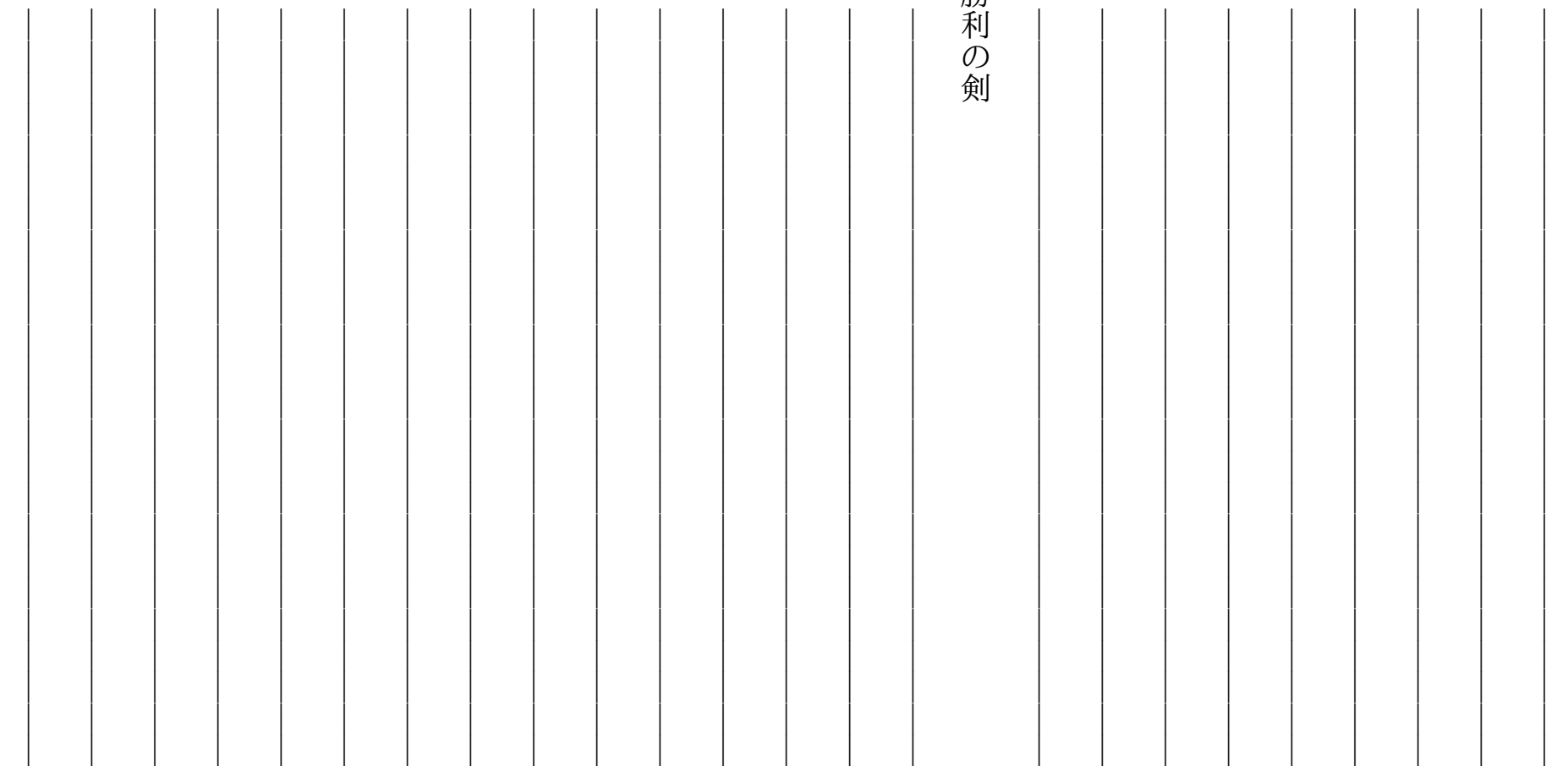
また、東方要素が薄くなりますのでそこだけはご了承下さい。

これは一人の青年の過去にケリをつける話。

目次

エピソード	1
幻想郷統合編	
第2話	4
第3話	8
第4話	12
第5話	19
第6話	26
第7話	33
第8話	40
第9話	47
狂夢異変	
第10話	51
第11話	62
第12話	65
第13話	70
第14話	74
第15話	78
第16話	82
第17話	86
第18話	90
第19話	95
第20話	100
第21話	103

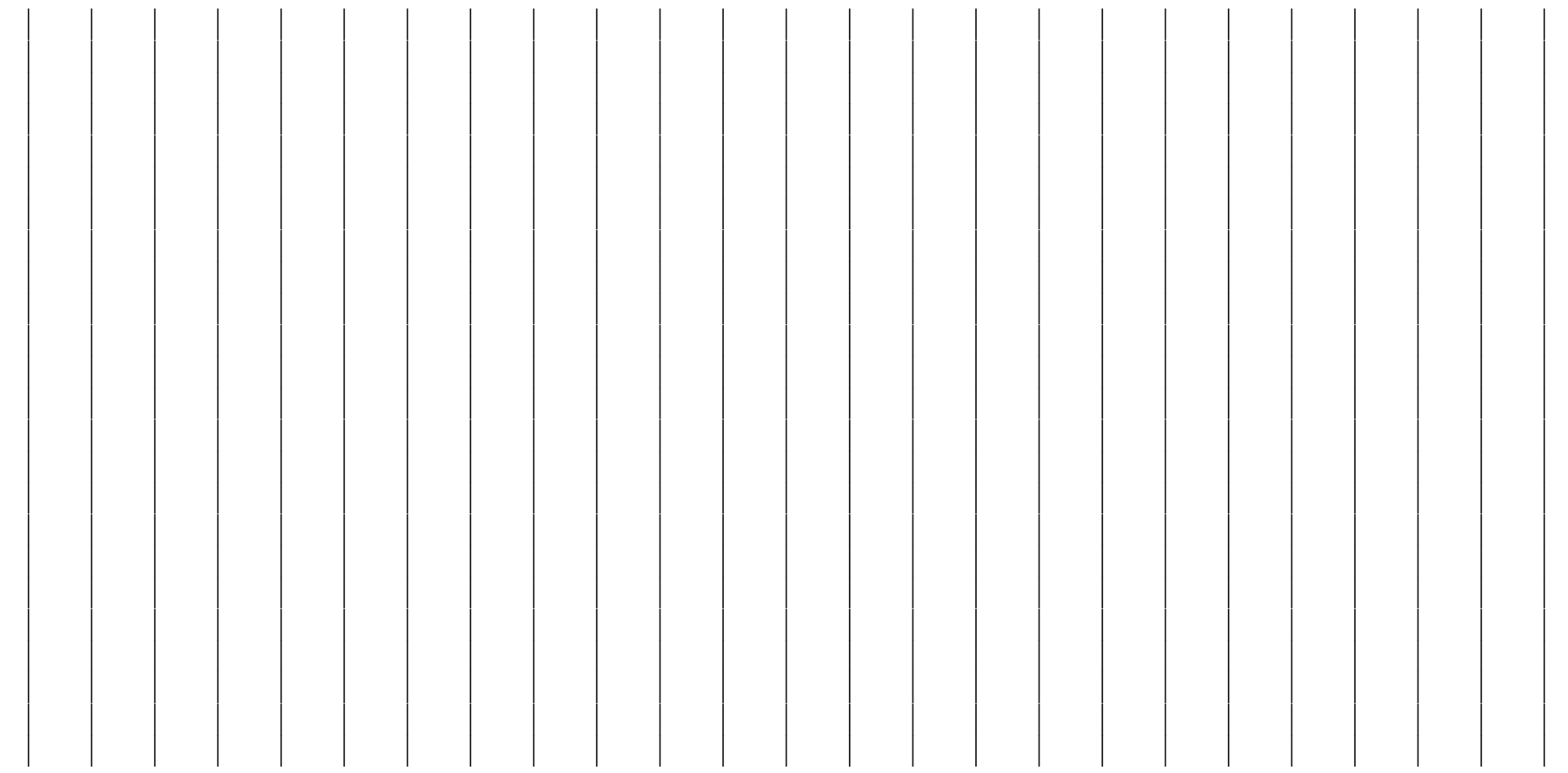
第45話 第44話 第43話 第42話 第41話 第40話 第39話 第38話 第37話 第36話 第35話 第34話 第33話 第32話 第31話 侵略者と勝利の剣 第30話 第29話 第28話 第27話 第26話 第25話 第24話 第23話 第22話



197 192 188 184 180 176 172 168 165 163 159 156 154 149 145 141 137 133 129 125 121 117 114 107

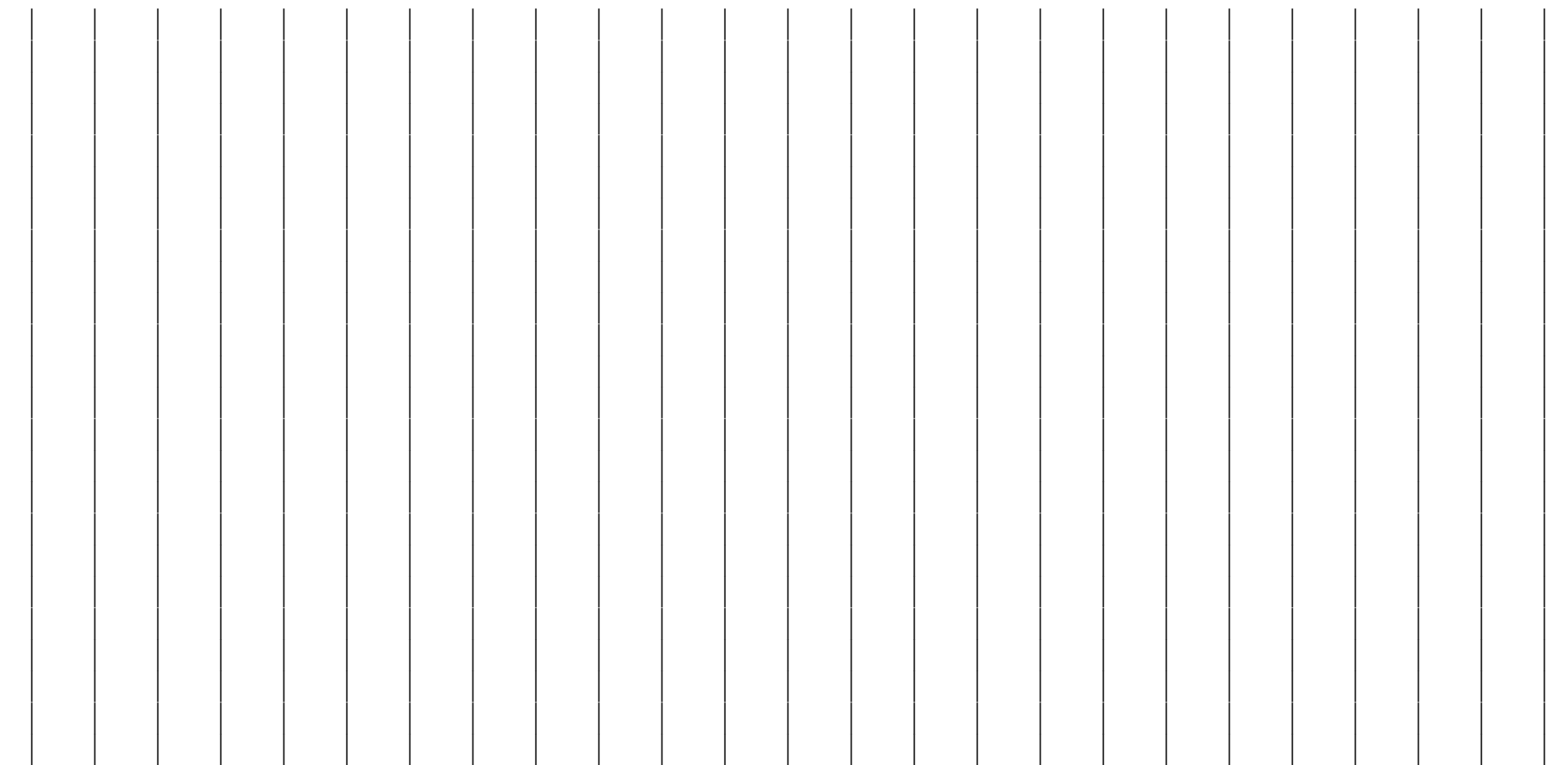
第69話	第68話	第67話	第66話	第65話	第64話	第63話	第62話	第61話	第60話	第59話	第58話	第57話	第56話	第55話	第54話	第53話	第52話	第51話	選択の時	第50話	第49話	第48話	第47話	第46話
292	288	284	278	273	269	265	261	257	253	249	245	241	238	233	230	226	222	220		216	212	208	205	201

第94話 第93話 第92話 第91話 第90話 第89話 第88話 第87話 第86話 第85話 第84話 第83話 第82話 第81話 第80話 第79話 第78話 第77話 第76話 第75話 第74話 第73話 第72話 第71話 第70話



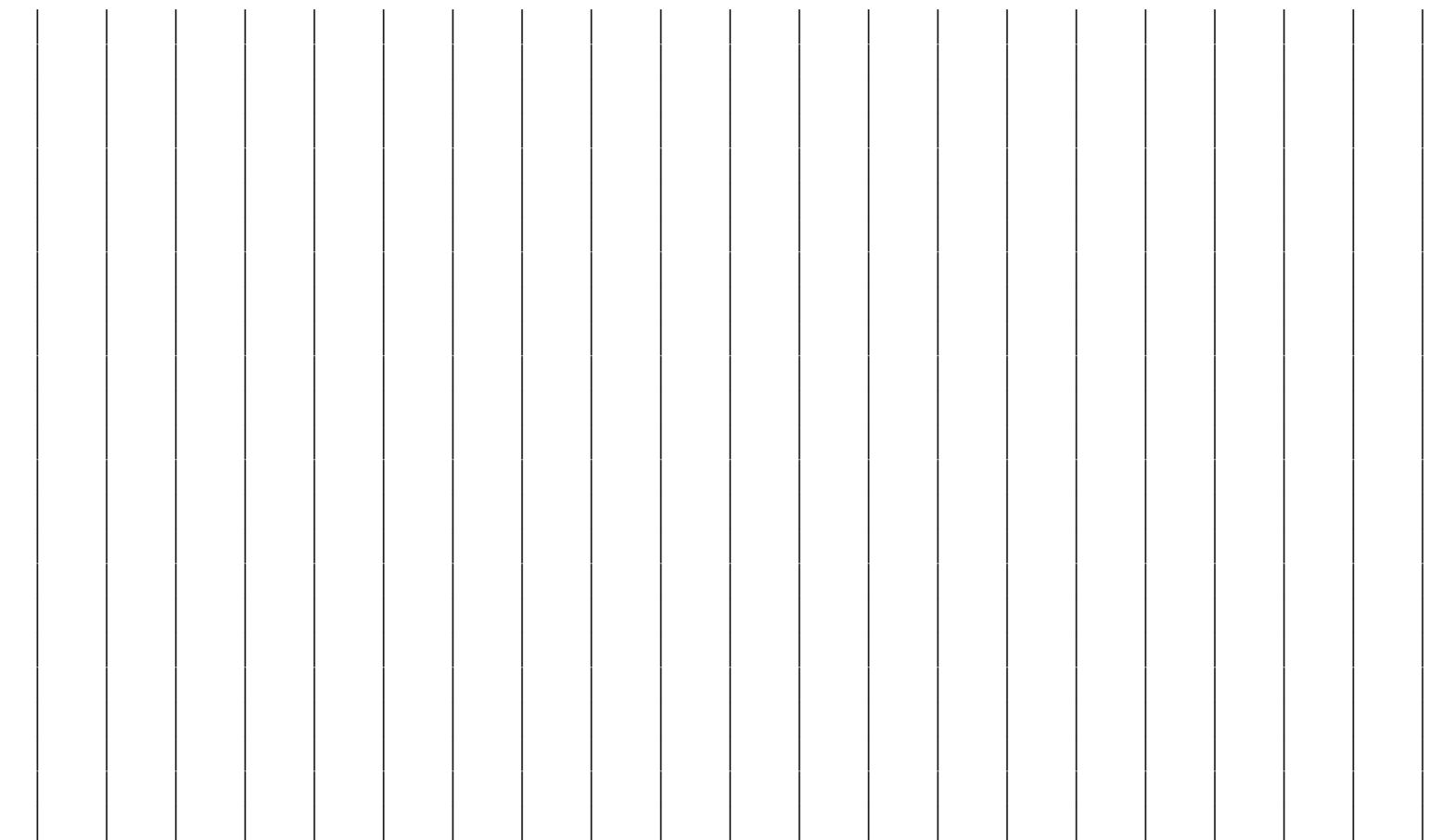
383 379 375 371 369 367 364 361 357 354 351 347 343 339 335 331 327 323 319 315 311 307 302 298 296

第 119 話 第 118 話 第 117 話 第 116 話 第 115 話 第 114 話 第 113 話 第 112 話 第 111 話 第 110 話 第 109 話 第 108 話 第 107 話 第 106 話 第 105 話 第 104 話 第 103 話 第 102 話 第 101 話 第 100 話 第 99 話 第 98 話 第 97 話 第 96 話 第 95 話



459 456 454 451 448 446 444 440 434 431 428 426 423 420 418 416 414 412 408 404 400 398 394 390 386

第
140 139 138 137 136 135 134 133 132 131 130 129 128 127 126 125 124 123 122 121 120
話 話



553 547 544 541 536 530 528 523 520 515 512 507 498 490 483 480 477 474 470 467 464

エピローグ

異変を解決した人として一躍有名となっていた青年だが誰にも見つかからないような場所で体を休めることにしていた。

此処には何も情報が入らないがその逆もありどのような人が何をしていたとも伝わることはない場所である。

深い竹林に覆われた土地の微妙な起伏によって一切の目印にもならず挙げ句の果てに感覚まで麻痺してしまう。そしてもしかすると妖怪に襲われるかもしれないという恐怖からか一度入ったものは誰も来る人は居なかった。

その原因はそれだけでもないのだが。

「竹林さん、体調の方は如何でしょうか。」

「良好だ。やはり永琳に任せて良かった。」

「効き目があるようですね。ですが無理な運動はしないでください。本当は動いてほしくないのですが言っても無駄でしょう。」

そう言うこの施設の看護師のような役割のあるシワついた耳をしているピンク色の長い綺麗な髪をしている女性は青年の近くに飲み水を入れた容器を置いてから隣の部屋へと向かっていた。

青年の寝ている布団の横には既に使っている剣や小刀、針が置かれている。如何してもと言う本人の意向でそのような形をとっているがわがままを通せるほどの信頼を勝ち取っているからこそ出来るようなことでもある。

青年は上半身を起こして容器を左手で取ると震えている手で口元まで運んでいた。今はそこまで気になるようなものではなかったが此処に来た頃は持つだけで容器から水をこぼしていた。如何しても起こる薬の副作用というものだ。

此処に来てからは一ヶ月になる。その間に初夏のようであったはずの幻想郷は真夏の天候へと変わりギラギラとした太陽が容赦なく焼き切るのだろうが青年は屋内にいたので全く関係なかった。

「鈴仙からは聞かれたでしょうけど医師として聞くわ。体調は如何かしら。」

鈴仙というのは先ほど飲み水を置いて軽い問診をして何処かへ行ってしまった人の事だ。

「別に特別言うようなことはない。」

「そう。私の薬が効いているようね。まだ安静が必要だけど外出はそうね。もう良いわよ。」

「そうか。」

青年は布団の上で座っていたがやがて寝転がっていた。永琳も暇なのか隣に座り込む。

「ねえ、聞きたい事があるんだけど。」

「実験体になれという話か。」

青年は聞いていた。

永琳は青年が今療養している永遠亭という場所で製薬をしている頭の良い人だった。大抵の薬は誰にも投与する事なく完璧に作り上げていて効果が強すぎるものから穏やかに効き始めるものまで多種多様な薬を作れる。もちろん材料があればの話だ。だが偶に天才と言え不安になることもある。その時には誰かに協力を得ているということだ。

「いいえ、試す薬は今作っていないわ。」

「そうか。それで聞きたいことは何だ。」

「まだ胸騒ぎが治まらないの。何か心当たりはないかしら。」

「時期が来れば分かる。まだ何も起きていないのなら何も言うこともないだろう。」

今見で弱かった妖怪達が奮起して自陣の力を示そうとした異変は起こったが永琳の胸騒ぎというのはその事では無かったらしい。

「そうね。心にゆとりを持って生活しないとイケないわね。私は此処で去る事にするわ。ゆっくり休みなさい。」

優しい笑顔でそういう永琳に無表情で首を振り、全く関係ない一点をじっと眺めている青年。

何か考えているようにも見えたので永琳は何も言わずに立ち上がる。

「心当たりがあるがまだ話す時ではない。そのうち話すだろう。」

「そう。」

後ろで結んでいる白銀の髪で結ばれている長い三つ編みを揺らし
て青年の寝ている永遠亭のある一室から立ち去った。

心当たりはある。だが確証はない。青年は言うべきか悩んでいた。

幻想郷統合編

第2話

夏の暑さの厳しい日だった。昨日は雨が降ったと言う事もあり、いつも以上に蒸し暑い。逃げ場のない蒸し風呂のような状態だが逃げ道がないと言うわけでもない。竹の林に覆われた恐らく涼しい風の吹くのであろう縁側に居るだけでもそれなりに快適なものだが此処よりも良い所がある。

前は適当に手で搔きあげただけで後ろでは一つに結んでいる黒髪の青年は過ごしやすい白い着物で過ごしていた。それでも首筋を通る汗と言うのは止まるようなことはなかった。我慢は出来るが迷っている事のある青年はそこへと導かれるようにそこへと向かっていた。

「邪魔する。」

青年は何の気なしに入り込んだ。慣れていると言うよりかは青年がそう言う性格なのでここ一ヶ月同じ屋根の下で過ごしているのもう見飽きていると言う事なのかもしれない。

「いらつしやい。何の用なのよ。」

青年の入った部屋は周りの建築物からは想像もつかないようなものが置かれていた。大きい輪の中に何かを入れ込むような台のある機械がある。その台には人一人が寝転がれるだけの大きさがある。青年も流石にこれは知らなかった。誤って幻想入りしたのかそれとも永琳が作り上げたのか。青年にはある意味では興味はなかった。

「ここは涼しいから。何と無く来てみた。」

青年は患者の寝かせるためのベットに座り込む。そして右脚を左脚の太腿の上に乗せて右足の膝の上で頬杖をしていた。その目は大人しくなっているが一ヶ月前とあまり変わっていない様子ではなかった。優しい目をしているが目つきが前に会った時ほど柔らかくはなかった。この部屋にいる白い十字のついた帽子を被っている赤と青のツートーンカラーをした服装をしている女医。月の頭脳とも呼ばれ

た八意 永琳。

「確かに外の気温よりは涼しいでしょうけど。貴方くらいよ。何も声も合図も出さずに入っているなんて無礼な行動をとるの。逆に分かりやすいから良いけど。」

「そうか。」

青年は少し悲しそうにしている永琳の言葉を軽く受け止めていた。元々熱く語れる訳でもないので会話としてはこのぐらいなのだろう。青年は何も話さなくなった。

「他に何か聞きたいことはあるの?」

「何も無いはずだ。」

「やっぱりね。思い出した事でもあるのかしら。」

「あるにはある。」

青年は落胆しているような表情をしていて見るからに弱々しくなっていた。

「話してみなさい。貴方みたいな人以外には聞こえないわよ。」

永琳の結界があるこの部屋では完全な密閉状態となっている。外から開けるようなことはできないが住人と青年だけは開ける事ができる。そのあたりの知識は全く無い青年なので途中から聞いていなかった。要は人を認識して開けたり閉めたりする。とても便利な結界だ。

「そうか。実は俺は侵略者でこの幻想郷を潰そうとしている。だからまずは永琳から犠牲になってもらおう。」

「この部屋には確かに誰も入ってこない。けど、本当に仕留める事が出来るのかしら。」

永琳は左手に持っていたペンを机の上に置いていた。その音だけでしか無いので判断はしにくいがそうなると思われる。青年は患者の寝るベットから立つような事はしなかった。そして暗い目をする永琳の表情を見てからまた口を動かした。

「本来なら出来ない。だが出来る人を知っている。俺はその人を引き連れてくる可能性がある。そう言う事だ。」

「そうなの、ね。とするとあなたが侵略者というのは一概に間違つて

いないということね。ならどうすれば良いのかしら。」

永琳はどうしたら良いのか分かっていないようだった。半分以上は信じていたのか見れんの残しているような口振りをしている。青年はそれを聞いていて申し訳ない表情をしていた。

「方法はない、かもしれない。事実として俺は幻想郷に居る。幻想入りする条件は知らないがそれ事実だけで十分入られる可能性がある。本当のところは管理している人に聞くと一番手っ取り早いがさてどうなるか。」

「とても難しい問題よね。それでどうするつもりなのよ。」

「曖昧な表現の物を曖昧な表現で二重にして伝えている。相手には口で言っても何も変わらないだろう。」

「貴方の予想を何も知らない人に伝えても仕方がないわね。私ならまだ何とかなるかもしれないとそう感じたのね。」

永琳は澄ました顔で下を向いている青年の方を見ていた。その小動物を見るかのような目には加虐性を持っているようだった。

「そうだ。俺も可能性の話でしかない。こうなれば異変を起こして炙り出すか。」

青年は急に顔を上げて立ち上がる。思い立ったら行動するその性格は変わっていないがそれにしては何も考えていない。永琳はそう感じたので青年の右肩を掴んでそれを引き止めた。青年は鬱陶しそうにしているが抵抗する意思はなさそうだった。

「そんな野蛮な方法はきつと上手くいかないわよ。」

「そうだ。上手く行かない。だが、伝える手段も乏しい。かもしれない未来をどのように伝える。」

変に熱のある言い方をしていた。

「上手く伝わらないわ。きつとね。」

そんな青年を見ていて何か違うように感じている永琳はこれ以上は何か助言できそうではなさそうだった。

「夢物語を語って信じてくれるのは入ってきた人だけ。そして頭の優れた人物だけだ。まだ、幻想郷に住んでいるだけの人は虚言として受け取るかもしれない。結界を作った張本人はきつと潰しに来るだろ

う。」

「それで実力を見せて危機感を与えようとする狙いがあるのね。八雲の二人を釣る事は可能かしらね。」

「それは分からない。最終的にはその二人を同時に相手して余裕で勝てないといけない。それぐらいの力は持ち合わせている。雑魚ならまだなんとかなるかもしれないが。数で押されると幻想郷は簡単に潰れる。」

「そう。そう言うのなら仕方がないわね。行きなさい。どうなっても知らないわよ。」

永琳は吐き捨てるようにそう言った。もう捨てられた匙のような青年だがそれでも良かった。今から死に行く青年には誰からも良く思われたい方が良かった。襖を開けてこの部屋から出て行く青年は縁側を歩いて永遠亭から出ていく。そして向かったのは北西の方向だった。

第3話

森の中を歩いていく黒髪の青年は何処へ行くのかは全くもって分からなかった。迷いの竹林を斜め方向を突き進み、妖怪の森へと入っていく。鬱蒼とした何処から現れるかも分からないような森の中で見慣れた場所へとたどり着いたのでそこで一度休憩を取ることにした。

誰のものなのかは分からない墓石の並んだ場所で前によく掃除をしていた。言う事はそれだけではないが懐かしい感覚を覚える。そしてどこから読経が聞こえてくる。どうやらここにいる僧はいつも通り暮らしているようだ。

青年は怪しい雰囲気のある墓所を歩き過ぎていく。その脚に迷いというものはなく一心に自分の目的を行おうとする。それだけで芯の強い人間であるのは言うまでもない。

前は青色の髪をしている邪仙がいた洞穴へと入っていく。理由はわからないが居なくなっていたので青年は誰にも話しかけられる事なく洞穴へと入っていく。中に会っておきたい人がいる。青年はそれだけだった。

洞穴の中は日が当たらない事を加味しても凍てつくように寒かった。靈感と言うのかそう言う人が感じるような寒さを感じている青年はそれを我慢して下へと続いている階段を降りていた。

石で出来た直角に作られた段の高さが均一になっている階段を下る。そんな頃には足音が共鳴しているように重なり合い誰かいるのかさえわからないほどになっていた。後ろに誰か居ても気付く事はないのだろう。青年は大きく開けた洞穴の先に着くと妙に静けさのあるその場所を不思議に感じた。

本来なら白い髪をしている尸解仙が居るか、口の悪い幽霊がいるのだと思っていたがそうではないらしい。青年は兎に角目の前の建物の中へと入ってみることにした。金色で作られた見るからに素晴らしい建物である。此処には十人の話を聞くことができる逸話を持つ仙人が居る。だが、こう静かだといえるのかさえ全く分かったものでは

ない。

青年は深くは考える事なく綺麗に整えられた白い石畳の上を歩いてその先にある建物の中へと入っていくことにした。

中には一度も入った事はなかった青年はその中の簡素な作りを見ていて何と言えばいいのかわかったものではなかった。五人ほどが囲んでたべれる程の大きさのある卓袱台があつてその先には古くなった木製と思われる棺とその先の何らかの像が置かれていた。青年が信仰については興味がないのだがこの時ばかりは何かを探すようにしていた。

「此処で何をしているのかしら。盗人さん。」

壁のある後ろから現れたのか声がした。もう神霊の騒ぎは無くなっているはずなので霊ではない以上は何か生きているものがあると思われる。そうでもないところのようになる事はない。

「青娥か。此処にいた神子はどうした。」

青年は相手に背中を向けながら話しかけていた。

その人は頭に無限大を示すように結ばれた青い髪に鑿を指していた。金色で刺している意味はよくわからないがそれを装いとして必要だと思うのかもしれないと思っていた。そして仙人らしく天女の羽衣のように後ろでは浮いていて全体的に水色の服装をしている。

背中を向けているのはある種の挑戦のようなものだが一切そうするつもりはないので勘違いされない限りは戦闘に発展することはないだろう。

「太子様でしたら仙界の方へと行かれています。お探しなら知っている顔なので連れて行くこともできますよ。」

「頼もう。」

「分かりました。」

青娥は珍しくそう言う。もう少しこじれそうだと思っていた青年だったがあつさりで行ってしまったのがどうしても気になるらしい。

「待て。何か企んでいることはないか、邪仙。」

「いえいえ、そのような事は全くありませんよ。」

邪仙と呼ばれたことには何も言うつもりはなさそうな青娥。青年

は踵を返して青娥の方を向いていた。どうしても疑念の方が強くなってしまうらしい。これがまた別の人ならまた違うことになっていたと思われる。

「そうか。どうしても信用できないものでな。理由は言わなくても分かるだろう。」

青年はそう言った。それを聞いて青娥はヘソを曲げてしまったらしくそこから走って逃げて行くように何処かへと行ってしまった。それを青年は追いかける。

「本当に会いたければ自分で来てください。それでは。」

青娥は頭に刺していた鑿を抜くと何もなような壁の所から何処かへと抜けて行ってしまった。何処に繋がっているのかは全く分からない以上は何も手出し出来ないので青年はその場からは動くような事はなかった。そして壁は塞がってしまった。

綺麗な丸が描かれていて引き抜かれたようになっていたがその先にはワープホールのようになっていた。その先にはきつと仙界へと繋がっているのだろうがまだ行くような時ではないと思われる。青年は仕方がないので用もなくなつた洞穴から出る事にした。トボトボと音を鳴らすだけの洞穴は何か虚しいものであるように感じた。だが、青年が今から歩くのはきつとこういうものなのだろうと感じていた。この道を歩く為には必要な犠牲だった、そしてその犠牲はこれから増えていく。

少しの間止まっていたのか青年ははっ、と目を覚ましていた青年はまだ地上に登るための階段の途中である事に気づくとその先を指指して歩いていた。光が差し込んだ洞穴の中で青年は軽く目を閉じるとそのまま歩き出していた。

まだ読経の声は聞こえてくる。夕暮れへと近づいているのだけはよく分かるので早急にこの場から出ていく事にした。まだここに来るべき場所ではなかった。先に顔をよく知っている人から手当たり次第に当たっていく必要があると思われる。

青年は何の目的もないように墓所を迂回して北側へと向かっていった。その足取りはとても遅く帰りたくない場所であるがそれでも行

く必要があつた。先に伝えておきたい所である。そして早く断ち切っておきたい場所でもあつた。

青年にとって湖に浮かぶ古城は思い出深い場所である。そして待遇を良くしてくれた。その恩は忘れてはいない。

第4話

霧に覆われた湖にはそれこそもうそろそろ館へと帰っていく妖精たちの姿が見えていた。駆けっこをしているだけだがそれだけで楽しいのだろうかと思っていた。

騒々しい場所では本来なかったがこう妖精が遊んでいると言う平和な感じはそれだけでも癒されるものでもある。それに知らない顔でもないのが適当に挨拶を交わしていく妖精達に少し反応を遅らせている青年。それを不審に思いながらも館へと戻っていく。これから夕食の時間になるのだろう。それこそよく食べたメイド長の食事だが今日は食べられそうになかった。青年にもやる事がある。今日はどうしても仕方がない事だった。

それでも足を止める事はなかった青年は行動は遅いが迷っているようで湖の側を歩いていくだけだった。迷っている時間がもつたいないと言うべきなのか。青年は重く考えずにそうした。それがどう解釈されようとも仕方がない事だった。

「久しぶりだ。」

青年はトボトボとした遅い足取りのまま赤い壁に守られた紅い血塗られた館へとやって来た。ここで過ごしている期間が一番長い。それ程にお互いに熟知されている状態だった。どう言う人間で誰が居るのかなど言うまでもない。

「こんばんは。咲夜さんから話は聞いています。後で私も向かいますので先に入っていてください。」

門番をしている紅い髪をしている緑色のチャイナドレスを着ている女性は優しい笑顔で青年を迎えていた。青年はそれを見て嫌そうな表情を浮かべていたが周りが暗かったのであまり気にされるようなことはなかった。

「実は話したい事がある。相手しろ。」

青年は一步引いてからゆっくりと鞘から剣を抜く。その音に過敏に反応した門番は素早く構えていた。それと同時にここで何をしたいのかそれを探る為にも仕方がない事だった。

「何があつたんですか。」

門番はどう裏切られようともその理由は聞くらしい。青年はもう諦めて本気で行く事にした。

剣を上から振り下ろす青年。

それをさらりと避けている門番。

「申し訳ないと思つている。だが、俺はこうする理由はちゃんとある。それに付き合つてくれると言うのならここで果たし合うことにしよう。」

青年は振つた剣を自分の身に引き寄せてもう一度構えていた。そしてゆっくりと顎を引いて切っ先を門番へと向けると迷いのない瞳がその奥から見えていた。もう引くつもりはない。そしてどれほど本気であるのかは先程の一振りで見せていた。

「わかりました。今回は敵とみなします。来てください。前とは違いますよ。」

門番はそう吠えていた。青年はそれをしっかりと受け止めていた。そしてもう戻ることは出来ないとも。

門番の一撃は軽い正拳突きから始まった。右腕を引き伸ばした先にある青年の胸を狙つていた。心臓に振動を与える為なのだろうが見えていないと言うわけでもない。青年は素早く反応して左手のひらで捉えていた。

そして青年は押し返していた。そこで門番は体勢を崩すが返しの一撃として右足を伸ばして爪先を当てようとしていた。青年は剣で防ぐと向かつてくる前に鞘の中に納めていた。その真意はきつと青年しか知らない。

「よく見知つた相手だ。俺は手加減はしたくない。」

青年は左腕を垂直に立てて指には力を入れなかった。右腕は体に寄せながら縮こまらせていた。もう殴る気しか見えないがそれでもどこから飛んでくるのかは分かつていなかった。美鈴も初めて見るような構え方である。何か隠しているような事が見えなくもない。

青年は構えている通りに右腕を伸ばして門番に当てようとしていた。

そのまま来るとは思わなかった門番だったが左手で抑えてから動きを変えていた。青年はそれからそれを弾くように右腕を振ってから一歩下がっていた。

戦う意思があるのかと問いたいがそれをしてはいけなと思うていた。見るからに迷いのある表情をしているのでそれをどうこうするつもりはないのだと思われる。門番はその職に任されたことだけを、目の前に知人が敵として表れようともそれをなんとかしようとしている。

「見るからに手加減をしていますですが何か迷いでもあるんですか。」

「迷い、か。あるにはある。だが、ない。もう決めている事だ。やるだけやる。」

「なら、その気持ちのままに向かって来てくださいよ。」

門番は敢えて厳しい口調で青年を叱責していた。何がしたいのか全く読めないからでもない。裏切られた事に憤りを感じていると言わけてもない。ただ決めた事をやれていない事にそう感じているようだった。青年は仕方がないので目だけは見るようにしていた。

その目はいつも通りの平らな目で少しだけ吊り上っているようにも見えない目をしている。青年はいつも通りに戻っていた。

「なら、行かせてもらおう。後悔はするなよ。」

青年はもう一度構えていた。左腕を前にして拳で狙いをつけるとその後ろで右腕を同じように構えていた。どちらの腕もしつかりと力が抜けていて素早い動きと力強い一撃を可能としていた。そして青年は左足のつま先を上げながらリズムを取っていた。それともいつでもいけると言う意味合いなのか。

「後悔というのはいけません。これからも会えるでしょう。私はここからは動くことは出来ませんが他の人には会った時にはよろしく頼みます。」

「その言葉、確かに受け取った。」

青年は左脚を動かして牽制という形を取っていた。そして頃合いを見て右腕を伸ばして当たりそうな瞬間に拳を握り締める。ビシッ、と音のなる衣服の音とそれよりも大きい音をした拳のぶつかり合う

音が辺りに響き渡る。妖精の居なくなった霧の湖はとても静かで飲み込まれそうなほどの黒い水面が広がっている。基本的に波立つことのない湖は今日も上に浮かんでいる月を鏡のように映していた。

青年はそれから左脚を浮かせて外側から回し蹴りをしていった。遠心力を利用した強力な一撃を門番は自分の右脚で受け止めていた。遠すかさず左腕の拳を振るう。門番はそれを右手で弾いてから押し返した。

青年が今度は体勢を崩していた。それでも気を抜くことはなく門番の左蹴りを受け止めていた青年は何故か笑っていた。懐かしいその感覚に毒されているようでここに来た理由というのを問いただしなくなる。

「強烈な一撃はいつでも変わらないか。」

青年は楽しそうにしていた。一ヶ月前の件から比べると余裕な気がするのか或いは単純に楽しんでいるだけなのか。門番はそのようなことはなんでも良かった。

「日々修練は積んでいます。貴方と同じく努力はしていますから。」

別に返さなくても良かった青年の独り言にも律儀に返していく門番は右手のひらを青年に見せて腰を低くして構えていた。どうやら容赦と言う言葉は似合わないらしく更なる一撃を加えようとしていた。それこそこれから何が起こるのかは誰にも分かっていない。青年も同じく構えて次の一撃のために準備している。

「そうか。いつも通りで安心した。」

青年は慣れた調子のままに言葉を連ねる。

門番が動き出した時には青年も反応して受け止めていた。ばしつ、と大きな音を立てたその一撃を青年は左手の手根に力を込めて門番の拳を止めていた。指の第二関節に当たったそれは門番を一步怯ませるのに十分だった。右腕の拳を痛めた門番は青年の次なる攻撃を止めていた。

青年の右足裏で強く蹴り出した強烈な一撃を両腕で何とか止めていたがそれで終わるようなことはなかった。その後には青年は左脚を蹴り出していた。

爪先だけを当てるようなその一撃は門番は手で止めていた。そして身を一步後ろに下げながら青年の飛び蹴りの二段目を肘で打ち返した。青年は顔を歪めながらも小さく左脚を遠心力を使って外側から蹴り出していった。それは門番も考えていなかったので甘んじて受ける事にした。

その小さな衝撃から青年は反時計回りに体を回すとその遠心力を利用して上から押し潰すようにしていた。門番は右肩を前に出してその軌道から外れると右腕を軽く伸ばしていた。そして拳を握ってからすぐに引かせていた。

青年は左脚を後ろに庇うようにその場に立っていた。何かされたのかと聞きたくなるが門番の拳が軽く泣き所を打たただけである。痛みこそあるが少し時間をおけば何の問題もない。

「やはり見えるのか。」

「ええ。自分の教えた技も混ぜ込まれていれば尚更です。」

門番はスウ、と体を落として構えると頭に乘せていた帽子を投げて何処かへ飛ばしてしまった。もう邪魔臭いとそう言う事なのだろう。青年はそう感じた。青年はいまだに腰に携えているものは何処かに置いたりはしなかった。

「そうか。師を越えるにはそれ相応の技が必要になるか。」

青年は素早く移動して門番の懐へと入り込んだ。それにはある一種の恐怖というものを覚えたのかもしれない。瞬時に回り込まれた門番は一撃は受けてしまった。腰のあたりを狙っていたのには何か意味があると思われる。門番の左肩を持っていた青年はそのまま押し出そうとしていた。普通なら倒れる事はない力量差であるが今回は違った。左足も同時に攻撃を加えていた。体勢を後ろへと大きく押された門番はその場で倒れた。

だが、それで終わる門番と言うことでもなかった。

青年の軸足とも言える右脚の膝裏を叩こうと動き出していた。しかしそれは動き出そうとしていただけで空振りを終わっていた。青年がそれを読めなかったと言うことでもない。直ぐに身を門番から離れたのでその間合いには入っていなかった。

近づかれない為に足払いをしながら立ち上がる門番。

その場から動こうとはしなかった青年。

門番がいきなり動き始めると青年も合わせるようにしていた。

門番が左腕を伸ばしながら青年の顔を狙っていた。そこですかさず避けた青年はその拳を持つと肘を右腕で押して曲がらない方向へ曲げようとしている。それを阻止しようとして体が反応した門番はその場を回らせていた。

だが門番もその勢いを逆手に取ることもしないとすることもなかった。しようとしたらその刹那。

青年の両手は離れていた。行き場を失ったその回転はフラフラとした門番へと強烈な一撃として返ってきた。立ち上がる事も許されなさそうな程の急所を当てられていた。青年の一撃の衝撃で前へと軽く吹き飛ばされた門番は近くで何かが刺さる音が耳の中に振動として伝わってきた。

「これで通れるな。」

青年は満足気に答えていた。それ程に嬉しかったのか一休止を得たからなのかはわからないがそんな感じの表情はしていた。門番の首の所に当てるように振り下ろされた小刀が地面に刺さっているだった。だが、これがもし首に当たっていれば即死、となっていたのだろう。

「そうですね。咲夜さんには多くのことを話してあげてください。」

「それはどうしてだ。」

「何だかんだ、貴方の事を考えていると思うんですよ。紅魔館のメイドとしての用事以外では出掛けようとしなかった咲夜が出てきたのですから。」

門番は淡々とした口調で話していた。

「自分よりも人の心配か。もし俺が敵だったらどうするつもりだった。」

青年は確認がてら聞いていた。だが、聞くまでもなかったのかも知れない。

「それは地面に突き刺さっている小刀が教えてくれます。」

門番は疲れた感じを露わにしながら青年と話をしていた。門番にはそうするつもりはなかったと思われているのだと感じていた。あまり深く考える必要もないのでそうする事にしたのだろう。

「そうか。話せる時が来たら良いのだが。」

「良いです。何か目的があるからこのように野蛮な方法を取っているのでしょうか。それほどに急を要するものかそれともまだ来るかどうかも分かっていないのでしょうか。気を読むことができませんのでそのくらいはわかりますよ。」

「そうか。そこまで言われると俺のしている意味が問われる。今日は本当に済まなかった。傷を負わせるつもりもなかった。」

青年はその場に座り込んでいた。門番は首を打たれていて手足が上手く動かせないのかも動かせないようになっていた。本当はそう見えるようにしているだけなのか青年には判断出来ないのでどうでも良いようにしていた。

「また来てくださいいね。咲夜さんが喜びますから。」

「そうか。」

暫くその場に座っていた青年は頃合いを見てから動き出していた。

第5話

そつと入っていく紅魔館と呼ばれる吸血鬼の住む霧の湖の孤島に建てられたその紅い壁で覆われていた館へと入っていくようにしている。

館に入る前には庭がある。前は手伝っていた事もあったがここ最近ではそうしている暇もなくなってしまった。それでも枯れる事を知らない花々はその美しい顔を競い合うように咲かせていた。青年はじっくりとそれを眺めてからある程度の時間を過ごして館の中へと入っていく。

紅い液体で染められていたようなカーペットにはちりひとつ、埃ひとつ落ちていない完璧な顔を見せていた。左側は妖精たちの部屋となっていて右側は住人の部屋となっている。三階の何処かに此処の主人である部屋がある。そう言える理由は吸血鬼だからと言う理由とここにいるメイド長の能力ゆえにそうなるようになっていているからだ。

紅いカーペットが敷かれている向かい合っている螺旋階段からある人が降りてくる。ハイヒールのコツコツといった音を立てながらゆっくりと階段を降りてきている。

「久しぶりね。何処に潜伏していたのかしら。」
「冷たい女だ。」

青年は売り言葉に買い言葉のように言葉を返した。別にそうする必要は皆無だが此処で話しておく必要があると考えたのだろうか。「完璧で瀟洒なメイドは表情一つも変える事はないわ。」

その人は銀髪で顔の長さぐらいの三つ編みを耳の前に出して白いリボンで止めていた。白いカチューシャをつけていてそこで少し髪をまとめているのだと思われる。そして紅魔館のメイド長であるその人は青い色の服装をしていて腰の辺りには白色の前掛けをしている。後ろに結び目があるのはこれまで関わっていたから分かっている。そして黒色のヒールを履いている。

「もう少し気を緩めたらどうだ。知らない顔ではないだろう。」

「なら先ほどの言動は取り消しなさい。」

その人は厳つい声でそのように言っていた。それこそ白銀のナイフのようなものであるが白玉のような太腿にも同じものがある。青年は此処で構えていた。

「外で音がしていたから何かと思つて見てみたら貴方がいるから驚いたわよ。でも、美鈴を倒してまでここにきた理由は何かしら。」

「俺は幻想郷を侵略しようとしている者だ。吸血鬼の姉の命をもらいにきた。」

青年は力強く答えていた。そしてもう帰り道はない孤独な岐路をひた走っていた。それにメイド長は舌打ちをしていた。

「到底信じられないわ。貴方にそんな力があると思つているの。まだまだ強い妖怪はたくさん居るわ。それに巫女にも負けているそうじゃない。それでよくここまで無作法な方法でノコノコとやって来て何を言い出すのかと思えば。そんな戯言を私に向かって言わないでちょうだい。」

本当に珍しく怒っているメイド長を見ていた青年は心の中では決めていたがやはり来るものはあるのだな、とだけ感じていた。

「その怒りは理解出来る。」

青年はそっぽを向きながら答えていた。まるで怒られている時の子供のように勇ましいとは到底言えない。だが、まだまだ迷いが完全に捨て切れているわけではなかった。これまで培ってきたものもある。それをみすみすと捨てるのは人生を捨てるものと等しくなってくる。少し考え過ぎかもしれない。

「なら、どうして、こんな事をしようとするのよ。」

息を切らしながら叫んでいるメイド長の言葉を重く受け止めていた青年は急に心臓が痛み始めていた。何があつたのかは言うまでもない。だが、それを跳ね返してでも先に進む必要はある。それを切り捨てる覚悟がいる。

「それが俺が思い出した使命だ。それをみすみす通した管理者もそうだが気付けなかったのも悪い。」

青年は出来るだけ距離が離れるように言葉を選んでいった。それぐ

らいは必要なのだろう。青年は全てを切り捨てるような気分です。ようようにしていた。此方へと手を伸ばしてくるその指や手のひら、更には腕までも斬り伏せていけないといけない。これからもその様な気分になるのは多く存在するのだろう。

「そう、ですか。なら、もう、私は、お嬢様を守る為にこのナイフを振るう。」

メイド長は泣きそうな情緒の暴れ方をしていた。内心、謝りたい青年だがそれをさせてはくれなさそうなメイド長に瀟洒と言う言葉は似合わなかった。

青年にまっすぐ飛ばされた白銀のナイフは青年の引き抜いた剣によつて軽く弾かれていた。そしてカーペットの上に汚れとして落ちていた。メイド長はそれを投げるだけでも相当に迷いがあつたのだと思われる。

「全ての迷いを捨ててかかって来い。俺は全てを受け止める。」

青年は見ていられなかったのだろう。敵に塩を送る事にしたその真意は別としてメイド長は憤りを感じずにはいられなかった。

「そんな事を貴方が口にしないで。私を騙していた罪は重いわよ。」

「してみると良い。時間停止の仕組みを知らないわけではない。」

青年は挑発的に捉えられる言葉を選びながらここまで誘導をしてきた。きつとわざと乗ってくれただけなのだろうかいつもの調子を失っているメイド長はお嬢様に拾われる前のその姿を示しているのかもしれない。寧猛な獣のような表情をして怒りの表情しか見せようとしなかった。

「そこまで言われる程貴方には見せていないわよ。」

「そうか。そう思っているといい。」

青年はここまできても喧嘩腰なのをやめようとしなかった。それにメイド長は乗せられていて引き返す事はできなさそうな様子だった。それに青年は受け止めるつもりなのだろう。拾い上げた白銀のナイフを緩やかな放物線を描くように投げていた。敵の施しは受けないのかメイド長はナイフの刺さった場を通り過ぎて広間へと降りてきていた。

「貴方を倒すわ。お嬢様を守る為にはそうするしかないのね。」

メイド長は落ち着いた口調に戻してそのように言っていた。怒りというのは越えて諦めているのかそれともそれも演技として必要なものだったのか。青年にはどちらでもなかった。其方から来てくれるのならどれだけ楽になるのかは言うまでもなかった。

青年は切っ先をカーペットに向けていた。戦う気があるのかとても怪しかった。それでも青年の目はしっかりとメイド長を捉えていて離さなかった。

時はメイド長の能力によって完全に止まっていた。白と黒だけのモノクロの世界となっていたがその中で銀色の髪で青い服装をしていたメイド長。その世界の管理者として唯一この場に立っていた。そして辺りは音はなく誰も存在していないような感じを覚える。だが、メイド長の目は真つ直ぐと的を狙っていた。

それは頭の上に乗せられたリングの如く。赤い果実からは甘い汁から垂れていく。その色は赤くて一度きりの麻薬のような快楽を与えてくれる。気持ちいい、と一言に尽きるその衝動に駆られてナイフを投げていた。完璧に止まっていた時間の中では一切の動きがなかった。

そのナイフはメイド長が手を離れた瞬間に白と黒のモノクロの世界の中に溶け込む。それは白色の簡素な衣服をしていて黒い髪をしている男性にしては低めな身長をしている青年へと向けられていた。その原動力はお嬢様のためではない。

「これで終わったのよ。」

涙をこぼすその瞳とは裏腹に的確に急所を狙っているメイド長は十何本ものナイフを青年の周りに集めていた。四方から放たれる八方塞がりな位置からの攻撃に逃げ場はない。

そのはずだった。時間は元に戻り全てがカラーの世界へと戻っていく。紅いカーペットには何の塵も埃もなく綺麗な状態に保たれていて周りの壁も紅くて大きな窓からは月の光が微々たるものだが漏れさしていた。

青年の周りには金属音と共にメイド長の投げたナイフが散ら

ばる。そして青年には何の傷も与える事はなかった。

「何をしたのよ。」

メイド長は驚きを隠せなかった。何が起こったのか全く言っ分らない。

「時間の操るメイドはその能力を破られた。して、それでどうしたい。辞めるか、それとも続けるか。」

青年は静かな声で聞いていた。それこそ蛍の飛ぶその音のようで静寂というのが一番似合っていた。メイド長は青年の周りに落ちてしまったナイフを自分の手の中に納めると青年との距離を空けていた。別に元から届かない間合いなのであるがそれでも怖かったのである。青年に大部分を削られたメイド長は自分がどこまでやれるのかを測ることができなかつた。どこまで通じるのかは全く、いや何も分からなかつた。そして先程も何が起きたのかは全く理解できていなかった。

「続けるわ。私の使命はお嬢様を守る事なのよ。」

「それはメイドとしての役目だ。咲夜自身はどうだ。無くしたくはないだろう。」

「私の命はとうの昔から無いに等しい。」

メイド長は大きく前進していた。青年は急いで剣を鞘の中に納めると小刀を二本取り出していた。そして両方とも逆手持ちでメイド長が間合いを詰めてくるのを待っていた。どこからその余裕が生まれるのかはさておきメイド長は己が欲望のために動いていた。

時間を止めて急激な加速を与えるがそれが通じる相手でもなかった。

青年の小刀はメイド長の右手に持っていたナイフを止めていた。逆手持ちながらもその間合いを理解している青年に隙と言うものはなかった。自分の間合いと相手の間合いを把握している青年はメイド長にとっては不利でしかないような戦闘を強いられる事になる。

上手く詰めていたメイド長はその場から離れていた。そこで懐へと飛び込んできたの言うまでもなく青年であった。メイド長がナイフを持っていない左側を狙った青年の一撃に瞬時に対応したがそ

れでも間に合わなかった。

手の中で持ち方を変えていた青年はメイド長が防御する為にナイフを構えていた右腕の手首を突き刺していた。何が起こったのかは分かっていなかったが何をされたのかは理解している。

風穴を開けられた右腕はナイフを持つ事も叶わなくて力なく床にナイフと血を落としていた。簡単に言えばもう勝てる見込みはない。利き手でもあるのでこれからも支障が大きく出てくるはずだ。それでもやめようとしめない所にメイド長としての誇りというのが垣間見える。

それでも向かっていくメイド長に感心している青年は出来るだけ応えるようにしていた。

「穏やかに暮らしている方が幸せだっただろうに。」

青年は逆手持ちをしている小刀を持ちながらこの広間に吊るされているシャンデリアの蝋燭を見ていた。これのおかげで暗くはなっていないがそれでも薄暗いと言うのは言うまでもない。青年は虫のように蝋燭を凝視していた。

「お嬢様を傷つけるのは許さないわ。」

「誰もそうとは言っていない。逆に感謝の意しか伝えるつもりはなかった。ここを回しているのは言うまでもなく貴方だ。それをどうして蔑むことが出来る。そこまで恩知らずではない。」

「じゃあどうしてそんなこと言うのよ。」

メイド長は溢れ出しそうな気持ちでそのように聞いていた。少女のようなその声に何か言うつもりはないがまだ戻るには早かった。

「簡単に言えば独立でもしてみたらどうだと言う話だ。」

青年は走り出していた。

メイド長は不自由な利き手の右腕ではなくて左腕でナイフをに握ると青年の小刀を抑え込んでいた。自分の身には当たらないようにしていたが勿論両腕扱えると言う点を考慮している必要がある。

「うっ。」

そう言つてメイド長は青年の方へと倒れていた。必死になって一本の小刀しか見ていなかったメイド長は後ろから来る青年の左腕を

忘れていた。そこから放たれた首筋を狙った一撃はメイド長を咲夜へと戻す一撃であった。

青年は丁寧はその体を扱うとこの広間の壁へと寄せていた。そして永琳からくすねていた傷薬を塗りこむ事にした。それで治せるのかはどうかは知らないがそれで治せるのだろう。血はまだ出ているが止血しているのもそのうち治まるのだろう。青年はその場で立ち上がるとどこへと向かおうとしていた。その眼に映るのはきつと殺戮を続けた人の多く倒れた大地で一人歩いている姿なのだろうか、それとも。

第6話

紅い壁と床に覆われたただ広い一室では小さく揺れている蠟燭の火が照らす光と外からの月の光が見えていた。その光に照らされた場所にいる青年はその中で自分の右手を見ていた。この手には剣に施されている魔法陣が映されている。そしてその結果自分の体が触れていれば何か魔法が扱える状態となっていた。今更何か道具は持たなくても何とかなっているのは事実なのである。

「何をしているのかしら。」

青年が一息ついてから探しに行こうとしていたその本人は螺旋階段のある廊下の手すりから顔を出していた。その人は薄い青色の髪をしていてナイトキャップ帽を被っていてドレスを着込んでいる人だった。どちらの色も淡いピンク色で赤い靴を履いていた。その人はこの紅魔館の主人であるがそのカリスマ性というのは実際のところ何も無い。

「話すような事はしていない。」

青年は簡素に答えていた。あまり話したくないのかそれとも面倒なのかは分からないがおそらくその両方なのだろう。そんな表情をしていた。

「そんな冗談は通じないわよ。先から音が聞こえているんだからねえ、何か隠している事はないかしら。」

主人は青年に対して上からの立場でその言い方をしていて。威圧感のないので青年は特に何か言うこともなく花を鳴らす程度でさっさと受け流す。

「貴方は自室でも紅茶でもすすっていたらどうだ。出る幕ではない。」青年は冗談交じりに暴言を吐いているが主人には通用しない。そのような事はいつものことである。今更注意することもないので主人は何も言わないが今日は毒が少なかった。それはちよつと隠し味のようなもので料理を美味しくさせる裏技のようなものぐらいでしかなかった。

「そんな事ないでしょ。私にだって何か言うくらいの資格はあると思

うわよ。」

主人はそのように述べている。もう少し聞きたかったのか手すりから身を乗り出してその場から降りてくる主人は紅いカーペットの上に着地すると何もなかったかのように青年の方へと寄ってくる。

「階段を使えば良いだろう。」

青年はそのように言っていた。

「貴方からは匂うのよ、血の匂いが。だから何かあったんでしょね。」

「聞くも何もそこを見れば分かるだろう。」

青年は左手を使って親指で壁の方を指していた。主人はその手に導かれてその方を見ていたがその場にはこの館の半分以上を握っている裏の実力者がいた。その人はぐったりとしていて本当に何があったのかそれで察したのだと思う。主人はすぐに一歩引いていた。「貴方は何をしたのよ。ここにいた恩も忘れたの。」

主人は急に怒ったような表情をしていた。逆に恩を仇で返されてニコニコしていてもそれはそれで嫌なものである。青年はそんな事など構うような事なくまた別の場所を見ていた。

「レミリア、貴方には何もされた覚えはない。食事中もわがままを述べては咲夜を困らせていた。妹の方が優れている。貴方には何が残っている。」

青年は急に蔑んだ目をしていた。その理由は簡単に言ってよく分かる。

「私にはそれでも紅魔館を守る使命があるのよ、主人としてね。」

レミリアはそのように強く宣言していた。青年はそのような答えは求めていなかったらしく息を小さく吐いてそっぽを向いていた。だが、別にそれでもよかつたらしく青年はそのまま続けていた。

「それならやるべき事は一つだろう。」

「そうね。」

レミリアの得手であるグングニルを取り出す。紅い槍で魔力によって形取られたものであるが金属同様の硬さを持っている。何処にしまい込んでいるようになっていたが何処から出てくるのかはま

だ分かっている。その先は青年の方を向いていた。

「ようやく理解したか。俺が此処に乗っ取ろうとしていると言うことを。」

青年は嘘をついている。だが、そうでも言わないと向かってくることのない優しい姉はようやくエンジンをかけたらしい。

「そんな事は私が許さないわよ。」

レミリアの持っているグングニルは届く限り間合いまで近づくようにして精一杯に手を伸ばしていた。その延長線上に伸びた先には青年が居たがそうやすやすと当たる訳でもなかった。

吸い込まれるように抜かれた剣によって弾かれたグングニルは役目を失ったように床につきそうになっていた。それを防いだが青年の攻撃の手は止まらなかった。

暴れている右腕がレミリアの方に一撃だけ与えようとしていた。そこで蝙蝠へと姿を変えてその場から離れていたレミリアは九死に一生を得た。彼処からあれを食らっていれば吸血鬼であってもそこその傷を負うことになる。それだけは何としても防ぎたかった。

「流石は吸血鬼だな。」

青年は褒めていたがそれはまた別の意味合いがあるように感じたレミリアはその返答として舌打ちを選んだ。別に間違ってもいけないのだろう。青年がレミリアを褒めた事は此処一度もなかった。それでも歯向かう事はなかったので問題外としていたがどうやらそうでもないらしい。

「口が動くなら少しでも当ててみなさいよ。」

少々憤りを感じているレミリアは鋭い口調でそのように言っていた。だが、それも青年の手の中であるように感じてレミリアは変な嫌悪感を感じた。

「そうか。助言をありがとう。」

青年はそこから動き出すと一気に間合いを詰めていた。自分に操作魔法をする飛行を応用したその技術は青年は独自に編み出した。偶にこうしないと追いつけないこともある。

青年の両腕から放たれる剣はレミリアの持っているグングニルに

阻まれる。それも計算のうちであるように押し始める青年とそれに対抗するレミリアは拮抗した状況からお互いに同じタイミングで後ろへと下がっていた。それからレミリアは蝙蝠の状態となりその部屋の中を飛び回っていた。

青年は全てを追うような事はしなかった。来たものだけを的確に狙えばいい。精神を研ぎ澄ませていた青年に物理的な隙はなかった。そしてそこから放たれる此処まで培ってきた魔法も威力を増す。

「来い。全て受け止める。」

青年はそう言つて剣に伝わるように念じていた。その念は天にも届きそうなもので物理的には存在していなかった。一番操るのが難しい二極の色のうちの片方だけを利用したものは青年が操るにふさわしいと言うものではなかった。

大量の蝙蝠とかしたレミリアは四方から青年の方を狙っていた。その先は血を吸われきつた今にも干からびそうな青年になると思われた。

だが、それを防いだのは先程まで念じていた光の元素を集めたものであった。神々しいまでの光を集めていた青年はその光を蝙蝠へと向けていた。太陽を嫌う吸血鬼はそれだけで身を焼き切られるような感覚を覚える。レミリアは青年は離れていくと一つに戻り見やすい姿になっていた。

「成る程。こうするだけの實力はあるよね。でも遠距離は苦手でしょう。」

レミリアは素早く離れると赤色のネイルの様なものを水平に放つ。放物線を描いていたそれは青年には簡単に避けられていた。だが、それで終われるほど容易いものではなかった。後ろで爆発するように着弾点から赤色の丸い弾が何処と明確な狙いは付けていなかったが放たれる。爆発をイメージしたと思われる弾幕は青年を苦しめたと言う訳でもなかった。

青年は前へと一気に飛び出してレミリアの方を狙っていた。後ろは何も見えていなかった。それでも向かってくる青年はある意味では勇者とも言える。レミリアはその行動の切り替えの早さには度肝を

抜かれていた。

「確かに苦手だ。剣を持っている以上は遠距離は苦手だろう。」

青年も負けているという事ではなかった。剣を振るって風を起こすと緑色の弾幕として横並びになっていたものが次々に無差別に飛ばされていた。別に出来ないということではないが苦手であるのには間違いないらしい。レミリアは軽々しく避けているだけで当たるようなタイミングはなかった。蝙蝠となって避けてくれるのならまだ良かったが全くその様なそぶりは見せてくれなかった。

それでも辞めようとしないう青年にレミリアは半ば諦めたようにグングニルを投げつけていた。だが青年が見えていないと言う訳でもない。レミリアの赤色の弾幕と自分の緑色の弾幕が織り交ざって混沌とした一室の中で青年は冷静にグングニルを避けていた。そして斬波を撃ち続けていた。一線だけを作って緩やかに飛ばされていくその弾幕に当たる方が難しい。レミリアも流石に飽きてきたのだろう。

「もう終わりよ。やっつけていても時間の無駄にするわ。」

レミリアは弾幕を放つを辞めたので青年も同じく辞めた。そして両腕で持っていた剣の切っ先をカーペットのある床に向ける。それが構えているらしい青年はレミリアの方を向いていた。青年の弾幕は壁に刺さったままで消える事はなかった。

「そうか。」

青年はレミリアの挑発のようなものにも乗るようなことはなかった。それとも気付いていないだけなのか。レミリアは自身の魔力でもう一本のグングニルを持って青年に向かっていく。靴から鳴るその音は柔らかくどれだけカーペットがしっかりとしているものであるのかを物語っていた。丁寧な掃除をしているおかげなのだろう。青年は右腕を振ってレミリアのグングニルを止める。弾かれたように回転を始めたレミリアはその力を利用して間合いを広げながら攻撃を与えようとしていた。

青年は何の気なしに左腕で軽く止めるだけで他に何かするようない事はなかった。だが、それで確実に止められたのと言うまでもない。

嫌な音が聞こえてレミリアはグングニルが欠けていることに気づいた。

「何したのよ。」

「魔法道具を破壊する。貴方は俺の剣に何回触った。」

青年はゆつくりとカーペットを踏みしめながらレミリアの方へと向かっていった。まだお互いの間合いではないがもうすぐそばまで来ているかのような威圧というものはある。レミリアは素早く蝙蝠へと変身したがそれを待っていた青年は軽く剣を振るだけで終わらせていた。一本だけレーザーのような物を放つ。

そこから壁に刺さっていた青年の放っていた弾幕に引きつけられると急に弾かれていた。そしてその場所からも同じくレーザーが現れる。それが段々と増えていく。青年は最後の一撃のための準備をしていた。

丸い球体のような場所で一匹ずつ倒されていく蝙蝠のその断末魔を聴きながら青年は心を落ち着かせていた。もちろん元の姿に戻れば全部当たる事になるのだろう。青年はそこまで計算して剣を振っていた。

不可能弾幕。規則を破っている弾幕だがそうでもしないと手慣れには勝てなかった。青年は苦肉の策としてこれを前に編み出していた。

「やるじゃない。」

レミリアは青年の前へと現れていた。何とか破ってきていたのだろう。見事に回避された青年の弾幕を見てしてやったような表情をするレミリア。

青年はそのような事は気にすることなく平然とした感じでその場所に立っていた。

「本当は規則を破っている。初心者の失敗と思っけていてくれ。」

青年は申し訳なさそうにしていた。

「そうね。でも避けられたのなら何も問題はないわよ。」

レミリアはもう勝った気でのだろう。そんな感じの表情を浮かべているレミリアはグングニルを消していた。もう拳で勝てる

確信したのだろうか。そもそも倒す気は無いのだろうか。

「そうか。それは良かった。して、そこまで近づいていいのか。」

青年は聞いていた。青年の見ている先には誰も居ないはずの所で動き回る緑色のレーザーの弾幕達だった。出る事も消えることも許されないでその場を回ることしか出来なかった。

「良いじゃない。吸血鬼は本当の意味で人間に負けたりはしないのよ。」

レミリアはそのように言っている。確かにその再生能力というのは言うまでもなく強い。多分半分体を消しても数分もすれば再生するのだろう。それ程だった。だが、青年に策はないとは言っていない。

「そうか。」

青年の方へと向かってきていた無数の針はレミリアを後ろから貫いていた。稲妻に打たれたような衝撃を感じていたがそれを声に出せるほど余裕はなかった。蝙蝠一匹も逃がすつもりはない青年は逃げようとするその蝙蝠を全て斬り伏せていた。そして青年の放っていた弾もなくなり目の前の蝙蝠も一匹になっていた。その蝙蝠は羽を落としておくことにした。飛ばれるのも困るがそれ以上に面倒な事になっているのは言うまでもない。

青年は次は何処に行こうかと考えていた。三人を倒した青年は更なる獲物を求めていた。

第7話

少し考えていた。本当にこれで良いのだろうか。メイド長と主人を倒した青年はそれが倒れている場所でそうしていた。

別に構わないのだろう、青年は結局そのような考えに行き着いてもうしておくことにした。これ以上考えても何か出る訳でもないので此処で議論というのは止めることにした。

兎に角向かう事にしたのは紅魔館の中でも一番お世話になっていて恩を仇で返すのが一番悪く感じる人だった。でも、行く必要がある。それだけは言うまでもなく決まっている事である。

青年は考えても仕方がないのでこの館の右側へと向かっていた。メイド長がどれだけ廊下の長さを変えようともその場所だけは一切変わらない。蝋燭が掲げられるのを数えると14個と少し、地下へと続く階段を見つけた時には青年は足を止めてから一息入れてからその場所へと降りていく。

空間が歪められているようで紅魔館の大きさと同じぐらいの大きさのある図書室では棚は天井についていて隙間なく置かれている本が置かれている。その種類は違うが上に行くほど使われにくいものとなっている。それを物語っているのは青年の目によく映っていた。特に見覚えのない魔道書や得体の知れない書籍まで置かれている。

紅いカーペットを敷かれている螺旋階段を天井から降りていく。そして二階へと着くともう一度別の階段を利用して1階に降りていく。周りには魔道書が置かれていて見たことのあるものしかない。天井近くに置かれていたものとは格段に綺麗な状態で置かれているのを青年は歩きながら眺めていた。今日ほど途中に置かれている本を見た事はなかったのだろう。

「この階に置かれている魔道書は綺麗に保管されているのか。」
青年は目の前にいる人に伝えるように話していた。

その人は紫色の髪をナイトキャップ帽から出している女性で全体的に紫色で彩られていた。眼鏡をかけていて目の前の魔道書を読み漁る姿は前から変わっていない。よく座っている椅子をその時に利

用している机がある。その前にはテーブルが置かれていてフカフカのソファがある。どうして知っているのかはよく彼処で読んでいたからと言う簡易的な理由だ。

青年はその慣れた調子でその人は前へと現れていた。

「そうね。防火、防水。それと最近は何が付かないように防護もしているわ。」

眼鏡をかけていて魔道書を読んでいた人は頭を上げていた。

「珍しい。俺の話に顔を上げるなんて。」

「そんな事はいいわ。上で大きな音がしていたけど何かあったの。」

「別に特別言うような事はない。」

青年は澄ました顔でその人と会話をしておくことにした。別に今更何か言う必要もないと考えたのかそれとも別に言わなくても分かるだろうと言うものなのだろうか。青年はその辺りはぼかしていた。「そう。久しぶりね。今まで何をしていたのかしら。」

その人は青年に聞いていた。基本的に自分に直接関係あることしか興味ない性格故に上での騒動を何とも思っていないなさそうなその人はもう一度魔道者に目を通し始める。青年はソファに座っていた。そして前傾姿勢で眼鏡をかけた人に話しかける。

「パチュリー、実は話したい事がある。外に興味がない事は知っているからこそ話す。」

青年は暫く続いた沈黙を破り切るように話を切り出した。まわりには誰もいない。司書というのは居るが紅魔館と同じ大きさのあるこの場所で近くにいると言う事は珍しい。青年はそれを知っているので何か特別話すような事はなかった。

「何よ。急に思い出したように話すわね。」

パチュリーは青年はその急な事に答えたいのか魔道書から手を離れた。そして真摯に受け止めようと聞き耳をたてる。昔ならこのような事はなかったのだがどのような心変わりがあったのかは分かっていない。

「パチュリーだから話すことを忘れて欲しくはない。誰にも言わないと思っっているからこのようにする。」

青年はパチュリーの態度とは裏腹に目を逸らして何処を見ているか分からないような場所を見ていた。左斜め前の特に何も無いはずの壁を見ていた。

「早く言いなさい。面倒なのよ。」

パチュリーは急かすつもりはなかったがどうしてもそのようなようになってしまう。

「俺は侵略者だ。それを起こした本人と言うことではないがある任務を任されていた。そしてその人に刃向かう気もないがこれまで世話を焼いてくれた人に仇で返すのは良くない。だから信頼を無くしてからその場を去りたい。未練も何も残らなければ俺も帰りやすいだろう。」

「そう。まず紅魔館に来てこれまでの事をなかつたことにしようとしているということね。そんな甘い考えをしていたとは思えないけどね。私とは貴方が未熟な頃から教えていたわ。その時の走り書きのメモも残している。それを焼却して私を殺してからそう言う事は言いなさい。それともその度胸がないのなら此処から素早く立ち去りなさい。顔を見せる、見せないはどちらでもいいけどそんなどっち付かずに私は魔法を教えているつもりはないわ。」

「少し熱が入っている。パチュリーにしては珍しいがそう言うだけの時日は過ぎている。言い返す言葉も見当たらない。聞きたい事がある。俺が齒向かえばパチュリーは縁を切ってくれるのだろうか。」

「一方的には切れるでしょうね。切りたいならそうすれば良い。けどね、私を含めてそのような事はあり得ないでしょう。メイド長もいつも私のところへと現れるようになった。レミイも罵言暴言吐かれていてもそれなりには心配していた。それを切りたいのなら此処にはもう来ないでちょうだい。」

「そうか。門番にも大体同じようなことを言われていた。だが、縁を切りたい理由は分かってはもらえるか。」

「貴方の重しになるのでしょうか。それならさっさと切りなさい。私たちがどれだけ手を伸ばしてもそれを払いのけるのならね。」

パチュリーは攻撃に転じる時の魔道書を持っていた。いつも使っ

ている机に置かれている一冊の黒い表紙の書物がパチュリーの手元へと渡っている時には青年は後転してソファアの背もたれの後ろに隠れていた。それでも当てられるときは当てられるので青年はまたすぐに後ろに下がりお互いに見えやすい場所へと出ることにした。

「パチュリー、俺は今回魔法は使わない。これは俺が決めた事だ。」

青年は高らかに宣言していた。パチュリーは鼻を鳴らすだけで特に反応は示していなかった。それこそ何があつたのかを言いたいがそう言う意味ではないのだろう。青年はふとそう思った。

「先ほどのように俺の事を思っていたことは有難く感じている。それでも俺は前へと突き進む。その門出だけはお願いしたい。」

「分かったわ。」

全方位を覆うような青いレーザー。途中でカクカクと曲がり始めたそのレーザーは青年のいた所を貫いていた。

瞬時に避け切る青年は後ろに下がってから右側へと場所を移動させていた。

「そんな技あつたか。」

「貴方の方を見て編み出したのよ。初見殺しの弾幕を避けるなんてやるわね。」

パチュリー青年の移動した左側を向いて正直に褒めているようだった。それでも事足りないのか拍手までし始める青年としては何がしたいのかさっぱりと言う感じだった。だが、これで終わっていないのは青年の勘がそう言っていた。

「それは言ってみれば俺の弾幕を見ていたからだろう。」

「それはどうかしら。」

パチュリーはわざとぼかしているようにしているが実際のところはまだ分かっていないのでなんとも言えないところである。青年は後ろも警戒しながら何となく歩いていった。何処からどのように現れるのか分かったものではないので青年は全方位を警戒する事にした。勿論安易に歩くのもパチュリーの設置型の魔法にも引つかかる可能性があるので一概に動いていけばいい訳でもない。

青年は後ろを振り向いていた。龍のように一本に集まっていたそ

の青いレーザーに青年は左側へと避けていた。それを追うように集まっていたものうち何本かは青年の方に向かっていった。磁石のよなものであるが反発し合ったり引き寄せられたりその時によって状況が変わるのだろうと思っていた。青年のものよりも高度なものでどうした物なのかと思っていた。

「応用したか。流石パチュリー。」

「褒めるような事はしてないわよ。受け売りだもの。」
「そうか。」

青年は簡素に返したところで一気に間合いを詰めていた。それは此処から面倒な事になると言う予感がしたからであり既にもう起こっているような気もしなくもないがそれでも向かっていく事にした。パチュリーも立ち上がり勝負を挑むつもりらしい。

足を浮かせているパチュリーだが青年の剣が届く範囲にいるので実は優しいのかもしれない。

「これからが本番よ。少し見せたかっただけのものとはまた違うものよ。」

「そうか。楽しみにしている。」
「そう。」

パチュリーは冷徹な返答しかなかった。それこそ何かあったのかと聞きたいが何もなかったのだろう。人に対して冷たいのはいつも通りでしかない。青年も今更注意したり一言言ってみたりするよくなこともしないだろう。

五色全てを取り出したパチュリーは石のように固めていたそれを青年に向けて放っていた。赤色、水色、緑色、黄色に紅色。その全てを持ってパチュリーは青年へと攻撃を加えていた。

小さな弾がその無限とも言える石のように固められた元素から飛び出してくる。パチパチと弾けていく焚き火のように小さな火の粉が青年の方へと向かっていった。青年はよく見ながら避けている。それぐらいしかやることがないのだろう。弾幕というのは本来避けられない事するのは禁じられている。青年は幻想郷に来る前に作られたルールらしくそれに従うしかないのでそのようにしている。だ

が、今はそんなお遊びをしている訳ではない。

青年も着実に間合いを詰めていく。酔拳のようなフラフラとした動きで弾幕の隙間を避けていたがそれで許してくれるようなパチュリーでもなかった。

静かな夜のような場所で豊穣を願った少女の祈りは真つすぐな線となつて月へと向かつていた。それを示すように薄緑色で放たれた弾幕は横に広がる先ほどの弾幕の中で真つ直ぐに狙つてくるものだった。その中でポツポツと雨のように青色の弾が降ってきていた。

七色もの弾幕を避けながら青年はその情景を楽しんでいるようだった。だが、それも終わりに近づいてくる。背を低くした青年は弾幕という高密度のものを利用して一気に近づく事にした。音は床に敷かれているカーペットに吸われていて何も音はしなかった。それこそ静寂を思い出す薄暗い夜のようなものだった。「うぐっ。」

いつの間にか近づかれていた青年に腹を叩かれたパチュリーは吹き飛ばされていた。元々動かない魔法使いは青年のようにアグレッシブという訳でもなかった。故に体は弱かったのでその場で倒れてしまった。青年は近づいていき、パチュリーの手を持って体の上に乗せるとまぶたを手で落としておいた。何か意味はないのだが確実に悪意があるようにしか思えなかった。それ故に青年は笑いながら仕方がなくそのようにしていたが別にそうしている必要性はなかった。「さて、今日は帰るか。」

青年は呟いていた。誰も居ないのでどのような声を上げようとも自由のはずだが何か気配がするのですぐに息を潜めていた。青年は鋭い視線をして辺りを見回していた。

確かに気配はするのだがそれがどこからなのかは全くわからなかった。図書室なので棚で姿を隠す場所が沢山あるから仕方がないのかもしれない。気のせいという事でこの場は終わらせようとしていた。

その時に上の方から声がしていた。その場所は青年がいる一階以上に広い場所なので見つからなくても仕方がないと思われる。だが、

出てきた人は悪かった。

「お兄ちゃん、何してるの。」

見つかってはいけないような人に会ってしまった。

第8話

「いや、ちょっとした腕試しだよ。」

白装束の患者が着るような簡易的な服装の青年はその場で剣を抜いたその姿のままにその方を向いていた。声からもう分かるのだが最近此処へと来ていない青年にこの人が何処にいるかなど分かっていた。作戦から計算外のことが起こっていた。

「ううん。見ていたよ、ずっと。お姉ちゃんを倒しているのも。お姉ちゃん、とても怒っていた。腕試しならもっと軽やかなものなんじゃないの。」

その人は優しい声で聞いている。だが、どの目的であるのかは青年が一番知っているのでその事は話に言い返すような事はできなかった。

その人は金色の髪をしているが綺麗なものではなかった。きつと地下深くに長く幽閉されていたのでそのような事は気にした事はないのだろう。そして姉と言ったレミリアと同じくナイトキャップ帽を被っている。吸血鬼の代名詞でもある翼は宝石を吊るしているような綺麗なもので内蔵されている結晶によって光が出されていた。基本的に赤色をしている服装で靴下は白くて靴は赤色をしている。

「そうか。して、どうしたい。フラン。」

青年は聞いていた。悪い行いをしていても何か反省しているようには見えないのがどうにも気になるが青年はいつも反省はしない。逆に反省する時は相当分が悪いと感じている時か特に興味を示さなくなつた時だけである。

「どうしたい、って言ってもね。別にお姉ちゃんが倒されていても何も思わないけどパチエにはとてもお世話になっているのよ。」

青年にフランと呼ばれた少女は二階の手すりから身を乗り出していたが其処から降りてくる。姉妹揃って同じような行動を取るのが唯一の証明となつた。青年は少しだけ面白そうにしているだけだつた。

「それでレーヴァテインを取り出しているが。やるのか。」

青年はフランの行動をよく見ながら一瞬も気を抜かないようにしていた。それこそ息を潜める虎と言うべきだろうか。それぐらいのものはあった。青年は握っているだけの剣を持ちながら切っ先を下に向けているだけで振るような様子はなかった。

「やるよ。パチエを虐めたのは許せないから。」

「良い心がけだ。」

青年がそう言った瞬間にフランの持っていたレーヴァテインは青年の左腕に持っていた剣に当たっていた。青年は両腕で受け止めていた。別に見えていなかったということでもない。冷静に受け止めているだけだった青年はその冷たい視線と熱い意思で答えていた。

青年は足を浮かせて宙を軽く飛ぶとレーヴァテインの間合いから出ていた。剣と槍のような武器ではそここの気はあるがそれはモノともしない実力は青年にも持っている。レーヴァテインは元々決まった形を持っているようなものではなかった。剣のような形をしているが大きさは剣という呼び方の出来るものではないので大剣といったところか。ただ槍のような間合いの範囲は持っているのは事実。

レーヴァテインは暴れだす。青年へと向けられた復讐の刃は行動を狭められるとともに確実に追い詰めていた。だが、それで負けるような青年でもなかった。

一気に後ろへと下がる青年。それを追いかけるフランに距離が詰められる事はなく本棚の近くへと来ていた。此処で青年は本棚を蹴り出して上へと行くとフランは本棚に突っ込んでいた。

木片が折れた時に起こる煙のようなものがその辺り充滿していた。青年は二階の手すりに掴まりながらその様子を見て手早く上に登っていた。別に登る意味はないが上に来るまでの時間稼ぎ程度にはなるのだろう。その程度でしか考えていなかった。

フランはその煙に巻かれながらその外へと出てくるが青年の姿がない事に気付いた。そして周りを見渡すので青年は簡易的にフラン、と呼んでいた。ただの遊びでしかない青年は折角の機会というのを

切り捨てていた。まるで今までの努力を簡単に消すように。

フランがそちらへと向くとそのぎらりと光っている瞳が青年にレーザーを当てていた。手すりに掴まって高みの見物をしていた青年はその場から見つめ返すようにしていた。それだけで大きな問題はないのだろうか。それでも気になるものはある。

「お兄ちゃん。フラン、もう怒ったよ。」

そう言うフランはその場から跳躍してレーヴァテインを突き刺そうとするので青年は軽く身を引くだけで寸前で避けていた。何もかも見通していたようである。フランは飛び上がりながらも腹部の方を気にしていた。

青年が先程入れておいた一撃が良いところに入ったらしい。フランは眉間にしわを寄せるが素早く振り向いていた。青年の方を向いていたフラン。

青年は何処を見ているのさえ分からなかった。最早何がしたいのかさえ分かっているようだ。

それから青年は手の中で両腕に持っていたはずの剣を回して逆手持ちをしていた。する意味合いはさておき馬鹿げた行動をしていた青年。それに向かっていくフランは床を蹴り出していた。

青年は避ける事はなく剣で受け止めていた。右腕で弾き出すように押し出されたレーヴァテイン。その下からは左腕を伸ばしていた。フランは自分の爪でそれを止める。元々尖っている爪だが吸血鬼としての種族差と言うのもあるのだろうか止める事は出来る。特にこれのような渾身の力ではない時はどうしてもそうなる。レーヴァテインを押し始めるフラン。

青年はその力には対抗出来ないのので下手な攻撃は相手に隙を与えただけだった。それでも青年は右腕に力を入れるのをやめていた。下から押し出すように退けた青年は回転を加えてその場から逃げ出そうとしていた。それがどのように作用したのかは言うまでもない。

逆手持ちをしていた青年の右腕はフランの方へと向かっていく。それから切っ先はフランの顔面へとその手を伸ばしていた。首を逸らしてそれを避けると青年の右腕は持ち堪えようとしたフラン

の右腕が邪魔した。そこからは押し込む事はできないのですぐさま身を引いた青年。まだまだ続きそうなところである。

「フラン、そこまでこだわると理由を聞かせてほしい。」

青年は身を引いて逆手持ちを辞めると腕をたたりと垂らして切っ先を床に向けていた。別に聞く理由も何も無い造作もない会話だ。

「私がお世話になっていたからと言うのと門出を祝ってほしい訳なんですよ。パチエとの会話は聞いていたわよ。」

フランはそのように答える。初めて会った時とはまた違う雰囲気を感じた青年だがその身なりや眼光だけはいつまでも変わらないと思っていた。

「そうか。それで祝ってくるのか。」

「うん。大好きだもん。でも、此処に居れない理由がある訳でしょ。聞かせて欲しいけどパチエに話していなかったから。」

フランは青年の質問に真摯に答えていた。別にそうしなくてはいけない理由というものはないがそうしたいのはフランの方にはあるだろう。青年はそれを分かっているながら何処までフランが知っているのかを聞いていた。

「そうか。辞めだ。なら俺は斬るつもりはない。」

青年はそれだけ言うのと剣を納めていた。それでも辞めてくれない人はいる。

「やだ。私とも遊んでよ。」

フランはレーヴァティンを振って青年に当てようとしていた。問答無用なその攻撃は前から残っている狂気というものを感じないわけがなかった。強力な一撃のようで手すりは軽々しく大きな音を立てて壊れていた。

「そうか。付き合う事にしよう。」

青年は大きく一歩後ろへと跳んでから一気に距離を詰めていた。右腕を振る。

それにフランはレーヴァティンを床に刺すような動きで止める。外側へと弾いた。

右脚を出しながら左腕を振る青年。

それに合わせてフランはレーヴァティンを振りまた止める。

青年は左腕の力を一気に抜いてフランのレーヴァティンを受け止める事はしなかった。持ち方を変えるようにひらりとかわしたその剣は逆手持ちになっていた。

青年は右脚をもう一度踏み出してから間合いを詰めてフランに一撃を与えていた。

衣服ははだけていて少しだけ血の出ているように見える赤い線が一本だけあった。艶やかな白い血色のいい肌が露見している。

フランは翼を使って空中へと逃げる。青年は追いかける事はなく外側へと弾かれていた右腕も元に戻っていてフランの事を待っているようだった。リズムの掴めない青年にフランは改めて興味を持ったフランはパスツ、パスツと翼を振りながら下へと向かっていき青年を突き刺そうとしていた。

流星に見えているところからだだったので避けやすかったのだがそれでも相当な力があった。床を砕く一撃を足を開くだけで避けていた青年は瞬時に反撃とばかりに攻撃を与えようとしていた。それだけではなかったが弱い一撃ということではなかった。

「まだまだだよ。」

フランの笑い声とともに大きく振られていたレーヴァティンは青年の股下から一気に振り上げられていた。だが、見えていないわけでもなかった。青年は剣を交差させてその振り上げる勢いを利用して後ろへと下がる。だが、それで済むのならまだ良い方なんだと思う。

間合いを詰めて一気に叩いてきたフランに青年はどうしようもなくなり甘んじて受ける事にした。本棚に強く左肩をぶつけていたがそれでも冷静に状況を見つめていた青年はその先まで分かっていたかのような動きをしていた。

青年は後ろへと避けていた。先ほどまで青年がいたところにレーヴァティンが当たり本が数冊床に落ちていた。パチュリーが後々怒るだろう。

すかさず青年は右脚を動かして横に移動させる。その左横を通り抜けていく剣。言わなくてもフランのレーヴァティンだった。

「パチュリーにはなんとといえば許してくれるだろうか。」

青年は状況が見えていないように独り言をつぶやいていた。それでも気にしている様子はないのである意味では肝が据わったのだろう。何事にも動じていなさそうだった。

「知らないよ。」

フランは翼を広げていた。その幅はそこそこあるように思える。青年は本棚をまたいで横へと逃げていた。本棚一枚の壁としてフランとの距離を開ける事にしたがそれが通じると言うことではなかった。

青年に付いてくるフランは自慢の爪を使いながら前へと進んでいく。青年はなんとかして避けながら本棚を使いながら避けていた。

二枚かそのぐらいの所で後ろを押ししていたフラン。その勢いで倒れていく本棚はドミノのように倒れていった。

「この上で戦おうよ。」

「辞めておこう。」

青年はそう言った。

「ダメ。」

フランは手を離してはくれなかった。

突き飛ばされる形で青年は倒れている棚の上に乗ってその上で剣を構えていた。大きさの違う本が収納されていて足元は悪く、動きづらかった。

フランは翼を広げて空を飛びながら青年に対して爪を振るう。当たれば即死というわけではないが見た目以上の殺傷力はあると思われる。

青年は一本の小刀で受け止めると足場の悪さから青年は後ろへと逃げていた。それから簡単だった。

フランは空中から青年を追い詰めるように拳を握って強烈な一撃を見舞っていた。本棚はその力に回転してその上に乗せていた本棚も浮かされていた。とてもではないが收拾のつかない状況になるのかもしれない。

一階では本棚の残骸である木片が並んでいてその上や敷かれてい

る本が乱雑に置かれていた。きつと中までは保護されていないと思われるので破れたりするような事はあると思われる。その煙の中でフランは立つて青年を探していた。

木片の折れた時に起こった煙によつて視界は悪かった。それに残骸が置かれていてもしかすると壊れた本棚の裏にいるのかもしれない。フランはそう思って探しに行こうとしていたがその必要はなかった。

膝裏を貫いた一本の何かがフランの体勢を大きく崩させた。本棚の残骸の上を滑り落ちてフランは慌てて上を向いていたがその場には誰も居なかった。

だが、誰がやったのかはよく分かっている。

フランは追いかける事は出来なかったが仕方がなさそうにしているだけだった。

流石の吸血鬼といえど膝裏を消し去るような一撃では立ち上がるのは難しかった。それに命がけの戦いというわけでもないので気合いを入れるような必要もない。

青年は九死に一生を得た気分で見話になっていた館を出て行く事にした。

第9話

誰も寄り付くことのない不気味な森の中では何もかもが奇妙な形をしていて顔の付いている木や紫色の大きな傘のあるキノコなど薄気味悪いものばかりが多く魔女が住んでいるという噂から誰も寄り付こうとはしなかった。それは妖怪も同類であり、別の意味ではとても安全な場所となっていた。

其処に笠を被った黒髪の青年が現れていた。別にしている必要はないがそうする理由はある。そういう事だ。

青年は決別の意を込めて此処までやってきていた。そして青年が立っている場所から見える青い屋根は幻想郷来て何も知らない自分を泊めてくれて魔法の基礎を教えてくれた言わば恩人がいる場所である。此処に来るのは後の方にしたかった青年だがいつまでも逃げたくなかった青年は遂にここまで来ていた。

「邪魔する。」

青年は扉をあけて中を見ていた。その家の中には住人の作った人形の試作物が置かれていて段々と造形が美しくなっていくのが見える。しかし、隙間なく押し込まれたような人形が少しだけ悲しそうに見える。

「いらっしやい。毎回言うのも疲れたからもう言わないわよ。好きなところに座りなさい。」

金髪のショートで赤いヘアバンドをつけている少女は周りにある人形と同じような顔つきをしていて青色の服装をした落ち着いている人だった。

「アリス、今日は別の場所に行くついでに来た。長居をする事はないだろう。」

青年は冷たく言う。態とらしくしているがそれが不器用な為にアリスにはバレていると思われる。

「そう。此処に来た理由はよく分からないけど何か伝えたいことでもあるのかしら。」

「伝えたい事か。あるが信じてもらえるのかはまた別の話だ。」

「別の話、ね。私には全く関係ないと言いたいの。」

アリスは少しだけ怒っているような気もしているが青年がそれを機にするようなそぶりは見せなかった。逆に目がどこを向いているか笠を被っていたのでアリスには皆目見当もつかなかった。

「俺は幻想郷を侵略しに来た。それでももう分かるだろう。」

「それを言いに来ただけなの。できると思っているのかしら。」

「出来る、出来ないの話ではない。起こり得る事実だ。」

「ふーん。事実ね。何を怖がっているのかは知らないけどさせないわよ。」

アリスは両手に付けていた糸から人形を一体だけ取り出して。指一本から伝わる魔力によって操ることの出来る人形は小さな兵として青年に向かっていた。

「その程度で俺を止められると思っていたか。」

青年は軽く払いのけてからそのように言った。一撃で戦闘不能まで追い込んでいた。呆気なく払われた人形は家の床の上に寝転がって動くようなことはなかった。

「いえ。まさかそんな簡単に人形は叩かれるとは思わなかったけど。」

青年のその成長にはアリスは驚いているらしい。異変を解決した者としてその実力は有していると言うことなのだろうか。

「表に出よう。此処では他のものを傷つける。」

青年は優しさからなのか踵を返して扉の方へと向かっていた。余裕があるのか敵に背中を見せているがアリスは何か危害を加えるようなことはしなかった。もう何となく分かっているのだと思われる。

「そうね。貴方の方が早めに出なさい。近いのだから。」

アリスは青年に対してそう言う。子供のわがままとして捉えているのかアリスは柔らかい顔をしているだけだった。青年はそれに比べて気難しい表情をしていて何か違うものを感じざるを得なかった。「そうか。」

そうやって答えるその声にも何かハリがない。

外はもう明るく朝も終わりを迎えていた頃合いだった。それぐらいの時間帯だったのだろう。青年は笠を被っていたので日差しの感

覚は関係なさそうだった。対してアリスはどこか日差しを眩しそうにしていた。久しく外には出ていなかったらしい。それに人形の制作をしているのか体は大きくは動かす機会はなかったのだろう。

「久しぶりの運動ね。」

「そうか。」

どこを向いているかはさておき笠を斜めにして青年はその隙間から澄ました顔をしていた。先ほどとはまた別の問題なのだろうか。

「貴方が何をしたいのかは知らないけど此処で止めるわ。」

「本気でやるのか遊びなのかははっきりとしていた方がよい。」

「それはボケているのかしら。面白くないわよ。」

アリスは家から連れていた人形を使って戦闘を行おうとしている。操作魔法を得意とするアリスは自身の魔力を紡いだ糸で作り上げた人形を使って青年へと向かわせていた。

青年は腰に携えている剣も何処かに隠している小刀も針も出すようなことはしなかった。その代わりに拳を握りしめてアリスに対して構えていた。何の真似かは知らないが槍や剣を持つ人形に素手で挑もうとはとんだ間抜けでもあった、先ほどの人形をはたき落としていなければ。

「素早く始めようか。」

「そうね。」

アリスは自分の指を使って人形を弾くように青年へと向けていた。左手から繰り出された人形は青年の前で止められていた。

軽く右手で叩かれただけの人形はその場で墜落していた。

青年は構うことなく間合いを詰めていた。その速さは今までのものではなくアリスは見たこともないような速度で人形を操る暇さえ与えようとはしなかった。

そして、青年は右腕でアリスの顔面を狙っていた。そのような場所は好まない青年だが怯ませるくらいなら別にいいと思えた。指を伸ばしてどこかに当てると素早く引いていた。パシッ、と言う音が聴こえてアリスはその場に倒れていた。

「済まなかった。あまり傷つけたくはなかったのだが。」

「今更何を言うのかと思えば。もう遅いのよ。動き出した事は途中で投げない事ね。行きなさい。」

アリスは膝を折り曲げて地面に尻餅をつきながら上目遣いで青年の方を向いていた。何か誘っているかのような感じだが別にそのような事はない。

「そうか。では、行かせてもらおう。」

青年はそう言うのアリスのいる場所からは離れるようにしていた。

「不器用な男ね。嫌いじゃないわ。」

アリスはあまり気にしている様子はなかった。

狂夢異変

第10話

夢か現か。

吸い込まれていくその意思がたどり着く先はどこになるのか。それさえ分からなくなっていた笠を被っている白い服装をしている青年はその遠くにある自分の姿を投影しながら仕方がなくその場に居てみることにした。

周りは黒く暗い世界が広がっている。何処に明かりがあるのかは見えないが別に足元が見えないと言うことではない不思議な世界が広がっていた。上に登っていく段差の低い平らな綺麗に磨かれた石で出来た階段を登っていく。

その途中で引き返すことも出来たが此処まで来たことを考えると最初から何を行動を起こさなければ良かったのかもしれない。それでも前に進み続けようとする愚かな青年は本当にそうなのだろうか、と言いたくなる。

階段を登りきったその先には何もなかった。それこそ木々の間に大きく開いた砂利道の上に石畳を敷かれている一本道がある。青年一人で到底届かないほどの道の広さであるが基本的に此処に出入りする者は居ない。

基本的に居ないだけで本当に居ないと言うわけではないが人間や生きとし生けるものが来るような場所ではないのは言わなくても分かる。何の罪のないものや来世を待ち望んでいる霊がいる場所である。

そのような気味の悪い場所にいる管理者が居るのだが基本的に何かするような人ではなかった。勿論、するべき仕事も含めて何もしない。一日を無駄に過ごしているだけのようだがそうなる理由もある。もう死んでいる。それがその理由だった。

管理者の住む白玉楼に庭師も居るがその人も半分は幽霊であり死んでいるということでもある。後天性か先天性かは置いておいて半

分だけ人間でもう半分は他の種族というのは居ないこともない。

「久しぶりだ。」

笠を被っている白い服装をしている青年は腰に携えた剣の柄を手の中ですりながらその管理者の前へと現れた。今日はどうやら庭師は仕事をしているようで此処には居ないが時間を過ごせばそのうち現れるのだろう。

青年は手を振って座るように促す管理者の誘いを断っていた。珍しいこともあるのだと思いつながらその人の右横に置かれていた湯呑みを持って少しづつ啜っていく音だけがこの場所では響いていた。

他に人がいるわけでもないし、音の出るようなものが置かれているわけでもない。強いて言うなら庭師の握る枝切りバサミがその役割を全うしている時に起こるパチン、と言ったそんな音ならあると思うが姿は見えない故に何も無い。

「久しぶりね。私は何も出来ないから自分で用意してね。」

ピンク色の髪をしておっとりとした雰囲気のある幽霊の女性は青色で白色の三角のついた紐をつけた如何にもな格好をしている。白色の裾のある青色の着物を着ている。

「そうか。仕方がない。」

青年はそう言うことから縁側に足を踏み入れて慣れた様子で中へと入っていく。此処は本館と言われる場所で主に客人をもてなしたりする場所として使われている。襖で分ければ数多くの部屋にもなるが元々は使えるのかもどうかも怪しいほどの大きさをしている。外の方で大量の死が起これば大きく集まる事もあるが滅多にそのような事はない。

こう大きくしている理由はよく分からないが此処よりも庭の方が広いので何とも言えなくなっているのが青年としての本心だ。

青年は本館を抜けて渡り廊下を渡っていた。その横には白い石が置かれている中庭がある。それ以外のものは置かれていない。此処からは別館となるのでまた用途が違う。台所や物置であるなど生活するのに必要なものが置けるようにされている。それ以外には何も無い。何処か休める場所もないわけではないが基本的には座れるよ

うな場所はなかつた。

台所とされている場所で青年は棚を漁っていた。茶葉を見つけた青年は適当に容器に入れてから水の中に入れる。やり方も滅茶苦茶だがそれで良い。

青年は細かい事は気にしていなかった。飲めたらそれで良いし食べられたらそれで良い。もし美味しいものが飲みたければ待つていれば良い。それだけだった。青年は茶が出来上がるまでの時間をどのように使おうか考えていた。

この近くには池がある。裏庭と位置づけされる場所が青年はお気に入りののだがそれに誰も共感してくる人は少ない。そもそもそこまでいく人も居なければ見ようとするとする人も居ない。住人に聞いてもその答えはどちらも変わらない。そのくらいで終わってしまうので何も言うような事はなかつた。

鏡のような池に指を入れていた青年。中では魚が泳いでいる。誰が世話しているのかは言うまでもなく庭師だろうが場所が場所なので死んでいるのではないかと思えてしまう。青年を見ていて魚は何処かへ逃げてしまった。赤と白の鱗がまだらに入っているもので一尺ぐらいの大きさはしていると思う。どちらにしても遠くから瞬間的に見ていただけなので何とも言えない。

ふと思いの中に入り込んでいた時に湯の沸くような音がした。コトコトと陶器の当たる音がしている。もう少し前の時に止めておくべきだがそのようなことは何も気にしていなかった。兎に角急須の中に豪快に入れてから近くに置かれていた湯呑みに手をかけると取り出して中に茶を入れていた。そして急須と湯呑みを持って本館へと戻っていく。

特に気をつけて歩くこともなくスタスタと渡り廊下を歩いていく。遠くには何やら木の梯子に登って庭園の手入れをしている人を見かけたが声をかけられるわけでもなかつたので青年はそのまま歩いていくことにした。

「待たせた。」

青年は一言伝えてから縁側に座り込む。そして自分の左側に置く

と入れていた湯気の立っていた湯呑みに口をつける。

青年は口からすぐに湯呑みを離していた。まだ熱かったと言うことだ。そんな姿を見て滑稽に思えたのか管理者は特に何か話すような事はなくクスクスと笑っていた。何か言うこともないらしい。あまり話すような事はない二人だがこの時間だけは共有している。相手がどのように思っているかが青年が気に入ればそこに居る。嫌っている場合はまた別の問題になる。

「いえ。そんな時間は経っていないわよ。」

管理者は寂しそうな表情をしていた。それを横から見ている青年は仕方がなく二人の距離を縮めることにした。幸いな事に二人の間に何も置かれていなかった。青年は衣服を廊下に擦り付けながらゆっくりと近づいていく。

管理者は近くに来るのを待っていた。体のラインを描いている着物が擦れる。青年はその音に反応してピタリと止めていた。

「そうか。考えに耽っていたがそこまで時間は経っていないかったか。」
青年は湯呑みを持って茶を混ぜるように手を捻っていた。何か意味があるようなものではないがそれで少しでも冷めるのならそうするのだろう。青年は左手に湯呑みを持って右腕で頬杖をつくようにしていた。胡座をかい座っている姿は楽しんでいると言えるものではなかったがそうなる理由は確かにある。

「そう。今日はゆっくりしていけるのよね。布団は用意してもらおうわよ。」

管理者はそのように言っていた。青年はその反応はとても薄いものだった。

「抱いてほしいのか。」

青年はそう聞くだけで何か他に言うような事はしなかった。何がしたかったかのかはさておきやつとの事で口元に湯呑みをつけていた青年は自分で作っていた茶を飲んでいた。だからと言って特に感想というものもない。飲めたら良いのだ、変な話そこら辺の葉で淹れても気付かないのだろう。

「いえ。そんな事はないわよ。そういう貴方はどうなのよ。」

「興味ない。貴方なら尚更。」

青年は簡素に答えていた。

「そんなに魅力がないの。」

「そんな事で髪を乱したくはない。」

「何か残念ね。」

白玉楼の管理者がそのように言っている間青年は湯呑みの中に入っている薄い緑色の茶を覗き込んでいた。特に波立っているわけでもないで自分の顔が見えてる。どうしても元々が小さいためあまりいい顔には見えなかった。

「して、幽々子。俺の顔はどのように見える。」

青年は急に幽々子と呼んだ女性の方を向いていた。右隣を見ていた青年は少し眉間に皺が寄っていて眠っていないのか目の下にはクマがある。そこまで眠れていなかったのかそれとも何か別のことがあるのか。兎に角よく見ないと分かりにくい微妙な変化に気づいた幽々子は何か答えるような事はなかった。

「それはあまり良くは見えないという意味か。」

青年の声は珍しく荒げている。何かあったのかと聞きたくなるが何かはあったのだろうか。幽々子はその場でクスクスと笑っている。何か言いたい事はあるのだろうかそれを言わないのは幽々子の悪いところというのか。そんなところだろう。

「信じてもらえないだろうが俺はどうやら重要な任務を任されている。何か不具合か何かで忘れていたがそれは幻想郷を支配しようとしている。」

「そんな事任されていたのね。立派な人物だったのね。」

幽々子は他人事のように言っていた。突拍子も無い言葉だがそのような性格故に青年も偶に惑わされたりする事もある。幽々子のその発言がどのような意味合いなのかさっぱり分かっていなかった青年は兎に角何か言葉を出そうとしていた。

「幽々子は特にそのようなことには興味はないのか。」

「ええ。幻想郷を管理している八雲や博麗とも関係ないわけだし冥界にある此処も幻想郷とは関係ない。それに行くことも少ないから。」

「友人なのだろう。ここで止めたりはしないのか。」

「止めるなんてもつたいないわよ。」

幽々子は青年の考えとはまた違う見解を持つているようで青年には理解できなかった。青年はここで止められるのだと思っていた。庭師よりも何かと腕のある幽々子なら青年を止めに来ても何も可笑しくはなかった。それでもそれをしないのはまだなんとかなると思われているのだろうか、青年はそんな考えに陥った。

「話している意味が全く分からない。何を期待している。」

「何かよ。貴方も何か考えはあるんでしょ。止める理由はないわ。」

プンプンとしている幽々子だが何がそうさせるのかは青年は理解できなかった。何が起こっているのかも分かっていない。

「それに。今やっている事が間違っていると思っけていても意志は貫きなさい。貴方はどちらにも傾かないのだから。」

「善悪の判断にははまらないという事か。」

「ええ。やりたい事しかやらないでしょう。そんな弱々しい姿は見えないわよ。」

幽々子はそんな事を言う。冷たく接している幽々子だが何か理由があるようにも感じていた。青年は兎に角その理由を聞いてから何か行動を起こすことにした。別にそうする理由もない。

「何かそう考える理由はあるのか。」

「見ていれば分かるわ。」

幽々子は簡素に答えた。何かそこで話すような事もない。青年はそれから答えることもなく首を縦に振っていた。納得はいかないがなそうしておく必要があるのだろうか。青年にはまだ見えないが幽々子には見えている未来があるのだろうか。

兎に角青年は頭を幽々子の膝元に預けておくことにした。幽々子は嬉しそうに青年を受け止めて二人はその時間を過ごすことにしていた。」

音がする。そしてその音は声へと変わり、言葉へと聞こえてくれるようになっていた。

「山本さん。山本さん。」

青年の耳に聞こえていた女性の声に導かれてゆつくりと頭を上げていた青年。目を擦りながら腕を伸ばしていた。そして何もなかったように起き上がる。

「何をしていたんですか。心配しましたよ。」

また違う人であるのは言わなくても分かっていた。それ故に何かあるのかもしれないと思えたがまた違うような気もしていた。

青年の前に居たのは白い色の髪をした短めな髪で黒いリボンを結んだ血色の悪い少女だった。半分は幽霊なので生きているような死んでいるような曖昧な存在だがこのような場所なのでそのような事があっても何も不思議ではないだろう。

緑色のシャツを着ていて腰と背中にはそれぞれ一本ずつ携えている。スカートも緑色で白い靴下と黒い靴を履いている。庭師としての格好ではなくて剣術指南役として現れたのは魂魄 妖夢。管理者である西行寺 幽々子の世話全般をしている人だ。

「色々としていた。許せ。」

青年はまだ目が完全に覚めていないのか適当な事を言っていた。そして答えにもなっていないかった。妖夢はそんな事を気にする事なく縁側へと座っていた。

「でも無事に居てくれて良かったですね。幽々子様。」

「そうね、妖夢もうるさいからね。」

「何を言っているのかさっぱり分かりませんよ。」

「何を言っているのかしら。」

「そうだ。妖夢。」

「何ですか、山本さん。」

「妖夢。そう言う事は言わないことよ。」

「幽々子様も何ですか。」

「妖夢、一ついい事を教えてあげよう。」

「何ですか。」

「主人に逆らうのは妖夢ではない。俺だ。」

「そうよ、妖夢。山本さんだけなのよ。」

「理不尽だ！」

妖夢が爆発したところで青年と幽々子は笑いあっていた。いつもの白玉楼の光景であり何か言う事もない。

「して久しぶりにやろうか。」

青年は立ち上がるとその場で剣を抜いていた。切っ先は地面を向いていて構えているかどうかは判断し難かった。だが青年に答えるように腰と背中から剣を抜いていた妖夢は左右で長さの違う剣を扱っていた。一つは白楼剣。その剣は迷いを断ち切る剣。二つ目は楼観剣。幽霊十匹分の殺傷力を持つているものだった。

青年は鏢に魔法陣を仕込んだ剣で黒い刀身は魔法を扱うための魔力を伝えやすいものになっている。抵抗力もないのでそのままの威力で出るだろう。それを妖夢の様子を見て二本目を抜いていた青年は踵を返して妖夢の方を向いていた。青年は依然として下に切っ先を向けたままで何かするようなそぶりは見せる事はなくただ一心に妖夢を見ていた。

油断のない視線を浴びせ続ける青年はそれだけでも勝てそうなものであった。

「まさかそんな流れになるなんて読めないものね。」

なぜか嬉しそうにしている幽々子。青年は横目にそれを確認していた。何か思い出したのかは口元を緩ませていた青年はゆつくりと剣を構えていた。

「妖夢、もし負けたら幽々子をもらって行こう。」

「な、そんな事はさせませんよ。」

「頑張つて、山本さん。」

黄色い声援を受ける青年とは裏腹に何か違うような事を感じているような妖夢はまた手の中で踊らせることになっていた。

「幽々子様。もう勘弁してください。」

困り果てた表情をしている妖夢をクスクスと笑っている幽々子と何も表情を変えることのなかった青年。剣を構えていた青年はその動揺も覚めないうちに妖夢へ斬りつけていた。

妖夢は白楼剣で弾いて一難を退けていた。それで終わることみな

い青年は前へと蹴り出していった。妖夢の腹の辺りを蹴りだしていた青年の一蹴りに大きく仰け反った妖夢はどうしようもなくなっていた。青年は前から来ていてふらついた足はどうしようもなくなっていた。その先で待っているのはきつと絶望なのだろうか。

「早く立て。興が冷めてしまう。」

青年はそんな事を言いながら左手に持っていた剣をくるりと手の中で回して鞘の中に納めていた。何か意味があるのかと聞きたくなるが別に意味などないのだろう。青年の事だ、このままやっけても何かつまらないと思い始めたのだろうか。そんな気がする。

「分かっていますよ。」

妖夢は目に力を入れながら全身を起き上がらせていた。相当青年の蹴りが嫌なところに入っているらしく妖夢は何とか立ち上がっているだけだった。

青年は妖夢が立つまで待っている事にした。何か理由もないがここでどめを刺すのもまた違うものなのだろう。それだけは言えているので青年は動く事はしなかったのかもしれない。

「私も剣術指南役です。このような負け方はしません。」

妖夢は立ち上がってから両腕に持っていた剣を青年の方に向けていた。青年は目の前の事に興味をなくしたのか手先を見ていた。男にしては細めな気がするその指を見ながら青年は爪の辺りを触っていた。

「それなら来てくれ。勝負がつけられないかもしれない。」

青年はようやく構えていた。もう何でもありなので不意打ちも何でもすればいいと思うが妖夢は動く事はなかった。

妖夢がようやくやく動き出す。

両腕から放たれた湾曲した一撃はその交点のところで受け止められていた。青年の剣に阻まれた双剣は押す事も引く事も叶わなかった。何が起こったのかそれさえも理解出来ていないようである。

青年は軽く一押ししてから妖夢の剣を逃していた。もちろん青年の力だけで妖夢の双剣を止めたと言うわけではない。

「降参します。」

「どうした。」

青年はあまりに素早い降伏にどのように反応して良いのかは分かっ
ていなかった。妖夢はそれだけを言っ
て剣を納めていた。

「もう終わってしまいました。それだけで理由は十分です。」

「その言い方もありか。」

青年は右腕に持っていた剣を鞘に納めるとすたすたと歩き始めていた。そしてたどり着いた先は幽々子のいる縁側へと行き自分で淹れていた随分と冷めた茶をすす
る。

妖夢との戦闘中は飲む事はなかった
のでさまているはず。青年もそのように考えていた。妖夢も運動の後の水分を取るつもりで茶を取りに行こうと奥へと向かっていた。

「今日は申し訳なかった。」

青年は一口啜る前に妖夢一言詫
びを申し立てていた。あのよう
な簡単に終わるとは思っ
ていなかった青年はまだまだやり
たいと思っ
てあ
のような行為をしていた。

そこに悪意というものは存在
しないと感じている妖夢は一言別
良いと答えるだけで他に答える事
はなかった。

今回の件はこれで一段落がついた
ので湯呑みを左手に取っていた。
まだその方は暖かくなっていた。

口につけた瞬間に茶が熱くなっ
ていた青年は一気に吹き出してい
た。理由はよく分かる。

まさか熱くなっていたとは思っ
ていなかった事と青年が元々猫舌
であるという事だ。それは知っ
ていたがこのようになると思っ
て
いなかった幽々子はその反応に困
っていた。

まさかの事態だったのだろう。青
年も幽々子も騒ぎを聞いた妖夢
も混沌とした状況になっていた。

「熱かった。」

一
段落付いたのか青年は落ち着いた
声でそう話していた。

「驚いたわ。まさかあんなに反応
するなんて。」

「言っ
ていなかった俺が悪いから気にす
るな。」

「そこまで苦手だと思いませんでした。」

「いや、気にするな。」

妖夢に恥をかかせた青年も同じく恥を描く結果となっていた。

いつもの仕返しといったところだろうか。

第11話

永遠亭へと帰ってきた青年はそこで何かを話していた。女医との対話の結果少し作戦というものを変えてみる事にした青年は一路幻想郷の北西の方角へと向かっていた。

笠を被っていて永遠亭の薬売りに人里で買ってもらった黒色の衣服を身に纏っている。靴下の上に草履を履いていている。

その青年は人里の西側を歩いて北西へと向かっていた。誰も寄り付かないような場所で何かがあるのかさえ知っている人は少ないと思われる。それ程に危険な場所であるとされているが向日葵が好きな人が居たり居なかったりするだけで何か特別な問題があると言うことでもない。

あまり踏み入るのは嫌われると言う事だろうか。そんな感じで向日葵の咲いている丘に行くと怖い妖怪に会うと言う噂であるらしい。だが、青年はそれを信じて恐れることもない。そもそも一回だけ会っているのもあるがそれを聞いて興味しか湧かない。面倒な事にその程度にしか考えていないのだろう。

太陽に明るく咲いている花々が多く咲いていた。中に入れば他の種はなく向日葵だけが咲いているその丘にはきつと誰も居ないのだろう。居るとするなら皆が恐れている妖怪だけだろうか。

兎に角青年は近くの向日葵の茎の部分を小刀で切り取ってから左手に持ってふらふらとする事にした。

方向感覚も分からなくなるような感じはあるがもしかするとそれを狙っているのかもしれない。視界の開けない変に整備された道を歩いていくと不安に駆られることもある。途中で襲われたりすることもあるかもしれない。だから此処に人が寄り付かない忌避の地とされている。

理由は後でわかる。

丘の上から降りていくような坂道があったので青年は転ばないようにゆっくりと歩いていた。左手に茎から切り取っていた向日葵を持ちながらある小屋の近くまでやってくる。青年は空いている右手

で扉を四回叩いていた。そこまで強いものではないがコンコンコン、とそのリズムはとても良かった。青年はしばらく待つ事にした。

扉が開く。そこまで待つていたわけでもないが青年は持つていた向日葵を片手に挨拶をする事にした。別に何か当てつけがあると言わなくてもいい。

「その左手に持つているものは何かしら？」

その人は青年に聞いていた。

緑色の髪をしていてショートボブくらいだ。そして白いシャツに赤いベストを着ていて黄色のチエックの入ったスカートを履いている。麦わら帽子を被つてるのでこれから作業をしようとしていたのかもしれない。青年はそのように感じた。

「綺麗なものだったのでお近づきの印に渡そうかと思った。」

青年は平然と答える。この向日葵はこの人が育てたものである。それを勝手に抜き取つていたのでそれは怒り心頭なのだろう。

「ありがたく受け取るわ。でもね、植物を無下にするのは許せないわ。」

その人は右手に持つていたピンク色の傘を使って青年を突いていた。青年は軽く避けているだけでそこからこちらへは来ないようにしていた。

「幽香、どうするつもりだ。」

「これはお仕置きが必要ね。」

青年に幽香と呼ばれた女性は普通に接している分には何も問題のない優しいだけなのだが一回怒らせるとどうしてもこうなる。それにしては怒りが青年のような事をしてるとその怒りは爆発する。

青年はそのことを分かつていてやっていった。永琳との作戦はそう言うことだ。

「そうか。何をするのかは知らないがその傘は使わない方が良い。」

「前にも見た事があつたかしら。」

幽香は不気味な笑みをこぼしながら渾身の力で青年を睨みつけていた。怒りの頂点の時はそのような行動に出るらしいが本当にそう

なのかはまた別の問題となるのだろう。青年は素早く小屋から離れていた。

「覚えていないか。前に金色の髪をした魔法使いと来ている事。」

「あの人ね。それなら知っていても仕方がないわ。」

「早くやろう。お互い時間の無駄だ。」

「そう言う意味合いは分からないけどやるからには全力でいかせてもらおうよ。」

第12話

幽香は初手から全力で来ていた。傘の先を青年に向けていた。そして其処から白いレーザーを出したがその大きさと言うのは傘の大きさと比にならなかつた。青年をも飲み込むような大きさに青年は素早く回避しようと思った。だが、その速さと威力からは逃れられなかつた。

転がり込むように焼き焦げた大地から離れるとやつとの事で剣を抜いていた。

「やつと抜いたのね。」

幽香は軽くそう言っていた。何の意味があるのかは分からないがどちらにしても楽しんでいるように思えた。

「来ない事には抜かない主義だ。」

青年も軽口程度にそう言うだけだった。

「その内痛い目見るわよ。」

「心配してくれるのか。」

「いえ、その逆よ。」

白い歯を見せながら傘を持って近づいて来る。その表情は狂気を満ちていて眼はかなりの圧を発していた。

それでもやはり何かあるように思えたのか青年はそれを受けて立つ事にした。

傘と剣がぶつかる。

金属音とも言えないが重たい音が辺りには響いていた。傘とは思えないほどの硬度を持つそれは青年の剣にも対抗していた。しかしその単純な力の差はあるようで仕方がないので青年は逃げておく事にした。青年は飛び退く。其処を狩ろうとしたのは向こうの方だった。

傘の先が青年の方へと向いて来る。相手の方が機動力があるらしく素早く嫌なところを突かれた青年は手のひらで何とか退ける事にした。反時計回りに体を回転させた青年はその場に立つ事にした。お互いの間合いの中にありどちらかが先に攻撃して防げなければ

ばそれで終わる。

青年は素早くそうする事にしたが全くと言って通用する気はしなかった。幽香の持っていた傘によってその軌道を邪魔された剣は押し返されていた。

その反動というのは凄まじく足裏は地面につけていなかった。

「そんな程度で私に挑もうなんてとんだ馬鹿なのね。」

「言っていれば良い。俺は勝つ必要がある。貴方よりも腕のある人はこれから多く現れるだろうからな。」

「そんなまやかし効くと思ってるの？ 限度があるでしょう。」

「効かないだろう。実例がない。」

青年は幽香に近づくと走り出していた。まさかの瞬間から放たれた一閃は素早く、そして正確だった。目にも止まらない早業。そんな気がする。

ピンク色の傘は軽々しく弾かれてしまっていた。その事に苦虫を噛んでしまった幽香。青年はそれでも攻撃の手は止めることはなかった。

素早い左側からの振り上げるような一撃。

幽香にとって計算外の事なのか辛そうな表情をしているのだけは見ていれば分かる。

それだけでは終わる事わけもなく更なる一撃を加えようとしていた。

それこそ無慈悲な悪魔のようなそんな気配さえ感じられた。

青年は飛び上がり素早く振り下ろした。幽香は傘で自分の身には当たらないようにしていた。だが、青年は其処で止まることもなく潜り込ませるように剣を動かして下から突き上げていた。あまりにも強い動きのようだったが別にそう言うこともない。

幽香も流石にそこまで弱々しいわけでもなかった。理由は簡単だ、刺さらなかった。致命傷どころか傷一つ負わせる事ができなかった。服に穴が空いている程度で済まされた青年の一撃はそれだけでもそれなりの衝撃を与えた事だろう。それ程に計算外の事が起こっていた。青年はすぐさま離れる事にした。

「そんな攻撃では私に何も与えることは出来ないわよ。」

「いやそうでもないかもしれない。なら、凌ぎ切ってから話をしようか。」

「ええ。そう言う事にしましょうか。」

「そうか。」

青年の剣は暴れ出していた。それに合わせて幽香の傘も同じように暴れていた。剣は下から潜り込ませるように走り、傘は上から押さえつけるように待ち構えていた。お互いの操作をしている人もその奥から睨み合っているようだった。拮抗した力関係であるのはいまでもないが持久戦となればまた違うものになる。

今回は剣の方が押し通して傘を押し返す事になった。そして青年は更なる一撃を与えようと走り出していた。だが、傘も負けるような事はなかった。

小さな白い弾をばら撒き始めた。青年を足を止めてからその弾を対応する事にした。だが、それがまだ序章でしかなかった。

幽香の傘はその後ろで青年に当たるように構えられていた。傘を開くとピンク色の花びらは使用者の体を隠していた。傘の先からは大きな白い玉が出来上がっていた。それが膨れ上がると一つの破壊光線のように破裂して辺り一帯を焼き尽くそうとしていた。

それに気づいた青年は素早く飛び上がると小刀と針を用意していた。白い破壊光線の上を颯爽と飛んでいた青年は狙いをつけるように傘を持っている人の上へと向かっていた。そして針を手から離すと小刀の刀身で叩き下へと落としていた。

隕石のような衝撃を腕に覚えた幽香は右腕の力が著しく衰えしまっている事に気づいた。光線を撃っていた傘はその反動から大きく右に逸れてその辺り一帯を焼き切っていた。

青年はそれから右腕に剣を持って右手を鐙の近くで握るとその下を左手が握っていた。そのまま落ちていく青年に気づけなかった幽香はその一撃を止める手段もなく受けていた。

辺りには土煙が舞う。そして幽香は地面に伏せていて峰で立ち上がるのを抑え込んでいる青年の剣があった。

「強いじゃない。刃が向いていたら確実に死んでいたわよ。」

「そうか。して本当に申し訳ない事をした。」

「何に謝っているのよ。」

「向日葵を無残にも切ってしまったことだ。」

「それは許せれないけど良いわ。この状況なら私は何も言えないわよ。」

幽香はそんな風に優しい顔をして言ってくれた。青年は仕方がないので幽香の手を握ると立ち上がらせる事にした。幽香はその手を握り甘えるとその場に立ち上がって自分の服の汚れを軽く手で落としていた。

「そうか。して頼みたい事がある。」

青年は急に真面目な話をし始めようとしていた。

「ここで頼める状況なのか聞きたいけど良いわ。何かしら。」

「俺は幻想郷で大きな事を起こす。その時きつと多くの人が活気盛んになるだろう。その時に歯止めをしてくれないだろうか。」

「それはいいそうですか、と言える人は何人いるのかしらね。」

幽香はそう聞くだけだった。

「予定ではもう四人居るつもりだ。それだけ居ればもしかしたら止められる。」

「何を夢を見ているのかしら。それに私は他の人のことには興味がないのよ。それは知っているでしょう。」

「そうか。そううまくいくはずもないから別に気にしているわけではない。」

青年は意外とあっさりとしていた。その理由はさておき何かあるのかと思えたが別にそのようなことはないと思われる。

「まあ、私は参加しないでしようけど頑張りなさい。」

「そうか。それなら仕方がないだろう。」

青年は自分が渡した向日葵のことを聞いていた。このまま捨てられるらしいので青年はそれを貰っていく事にした。目的も用途もわからないが使ってくれるならと言うことで幽香は快く渡してあげる事にした。青年は左手に持って踵を返すと手を振るだけで向日葵の

咲いている丘を後にする事にした。

「今日は早めに帰る事にした。」

「おかえり。その花は何かしら。」

「ちよつと相手を怒らせるために使用したものだ。」

これを永琳に渡したいと考えていた青年は何となく渡す事にした。別に其処に何かがあるわけでもない。急にふとそう思っただけである。

「貴方から何か貰えるなんてこんな話は聞いたことはないわね。」

「それは失礼ではないか。」

「そうね。」

少しだけ微笑ましくなっている永琳はそれから左手にペンを持ちながら何かを書いていた。その部屋ではその音しか聞こえてこない。結界を張っていて別次元としているこの部屋では誰も入って来るとはならない。青年は患者が横になる為のベットに座ると少しだけ休む事になっていた。

「これが上手くいくとは思えないがどう思う。」

「さあ。わからないわ。貴方の頑張りと今までの行いでそれは変わるんじゃないかしら。色んなところに喧嘩を売るのは良いけど買ってくれた後はどうするか考えているのかしら。」

「何も。不確定な事だからな。永琳も感じているだろう。」

「そうだったわね。」

永琳はそれだけを言っていた。青年もそれからは何も言うようなことはなかった。

第13話

人里の近く。この辺りは妖怪の森とも呼ばれていてとても鬱蒼としていて博麗神社の近くほどではないが多くの妖怪が住み着いていて危険である場所であるとされている。

その森に入っていた先にある寺もあるが其処までの道は明るくされているのできつと妖怪に襲われるという心配はしなくて良いようになっている。その道を大きく逸れた先の少し開けた場所に赤い提灯が吊るされている屋台があつた。

黒い衣服を身に纏い笠を被っている青年は特に取り外すこともなく屋台に置かれていた長椅子に座っていた。人は勿論だが妖怪というのも居なかつた。今日はこの屋台が営業するには早めな時間から青年は来ていた。前から訪れているこの屋台は小さな酒場のようなところで青年は少し落ち着きたい時や気分を転換する際に訪れることもある。

「いつものをくれ。」

青年は座席に座ってから開口一番にそう言った。前からそのような屋台の切り盛りをしている女将は一切気にするようなことはなかつた。

その人は頭の辺りに小さな羽のようなものが付いていて明るい赤色をした髪をしていて後ろの方で結っているがその姿が見えるようなことはない。そして少しだけ明るい茶色の着物を着ていて袖は紐で結んで垂れ落ちないようにしていた。

「分かりました。」

屋台の下から串のようなものを置いて火を点け始める。此処では鳥の妖怪が女将としてるので焼き鳥を売るようなことはしていない。その代わりヤツメウナギを焼いて売っている。独特の味はするがそれだからこそ酒がよく進むと言うことである。この屋台には辛いものからスッキリとしたものも置かれているがちちょうど真ん中あたりの酒は置いていない。故に青年は辛めの酒を選んでヤツメウナギを食べてから風味を感じてから酒で一気に流し込むのを繰り返す

ている。

「今日は金が少ない。一ずつ食して帰る事にする。」

「はい、分かりました。」

女将はもう一本追加を焼こうとしていたがそれを辞めていた。笠を被つていて何処を向いているのかは分からないがきつとそのところは見ていたのだと思われる。

「そう言えば知っていますか。」

女将は急に話を振り始める。青年は笠だけを動かしていた。

「何か流行のものでもあるのか。」

青年は急に話をされた事に驚いたのか顔を少しだけ上げていた。お互いに視線は通らないがその動きはよく見ることが出来るのでそれで察したというところだろうか。

「尋ね人の話は聞いていますか。」

女将はなぜかそんな話をしている。青年には何を話そうとしているのかは理解出来ないが何か伝えておきたいと思ったことなのかと耳を傾けてみる事にした。

「聞き覚えはない。どう言う人なんだ。」

相槌を打つ程度に話を聞いてみる事にした。興味があるわけでもないが何となく聞いておいた方が良いかもしれない。

「黒髪の男のようです。腰には剣を二本携えている。」

女将はポソポソと話していた。基本的に幼い感じのする顔つきをしているが今回ばかりは特ついた女性のような表情をしていた。青年と特徴が一致しているので何か聞きたいと言ったところだろうか。

「そうか。」

青年は其処まで重く受け止めるつもりはないらしい。それこそ軽く受け止めているので変に心配になるような気がすると思うほどだった。両手を合わせて炭が温まるのを待っている青年は少し意識があるような感じはしなかった。

「そして紅魔館や魔法の森、冥界や北西の方で被害があるようです。相当な手練れのようにですね。」

「そうらしい。」

青年は他人事のように話していた。幻想郷にある新聞は文々。新聞だけではないのでどこでどのように切り取られるのかはまったくわからないが人相まで分かっていると大体追いつめられるとは思いますがそれが中々うまく行っていないらしい。

「ここまで特徴が分かっているって誰も捕まえられないなんてその人は幽霊かなにかなのでしょうか。」

女将は冷たく感じる氷のような声で青年に話しかけていた。青年も気にしているには気にしているがまるで興味を示していない。あの意味世俗に流されないなんて言う肯定的な言い方をすれば優れた人物になるのだろうか。いや、ならないのだろう。

「そう言う事になるだろう。霊媒師を連れて行けば何とかかなりそうだな。」

青年は気楽に答えていた。お尋ね者として張り出されているのであろう人物に興味のかけらを見せようとしてもしない青年は簡単に言っただけ朴念仁なのかもしれない。それともそれも青年が作り上げただけのものなのか。

「それでこの件が解決すると良いけどね。まだまだ心配な日々が続くから来てくれるお客には一言だけ言うようにしているんだ。と言う事で気を付けてね。」

網の上にヤツメウナギを置き始めた女将はそれから黙ったままであった。理由は単純なもので青年がいつも焼く時に出る音を聞いているのでその邪魔はしないで。邪魔しようものなら叩き斬られる、くらいの勢いはあるとあって女将は思っていた。それ程に青年はその音を聞いていた。と言うよりはヤツメウナギが網の上で踊っている姿を見ていた。その序でに音を楽しんでいるのだろうか。未だに分からない青年の行動だが理解している範囲で女将は最善の配慮している。

焼けるのを待っているその間に女将は青年に出す酒を汲んでいた。青年はそう多くは飲まない。なので、女将は水を入れるための容器にお気に入りの酒を汲んであげていた。

「では頂こう。」

青年は酒の入った容器を右手の中に入れて口元に運んで喉を通るその刺激に浸ることにしていた。青年はヤツメウナギを一口食べる前にそのようにしている。

特に何か決めていると言うことでもなさそうだがいつもそうしてるので女将を配慮してそのようにしている事にした。

「はい、どうぞ。」

白い皿の上に乗せられた少し焦げた感じのあるヤツメウナギを見て青年は無言で皿ごと近寄らせると串を持って口元に運んで置く事にしていった。

大きく一口食べてから酒で流し込む一見勿体無いような食べ方をしているがそれで良いのかもしれない。

小さく笑っていた青年の笑顔が女将を元気にさせる。二人の関係はそんな感じがちょうど良い。

第14話

夏は過ぎていて少しだけ肌寒くなってきた幻想郷の北側。その場所は妖怪以外の立ち入りを禁止していて昔から続いている序列のある縦社会を形成していた。

だがその頂上に守矢神社という土着神が祀られている社が建造された事によりそのようなことは言えなくなったので仕方がなく参拝へと向かう道を整備される事になった。お陰で以前のような妖怪の山の厳しい雰囲気は変わり誰も訪れやすいところへとなっていた。

嫌な輩が入る可能性もあるがそれは哨戒天狗が目を光らせる事によつて全くその心配日なくなつていくという事である。その目を潜れる者はおらず、確実に捕まる。妖怪の山の道を完全に熟知していなければ見ていれば分かるような者も居る。それかスタスタと歩いて道に迷つたところを助けられる場合もある。一概に不審者という扱いはできるわけではないが居ないこともない。

そんな中である男は川を流れる水のようにサラサラと山道を慣れた足取りで歩いていた。まるで住人のようだがそのような事は万に一つもない。

その人は黒髪でかき上げただけの髪型で後ろで一つに結んでいるだけだった。服装は頭に笠を被つていて顔の上半分は全く見えない。そして下に白色の着物と黒色の着物を着た服装をしていて山道を全く意識していない草履を履いていた。ただの旅人のようなそうでもないような。そして慣れた足取りから住人のようにも見えたが分かる人には分かるらしい。

「やあ、盟友。久しぶりだね。」

青色の外ハネしている髪をしていてポケットの沢山についた服装をしている。肩や腹の周り、そして足元にも付いている。リュックを背負っているがいつも満タンで何をいれているのかは全く知らない。それに青年が聞くようなことはないので余計に謎のままである。近くの工房で何かを作っている鍛冶職人で名前は河城にとりという河童の妖怪だ。序列的には一番下になるのかもしれない。

「最近の調子はどうか。」

青年は平然として答えていた。別に隠すような気もないのだろう。「とても好調だよ。でも、まだ解決していない事もあって今はとても大変なんだ。」

手で汗を拭ったのかその場所に黒い汚れを付けたにとりはそれだけの就労を行なったのだと思われる。青年はそこだけを見つめていて恥ずかしいのかにとりは顔を赤らめていた。

「そうか。嫌なことを任せてしまつて悪かった。それでもやりたいと思うことは辞めるのは良くないと思つたが人に迷惑かけるのも悪い。どうしたものか。」

「良いよ。気にしないで。私も楽しくやり始めたところだから。」

にとりは楽しそうな事を前面に押し出したような表情をしていた。青年も仕方がないので笑つてその場は過ぎす事にした。

「それでね。盟友。今困っている事があつてね。ポンプを作り上げたいんだけど何か案はあるかい。」

「急に言われても困つたものだ。今の状況も何も分からない。」

どうやらにとりが悩んでいたのは地底での温泉作りのことについてだった。青年は知らないことでもないので考えてはみるがどのような状況になつているのかはさっぱり分かつていない。そもそも行くような事がなかつたのに行けるような地上の状況ではなかつたとも言える。

「間欠泉みたいものを汲み上げる方式に変えることにしたんだ。そつちの方が安定するし安全だよ。それで探してみた結果見つかったには見つかったんだけど汲み上げる方法がなくてね。どうしたものか考えているんだよ。」

「それなら吸引みたいな方法か温度を上げて上げてせるのも悪くない。」

「そういうものかな。まあ、盟友の言う事を信じてみる事にするよ。」
「そうか。くれぐれも怪我はするな。俺はしばらく関わることは出来ない。」

「そうだよ。何かあつたら私にも聞かせてね。一人で抱え込まなく

ても良いからさ。体に毒だよ。」

「優しいな。だが、その甘えは断ち切る必要がある。今は鬼になって皆を退け続けなければならぬ。その気持ちだけ受け取ることにしよう。」

青年の返答は人の優しさを卑下にするようなものだった。それでもにとりは落ち込んだりするような事はない。そもそもそのように言うのならそうしてあげる方がいいと言う事を知っているから。もし曲がり切った道に進むなら止めるだけ、それだけだった。

「多くの厄が集まっていますので私にも話を聞かせてくださいね。」

後ろから声がしたが青年は一切の驚きを見せなかった。まるで見えていたかのような感じで何も反応というものは見せなかった。

その人は緑色の髪をしているゴスロリ長の赤と黒のまだらなドレスを着ていて頭や腕、髪留めには白いフリルのついた赤いリボンをつけている。スカートの部分には緑色でぐるぐるとした模様が入っている。落ち着きのある雰囲気があるが厄神様と言う神であるのには変わりなかった。名前は鍵山 雛だ。

「その必要はない。」

青年はきつぱりと断るとその場から立ち去ろうとしている。それを止めたのは雛の右手だった。黒色の上着の袖を掴んで離そうとしない雛に青年は足を止めてその人の欲求に答える事にした。別に座っていれば良い。無駄な時間は使うがその程度で済むのなら払ってやるつもりだ。

「座るか。」

青年は気が動転したかのように踵を返すと今流れている清流がある川の近くの河原に座る事にした。至って普通の石の中に黒い石が混じっている。黒い石は今青年が身につけている剣や小刀の原料となっている。

「ええ。」

雛も短く答えていた。落ち着きのある激しい愛の表現に仕方がなく付き合う事にした青年は川原へと足を踏み出して座る事にした。そして左腕に絡まるように雛は青年との距離をを縮めていた。青年

は気にする事なく座っていた。

「盟友、雛のことを意識してあげたらどうなの。」

にとりはそんなことを言っている。見ていれば露骨にもほどがあるが青年は全く問題視していなかった。逆に言えばそのような場面でも仕方がない程度にしか思っていない。

「男も女も区別したことのない俺にそれを言うのか。」

「そうだったね。ならもう仕方がないかな。」

「また来てくださいね。こうしているととても気分が良いんですよ。」

雛はべつたりと青年にくつつきながらとろけたチーズのような柔らかい表情をしていた。青年はその顔を見て子供のわがままに付き合う親の顔をしながら前を流れている雄大な自然を眺めている事にした。

「そうか。それならそうしている。」

青年は冷たく吐き捨てるように言った。だが、その言葉には優しさがあるらしく誰も文句は言わなかった。

ここに来るような事はもう二度と訪れてほしくはないと思う。ここにいる人は出来るだけ巻き込みたくはない。それにどのような事になるのかも青年には分かっていない。抽象的な表現を曖昧に説明するような苦行は続ける為にここで立ち止まっているわけにはいかなかった。青年は二人に止められても前へと進む。

確かな意志と信念を持って。

第15話

懐かしい風の香りがする。そしてその中に青年は溶け込むように歩いている事にした。何か目的があるようにもないようにも見えない。黒髪の笠をかぶっている青年は慣れた足取りで山道を歩いていく。

先ほどのにとりと雛が居た川からは随分と距離を歩いたような気がする。周りに川というものはなくて森林の中で一本の木になっていくような風景だった。ただ上を向くと空が普通に見えたりよくよく隙間を見ると川が見えたりする程度。

気持ちいい風が木の葉の間を通りそれを浴びた木の葉たちが歌を唄い出している。小さな声だったが誰も居ないのでよく耳にの中に入ってくる。青年はゆっくりとした足取りで山道を歩いていくが空に誰かいるのを感じてその場で立ち止まる事にした。

妖怪の山と言われている山では天狗が基本的に上の立場にいる。その種は多くいるとは思いますが天狗の中でも一番下っ端とされている白狼天狗。飛行能力は有していないが身体能力が一段と高く平坦な道であれば飛行出来る鳥天狗にも負けを劣らないと思われる。青年のな勝手な予想なので本当のことはよく分からないがそう思われる。白狼天狗は飛べない代わりに木を飛び越えて誰かいないかを探している。一人だけは動かずに目で探しているが基本的に掻い潜ることは難しい。

「お前さん、一人かい。」

青年がいる事に気づいたのか一人の天狗が降りてきた。青年は笠の中に顔を隠しながら近くに来るのを待っていた。

「一人だ。」

青年は適当に答える。一人である事には間違いないが勘違いをされているようなのでそう言うしておく。別にどのような話が転ぼうとも問題はないようにしていた。

「そうか。最近お尋ね者がいる事は知っているか？」

その天狗は優しい声で聞いていた。迷い人を参拝の道へと戻す時のような声をしている。青年は平然とした表情をして答える。

「その事は知っている。だが、人相というのは全く知らない。」
前に聞いた事はあるがここでは敢えて答えるような事はしなかつた。

「人相か。笠を被っていて黒髪で白色の着物を着ていて腰に二本の剣を持つている。丁度お前さんに特徴が当てはまるんだ。」

その天狗は非常に悩ましい表情をして青年に説明をしていた。青年の今の服装だと黒色の上着を脱げばそうなる。その為にもしかしたらそうなのではないか、と思い始めたのだろう。その程度で青年もぶれるような事はないが気にする事も分からなくもない。

「そうか。だが、例えば白色の髪をしていて赤い鼻のある一本底の下駄を履いている人がお尋ね者だとすると貴方はどうだ。」

「お前さんも言わん事も分からんでもない。まあ、今回のところは何かもしない。時間をとって悪かった。」

その天狗は青年の言い分にぐうの音も出なかったのだろう。致し方がなくここから立ち去ろうとしている。青年は特に何かを感じたりするような事はなかった。

「いや、その事は良い。お勤めご苦労だ。」

青年はもう行こうとしている天狗にそのように言葉をかけていた。天狗は嬉しそうな表情を浮かべていて感謝の意を伝えるとまたどこかへと行ってしまった。意外と功を奏しているらしい。

青年はまた別の事として天狗との一件は気にする事はなかった。再び足を進め出した青年は山の奥地を進む事にした。行きたい場所があるがこの調子でたどり着けるのかはまだ分からない。ここから誰かが現れる可能性もないわけでもない。

そんな訳で歩いて頂上を目指していた青年だが先ほどの天狗よりかは一回り大きめな天狗が三人ほど現れていた。そして青年の行く道を妨害するように立っていた。青年はどうしたものと素通りをしようとは食わぬ顔で通ろうとしたがその肩を掴まれて三人の前に立たされていた。別に抵抗する意味もなさそうなのでさっさと終わらせていくつもりなのだろう。

「お尋ね者か。」

三人の天狗のうちの代表格のような人が青年に話しかけていた。謝罪一つもないのかと青年は思ったがそれを表に出すような事はやめておこうと思った。面倒だ、それに限る。

「身なりは似ている。先ほどの天狗に聞いて初めて知った。」

青年は赤い鼻をしている白色の髪をしている天狗との話を思い出していた。別に特別何か話したわけでもないとは思うがなんとなく覚えていた範囲で話す事にした。

「ふむ。ならば、同行願おう。お前の言った通り怪しいからな。」

天狗は急に強気に言いだしていた。三人相手に抵抗するような事はないのだろうとたかをくくっているらしいがそれはどうだろうと青年は思っていた。別にここで退けていても良いのかもしれないが無駄な戦闘は避けたかった。

「怪しいだけで捕まえるなら哨戒としての仕事ぶりは良さそうだが。それはどうだろうな。」

青年は急に低く身を構えるとその場で立ち止まる事にした。まさかの事態となっていたがそれでも良いのだろう。天狗たちは叩き斬る気しかなさそうなので余裕そうな表情をしていた。

「抵抗するという事は何かあるのだろう。知っている事があるなら話してみたらどうだ。」

「いや、話す事はない。貴方達に困っている暇はない。通してもらいたい。」

「本当はしたくなかったが痛めつけてやるよ。一回痛い目見ないと学習しないようだ。」

真ん中にいた青年と話していた天狗は腰に携えていた刀を抜いて構えていた。対して青年は呆れた表情をしようとしたものか考えているようで何か特別しているような事はなかった。何も無いようにも見えるが何かあるのだろう。ある白狼天狗なら分かっていた。

「好きにしろ。」

青年は軽く答えていた。

天狗もその言葉を聞いてニヤリと笑うと走りだして青年に刃を向

けていた。やる気満々らしいので青年は素早く剣を抜いていた。

そして剣を納める。濃口に唾が当たる力チン、という音を立てているだけで他の音は何も聞こえなかった。

「貴方達に構っている暇はないと言っただろう。」

青年は納めた剣の柄を触りながら目の前で腹を抱えて横たわっている人を回り込むように通り過ぎていた。何が起こったのかは全く分かっていなかったが後ろにいた二人もどうしたら良いのかなんか分かっていないようではなかった。にをしたら良いのかさえ分からない。そんな訳でわなわなとみつともない声を上げて何処かへ行ってしまうので青年は追いかけるような事はしなかった。

第16話

青年は面倒な事になったものだと思い始めていた。もしこうなると上のものが出てくるのだが未知数なので何ともならなかった。とにかく青年は地面に伏せている天狗の脇を掴むと引っ張って木にもたれかからせることにした。そして自前の竹で作った入れ物を口元に持っていくと中に入っている液体を口の中に入れてあげることにした。

「安心しろ、ただの水だ。」

青年は急に暴れだしていた天狗に言い聞かせるようにしていた。適当な理論だが対処法を知らない青年は取り敢えず水を取らせることにした。それで治るのなら魔法にも等しいだろうがそのような事はない。だが暫くすれば楽になるだろう。

青年は先ほどの戦闘で峰打ちをしていた。深く入り過ぎたのか思った以上にきつそうな表情を浮かべているが青年は深く考えるような事はなかった。それどころか何か違う事を考えているようにも見える。

「安静にしていれば良くなるだろう。大事に。」

青年はそう言って立ち去ろうとしていたがその前にあの二人が帰ってきた。青年はそのことに驚いたが顔にでるような事はなかった。出すようなことでもなかったのだろう。

「これで俺たちが足止めしていれば勝てるという寸法よ。残念だったな。俺たちを見逃したのが運の尽きだ。」

その二人の天狗のうち調子に乗っている方がどんどんと口に出していた。何か理由があるというわけでもないが気になるにはなるのでどうしたものか考えてみることにした。だが、答えは出ない。そうなるのは仕方がないのだろう。

「でも俺たちが止めないと逃げられるから頑張ろう。」

「弱気だな。怖気付いたか。」

青年は弱気に堅実に立ち向かおうとしている天狗が言葉を発した瞬間にそのように言った。それに激昂した調子に乗っている天狗は

青年に向けて刃を向けることにした。

だが、届くはずもない。左腰から抜かれた剣が天狗の刀を振り払い、青年の右足が防がれた刀を持っていった天狗の足元に当たる。そして青年は腰の回転を利用して後ろまで押し出していた。流れるようなその動きに完全に翻弄されたその天狗は木の幹に頭をぶつけて立ち上がれなさそうだった。

「争いとはかくも悲しき。」

青年は手早く済ませてもう一人の天狗の方を向いていた。何か話したさそうだが青年は何も聞かなかった。そして青年は誰が来るのかを予想しながらその場で立ち止まっていることにした。

「逃げないのか。俺はもう追わない。」

「それは人の勝手であろう。」

青年は何も気にしていなさそうだった。そして待つことにしている青年に一撃を加えようとしている天狗がいた。

青年はその攻撃を見切って足を回転させながら体の力を抜いて刃を避ける。右脚を伸ばして体を屈めた青年は後ろを向いていた。其処には先程現れた青年に刃を当てようとした人物がいる。

紅葉柄の盾に白い分厚そうな毛皮を羽織っていて黒色のスカートに赤い紅葉柄のある天狗。

「椀様。その姿は一体。」

生き残っていた天狗が恐れおののいていた。その理由は簡単で獣と化していた天狗ほど怖いものはないからだ。そして呼び寄せていた人物だったので何が起るのかは全く分からない。

「最初から本気ということか。下がっている。巻き込まれたくはないだろう。」

どうしたら良いのかな分からなくなってしまったその天狗は青年の言葉に甘える事にした。それ以外の方法が見当たらなかつたという言い方もあるのかもしれないがそもそも対抗しようとしている青年が妙に自信があるので頭の中は混乱していたと思われる。

青年は精神というものを覆い隠した。それは太陽を隠す雲のように大地に光を当てないようにさせていた。その効果は確かにあるよ

うで何かあるような気もしないわけでもなかった。

権は盾を捨て去り大剣一本で青年に対抗しようとしていた。

強烈な一撃を青年はいつ抜いたのか分からない剣二本で対抗していた。曲芸のようなものだがそれで二人の間では普通というものであるらしい。

青年が権の大剣を弾くとすぐに後ろに下がっていた。攻撃しない意味はないと思うが何か意味はあるようだった。

遠ざかった青年を狙っていた権の大剣は空を斬る。其処について青年が左腕を伸ばすが間合いというものも考えると当たるようなことはなかった。もう見ていられないので帰ることにした。

「帰りましたね。」

「そうだな。して何をしに来た。」

青年は急に落ち着きを取り戻していた。何がしたかったのかはさておき何となく聞いてみることにした。

「援護を要請されたので来てみたら無礼を働いていたようですね。」

権は基本的なおつとりとした素の顔を見せていた。生きているのかどうか分からないほどふんわりとした表情をしている。

「そうか。ここの仕組みはそのようになっていたんだったな。してどうしてすぐに権が来る事になっていた。」

「簡単な話。貴方が倒したのが大天狗様なんですよ。最近妖怪の山では惨殺事件が続いていて人手が足りないもので総動員している訳です。」

「という事はもしかして不味い時にここに来ていたのだろうか。迷惑をかけた。」

「いえ、お気になさらず。そのような事はないというわけでもないですよ。」

「そうか。それなら別に良いのだが。」

「ですが惨殺の仕方が酷いものです。四肢をバラバラにされているんですよ。誰がそんなことをするのでしょいか。」

「俺ではない。そのことだけは信じてほしい。」

「別に疑ってもいませんよ。人を斬らないのはもう知っています。」

「そうか。それなら良かった。」

青年は安堵したような表情をしていた。別に他意はないが疑われていないようなので気にしていないということだろうか。

「引き続き警戒はしていますがどうしてか天狗のみ襲われるので其処だけが不思議なところですよ。」

権は不快そうな表情をしながらそのように述べていた。別に青年に心当たりはないということでもないが誰なのかはよく分かっていない。

第17話

椀とは一旦別れることにした。向こうにも何らかの事情があるよ
うなので青年がわざわざ首を突っ込むようなことでもなかった。そ
れをしたところで何も変わらない。

笠を被っている青年は山道を進んでいき前にも通ったことのある
道を進むことにした。道はとても険しいがそれでも慣れている道の
方が進むのはとても早い。そしてここは前によく来たことのある場
所であり青年の気に入っている場所でもある。先程剣を交えた椀と
も此処で初めて出会った。

ここに人は居なくて小さな川が流れているだけだった。其処らへ
んに転がっているような石でチロチロと音を出して流れていく水に
耳を澄ませながら周りから聞こえてくる木の葉の声を聞きながら肌
を撫でるような風を感じている。薄暗くも優しい光が差すその場所
で腰を休めるのが一番気持ちがいい。

だが、今回はどうやら先に客が来ていたようで青年はその場から逃
げ去るようにしていた。

黒い帽子を被っていて桃のアクセサリーをつけた青い長い髪で白
いシャツを着ている。シャツはエプロンのようになっていてその下
から青色のスカートが見えていた。極光を示すようなものをシャツ
とスカートの間に付けていた。いつも持っている非想の剣は其処ら
へんに置かれている。元々鞘のない剣であるらしく露見しているが
その扱いは心配になる程だった。

小さな川をチャプチャプと足で踏んでいるだけだが天界にはその
ようなものはないらしい。それほどに楽しそうにしている。青年は
それでもその人の素行が分かっているので関わりたくないようにしてい
た。

風が吹く。突然の強い風に青年は片目を瞑っていた。少し嫌った
らしい。それを感じたその人が後ろから来たその強い風が吹いてき
た方を見ていた。

「何処にいたのよ。」

「これは参った。」

青年はどうしようもなくなったのでこのような結果になってしまった。その人は脱いでいた茶色のブーツを履き始めると青年の近くまで来ていた。ここで逃げても変に追われるだけなのでそのような真似はしない。後々誰に迷惑をかけるのか分からなくなる。

「何よ、参ったなんて。あんたに迷惑をかけているつもりはないわよ。」

天人である比名無居 天子は青年には多くの迷惑をかけている。それこそ今もそうなのだがそれを何も言わないのでわがままな性格なのかもしれない。手を叩いたら誰か来るような状況なのか、青年はふとそう感じた。

「それは自分の胸に聞いてみるといい。邪魔するつもりはないから好きにしていってくれ。」

青年は兎に角ここから去ろうとしていた。

「立ち去ろうなんて言わないわよね。何処かに連れて行きなさいよ。」
「今日は辞めてくれ。足が付くのは勘弁だ。」

青年はどうしても逃げられなさそうなのでそのように言っていた。だがその中でもどのようになしようか考えているうちにどうしても逃げられないように思えた。

「良いじゃない。」

「貴方はそう感じるだろうが俺は嫌だ。」

「何か理由はあるの。」

「それに答える前に聞きたい事がある。どうして俺に付き纏う。」

「良いじゃない。私の勝手でしょ。」

天子はこれ以上に傍若無人な態度をしていた。青年でさえこう手惑うのだから天人の世話役は大変なのだろう。それで不満があれば即刻何処に行く事になるのだろう。大変なものだなとつくづく思う。「良くない。その態度はいつになったら治る。」

「知らないわよ。私は私よ。それ以外の何者でもないわ。」

天子が急に叫んだと思えばそのように言い始めていた。青年は困った表情と悲しそうな表情を入り混ぜたような顔をしていた。ど

う表現したらいいのか分からないが微妙なところだからそんなところが一番合っていると思われる。

「そうか。今日は行きたいところがあるがそれを片付けてから連れて行く。」

青年は早めにそう言っておいた。これ以上平行線を辿るのも良くないがここで放置するのも痲癩を起こされると困るところである。体は少女だがそれ以外は子供のような感じなので大体の事はさせてあげるのが良い。

「それで片付けたい用事は何よ。」

天子は何か不思議に思ったのか聞いていた。青年には片付けるべき用事があるのでここだけは譲れなかった。

「守矢神社である人と話をしてくる。それでうまくいけば良いのだが。」

「そう。なら早く行きましょう。」

すぐに行こうとしている天子を青年は止めていた。

「あの剣はどうする。」

青年は立てかけられていた剣を指で指していた。非想の剣は天界の宝刀のようなものであり大事なものであるが天子が事実上持っている。その理由は知らないが盗んだまま返していないだけだと思う。そしてこの扱い方をしているので青年には理解出来ないものがある。

「持っておいたほうがいいわね。言ってくれてありがとう。」

天子は素直に感謝を述べてから剣を取りに行く。こういう所はとても女性らしいので青年はなんとも言えない所だった。ギャップでそのように見えているだけなのかもしれない。それとも何か考えることがあるのか。

「と言っても天子が何か出来るわけでもないからそこにいる巫女と話していてくれ。俺一人で話をつける必要がある。」

青年は何処を向いているのか分からなかった。目線は前を向いている。そのことは見ていれば分かる。だが、話はまた未来を見ているようにも過去を見ているようにも思えた。天子はその辺りのことを

考えながら何となく気にするのを辞めていた。人のことを考えるのは終わらないしつまらないのですぐに辞めた。

「仕方がないわね。私は外で待ってあげればいいのね。」

天子は青年の発言に妙に従ってくれていた。青年は扱いやすくなったと思いつつ首を縦に振っているだけだった。

本当に何があつたのかは分からない。

第18話

妖怪の山の頂上。その場所には外の世界から移り住んできた守矢神社というものが置かれている。最初は人里の主にも男性が毎日のように会っていたのだが今ではまばらになっていた。神社なんて毎日来るような場所でもないし一日を費やしてここに来るとなると足が遠のく。それに博麗神社があり、命蓮寺も出来ているのでそちらの方に少しだけ取られているようにも感じる。

「此処が俺が用事がある場所だ。」

黒い上着を着ている青年は大きな赤い鳥居を見上げながら隣に居る青色の少女、天子を見ていた。身長的に青年の方が小さいのでほんの少しだけだが上を向いて話す事になる。歩いている途中でも目を離さないようにしているのでもそのようになってしまう。

「此処が守矢神社なの。」

「そうだ。」

青年は面倒臭いのか適当な返事をしているだけだった。これから話す内容によってはどうしてもそうなる可能性もあるので仕方がないのかもしれない。

「人間は此処で願い事をするのね。」

「天子はしないのか。」

「天界は歌って踊って食べて飲んで寝て起きて。それ以外は何もないから。」

天子は何処か楽しくなさそうな匂とした表情をしていた。珍しく縮こまっているので何処が悪いところでもあるのかもしれない。

「そうか。それは相当つまらない場所だったのだろう。」

青年は特に何か考えているということでもなかった。何もしていかなくても楽しい環境に居られるのならそれはそれで良いだろうが身を置いてみないと見えないこともあると思う。天子のような不良を生み出すこともあるだろう。

「分かる？だからここにきて水遊びしてたのよ。」

「子供か。」

「何よ、悪いの。良いじゃない何をしても自由でしょう。」

「節度を守っていれば問題はない。」

青年は兎に角前に進むことにした。此処で議論をしても一歩進むような事はない。

中と言つても何も無いような神社らしい境内となっている。手前の右側には手水場があり左奥にはお守りなりを売っていると思われる小屋がある。参道は綺麗な状態に整備されていて人はかなり少なかった。そもそも滞在する時間も少ないのでどうしてもこうなるのだろう。二人は鳥居の縁から参道を歩いていく事にした。だが、幻想郷では神は目に見えるようになってるのでそうする理由というのは何もない。強いて言うなら何となくの気分であろうか。それもそもそもどうかと思う。

「こんにちは。ようこそお越しくださいました。」

此処にいる巫女はそう言つてから深々と挨拶する。形式上必要な事なので仕方がない。

「じゃあ、何かちょうだいよ。それくらいはあるでしょう。」

青年は隣の人がそのように言つた瞬間に頭にチョップを一発かました。

「痛いじゃない。何するのよ。」

「神への冒瀆だ。此処では発言には気をつけてくれ。」

今二人に頭を下げているのは風祝で現人神の東風谷 早苗である。緑色の髪をしていて青年から見て右側に一房の髪を結っている。白い蛇が髪を巻いているような感じになっていて上の方では蛙の髪留めをしている。白色の巫女の服で清潔感のあるものだった。何処かの神社とは違う。

「早苗、少しの時間だけこの人を預けてさせてほしい。神奈子と諏訪子に話したいことがある。」

青年は一気に話を進める事にした。挨拶も何もないがそれでこそ青年であり普通にしていたらそれは偽物だろう。偶にするので一概そうとは言えない。

「分かりました。案内いたします。」

早苗はいまだに堅苦しい感じをしている。巫女としての務めは素晴らしいがもう少し気を抜いてほしいと青年は思っていると思われる。そんな表情をされていて顔を出していた。

「頼む。一人で行ってもいいがそれは色々和不味いだろう。」

「そうですね。でも通すのは貴方だけなんですからね。」

ニコツリ笑う早苗はいつも通りの感じがある。これが女の武器というものなのだろうが青年にはあまり通用しているようには思えなかった。元々そのような観点は青年はかなり狂っている。参道を歩いて行く間その静粛な雰囲気天子でさえ何も話そうとはしなかった。それとも天界にはないので見て回っているらしい。青年は早苗に連れられるままにされていた。

「天子を頼む。あれだったら参拝の仕方でも教えてやってほしい。」

「貴方も大概ですけどね。」

早苗は珍しく毒を吐いたところで青年は本殿の奥にある居間のようなどころへ行くために襖に手をかけていた。そして開ける。

中は何も無い。基本的に机なり座布団が置かれていたが掃除でもしているかのように綺麗な状態だった。そして畳の上で寝そべっているのかあつたかと思っていた。

「何の用だ。」

紫色の髪をしていて背中には注連縄を掲げている八坂 神奈子という人物がいる。赤色の服装をしていて男勝りのような豪快な性格をしていると思われる。

そしてもう一人。金色の髪をしていて茶色のシルクハットのような帽子に蛙のような目をしているものをつけている。そして白い服装の上に青色の服装をしていて蛙の絵が書かれている。何のためなのかはよくわからない。ニーハイソックスを履いている。

「今日は戦いに来たわけではない。話にしに来た。」

青年は腰から鞘を握って抜くとその辺りに投げ捨てていた。そうする理由はわからないが本気であることを示しているつもりなのだろうがその効果は何処まであるのかはまだ分かっていない。

「何の話だ。」

「気楽に行こう。」

青年はまず加奈子を落ち着かせる事にした。早苗はこの辺りのことを言っているのだが本人が気づくはずもない。

「それで何の話するの。」

諏訪子は変に子供っぽく聞いている。身なりのにはそんな気もするが背は青年よりも大きい。複雑な気分で青年は諏訪子とは相手している。

「神として感じていることもあるのだろうか何か嫌な気がある。其処で協力を仰ぎたいと話だ。先程ある白鵬天狗の話では天狗が惨殺されているらしい。それは無差別ということではなく天狗だけだ。そのことは知っているな。」

「ああ、話だけは聞いている。天狗は元々この山の頂点に居たからまだいざこざがあるからどのようになっているのかはまだわかっていないがな。」

「妖怪の山で行動を起こすのに邪魔なものとは何か分かるか。」

青年は一言聞いていた事にした。

「天狗か。それも哨戒天狗。確かに何か起こそうとしているのは言うまでもない。」

神奈子は少し考えるような事をしていた。諏訪子も静かだが確かに青年の言い分も間違っていないのか何か反論を言うようなことはなかった。

「それで何か掴めているのか。」

「俺は掴んでいない。今日初めてその話は聞いた。だが、一番隠れる場所が多く人里に近くて安全な場所といえば此処になるはずだ。天狗を惨殺できるほどの人が集団がその山の中にもう潜んでいるかもしれない。守矢神社、いや妖怪の山を守るためにも此処は協定を組まないか。と言う話だ。」

「それは賛成しない理由はないね。私の存在意義がなくなるのは良くない。」

諏訪子がそう言ったので神奈子も何か言うようなこともないのだろう。

「神奈子はどう思う。」

「私は少し今後の返事は遠慮させてもらう。どうなるかまだ見定める必要がある。それによっては妖怪の山の種族達に伝える内容が変わってくる。」

「そうか。相手が何してくるのか分からない以上はまだ焦る時ではない。ゆっくりと確実に相手の首を締める事にしよう。」

青年はその場から立ち去ろうと剣を握っていた。そこで何か思い出したのか青年は首だけで二人の方を向いていた。

「これから大きな賭けに出る。その時は上手く動かしてほしい。」

襖を開けて外へと出て行く青年はまるで結果が見えているようだった。

神奈子も諏訪子も置いてけぼりにする最後の一言はどのよう
に作用するのか。

第19話

人里の南西側に位置するこの場所にはある古道具屋がある。店の外装はともではないが良いものではなくて人を寄せ付けないうちに置かれているとしか言えないようなものも置かれていることもある。

その場所へと一人の青年が現れた。草履を履いた一身を黒に染めるかのようなマントを羽織っていて黒色の上着と白色の着物を着ている。そして笠を被っていてお尋ね者と人相は変わらないが自身が気にしていないので何を言っても変わることはないだろう。

「邪魔する。」

青年は身軽な感じでさらっとその店内へと入っていく。此処は古道具屋であるがその感じは残されているものの一見すれば整理のされていらない雑貨屋に見える。服や食器、金品に武器。鍛冶と萬集癖いう趣味が高じた雑破な店内だがこれだからこそ、この店に来る意味があるとと思われる。

「よく来たね。最近顔を見せないけどどうしたのかな。」

銀髪の短めな髪をしているその店主は着物と洋服を合わせたような和洋折衷の服装をしていて黒と青が非対称的な服装をしていた。右腕の袖が黒色、そして左腕の袖が青色をしていて足元は青色その裏を黒という感じだ。腰には朱色の小さなカバンを巻きつけている。

「張り紙は見えていないのか。此処に籠っていれば情報は難しいか。」

「そうだね。最近は寒くなってきたからね。それで張り紙というのは何かな。」

「口が固いと思って話すがその張本人が此処にいる。外には出づらいがもうそろそろいいかと思ひ始めたから挨拶程度に寄ってきた。」

「突拍子も無い話の展開にはついていけないけどつまりはそういうことになるんだね。それで何か欲しいものはあるかな。」

「あるにはあるが。今はそうだな。金で買えるようなものではない。」

「そうなる何かな。」

「香霖の腕を借りたい。もし武器を作りたいと誰かに言われたのなら

ちゃんと作ってやって欲しい。誰であろうともしてほしい。材料費程度は最低限取ってほしい。俺がほしいものはそれだけだ。」

「よく分からないけど君の武器は作れないという事でいいかな。」

「そうだ。これから大きな事を起こす。その為の布石でしかない。」

「ふーん。難しい話だけどどうも有難う。快く売ってあげるよ。」

「そうか。これから命蓮寺の方へと向かっていく。」

青年は踵を返して店内から足早に出ていくと旋風のような感覚を覚えた店主はどうしようもない大きな荷物を置いていかれたような感じがしていた。

灯籠が立ち並んでいるこの場所では参道として成り立っていると思う。草は抜かれていて歩きやすいように整備されていることには間違いないが特に飾りのようなものはなく明かりを灯すだけの灯籠しか置かれていなかった。そのような場所の奥ではどのような場所となっているのか。青年は何となく楽しみにしていた。

大きな門のあるその寺では尼僧が日々修行に明け暮れている。青年も一度は身を置いたことはあるがその音に仇で返すような普通は許されない行為をしてこようとしていた。それでも青年は引くようなことは出来ないので前へと突き進むしかなかった。

「久しぶりだ。」

青年は挨拶程度に会釈をしてから中へと入っていく。此処には門番らしき人がいるがさほど会ったことはない。どうしても生活のリズムというものが違うらしく食事の時にしか会うようなことはない。

その人は犬のように耳をしている暗めの緑色をしている髪をしていて小豆色のようなワンピースの服装をしている門番で雑用係をしている。そんな訳で青年はすぐに通り過ぎていた。その耳に後ろから聞こえる大きな声も聞こえていなかった。適当に手だけは振っておく。

「何の用ですか。」

青い髪をしている白い服装をしていてあまり顔の様子を伺うことはしにくい服装をしている人が立っていた。そもそも此処には来客

というものは少ないので門番の大きな声に驚いてる急いだきたという感じなのだろう。入道使いの雲居 一輪という人だ。

「聖に会いに来ただけだが。」

青年は至って普通に答えているだけで何か悪気があるようではなかった。そのような事を感じることは少ない青年なのでそうなるのも仕方がないものだと思われる。

「貴方はお尋ね者です。此処で捕らえても何も文句は言えませんか。」

その人はそのように言っていた。この命蓮寺という建物は仏教の教えを説いている場所であるのでこのような正義感の強い人は多くなると思われる。他の宗教はそうでもないということではない。

「そうか。そうなるのかもしれない。して、どうする。聖と相討ちの俺に勝てると思っているのか。」

青年は今だに平然とした表情をしていた。それこそ何かあるようにも見えないわけでもないがもう既にあるのかもしれない。何か隠しているようなことがあるのかもしれないがそれを露見させないの一層怪しくなっている。

「勝てないでしょう。ですが聖様には会わせたくありません。その事だけは承知してください。」

「丁寧に言おうとも変わらない。邪魔するなら斬る。俺はいつもそうしていた。」

青年は腰に携えていた剣の柄を撫でるように触りながら握っていた。何かやれるようなことはないと思われるがそれこそ挑戦状を叩きつけられるようなそんな気分にならないこともない。青年はそれを楽しんでいるのかどうかは知らないが青年の表情はなぜか柔らかなものだった。

「それなら私は戦います。己が信念のために。」

右腕に持っていた金色の輪はこの人が持っている使いの者を使用するために使われている。

ピンク色の雲のような得体の知れない入道であるが顔と拳だけが

具現化して、他の部分は何処にあるのかは不明である。もしかすると金色の輪の中に入っているのかと思うが、そのようなことはあり得ないだろう。どちらにせよ興味のない青年は聞くようなこともなかった。

「俺は目標のためにする事にしよう。行くぞ。」

青年は一気に剣を抜いてその勢いに任せて前へと突き進む事にした。その瞬間には青年は一輪の近くまで来ていた。元々の距離も近かったがその速さには何とも追いつけないところもあった。

そこは入道である雲山が自主的に一輪を守る形で振るっていた。一方で一輪本人は何もすることは出来なかった。きつと雲山には青年が何かしようとしているのはわかっていると思われる。だが一輪が傷つくのは許せないという事だろうか。

青年は雲山の拳に押しつぶされるような形で弾かれると見事な宙返りを披露しながら完璧に地面に着地していた。その美麗な体捌きには見惚れるところがある。

それで負けているのかと言われるとそれはまた違う話になるので今のところは何か言えたようなものはない。それとも何かあるような気もしなくもない。

「貴方の正義は何処にある。」

「私の中にある。今度は必ず仕留める。」

「いい心意気だ。」

青年はその場所から剣を振るおうと地面を蹴りだしていた。その速さは今までの比でなかったがそれでもやれねばやられるので兎に角動かす事にした。

雲山の右側の拳を青年に対して真つ正面から当てる。

青年はその上を飛び越えていた。軽やかな身のこなしで完璧に地面にまで着地した青年は方向を一気に変えてその向きにひた走る事にした。

その辺りは盲点だった。雲山の拳だけというものは飛び越えるのには最適であると考えられたらしい。

一輪は素早く左側の拳も繰り出そうとしているがそれはもう遅

かった。

青年は飛び上がらせた自身の体に回転を加えて上から襲いかかっていた。

その身のこなしと突発性には一輪も雲山もついてこれなかった。嫌な音を立てて倒れていたそれでこれはもう助からないと思われる。

「雲山だったか。安静にさせてやってほしい。絶対に動かすな。」

青年はその言葉を残してこの場を後にする事にした。

第20話

命蓮寺という場所はとても静かな場所だった。鳥の声や虫の声が聞こえる。もうそのような季節ではないのだが此処ではどうやら違うらしい。青年は草履を脱いで縁側へと上がるといわれる場所へと向かっていた。

此処には聖 白蓮という住職が居て先ほど会っていた一輪の他にも村紗や寅丸も居ることにはいるが今日は会うようなことはできなかった。運が悪かったのかよかったのかそれはどうにも判断がつきにくいところである。仕方ないので住職の方が探す事にした。

とは言え此処は一応小部屋もあったりするので正確に何処にいかを当てるのは難しいものである。しかしやるからにはやらないといけない。青年はある信念のもとで動いていた。それを止めるのはとてもではないが難しいのだろう。

「何か困っていることでもあるのですか。」

「聖か。探す手間が省けた。」

青年は後ろを振り向くと其処には聖 白蓮がいた。金色で紫色のグラデーシヨンのある髪型をしていて白い着物の上に黒い上着を羽織っていて前の部分は大きく開いているがぼってんしるしを作るように紐がついているので風になびくような心配もない。

「何か私に用があったのですね。何か気になりますね。」

「別に何か気にするようなことではない。だが、どちらかと言えば協力を仰ぎたいのでここまで来たという事だ。」

青年は簡素に説明をしていた。本当にその通りで何か特別な事でしょうとは考えていなかった。ただ話をしに來ただけである。けつまして危害を加えようとはしていない。

「私に出来ることなら何でも任せてください。」

聖は心強い言葉を言うので青年は大きく首を動かしていた。相槌にしては大きいのでありがたい言葉だったのか納得のいく返答だったのかは知らない。

「だが、此処で話すにはいささか不便だ。何処か部屋の中で話す事に

しよう。」

「分かりました。付いて来てください。」

聖はそう言うので青年は何も文句を言う事なくついていく事になっていた。

四角い長めな机が置かれていてだけの部屋であった。そして座布団を一枚対面になるように置かれている。応接間だと思うが今回は特別仕様という事であるらしい。

「それで改めて聞きますが私に頼みたいこととは何でしょうか。」

聖は座布団に座ってから話を始めていた。青年はその対面に座っていて話し合いに来た事を示すために出入り口に剣を立てかけている。戦いに来たわけではなかった。

「人間と妖怪の両方を救いたいのが貴方の願いだったはずだ。それには間違いないか。」

青年は今更聞くようなことではない事を口にしていった。聖はそれでも誠意をもって答えていた。元々の性格故かそれともまた違う事があるのか。兎に角青年は確認のために聞いたのだと思われる。

「はい、そうですね。」

不思議そうに口を動かして言霊を作り出した聖。それを聞いて青年はうん、と一回首を振ると更に話を続けていた。

「そこで頼みたい事がある。人間と妖怪の前に立って俺の今からやる事に向かわせて欲しい。その為には貴方のその意思と存在が必要だと考えた。暴力で訴えるようなことで心は痛むかも知れないが承知してれないか。」

「何をしようとしているのかは見当もつきませんがやるからには協力させて貰います。私の願いが叶えられるのならそれは願ったり叶ったりです。」

「では、うまく行く事を願っている。して、それともう一つ。魔界に封印されていた貴方だからこそ頼みたいことがある。それも聞いてはくれないか。」

「それは何ですか。」

「神子のいる世界へと行きたいのだがその方法というのは知らない。そこで何か聞いていないかということと行かせてはくれないかということだ。」

「行き方ですか。それは簡単ですが何を目的としているのかは話を聞かせてくれませんか。」

「理由か。意外と簡単な理由だ。単純に会いに行きたい。十欲の声を聞けるからこそ俺の中身を見てほしいと考えた。それは揺るぐ事はない。」

「十分とは言えませんが貴方のその目に免じて連れていく事にしましょう。」

「そうか。それは有り難い。それでいつ行けるようになる。」

青年は身を乗りだしながら聞いていた。それはどうなるのかはまだ分かっていません。何処からでもいく事はできますがそれ故に何処に空いているのかは不明なのです。」

「そうか。時期を待つ事にしよう。急ぎたいがこのような時間も楽しめてこそまた先へと進むことができる。」

青年はそう言うってから立ち上がる。何処かへと向かうつもりらしいがそれは何処なのかは聖は分かっていない。

第21話

所変わって仙界と言われている幻想郷の外側と言えるような場所に連れてきてもらっている青年はよく周りを見ている事にした。

その場所にどうやら豊聡耳 神子という仙人がいるらしい。前にも会ったことのあるので顔は知っているが仙界という場所に居ることやその光景は何も知らないので今日ここで初めてお目にかかる事になった。

「此処が法界というところなのか。」

「はい、そのようです。仙界は魔界のまた別次元に作られているので行くのは難しいですが何処にでも行けるので帰るのは簡単だと思います。」

紫色の髪に金色のグラデーションを入れた髪型をしている命蓮寺の住職である聖 白蓮はそのように説明していた。別に青年は帰りのことはあまり気にしていなかったが兎に角その事は言わない事としてそこから先へと進む事にした。

仙界という世界の中は建物が一軒あるだけで永琳の自室にかけられてる結界のようなものであると思われる。青年は一目見ただけなのだがそのよう感じた。

その建物とは命蓮寺の墓地の洞穴の先にある建物をそのまま持ってきて広げたような建物をしている。白い石畳があり奥の方に螺旋階段のようなものが対になって建てられている。そしてその階段を登ったその先には大きな金色の建物が建てられている。あれが居住区だろうがそれにしては豪華絢爛な気もする。又は変なところに無駄な金を使ったというべきか。そして石畳のある場所と先ほどを囲むように高い壁が建てられている。外を見ないようになっているのだろうか壁には絵が描いてあるのでそういう意味ではないと思われる。何の為にこのようにしているのかは知らないが何か理由はあるのだと思われる。

「此処が神子が新しく建てた住まいとなるのか。広いな。」

青年はボソリとそう呟いていた。それ以外は何もなかった。何も

話そうとはしなかった。多くは話さない青年だがここまで一言も何も言わないというのは気に入らない点があるように思える。実際はそうでもない。

「ええ。一体何がしたいのか。もともと王族の出身のようで豪華にしたいくなるのでしょうか。」

「そうか。そんな事は良いか。行こう。」

青年は聖を引きずるように足を進めると聖は繩をつけられているように何も否定せずに歩いていった。不思議な関係だがそれでも良いのだろうか疑問しか浮かばない。

「よく来た。ここまで来るとは何か用かな。」

「手短に済ませたい。」

青年は中に入ってからいきなりそのように言われたので青年は言葉に詰まることなく普通に返していた。もう分かっている同士特別言葉を交わさなくてもそこまでズレが生じないのだと思われる。

「立ち話をするよりかは座ってゆっくりとしていく必要がある。どうだ。茶も出す。」

「遠慮する。また来るからその時に頼む。」

青年はすぐさま断っていた。大抵の人物なら神のようなオーラを醸し出しているこの人物に萎縮してしまうと思われるが青年にそのような事はなかった。それこそ何かあるかのようなだった。

「それなら仕方がない。後にしよう。それで話というのは何かな。」

その人も気にするような事はないのか青年のその口調には何も言わなかった。それとももう知っているの今更何か言うつもりはないのだろうか。それぐらいしか考えられなかった。

「実は貴方だからこそ頼みたいことがある。大丈夫だろうか。」

「構わない。ここまで何かしていたようだがそれに参加してほしいという話だろう。」

「そうだ。これから俺がやる事に路頭に迷う人も現れるかもしれない。その時に導く太陽になってほしい。その風格は持ち合わせていると俺は考えた。」

「ふむ。やるとしましょう。何をするのかは誰にも話していませんが一人だけには話しているようですね。診療所のようなところは潜伏先でしょうか。」

「そこまで見えているのならかなり話は早い。これから博麗神社へと向かおうと思っっている。その為には俺が思い描く通りになるまで粘る必要がある。その時になるまでは待つていてほしい。それともう一つ。俺の過去について聞きたい。」

「貴方の欲は不十分なので鮮明は見る事はできません。それでも良いでしょうか。」

「常用な言葉だけでも思い出せたらそれで良い。捻り出してほしい。」
「そうですか。分かりました。」

太陽な風格を持ち合わせている人はゆっくりと目を閉じていた。そして頭につけていたヘッドフォンを外していた。能力に制限をかける為のものであるが今回はそれも外していた。いわば完全体で相手してくれるらしいので青年はそれだけでも嬉しいものだった。

「何やら四人で旅をしていたようです。貴方は侍、いえ剣士としておきましょう。それと回復術師と魔術師と格闘家兼荷物持ちと言うべきでしょうか。その四人で何処かへと向かっています。それから何処に言っっているのでしょうか。禍々しい雰囲気のある場所で何人かと負けながら逃げてきているようです。そして城の中に入っていくも負けるといふ事ですか。これだと思われませんが何を示しているのかは全くわかりません。」

「それだけで良い。ありがとう、神子。これで最終局面まで来た。後は針を投げるだけだ。」

「お役に立てたのなら光栄だ。また会おう。」
「そうか。」

青年はそれだけを返していた。神子と呼ばれた太陽の雰囲気のある人格者は優しい笑顔で青年が出ていくのを手を振って見守っていた。

「聖さん。何か聞いている事はありますか。」

「いえ、何も聞いていません。」

「あの人はこれから大きなことを起こします。ここは協力して援助しましょう。」

「神子さんがそう言うのでしたら。」

「暫く休戦する事にしよう。またこちらから出向く事にする。長くは待たせないつもりでいる。」

「そうですか。」

残された二人は期待を込めてそのように話していた。

第22話

幻想郷の東側にある博麗神社という場所は博麗大結界の境界の部分に建っていた。それはある意味幻想郷にもあるが外の世界にもあるといえる。その逆も然り。そのような場所では難しい顔をしている三人が居た。

一人は黒髪で赤い服を着ていて脇を見せている独特の袖を着用している。そして赤いスカートを履いていかにも巫女という格好をしていた。外は結構寒いがそのようなことは関係ないのかそれとも何かで守っているのか特に防寒着を着ている様子はなかった。

もう一人は道具が暴れ出した異変を起こした原因を作った小人の姫で頭にお椀を被っている。薄紫色のショートヘアで赤い服を着用している。足元は前とは変わらず裸足であるようで寒くはないのだろうかと思う。

姫はあの異変の後背丈が小さくなってしまい仕方がなく博麗神社に住む事にした。こういう時は優しい博麗の巫女には感謝しかないのだろう。

そして最後に幻想郷を作り出した一人である博麗神社を管理続けている人である人だ。金色のカールのかかった髪をしているが艶がある。そして中華風の服装をしていて袖は丸っこい防寒用のものがある。太極図のような図式が描かれたものの下には白色の体全体を覆い隠すようなものを着ている。そして扇子で口元を隠している辺りは何か不思議に感じる。

「霊夢、これからどうするのかしら。」

金色のかかっている女性は話しかけた。それは急を要するものであるらしく幻想郷を脅かすかもしれない可能性を持っていた。そしてこれからどのように対処するべきなのかは全く分かっていなかった。

「そんなことは分かっているわ。でも姿が見えないなら仕方がないじゃない。魔法の森へと降りているのは分かっているんだけどあんなところに建物なんてあるのかしら。」

霊夢は肘を机に置きながら顔を潰して話していた。それこそ少し怒っていて機嫌が悪いように見える悪態をついている。それだけで虫かごの様な所に入っている小人の姫は恐れていた。

「私も調べてみたんだけどそのようなことは一切なかったわ。」

どうやら幻想郷の管理者である八雲 紫も探索はしているようだがそれでも足取りが見つからないらしく難航しているのは目に見えていた。それでもやらねばならない。幻想郷の守護者とその管理者は熱い意思を持ってそのようにしていた。

「紫に見つけられないなら何も出来ないじゃない。どうしたら良いのかしら。」

丸い机の上に置かれている煎餅をボリボリと食べている霊夢は何も頭が働いていないような頭のぼやけた表情をしていた。あほ面というわけではない。

「手当たり次第に探すか、それとも全員を動かすか。どちらにするのかは貴女が決めなさい。私はすべての手配を済ませるわ。」

「分かったわ。少し考えるから待ってなさい。一人にさせてほしいから場所を移動するわ。」

霊夢は机に手を置いてからゆっくりと思い腰を上げていた。霊夢にも何か思惑があるのだと思われる。とにかく霊夢は一人で考える事にして他の二人はその考えを邪魔するようなことはしなかった。

襖は急に開いた。そしてその場にいた三人はまさかの登場に目を丸くしていた。

「邪魔する。霊夢はいるが紫もいるか。ちょうど良かった。」

その場には何かで編まれている笠を被っていて黒髪の後ろで一本に結っている髪型をしていて白色の服に黒色の上着それから覆い隠すようにマントを羽織っていた。ボタンのようなものがひとつ付いていてそのより下には何もない。そのような格好をしていた青年が現れた。

「アンタ、ついに此処までやってきたのね。」

霊夢は袖に隠している札を急いで取り出していた。しかしそうする前に青年は勝手に話を進めていた。

「今、俺がお尋ね者になっているらしい。そして何か探しているようだがもう手は尽きた頃合いだと思っていた。それで此処にくる事にした。」

青年は霊夢が構えている事など気にするような様子もなかった。そして一応三人の前で平然とした態度を取っている。一人はカゴの中にいるので出られるのかと言われるとそれはまた違う話になると思われる。

「それで何を話しに来たのかしら。」

紫は鋭い冷たい刃のような声で青年を責め立てていた。其処に人としての感情というものはなく憎しみや怒りが混じり合い獣のような魔物のような声をしている。本当に怒るとそうなるらしい。

「俺を全員に探させてほしい。」

「そんなこととして何の得があるのよ。」

「妖怪の山での件。それは知っているか。」

青年は優しい声で話している。何か理由はあるのかもかもしれないが紫とは正反対であるので何か強調される部分が多い。

「ええ。それがどうしたのよ。」

「あれは多くの天狗が警備している中で襲われた。あの山という狭い範囲で多くの天狗が警備しているのにも関わらず防げなかった。つまり俺は此処で後ろから殺されようとも貴方達が同じような羽目に合うかもしれない。その人達に対抗する為の起爆剤として俺を使え。話はそういう事だ。」

「それで此処まで騒動を広げたの。それで被害が甚大になっているかもしれないわよ。」

紫は青年の発言の中で痛いところを突いてくる。だが青年は気にする事なく話を続けていた。

「あれくらいなら許容範囲だ。俺の予想が当たっていれば乗っ取られてもおかしくはなかった。まだ間に合うはずだ。」

平然と答える青年に絶句と言う返事をした博麗の巫女は仕方なく立ちかけていた足を畳んでその場に座る事にした。もうこれは青年と紫の会話である。

「間に合う、間に合わないの話ではないでしょう。どうしてこうなったのかしら。」

紫は青年に対してひどい剣幕を出していた。怒っているように感じるがそれはまた違うという事を見ていればよく分かる。そんなわけで青年は平然とした表情で薄く笑みをこぼしている程度だった。

「まずこうなる前に危険因子を払い除けられなかった管理者が悪いだろう。それに俺は惨殺なんかしない。その事は過去の出来事を見ていれば分かるはずだ。」

青年は適当に話をしていた。何処を見ているのかそしてどの時間帯を見ているのか。過去なのか未来なのか、それとも現在とはまた違う世界を見ているのか。紫でさえその判断は完全には付かなかったのでもう何か違う事を考えているとしか言うことはできなかった。

「そう言う話をするとなんか私が悪かったなんてこと言うんじゃないでしょうね。」

「そうなる。流れ着いた世界が侵されるだけだから何処に行こうとも変わらないだろう。」

青年は何処を向いているのかは分からなかった。そもそも紫とも霊夢とも小人の姫である針妙丸でもなかった。それは未来のようなそれともまた違うところなのか。

「それなら貴方が危険因子なんじゃない。此処で倒せば何もかも終わるのね。」

「したければしたければいい。敵の情報を知っているのも対抗手段を練れるのも俺の脳の中にしかない。それでも殺すのならすれば良い。言っておくが初夏の頃に起きた異変の時に俺が戦っていた正邪とか言う人は雑魚だ。それだけは言っておく。」

「何よ。私達では対処できないなんて言うのかしら。」

「そうだ。そもそも倒れていたのは何処の誰だ。」

「あれは油断しただけよ。カウントはしないでちょうだい。」

「ねえ、一つ聞いても良いかな。」

カゴの中から声かましたので青年はその方を振り向いてみる事にした。其処には姫が居たが青年は今まで気づいていなかったらしい。

青年は興味あるような表情をしていたがそれ以上声に出すようなことはなかった。話の流れを阻害するからだろう。

「何だ。」

「どうしてそんなことが言えるの。」

「実は思い出したことがある。それは過去のだろうが四人で幹部を倒して魔王の元まで辿り着いた。だが、何ともならなかった。一進一退の戦闘を続けていたはずだがそれでも魔王は一切の疲れを見せるような事はなかった。相手が悪かったといえれば簡単に話は済む。だが、もし本気で潰そうとするなら確実に幻想郷は終わる。正邪よりも強い者が五人。そしてその下に少し劣るくらいな者が六人居る。そしてその上に魔王がいる。実際魔王一人で此処に来たらすぐに終わるがまだ探しているのだろう。」

「それで自分の出汁にして幻想郷の底上げをしたいと言う話なのね。うまくいくと思っているのかしら。」

「此処まで困窮させているのならそれを露見させて大きい報酬を与えてほしい。それは幻想郷の管理者の側近としての地位なり大きな財産物を与えるのもいい。それは二人に任せる。それから姫。貴方は弱き者の為に前へと行進し続けてほしい。そうすれば必ず答えは見つかるはずだ。そして紫。最後に言いたい事がある。」

「言いたい放題だけど聞く事にするわ。」

「これは幻想郷の総力を挙げて行なっている。妖怪の山なり何処かに強力な協力者は居るからその人と連絡を取り合ってほしい。それから俺を見つけても襲いに来るな。今の所なら勝てる自信はある。」

「そんな事するまでもないわよ。」

「そうか。それは心強い。自分の得意分野だけを伸ばしていてくれ。それと最後にこの話を知っているのは此処にいる俺を含めた四人だけで良い。」

青年はそれだけを言うと博麗神社の離れにある小屋から出ていくように踵を返していた。どこに向かうのかはまだ誰もわかっていないが何か大きなことをしようとしていることだけはよくわかった。

「何をしようとしているのかしら。」

紫は疑い深く扇子で口を隠しながらその場に座っている事にした。きつと何も信じていないのだろう。だが、霊夢は一切そのような事はなかった。何かを決めたような清々しい顔をしていた。誰に求めることは出来ないだろう。

「紫、記者を全員呼んで。大きく出るわよ。」

その表情には一切の曇りはなかった。そして決めていて揺り動かさそうにないので紫でさえ諦める事にした。そもそも判断は巫女に任せていたのでこうなれば本人はどうなろうとも全て手配するつもりだ。

「集めるわよ。後戻りは出来ないけど大丈夫なのかしら。」

「あいつが言うならやるしかないわよ。」

「いつからそんな存在になつていたのよ。」

「初めて会つた時からよ。」

霊夢はすぐに紫の小さな声に答えていた。その目には一点の曇りもない。そして輝いているので足止めなんていう半端なことでは止まらない。

「もう良いわ。呼ぶわよ。」

「分かつたわ。それと姫。アンタは青年に言われた通りにやりたいことをやりなさい。」

霊夢はそう言うのと紫を急かして全員を呼んで青年との会話を中訳して話す事にしていった。

青年が悪いようにわざと誇張させて巫女は話していた。そして青年は私が足止め出来た程度なので十分に強くなつてから戦いを挑む事にさせていた。博麗の巫女に匹敵するような妖怪や人間、その他の種族は中々居ないので其処で針妙丸がその人達に活力を送るようにしていた。其処は青年の考えなので巫女は何も言及はしなかった。そして報酬として博麗の巫女と同じような地位をつけるという話をしてこの件を終わらせた。

その後幻想郷では一面を飾った様々な表情をした青年の顔写真とともにお尋ね者として皆に知れ渡る事になつていった。その騒ぎには各所から大きな反響があつた。それに一憂する人もいれば一喜する

人もいる。腕自慢はこぞって挑みにいくのだろう。そして弱い者は姫が一步先に行く事によつて扇動する道しるべの役割をしていた。

全ては永琳の頭の中で考えられたものを青年なりに行動を起こしたものだ。現状永琳が幻想郷を牛耳っているようなものだったがそのような事に興味あるかどうかは別の話である。

第23話

博麗神社に急に召集される事になった新聞記者たちはそれぞれの記事を作り出して叩き売り状態で全ての人の目に止まるようにしていた。そのようにさせたのは霊夢とその管理者である八雲 紫であり青年の思った通りになっていた。そして報酬に対して大きな喜びをあげる者もいれば本物を見ている人は絶望に打ちひしがれていた。

躍起している人を自警隊は抑えていて姫はそれでも青年に言われた事を忠実に実行していた。相対する両者だがそれを止めるような人もいない。そもそも言った本人が幻想郷には普通では探せなかった。

何処にいるのかはもう分かっている。

魔界の中にある仙界という場所にいた。その場所には壮大な建物があるだけの孤独な世界をしている。そこで住人である仙人たちは修行に明け暮れるわけだがそれを行うための部屋しかない。

居間と何らかの像が置かれている部屋に雑事を行う際に使用する部屋の三部屋しかない。だが一つ一つは大きく作られているのでそう不自由を感じるような事はないと思われる。

「幻想郷で騒がれている声は聞こえるのか。」

黒い上着をしていてその下には白色の着物を着用している。紐のようなものでぼってんを作られていて止められているので風で遊ぶようなこともない。そして大きな笠を被っていた。

「物凄いことをしてくれました。ヘッドフォンをしてもここから聞こうと思えば聞こえてしまいます。ある人は貴方を倒そうと躍起しています。その一方では絶望に飲まれている人もいます。どうすることも出来ないでしょう。」

耳を作っているような髪型をしている光のない金色をしている。和と書かれたヘッドフォンをしていてしっかりとした自信に満ち溢れた顔つきをしている。その人こそが豊聡耳 神子である。青年が前に対決した後に聖 白蓮と会うことになりそこからもちずもたれずの関係を保ちながら此処へと移住してきた。そして仙界という自

分たちだけの世界を作り上げるほどの実力を有している。

「そうか。それが俺の狙いだったが。大変な事になっているだろう。」
「ええ。これを私だけでは到底何も出来ませんよ。」

「という事は視えているのか。残念だが抑圧を任せた人もいれば油を注ぐように頼んだ人も逃す役目を与えた人もいる。残念だが混沌とした世界を作り上げた。だが、必ず一つになる。皆が一つのことに対して競争する。そこで誰が一番上に上がってくるのかはそれこそ賭けだ。もう戻す事はできない。」

「何をしてくれたのかは言うまでもなく分かっているのでしょうか。そして何が起ころのかは言うまでもありません。貴方がとても怖いですよ。」

「そうか。前は四人で戦ったがこれだけの戦力を集めればそれは大きな力となる。そしてそれは勝手に管理者に任せる事にした。残念だがもう終わっている事だ。」

「何処まで未来を見据えているのかは知りませんが賛同すると決めたからには最後までやらせて頂く。それは譲れない。」

「それは心強い。さて、俺はそろそろ行く。」

「何処に行こうと言うのだ。」

「魔界だ。雲隠れするにはちよūd良い。」

「待て。死んだらどうするんだ。」

「その時は任せた。」

「そんな身勝手な。謀ったな。」

「気付かない貴方が悪い。」

青年は神子に頭の中を見せていた。それがどうしてこういう事態に発展するのかは知らないがやると言っている以上はやるしない。唇を噛み締めた神子は青年の背中を目で追っていた。

「死なないように頼む。」

「そうか。」

床を足で叩く音がしている。そして草履を履いていたのかそれが擦れる音が外から聞こえていた。もう戻ってくる事はない。その事実だけが神子の手元には残っていた。

「布都、屠自古、青娥。こうなればやりますよ。青年の期待に応えましょう。」

変に気合を入れた神子とそれについてこれない三人と一人が青年に置いていかれた神子と同じ気分になっていた。

第24話

青年をお尋ね者とした記事が出回ってから幻想郷の何処もが騒然としていた。その法外の報酬に誰もが熱狂していた。そして誰もがそれを求めてひた走る。

だが、現実を知る者はその事を花で笑うだけで世間の流れには乗らないと考えている人も居た。動き出す者、静観する者人それぞれだが大きな影響を与えたのは言うまでもない。

赤いカーペットを敷かれた一室では一杯の赤い色が濃い紅茶とシヤキシヤキのレタスとジュシーなハムが挟まれたサンドを食す紅魔館の主人である青髪の少女は優雅な朝食を過ごしていた。いつも通りの光景だがそれを蹴破ったのはメイドだった。

「お嬢様、見てほしい記事がありました。」

銀色の髪をしている耳元に三つ編みのある髪型をしていてバツサリと切っている。少しだけ尖っているように見えなくもない。そして青色の服装に身を包んだその少女は一枚の紙を見せていた。

「見知った人間が写っているわね。遂にやっちゃったのかしら。」

冗談めいた口調で少しだけ笑っているような主人はその記事を一見見たぶんには楽しそうにしていた。それとも何をしたのか興味が湧いてしまったらしい。

「前にもお尋ね者の話は聞いてましたか。どうやら私たちの見知った人間を探していたようです。どうなされますか?」

メイドとしては主人に選択を迫っていた。どうやらそこまでするほど必要な事であるらしく鬼気迫った表情をしている。よく記事の内容を知らない主人は仕方がなく読み始める事にした。

「どうすると言われても。なかなか面白そうな事をするようになったとしか答えることは出来ないわ。元々白紙の運命だから何をしても問題はないわ。」

「でしたら釣れ出すために何かされると言う事ですか。」

「そうね。報酬も凄いものよ。これで私も幻想郷に名を売ることが出来るわよ。」

「そんな簡単に行けるようなものではありませんでしたよね。」

メイドは主人の興奮した表情に対してあまりにも落差のある引き下がった表情をしていた。どうやらメイドにはまた違うものを感じたのだと思われる。

「何をしたいのかを知るまでは何も動けないと思われます。少し時間を待つのが良いと思われます。」

「ふーん。そうね。それでも楽しそうな事には変わりないわ。やるわよ。」

メイドの意見も聞きつつも自分の意見を曲げるようなことは出来ないらしい主人は平行線を描き続けるので交わるような事はなかった。

「分かりました。お嬢様がそう仰るのなら私も尽力致します。ですが、一度パチユリー様に意見を聞きに行くのはどうでしょうか。」

メイドは一度頭を下げてからそのように答えた。無礼であることを承知した上でそのように話すので主人も怒るに怒れない。それにメイドのその発言は間違つてもいいない。

「そうかしこまらなくても良いのよ、咲夜。早く行きましよう。」

紅茶の入ったカップを右手で持って一口だけ名残惜しそうに啜っていた。それから立ち上がると時間や空間を超越してもらつて日の入らない場所魔へとたどり着いていた。随分と静かになっているその図書館では二人の少女がその場にいた。赤色の髪をしている黒色のスーツのようなものを着ている司書である小悪魔と紫色の服装に身を包んでいるパチユリー・ノーレッツジ。

「パチエ、聞きたいことがあるんだけど時間いいかしら。」

白い服装をしている紅魔館の主人であるレミリア・スカーレットはもう少し聞き方があるのではないかと言いたくなるようなほどの言い方をしていた。右後ろで背筋を伸ばして立っていたメイドも知らないわけではないが目に余るものがあつた。

「良いわよ。最近暇にはなつてきたところよ。」

パチエ、改めてパチユリーは目の前で読んでいた魔道書にしおりを挟み込んで閉じると本を読む際に使用する小さな眼鏡を外していた。

そして机のパチュリーから見て利き手である右側に置く。それからその場から動く事はなくその場所に座っていた。その前には机とフカフカのソファが置かれているのでレミリアはその場所に座っていた。

「意味の深そうな発言ね。」

レミリアは座っていたソファからはキョトンとした表情をしていた。その顔はあどけないと言うのか少し馬鹿っぽく見えた。口をポカリと開けて話す言葉を頭の中から見つけ出そうとしているだけだった。ただそれだけだ。

「それは気にしない事ね。それで、何か聞きたい事でもあるのかしら。」

「この記事を見てほしいのよ。」

レミリアがそう言っていた。そして特に命令もなくある記事をパチュリーの目に入る場所に置いていた。大きな一枚の写真と少々本文の記載されているもので一見で何が起こっているのかは容易に想像できた。それだけ一枚の写真の衝撃が強いと言うべきなのかもしれない。それだけなのだがまた違う物があるような気がしてならない。青年の思惑というのか。

「これは私達が悪いのかしら。それとも頭でも可笑しくなったのか。」

パチュリーは微笑していた。どう反応を見せて良いのかわからず仕方がないのでそうしているだけと言う感じには自分も同じだったので何か言うようなことはなかった。レミリアも半分ぐらいはそうだったけど何かあるように思えたから楽しくて仕方がない。

「それは分からないわ。もしかしたら両方かもしれないわね。」

レミリアは呆れたように笑っていた。どう話したくはないらしい。レミリアの能力を持ってしても何も書かれていないはずの白紙である青年の運命に誰もが翻弄されている。レミリアがこの様子では他の人は余計に振り回されている事になる結果となっていた。

「それはないでしょう。幻想郷は変わった人しか居ないんだからこうでもして貰わないとね。」

「パチエ、何を期待してるの?。」

レミリアは意味のありそうなその発言に見た目通りの反応を見せていた。純粹に不思議と思つたから何か言うようなこともないと言う意味合いなのだろうか。それともまた違う所があるのか。

「でもこれで元気そうにしているが分かるわね。」

「それでパチエ。この件、私たちも探してみないかしら？きつと見つければはずよ。」

「お断りよ。まず何かあるようにしか思えないわ。それとレミイが求める理由は分かるけど私達より強い人がいる事には間違いないわよ。力をつけるところから始めましょう。」

パチュリーのその言葉にはここにいた二人が胸をキュツと締め付けられるような気持ちとなつていた。確かに敗北を喫している今の力では何も対応できないのだろう。それに多人数で捕まえるのだろうか。隙があるのか無いのか分からないのでどのようによれば誰かの事を考えていると難しい所がある。

「そう言う言い方もあるわね。仕方がないわ。」

「咲夜、貴方が最初にこの記事を見たのかしら。」

「いえ、美鈴さんが門番をしているところで無償で届けられたようです。」

「そうなのね。美鈴は何か言っていたのかしら。」

「それは気になるわね。」

二人は咲夜がこれから何を話そうとするのか興味を持ち始めていた。そして二人の視線はそちらへと向いているので咲夜は身を一步だけ引いていた。だが、話すには話すらしい。

「安心した、と言われました。何か意味はあるのでしょうか。」

「きつとあるわよ。」

パチュリーは強く主張していた。そしてそう言うならレミリアもその意見には賛成していた。

「呼んできましようか。」

「お願い。」

レミリアがそう言い終える頃には素早く移動されていた門番は急に二人からの尋問を受ける事になり戸惑いを隠せていなかった。

第25話

灰色に包まれたような色もないこのような場所では一切の交流も許されるはずはなかった。

だが、人里のある幻想郷とは曖昧な結界のおかげでそのような事はあり得る話となっていた。あり得ると言う話なだけで本当のところは一切分かっていないがもしかするとそのようなことがあるのかもしれない。

「はい、創造主様が出来るだけ早く皆に伝わるようにしたいと言うことです。分かりました。それでは一部だけ受け取らせていただきます。」

白い髪をしていて少しだけ頬の痩せこけている色白の頭に黒いリボンをしたショートヘアの少女はある天狗からある髪を一枚だけ受け取っていた。

どうやらその人は幻想郷のあらゆる場所に新聞を届けているらしく他にも来るだろう、一言忠告してから羽を使って何処かへと向かってしまった。

結界の境界がある異変から曖昧なことで以降偶に生きている者が来たり来なかったりするがここ一年近くは来ていない。何処かに隠れているのかもしれないと死んでしまったのか。幽霊やこれからの転生を待ち遠しくしている者が待機している冥界にいる管理者とその従者は心配していた。

もう、そのような心配は不要であるらしい。一枚の紙に乗せられていたのは後ろ姿のもので一番大きな異変とも言える時のお尋ね者の後ろ姿だった。後ろからは一本だけ髪が垂れていて青色の服装をしている男の人であるらしいが腰には二本の剣を携えているらしい鞆が二本見えていて左手には針が二本、そして右手には小刀を持っている。その小刀の刀身は黒色をしている。その姿を忘れられるわけがなかった。

従者と思われるその少女は主人のいる館へと戻っていくこととした。

「幽々子様、何か気になるものがありました。」

先ほどの少女は肩と腰に一本ずつ携えている剣を振りながら主人の元へと向かっていた。

だが、その主人はそんな従者の姿を優しい目でなんとも思っていないように見えているだけだった。それだけ肝が据わっていると云うのか従者の事に興味がないのか。又は違う理由なのか。それは本人に聞いてみない限りは分かってもらえないのだろう。

「妖夢、そんなに慌てないの。」

状況を全く分かっていないようには見えないその人はおっとりとした自分だけのペースを保っていた。ピンク色の髪をしている短めの髪をしていて青い帽子には白色三角状のものとそれに繋がっている紐があった。亡者のつけるそれをしている。つまりは幽霊の類となるのだが一切そのようには見えない。それから水色の服装をしている和服を着ていて白い靴下を履いている。下駄は何故か何処かに履き捨てている。

「幽々子様、それが、えっと。これを見てください。」

無駄に慌てているよすのある妖夢と呼ばれた従者は主人である幽々子に先ほどの黒い羽を生やした天狗に渡された紙を見せていた。天狗が渡しているのが新聞なのだがそれに記載されている内容に妖夢は腰を抜かして幽々子に知らせに来たらしい。だが、特に動じるそぶりは見せない幽々子には振り回され続けるのだろう。

「山本さんがね。何をしたのかしら。」

クスクスといつも通り笑っている幽々子のその姿は妖夢には悪魔に見えているらしくハハハ、と同じく笑っている声は出していたが口が引きつっていて明らかに演技をしている。それを見てまた幽々子は笑い出す。一段と大きくなった声に妖夢は合わせるように声を出す。別にしなくても良い。

「それでこれを発表した博麗の巫女及びその管理者は何を考えているのかだけでも何か分からないわね。」

一面に写真の載せられている紙に書かれている薄い文章にはそれ

だけ急いで作り上げたものであると言うことを言わなくても示していたのだが幽々子はその事には気にしていなかった。其処には簡単にまとめると山本さんと幽々子が呼んでいた人を差し出すとどうなるのかを示していた。その頭でもおかしくなってしまったのと思われる報酬に幽々子は深く考え込んでいた。

「これは何かしらね。一切何をしているのかも載っていないのね。何か裏がありそうね。それとも私怨が混じっているのか。考えれば考えるほど色々と出るわね。」

「妖夢、これを見てどう思ったのかしら。」

幽々子は聞いていた。何か深みのあるコーヒーのような声に慣れなかつた妖夢は思わずひつ、と声を出していた。実際其処まで身を構えるような必要はないのだがそうさせるのは幽々子の腕なのだろうか。

「どう、と仰られましたも。返答には困ります。」

妖夢は一旦自分の中で心を落ち着けさせてから話していた。一部始終を見ていた幽々子は状況にも似合わずに笑われ続けているのだがそのような事はもう関係ないのだろう。

「何か復讐をしたいなんて考えているのではないの？」

「何を言っているんですか。幽々子様。確かに負けてばかりですけどそんなことはありません。」

「私はとても恥ずかしいのよ。妖夢はいつも負けるから最近では何も期待していないのよ。どうしてくれるのかしら。」

「分かりました。やらせていただきます。見ていてくださいよ。」
「頑張っつてねー。」

棒読みにも等しいようなその声を出した幽々子は一切そのようなことは気にしていなかったようだ。妖夢の言ったことは何も期待していないのではなくてその逆である。今日はどれほど歯向かうことが出来るのだろう。それと同時にどれほどの腕を持ち合わせているのだろうか。それだけに限る。その時間が永久に続けばそれはさぞ楽しいのだろうが終わりがあるから美しい物もある。それを知っている幽々子は永遠という言葉は好きではない。

「幽々子様、しばらくの間応援をお願いします。」

妖夢は腰と肩から抜いた剣を振りながら模擬的に相手を切り倒していた。乱舞をしている妖夢のその健気な姿もそれを大きく貶しているも帰っていく青年のその剣もどちらも好きだった。人それぞれ違う味というものがありそれを噛み締めるのは幽々子の楽しみだった。

「もし良かったら私が相手しましょうか。きっとやれるわよ。」

幽々子にとっては自分が出るというのはあまりにもしたくはなかった。冥界の管理者として最後の砦として成り立つはずの自分がまた違う武器を持って従者の剣に付き合うということも好きではなかった。

それでも自分の剣筋は青年には届かないのだろう。幽々子は肩を並べるとは愚か触れる事さえも許されないように思えるその姿を間近で見えていたかったただけなのに今ではもう遠くへと行ってしまった。

「妖夢、私に勝っても慢心することは良くないわよ。それだけ山本さんは届かない存在なのだから。」

桜散るその花びらのように儂く、そして寂しげに言った幽々子の言葉は妖夢の頭の上に舞い降りてそれを不思議に感じていた。妖夢はどのように答えるのが正解なのか分かっていなかった。

第26話

妖怪の山では一切の騒ぎというものはなかった。いや、正確には起こす理由がなかったと答えるべきなのだろうか。射命丸 文の作成している文々。新聞は実際は明確に書かれていて何も疑問を持たなかったというべきだろうか。

幸か不幸か妖怪の山では皆が討伐に向けた動きを見せていた。それに反論もなければ参加しないという人も居なかった。ただし、その裏で埋もれてしまった人もいる事は忘れてはならない。

東から太陽の登る早朝、今日は少しだけ風が強いらしく短い白色の髪が揺れていた。目にかかる髪から漏れている日がキラキラと光っている。妖怪の山を一望するような天狗のみ知るような場所で一人立っていた天狗はその一枚の紙を読みながらあまりにも変わり果てたその姿を映した一枚の写真を見ていた。こちらは正面から撮っているのであるらしく顔はくつきりと写っていた。真っ直ぐとも言えないが少しだけ吊り上っているように見えなくもない目をしていて其処には少なからず敵意というものがあつた。どうやら何かの異変の途中での戦闘中に撮られているものであるらしい。そしてその下に書いてある短い文章には一切の説明もなく報酬だけが書かれていた。「この人は全く。私はそうさせる為に剣を教えているわけではありません。」

その人は手に持っていた一枚の紙を投げ捨てるといつも通り妖怪の山の警戒にあたっていた。ここ最近は少なくなつたがそれでも無くなっているわけでもない。未然に防げるようにしたいが一目で妖怪の山を見る事はできない。小さな動きには気付きにくいので此処からこのは一枚の動きが的確に分かるということでもない。仕方がないので山の中を駆け抜ける事にした。

日も登り始めていて朝も一通り落ち着きを見せた頃。人それぞれ暮らし方はあるが何処からでも聞こえる話は同じような事を話して

いた。それだけ今日配られている新聞が衝撃的だったのかもしれない。

「にとりさん、今日の新聞は読まれましたか。」

河原の近く。水の音は小さくも聞こえていて辺りは木はあるが少し開けたところだった。白い石の中に偶に混じっている黒い石のあるこの場所では白いドーム状になっている建物がある。その場所とこの場所がにとりと呼ばれた人物の拠点となっている。煙突からはモクモクと立ち込める煙だけで何かをしているのはよく分かったがそれだけでは一切分からないものである。

「読んだよ。というか見ただよ。私には関係ない話だよ。」

そう答える青色の髪をしていて長袖の作業着を着用している少女は額から垂れる汗をぬぐいながら答えていた。

「そうですね。私たちは隣で座っているだけなんですよね。」

悲観に捉えていた緑色の髪をしている落ち着きのある元気のなさそうに思える少女は両手を強く握りしめていた。何か強い思いが彼女の中で渦巻いているのだろうか。それとも言いにくい真実を握っているのではなしたくないのか。

「そうだね。いつものように肩に抱きついていたら良いんじゃないかな。」

こちらはどうも楽観的に捉えすぎているようにも感じるが元々がそうなら仕方がないのだろう。二人は正反対の性格をしているがどちらにも良い感じに作用していて動かしたり止めたりしながら日々を過ごしている。

「それが出来たらそれで良いんですけど。もう会えないんじゃないかな、何て思っちゃうの。」

「それは考えすぎじゃないかな。」

にとりはヘラヘラとしながら雛のその言葉を聞いていた。現実不起こりそうにもなさそうなのでそのような反応もおかしいというわけでもない。それか悲観的になっているので元気を出してほしいだけなのか。

「だって、あんなに厄が溜まっていたのにあの人は死ぬような事はな

かった。なら、その近くの人が何か影響を受けるわよ。それが怖くて。」

急に暴れ出しているような口調で話し始めた雛は握りしめていた更に強く握っていた。プルプルと震え始めていたその拳がどうしても消えるようなことのないものであると思うと心の中が空っぽだったような気もしてくる。にとりは雛の止まっている言葉を待つ事にした。

「怖くて。私はそんなのは嫌いなよ。だから近づいて欲しくなかったのに。どうして、どうして。」

急に膝の力を失ったのかその場に座り込んでしまった雛は握りしめていた拳を開いて目を抑えていた。

「私はあの人の事が忘れたくなくて、側にいたいと思うのよ。」

にとりは何もいうような事はなかった。いや、何か言うのは邪険だと思った、それは雛の気持ちであり誰のものでもない。傷つけるようなことも口を出すようなこともない。それでも言いたい事はある。

「素直になつたら良いよ。あの人は流すかもしれないけど雛はこのままで良いの。その気持ちは大事にしていれば良いよ。今の私達に出来る事は無事に会える事を願うだけだから。二人で頑張ろう。」

肩を軽く叩いて励まそうとするにとり、それを受けてどうしようもない崩れた顔を見せていた雛はにとりに抱きつくように手を伸ばしていた。にとりは無慈悲にもそれを振り払う。

「その手は私ではなくて。あの人に伸ばすと良い。その流している涙も一緒に受け止めてくれるから。」

「うん。」

言った後でも何回か力なく落とすように振る首は脱力感とその他の何かを感じるようなものだった。

にとりの言うあの人は今はお尋ね者となっていて幻想郷の何処かにいるのは確かなのだがそれ以外の情報は何もない。そして追いかけることも許されないような場所にいるその現実を受け止めるには少し時間を有する。

普段はあまり自分の感情をむき出しにしない彼女だからこそにと

りは何かしようという気にはならなかった。代わりにはなれないからという事なのだろう。

「しかし盟友も何か言ってほしいものだよね。急にこんな事発表されたらどうなるのか分からないよ。」

にとりはグチグチグチの顔をしている雛を後にしていた。にとりには受け止めるようなことの出来ない量のものであるらしく半ば諦めていたのかもしれない。

「本当に今日の雛には驚いたよ。」

にとりはそれだけを残して落とした人形を拾い上げる事はなかった。あの手は女であるにとりよりもまた違う人の方がいい。

第27話

幻想郷を引っ掻き回しているお尋ね者の記事は勿論神の間でも話題となっていた。

妖怪の山の山頂には大きな社を持つ守矢神社がある。そこで祀られている神である二人は何か企んでいるかのような表情をしていた。

二人には少し大きめな気もする卓袱台の上に湯呑みを置いて何かを話している二人は誰にも見られないようにそして聞かれないようにある一室に集まっていた。神として祀られている二人は社にある结界によって守られていた。普段なら開けるようなことも許されないが住人とその人が認めた人だけは入る事はできる。

「今後は何をしたのかね。」

背面に注連縄をつけている青紫色をした髪をしている赤色の服装をしている女性は疑問に思っていた。

「本当に飽きないね。」

真面目に考えているように見えるその人とは違い、楽しそうにその事について見ている。

その人は子供のような顔つきをしていて黄色の髪をしている少女である。妖怪の山の土着神として崇められているのでこの地域では最強とも言える。

「だが、気になる事はどうして此処まで発展したのかだ。その点はどのように考えている。」

青紫色の髪をしている女性は子供のよう楽しそうに笑っているその少女に聞いていた。周りに影響を与えるのは聞いている方だが実際に力を持っているのは聞かれている方だった。自分の命に関わる可能性があるのです。此処では慎重に考える必要がある。

「そう言う神奈子はどのように考えているの？」

相変わらず楽しそうに聞いているがどれだけ重要な事であるのか理解していかないようにも見える。それに神奈子と呼ばれたこの女性は大きく一つだけ息を吐いた。

「彼を潰そうとしているようにしか見えない。それに此処までやろう

とする管理者もどうかしている。」

「言うねー。一応その下にいるからどこで聞かれている分らないよ。」

「その事は今は関係ない。」

「まあ、良いかな。私はねとても楽しくなりそうだよ。この人が前に来た時に何を話していたのか覚えるかな。自分を出汁にしてくれみたいな事を言っていないかった。つまりはそう言う事なんだろうね。」

「これを起点として妖怪の山の皆を強くさせようとしているのか。これは考えつかないような事をしてくれる。」

神奈子は写真として載っている男性の顔を見ながら深く唸っていた。考えても何も進まないだろうがそうさせるだけのインパクトとこの山は諷訪子だと思われる。

「これからがとても怖い人物だよ。何をしてくれるのかな。」

言葉とは裏腹に楽しそうに答えているその人は神奈子の瞳には全く異なる事を考えているように見えた。

「この山は諷訪子がしたいように使うと良い。土着神として妖怪の山を失うのは自分の命の灯を吹き消す事になる。私は知らせに行くようにする。」

「そうだね。最近では被害は少なくなっているそうだから其処まで警戒する意味もないと思うけど精進するように頼んできてよ。」

諷訪子はそのように述べた。意味などない。ただ青年が用意してくれたものだから存分に無駄なく使おうとそう考えただけだった。それだけなので使わざるをえなかつたというのか。使うように促されてしまったのかそのどちらかだろうかやるしかなかった。

「分かったよ。そう言うなら天狗と河童を中心にして妖怪の山全体に伝えていく事にしようかな。」

重い腰を上げた神奈子は社に取り付けられている襖から外に出ると襖を閉じてからどこかへと向かったのだと思われる。襖の先に居る神奈子の姿はとうに見えないので諷訪子は卓袱台の上に置いてある湯呑みを持って一口だけ啜る事にした。音は特にないがある音だけが近づいてくる。

「神奈子様、諏訪子様。あの記事は何でしょうか。」

緑色の髪をしている神子のような服装をしている少女は興奮した様子で襖を開けていた。あの記事というのは何か分からないが先ほど話していたものと同じであると思われる。

「早苗、これから忙しくなるから体を十分に休めておくと良い。」

諏訪子はゆっくりと湯呑みを置くとその場所からは動く事なく何かを含んだような不敵な笑みをこぼしていた。それを不審に感じた早苗だが聞くまでもなかった。

「わかりました。それでもあの記事について諏訪子様は何か知っているのですか。」

早苗と呼ばれた水玉模様の青色をしているスカートをはいている少女はその布を折り曲げて襖を閉じてからその場所に座っていた。動く気もなければ出す気もないのだろうが別にどこからでも出るような事はできる。

「知っている事は何も無いよ。それでも強いて言うならこれから幻想郷は大きく動くだろう。此処まで何をしているのかは分からないけど揺り動かされているのは紛れも無い事実だろうね。現に管理者がお尋ね者として巫女の名を借りて各地に呼びかけている。こんな事をされているんだから同様になるのかは誰も予想がつかないだろうね。」

諏訪子は敢えて早苗の方には目線を合わせる事はなかった。早苗はもう聞く事もないのでその場から立ち去ろうとする。だが、それを止めたのは諏訪子だった。

「早苗は、どうしたいの。」

「諏訪子様。私はまだ心の整理がついていないので何も言う事はできません。それでも一つだけ。とても悲しいです。どうしてこんな事になってしまったのか。知ってますか？」

早苗はやはりそうであったらしい。してやった感じのある表情を浮かべている諏訪子はそれから何も話すような事はなかった。少しだけ早苗を惑わせるようなつもりなのだろうか。

「早苗には何か違うものが見えているんじゃないかな。これは青年は

選んだ道なんだよ。私は全力でこの機会を使わせてもらうつもりだよ。」

「でも、あの人は何をしたと言うのですか。何もしてないないじゃないですか。」

「それはどうだろうか。もしかしたら見つからないから探しているだけかもしれないし何か重要な秘密を握っているだけなのかもしれない。これは本人と管理者にしか分からない問題だよ。」

諏訪子はそれだけを早苗に伝えていた。そして早苗は仕方がなくこの場からは去る事にした。その目には涙が浮かんでいたのだが諏訪子は何もしようとは思わなかった。

第28話

安寧を司る神が祀られていそうなほど静かな空間では珍しい客が現れていた。その人は空から門の前に向かってきていて黒い羽を持つている人物で幻想郷からする位置的には反対側から来ていそうだ。

「おはよーございます。」

元気に挨拶する門番にはその人は驚かされているようだった。聞いたこともあるような声の質と声量なので既視感があるように感じなくもない。

「命蓮寺の門番か？」

空を飛行しているその人はそのように述べていた。少し怖がつているように見えるが単に疲れているだけなのかもしれないので門番は気にするような事はなかった。それとも気づいていないのか。

「はー。」

元気良く挨拶したその門番は小豆色の長袖のワンピースを着ている。前面の一部と襟は薄いピンクとなっている。鈍い緑色をしているが黒いと言うわけではない色をしていて小さなたれ耳を持っている。頭を歩いて少しだけ幼くも見えなくもないが門番している場所のおかげなのかキリツとした引き締まっているようにも見えなくもない。名前は幽谷 響子。

「聖 白蓮とその関係者にその記事を見せて欲しい。これは管理者である八雲 紫が博麗の巫女である博麗 霊夢によつて多くの人に知らせるために配布している。代金は要らない。それでは失礼する。」

門番の手に一枚の紙を乗せるとその場で少し離れるように飛んでから体を返して他の場所へと向かっていた。門番である響子はその天狗がしている意味合いはよく理解していなかったが重要なものであると言う事は分かったので渡しに行く事にした。門にな立てかけているその箒は響子の代わりに門を守っていた。

ドタドタと大きな音が響いている白い壁に囲まれた場所に立つて

いる寺では誰もが冷たい目をしていた。だが、修行の身であるためにそれでも動かずに忍耐強く励んでいた。命蓮寺で修行している尼僧には伝わらないのだろう。少しだけ襖を開けてまた閉めていた人がどうしてそのような行為を行うのか。

「聖様、やっと見つけました。」

先ほど門番をしていた幽谷　響子は襖を少しだけ開けて中の様子を見てから急に大きく開けるとそのように述べた。キョトンとしている聖と呼ばれた住職でありながら修行僧に負けじと修行に励んでいる途中だったのだが状況が怒る気にはなれなかった。

「どうされましたか。そんなに慌てて。」

その人下に敷いていた座布団から立ち上がるとシワついた服のシワを伸ばしてから響子の元へと近寄っていた。金色の髪に紫色のグラデーションを施した髪の色をしていて白衣に黒色の羽織ものをしている女性で前の方が大きく開いているがそれ以上にはならないように黒い紐で止めていた。

「何か重要な紙をもらいました。見てください。」

相変わらず大きな声で元気に言っているので聖は少しだけ目を閉じて我慢しながら聞いていた。だが、聖は手に持っていた少し折れてしまった一枚の紙を見てから全員を集めるように響子に伝えた。

響子は元気に二つ返事で答えるとドタドタと廊下を走りながらそれぞれ見つけていた人を集めていた。

その間に聖は少し考え事をしていた。どうしてこのような事をしようと思ったのか。何もかも吹き飛ばされた焼け野原のようになってしまったようで何の言葉も出さなかった。いや、出せなかった。聖は全員が集まるまでは何も話すような事はしなかった。

「皆さん少しだけお時間をいただけませんか。」

聖は自信がなさそうにしていた。それを見ていた修行僧も反応に困っているのか苦笑していた。

「見てほしい記事があるのです。」

聖は霧を抜けて視界が開けた時の気持ちのままに一枚の記事を見せる事にした。其処にはこれまでお尋ね者として貼られていた人相

がくつきりと映し出された写真が掲載されている記事で遂に管理者まで動き出したと言う話だ。そして捕まえた報酬というのは法外なものだった。

「管理者としての新たな地位とその際に必要な道具を用意する。これはどういう意味でしょうか。」

黒色の髪と金色の髪が混じっている髪型をしている人はそのように言っていた。毘沙門天の弟子である。

「これは凄い人間になったね。流石だよ。」

白い帽子を被っていて海軍のような服装をしている人は先ほどの発言に答えるような事なく話していた。

「私は少し発言は控えます。」

一歩引いたような位置から静観をするつもりらしいその人は青色の髪をしていて紺色の頭巾を被っている人だった。

青年とは以前に会っていて交戦した経緯から私情が混ざるのを恐れているようでその場では何もいうようなつもりはないらしい。

「この件については私は妖怪と人間の両方が幻想郷を刺激するようにしたいと思います。その事に異論はありますか。」

聖はここに居る人達に聞いていた。その答えは基本的に賛成であるが何故そのようにするのかは誰も知らなかった。何か恨みでもあるのなら別だがあまりそのような事に無縁そうな聖はどうしてこのようにするのかは理解出来なかった。

「聖様、どうしてそのような考えを持ちましたか？」

毘沙門天の弟子である寅丸 星は聞いていた。

「それは頼まれた事です。先日ここへと来た時に話していた事でした。私は自分の願いを成就したのでその話にのる事にしました。」

「あの人は今は幻想郷を引っ掻き回した悪人だ。どうして肩を組もうとする。」

紺色の頭巾を被った人は何かを知っているように鋭い声で返答した。それには誰もが驚くが尊敬していたからこそ出てくる声のように思えた。

「あの人には善や悪といった概念はないと思うのです。だから私は協

力してあげたかったのです。」

「何も知らない。聖様は何も理解していない。」

「そうでしよう。そうでもなければ封印されるような事はなかったと思います。」

聖はそのように言っていた。その声には何の力もなく弱々しいものだがそこまで自信を無くしていることがどうにも引つかかる。

これからも長く悩む事になるのだろう。それでも前には進んでいく。置き去りにされることも抜かされることもない。

第29話

幻想郷を揺り動かしたある男の行動とその結果は人里にまで届いていた。夢見る人里の人々は皆が叫び回っていた。それとは引き換えに悲観的になり人里での出来事には何も干渉しようもしない現実を知る者もいた。前回の異変での人里での戦闘時に記事に掲載されている写真の男の人相がよく似ているからだ。

天狗も稼ぎ時とばかりに多くの新聞を置いていったがそれでも基本的には見たことのあるような顔をしている男だった。いや、何枚もあるから疑念が確証へと変貌を遂げたらしい。それだけではないかもしれないがそうなるということなのだろう。

「お前たち、これ以上の暴動は許さない。大人しくしている。」

勿論この騒ぎを悲観することもなく騒ぎに参加することもなく調和を図りたいと考えている人もいる。

その人は青色の服装をしていて奇想天外な服装をしていた。銀色の髪で青色のメッシュを入れた長い髪の上には六面体と三角錐を合わせたような帽子をかぶっていて赤いリボンのその上に乗せていた。そして白いレースがスカートの下から出ている。見るからに何かあるような感じはあるが別にそういうようなことはないと思う。頭がかたいみたいなのは言っていけない。

「慧音さん、それはないですよ。これにはちゃんとした動機がありません。見ましたでしょう、今朝の記事。祭りでしかありませんよ。」

「これは何か裏がある。貴様のような馬鹿の亡骸を見たくない。」

慧音と呼ばれたその人は集団で騒いでいる人に注意していた。そして浮かれ足立っているのを止めようとしていた。危険だからという話ではなく何が起ころのわからないからというだけであり現状では判断が付かないからだ。既視感のある騒ぎに慧音が自分の能力を使用したのがそれはまだ控えておくことにした。

「そんな弱く見えますか。アンタのことは信用しているから色々こちらで準備させてもらうだけですよ。」

「お前たち、今はそんな話をしているのではない。」

慧音はこれ以上話すようなことはなかった。ここで止めておくのが一番良いだろうが現状解決するような手段も見つからないので時間が解決させてくれるのを待つしかない。慧音は誰も被害を被らないのを願うが届かぬ祈りだと気付くだろう。

人里のある場所では人里の人々がその場に座り込んでいた。その人たちは周りにいる騒がしくしている人たちとは違い人生を悲観して自分から命を絶とうとしているようにしか見えなかった。それほどに現実に打ちひしがれているのかもしれないが実際にはどこまで気持ち強いのかは人それぞれである。

そんな人たちの前に一人の小人が立っていた。

「今こそ立ち上がるのです。これは弱き者が立ち上がるために用意してくれたステツプなんです。少しだけ頑張りましょう。」

薄紫色のシヨートヘアーをしているお椀のようなものをかぶって力の枯れきった金色の小槌を左手に持ちながら人里で現場に悲観して立ち上がるうにない人のうちの一人に話しかけていた。

「そんな事言ってもあんな怪物を倒した奴にどうやって勝てばいいんだよ。」

「それは一人の力で考えているからでしょう。まだ希望というものはありますよ。諦めなければ誰かに拾われて助けられる事もあります。こんな私ですが一緒に戦いましょう。」

「そんな出鱈目なんて聞いていられるか。俺はもう人里に居るのも嫌なんだ。周りはとても騒がしい。」

「それは皆がやる気がある証拠です。小人の一人に負けるほどの力しか持つていないのですか。私は決して諦めません。」

お椀のようなものをかぶっているその小人は元気にそう言った。何の根拠もない。そして勝てるような見込みもないこの現状で負けてなどいられるのだろうか。ふとその人に響いてきた言葉はそれだった。

「分かった。少しだけ俺も頑張るよ。小人風情に人間が負けな。協力出来ることがあったら言ってくれ。」

「その言葉が私に元気を与えてくれるよ。これからは一緒に頑張ろ

う。」

赤い和装をした小人は頭に乘せているお椀を左右に揺らしながらまた何処かへと進んでいく。そんな凜々しい後ろ姿を見てその人は動き出した。衣服を地面に擦りながらも立ち上がるとその小人をつまみあげていた。そして自分の手の上に乗せる。

「小人の足じゃ回るのに時間がかかる。どれ、俺が運んでやる。」

「有難う。助かるよ。」

人の手の上で尻餅をついていた小人は満面の笑みでその人の行為にの応えることにした。

そしてその小人の同じく人里の人々を焚きつけていた人がいた。

その人は頭に大きな白色のフリルをつけた赤いリボンをしていて黒髪であった。巫女らしくそれらしい服装をしていて赤色で包まれていた。言わなくても分かるだろうが新聞記者の前で今騒ぎとなっている件を話した張本人でもある博麗 霊夢だった。

霊夢は記事が人里全体に行き渡る頃を見計らってその場に現れていた。何の目的なのかはわからないがそれでも何かあるのだろうと周りには人が集まっていた。その人たちの心の中は完全にはわからないが文句を言いたい人や感謝を伝えたい人、それとはまた違う感情を抱いている者も居ると思う。その中で博麗の巫女として人里の人々を牽引していくと思われる霊夢は少しの間だけ何も話すようなことはなかった。最初に霊夢に気づいた人が前に立ってから何分かった頃だろうか。霊夢はゆつくりと口を開いて言葉を紡ぐように話し始めた。

「人里の皆さんは今朝の新聞の話題はどのように感じましたでしょうか。沢山言いたいこともあると思いますが一つだけ絶対に伝えたいことがあります。一人一人ではとても弱い力ですが全体で結託して立ち上がり続けるのであれば私は降伏するでしょう。」

ゆつくりと伝えられたその巫女の言葉には誰もが興味を示していた。その理由は簡単なもので話している人が巫女だからというだけだった。しかもそれが結界の管理をしている神社の巫女ともあれば

話は大きく変わる。

「ですがこれは幻想郷全体に行き渡っています。でも悲観しないで。人里として団結して一心に目的に向かうのなら負けることはない。協力するというなら管理者から何かしら報酬が得られるでしょう。ですが無償では渡せない。どれだけ底力を見せてくれるのか。それにかかっています。」

霊夢はそれだけ言って空中に浮き上がるとまた何処かへと向かっていった。

「そのの兄さん。俺は永遠亭の者だが一つ試して欲しいものがある。悪い話ではないはずだ。」

「ウサギさんがやっているところか。最近は人手不足になったかい。人気だね。ところでここに居る理由は何かあるのかい。」

「単に休憩中だよ。そこでアンタが通りかかった。話しかけない道理はない。そうだろう。」

「一つ貰おう。どのような効果があるんだ。」

「何、増力剤だよ。そこまで効力はないかもしれないが感想が欲しい。夜に飲んでみてもいいかもな。」

「分かった。師匠にはいつもお世話になっていると伝えて欲しい。」
「毎度。」

その男は笑っていた。不気味にそして狂氣的に。

第30話

それなりの人数の人里の人々は燦々と照り続ける太陽の下で自分
に出来るような事をする様になった。

ある者は戦いに備えて素振りを一心に行い、またある者は休息の際
の食事を摂れるように準備をしている者、食材をどこからか仕入れる
事や武器や防具を作り出す者。性別、性格、出来ることは違えど皆が
一丸となつてお尋ね者を捕まえるための準備を進めていた。

「なんか、最近眠れないんだよな。」

ある人里に住んでいる男はボヤいていた。黒髪で乱したその髪が
運動した後であることを示していた。一通り素振りを終えたらしく
布で額から滲み出す汗を拭き取りながら容器に入れられた水を口の中
に入れる。そして相当喉が渴いていたのかゴクゴク、と大きな音を
立てていた。そして満面の笑みで空気を逃していた。力のない大き
な声が辺りに響く。

「あまりそうには見えないな。」

同じく一通り終わらせたらしく隣に座っていた人は会話を続ける
事にした。確かに目はパツチリと開いていてあまりそのようには見
えない。何かあるようには見えないが本当に何かあるのかは分かっ
たものではない。

「それはいつも通りって事か？」

「見た感じはそうだな。変わったところはなさそうだ。」

「最近毎日のようにこのようにしているから完全に疲れが取れないだ
けなのか。」

「そうなんじゃないか。俺は先に始めているぞ。ゆっくりとしてお
け。理由を話せば分かってくれる奴はいるさ。」

薄く髭を生やしている話しかけた人よりかは年増の雰囲気のある
男性は立ち上がるとその調子で武器を振り始めていた。

「今日は早く寝てみようかな。」

乱れた黒髪を手で軽く直してからもう一度始めようとした。

此処では模擬試合として戦ってもらえる場所で竹刀などの人を

切ったりするような事のない武器に限り使うことが出来る。

切磋琢磨しながら成長していくがそれがどこまで意味を成すのかは誰も知らないことだ。それでも自分がやれそうな事があるので一心不乱にするだけだ。

「負けられない相手がいる。今日中に勝つてみたいものだな。」

楽しそうに言っているその人はもう一度竹刀を振るところから始めていた。

人里の中心地。この場所では多くの人達が練り歩いていた。移動するだけの者や何かを買い求めている者。そして拠点として握り飯を作っている人もいた。

桜の時期はもう終わって葉桜へと変わっていく。流石にその時ばかりは人里の人々も妖怪も分け隔てなく執り行われていた。それは博麗の巫女が行ったもので人妖が結託するように促したものである。親睦会のように開かれたその会場では皆が和気藹々としながら桜を見ながら酒を飲んでいた。

その時期になったが一向にお尋ね者の影も見つからないので不信感というのはどうしても募ってしまう。それでも己が役割のために日々を過ごしていた人々はその中で頑張る事にした。

「殺せ。」

そんな皆が日々を生きていく人里の中心地で一人の男性がそのように言っていた。しかも強い口調で視界に入り次第そのように言っていた。誰も相手にするような事はなく煙たがれていく男はその場で自分の首筋を掻きむしっていた。

その掻いている箇所からは血が滲み出てきたところで勇気ある人がその手を止めた。それでも強く抵抗して殺せ、殺せ、と意味もなく強い口調で言いながら暴れていたので三人がかりで抑えておく事にした。

その人の目は血で充血していて常に涙を流していた。人間として生きているようには見えないその人は目を大きく見開きながら三人に上から押さえつけられていようともなお暴れていた。

首筋や頬からは掻いた跡から血が滲み出ていた。痛々しい見た目をしてるがそれでも諦めきれない願望があるのか三人を払いのけて目の前にいる人から腰に携えている刀を奪っていた。

これが火事場の馬鹿力とも言えるのだと思う。男を抑えていた三人は啞然としながら抵抗するようなことも出来ずに静観しているしかなかった。

そして目の前で刀を盗られた人もあまりに突然の出来事に抵抗することも許されなかった。

やがて男は大きな声を出して自分の腹を刺していた。力強く刺したその刀が背中から生えていた。血の色で染められた呪われたその刀は天に向かってそびえ立っていた。痛みに耐えているその声が漏れ出した時にはもう遅かった。周りにいた人からはそれぞれの反応を示していた。黙りこくる人もいれば、状況が理解できずにただただ泣き叫ぶ人。更にはその場で尻餅をつけ始める者までいた。

「まだまだ！まだ足りない。」

力を入れて割腹させた男は更に刀を自分の首に当てていた。もう十分なのだが止まるような事はなかった。刀を両手で押し込むように構えた男は其処から自分の力でその刀を地面に突き刺そうとしている。左腕は刀身に乗せられていて右腕は柄の上に乗せられていた。

ズバツ、とどこからその力が出たのか理解できないほど綺麗に切り落とされた頭は地面に落ちてから暫く転がっていた。

その顔は苦悶の表情など浮かべていなかった。

恍惚とした楽しい表情を浮かべながら言い知れぬ達成感に身を打ちひしがれていたと思われる。

先程から続いてそのような惨状となってしまうた。その手に止められる事もなく血を流して地面を汚す男は誰からの手も差し伸べられる事もなかった。故に誰からも助けられるような事もなかった。即死以外ありえない姿をしている。

それを見ていた人々は何も言葉は出なかった。出たとしても聞き取るような事はできない男に似た癡狂して精神は制御できているようには見えない声だけ。その場に状況を把握出来たものは居なかつ

た。

その後、その場は自警隊のおかげで片付けられる事になったがその原因がわからない以上は誰も手を出す事はできなかった。何があったのか、原因を探る必要がある。これが異変と呼べるものであるのか、どうか。そしてその脅威はどれほど大きいもののだろうか。それがわからない限りは動く事は許されなかった。

「兎に角何があったのか探るぞ。」

自警隊の隊長らしき女性はそのように大きな声で強く訴えていた。その声が解決するまではまだ遠い。

侵略者と勝利の剣

第31話

先日発生した人里に住んでいると思われる一人の男が街中で自分の首を切り落としたその件について上白沢 慧音率いる自警隊は調査を進めていた。

しかし、これと言った証言や証拠と言うものはなかった。そもそも口を閉じたまま答えない者や幾ら自警隊とだとしても口を出したくないと暴力を振るう人までいた。だが、それも仕方がないことなのかもしれない。それだけ心を抉る事件となっていたのだ。

人間のみならず妖怪、神、などその種は多くいる。そしてそれぞれに経緯や種があり多種多様な種族が混ざり合って過ごす幻想郷の住人でさえその事はヘラヘラと笑って過ごすようなことはできなかった。そして困り果て、万策尽きたので解決の方は博麗神社に住んでいる巫女へと委ねられる事となった。

寂れたと言う一言に尽きる幻想郷の東の端にある博麗神社で一人巫女が過ごしていた。人里の人々を中心とした一つの目的に突き進もうとしているがどうやらここで自堕落な生活を相変わらず送っている巫女は今日も襖を開けた小屋の屋根の下で寝そべっていた。

白いフリルのついた赤いリボンを付けている黒色の髪をしている。そしてどこを向いているのか、何を考えているのかさえわからないような目をしていて口は紐を結んだように動くような事はなかった。赤い巫女の服を身につけていて袖はまた別のようで肩、脇が見えるようになっていて。片膝を上げていて女性としての面目というのは一切ない。それでも巫女としての実力はあるので文句は言えないというのが本音である。

「思考停止したような目をしてどうしたんだぜ？」

「何よ、良いじゃない。」

博麗神社で巫女をしている博麗 霊夢の前に友人である霧雨 魔

理沙が現れていた。暫く気付かなかったと思われるがそれでも微動だにしないその度胸は男にも優っているのかもしれない。

黒い服装をした魔法使いの格好をしている魔理沙は何か不思議そうにして霊夢の前に立っていた。何も知らないように映った霊夢のその態度には友人として伝える事にした。

「人里で起こった件については何か知っているのか？」

「何が起きているのよ。人里なんてもう行きたくないわ。」

霊夢はどうしても行きたくない理由があるのか魔理沙の発言を先読みしてなのか見るからに不機嫌そうにしている。それだけ人里の人々が行なっている徒党を組むのも嫌い、努力を嫌う霊夢にとっては行きたくなくても仕方がないとさえ思える。

「そう言うなぜ。実はある男の人が発狂しながら自分の首をこうしたそうさ。」

魔理沙は手を使って首筋の辺りを手刀を作って軽く当てる動作をしていた。霊夢はそれだけの何が起こったのか大体把握できたらしい。

「それでその人は望んでやっていたの。」

霊夢は素早く立ち上がると魔理沙の話をより詳しく聞こうと身を寄せるように縁側に座っていた。ポカポカとした陽気の春日和だがもうそろそろ夏になっても可笑しくはなかった。

「ああ、現場を見ていた訳ではないが笑っていたらしい。」

魔理沙はあまりにも衝撃が強かったのか話したくはなさそうにしていたがそれでも話しているのでそれだけ問題視されているのだろうと霊夢は推測した。別に人がどうなろうと知らないが幻想郷が危険に晒されているのならば脱するように活動するのが博麗の巫女としての役目である。

「それで何かあったの。」

「それからはまだ大きな事は起きていないらしいぜ。だが原因が謎なので巫女として霊夢に回ってきたと言うことだぜ。」

魔理沙は元気良さそうに話しかけていた。いつも通りと言えるのだろうかその時ばかりは空元気だと思われる。そうでもないと思えるのに

かけた魚の目を魔理沙はすることはない。霊夢はその辺りの洞察力は高いらしく魔理沙の表情の変化を読み取っていた。

「そうね。今回は行かないわよ。一人だけなのでしよう。それに本当かどうかも分かっていない。それなら行く理由はないわよ。」

冷たく遇らうように答える霊夢だがそれはもう仕方がない事なのかもしれない。

「慧音から聞いた話だ。自警隊の長を務める彼女なら信じるしかない。そうじゃないか。」

「そう言うことしておくわ。」

霊夢は軽くそして短く答えるだけでその他には答えるようなことはなかった。別に絶対に行かなくてはならないというわけでもないらしいと勝手に判断したのか動くような気配は一切なかった。

「話は変わるが、何があったんだ。」

魔理沙はまた違うことを話し始めた。霊夢はだいたい何を聞きたいのかは推測を立てたが自らの口で話すようにさせていた。

「何の話？」

「お尋ね者の話だぜ。何をしたら管理者の逆鱗に触れるようなことでしたのぜ。」

「それは直接聞いた方が早いわよ。青年に聞くかそれとも八雲 紫に聞くのか。それは魔理沙が決めなさい。」

「霊夢は何も知らないのか。少しは悲しいとは思わないのかぜ。」

「生憎、私はさほどその様には感じないわよ。」

霊夢は澄ました顔をして魔理沙の方を向いていた。

「如何してだぜ。」

「何も出来ないから。見たでしよう。正邪とのあの戦闘を。私たちは簡単にやられたけど青年は全く動じる事なく倒した。その現実から目を背けてはいけないわ。捕まえるのには相当な実力を必要とする。だから幻想郷の彼方此方で努力する人達が居るのよ。」

「答えじゃないぜ。」

魔理沙は悲しく聞いていた。霊夢のその返答はどうにも噛み合っていないようにも感じる。それだけだった。

「つまり魔理沙は被害者でしょうけど私も被害者なのよ。そして管理者もね。青年の布石に気づく事なくその手の中で踊らされていた。悲しくはないわよ。これから何をするのかが重要だから。ワクワクしているわ。」

「そうなのかぜ。幻想郷を巻き込んだあの記事はわざと送られたものだったか。だが、その目的は何かわからないということか。」

「そう。アタフタしていても青年の手の中で踊らされるだけになるのよ。こうしてのんびりと暮らしていれば良いのよ。」

「人里で起こっていることにはどう説明するんだぜ。」

「簡単よ。あの人が無駄な事はしないわ。それに戦力を減らすなんてあり得ないわよ。その人は何か嫌な事でもあったんじゃないの。」

澄ました見通しているようなその目をしている霊夢に魔理沙は身を一步引かせていた。

第32話

先日の異変以降、少し落ち着きのあったまだ穏やかに過ごしていた人里では言い知れぬ恐怖心に煽られて揺れ動かされているのは目に見えて進んでいた。

一枚岩ということではないが日を増すごとにそのように見えてくるのは人間としてだけではなく生物として当たり前前の姿なのかもしれない。

目には見えるはずもなく着々と侵食を続けるその狂った性格へと変貌を遂げていた。もう誰にも止められないかもしれない。それだけ自警隊を含めた幻想郷の総意となる事もそう遠くはない未来で起こる事かもしれない。

「最近、寝れなくなつてな。どうしたものかね。」

一人の人里の住人がそう呟いていた。確かに目の下にはクマのようなものがあるのでいう分に間違っていないものと思われる。

「前にも言っていないかったか。いや、それは他の人だったような。」

それを聞いていた同じく人里の住人である男がそんな事を口にする。今日は試合を終えてひと段落ついたので少し休憩がてら地べたに座っている事にした。

「お前さんがどのような過ごしていたかは知らないが誰かに言ったことは確かだ。ん？そんなよく聞く話か。」

「最近をよく聞く話だな。アンタからしか聞いていないというならそれもそれで心配だがどうも可笑しい。」

「普通ならそんな事はない、はずだ。」

疑問に思いながらその先を急いでいるかのようになつたと男は離れていく。何か気付いたことがあるのだろうか。それとも何か他の約束とか思い出したのか。それはどちらかは本人にしか理解できないことだった。

「つたく、何をそう焦るようなことがあるのか。」

残された男はそう言いながらひと段落ついたのでもう暫く地べた

に座っているつもりなのだろう。だがその手から伸びる根がどこまで届くのかはまた別の話となる。

人里の東側。地面に降りた巫女と魔法使いはその場の空気を確かめるように息を吸ってから大きく長く吐いた。一旦区切りをつけただけなのだろうが実際のところはそうでもないと思われる。

「血生臭いがするぜ。」

「そのようね。何が起きているのかしら。」

「今日は来てくれて助かったぜ。」

魔法使いはそのように述べる。白いリボンのついた黒色のとんがり帽子がトレードマークの黒色の服装をしていて箒に跨っていた。それだけ聞くには気になる事もあるが此処では何も問題はない。

「何やら大きなものが動いているような気がするのよ。」

勘の鋭いらしい巫女はその言葉にはそう返す。赤いリボンを付けていて黒い髪が特徴的な赤い色の巫女服を着ている。どの様にそう感じたのかはきつと元々持っている妖気を感じるということに起因と思われる。本人としては要らないものだが無くては困るときもある。るのでそのような時は十二分に発揮している。

「物騒な事件でも起きそうなのか。」

魔法使いは跨いでいた箒の柄を右手の中に収めると人里の中へと入っていった。別に飛んでいけないと言う規則はないが妖怪だと見間違えられると後々面倒になるのでそのようにしている。別に巫女と一緒にいるので何ともないだろうがそこは魔法使いの配慮という事なのだろう。

「ええ。何かは分からないけど確実に何か起きようとしているわ。死にそんな人が多く居るわよ。」

「何か原因は分かっているのか。」

魔法使いはそういう風に不審そうに恐る恐る聞いていた。怖いからということではないが不安なのだろう。そんな気がする。それに対して巫女はしばらくの空白の時間を作り上げていた。

「何も分からないわ。どうして自分から命を断とうなんていう考えに

至るのか。そして魔理沙の言うように楽しそうにするのか。」

巫女はその様に遠くを見ながら答えていた。そして言い終えてすぐに地面の方を向く。其処には何も無いはずだが何かある様に錯覚するほど一点をじつと見つめていた。

「そこが気になるか。私もそれは気になっていた。何か嫌な事でもあったのか。それともそうする様に操られていたのか。気になるところだぜ。」

魔理沙はその様に独り言のように言葉を連ねていた。何か意味があるようにもないようにも感じるが選択肢の一つとして頭の片隅に置いておくのも悪くはないと思える。巫女はそう思いながら表には出すような事なく先へと進んでいた。

「青年はこれを予感していたのかしら。」

巫女はそう呟いた。

二人は人里の中心地までは一切の会話をしていなかった。血生臭い匂いがすると言った魔法使いの一言は合っている。だが、それに見合うような光景ではなかった。いつも通りの風景で日常と何も変わらない生活を送っていた人里の人々は今日も変わる事なくそれぞれが行えることに従事していた。その光景がどうしても滑稽に見えてしまう巫女は話す気にはならなかった。

それに対してその雰囲気を感じ取っていた魔法使いは話しかける勇気を出せずにそのまま歩いていた。特に変わることをない光景。そして何か変わっているように見えてしまう人里。不信任感を煽られている魔法使いは喉元で詰まっている言葉を出すような事は出来なかった。

「魔理沙、何か変じゃない。」

「そうだな。」

この緊張感あふれる空間を崩した巫女の言葉に魔理沙は素早く慌てたように答える。何か珍しい事もあるもんだな、程度で済ました巫女はあまり気にするようなことはなかった。

「誰の目を見ているも生きている様には見えないのよ。」

巫女は吐き捨てる様に小さな声で言っていた。それに答えようと

する魔法使いの元にある男性が近づいていく。その人の目は確かに狂気に満ちた眼光で目つきが悪い様にも見えなくもない。そしてギリギリとした手入れのされていない刃物を持っていた。

瞬時に判断した魔法使いは一步だけ引く。その足元にはあるものが刺さっていた。当たらない様に投げたのだと思われる。

「何だぜ？刺すなら手に持っていた方がいいだろう。」

魔法使いは冷静に答えていた。そして何をされるか分からないので警戒する様に身を構えていた。

「殺せ。俺を殺してくれ。」

大きな声で悲観した様に言い放つその男性は膝から崩れ落ちながら懇願する様に手を合わせていた。祈りを捧げる様なその綺麗な姿には啞然としていた魔法使いだがすぐにおかしい事に気付いた。

「それは無理だぜ。人の命はそうそう簡単に捨てていいものじゃないぜ。」

「お願いだ。俺を殺してくれ。もう嫌なんだ。」

「何か嫌なことがあったのね。言いなさい、聞いてあげる。」

横から現れた巫女はその男性に視線を合わせる様にしていた。何か意味があるのかと聞きたくなるが特にないものだと思われる。それほどに一心にそうしてほしいとしか思っていない様で男性の方は何も反応は見せない、そして何か語ろうとしない。口を持たない怪物の様なその態度にはどうしたらいいのかな二人は分からなかった。

「もう良い。自分でやる。」

「辞めなさい。」

男性は投げっていた刃物を手に取ろうとしていたがそれは巫女によって阻止された。気絶する様に地面に倒れこむ男性を見て一安心していた。だが、それ以上に不安なところが目に見えたのでどうするべきか思案する事になっていた。二人は目配せをしながら言葉とは違うコミュニケーションを取っていた。何か話す様なこともないのだから。

「ウワアアア！」

男性は急に立ち上がると自分の首に刃物を刺してグリグリと抉る

様に動かしていた。その有様は見るに耐えないものである。自分から命を落とそうとした男性は見ていれば分かるほどに何の手の施しようもなかった。蘇生魔法が扱えるならまだしも誰も使えない。

その様子を見て二人は絶句という形で反応を見せていた。

だが、それでも人里はいつも通り機能している。巫女は後々考えるところでも無いことだと気づいた。

第33話

何も無い大地に真っ平らの様な感じがする大地が広がっている。その上には草は勿論のこと、枯れ木というものもない。当然ながら水というものはない。

辺りには正気が立ち込めていてとても人間が過ごせる様な環境ではない。そして水もなく食べ物もないこの環境の中である男はピクニツク気分で焚き火をして休憩をしていた。

その男はボロボロとなっていて衣服で所々傷が付いて空いている格好をしていた。髪も頭の手入れをしておらずボサボサな髪をしていて全体的に同じ様な長さをしていて目を髪によって隠れているが確実に見えないということではない程度だった。水もないので体を洗うことも許されないのでそれなりに匂いが付いている。

人間が過ごせないだけで他の生物は生きている。その肉を狩っては焼いて食べている。調味料も一切無いので素材の味を楽しむ事ができる。

此処は聖 白蓮が封印されていたり、仙界と言って豊聡耳 神子が作り出した世界のある魔界と呼ばれる幻想郷とはまた違う場所である。帰る手段も特になければ行く手段もあまり無いという世界で救いというのは特になかった。

幻想郷を引っ掻き回した拳句、逃げ出した青年は自分の剣を地面の上に置いて柄を握りながら今日の食事を摂っていた。いつ食にありつけるのかも検討もつかず、またいつ喉の渴きを癒せるのかも同じなのでありつけた時には摂れる限りは摂る様になっている。そうらしい。

ピクニツク気分の青年の横に倒れていた魔物らしき影は腹の辺りを抉られていて意外と綺麗に切り出されていた。そして垂れている血を啜りながら十分に焼けるのを待っていた青年は懐から小刀を取り出して焼きながら食べやすい一口程度の大きさに切り分けながら豪快に食べていた。別に感想というものもないがそこら辺にいる様な物とはまた違う味がすると思える。空腹の中では食べれるものは食べる。

倫理観がどうのこうのと言われようとも死ぬか食うかの世界でそのようなもの理屈は通らない。青年はそれを自然に受け取って此処まで過ごしていた。此処まで数ヶ月、幻想郷では秋となるまでその様に過ごしていた。

魔界にも一応集落らしき場所があつたがその情けをかけられない様に魔界を練り歩きながら毎日を楽しく過ごしていた。

いつになれば幻想郷へと戻れるのかは未定なのだが青年は別にこのままでも良いとさえ思つてはいない。いつかは戻りたいと思いつつ日々を楽しく過ごす矛盾しかないか生活を青年は魔界でこれからも過ごすのだろう。

それに間違いはない。だが、迷いというものはあるが素直に戻れない事もあり、頼んであるものもある。もう暫くは帰りたいと嘆くことはないだろう。

第34話

秋の季節となり気温的に過ごしやすい季節となっていた。何をするにも丁度いい時期なので読書に夢中になる人や作品を作り上げる人もいるかも知れないし、釣りなんか始める人もいると思われる。

妖怪の山と呼ばれる幻想郷の北側にある山では紅葉が紅く染まっ
ていて綺麗な光景となっている。観光に来る人もいるかもしれない
がそれには時期が悪かった。人里では謎の病が蔓延していて、妖怪の
山は戦力増強のためにピリピリとした空気感を出している。しかし、
土着神の影響力は衰えることはないことからきつと信仰心は失って
いないと思われる。

「次の方、どうぞ。」

襖を開けて手を招く女性がいた。その人は金色の髪に紫色のグラ
デーションをした髪の色をしている。背中は大部分を隠せるほどで
少しだけウェーブがかかっている様にも見えなくはない。そして無
地の白色の服装の上に前の大きく開いているが紐の様なもので止め
ている黒色の上着の様なものを羽織っている。裾の長さは足先に届
くほどである。

妖怪の森と呼ばれる物騒な所であるが灯籠を灯して道を分かりや
すくしているのではどの様な時間帯でも対応出来ている。又、襲われた
時の避難場所としても使われる事もある。そうなる理由は道の先にあ
る命蓮寺の住職がとても包容力があり誰でも迎え入れてくれるか
らだろう。それとも優しいような見た目が人気があるのかもしれない。
「どうぞ、お座りください。」

しかし、今日はどうやら違うらしい。淀んだ目をしていて目の下に
クマを作っている妖怪がその場所に訪れていた。どうやら十分に眠
れていないので救いを求めて命蓮寺へと訪れている。住職である聖
白蓮は優しい笑顔で妖怪を迎え入れていた。

「今日は何か相談をしたい事があるのでしようか？」

優しい声と同じ様な表情で包み込む様に話す聖。それに紐解かれ

たのか少しだけ口を開けた。

「最近眠れていない。」

その妖怪は黒い服装をしていて夜陰に乗じて何かをする為の格好をしていると思われる。だが、眠れていない所を見るとそれさえもままならないのだろう。人喰い妖怪であればそれは死活問題というものである。これから生きていく事ができなくなる。

「何か原因というのはありますか。」

「申し訳ないが分かっていたらばまた違う場所へと向かっていたと思われる。」

その妖怪はそう言っていた。声は小さくなっているとしても聞き取りづらかったが聖はよく耳を澄ませて聞いてあげた。

「それは困りましたね。分かりました。座禅を組んで心を清めましょう。」

聖は怖がらせない様にゆっくりと立ち上がると妖怪も連られてなのか同じ様に立ち上がっていた。聖について行くように妖怪は命蓮寺の縁側を歩いていく。

聖が止まったところは命蓮寺の出入り口が真正面に見えるところだった。妖怪は座るように促されて言葉のままにそうするようにしていた。妖怪は促されるままに片足をもう片方の太腿の上に乗せていた。

右手の上に左手を置いてから自然に力を抜いて左足の上に右手を置いていた。そして親指を自然に合わせて貰うように指示されたので抵抗する事なく行う事にした。

背筋をしつかりと伸ばして両肩の力を抜いて頭の頭頂部を天井に突き上げるように顎を引いていた。そして目は見開く事もなく閉じる事もない自然な開きのままで座るようにしていた。

様々な思いが浮かんできては消えていく。だが、それに身を任せるように力を抜いて置くように言われたので言われるままに妖怪は座禅を組んでいた。聖も全ては教えないので効果はあるのかはどうかは分からないがそれでもしなないよりかは楽になるのだろう。

辺りは静けさに包まれていて妖怪のその中に入り込むように呼吸

をゆつくりとしていた。よく住職から指示を飛んでくるがそれにか文句をつけるようなことはしなかった。妖怪にも何か実感というものがあるのだろうか。それとも何か違う理由はあるのかもしれない。

「それでは終了しましょう。」

時間にして半刻だろうか。穏やかなそして無意味とは言えない静寂の中で自分を見つめ直していた妖怪は幾分かスツキリとした表情をしているようにも思えた。何か理由はあるのだろうかそれが分かるようになるのはまた後の話になると思われる。

「有難うございました。」

妖怪は座禅を組みながら鼻の前の三寸ほど離れた距離に手を合わせて肘を軽く張り一礼していた。これで一連の命蓮寺での座禅は終了となる。

「どうでしょうか。スツキリとしましたか。」

聖は暖かい飲み物を差し出しながら妖怪に聞いていた。

「はい。」

短い返事だったがそれでも力のこもっていて心の中にあつたものは少しは取り除けたのだと思われる。聖は満足そうな表情をしていた。妖怪は座禅を終えて出されていた暖かい飲み物を飲んでいった。スツキリとした味をしているが柔らかい雑味のない茶で色は薄めだった。それでも何か深みがあるので何か特別な工夫をしているのかもしれない。

「これからもういらして下さい。お待ちしています。」

「有難うございます。これからは足を向けて寝ることは出来ないかもしれない。」

妖怪は湯呑みを持ちながら答えた。縁側からは足を放り投げている楽な姿勢である。来た時よりかは柔らかい表情をしている。聖はいつまでこれが続ける事ができるのか違う意味合いで考えていた。

第35話

季節は移り変わって段々と凍えてくるような季節へと変わっていた。湿気が無いためかスツキリとした雲のない晴れを見せた幻想郷。その下では似つかないほどの惨状へと変わっていた。

人々は目には曇った物がかかっているように誰かが目の下にクマを作っていた。だからと言って誰も寝ようとはしない。何か話そうとする事もなく力を失ったように生物として生きているようには見えない。自警隊もあまり機能しておらず歯止めの効かないパラダイスへと変貌した人里の人々はイかれた目をして南西側にあるとされている命蓮寺へと歩いていった。

と言っても命蓮寺でも対処出来る人と全くもって出来ない人もいる。その境目というのは話を聞けるかどうかである。口も動かさないのでは命蓮寺の住職は何も出来ないのお手上げという状態である。そこで聖はある場所へと向かう船を定期的に送り出す事にした。

その場所とは魔界の一角にあるとされている仙界と呼ばれる場所で豊聡耳 神子が作り上げた世界である。彼女は人の十欲を聞き取る事で根底から何か暗いものを取り除く事ができる。それを行う際に口を使う必要はないので神子に任せる事で解決はできる。

少し前の話だ。神子が命蓮寺を訪れていた頃の話だ。

その頃は夏真っ盛りで燦々に輝く太陽が空の上には浮かんでいた。そんな季節の話である。

「いきなり来て失礼な話だが手短かに終わらせたい。と言うよりかは返事次第では簡単に終わる。」

金色を少し光沢感を落とした髪の色をしている豊聡耳 神子は命蓮寺の一角にある一室でその建物の住職である聖 白蓮と話していた。

「何かだけ聞かせてもらいます。」

聖は食いつく魚のようになっていた。神子は特に能力は使わずに

話を進める事にした。

「人里を訪れた時の話だがな何となく憶測ではあるがこれから嫌な事が起きようとしている。それを止める手段はあまり無いように思える。そこで君には処理出来ない人をこちらに送ってはもらえないだろうか。と言う提案をしに来た。」

神子はいきなり話を進めていた。特に挨拶などは無い。そして用件だけを伝えていた。

「神子さんには何か未来の事が見えているのでしょうか。私が答えを出す前に少しだけ聞きたいです。」

「分かった。実はここから人里の住人は自分のその命を閉ざす事になる。最初からそれに気付ければ良かったがもうそれは遅かった。此処からはその人数は増えていくだろう。その種は人間だけではなく力の弱い妖怪までもがその道をたどる事になる。それを止めるように言われたのは私と君だ。」

「そう言う事ですか。分かりました。私に出来る限りはやらせて貰います。」

とこれがある日、神子が命蓮寺に訪れた一幕である。その後はふた。で談笑した後には神子は元の世界へと帰っていった。

仙界と言う場所は行くのには特定の航路を必要とするが変える分にはどこかには繋がっているので楽なものである。

その世界には建物が一つあるだけで他のものはない。仙人が暮らす建物には修業をするための場所があればそれで別に良かった。ただ広い石畳の場所と奥には上に上がるための螺旋階段がありそれを登った先には金色のお堂があるだけだった。

命蓮寺で送り出された迷い人はここにいる仙人によって先導されて神子の元へと辿り着く。本人は大変なものであるがそれでもやらされていると言うわけではなさそうなので楽しくやっている。

「今日は人数が多いようですね。ですが青年に言われた通りにやりませ。」

神子が気合を入れたところで十人のそれぞれの十欲を耳につけて

いた大きなヘッドフォンを外しながら聞いていた。神子の能力は特殊なもので人の欲を聞く事でその人の過去を見る事ができる、そして応用すると未来まで見る事もできる。青年の場合は不十分の為に所々滑落した記憶しか見れない。

しかし、大抵の人は十欲は揃っているので気にするような必要は全くない。

神子はその住人を自分の周りに集めると自由に座らせる事にした。口は必要としないので神子は目を閉じて自分の耳を信じて人の欲を見ている事にした。

一斉に入ってくるその声を聞き分けてからそれぞれの人に言葉として説明できるように集約していた。

神子の目が開く。太陽として上に君臨する者としての風格は十分に持っている。それだけの威力とそう思わせるだけの力は持っているようだった。

「皆さんにはそれぞれの暗い過去があります。私と一緒にそれぞれ解決する事にしましょう。」

静かな声で地面から迫り上げてくるような圧をかけていた。人を奮い立たせる為の声をしていて少しだけ元気を貰えたのか幾分か来た時よりも良くなっていると思う。神子はそんな表情を見ながらそれぞれの事について話していた。

少し前の出来事からこれから起こることまで話していた。そうする事によって自分を見つめ直してもらいこれからどうするべきか考えさせる事ができる。神子は人を照らし出す太陽のような存在へと変わっていた。

「太子様、次の人達が訪れました。」

「分かりました。此方は終わりました。これから自身の力で頑張ってください。私は一切の協力は行うことはできません。それでは。」

神子は疲れた目をしていた。それでもやるからにはやるのが神子のスタンスというものだ。

神子の能力というのは本来は制限しておくもので今は常にフルパワーを發揮しているようなものである。火事場の馬鹿力を常時発動

している状態で神子自身に溜まっている疲労というのは人の目には決して見ることはできなかつた。それだけ完璧な人物なのである。

神子が力に慣れて使いこなす事ができるのか、それともこのまま潰れてしまうのかは本人とその周りにいる人の影響によって変わっていくのだろう。

「早速始めましょう。」

一切の疲れを感じさせない声で続ける神子は再び十人のそれぞれが持っている十欲を読み解いてそれぞれに的確な助言を与えていた。

それを聞いた人々は崇めるように帰っていたとされているがその真相は行ってみた者にしか分からないものである。

第36話

幻想郷も未知の病に侵されている状態となった。人里では死人が増えていき、止める事など許されなかった。這いつくばる人々は何も考える事ができなくなる麻痺してしまった人里にもう住んでいるものは少なかった。

豊聡耳 神子を崇めて、聖 白蓮に救いを求めて、機能しなくなった自警隊の長を務める上白沢 慧音に意味のない言葉をかけ続ける。もう自立する手段など無いに等しかった。人々は話すことを止めて、食べる事も眠る事をやめた。そして何かするという気力も失ったように地面に座って自分が死んでいくのを待つしかなかった。

止める手段は見つからず特効薬でさえ見つからない。気絶させても目を閉ざせば急に起き上がる。眠る事は許されなかった。食い止めようとした八意 永琳でさえ止めることは出来ない。聖や神子でさえお手上げという状態で治すということはできなかった。静めるだけで時間稼ぎにもならなさそうな感じが続いた幻想郷で生き延びている人間もいない事はない。

紅魔館のメイド長である十六夜 咲夜。魔法の森で研究に明け暮れていて情報を聞いているがそれほど真に受けていない霧雨 魔理沙。そして博麗の巫女であり博麗大結界というものを管理している博麗 霊夢。純粋な人間として生き残っているのはこの三人である。しかし、咲夜は体調を崩し始めて仕事を終えてからはベットに横になつてばかりいる。

妖力の強い妖怪は生き残っているが段々と幻想郷を蝕んでいるのは言うまでもなかった。管理者も動いていないわけではなかったが何をすれば良いのかは全くと言って見つけからず何もかもが無駄に終わっていた。

最終的には隔離を提案したがそれは巫女によって却下されている。提案した頃合いというのは秋も終わりそうな頃合いであり不特定多数の人間や妖怪を隔離する必要があるがどこで行うのかは決まっていなかった。それに隔離したとしてその後はどうするのかそれもま

た決められていなかった。

万策尽きたそんな頃にある人が博麗神社へと訪れた。

寂れていて一切の参拝客も見込めないので今日もいつもと同じように過ごしていた。幻想郷の惨状は知らないというわけではないが何ともならないので放置するのが結果として一番良かった。

もちろんそれを好んでやっているわけではない。そこだけは変わることはない事実である。

「霊夢、今日はいい情報を持ってきたぜ。」

金色のウェーブをかけた髪型をしていて黒いとんがり帽をかぶっている。霧雨 魔理沙は箒に跨って博麗神社へと訪れていた。

「何を持ってきたのよ。」

霊夢は怠そうに聞いていた。何をすれば良いのかは一切分からないので如何してもこうなってしまう。

「実は不審な人物を見つけたんだぜ。」

魔理沙は少しだけ声を高くして答えていた。別に意味はないと思うがこれで一步解決に向かうのだとしたら仕方がないのだと思われる。どれだけ頑張っても見つからなかった手がかりを見つける為にはそうする他ない。

「どんな奴よ。」

霊夢は聞いていた。真実か虚偽なのかは別として聞いておく方が良いからだ。何か切り札の一つとして持っておく分には問題ないと感じたのだろう。

「紫色の髪の奴だ。すぐ近くの森の中に居たぜ。」

「様子くらいは見に行こうかしら。少しだけ出かけてくるわ。」

霊夢は起き上がるとその場から飛び去っていた。意味合いは大体分かる。魔理沙は暫く此処で待つ事にした。下見程度に倒してくるのだろうが一人で十分だと思った。

第37話

博麗の巫女である博麗 霊夢は自身の住んでいる神社から森の方へと見回りを行う事にした。鬱蒼とした森が霊夢の下には広がっていた。特に整備もされていないと言うわけでもなくいつ襲われても文句の一つも言えないような状況なので参拝客と言うのは減る。そして幻想郷自体が機能を停止しつつあるので余計にその足は遠のいていた。

霊夢は後ろで短く結んだ黒い髪を風に遊ばせながら下の方を向いて探そうとしていたが一切見つけられるような気配はなかった。仕方がないので下へと降りていく事にした霊夢は地面に足をつける事にした。

辺りは木漏れ日によって少しだけ明るくなっていたがそれ以外の場所は暗くなっていて夜と同じように感じなくもない。視界は言うまでもなく悪いので霊夢は慎重に足を進めながら博麗神社から人里までの森の中を探索する事にした。友人の話によると紫色の髪をしているそうなのでその人を探せば良いが見たところは出会ったと言う記憶はない。そもそも人も妖怪も居ないような場所では出くわすことはなかなかないと思われる。

「一体誰なのかしらね。」

霊夢は段々と飽き飽きとしてきたのかそのように嘆いていた。これこれ十分は過ぎていたのだろうか。一向に変わらない景色には目を使う理由もなくしていたようで向けるような事もなかった。それだけ何かしていたのかと言われると別にそうでもないと思われる。

枝の折れるようなポキツ、と言う音がした。その音に霊夢ははっ、として声を出した。

「誰？」

霊夢は聞いてからふと思った事があった。そもそも答えるような愚か者はいないだろう。霊夢にとってはそれでも別に良かった。

「答えはないようね。」

袖に仕込んでおいた札を投げてどこに向かうのかを探していた。

追尾式の札を二枚投げる事で何処に逃げようとしているのかを探そうと言う事だ。兎に角音のした箇所へと思い切り投げてみる事にした。手応えというのは無いと言うわけでもない。だが、それでも空振りをした野球選手のような空虚な感覚を覚えた霊夢は足を進めてみる事にした。

その場には何もなかった。勿論のことだが、誰も居ない。それでも気配だけが何処からかするので不穏な空気と戦いながら霊夢はその犯人を捜す事になっていた。何処にいるのか、そして初めて対面するので細心の注意はしているがそれでも相手の戦力というのは未知数なので最後まで警戒は怠るつもりはない。

「そこね。」

暫くした後だった。ようやく見つけたと思われる霊夢は札を素早く投げていた。パスツ、と音がしている。札が何かに斬られるような音がした。その方角へと向かってみる事にした霊夢はそこで驚愕な光景を目にする。

袋のようなものが吊り下げられていた木が沢山あった。大きさは人が入れるようなほどで黒い袋に包まれている。中に何が入っているのかは予想できないが霊夢は明らかに嫌な事であるのは目に見えた。開ける気にもならないが一つくらいは開けてみないと此処から先へと進めないと思われる。霊夢は意を決して袋を乱暴に引きちぎる事にした。

破る事においては別に問題はなかったが開けた瞬間に臭ってくる独特な腐乱臭が霊夢に鼻を襲っていた。中に何が入っているのかは見えていない。だが、見なくて良かった。

中には首から上がバラバラになっている遺体が入っていた。そしてどうやら人里の住人であるようだがその姿は何処か綺麗に保管されていた。霊夢は何がなんやら理解出来ないように目を見開いていたが今までの優しい異変とは違う事が目に見えて分かっていった。それだけでも十分な収穫というものである。

「開けつちまったか。面倒な仕事を増やしてくれたものだ。」

黒い袋と同じように木に吊り下がっていた黒い布に覆われていた

その人は猫のように地面に着地していた。そして音もなくすつ、と立ち上がるとフードのようになっていのか頭の部分は覆い隠されていた。だが、見える限りは紫色の髪をしている。目は細めで吊り上っていて良い印象は受けない。尖った鼻と大きく開いて笑っているのか口角はこれでもかと言うほど上がっていた。

「誰なのよ。」

霊夢は持ち前のお祓い棒を構えながら左手には何枚か札を持ち合わせていた。その札は威力こそ弱いものの追尾性のあるもので相手からすれば面倒な事この上ないのだろう。

「名乗る名はない。此処で死ぬ奴にな！」

その人は急に動き出していた。だが霊夢も知らなかったというわけでもない。素早く左手から札を二枚投げた。視界の通らない暗い森の中ですしなりと札を避けた黒いマントに全身を覆われている男性は霊夢の方へと向かっていた。

何処から飛び出たのか分からないナイフを取り出していた男性は霊夢の前でそれを突き出していた。それをお祓い棒で払いのけた霊夢だったがそれだけで精一杯だった。力が強いという事ではないが何か保護されているような物があると瞬時に判断する事にした。霊夢は更に札を用意する。

「アンタは此処で倒す。良いわね。」

第38話

「やれるもんならやってみな、と。」

霊夢の投げていた追尾をする事ができる札は何をされたのかは分からないうちに簡単に斬り裂かれてしまった。後転を空中で行い、いつの間にか持っていた両手のナイフでいとも簡単に裂かれてしまったように虚しくヒラヒラと落とされていた。

「中々やるじゃない。」

霊夢は空元氣程度に応戦するように口で煽り立てた。その表情は揺れ動くことなくいつも通りなのだ。が何処か自信のないように見えるのがどうしても気になるどころだろうか。

「先に言っておくがそんな程度ではこの先やっていけないぞ。」

霊夢の目の前にいる男性は丁寧に忠告してくれた。別にそれが悪いというわけではないが此処までの感じを見てみるとどうしてもそう思われても仕方がないと思われる。男性は舌の上に逆手持ちのナイフの刀身を乗せてベツトリ、とじっくりと舐めていた。よく見ると特に掃除されていないのか舐めた跡が付いている。

「今日のナイフは美味しいな。」

恍惚とした表情で少し興奮したように答えている男性は身を低くして霊夢の方を向いていた。まるで獲物を見るような鷹の目をしていてどの動きも見逃すつもりはないという意味がひしひしと伝わってきていた。それに押されるようなことはないにしろ見知らぬ者に加えて幻想郷に危険を及ぼす可能性があるのなら尚更警戒するしかなかった。意思がぶつかり合うこの場で二人はお互いの目を見つめながらその時間を過ごしていた。

二人は一切動くことはなかった。何か動けない理由があるのか、と聞きたくなるほど微動だにしなかった。男性は何処か楽しそうにそして遊びのようにしているだけで真剣勝負というのはしているように見えなかった。

「アンタ、何処から来たのよ。」

「テメエには関係ない事だ。分かったらさっさと帰っておネンネして

な。」

男性はそうのように返した。その言葉には眉一つ動かそうとはしなかった。霊夢だが瞬きをした。いや、してしまった。

男性がその一瞬の視界の遮りを見逃すことは無かった。左脚を折り曲げて地面に同化するように体重を移動させながら右脚を地面から離して次の一步を踏み出していた。其処で思い切り足裏を地面に擦り付けて方向を霊夢の方へと変えると左脚が出ると同時に両腕に逆手持ちをしていたナイフは顔面を狙っていた。

両腕を交差させていたので霊夢のお祓い棒はその点を抑えるようにしていた。

目を潰されそうな程の近さで止められたその一撃には霊夢は肝を冷やした。後もう少し反応が遅ければ目は確実に潰されていた。その事実だけが目には映っていた。そして男性は少しだけ詰まらなそうにしていた。期待外れだったのかもしれないが流石に露骨すぎた。明らかに口角は下がっていて特に警戒するようなこともなかった。そんな表情をしていた、

男性は力なくその手を離すと右手を使って面倒そうに手を振っていた。明らかにそのような表情をしていたので霊夢はすでに激昂していた。

「何か不満な事でもあるのかしら。」

霊夢は酷い剣幕で怒っていた。その声に対して男性はため息に一つで答えていた。

「博麗の巫女だと言うから期待していたが。まあ、そんなものかね。」
男性は遂には戦う意思もなくしたのかナイフをマントの何処かに隠していた。それから踵を返して霊夢に背中を向けて森の中の木の中に潜むように歩いていた。それを見逃すわけにはいかなかったので霊夢は札をも投げられる限りに投げていた。

擦れる袖の音だけが聞こえていた。其処からは何をしたのかは到底予想はつかない、はずだった。

男性は素早く身を翻すと三枚を斬り伏せていた。そして二枚を避けて自分の後ろへと流していく。その早業には流石の霊夢も計算違

いだった。

そして男性は後ろから来ていた札をマントに当てるだけで撃墜させていた。

まるで意味のなさなかつた霊夢の此処までの生き方は男性の前に打ち伏せられていた。此処から何かしようと思うその心まで蝕んでいくような感覚を覚えた霊夢は仕方がないのでその場から逃げるようにしていた。

「待てよーやっとな斬りたいと思ったんだ。斬らせろ。血を見せろ！」

男性は狂気じみたそんな声を上げていた。とてもではないが人間とは思えないほどに興奮させていた男性は霊夢の事を必死になって追いかけていた。

足が地面につくその音もなく草木を踏みつけるような音もしない男性は簡単に姿を眩ませていた。不気味な雰囲気を作り出したので霊夢は所構わず札を投げてつけておいた。それから辺りを見回して何処にいるのか、そしてどこから現れるのかを観察していた。霊夢の周りには木がある。その裏にいる可能性もあるしそれとも上にいるのか、霊夢は無音という中で木漏れ日のある森の中で何か確証を得られるようなものを探していた。それは事件の検証をする刑事のようにチリ一つ見落とそうとはしない、そんな目をしていた。「もうそろそろ出て来てもいいんじゃないかしら。」

「残念だが、別にその必要もねえよ。」

「いつの間に居たのよ。」

「ずっと居たぜ。だから言つたら。家に帰っておネンネしてな、とな。それとも自殺志願者か。人に迷惑かけずに自分でしちまった方が良いと思うぜ。」

「よくそんな事が言えるわね。もしかして今起きている異変はアンタのせいなのね。」

「正解だ。よく分かつたな。だが気づくにはも遅かった。俺の仕事ももうそろそろ終わる。」

男性は木にぶら下がるように足を組んで蝙蝠のようになっていた。慣れた感じがするので隠れて行動する方が得意なのだと思う。

霊夢はすぐにそう思った。そして此処で姿を出したということはおそらくともう終わりを迎えているからだろうか。

「そうね。此処でいなくなりなさい。」

「夢想封印！」

赤や青、黄色に緑。色取り取りの様々な弾幕が霊夢を中心に飛び出していった。視界というのは全く見えず覆い隠すような弾の密度を作り出していった。そして霊夢が事前に仕掛けていた罠によってこれでもかとばかりに札が男性の方へと向いていた。

周りは大きな弾幕に覆われている中で札を斬り伏せる必要があった。それだけしていれば男性でさえ傷の一つは付けられるのだろうと考えていた。博麗の巫女として代々受け継がれていたその奥義は博麗神社の巫女を務めるものには扱うことは出来ないものである。

男性は絶命していてもおかしくはなかった。

「これでもかしら。」

少しだけ怒っているようにも見えなくもない表情をしながら疲れたのか肩で息をしていたがそれでも届かないものはあるようだ。

「良い攻撃だった。それだけ伝えてやるよ。」

男性は霊夢の背後に立っていた。ここでグサリとナイフを刺されていても不思議ではなかった。だが其処で気に失うように地面に倒れた霊夢は自分の身には何の傷も付いていないことに気づいた。軽く押されただけのようだったが力が入らなかった。地面の土を舐めることしか出来なかった霊夢はこれまでに味わった事のない雪辱を感じた。

だが、ここで立ち上がることは出来なかった。ふわふわとする頭と何をされたのか分からない体ではここで立ち上がろうとも何もするような事は出来ないと思われる。その場で涙を飲むことしか出来なかった霊夢は眠りにつくように目を閉じていた。

何か安らかな、そんな感覚が霊夢の中にはあった。

第39話

これまでに味わった事のないような雪辱。博麗の巫女である博麗
霊夢はその思いからか、フラフラと脱力しているような、内から湧
き出てくるその力を酔いしれているのかその体は疲労が溜まってい
るようだった。

霊夢はしつかりと整っていない階段を登っていき博麗神社へと向
かっていた。右手にはお祓い棒を持っていて左手にはもう事切れて
いる札だった物を持っていた。供養するつもりなのだろう。

地面には草が生えていて一切の手入れも掃除もされていない博麗
神社には一切のご利益がありそうにはなかった。だが、此処が博麗神
社というだけでどれだけ有難いものであるのかは知っている人は理
解している。

「紫、ちよつと良いかしら。」

空を向いてそう叫んだ霊夢の目の前に隙間が現れる。赤いリボン
で空間が裂かれたその先には大きな目があるようで全てがこちらを
向いていた。この独特な感覚はどうしても慣れない霊夢。そのスキ
マからのっそりと出て来たのは金色の髪をしていて紫色の服装で全
身に包んでいる女性だった。

幻想郷の管理者として大体の事は管理している大妖怪である八雲
紫。

「どうしたのよ。私はこれでも忙しいのよ。」

眠たそうに答える紫の目の下にはクマがくつきりとあった。人里
の人々のような雰囲気を感じた霊夢ははっ、としていた。

「まさか死ぬんじゃないでしょうね。」

「まさか。私は忙しいだけよ。藍にも橙にも手伝いはさせているけど
最近では死人が多いのよ。それにどうしてもこのような状態になっ
ているのか調査を進めないといけないわけ。それとね、人数が合わな
いのよ。どうしたら良いのかしらね。」

扇子で口を隠していた紫だがいつものようには力はないようでハ
キハキと来た声ではなかった。それでも霊夢の事になればしつかり

と応えようとするあたりは何処か母性を感じなくもない。手厳しい時もある。優しい時もある。もう覚悟が出来ているのかもしれない。「人数が合わない理由は簡単よ。近くの森にそれらしき物があつたわ。」

霊夢は紫がそのような状態でも一切の配慮はなかつた。何にも流されない霊夢は此処でもそれを発揮するらしい。それがどの様な意味合いになるのかは言わなくても分かると思う。

「そう、ありがとう。それで何か頼みたい事はあるかしら。」

「あるわ。青年を連れて来て欲しいんだけど。」

霊夢はいつものように強い口調のまま紫には頼んでいた。小さい頃から知っているのもその辺りは判断しにくい仕方がなさそうに表情を歪める紫は笑っているようにも見えた。だがどこか悲しそうにしているように見えるので不思議な顔をしている事には間違いなかった。霊夢はその事は気になっていたがもう別に気にすることはないのだろう。

「少し時間をくれないかしら。人に聞きながら全部を探すわ。」

紫はそれだけ言うと言われているようにスキマの中へと入っていき閉じてしまった。霊夢が紫へと会いに行くことはもう難しい事だった。霊夢は今待つかないのか、何となく掃き掃除でもしてみようとした。自分の邪念を払いたいのか、単純に汚いので掃除を始めたのかは本人にしか分からない。

霊夢が紫に青年を探すように言ってから三日後。意外な場所で見つけた青年は呼び出されるように博麗神社へと強引に連れてこられていた。

「もうアンタにしか頼れそうにないわ。」

博麗神社で巫女を務めている博麗 霊夢は境内の一角にある小屋の中で青年を待っていた。外は寒かったがいつ来ても良いよう少しだけ外を見られるように襖は開けられていた。そして暖かい茶を飲んで待つ事になっていた。

事前に紫から連れて来ることを伝えられていたので霊夢は何もす

るような必要はない。その結果として湯呑みに入れた薄い茶を飲んで時間を潰すしかなかった。その為か急に現れた青年には反応を遅らせていた。

「何かあったのか。」

青年はその場に立っていた。霊夢と同じ屋根の下でいる、きつと紫が気を使って此処まで連れて来てくれたのだろう。霊夢は簡単に考える事にしてそのように頭の中で整理しておく事にした。

「紫から聞いているでしょうけど人里では大きな被害を出しているのよ。それを解決するための切り札をなつて欲しいのよ。」

ちやぶ台から離れてまた別の小屋の方へと向かって行く途中で青年とはそのような会話をしておいた。新しく茶を用意するつもりだろう。かまどに火を付けて水を沸かそうとしていた。

「解決するなんてそんな手腕はない。」

青年は気を使ってか近くまで寄って来ていた。そして会話しやすい大ききの声量で話している。

「それでもアンタにしか頼ることができない。それは分かるでしょう。自分で起こした事は自分で解決してちょうだい。」

「もう少し慈悲をくれ。」

「甘え事なんて珍しいわね。」

「そのことは今は良いだろう。それで今は何が起こっているんだ。」

青年は霊夢に聞いていた。だが、何処か、雰囲気が違うのでなんともに言えないような感じを覚えた霊夢。

「人里で自殺者が増えてきているのよ。それで全く機能しなくなったから最後の切り札を使おうと言うこと。何か知っていることはあるかしら。」

「何も知らないな。何の事かさっぱりだ。」

青年は少し悩んでからそのように答えていた。それなら仕方がないので霊夢はまた別の話をしていった。

「それと、三日前に戦った奴がとても強かったわ。という事で退治をお願いしたいんだけど。」

霊夢は沸かした湯を湯呑みの中に入れていた。青年が猫舌なので

沸騰する程度ではない温度にしてある。だが茶葉の味が出るのかどうかはまた別の話になるだろう。霊夢はスタスタと歩いて手渡しするとちやぶ台のある小屋の方へと向かって元の位置で座り直した。青年は何故か不満そうな表情をしていたがそれを霊夢に見せることはない。何か恐れている事でもあるのだろうか。

「それはどんな奴だ。」

青年は霊夢が座ってからゆっくりと口を開いていた。そしてちやぶ台の上に湯呑みを置くと台の上に肘を置いていた。そして顔を近づけていた。

第40話

霊夢は息を吸ってからゆっくりと思い出すように口を動かしていた。そして口ごもっていたがついに話す事にしたらしい。

「兎に角足が速かったわ。そして私の札を簡単に切ったのよ。そこで夢想封印で何とかしてみただけどそれでも退ける事にしか出来なかったわ。」

霊夢は青年に対してそのように説明していた。青年は興味があるように聞いていた。

「それで見た目はどんな感じだ。」

青年は霊夢に聞いていた。それを聞かない限りは何も事が進まないのもその通りであろう。

「紫色の髪をしていたと思うわ。それと黒いマントで身を隠していたからきつと暗い所に潜んでいると思うわ。それとナイフを使っていたわね。」

霊夢はその辺りで話すのをやめておいた。これ以上は何も話すようなことはない。霊夢はそれ以上は口を破る必要もなかった。

「それなら此処で帰る事にしよう。また呼んでくれ。」

青年はちやぶ台から離れていくと襖を少しだけ開けてから何処かへと歩いていった。霊夢は別に追いかけるようなこととしない。また別の事を思いついていた。

「紫、巫女としての修行を受けさせてもらえないかしら。」

「良いわよ、場所だけど書物だけは貸してあげる。私は少し休む事にするわ。二日くらいは完全に任せる事にしたわ。」

「そう。」

霊夢の返事はとても短いものだった。そうだと言うのならそれでも良いのだろう。紫は更に身体を疲弊させているようだった。霊夢にも時間はないと言うことを何となく示しているようだった。

霊夢と青年が話をしてから二日ぐらいたろうか。紫は完全にやるべき事に従事し始めていて少なからず良い感じに回り始めていたの

だと思われる。

そんな事は知らない仙界ではある人が帰ってきていた。

「すまない。おかげでさっぱりした。」

黒髪を束ねていて後ろへと持っていくようなオールバックに近い髪型をしている青年は文字通りさっぱりとした表情でこの世界の主人と言葉を交わしていた。そして胡座をかいてその人の前に座る。

「それは良かったです。それにしても来た時は驚きました。あんな血生臭い匂いがするとは。」

金色とは言い難いが茶色ともまた違う髪の色をしていて耳のようなものが付いている髪型をしている。耳元には遮音用のヘッドフォンが付いていてそれのおかげで関係ないものまで読むことはなかった。ノースリーブの薄紫色の服装で紫色のスカートをしていた。いつも持っている七星剣は今も持っていないらしい。

「生活が大変だった。それだけで伝わるだろう。」

青年はそれ以上は語ることはなかった。青年の前にいる金色と茶色の間の色をしている髪色をしている豊聡耳 神子は一回だけ首を縦に振っていた。そして目を閉じていた。神子の能力は人の過去を一部分を見ることが出来る。それを知っている青年はそう多くは語る必要はなかった。

「して、最近の調子はどうか。」

「段々と疲労の方が溜まって来ています。」

「膝を貸そうか。少しは眠れるだろう。」

「貴方の膝は借りません。」

神子はすぐに断った。だが、青年は何か気にしているようなことはなかった。それどころか何処か違うところを向いているように無関心とは言えないにしろそのような感じはあった。

「太陽はどうしても沈む事はある。休みを取るために、そしてまた神々しい光を人に平等に与えるために。」

「私の太陽は沈む事はないだろう。」

神子は立ち上がるようなそぶりを見せていたが床に手をつけて自身の体を支えると青年の方へと近寄っていた。そして身を翻すと天

井を向き始めていた。青年は右膝を立てて左膝を床につけていた。そしてそこに何か柔らかい感触のあるものがあるだけで青年は気にしていなかった。

「神子、これからも頼る事になる。だから倒れてくれるな。」

青年は冷たく吐き捨てるようにそう言っていた。

「有難い言葉だよ。こう人に甘える事は中々ないだろうから。」

「そうか。」

青年はそれだけ答えていた。それ以降は二人は話す事はなかった。そして太陽は沈んで月が浮き上がる。柔らかい光で人々を安らかな眠りへと誘うようであった。そして太陽の代わりに暴れまわるその意思を優しく受け止めるようだった。

「俺にはまだやる事がある。」

穏やかで深い呼吸をしている神子は暫くそこから動くようなことはなかった。

薄紫色の服装をしていて紫色のダボダボのズボンを履いている青年は身を隠すように紫色のマントを羽織っていた。

「お疲れだな。」

「貴方ですか。まだまだですよ。」

「聖の謙遜が良いが俺には本音でぶつかって来てくれ。」

「そうですね。とても疲れました。まだまだ終わらなさそうですね。」

「俺が終わらせる。して、何か起こった。」

「ええ。何か怖いものを見ているのか何かに恐れた目をしてここへとやってくる人間や妖怪の心を静めてあげていました。皆さんは元気にそうに帰って行くのですが何日かすると帰って来ていました。」

「そうか。段々と人が増えていったということか。」

「はい。私は出来るだけ頑張りましたがそれでも力不足だったようです。」

「そうか。して、どうしてそう思う。」

その質問には聖と呼ばれた女性は困惑していた。

「何故でしょう。」

「興味ない。」

「えっと。それは如何してでしょうか。」

「自分の力を自分で小さくするな。出来た分で満足すれば良い。」

「そうですか。それでも私は貴方に言われた事は全う出来ませんでした。」

「そうか。自分で低く評価はするな。」

「これから何処へ向かうのですか。」

「博麗神社だ。霊夢か紫に聞けば貴方がどれだけ頑張ってきたのかは分かるだろう。」

「とても不安です。」

「そうか。俺は俺の道を行く。だから貴方は自分の出来ることでこれから歩いてほしい。時間が流れる以上はその足は止められない。」

「良い知らせを待っています。」

「そうか。」

青年は其処から立ち去る。その先には何もなくその後ろにも誰も居なかった。妖怪の森を抜けて人里の様子を見てから目的地に向かうつもりなのか珍しく灯籠のある場所を歩いていった。

第41話

自分の力を自分で決めるものではない。自分で出来たその分だけ褒めれば良いし喜べば良い。其処に人の尺などなく誰にも縛らない自分の尺を使えば良い。

白いリボンを付けた黒いとんがり帽子を被っている金色の髪をしている魔法使いらしい格好をしている霧雨 魔理沙は久し振りに博麗神社に向かう事にした。最近会いにいつていないので何となく顔でも見に行こうかという意外と簡単な理由だ。別に他の理由は何もない。

全くもって綺麗とは言えない境内に降りた魔理沙は地面に足をつけて箒から降りると右手に持っている事にした。そして博麗神社にいる巫女を探して小屋の中を覗いたが誰かいたと言うわけでもなかった。魔理沙は仕方ないので小屋の中で休憩がてら座る事にしたがあまりその必要はなかった。

「何してるのよ。魔理沙。」

「霊夢か。来る時間が悪かったかな。」

魔理沙は冗談半分にそのように答えていた。霊夢と呼ばれた方も優しく微笑んでいる程度で特に気にしているようなそぶりはなかった。だがどうして其処から出て来たのかはまた不思議なものである。

「紫の能力を利用しているだけよ。気にする事はないわ。」

「なら、良かったぜ。体調の方はどうだ。」

「どうって、前に来ていなかったかしら。」

「そうだっけ？まあ、霊夢が元氣そうならそれで良いぜ。」

いつも通り元氣よく答えている魔理沙に何も変わっていないさそうで安心した霊夢は魔理沙と同じ場所へと全身を出していた。紫のスキマの能力によって幻想郷とはまた違う世界にいたので一旦出る必要がある。スキマの中は薄気味悪いものであるが慣れてしまえば居心地はそこそこ良いと思われる。

「そうね。今度は勝ちに行くわよ。魔理沙付いて来なさい。」

「いつになくやる気だな。どうしたぜ。」

「何よ、悪い？」

「いや、別に。」

浮き沈みの激しい霊夢は魔理沙を怒っているような声を出していた。魔理沙は別に喧嘩をしたいというわけではないのでそれに乗る気はない。単純に感情の起伏が激しいので仕方がないところがある。それを知らない仲でもないでそこは別に気にするような必要はないと思われる。

「この近くの森にいるらしいわ。一緒に探しましょう。」

霊夢は袖の中に大量の札を仕込んで準備万端だった。そして右手にはお祓い棒を持っていてほんの少し発光しているようにも見えなくもなかった。魔理沙は少し変わったようなそんな気もしなかったが何かは分からないので聞かないことにした。珍しくやる気があるのでそれを削ぐ可能性もあるからだ。多分友人としてそのように考えたのだと思われる。

「おうよ。行こうぜ。」

「じゃあ、付いて来て。」

霊夢は先に小屋を飛び出していた。それに続くように魔理沙が箒に跨りながらその後が続く。霊夢は前にも訪れたことのあるくらい袋が吊り下げられていた場所を目指していた。魔理沙は何処に行くのかは全く知らないので霊夢について行く事にした。

風によって待っていた衣服がバタバタと音を立てる中で魔理沙はひとつ聞いていた。

「一体何を探しているんだぜ？」

魔理沙はとぼけた様子で聞いていた。霊夢からするなら情報をくれたのは魔理沙である。そうなるかどうかどうして魔理沙が知らないのかふとそれが気になっていた。

「紫髪の奴よ。」

「そんなに怒らないでもな。」

霊夢の声は鋭く魔理沙の心臓を貫いていた。そして何が起こったのか分からないままに魔理沙は霊夢の後ろをついて行く事にした。

「つべこべ言わないで付いてくる。余分な事言ったら承知しないわ

よ。」

何か別人でも見ているのかような孤独感を感じた魔理沙はそれを口には出さずに目を落として箒にまたがったままで霊夢の後ろをついていつていた。魔理沙は今どこで飛んでいてどのくらいの距離があるのか目で測るような事はしなかったし、知ろうともしなかった。

「此処よ。この近くに確か居るはずよ。」

霊夢は地面に降り立っていた。木々の木の葉を切り分けながら入り込んだので急いで方向転換した魔理沙はその下に入り込む。その場所は薄暗いものの強引に入ってきて来たのですつぽりと穴が空いているためにその場所だけはいつもと変わらないように感じた。だが、魔理沙は目の前にいる人の変わり方には何か疑問を持っているようにも見えなくもなかった。

「霊夢、何をそんなに急いでいるだけぞ。」

魔理沙は素っ気ない感じで聞いていた。特に差し障りのない感じではゆつたりと聞いているだけだった。だが、霊夢には何か違う風に聞こえてしまったらしい。

「魔理沙は何も知らないからそう言えるのよ。とても強かったんだから。」

霊夢がそう言うのは相当は腕の持ち主であるのには間違いないと思われる。ただ突き放すようなその言葉のひと押しには何か違う人格があるようにも思っていた。中々しないようなことをしているために苛立っているかと魔理沙は考えておく事にした。八つ当たりも程々にして欲しいものだがそれでも支えようとするのはお互い信頼している証だからだろうか。

「なら、気をつけよう。私はいつでも準備出来ているぜ。」

「任せたわよ。」
霊夢はそれだけ吐き捨てると特に魔理沙の方は見ずに森の中を歩いていた。

霊夢と魔理沙以外の生物は眠りについたように静まり返っていた。今日は風もないよう木葉の声を聞く事はできなかつた。それだ

けではなかったがどうしてもそれが気になってしまおうようだ。

「ザツザツ、と地面の土に擦れる足裏の音がしているが途中からそれが三つになっていった。」

「やっとなれたわね。」

霊夢は先制攻撃とばかりに魔理沙の横を通してその人に当てることにしていた。魔理沙はその場から動く事はなく持ち前の小さい八卦炉を取り出していた。そして構えていた。

「此奴は誰だぜ。」

魔理沙は急な展開に驚いたのかそれだけ言葉として出して後は自分の心の中に納める事にした。別に話す事がないわけでもない。喉に詰まったと言うのかそれとも出そうとした言葉が何か理解できなくなってしまうのか。魔理沙は自分がわからなくなってしまうた。

第42話

紫髪をしていて七割ほどの髪を紫色に染めていてその部分を右側へと流している目の吊り上がった細い目をしていて全身を黒いマントで覆っている男性がいた。歯並びは綺麗なものではない。霊夢も魔理沙もその人の事は全く知らないものでその場でたじろぐことしかしなかった。

「ごつちの台詞だよ！元の世界に帰れねえわ、博麗の巫女殺して来いとか言われたしよ！そんで、テメエがそうらしいな！面倒くせえからとつとと終わらっせぞ！」

言葉のあちらこちらから怒気と意味の分からない復讐心をこみ上げさせている男性は何処から出したのか検討もつかないナイフを二本、その手に逆手持ちで握っていた。別に何処か問題があると言うことでもないが刀身は舐めた跡がびっしりと付いていて血のような赤いものがこべりついている。そして無駄に舌を長くしているのがどうしても気になるのだが別ににも意味はないのか。それともそれが彼の戦闘スタイルなのかは訳が分からなかった。

「私を殺そうなんて良い度胸ね。やるわよ、魔理沙。」

霊夢はこの時に感じていた。もう遊びで終わる程度の異変ではないこと。そして何処で誰を失おうともあり得る話であること。それから何が起ころうとも不思議ではない事。

「おうよ、後ろからやらせてもらうぜ。」

魔理沙は缶のような道具を取り出していた。そしていつでも発動出来るように手に持っていた。それから何をしたのかと言うと地面に投げつけていた。ピンク色の煙を出したその缶からはびっくり箱のように煙と同じ色の弾が湾曲した軌道から放たれていた。それに合わせるように霊夢が行動を制限するために札を投げつける。

二人の同時に行われたその連携には流石に参ったと思える。

だが、そう上手くは行かない。

「そんな遊びに俺を付き合わせるな！」

全身を覆っていたマントによって弾かれたと思われる魔理沙の弾

は避ける訳もなく霊夢の札が行動を狭くさせたのも意味はなかった。さらりと流れていくだけのその札は男性から離れていくように森の中へと消えていった。

男性は素早く走り出していた。別に分かっていたのならば受け止めるだけだった。

霊夢のお祓い棒は男性の目の前に突き刺さった。それに驚かされるように男性は素早く身を翻して地面に倒れそうになるがそこをカバーするように地面を蹴り出していた。そして後ろにいた魔理沙へと標的を変えていた。

魔理沙も応戦しようとするが男性の方が一步早かった。

「スターダストレヴァリエー！」

星屑を散りばめたような弾幕を瞬時に張った魔理沙だったが男性の凶器は魔理沙の横腹を掠めていた。だが、それで済んで良かったと思う。男性はその弾幕の濃さから被弾を恐れたのか素早く身を返して逃げていた。命を取られなかっただけでも儲けものである。

「良かったわね。」

そんな魔理沙に一言だけ霊夢は言葉をかける事にしていった。何か意味があるわけでもないが何処か冷たくて他人事のような霊夢に魔理沙はこれまでの年月は何だったのかを問いただしたかった。だが、今はそれをしていられるような訳がないので話をするのはまた後の話になる。

「ビビらすんじゃないぞ。」

男性は霊夢と魔理沙から等距離の位置に居た。視界に入らないと言ふことではなく木を一本か二本挟んだぐらいの距離を取っていた。両者が遠距離攻撃持ちなので一気に不利なのだど悟り始めたのだから。

「まだまだいけるぜ。」

魔理沙小さな八卦炉を持ちながら男性の方に向けていた。そして霊夢も同じ様にお祓い棒と札を持ちながら男性の方を向いていた。だが、別に問題があるのかと言われると別にそうでもない。

「雑魚同士はこうやって結託するから時間を取られるだよな。どう

すっかな。」

「ここで終わりよ。どちらが良いかしら。」

霊夢は余裕そうにしていた。別にここから素早く決着をつけるようなこともできるが相手は何を持っているのか分からないのでそこは慎重に事を始めるつもりだ。男性はけつ、と一回だけ笑うと其処から霊夢の方を狙っていた。

爪先はそちらを向いていて其処から素早く両手に持っていたナイフを霊夢の方へと向けていた。それがどうしたとばかりに霊夢は冷静に対処していた。札で動きを止めさせると払い除けるように左側へと腰を捻ってからその力を使って男性を叩きつける。

直接当てるようなことはできなかった。

其処は男性の方が一枚上手だったようでナイフで当たらないように止めていた。

「マスタースパーク！」

魔理沙はいきなり撃ち始めた。発火して白色になっていた炎が男性を襲いかかる。

辺りの木は倒れそうになっていた。地面は抉れていて真っ直ぐに日の光が入って眩しいときえ思えてくるホモになっていた。

男性は後ろへと一歩退くと何も無かったのように魔理沙の方を狙っていた。魔理沙はもう仕方がないのでボトルのような物を投げつけて男性の視界をくらませる事になっていた。効果としては今の一つのように男性はその中でも正確に獲物の方を向いていた。

そして投げつけたナイフが魔理沙の左腕に刺さりそうになる。其処をグリグリと回すために男性はナイフの柄を持つとなんの躊躇いもなく手首を捻る。そして何の意識もないように抜いた。

魔理沙はまさかの痛みに声にもならない声を出していた。意識はしつかりと保っているようで珍しく睨みつけるように真剣な表情をしていたが男性はそれを見て口角を上げて気持ちが悪くなるほどに高笑いをしていた。

魔理沙はもう破れかぶれで一発だけ攻撃を浴びせる事にした。

「フォトンレーザー！」

魔理沙のお得意の魔法であるマスタースパークを小さくして狙いを定めて撃出するようにしていた。八卦炉から繰り出される針の穴を通すような一発には流石の男性も退くしか無かった。もうやっていられないのか面倒な事この上ないのは言うまでもない。

「これを怒らせる天才か！テメエら。」

男性は激昂したかと思うと魔理沙の方へナイフを素早く投げつけた。それは魔理沙の左足の太ももに当たり男性が其処に勢いをつけるように突き刺す。そして素早く抜いていた。そして右足の膝を何の気なしに傷を付けてその場に倒していた。

魔理沙は立つ事も出来ずに子鹿のように足を震わせてその場に倒れそうになるところを上から男性によって踏みつけられていた。もう何がしたかったのかは一目瞭然だった。

霊夢を怒らせる。ヘラヘラと笑っている男性は霊夢の方を向いて親指を下に向けていた。一種の挑発として受け止められそうなものだが本当にそうとしか思えないほどだった。

「テメエはゆっくりと遊んでやるよ。」

男性はそう言ってから霊夢の方へと走り出していた。

第43話

もう目に見えるほどの速さとなっていた。

霊夢にとつてはもうその程度になっていた。魔理沙の時も見えていた分にはそうだったが間に合いそうにも無かった。距離という問題もあつたが魔理沙の放った煙のおかげで正確に何か起こったのかを知るような事は出来なかつた。

「遊ばれるのはどちらかしら。」

霊夢が札を放つが悉く男性に斬り刻まれていた。これでもかと斬りつけるのが切れ味を試しているのかそれとも次はお前だと言う暗示なのか。それくらいに無駄なほどに斬りつけていた。

男性が近づいて来るのに対して霊夢は距離を詰められないように移動しながら戦っていた。段々と用意されていくかのように変に気に入らなかつた男性は素早く走り出していた。

霊夢はそれを感じて素早く後ろ向きで走り出していた。だが、もうこれでは逃げ切れないのでしつかりと走る事にした。空を飛ぶなんて言うのはまた二の次となっていた。飛ぼうとすれば魔理沙のようにナイフを投げられる。霊夢は何となくそう思えた。それともう一つ。任せてみたかつた。

「待てー！」

男性は怒気を通り越した狂気でその言葉を言っていた。舌を巻いているような多重に聞こえて来るその声で霊夢を威嚇していたが全くと言って無意味であつたのは言うまでもない。気にするのは前ではなくて下だつた。

男性は地面を踏み込もうとする脚を誰かに蹴られてしまっていた。再び折り曲げられた脚と前へと進もうとする体を止める事はできずその場に転がり込んでいた。膝を擦りむいたとしてもそれで済むのなら良いだろう。そんな感じはしていた。

だが、男性の身のこなしがそうはさせなかつた。体を捻って力を分散させるとその場で転がり込んで後ろを向いていた。つまりは何かされた方向を向いていた。気づかなかつたと言うのが男性のプライ

ドをへし折つたのだろうか。

その場には男が立っていた。

身長は高いと言うわけでもない。長らく洗っていないようでボサボサの髪を後ろで頑張って一つにまとめたような髪型をしていた。そして腰には四本の剣を携えていて薄紫色の服と紫色のダボダボのズボンを履いていた。脇は見せているが袖はない。そして紫色の裏地が赤色のマントを羽織っている。

「誰だ、テメエ！ 邪魔すんじゃねえぞ。」

「そうか。して、これはどう言う状況だ。」

青年は目の前の人は気にしているそぶりはなかった。それよりも幻想郷で何が起きているのかを知りたいらしい。それだけだったので何処か危ない感じに見えてしまう。

「無視するとはトンダ馬鹿だな。」

男性は青年に向けてナイフを突き刺そうとしていた。

青年は特に身を動かす事はなくさらりとナイフを右手二本の指で止めていた。さらつ、としたその雰囲気には何か違うものを感じなくもない。

そして左側へと体を捻っていた青年はその勢いで蹴りを一撃だけ男性に与えていた。

その一撃には簡単に言つて骨を砕く様なほどの威力があつたのだと思われる。

男性は軽々しく吹き飛ぶと地面に転がっていた。青年は左足を動かしながらどこか不満そうな表情をしている。

「アンタ、こんな時に何しているのよ。」

霊夢はそんな青年の行動が気になっていた。目の前で急に足を触り始めたら変に思うだろう。今の状況なら殊更だ。

「まだ使い慣れていない。気にしないでくれ。」

「もう良いわ。言うだけ疲れるもの。」

霊夢も青年は謎の結託感を作り出していた。別にそう多くを語らないが何か繋がっているように見える。

「そうか。それは嬉しい。」

青年は何処か達観しているような眼差しをしていた。

「その二人！ベラベラ喋りやがって！テメエらは喋らねえと生きていけないのか！」

「そうだ。」

青年は急に話し始めていた。

「口答えすんじゃない！」

男性は更に怒っていた。逆に喉は痛くないのか、聞きたいのだろうかそれは喉元で止めておいた。また別の機会にそれを言うつもりなのだろう。

「そうか。そう怒ると体に悪い。少し抑えてみてはどうだ。」

「ウルセエー！」

男性は青年目掛けて走り出していた。だが届くのかと言われると別にそう言うわけでもなかった。

青年は踵を返して右足を浮き上がらせる。鳩尾を狙ったその一撃にその場で足を止めていた男性は更なる一撃を与えられる。

青年は振り子のように右脚を使って左脚で男性の後頭部を蹴り落とした。その身のこなしは男性にも負けていない。いや、それ以上だった。

「やってらんねえな！」

男性が地面に着く前に両手で体を起き上がらせる。そしてナイフを投げていた。魔理沙の時とは比にならない程の早さ。青年はそれを弾いておく為にマントに付けていた針を取り出して弾いていた。

男性はそれだけでは無かった。捨て身の一撃かのように自分の身ごと霊夢に走り寄っていた。その後のことを一切考えていない一層の事清々しい一撃はどうしても防げなかった。それよりかは相打ちをすることを選んだ。

男性の両手に持っていたナイフは青年の腹部を刺していて青年の抜いた剣はバツサリとその身を斬り裂いていた。

男性の身はその場で落ちていた。腹の部分からは血が垂れ流しになっただけで赤い池を作り上げていた。

「一旦これで終わりなのだろう。」

青年は腹部に刺さっていたナイフのことは気にしているような事はなかった。それよりも今は別のことを考えているようで霊夢とはまた違う次元での思考に耽っているのかもしれない。青年はその背中がそう言う風に語っていた。

第44話

博麗神社の近くの森の中。その中は光は全く通らないが一部だけはある魔法使いのおかげでくつきりと景色を見ることが出来る。その下では地面に倒れている人と二人が立っていた。そして絶命している人が一人。

「怪我はないか。」

前髪を後ろへと持つていき一つにまとめるために結んでいる髪をしている黒髪の青年は薄紫色の服を血で汚していた。だが、それを感じさせないほど平然とした態度をしているので自分がおかしいのかと感じるようになっていた。

「ないわよ。それよりもアンタの身を気にしたらどうかしら。」

黒い髪に赤いリボンをつけた巫女の服装をしている少女は少々ボロボロになっているように思える。多少という程度であるので別にそう気にするような必要はない、青年に比べれば。

「この程度唾をつけてたら治る。」

青年は右手に口から吐き出した唾をつけると何処からか取り出した黒い刀身をしている小刀の上に塗っていた。そして左手で腹部に刺さっているナイフを一気に抜くと地面に落としてから自分が持っている小刀を当てていた。それを見ている巫女の服装をした少女、博麗 霊夢は青年が何をしているのかは皆目見当もつかなかった。

「して、森を汚してしまったが良かったのだろうか。」

青年はいつの間にか塞がっていた傷口から自分の持つて当てていた小刀をマントのところに納めていた。どのような原理でそのようなになっているのかは分からないがあえて聞くようなことでもないので何もしなかった。

「それを気にするなら魔理沙の傷も治してあげて。」

「そうか。」

青年は少し怠そうに地面に倒れていた少女に小刀を当てていた。

その少女は黒いどんがり帽子をかぶっていたが今は地面に転がってしまっている。綺麗な金色の髪をしていて少し癖があるのか

ウェーブがかかっているようだ。そして黒い衣服を身に纏っていて少しだけ土による汚れがあると思われる。

青年は再度自分の睡をあらかじめ塗っていたようですぐに押し当てていた。どのような原理でそのようになっていくのかは全く分からないがどこかに潜伏している間に身につけたのだろうと霊夢は思っていた。

「霊夢、少しの間神社で休ませてくれ。ついでに話も聞きたい。」

「そう、仕方がないわね。」

霊夢はそういうだけで興味があるようには見えなかった。それとも疑問を持っていて感心を持たなかったのだろうか。聞くことでもない上に青年が聞く事もなかったので真相はわからないままだ。

この場所は幻想郷の東の端、博麗神社と呼ばれている神社はいつも通り寂れていて人の気配がなかった。逆にそれはあり得ないというのが当たっているのかもしれない。日は高くなっているが沈んでいくわけでもない。昼は過ぎていくようではなかった。

「俺がいない間に何が起こっていた。」

黒髪の青年は聞いていた。そう聞かれた人は何も答えるようなことはしなかった。青年は不審に感じているようだがそうなる理由もわからないわけでもない。

「実は現状、人里は機能していないわ。紫によって隔離もしたけど効果はないどころか逆に多くなったように感じたわ。永琳の麻酔薬も効かなかった。致死量に摂取させても目を開けたそうよ。そしてやれる事はなくなったわ。」

霊夢は青年がもう一度優しい口調で同じことを聞いてきたときにやっと決意が出来たのかそのように言っていた。青年は少しだけ考えていた。

「症状はなんだ。」

青年は聞いていた。その声は下から這い寄るような感覚を覚えるものだった。

「何も分からない。自分からその命を絶とうとするのが最後になるの

は分かっているわ。それ以外は目の下にクマが出来ていたことかしら。」

霊夢は青年の質問に答えておくことにした。何か知っていることがあるのかもしれないしそれを任せるだけの力はあるのだと判断した。無意味に幻想郷を錯乱させたわけでもないと思われる。

「殺してくれ、と懇願したりはしたか。」

青年は聞いていた。

「そのはずよ。」

霊夢はそう答えていた。何が起こるのかは全く分からないので青年に導かれるがままでしかないがそうしないといけない理由もないわけでもない。

「それは面倒なことになった。」

青年はそう言つてちやぶ台に置かれていた湯呑みを取ろうとする。だがすぐに離れた。熱かったのだろうか、それとも気が変わったのか。

「何が面倒なのよ。」

霊夢は興味がやつと出てきたようで身を前のめりにしながら青年の方を向いていた。元々対面だったのだが青年でさえ困るほどに近づけていた。

「心の弱い者でよく知っている者ほどその病は重くなる。その中で悪い印象を覚えた人は余計に重たくなる。」

青年は霊夢がどれだけ近づいてこようとも一切の動揺は見せなかった。どっしりとその場にいる山のようなその態度には何か今までは違うものを感じた霊夢。青年は机を叩いているだけで何か行動は起こさなかった。

「それはつまり人里だけではなくて幻想郷全体の機能が停止しようとしているということね。」

「そうだ。下手するとそれよりも酷いことになっているかもしれない。」

「例えば何が危ないと思うのよ。」

霊夢は息を潜めた獣のような青年の話に耳を傾けていた。そして

そのように話す。其処には博麗の巫女としての役目やその責任が背中に乗っているのかもしれない。

「妖怪が人を襲わなくなる。意味は分かるか。」

「それが何よ。」

霊夢は一瞬何を言いたいのか分からなかった。だが何か言いたいことがあるのだろうと思って霊夢は待つことにした。

「妖怪としての活動が弱くなっている。妖怪が心を傷つけられたらどうなるのか分かるだろう。」

「それってつまりは妖怪の生命が危なくなっているという事ね。」

「それで済めばいい。問題はそれで信仰を失ったりしていないということだ。博麗大結界はまだ頑丈のままなのだろうか。」

「そんなはずはないわ。」

「そうか。本人に聞いてみてほしい。俺は違うところを見てくる。先に言っておくが香霖は特に影響はなさそうだった。」

青年はそれだけ言うとかちやぶ台に置かれている湯呑みを持って口元に持っていき少しだけ啜ることにした。もらわないのも悪いと思っただけかとかとは分からないが少し無理しているのは言うまでもなかった。

「また会おう。」

立ち上がった青年は博麗神社の巫女過ごしている小屋の襖を開けると細い隙間から外に出ていた。そして襖は閉められたがそこに影があるのでもまだ居るらしい。何か高い音になるものであるらしい。それともそのように聞こえてしまうのか。

霊夢はあまり気にしないことにしたが気になることがあるので何とも言えない気分になっていた。

幻想郷を本気で潰しているのだけはよく分かった。現状はどこまで広がっているのか。それと管理者よ隊長はどのようなものか。

霊夢は幻想郷を守る役目のある博麗の巫女としてその場で声をかけた。

「紫、聞きたいことはあるわ。」

霊夢の声はしつかりとしていた。いつもとは違うキリッ、とした責

任感のある表情をしていた。その眼は未来を写していて皆の頭の上から光を与えるような存在。皆から崇められるのであろうその姿は巫女としてようやく目を覚ましたような感じを覚える。

誰に感化されたのかは言うまでもないが良い方向へと向いているのは言うまでもない。

第45話

森の中を歩いていた青年。

薄暗い中を通っていく黒髪の青年は一番世話になっていた人の元へと向かう事にした。その場所は紅い壁に覆われた紅い色をした何とも趣味の悪い館なのだから主人の種族と名前を聞けば別に何も不思議な事ではない。

青年は空を飛ぶようなことはせずに人里を通って行くことにした。霊夢の話も気になるが何となく気分でそのようにしていると思われる。それとも心が揺り動かされたのでそのようにしてみる事にしたのか。

人里の東側。前に謝って天界を訪れた時に降りてきた場所はここになっていく。この辺りはそこまで建物が多いというわけでもない。そこで人が多くいるというわけではない。だが、それにしても何か違うものを感じる。青年は何となく様子を見てみる事にした。

木造である家屋が建っているがその中に人気というものは何もない。家の感じはどうしても取れなさそうな汚れが付いているのが気になるがその原因というのはよく分かる。人の血だ。

吹きかけられたように飛沫を上げている。どうしても見ていられなくなつた知り合いが斬りつけたのかそれとも自分で落としたのか。どちらにしても映姫にどう判断されるのかは言わずにも理解できる。

「慧音の様子が気になるな。」

青年はそれだけ言うつま先を北側へと変えてそのまま歩き進んでいた。人気のない人里は以前のような活気というものはなくまるで死人の街となっていた。静かとかそう話ではなくて不穏とした締め付ける冷たさのある嫌な感覚を覚えるものだった。

人里の家屋にしては庭のある珍しい建物がある。そして少し大きな建物で大きな一室には長机と何かをかけるようになっていく。板が壁に立て掛けられている。中の様子は前と来た時よりかはどうしても汚く見えてしまう。

寺子屋として利用されているその建物は上白沢 慧音が住んでい
るはずなのだが見る限りではいるようには見えなかった。

「邪魔する。」

青年は玄関で靴を脱いで何の気なしに入っていた。居住区とい
うのはあるのかと言われるとそう広くはない。

建物のうちの多くを寺子屋として子供たちに学びを与えているた
めの部屋に割り当てられている。誰もが羨む家だがそうとはとても
見えなかった。

青年は気にする事なく中へと入っているが図々しいのか何の抵抗
感もなく中へと入っていく。皆から嫌われるだろうが青年の方が正
しかった。

「どうした。」

青年はある一室に入るための襖を開けた青年はその先に倒れ込ん
でいる慧音を見つけた。腰にも届きそうなほどの銀髪に青色のメツ
シュを入れた髪型をしているその人は床の上で天井を見ていた。胸
元には赤いリボンつけていて裾が白色の上下一体の青色の服装をし
ている。だが今は慧音の性格からは考えられないほどに着崩してい
る。

「ん？誰かと思ったら。何を考えているんだ。」

「何かあったのか。」

青年は何も気にする事なくその場に立っていた。

「人里の人々は殆どが居なくなってしまった。自警隊も壊滅。どう責
任を取るつもりだ。」

「そうか。して、貴方の体調の方は大丈夫か。」

青年は慧音の怒りを目の当たりにしても何も気にするようなこと
はなかった。もう終わった事なのかそれとも何ともならないので諦
めているのか。

「そんな事はどうでもいい。どうしてこんな事になった。」

「それは管理者が俺を入れなければ良かった。そしてもう俺を殺そう
とも何も変わらない。もう入り込んでいる。」

「どうしたら良い。どうしたら人里の人々を救える。」

慧音は決死の思いからそのように聞いていた。もう何があったのかは言うまでもないわけだが青年は少し呆れた表情をしていなくもなかった。もう慧音らしからぬ発言なのでそのようにしているのかそれとも何か違うことを考えているのかは何も分からなかった。

「立て。それだけで良い。」

青年の回答は単純なものだった。

「そうしたらどうなる。」

「それは慧音の立ち方次第だ。生かすも殺すも慧音の立ち方次第。そういう事だ。」

「何が言いたい。」

「人里の人々を救いたいというのならその立ち姿とその背中で語れ。そうしたら立ち上がる人も居るだろう。」

青年の最終的な回答はそのようだった。慧音にはもうその気力さえ残っていないかった。だからこそ他の力に頼ったわけだがそれがあまり良くなかったのだと思われる。

「責任は擦り付けない。これは俺の責任だ。だが人里の人々を立ち上がらせるために必要なのは俺の力ではない。その人たちを照らしていた太陽だ。慧音、貴方がその役目にある。」

「そんな身勝手が通ると思っっているのか。」

「興味ない。俺は俺がやりたい事をやる。」

「元からそんな性格だったか。永琳にも協力してもらおう形になっていたが私にはどうしたら良いのかわからないよ。」

「それは霊夢から聞いている。効かなかったそうさ。して、慧音にして貰いたいのは簡単な話だ。元気な姿で不格好でも声を掛け続けてくれ。そして励ましてやってほしい。それだけだ。」

「何と話しかけたら良い。」

「さて。それは貴方に任せる。」

「私にはとてもではないが難しそうさ。変わってはくれないだろうか。」

慧音は珍しく弱音を吐いていた。それを青年は馬鹿にするように鼻を鳴らす。

「声をかける人は代わりはいる。自警隊にでも任せておけ。だが、忘れてはいけない事がある。人里を守っていたのは誰だ。博麗の巫女か。それとも俺か。」

青年は最後にどうだ、と慧音に何か反応をするように仕向けていた。そして慧音は少し悩んでから答えを出していた。

「私しかいないだろう。是非やらせてほしい。」

「そうか。任せた。」

青年は少しだけ笑っているように口角を上げてから満足したのか踵を返して玄關の方へと歩いていた。と言うよりは来た道を帰っていくだけで単純に帰路につくだけのようにも思える。別にその事が気になつたわけでもないが慧音も少しだけ何か毒されているかもしれない。

三角錐のついていて一枚の板を挟んで六角柱の方をしている帽子を被って何処かへと歩いていた。それが何処になるのかは知らないが言われた事をやるつもりなのだろう。

第46話

幻想郷の西側にある霧の湖と呼ばれる場所の辺りに紅い壁をして
いる紅魔館と呼ばれている館がある。湖の上に浮かんでいて地上か
らでは行く手段とすれば舟か飛行のどちらかしか無い。どうしてこ
う不便な位置に建てたのかと言われるとハンターから身を守る為だ
と思われる。

吸血鬼である主人の命を狙おうとする人は少ないわけでは無い。
度々来るが基本的には門番の前で倒されている。又は偶々いた人間
によって被害の小さな形でそれが終わるのか。相手からすれば門番
の対処に加えてそれと同等かそれ以上の力を持っている人も合わせ
て行わないと通る事は出来ない。

だが別に通って来ないと言うわけでも無い。侵入する方法は少な
いが完璧にないということではない。その為にメイドでさえもそれ
なりの戦闘力がある。いつも館内はピリピリとした雰囲気醸し出
しているが客だと分かれば一切の失礼はなくなる。その主人の器
量が伺えるわけだがそれでもまだ子供である事には間違いない。

日は少し傾いてきた頃だろうか。昼というには少しだけ遅い時間
になっていた。黒髪を後ろで一つにまとめている額を丸出しにして
いる青年は酸化して黒ずんで着ている薄紫色の服と紫色のズボンを
着用していてその上から裏地が赤色の紫色のマントを纏っている。
一応お尋ね者でもある青年だがそうは感じさせないので一層のこと
清々しい。

「調子はどうだ。」

紅魔館と呼ばれる館に入るための門の前に降り立っていた青年は
その門番に話しかけていた。その人は赤くて長い髪をしている人で
中華風の緑色のチャイナドレスを着ている。寒い季節なので白いズ
ボンを履いている。

「元氣ですよ。今回はどちらの用件ですか。前回のようにな刃を向けて
きたら怖いので一応お聞きします。」

紅魔館の門番をしている紅　美鈴は柔らかい笑顔で青年に対応していた。元々咲夜のメイドとしての仕事を教えていた人であるのでその点は熟知しているのか元々そのような性格なので素なのかそれは本人でもわからないことだと思う。いつも通りですよなんて答えられたらそれで話は終わる。

「今日は近況報告を聞きにきたただけだ。久しぶりに幻想郷に来たので色々変わっていた。」

青年は何処か面倒臭そうに答えていた。

「咲夜さんがだいぶ前から調子を崩しているのですが誰にも話そうとは思いませんよ。なので何も出来ないものでどうしたものかと思ってます。」

「そうか。俺にはまだやれない事だ。その話は詳しく主人に聞いてからまた話すとしよう。」

青年はそれだけ言うとう自分の手で門を開けて紅魔館の庭へと足を踏み入れていた。其処には色とりどりの花が咲いている。その花の手入れは門番がしていて青年もしていないと言うわけでは無かった。こういつかは枯れると分かっている何か手を尽くそうしてあげたくなるのは花の持つ魅力なのだと思われる。そしてまた綺麗な花を咲かせようと努力する。それもまた同じものなのだろう。

青年はそれを別の何かに置き換えて考えているようでもまじまじと花を見ていた後で館の中へと入っていく事にした。

木製の大きな扉を開けると紅いカーペットに敷かれているエントランスと呼ばれている部屋がある。左右には通じる廊下とその先にある上へと登るための螺旋階段が設置されているが何か違う雰囲気がある。青年は気になるながらもいつも居るメイドが現れないので誰にも聞く事はなかった。妖精メイドはいつも通り青年を迎えてくれる。どうやら顔は覚えているらしい。

「邪魔する。」

青年は扉のドアノックに触れると何の前触れもなしに開けて中にいる人に平然と挨拶していた。そして平然とした態度でその人と同じ机とセットで置かれているのであろう椅子に座る。特に客人を迎

えるわけでもないがいつも置かれるようになっていく。青年のように何の前触れもなく現れる輩がいるので置いている。

「ノックくらいはしなさい。驚くわよ。」

「そうか。して、昨夜は何処にいる。」

青年は半分以上はその人の話を無視していた。これはいつも通りで変わることのない光景である。

「人の話は聞きなさい。」

そう言う紅魔館の主人であるレミリア・スカーレットはそう怒っているようにも見えなかった。もう怒り疲れたのかそれともまた違うものがあるので怒ろうとする気力も失ったのか。青色の髪を揺らしながら右手に紅茶の入っているティーカップに入っている赤色の紅茶を飲んでいた。白色に身を包んだ背中には黒い翼の生えている吸血鬼は今日も誰から取ったのかわからない血を混ぜた紅茶を飲んでいた。

「敢えて無視している。何か文句はあるか。」

「いつも通りで安心したわ。」

レミリアは少し笑っていた。幻想郷がどうなつていようとともブレないこの精神は気に入っている。一応紅魔館の執事としての役目がある青年を本来は怒るべき事なのだろうがそれはしようとはしなかった。毒されると答えると一番話が早くて済む。

「そうか。ここは随分と変わってしまったようだ。」

「咲夜が体調を崩したのよ。誰にも話そうとしないから困ったものだけれどどうにか出来ないかしら。」

「そうか。門番にも同じような話を聞いた。」

青年は椅子にある背もたれを使いながら自分の体を机の中へと沈み込ませていた。そして腰が痛くなりそうな格好をしながらレミリアと話をしていた。

「どうにか出来るのかしら。」

レミリアは少し心配そうに聞いていた。

「どうにかするのは簡単だ。だが、これは紅魔館の結束力を試されている事には間違いない。」

青年は何の気なしに答えていた。他人行儀とも取れそうなその言い方には何か簡単に手を出せないような裏があるのだと思われる。そのように感じたのかレミリアは深く聞くような事はなかった。

「幻想郷全体でもこのような事はあるのかしら。」

「それは今の所調査中だ。期間を開けていたので何が起こったのか分からない。」

「それで自分の足で情報を集めようと言うことね。」

レミリアは楽しそうに聞いていた。だから子供っぽいと思われる遊ばれるのだが本人が気づいていないのであれば誰も何も口には出さない。青年ぐらいいしかこんな軽口では話せない。

「そうだ。面倒な事にはなっている。早急に頼みたいが焦らずに時間をかけてやってほしい。」

「何か理由はあるのかしら。」

「理由か。心の病はそう簡単に治るものではないと答える事にしよう。」

青年は机の上に手を置いて自分の身を引つ張り出すと椅子から立ち上がった。

「また来る。」

青年はそれだけ言ってレミリアに背を向けていた。青年にも何か考えはある、だが他の人から見ればその断面しか読み取る事はできない。それが何処かですれ違いを起こすこともある。

「また来なさい。客としてはもてなそうとは考えないけど。」

「そうか。言い忘れていた事があるが紅魔館の主人には向かないので妹に変われ。」

青年はそれだけ言ってから主人のいる部屋を出て行った。孤独となったレミリアは一言だけ言おうと口を開ける。もちろん聞いている人などいない。一人だけである。

「照れ隠しかしら。」

誰も聞いているのいない一人の部屋の中で小さな声で言っていた。

第47話

何も無いような道を通っていく。妖怪の山までの道筋に特に障害というものはなく黒髪の青年はすんなりと着いていた。

妖怪の山自体はどこにしようとも見失うような事はないのでその点では有り難いものである。それと青年は全く訪れていないと言うことでもないので何となく道筋は分かっている。

岩肌があるだけの場所から妖怪の山へと入った青年はその先を目指していた。山を登っていく青年は途中にあった家を通り過ぎて川の近くまで来ていた。その場所には思い出は多くあるが今はそのような事をしに来たわけではないので一切何もしない事にした。

「久しぶりだ。」

青年はそう話しかけた。河原の近くで休憩していたように座っているその人は青色の髪をしていて外ハネをしている髪型をしている。青色の服装をしていてポケットが多く付いているもので何でも入りそうなものである。元々作業が得意な種族であるようでその為の道具がその中にはあると思われる。

「やあ、盟友。久しぶりだね。何してたんだい。」

河童である河城にとりはこの近くにある白い石で積まれたドーム状を工房として毎日何かを作っている。それを売り出しているのかどうかは青年は興味がないので聞いた事もない。前に作ってもらった剣は未だに扱えるのでそれだけ腕があると言う事なのだろう。

「魔界で暮らしていた。」

青年は簡素にそのように答えていた。さも当たり前のように言っているがサバイバル生活をしていたのには変わりない。

「そうかい。盟友はどこで根を張ろうとは考えたりしないのかい。」
にとりもその辺りは興味があるのだろうかと青年は考えていた。

「それは家を持つと言うことか。それとも誰かと縁を持つか。」

青年はまず大前提の方から聞いていた。自分の意見を答える前に誤解がないようにしたいのだと思われる。にとりはすんなりとどれでもいいと答えた。要するに何処かに留まることはしないのかと聞

いているのだろうか。

「興味はない。」

青年はあっさりと答えていた。味も素っ気もない野菜でも食べているような感覚になる。

「そうかい。その話は置いておくとして何が幻想郷では起こっているんだい。」

「妖怪の山には関係のなさそうな話だ。興味はあるかもしれないが聞かないほうがいい。」

青年は少し小さな声で話していたがしつかりと耳の中に収めていたにとりはしめた顔をして笑っていた。

「何がどう関係ないのか詳しく聞かせてよ。」

「そんな楽しそうに聞く話でもない。」

「それは良いじゃないか。」

にとりはどうしても聞いたそうにしているので青年は何となく話してみる事にした。本当は話したくはないものである。

「実は感染症というのが流行っている。病名はないが狂気の中で自分の命を落としている。」

青年はそのように抽象的に話していた。にとりとしてはそれでは不満だが青年がそう言うならもう何も聞こうとはしなかった。

「それでこれから何が起きようとしているんだい。」

「さて。どうなるか。だが、その前にこの騒ぎには収集をつけておきたい。その為に俺は各所を訪れている。」

「ここに来るのは間違いだったのかな。そんな話は聞かないよ。」

「そうか。だが、何処まであるのかは目で見ないと分からない。」

「雛も同じような事を言っていたんだけど何が関係があるのかな。」

「恐らく。本人に聞いてみないとそれは分からない。」

青年はそのように答えていた。

「今はどうしてにも出来なさそうだね。雛は今体調を崩しているんだ。厄が多くて取り込み切れないらしいよ。」

「そうか。感染症の症状の中に寝込んでいるのがあるのだが何か心当たりはあるか。」

「そうなっていると思うよ。厄が溜まり続けるとそのようになるときもあるから一概にそうとは言いきれないけど。」

にとりは少し笑いながら答えていた。青年は仕方がなさそうに表情を変えていた。何か進展もありそうでもないのここで話は終わらせようと思っていた。

「雛も気になるが今は進むしかない。話しかけてすまなかった。」

手を挙げて適当な挨拶をするとその場から離れようとしていた。だが、聞き忘れた事があるようで青年は少しだけ体を捻りながら後ろを向いていた。

「妖怪の山の天狗はどのようくらい殺気立っている。」

「権はそこまでない。けど、他の天狗はどうだか分からないかな。」

「そうか。ありがとう。」

青年は感謝を述べて山道を歩いて登っていく。参拝者とは違う道を行く青年の足取りは慣れたものでサラサラと進んでいく。その道には確かに邪魔はあるがそれでも青年にはそこまで問題ともならない。

「朴念仁。だけど仕方がないかな。」

青年は過ぎた後で誰かに伝えるように一言ボヤいてみたが届きそうもない言葉だった。本人に言えれば一番簡単なのだがそれが出来ない理由はある。耳に入るのかどうかという事だ。

第48話

薄暗い森の中ということではないが日の落ち方が何となくそのようにさせている事を感じさせるような時間となってきた。黒い髪をゴムのようなもので一つにまとめていた青年は紫色のマントを纏いながら妖怪の山を登っていく。

お尋ね者として青年の顔は幻想郷に知れ渡っているが現役にそれをしてるのは妖怪の山だけとなる。真実を知っているのは土着神である洩矢 諏訪子と守矢神社で二柱を務める八坂 神奈子しか知らない。その神社で巫女でありながら現人神である東風谷 早苗はどうかは分からない。

青年は本当は入ってはいけない場所へときているのだがその事を一切感じさないその風格はもう凶々しいという言葉では済まされないうものとなっている。それとも頭の記憶力が弱いので忘れてしまったのか。その事はどうでも良いと言えるようなほど青年の性格が適当だからなのだろう。

「その人。止まりなさい。」

黒い羽を持つているその天狗は腰に携えている刀の柄にもう既に触れていた。それだけ警戒が高まっているということが言えるが怪しまれているというのは何も言わなくても分かっている。

「そうか。俺に何か用があるのか。」

青年は前にいたその天狗にそのように言った。その下から来るような声に少しだけ息を潜めた天狗はどういう理由でなのかは知らないが刀を抜いていた。

「その顔は見覚えがある。同行お願いしたい。さもければ言わなくても分かるだろう。」

「そうか。」

青年は刀を抜いている天狗に近付いていた。ゆっくりと歩き出した青年に天狗はどうしようもなくなっていたがすぐに切るわけにも行かなかった。理由はどうであれ刀を空振りさせて威嚇していたが止まる気配は全くなかった。そして何を思ったのか天狗はもう斬り

伏せていた。曲がる青年に天狗は何がいけないものであったかのよ
うに顔を曲げていた。もう怖かったのだろう、表情を見ればそれはよ
く分かった。

「何処だ。どこに居る。」

天狗は辺りを見ながら声を出していた。怖いという感情をむき出
しにさせて辺りを見渡すが当たり前のように姿は見えなかった。

「身体能力が白狼天狗に劣る烏天狗はこの暗さの中ではさぞ大変だろ
う。」

「後ろか。」

天狗は瞬時に振り返って刀を振る。

「どうしても見つけられないか。」

「何だよ。」

天狗はもう一度後ろを振り返った時には見える位置に青年がいた。
だが、これは何か違うものであると思えた。

「俺は剣を抜かない。血で汚したくはない。」

青年は特に気にすることはなく天狗の横を通っていくだけで何か
危害を加えようとはしなかった。天狗も刀を振ろうとは考える事が
できなかった。

「待て。何をするつもりだ。」

天狗は正気を取り戻したのか遠く離れた青年に声を掛けていた。
青年は鬱陶しいとは思わなかったが面倒なことではあるのは仕方が
ないと思われる。

「何もしないつもりだ。だが、何か危害を加えようとするのなら抵抗
はする。」

「精々逃げ続けるがいい。天狗を敵に回した事を後悔させてやる。」

「そうか。残念だがもう幻想郷を敵に回している。その程度で公開し
ていられるような小物でもない。」

青年は少しだけ笑いかけながら話しかけていた。冗談交じりに言
うのがどうにもそうなのではないかと天狗は思い始めた。思い始め
ただけであるが真相は闇の中であるのは間違いない。

「ドロンー」

「奇抜な掛け声だ。」

青年はそう言うだけでまたいつも通り山道を進む事にした。青年は一人で山頂へと向かう事にした。

山道という道には似合わないような足場を通っていく。どうやら獣道のようながそれだけではないと青年は思っていた。

「貴方ですか。また迷惑な事をしてくれましたね。」

「そうか。歩いているだけでも迷惑だったのか。」

青年は上から降りてきたその人に特に驚くこともせず平然とした態度で何も言わなかった。

「もうそうなるとどうしようもありませんね。」

白い髪をしていて山伏のような赤い帽子をかぶっている黒いスカートに赤い紅葉が描かれているものを着ている。そして天狗らしい一本底の下駄を履いている。

「して、権。今日は何の用で来た。」

青年は本当に気づいていないのかと言いたくなるほどになっていた。

「言わなくても分かるでしょう。烏天狗から報告を受けましてどうやらお尋ね者であるらしいので私まで来たということですよ。」

「そうか。それはご苦労だった。俺は先に行く。」

「待ちなさい。何か知っていることはありませんか。」

権は切羽詰まった表情で青年に聞いているが聞かれている方が首を傾げていた。わざとらしいかもしれないが権は焦らせるようなこととはしなかった。

「気楽に過ごしていたらそれで良い。今まで通り警戒に当たっていてくれ。」

「貴方は私ではどうしても手綱を握れなさそうですね。」

「そうか。嬉しいものだ。」

青年はそう言うだけだった。何か言いたい事があるのかと青年は思っていたが別にそうでもないらしい。

「妖怪の山の事は神奈子と諏訪子に任せている。後は博麗の巫女と管

理者には知らせている。権にはそうなっても仕方がない。」

「一回休んでみてはどうですか。」

「やりたい事をやっているだけだ。その暇はないだろう。」

青年は楽しそうに答えていた。権としては同じように微笑んでい
るだけであった。仲がいいのかと思うが別にそういうわけでもない。

「何か私には想像出来ないような事が待っているのでしょうか。何か協
力できる事があれば言ってください。」

「そうか。一般権。」

青年はそう言っていた。その言葉にむっ、とする権。青年は冗談が
お好きなようだ。

「妖怪の山に來ないでくださいとは言いませんけど迷惑にはならない
ようにしてください。」

目を細めながら答える権は青年に忠告していた。当の本人が耳に
入れるのかどうかの問題なのだがその点では関係はないと思われる。

「そうか。また後で管理者に話す事にする。それによつてはまた来る
事にもなるだろうが山道に行くことはないと思う。」

「寂しくなりますね。」

権はそう呟く。一切の言葉を聞かなかつたのか青年はその道を歩
いていく。背中で語ろうとする青年には恐れ入つたものだ。

第49話

守りたいものはいくらでもある。だが、手の届かないようなところにあるものは取りに行くようなことは不可能。誰も捨て、何を拾うかはその人の判断による。自分の尺に合わせて持っていけばいいがそれを守れない人も居る。そしてその事を気にしない人も居る。

夕暮れというには少し時間は遅くなっている。地平線に赤い球体が吸い込まれていくのを背中で見ながら大きな赤い鳥居を見ていた青年は何も気にする事もなく中へと入っていく。堂々と真ん中を通っていく薄紫色の服装をしている青年はその先へと進んでいた。

境内には人が居ないのでどのようにしていても別に構わないのだが神の前でのその行為は普通なら許されるようなものではなかった。普通なら。

「邪魔する。」

青年は神殿にある襖を開けていた。何の前触れもなく開けていく青年だが誰も怒るようなことはない。それだけ器が大きいので許す事ができるという言い方が一番当たっているかもしれない。

「あ、こんばんは。」

緑色の髪をしている現人神である東風谷 早苗は夕食を食べようとしているようで茶碗にご飯を装っていた。神奈子と諏訪子はこの社に祀られている神であるので巫女にして貰っているのは別に構わない。だが、すべて任せきりにしていたとは思っていなかった。

「時間が悪かった。また来る。」

青年は踵を返して何処かへ出かけようとしていた。居心地が悪いのもあるが一瞬で空気を悪くした事を感じ取ったのだろうか。青年はすぐさま行動を起こしていた。

「食べていけ。まさか断るなんてことはしないだろうな。」

「それでは頂くとしよう。」

青年はもう一度襖の中の部屋へと入っていた。青年を呼び止めたのは守矢神社の代表として参拝客と気さくに話している八坂 神奈子だった。青年は裏切ることは出来ないので食べていく事にした。

「神奈子には勝てないもんね。」

「そうだな。敵わない。」

諏訪子の言葉に平謝りしそうなほどに氣力を失っていた。もはやそこに青年らしきというのとはなかった。

「何があつたんですか。」

早苗は事情を知らないのかこの三人の話にはどうしても付いてこれることはできなかつた。そもそもあの時は居なかつたと思う。

「それは様子を見ていれば分かる。して、今日はどのようなもてなししてくれるだろうか。」

青年はどのように言いながら神奈子の対面に座る事にした。青年から見て左横には諏訪子が座っていて青年の横には早苗がいる。机がそこまで大きいわけではないので四人となると手狭なものだった。

「君は何も変わらないね。」

「そうか。」

青年は諏訪子の発言には肯定していた。本来の姿に戻っていた青年だがその方がらしいので三人とも特に文句は言わなかつた。

「茶碗ありましたっけ？」

「予備で三つあつたはずだ。特に気にしななければ良いがどう思う。」

「予備ということは誰かが使つた物ということか。」

「その通りだ。」

「俺は気にしないが他の人は気にしないのか。」

「面倒な回答だ。答えは何だと思う。」

「興味ない。ちよつとした遊びだ。」

青年は平然としていた。神奈子はその様子を面白がつていたが早苗は気が気ではなかつた。神に対してちよつとした遊びなどと言って冗談を言い始めるのは青年くらいなものなのだろう。世間というのを全く分かつていない、それとも。考えるだけでは出てこない。

「早苗、青年の分も装つてやれ。」

神奈子はそう言いながら青年に話しかけていた。早苗はその話の内容が怖くて聞けなかつた。

食卓には大皿に盛られた炒め物とちよつとした漬物が置かれてい

る。それとお餅が置かれている。黒っぽいものがかけられているので何か味付けはされているのだと思った。紅と白なのでお供え物の類いだろうかと青年は考えていた。

「今日の献立は鹿肉と山菜炒めと山菜の漬物と醤油で味付けした餅です。いっぱい食べてくださいね。」

早苗は気を取り直して軽快に大きな声でそう言った。まさかの来客に困惑したがもうそのような事はないと思われる。

「米を米で食べるか。斬新だ。」

青年はその気に乗せられてからそのように言っていた。テンションはそう変わらないように思えるが外側ではいつも通りである。その表情に変化はない。

「幻想郷では常識に囚われてはいけませんよ。」

早苗はいつも通り元気よく答えていた。

青年は神奈子と諏訪子のご好意で泊めてもらうことにした。ここで返すのも危ないからだという理由だがその真意は知れる範囲ではない。

その日の晩の事。各々が寢室を襖で分けて終えた時間に早苗は青年の元へとやってきた。

「あれを試してみたいんです。」

早苗は青年の寝る部屋へと入ってきて開口一番にそのように言っていた。襖で仕切られているので中で何をしているのかは一切想像出来ない。声と音しか聞こえてこない。

「そうか。俺が布団に横になる。早苗の好きなタイミングで来るといい。」

青年は意外にも寛容的であるらしくしてくれるらしい。

「有難うございます。」

早苗は青年に言われた通りに準備を整えてから青年の上へと乗り上げていた。青年は早苗が乗ろうとも顔色一つ変えようとしないうちはもう慣れてしているのかもしれない。それともまだ不満であるのか。「もう少し身を委ねてみてはどうだろうか。」

青年がそう言うので早苗は意を決して青年の上に完全に乗ること

にした。とても気分が良いのか艶っぽい声で鳴いていた。

青年はそれに顔色一つ変えることなく冷静に早苗の事を気分良くさせていた。

「気持ち良いですー。」

早苗の方はどうやら耐えきれないのか柔らかい声でそのように言っていた。頬を赤らめているように聞こえないこともないので気になるかと聞かれるとそうだと答えたくなる。

早苗は青年の上で我慢出来ないように腰を振っていた。ゆっくりとしたペースであるがじつくりとそのテンションというのは上がっていると思われる。

そして最終的に早苗は短く切れた声しか出さなくなった。そうなるに連れて段々と声が大きくなってくる。髪を乱して揺れている姿は一言で言うところ妖艶だった。

「お前たちは何をしているんだ。」

それを聞いていた神奈子が堪らず襖を開けていた。

「神奈子様、とても気持ち良いですよ。」

「いや、うん。お前たちは何をしているんだ。」

神奈子は頭を抱えながら面倒になったのかそれとも何も言えないほどに呆れてしまったのか。もし良かったら楽しんでもいい、と神奈子は言ってから襖を閉めて何処かに歩いていた。

「何が言いたかったんでしょう。」

早苗は意味が分かっているのか青年の上で腕を伸ばしていた。

「まさかこの歳になってこんな事をするとは思わなかった。」

青年は呆れたように言っていた。それでも付き合うのだから同類なのだと思われる。

次の朝、社に祀られている二人の神がいなくなっていて騒然としたとかしなかったとか。

第50話

興奮冷めやらぬ朝。騒動のあった守矢神社を早々に立ち去ることにしたい青年は特に朝食を摂ることもせず、何処かへと向かうために空を飛ぶ。

朝ということもあり地平線から浮かび上がる太陽がまぶしかった。何もかもを照らす太陽だがこのような時はどうしても違うと思われる。

黒髪で紫色のズボンを履いている青年は後ろ髪を風になびかせながら幻想郷と冥界の狭間にある隙間へと向かった。前に起こった異変以降、特に閉められることもなかった。今では生きていようと死んでいようと関係なく冥界に行ける。ただし、歓迎されるかどうかはまだ分かっていない。

狭間の中へと入った青年はその灰色の色のない世界に伸びている段差の低い階段の上に乗る。別に飛んで行ってしまうても良かったが何か風情がないと言うことでこう急いでいる時にだからこそ歩いて向かう事にした。そう慌てても何も良い結果は出せないと思われる。

石で作られている灯籠がほの暗く石畳の道を照らしていた。その結果として幻想的な光景となっているわけだがあまり興味の湧かない青年は特に思う事なくその場を立ち去る。だが、綺麗に整っているその道は何処かの神社とは大違いであると思えた。

その石畳の道の前にある階段を登る。その先には白い壁と黒い瓦でその先の景色というのは見る事ができなかった。だがその先の景色を知らないわけでもない青年は特に何も考えているような様子はなく足を進めていた。何が起ころうのかも分からずにここに来ているわけでもない。

中の様子はいつもとは変わる事はなかったが何となく雰囲気が違うように感じた。それは空気感であったり場の重たさのような抽象的な表現しか出来なかった。

本来冥界にある白玉楼と言う名の建物には来世を待ち遠しくして

いる幽霊やその類が集まっているはずだがどうにも今回は居ないらしい。

青年は洒落た石畳をスキップしていきながら波の文様が描かれた庭の上を進んだ。厳密にはそうとは言い切れないが軽やかな足でトントンと跳んでいるので何か間違っているということでもなさそうだ。

「山本さん。こんにちは。」

ピンク色の髪をしていて水色の帽子を被っていた女性は青年にそのように話しかけていた。青年は特に気にする事なく白玉楼の縁側へと座る。

周りの空気というのは違ったがこの光景はいつもと変わらなかった。特に音もなく雑念も浮かんでこないような庭の中で女性と青年は二人の時間を過ごす事にした。何も無いはずだがそれでも気になるものはあるらしいので青年は聞いてみる事にした。

「幽々子、何か変わったことでもあるのか。」

両肘を両膝の上に乗せて両手で顔の下半分を覆い隠すようにした青年は幽々子と呼んだ女性に聞いていた。

「あるわよ。見れば分かると思うけど霊がないのよ。」

幽々子はとても軽快そうに笑っているが青年からすれば何か嫌な事があつたに違いないと勝手に思っていた。勝手に思っているだけで幽々子がそうでもないのですのように考えるのは青年はすぐに辞めていた。

「そうか。確か悪い事をしていない霊かこれからの生まれを楽しみにしている霊が居たはずだ。何があつた。」

「下の世界では自分の手でその命を落としたそうよ。閻魔にはきつと地獄へといくようにしているようね。」

幽々子は目を細めながらもしつかりとした目力で青年の方を向いていた。青年がそれを気にするような事はないが何か気になることでもあるのかと思えるほど幽々子の目を見ていた。どちらもそれなりの力で見つめ合うだけだった。

「そうか。何も問題がないのならそれで良い。また来るとする。」

青年はそう言って白玉楼の縁側から立ち上がるとスタスタと庭の中を歩いていった。それを誰も止めるような事はなく追いかけるような事もしなかった。

幽々子は茶を啜りその背中を見ているだけだった。

青年の居なくなった博麗神社。そこで巫女を務めている霊夢は管理者である八雲紫を呼んでいた。

「何かしら？・霊夢。」

半身だけを何も無い空中から出している八雲 紫と呼ばれている女性は金色の髪を垂らしながら目の下にクマを作っていた。その目は何処か淀んでいて何も映せていないようにも見える。

「体調の方は優れないようね。何かあったのかしら。」

黒い髪をしていて赤いリボンを付けた少女は鋭い口調で同じような目で怪しんでいるように聞いていた。

「何もないわよ。少し疲れているだけよ。心配かけて悪かったわね。」
紫はくすくすと笑っていた。以前よりも力のないその笑い声を怪しんでいた霊夢はその疑いの目というのをやめようとはしなかった。何もかも見透かしているような霊夢の目に負けたのか紫は口を割った。

「分かったわ、霊夢。私も同じような症状だと思っているわ。」

「そんな事は分かっている。無理はしない事よ。」

「心配してくるのね。有難う。昔を、思い出すわね。」

「勝手になさい。それとね、一つ聞いておきたいんだけど良いかしら？」

少し怒っているように言っている霊夢だが内心ではそこまででもないようで口元にはそれが現れていた。紫はふと気づいただけだったがそれを態度や言葉では示す事なくやりたいようにやらせていた。

「良いわよ。」

紫はあっさりと答えていた。しかしその前の間がどうにも引つかかるらしいのでなんとも言えないようだった。

「青年から言われて気になったんだけど博麗大結界の力が弱まってな

んでないでしょうね。」

「それはないわよ。安心なさい。」

「そっちの方は任せたわ。早めに横になってなさい。」

「そうするわ。」

紫は自分の能力を使って博麗神社まで来ていただけであつてまた別の事をしている。幻想郷の管理であるが現状では難しい状況であるのには変わりがないのでこちらでなんとかしないとイケない。

今日のところは青年が帰ってくるのを待つか何か大きな事があるまでは動く事はしないようにしていた。別に青年に任せているという事ではなく何をしてくるのか楽しみにしているだけだった。

霊夢はいつものように湯呑みに入れた薄い茶を飲む。そして卓袱台の上で簡素な茶菓子に手を伸ばしながら夜が来るのを待つ。そして布団を敷いて横になれば朝になっている。博麗神社での生活はそんなものだ。

選択の時

第51話

幻想郷はとても綺麗な朝日に照らされていた。緑色の映える森林とその奥には活気のあつた人里がありその奥には守矢神社がある妖怪の山がある。西側には霧に包まれた湖がありその奥には紅い壁に囲まれた紅魔館がある。そして東側には青年が最も期待している場所がある。その場所は寂れているがきつと大きな事を成し遂げられるだろう。

青年は冥界と幻想郷を切り分ける境界の切れ間から飛び出してその風とその熱に身を任せていた。冷たく凍てつくような気もあつたが青年の心は徐々に温度が高まりつつあつた。何故か暖かいので青年は本当に気にしていなかった。その証拠に口元には笑みが溢れている。

黒髪を強く揺らしていた青年は両脚、両腕、身体に風を巻きつけて妖怪の山のその先へと向かっていた。滑空しているが多少なり制御していたらしく綺麗な軌道を描きながらムササビのようになっていた。

中有の道を通り抜けて地面へと飛行機のように着陸した青年は前へと来ていた髪を後ろへと流してゴムのようなもので止めていた。その先には三途の川があるので丁度様子を見るのには都合がいい。

「急ぎそうだな。」

青年は黒い雲の空の下で高く積まれていた石の上に座っていた。正直普通に地面に座っていた方が楽なのだろうがそれをしないのは青年のこだわりなのかそれともまた違う理由があるのかは本人でもわからない。だが絶妙なバランス感覚なので何か文句を言うような必要もない。いや、言わなくてもいい。

「アンタはヒマそうだね。」

短い赤い髪をしていてトンボで止めている茶色の腰帯をきつく締めた青色の和装をしている女性でその高い身長は立っていても青年

は越せないのだろう。呆れたような口調で話していた。名は小町。魂を運ぶ死神だ。

「サボろうなんて考えないのか。」

「出来ないよ。こんな数があるんだ。やらないとね。」

「そうか。案外真面目なんだな。」

「あたいは元々そうだよ。もっと真面目なのがいるだけだよ。」

「言いたいことは分かる。」

青年はそのように言っていた。その言葉には深い感情が潜んでいるがそれが何であるのかは想像がつかなかった。悔しいのだろうか、嬉しいのだろうか、寂しいのだろうか、幸福感で満たされているのか、それは分からなかった。

「そうかい。それで今日は何をしに来たんだい。」

小町は何となく終わりかけなのを感じ取ったのかそのように言っていた。少しばかりは寂しいようだ。

「何も理由はない。数は最近増えたのか。」

「増えているさ。見ていれば答えるまでもないだろう。」

小町はいつも持ち歩いている鎌を肩に背負っていた。そして簡単に振り回そうとしている辺りはそれだけ得手であるとも言える。青年は特に気にするようないまままその石から立ち上がった。その調子で崩れていたが音は特に出るようなことはなかった。

「そうか。もう終わらせる。原因はもう分かっている。」

「頑張ってくれよ。あたいは期待しているからさ。」

「そうか。」

青年は河原の石の上を歩いていた。短い滞在時間だったがその中で濃さは異常とも言える。

「頑張ってくれよ。私はここで魂を運ぶしか能がないものでね。」

小町は一言だけ呟いた。

第52話

青年が三途の川から帰っている頃、幻想郷の東側にある廃墟のような社のある博麗神社の巫女である博麗 霊夢はある異変を感じていた。その異変というにはいささかおかしいものであるがそれを公言するほどではない為に誰にも言おうとはしなかった。それとも誰にも言うような事はできなかつたと言うのか。

「帰ってくるまでは暇なのよね。」

黒髪をしていて後ろで短い髪をまとめていた。そして赤いリボンをつけていて赤い巫女の服に身を包んだ霊夢はちやぶ台に置いている湯呑みを持ちながらそう嘆き、また元の位置へと戻す。別に飲みたから持つているわけでもない。手が冷えるのを嫌う霊夢はたまに湯呑みを持つて指先を温めている。それだけだった。

「ここが幻想郷で合っていますか。」

金色の髪をしている橙色の鎧を身に付けている青年にも似た年月の男は博麗 霊夢のいる小屋の中にひよつこりと現れた。そして辺りを見回して霊夢を見つける。そして霊夢に話しかけた。別に悪気があつたわけでもない。そのはずなのだがもうどうしても違ふとしか言ひようのないものでもあるので霊夢はその場に立ち上がった。何かあつたと言うことでもないのだが確かに何かあつたのだろう。「そうよ。何か問題でもあるのかしら。」

青年にも似た年月の男を睨みつける霊夢の手には何もなかつたが何かあるようにも見えなくもなかつた。

「あります。実は急激に結界の力が弱まっているんですよ。なので様子がおかしいと思つたので見に来た次第です。」

「で、名前は？」

霊夢は信用すると言うことではない。ただ、疑念があるのでその立証にはなるのではないかと言う淡い期待からなのかもしれない。金髪の男性は素直に実直に答えた。

「アーサーと申します。宜しくお願いします。」

アーサーはそう言うてから一礼して霊夢に対して敬意を示した。

その時間は十秒かそれ以上頭を下げていた。霊夢も受け取らないわけにもいかないので何も言えないまま時間は過ぎていく。

「アーサー、ね。聞いた事のない名前だけどどこから来たのよ。」
すると、アーサーは照れ臭そうに話してくれた。

「旅の者なのでその点は何も分からないですよ。異世界である事には間違いありません。」

「何が目的なのよ。」

霊夢は幻想郷を守る博麗の巫女として聞いていた。それこそ守護者としてアーサーが入れても良い人物であるのかそれともいけない人物なのかを判断する必要がある。判断するだけであるが何か違うものがある。個人的な感情まで混ぜているようでなかなか払拭は出来ないようだ。

「魔王から世界を守るためにここへとやって来ました。ここで魔王の侵攻を食い止めましょう。」

強い口調で話しているアーサーだが霊夢には一切伝わる事はなかった。そもそも異世界の話を平然とされたところで誰がついて来れようか。

「そうね。そう言える根拠はあるのかしら。」

「ありません。ただアレスを探しているんです。その人はきつとここへと来ているはずですよ。」

アーサーは戯言のように色んな情報を霊夢に話していた。きつと見透かされているのだろう、重要な人物であると言うことを。

「アレスと言うのが誰なのかは知らないけど何かあるようね。分かったわ。取り敢えず座りなさい。茶を出すから。」

霊夢は兎に角もう少し話を聞きたかったのかアーサーを座らせて自分は他のところへときていた。

アーサーは慣れない環境ということの色んなものを吸収しようとしていた。座ってはいられずに立ち歩いてその床に敷かれている草の感触や木の柱で建てられているのを見ていた。そして何も置かれていないがその中で生活をするという事を想像していた。

「座ってなさいって言ったでしょう。」

霊夢の口調はどうしても冷たかった。実際にはそう見えるだけなので何とも言えないがアーサーは確実にビクついているのだろう。どうしたら良いのかさえ分かっていない。

「済まなかった。どうしても興味があると見てしまうのだ。兄譲りなんだ。」

「そう。気になる人はいるけどその事は今はどうでも良いのよ。」

「そうですか。では、何処から話しましょうか。」

「好きにしてなさい。私は止めないから。」

「分かりました。ではもう起きているであろう事と起きようとしていくことから話します。」

一息だけ吸ったアーサーはゆっくりと息を吐いて心を落ち着かせていた。そしてアーサーが霊夢が茶を持ってくるまでに感じていることを話してみる事にした。

「幻想郷ではもしかすると感染症があったと思います。」

「確かに今でも治ってはいないわ。それがどうしたのよ。」

「霊夢はまだ話が掴めていない。」

「魔王はまず侵略する場所にそのように毒を振り撒いておくんです。その毒は薬を飲んで治そうとすると逆に悪化するものやそもそも薬が効かないもあります。」

「霊夢はこの時に何が起こっていたのかは言うまでもなく分かっていた。そうなるともう末期という状態なのではないかと。もう来ていてもおかしくはなかった。と言う事は前に戦った事のある男がもしかするとその一人なのかもしれない。霊夢はそう考えていた。」

「その後には刺客が来ると言うことね。」

「霊夢はアーサーの話を聞いてそのように質問を投げかけてみることにした。」

「いえ、軽く蹂躪を仕掛けます。もしかするともう来ていてもおかしくはありません。私がこのように居られるのが気がかりです。」

「その事は問題はないわ。来る人はあまり拒まないのよ。出る人は早急に出て貰うけど。」

「それは大問題です。素早く対応しなければいけません。出掛けてき

ます。」

アーサーは出て行こうと襖の方へと近づいていた。それを止めたのは霊夢だった。

「待ちなさい。そんな簡単に行かせないわよ。妖怪に襲われたらどうするのよ。」

霊夢はアーサーの事を心配していた。だが、アーサー犯人は一切その事には感謝しなかった。いや、これはある意味侮辱を受けたと勘違いしているようだった。

「貴女に負けるほど弱くはありません。」

「それはどう言う意味よ。」

「見ていれば分かります。」

アーサーは左腰に携えている剣を抜こうとしていた。黄金の色で装飾されているその剣は正しく伝説に載るようなものであった。霊夢は何か違う雰囲気を感じて一歩引いてしまった。

「その反応も分からなくもないです。皆は大抵そのような行動を取ります。」

アーサーは別に何かしているわけでもない。そして何かを始めようともしていない。ただ剣を見せているだけだった。霊夢にはその剣の真価が分かるのだろうか。そんな感じの表情をしていた。

「行きなさい。アンタの勝手にすればいいじゃない。」

霊夢はかなりふて腐れていた。言うことなど全くないのだろう。

第53話

青年は帰り際に思ったことがある。このまま幻想郷は破滅を迎えるのではないか。そして誰がそれを止めようとするのか。青年がそれを止めても良かった。だが、それには時期が遅すぎた。もう青年の手に負えないほどに成長した病気は誰の手にも止められない。そんな事は言うまでもなく分かっていた。

森を抜けて階段を登っていく青年はどこかこの世のものではない雰囲気を感じ出している。今日はその辺りがグレーゾーンになるような場所にしか言っていないので仕方がないことかもしれない。あまりにも弱過ぎたのかもかもしれない。自分の精神というものが。

薄紫色の服装をしている黒髪の青年はすんなりと階段を登ると何か騒いでいるのに気づいた。一人は霊夢なのだがもう一人は聞くからに男なので言うまでもなく聞き覚えのない声だった。先程よりかは少しばかりか速度を速めた青年は博麗神社の社とは別の建物である小屋の襖を開けていた。

「何をしている。」

青年はいつも通りの感じで話しかけていた。目の前に居た金色で橙の鎧を着用している男性はあまりにも急な登場に驚いていた。腰を抜かしたその人は卓袱台の上に尻餅して湯呑みを畳の上で落とすていた。霊夢はすんなりと避けていたが被害はそれなりにあるのだと思われる。

「兄者！お久しぶりです。」

先程幻想郷に入ってきたアーサーは青年の顔を指差ししながら震えた声で話していた。その指先もちゃんと青年を指せていない。その様子にはでしようね、という感覚を覚えたが騒ぎの渦中にいるはずの青年が一番状況を理解していなかった。その様子はどうやら何も分かっていないらしい。

「知り合いか。どこで会ったのか。」

悩ましい表情をしている青年をアーサーは慌てた表情を見ていた。何が起こっているのかも全くわからないので青年はそんな反

応しかなかった。

「兄者。冗談がお好きなのは分かりますが真面目に答えてください。」
アーサーは頼み込むように青年に対して一礼していた。真面目に答えるも何もどうしたら良いのか分かっていない青年は仕方がなく霊夢に助け舟を出してもらおうとしたがそうは簡単にはいかなかった。霊夢もまるで状況がわかっていないので何も出来ない。青年は一人でこの状況を対応しなければならぬ。

「俺の名前も分からないんだ。兄と呼ぶならその事は察してほしい。」
青年は静かな森林のような声で話していた。こう優しく包まれるような声であるのでアーサーも信じるしかなかった。反論の余地もないので仕方なく聞くしかなかった。

「そんな過去が何があったのかは聞きません。」

「そうか。して、何処に行こうとしていた。」

「これから見回りに行こうと思いました。」

「その必要はない。少し話したい事がある。いいか、霊夢。」

「勝手になさい。頭が追いつかないわよ。」

霊夢は唇を尖らせてながら何処かへと出て行っていた。何か気を遣わせてしまったように感じた青年。アーサーは特に気にしている様子はないので青年の口から何が出るのか楽しみにしていた。

「まず幻想郷で起こった病気の名は分からないが口語感染であるのは間違いない。」

畳の上に座っている青年はアーサーを座らせてから話していた。

「つまり口から口へと言葉を通して感染が広がったという事ですか。ですがどうしてそのようなことになったのですか？」

「此処は広さの割には情報伝達が早い。そして小さな事件でも見逃さない観察力のある精鋭とも呼べる記者が多くいる。それが今回は仇となった。」

「記者という言葉は分かりませんが要すると情報屋ということ構いませんか。」

「簡単に言えばそうなる。説明は省くが一人一人が王のような発言力があると云ってもいい。」

「この世界はそんなに強い発言力を持っている人がいるんですか！驚きました。」

「そうか。して、これを止める手段はなんだと思う。」

そう聞かれたアーサーは青年の質問に応えようとしていたがそう上手く思い浮かぶわけでもないので頭を悩ませていた。それはもう仕方がないと思われる。

「抹消するとかですか。」

「いつからそんな物騒な考えを持っている。」

「兄者譲りですよ。僕は兄者の背中を見て育ったと言っても過言ではありません。」

「そうか。記憶を失う前は随分と荒い性格だったようだ。」

青年はそんな事をつぶやく。だが、人間がそう変わるわけもないので何処かに潜んでいるだけだろう。それとも少しだけ柔らかくなつて随所に出る棘のようなものであるのか。

「その話は今はやめておきましょう。兄者はどのように考えているのですか。」

「人の心を温かくする。その為に俺は昨日の内に出来そうなところは回ってきた。あとは辛抱強く待つだけだ。」

「流石です。私はとても感動致しました。その行動力は正しく兄者ですよ。」

「そうか。此処は変わらないのか。」

青年は何処か嬉しそうにしているがそう簡単に終わる話でもないのはいうまでもない。

「そうですね。とても安心しました。提案が一つあります。聞いてはもらえませんか。」

「そうか。」

「手合わせをお願いしたいです。まだ信用出来ないんですよ。」

「何か問題でもあるのか。」

「確か死んでいるはずなんですよ。六年前からそのような噂が流れています。」

「そうか。あまり気乗りはしないが少しだけだ。」

青年は立ち上がるとゆつくりと歩き出していた。そして襖を開ける。

「霊夢、話は聞いていたのだろう。少し場を借りる。」
「好きになさい。」

蚊帳の外であり部屋の外に出た霊夢にとってこれ以上不機嫌にならない理由はなかった。それを感じ取って青年は止めようと考えたがそれを言うまでもなくアーサーが後ろから背中を押したのでその頼みは水の泡のように消えてしまった。忘れ去られたように青年は剣の柄に触れる。

第54話

風が靡かれている二人は瞬時に判断してお互いが同じタイミングで剣を抜いていた。金色の髪を風に遊ばせていたアーサーは黄金色に輝く鞘から白銀の刀身を見せた。綺麗に磨かれていたその剣は王に相応しく誰もが平伏するような風格を持っていた。まるで剣が人間そのものの威厳を示しているようだった。

対して青年は何の変哲も無い鞘から黒い刀身を出していた。間合いの広さも劣るがその力も劣っているようで完全に不利だと思われる。それでも切っ先はしっかりとアーサーの方を向いているのである気だけは十分だと思われる。

「先に忠告する。建物には危害を加える事は許さない。」

青年は両手に持っている剣をアーサーに向けながら右脚を後ろにして構えながらそのように言った。本来ならそのように言う必要もないのだがどれ程の力を持っているのかは未知数であるので何とも言えなかった。

「分かりました。」

アーサーは青年の言葉に答えると左脚を踏み出して青年に刃を向けていた。特に変哲も無いと思わせるほどの刃で全てを裂くように尖らせていた。両方から研ぎすまされているのできつと並大抵の剣ではないと言える。

青年はアーサーの右側からの攻撃を受け止めていた。両足にかかると圧力を感じながら全てを受け止めた青年は地面を滑っていた。ザー、といったまにか敷かれている石の上を転がっている音が聞こえてくる。何が起こったのは全く見当もつかないのだがそれがどの様なものであるのかは言うまでもなく危なかつしい物であった。

「相当な力があるようだ。見くびっていた。」

青年は滑っていた石を軽く蹴散らしながらそのように呟いていた。石と石がぶつかるようなそんな小さな音をしている中で青年は平然とした態度でその場に居た。

「私の剣はそこら辺にあるようなものではありません。お忘れです

か。」

「記憶はないと言っただろう。」

青年の声はアーサーに届くようなことはなかった。更なる一撃を兄に会った感動をそのままにして突き進むアーサー。その剣を受け止めようとしている青年は両手に持つている剣を交差させて何処からでも対応出来るようにしていた。何もかも置いてけぼりを食らっている霊夢は小屋の縁側から二人の喧嘩のようなものを見ていた。これから何が始まるのかを楽しみにしているようなそうでもないような感じはする。

アーサーの剣が青年の持つている剣に当たる。上から押しつぶすかと思われた一撃は青年の左側から顔を出すことによつてその幻想は打ち壊されていた。

青年は左腕を使ってアーサーの剣を上へと持つていく。刀身の上を滑る時に鳴る耳が痛くなりそうな高い音がしている。そして右腕の剣へと移し替えると振り被ったその全てを別の場所へと向かわせていた。青年は自分の右側を見ていた。そこにはアーサーの使つている白銀の刀身をした剣がある。青年はその場から一步逃げるようにしていた。

「逃げるなんてどういう風の吹き回しなのでしょうか。」
「さて。」

青年はアーサーの嘆きを特に関係ないようにしていた。特に興味もないらしく何か声を掛けたわけでもなかった。

「貴方の剣は変わってしまったようですね。」

「そうか。環境が変わればそうなるのも仕方がない。」

「そんな物ではありません。兄者の面影はなくなってしまった。あの豪快でねじ伏せるような剣は捨て去つたのですか。」

「何処かに置いてきてしまったようだ。」

青年は軽く答えていた。そう重くは考えていないその反応が気に入らないらしいがアーサーはそれを剣で晴らそうとはしなかった。そこはわきまえているらしいが本当のところは全くわかっていない。もしかすると呆れてそれでは出来ないのか。

「あの強かった剣は何処に行ってしまったのですか。」

「あの完膚なきまで打ちのめされた私はただの弱者だったのですか。」
「分からない。」

青年はアーサーの叫びを卑下にしたいと言うわけではない。だが自分が何の話をしているのか理解できないなら何を話そうとも止められるわけがない。そうなればもう言うまでもなく何をしても無駄だ。という結論に至る。

「目覚めてください。兄者！」

アーサーの剣が光りだす。そして青年に向けて空から振りかぶる。青年は受け止めもしなかった。真っ向から勝負はしないつもりなのだろう。一歩だけ後ろに下がっていた。

地面には亀裂が入る。そして青年の股の下には入っていた。振り上げられたらどうしようもなかった。だがそれだけの接近を許していれば青年も何もしないわけがなかった、普通なら。

だが、青年は何もする事なくその場から退いてアーサーに剣を地面から抜くように言葉は無くとも行動で示していた。それがどれだけのものであるのかは言うまでもないがアーサーにとっては不満でしかなかった。それこそ不平な扱いを受けた人のように。

「兄者はこんな奴ではなかった。兄者は勇ましく戦い続ける男だった。私はお前を斬る。」

アーサーは高らかに宣言したので青年は受けて立つ事にした。

第55話

「そうか。」

青年は静かにそして沈着した表情でアーサーの方を見ていた。そして切っ先を向けていて殺気立った目をしている。だが、それだけではないのは何となく分かる。

「行きますよ。この剣の輝きを見よ。」

白銀の刀身は黄金へと色を変えていた。そして威厳のあるその剣は自らの持ち主に答えるようにしていた。アーサーは持ち主として飼われるわけにもいかないのです。その相応の修練は積んでいると思われる。正しく剣と同等の力を持っているアーサーには恐れ入るがそれで身をたじろがせるほど青年も弱くはない。

霊夢はきつとその点まで見定めた確かな目があるのだと思われる。だが何か不思議な力を持つているとは誰もが感じ取れるはずだ。

「まだ変わるか。興味深い。」

青年は手の中で剣を回す。その一回転の中でアーサーは下から振り上げるようにしていた。右側へと腰を回して水平線を描いていた。青年を容赦なく襲うその剣は確かに意志があるようにも感じた。

それを目の当たりにした青年は身を低くしながら真っ直ぐにアーサーに向けて蹴りを入れていた。左膝の力を抜いてしつかりと地面に身を落としてからしつかりと右足を伸ばしてアーサーの橙色の鎧に当てる。今までとは違いうまく攻撃が通らないが当てただけでもいいのだろう。

それだけでは終わらずに右脚を蹴り出してアーサーから離れた青年は境内の石の上を転がっていた。前転しただけだがそれでもかなりの間合いは確保出来たと思われる。三尺ほどはあると思われる。

「本当に忘れてしまったのですか。これを何処か兄者なのですか。」

アーサーは更に声を荒げていた。戦士としてなのかそれとも一人の人間としてなのかは分からないがそれがどちらでもいいとは思えなかった。そんな事を気にしていられるほど優しい戦いはしていなかった。

青年は地面にある石を使いながら反転してアーサーの放つ剣を避けていた。その速さや正確さは恐れるものだがなんとも言えないようなものがないわけでもなかった。

今までとは何か違うと思えたそれだけではないと思う。アーサーは兎に角理解に苦しんだ。どうしてこんなに変わってしまったのか。どうして豪快な正面からねじ伏せるような戦い方は辞めてしまったのか。

面影を見ていたアーサーには到底理解できるようなものではなかった。理解されようとしてもしない青年にはこれは問題があるのかも知れない。

「俺は名前を捨てた。そして記憶を捨てた。故に昔を捨てた。そんな俺に兄として慕う人がいたこともない。そして何をしているのかはお互いに知らない。」

「そうですか。私の勘違いだったのでしょうか。」

「無責任に発言は出来ない。控えさせてもらう。」

青年は重要なところではぐらかせた。

「しかし今の私には立ち止まることは許されない。相手お願いおう。兄者に似ているもの。」

「そうか。その覚悟、しかと受け止めた。」

「あとで話は聞かせてください。」

「そうか。なら投降するほかない。どうする。」

「私が勝てばいい事。それだけです。」

アーサーの剣はさらに輝きを増していた。ここからでは何も見えないと思える。青年もそれに答えるように更に鋭くさせたその目をアーサーに向けていた。何方も競い合い切磋琢磨している。

そんな二人の様子を縁側で見ている霊夢は驚きと呆れた友情を見せられていた。前からこのようなことには興味のない霊夢だがそれにしては出しすぎているように感じる。もう少しくらいは興味を持っていても良いと思われるがそれが許せないらしい。

「そうか。」

青年は短い中に何かの感情を込めていた。それが何であるのかは

不明だが確かに何かあることには間違いないと思われる。

それに答えようとするアーサーが腰の回転を加えて持っている剣を振ろうとしていた。水平線を描かないその軌道はとても読みづらかった。そして水面から浮き上がるような感覚を覚えた青年はその剣を受け止める。

下へと押さえつけるように両腕を使っていた青年だがあまりにも力の差があった。アーサーの剣はその持ち主に答えるように力を高めていた。それに対して青年は特にそのような事はしていない。要は自分の腕の力だけでアーサーの剣を止めていた。仕方ないので力を抜いて甘んじて受ける事にした。

浮き上がるような感覚とそれを抑えようとしている体。そして何もかもが消えていきそうだった。

地面に落下した青年は持ち前の根気で立ち上がる。その揺らめく夕日のようにこれから居なくなろうとしていた。

「その実力は認めます。ですが兄者とは到底呼ばれません。」

アーサーはそれだけ言つて手に持っていたその剣を鞘の中に納めた。青年も同じように剣を鞘の中で眠りにつかせることにした。

「そうか。期待に応えられなかったのは残念だ。」

青年は終わった事には囚われない。次の段階へと足を進めていた。

「話を聞かせてもらいたい。どうして手を抜いていた。」

アーサーは厳しい表情をして青年に言葉を投げかけていた。青年は答える気はなかったがそれはちがうように感じた。

「軽くやろうと言っただけだ。手を抜くのは当然だろう。」

青年は平然と答える。

「と言うことはまだ力は隠しているのですか。」

「どうだろう。まだあるのだろうか。」

「それでは困ります。」

アーサー文字通りそのような表情をしていた。もう止める義理もないのでそうなってしまうのだろうか。

「そうか。冗談が好きなのが貴方の言う兄者なのだろう。許せ。」

「はい。その通りなのですがどうしても同じ人物であると思います。」

アーサーは珍しく暗い表情をしている。霊夢が見る限りではその髪と鎧の色と同じような性格の人だと推測するがどうにも今はそうではないらしい。

「さて。」

「私はこれから幻想郷を回ってみようと思います。」

「思い寄らぬ危険があるだろうから気をつけろ。」

青年は行こうとするアーサーを止めるようなことはしなかったが忠告だけはしておいた。別に負けた人が言うようなことでもないがアーサーは聞き入れるつもりらしい。そこだけ見れば人の話はよく聞けらしい。そして素直に受け止めるらしい。

「分かりました。ありがとうございます。」

アーサーは元気な顔で階段を降りていた。

「アンタ、手を抜き過ぎてないかしら。」

「そうか。そう見えるか。」

青年は後ろからかけられていたその声に答えていた。そこに居るのはこの建物の主人のような存在である博麗 霊夢であった。それが何か問題でもあるのだろうかと青年は簡易的に考える。

「むず痒くて仕方がないわよ。」

「そう怒るな。シワつく。」

「余計なお世話よ。で、これからどうするつもりなのよ。」

霊夢は聞いていた。幻想郷を守る側としては聞いておきたいのだろうがそれでどうにかなるのかはまた別の問題である。

「現状、流行っている病を治す方が優先させる。人に悪い影響を与えるような情報は流すな。選択を誤れば貴方は簡単に人を殺せる。慎重にやって欲しい。アーサーが来た現状は絶対に勝てる。だが一概にそうとも限らない。」

「結局どつちなのよ。」

「無効させることもある。そうなれば今アーサーの持っている剣の力は無に還る。そうなれば簡単に負ける。動かせる人も少ない。ここを凌げば幻想郷は助かる。霊夢はどうしたい。」

青年はゆっくりと歩きながら霊夢の方へと近づいていた。戦闘に

に負けた以外にも何か他の疲れがあるように感じる青年は霊夢の右隣に座った。

「私は、」

霊夢は小さな声で話していた。その声は青年にも届きそうもなかった。

第56話

霊夢の回答の結果を聞いた青年は一路忘れ物を取りに行っていた。厳密には完成する前に出てきただけなので青年のミスであるがその事は今言っても意味がない。

青年は命蓮寺のある妖怪の森へと向かっていた。そして仙界へと行きながら二人の様子を見てから魔界へと降り立った。二人は前とはあまり変わっているようではないのだが青年は深くは考えていなかった。水に流そうとは言わないがそう言ってもおかしくはないと思われる。

黒髪の青年は何もない魔界へと降り立った。だが、村がないというわけでもないで青年はそちらへと向かう。実は作ってもらえるように頼んだ鍛冶職人がいる。見た目は人間とは変わらないと思うが少しぐらひは魔界の環境に適応していると思われる。青年は高身長でスラツとしている。白髪混じりで年はかなり重ねていると思われる。職人気質なようだが青年は特に問題はなかったらしい。それ以外には特徴というのは見当たらない。

「出来上がっているか。」

「おうよ、待ってたぜ。」

魔界の村の何処かにある鍛冶職人はそのように答えた。青年は工房の出入り口に立っていてそれ以上は入ろうとはしなかった。中は見たことのある気はするがまた別であるのは確か。青年は何回か来ているがそのことは言わなかった。

「そうか。もう出来ていたのか。」

青年は工房と外の境界線に立ちながらそのように軽い口を開けていた。そこまで慎重に言葉を選ぶつもりはないらしい。

「いや、ちよつと前だ。最近上手く体が動かなくてな。」

「そうか。だがそれでも作ってくれたことには感謝している。」

青年は大きな声でそのように言っていた。それには距離が関係している。鍛冶職人は青年のいる出入り口の近くにいたのだが物を取りに行ったのか遠くへ歩き出してしまった。そんな訳であまり出さ

ない大きな声で話を進める。

「おう。」

そう言われた青年はもう言うことはないのではこの場所で待つ事にした。別にそうする必要があるのでと言われるとないと思われるが青年が決めていることらしいので口出しはしない。

「これはお前さんの手にはめて使うものだ。上から被せてくれたら使える。外す時は手首の方からしてくれ。」

青年は相槌程度に頭を一回縦に振った。

「それと、魔法陣はお前さんとは確実に違うから慣れるまでは無理な使用はやめておけ。これは俺からの頼みだ。」

「そうか。忠告ありがとう。」

踵を返して帰っていく青年の背中を魔界の村の鍛冶職人は少しだけ悲しそうな目をしてみていた。数奇な運命を辿らなければいいと願うばかりだ。代金の方は食品を渡す事で前払いしているのでそこは何の心配もない。

青年が帰路に着いたその途中で魔物に会った。正確には魔界に住んでいる青年が食事を取るために対峙していた生物なのだが今回ばかりは狙ってこなかった大ききなものだった。脚だけで青年の背は超えている。長のような風格を持ち合わせているので青年は会う前に逃げていた。

だが、今回は逃げようとも思えなかった。手には先ほど貰った道具がある。瘴気の立ち込める魔界では魔力というのが多く自然に魔法が扱えるようになることもある。その中で青年が元々持っているものを増幅させる様にしたらどうなるのかは試した事はなかった。

呻き声をあげるその魔物は青年の姿を見つけると一直線に突進していた。猪の見た目をしているのでそのように猛進をするのはよくわかっていた。

左へと飛び込むように避けた青年は魔界の地面に身を滑らせていた。どうやら身体能力も強化されるらしい。青年はふとそう思った。それは微々たるものではなく倍加にも等しいような気もする。一番

噛み合う場所なので仕方がないかもしれない。

左腕を伸ばして逆手に持っている立ち上がった青年は切っ先を下に向けながら刃を魔物に見せていた。瘴気立ち込める魔界では光はあまりないが夜というのものもない。薄暗い日々が毎日続くだけなのでそれなりの光しか出てこない。

魔物はそれでも反応した。光や音に敏感になるのは動物としても条理なのだと思う。青年は身構えながら逆手に持っていた剣を遠心力に任せて魔物の猛進に合わせて振り切っていた。

右脚を内側へと向けさせられてバランスを崩したので青年は軽く避けておくことにしたが当たるものには当たるのでそこはもう仕方がないと思われる。

魔物は地面を滑り自分の体を擦りつけていた。それだけの速度のパワーがあったのだと思われる。軽く巻き込まれる形になった青年の方が早く立ち上がった。

「かなりの威力はあるようだ。」

立ち上がれなくなった魔物の命を頂こうと最後の一撃を与える。バサツ、という音と共に地面に落ちた頭。確実に絶命したと思われる魔物はその場で動かなくなっていた。

多少の疲れを感じた青年は両手の指を適当に動かしながらその力を試してみることにした。何の変哲も無いなんて事はもう言えない。手首の方から手につけている装備を外した青年は右手に持ちながら帰っていった。

その後、長と思われる魔物の肉は青年によって村に運ばれていた。別に世話になっていないというわけでも無いのでここまでの感謝を込めて渡した。それに住人は喜んでいた。和気藹々としている雰囲気の中で皆と一緒に肉を焼いて食した青年は魔界での楽しい時間を過ごした。

帰ったのは昼過ぎだろうか。青年はそんなことを感じながら帰路へと着く。此処という目的もなく居候でもするのかと思われるがさて真相はどうなるのかは誰も知らない。しかし何処か楽しそうにしている青年は自覚していないようにも感じた。

第57話

何も変わらない朝の日。そして大きく幻想郷の勢力図が塗り替えられそうなになっているそんな朝だった。

東側から人里へと向けて人の集団が攻めていた。その数は歩くだけで土煙が出るほどの人数である。それを抜けていくのはとても骨が折れる。正しく青年が予想していた通りになっていた。そして此処で青年が何処までやれているのかは聞くまでもなかった。

何もかも予想が付かなかった幻想郷の住人は動揺していてまともに動きそうにはなかった。

大きな戦乱の前に一つの星が瞬く。博麗の巫女が住まいとする神社を出ていた。その速さは満点の星空の中を駆け抜ける流れ星のようである。そして夢にも思わなかったような非現実が其処には待っていた。

幻想郷に侵略しようとしていたその人達は博麗の巫女を導くように動いているようだが止めざるを得ないので巫女はその上から容赦なく無差別に札を投げていた。

それに巻き込まれたその下にいた人たちは阿鼻叫喚のうちに人里の中心部へと逃げ出していた。博麗の巫女はその前へと落ちるように地面に着地してからお祓い棒を構えてその人たちの侵攻を止めていた。

「この場所で何をしようとしているのかは知らないけど勝手な真似はさせないわよ。」

博麗の巫女はそう言いながら何処か現れたのか分からない集団に對して強気に出ていた。

白い紙で包まれたものを唇に挟んでいるだけで火を付けて紫煙を吐き出すつもりはない人によってはもったいないと思われる使い方をしているあ黒髪の青年がいた。その青年は血で汚れている薄紫色のノースリーブの服装をしていて紫色のかぼちゃのように膨らんだズボンのようなものを履いている。

青年は人里とその外の境界のところの意味もなく立っていたところで何かが来ていることに気づいたので口に啞えていたものを吐き出してその人が来るのを待つていた。

静かに佇んでいるだけでまるで石のような存在感である。何かあるのかさえ分かっているだけではないがその割にはとても落ち着いているようである。

腕を組んでいる青年はその人が来ると思われるその音に耳を澄ませながらその場で俯いていることにした。

ちよつとした心の高揚と足音が近づいてくるにつれて感じてくる手汗を流れているのを感じた。青年はその場で留まることでその横を通り過ぎる人たちは何も関せずとその場を行く、と言うことはなかった。

無言で腰に携えていた剣を抜いて青年へと刃を向けるがそれが届くようなことはなかった。

瞬時に反応した青年によってその剣は受け止められた。その腕に付けていた装甲によって弾かれるようにその人は後ろへと引いていた。青年は特に気にするようなことはないが気にならないと言うわけでもないようである。青年は柄に触れながら少しずつ間合いを開けて人里の中心部へと向かっていこうとしている。後ろへとゆつくりと下がっていくので何処からきた分からない謎の集団もジリジリと距離を詰めようとしていた。

別に攻撃を仕掛けても良かったと思うが先ほどのように弾かれると嫌なのだろう。何を考えているのかは別としてうまく青年の手の中へと吸い込まれるようになっていたその人達は縮まることのない間合いの中で気が立つ人もいた。

その人が青年に刃を向けたところで軽々しく弾かれて後ろにいた仲間に軽く当たるだけだった。青年が一撃も与えることもなく相手も段々と戦意を失い始めていた。

青年は急に後ろを振り向くと人里の中心部へと走り出していた。まるで逃げていているようだがここまでの青年の動きから何となくそうではないと分かる。だからこそ動きが遅かったがピタリと青年が

止まっていた。そして足を返すと一撃だけ与えてもう一度逃げた。

人里の中心地。その場所に二極から現れた二つの集団は二人を挟み込むようにしていた。

「霊夢、元気そうで何よりだ。」

「何悠長に話しているのよ。これは何が起こってるのか説明しなさい。」

霊夢と青年に呼ばれたその少女はお祓い棒を持ちながら対面した青年に起こっているような口調で話していた。対して青年が理解しているようには見えない表情をしていた。

「それをするよりは目の前の敵に集中しろ。後で話す。」

「分かったわよ。」

「死にたい人から来てくれ。」

青年は両手に剣を持って構えているのか分からないようにしていた。何の意味があるのかそれでさえ分かっていない。

「たくさんの人が来るでしょうね。」

冷たく言い放つ霊夢だがその通りにはならなかった。その場で立ち止まっているだけでその場から退くこともしない。まるで生きている屍。何をしているのか、何を考えているのかさえ理解出来ない。

「霊夢、そちらはどのような様子だ。」

青年は気軽に聞いていた。まるで空気の入った風船が空に浮かんでいくようなものである。

「そんな事は聞かないでちょうだい。」

「そうか。して、多分南側に本拠地があると思うのだがどうだろうか。」

「どうしてそんなこと言えるのよ。」

「何となくだ。」

「そんな事で行くとも思うの。」

「そうか。では任せる事にしよう。」

青年はその場から南側へと爪先を向けるとその方向のままこの場を放置して向かっていこうとしていた。その様子とその行動には理

解出来ないだろうが青年はいつもそうである。そうやすやすと驚いていてはその先が思いやられる。

「待ちなさいよ。」

とは言ってみたもののこの場が気になるらしい霊夢はとにかく札を投げてこの場から退散するようにしていた。それに合わせるように青年は誰かの家の間を通り抜けていた。追われることもなければこちらからは何もしようとはしない。完璧に弄ばれるようにされたが霊夢は青年の後をついていく。

「よくここまで耐えてくれた。」

青年は人里の最南端まで来ていた。もう少し歩いていれば妖怪の森と呼ばれる場所があるが建物があるので行かない人がいない事でもない。

「急に何よ。」

「そうか。面倒な事になっていたが特に何ともなさそうだからだ。博麗の巫女に加護でもあるのだろう。」

「そ、そうね。」

霊夢が横を向いた頃で青年は森の中へと入っていった。そして霊夢もそれについていく。

第58話

鬱蒼とした視界の通らない森の前まで来ていた。この中にもしかすると幻想郷に侵略してきた人がいると思われる。

黒髪の赤い血で腹部の辺りを汚した薄紫色の服装をしている青年と黒い髪で赤いリボンをつけている博麗 霊夢は息の合っているように同じようなタイミングで歩き出していった。

この間に会話というものは無い。息遣いや何かで合わせているように見える。元々青年が多くを話すような人ではないのでそうなるようにしているのかも知れない。

「ここに来て何をしようと考えているのよ。」

「さて。まだ分からない。」

青年は何処か面倒臭そうに話している。気が抜けていてそのように見えるだけかも知れないがもしかすると気を配っていて真隣は忘れているかもしれない。

「これは予想していたのよね。防ぐ事は出来なかったのかしら。」

「過去を考えるよりこれからを思え。」

「そんな事は言わないで。」

「そうか。少し黙っている事にしよう。」

青年はそう言うってから少しだけ歩幅を広げたように思える。霊夢は何か離されているように感じていた。別にそのような気もなければ青年の歩き方は何も変わっていない。

それから二人はお互いの距離を測るように黙っていた。青年はまっすぐ歩いているだけだが霊夢の方が青年の表情をチラチラと見ながら偶に顔を下へと向ける。気づいていないわけでもない青年だが特に話しかけるような事もなかった。

「霊夢、戦闘に備えてくれ。」

柄を触っていた青年は後ろを振り向くことはしなかったが霊夢に話しかけていた。

「え、あ、うん。分かったわ。」

「乙女か。」

挙動のおかしくなつた霊夢に対して青年はそんな事を言う。あま
りにも呆れているのかいつもと違う感覚に何か違うと思われる。

「何よ。何が悪いのよ。」

「いつも冷静だと思っていた。」

青年はその言葉と同じような態度で話していた。特に抑揚もない
ので淡々としている。

「そ、そう。」

「札を投げてみてくれないか。」

風の吹く森の中で青年は適当に投げ捨てた何かのように吐き捨て
ていた。ただし話の脈が分からない霊夢にとっては言っている意味
が全くわからなかった。

「何でそうなるのよ。」

「簡単な話。炙り出してほしい。」

「行くわよ。」

一切後ろを振り向こうとはしない青年だがしつかりと伝わったよ
うであるので霊夢は袖の中から四枚の札を投げていた。

木々の中を探し回るその札が段々と相手の行動を狭めているよう
でカサカサと何かが動いていた。青年はその音を聞きながら視線だ
けを動かしていた。追えなくなれば体を動かして何となく見ている
ようなそうでもないような感じを出している。

「やってくれたね。」

飛び蹴りをするような勢いでその人は木の上から現れた。青年へ
と飛び込んで右脚を振り上げて蹴り落とすかのように動かしていた。

青年は簡易的に一歩後ろへ下がっているだけだった。

「そうか。何をしに来た。」

「言うわけないじゃない。」

金色の三つ編みの髪型をしていて緑色のシャツだけを着ていて底
の厚い靴を履いている。一見見間違えるが単純に動きやすさを優先
しただけなのだろう。

「そうか。それなら仕方がないか。」

青年は平然とした態度でそのように言っていた。その人は一切何

も行動は起こさなかった。

「アレスと言う異名を持つ男を探している。知っているか。」

「何も知らない。」

青年は適当に答えていた。

「邪魔をしたね。運が悪かった事を恨むんだな。」

その人は瞬時に動き出していった。そして左腕を伸ばしてその反対の腕を体に引き寄せてから真っ直ぐに撃った。

「早い。」

青年は右側に首を避けただけで特に動くようなことはなかった。それこそ相手のことを舐めくさっているかのようで明らかに見くびっていた。青年の放ったその言葉でさえ癩に触るらしい。

「避けんな。」

青年の腕に吸い込まれるようにその人の拳は引き寄せられていた。何が起こったのかはその人には何も分からなかった。

「霊夢、後は任せた。」

いきなり走り出した青年はおもちゃに飽きた子供のようにならから離れていた。まだ見ぬ興味惹かれるものを求めているようで清々しいほどに行動は早かった。

「待ちなさいよ。はあ、やるしかないようね。」

霊夢はその人が青年を追いかけないように札を一枚投げた。その人はすぐに振り向いていた。まるでいた事を忘れていたようだがこれでそんな事はないのだろう。

「それで霊夢だったか。何処で聞いたことのある言葉だね。」

「博麗の巫女の博麗 霊夢よ。知らないわけがないでしょう。」

お祓い棒を構えていた霊夢が札を持ちながら答えていた。

「私はイレインだよ。新たな地を求めている国の武闘家さ。」

そんな気はしていたと思っていた霊夢。見ていれば分かるが機動性を重視した服装と武器を持っているようには見えないのでそれしかなかった。

「そのようね。」

霊夢が札を投げた時、イレインは飛び出そうとしていたのをすぐに

やめた。前方を閉じるように札が動き行く手を阻んだ。

「厄介だね。それ。」

少し笑っているようにも見えなくもないイレインが横に行つて木に紛れていく。そもそもそのような真似をしていても何も変わらないかも知れないが少しくらいは時間稼ぎになっていた。

「何処に逃げるつもりよ。」

投げ捨てるように地面へと投げる霊夢の霊力が籠っている札が木々の中へと消えていく。何となくだが逃げ道もなければ追尾式なので隠れるような事もできない。

ジリジリと追い出されていくイレインは仕方がないのでその本体を狙っていた。そうでもしないとこの勝負に負けると感じたのだろうか。そういう事なのだろう。

「そこね。」

霊夢がお祓い棒で簡単にイレインの拳を弾く。そして追い払うように振って間合いを開けさせる。

「これじゃ、ライラが負けた理由がよくわかるよ。」

その言葉にはどうしても霊夢は気になっていたがそれを聞くような事もない。

「それが誰かは知らないけれどここで対峙することには変わりがなさそうね。」

霊夢が珍しい表情をしている。それだけでもう十分だ。

第59話

視界の通らない森の中で二人は対峙していた。金色の三つ編みの髪型をしている緑色の丈の異常に長いシャツを着ている厚底の靴を履いていて一部赤黒い包帯を巻いているイレインは左手の拳を前にして虎のように構えていた。

左腕にはお祓い棒を持って右腕には札を持っている黒髪の少女は目の前にいるイレインの動きに注目していた。そこから一気に動き出した霊夢はお祓い棒で下から上へと抉り出すように振った。

神力があるような気がするそのお祓い棒を軽々しく避けたイレインだが飛び退いたのが悪かった。

その隙を見た霊夢は上から力一杯に札を投げていた。青白く光った赤い札がイレインの腹部や胸部に当たる。一発はそこまで重たくないが段々と追い詰められていくように感じると思われる。

「ここで降参するならその命は助けてあげるわよ。」

霊夢は肩にお祓い棒を乗せながらトントンと叩いていた。怒っているのか単純に戦闘中なので不機嫌なのかは分からないが和やかな感じではないのは目に見える。

「なら、殺してよ。」

イレインは急に笑い出すと体を小さくさせながら一直線に向かってきていた。元々そこまで距離があるわけでもなかった。それ故に簡単に接近を許した霊夢。

右足を踏み込ませた左足の回し蹴り。腰が入っている渾身の威力を持っていてそれが霊夢の右腕を襲う。

折れるような音がしている。そして押し出されるように吹き飛ばされたが受け身をとって地面を転がるような事はなかった。

そこで止まるようなこともなかった。

「まだまだー！」

イレインが雄叫びのようにそう言う。着地させた左脚を軸に一步出してから足払いを仕掛ける。

地面を擦るように刈られた霊夢の右足。それにつられて自身の体

が傾き始めたが瞬時に前転をすることでその後の追撃を加えられるような事はなかった。

そして地面をしっかりと足裏で捉えた霊夢がイレインの背後に回り込んで札を投げていた。何処にそんな持つているのかと思われるが袖が大きく膨らんでいるのでその場所に溜め込んでいると思われる。

「アンタも大変よね。」

霊夢はすつ、と立ち上がって背後を振り向いたイレインに対してそう言っていた。何の意味があるのかはさておき軽口には付き合うようだ。

「何かそう言える根拠があるのね。」

「あるわよ。この私と出会ってしまった事よ。」

「へえー、そうなんだね。」

イレインは特に気にも止めていないようだった。まるで霊夢の言葉が右から左へと流れているようで何の言葉も入りそうにはなかった。

「人の話はちゃんと聞くべきよ。」

「聞く価値もなさそうな話だったね。時間の無駄。」

イレインの目が少し変わったようにも感じた。それ以前に元から本気は出していないようだったがここから本領発揮と言えるところだろうか。霊夢はイレインの変わり方を見て何となくそう思えた。

「はあ、面倒ね。早々に退治してあげるわ。」

霊夢がお祓い棒を構えていた。そんな頃にはもうイレインは霊夢の元へと来ていた。

そして流れるような動きで霊夢の鳩尾を狙った強烈な一撃を見舞う。

その速さ、正確さに霊夢が追いつくことが出来ずに一点で押し上げられるように手足が置いていかれて口から白っぽい透明な液体が飛び散る。そして眼を開いて地面に着地した時には全身に力が一瞬だけ入らなかった。

立て直そうとしている霊夢の右頬をバチン、と音を立てて殴ってい

たのはもちろんイレインだ。間隙もないその攻撃の動きはまるで流されるままの木の葉を想起させる。

そしていきなりのことに驚いた霊夢は為すがまま、されるがままにされていた。なんとか立て直そうとする霊夢でさえも立っているのがやつと言うところで更なる一撃を与える。

地面を強く蹴り出して左脚を後ろへとさせてから腰を入れて振り下ろす。膝に手をつけている状態の霊夢の背中を押し出して完全に地に伏せさせたイレインだが何か違和感を覚えた。何の感覚も感じなかったからだ。まるで人形のような感じがする。

いくら殴ろうとも蹴ろうとも何の感覚も覚えない。あるとすれば体を動かしたと言うだけのこと。

「何かおかしいね。それに呆気ないね。」

イレインが何となく不思議に思ったのかその様にしていた。もう終わったのかと一種の虚無感にかられたがそれが幻想であると言うことを知るのはそう遅くはなかった。

霊夢と思われるそれが大量の負だとなっていた。そしてその全てがイレインの元へと来ていた。一瞬で行われたのでイレインでさえ対処するのは難しかった。

覆い隠すように布でも投げられたように逃げ場を失ったイレインはなんとか避けようとしてみるが背後からも横からも来るので拳でいちいち振って落としてもキリがなかった。一発の威力はそこまで重たくはない。だがその数を見ていけば出来るだけ受けたくないと感じるのは仕方がないことだと思われる。

「何なんだ、これ。」

状況が理解できない様子のイレインは少しだけその身に札が当たっていたがそれを気にする事はなかった。

ちよつとした間があったので自分を落ち着かせるためにそのようにしたと思われる。其処から第二波のように来るが要領をつかんできたのか札を掴みながら拳を振ることで先ほどよりは当たる枚数とこのは少なくなっていた。

しかし余裕という心の隙間が出来てしまったその時には気付くこ

とはできなかつた。

後ろから突き上げられるような一撃を受けたイレインは今まで行っていたこと全てが出来なくなってしまうていた。手足の動きは止められて何も抵抗することが出来ない。それでも容赦なく降る雨がイレインの体の節々に当たる。

「夢想一突。使えるようになってよかつたわ。」

「く、くそ。やってくれたね。」

その場で倒れるように力を無くしたイレインは霊夢に看取られる形になっていた。だが、霊夢はそのような目をしてはおらず冷徹なそんな目をしていた。あまりにも冷たく氷のような目をしている。

「そこで休んでなさい。それとももう一発受けるかしら。」

霊夢はお祓い棒を持つて準備をしながら言った。

体に風穴を開けられたイレインからするともうそれは勘弁と言うことである。何も抵抗することなく地面に伏した。

第60話

蜘蛛は縦の糸と横の糸で使い方を変えている。粘着性のある糸と別にそうでもない糸があり円形をしている。そして中心に集まる糸は一つの点となっている。スコープのように施されたその目を頼りに獲物を狙う。その先に映るものをめがけてその弓を引く。一直線を目指してその矢を持ってばそれを射る。

何処か落ち着きのない黒髪の青年は薄暗い視界の通らない狩人にはうってつけの場所を歩いていた。こ木の葉の間から漏れ出ているその光を頼りに歩いていく。

博麗の巫女に後ろは任せているので今は一人である。寂しさは特に感じていないが何かいるような気がしているのを感じていた青年は警戒は怠らなかつた。

別に何も知らないこともない。だが、話すことが出来ないと言うのもある。青年は少しだけ話すべきか話さないべきか迷っていた。しかしもうそろそろ話さないといけないとも思っている。

右腰に携えている剣の柄に触れながらこの自然の中の風に身を任せている事にした。どこから現れるのかもわからないのであれば何もする事もない。しようともしない。

青年は適当にそんなことを考えながらその世に生きているのかそれとも生きていないのかそれさえも分からないような雰囲気があった。まるで何処も見えないようである。

常に柄には触れているがそれが使われる時はあるのかはどうかは青年ですら分からない。何が起るのかもわかっていないからだ。

青年の上から覆い被さるように木は生えていてその周りの視界を覆っていた。一枚板のようなそんな気もしなくはないが青年に気にすることなく進んでいく。

何かがくる風切り音。

剣を抜いた青年はそれに合わせるように受け止めていた。その正確さには恐れ入る。

刀身の上に乗るようになって矢は青年に向かって突き進んでいた。意思があるようにそして力強く向かってきていた。

「剣を貫かんとするか。」

青年は少し余裕があるのか小さな声で独り言をしていた。弾こうとしても居残り続けるその矢に少々苦戦しているような気がする青年。

左下へと剣を運んだ青年は矢が飛んできた方向をじっと見ていた。その先に居るのを確認出来なかったので青年はとりあえず進んでみることにした。ここで立ち止まっても進まない。それにここで急いで向かおうとしてもそれは向こうの思う壺。青年は冷静に行動を続けていた。

「これは霊夢に任せなくて良かった。」

何処か満足そうにしている青年。右手に持っていたその剣を肩に担ぎながら適当に妖怪の森の中を歩くつもりらしい。

間髪を入れずに何処からか矢を放たれていた。正確に心臓を貫こうとするその一撃に青年は剣でその軌道を防ぐだけで何もしなかった。

それ故に何も起こりそうになかった。ぶつかるともなければ一方的な干渉しかなかった。それでも青年は動じないようで何も気にするような事もないようである。

この先もこのような事はあったが青年は何もするような事はなく真つ正面からその人は現れた。

「何者だ。」

「貴方が先程から面倒な攻撃をしていた人か。」

青年は何となく疲れたのかそのように聞いていた。未だに肩の上に剣が担がれている。

「そうだ。」

その人は茶色の帽子を被っていてそこから黒髪が垣間見れた。左目には黒色の眼帯をはめていて茶色の目立たない服装をしていた。その森の中に息を潜ませるならちようど良い服装とも言える。

「ところで何をしにここまで来た。」

青年は軽口のつもりで聞いていた。

「俺は復讐を果たしに来た。アレスというやつに負けたせいで俺はルシファーに落とされたんだ。お前には何の恨みはないがここで死んでもらおう。」

「そうか。何処で何をしようと俺は知らないがここに来るのはもうやめろ。」

青年は肩に担いでいたその剣を下ろして切っ先を地面に落としていた特に構えているようにも見えない。

「そんな事で俺は止まれないんだ。ここでしつかりと手柄を立てないといけない。」

その人は弓を構えてこの距離から放とうとしていた。

「そうか。それは頑張ってくれ。」

青年はその弓で射る先が自分であることに気づいていないような感じがする。おそらく自分の道しか進む気は無いのだろう。

「死ね。」

弓を使つて最大限の威力で矢を射る。青年は切っ先を使つて一直線にその矢を弾く。下へと軌道を変えられたので矢は地面に深く突き刺さる。

「何故その事を知っている。」

「何回も撃てばそのうち覚えるものだ。」

青年は懐から出した箱の中から白い紙で包まれたものを取り出すと火をつけるような事はなく唇の上に乗せているだけで何かしようとはしていなかった。

「何なんだ、お前は。こんな奴がいる事は知らなかった。」

「そうか。それは済まなかった。」

青年は人の話を珍しく聞いていた。だが逆鱗を触れていることには変わりはない。

「俺を見くびっているのか。」

「いや。」

「そんな事はないだろう。」

「そう怒るな。判断が鈍る。」

「誰に向かってその口を叩いている。」

「さて。」

青年は相手がどうしていようと関係がなかった。

「俺は元幹部だ。口には気をつけてもらおう。」

茶色の服装をしているその人は青年の適当な扱い方に激昂と思われる。手元は震えていてすぐに射った矢も青年の横を通り過ぎるだけで誰にも当たらなかった。ただし威力は高まっているようで木に突き刺さるだけでは止まらなかった。何か施されているようで貫いていた。

「そんな適当な事をしているから落とされたのだろう。そのルシファーという人は頭が冴えているようだ。」

「そんな訳ないだろう。俺は何故模造の兵器に負けないといけないんだ。」

「そちらの事情は何も知らないが見知らぬ人にそう話しても良いのか。」

青年は率直な感想として聞いていた。敵意というのはなく何となく聞いていた。

「ここで死ぬ事は決定している。逃げても無駄だ。」

「そうか。なら正面から戦わせてもらおう。」

青年はそこから特に動くような事はしなかった。だが何か秘めているものがあるようでそれを感じさせないようにしているようだ。

黒い眼帯をした人は再度弓を引く。その先に見据えた的を貫き通すため。己が正義を貫き通すため。

第61話

茶色の服装をしている人は矢を射る。

その狙いは目の前にいる黒髪の青年である。風を切るその音としたりのある音がした後に簡単に止められていたようで金属の当たるような音がしていた。カチン、といった音からかなり擦れているような音がしている。

「これがアレスに対する俺の怒りだ。」

まるで宿敵を投影しているかのようなその表情を向けている。青年は見知らぬ人の為にこのようにされているだけだが文句は言わなかった。その真意は分からないが別に付き合ってもいいと安易に思っているのだろうか。

「貴方はその程度なのか。」

右腕に持つている剣で受け止めていた青年は軽いその口で呆れているように答える。狩人のような格好をしているその人はもう一度矢を射る。

今度は青年が矢を止めている間に移動していたところから素早く放つ。

音は先程とは劣るが流石にそこまで反応が早いとは思っているわけではなかった。

だが、青年は左腕に持つていた剣で自分から遠ざけるように弾く。いつ抜いたのかさえも分からない。そしていつから気づいていたのかも狩人は分かっていない。

「棒立ちとはいいい度胸だ。」

「そんなつもりはない。」

青年が走り出していた。別に早いというわけでもない。追いかけるつもりがあるのか疑問に思えるほどだが追われているという事実が茶色の帽子をかぶっている人すれば何とも恐ろしいものだった。

矢を射る。後ろを瞬時に振り向きながら飛び退き反転してタイミングのあったところで適当にする。

青年は右腕の剣で軽く弾くとその矢は地面に突き刺さるだけでそ

の他に何もしようとはしなかった。もしくは何もできなかったということだろうか。それぐらいしか思い浮かぶような事はなかった。

そして青年は狩人の衣服を掴むと自分の元に引き寄せてその場に倒れさせた。

「俺の負けだ。もう道はないだろう。早く殺せ。」

「そうか。だが、俺はそれは好まない。好きにしている。」

青年は相手が観念したところで剣を鞘の中に納めていた。嘘ではないことがそれだけで理解できるものであった。

「甘い考えを持っている。そんな事ではすぐに死ぬ。」

「そうか。して、侵略した時のリーダーなるものは何処にいる。」

青年はその人のことは見ずに聞いていた。何かその場所にあるのかと思われるが別にそのような事があるわけでもない。あるとすれば木々から漏れ出る光、人影などは当然のようにならないのでこのような事になる。

「それは教える必要はない。」

その人は諦めるような事なく矢を射る。

青年に向けられて放たれたが狙いが悪かったのか軽々しく避けられた。首だけを動かしていた青年は軽く回してから聞いていた。

「俺はお前の弓に当たるわけがない。」

「何故だ。」

「お前は狩人としての意思を無くした。腕も鈍っている。そこで見限られたのだろうか。」

「何故そう言える。」

「その腕に冷たさがない。獲物を狩ろうとする静かな殺気だ。」

「何故分かる。」

「かなり苦戦した相手だ。覚えている。」

青年は薄く口を緩めているだけでその目はしっかりとその人の事を見ていた。そして昔を思い出しているようだが別にそうでもないようでもある。

「もしかしてお前がアレスなのか。」

「さて。記憶は無くしてしまったものでよく覚えていない。」

「俺はお前を倒したい。また王様の幹部として尽くしたい。と思っ
ているが此処では倒せない。」

「そうか。それは貴方の好きにしていってくれ。俺は此処で人を待つ。」
青年は唇に啣えていた煙草に刀身を近づけさせしてからその先に火
を付ける。そして一服する気なのか木にもたれかかっていた。

「一つ聞きたい事がある。」
「何だ。」

青年は少しだけ不機嫌に答えていた。もう諦めたのかその場に座
り込んだ茶色の服装をしているその人は少し間を空けてから答えた。

「俺の名前は覚えてるか。」

「隻眼の狩人のライル。」

青年はさらつ、と答えていた。そして唇から煙草を離して紫煙を吐
き出してからもう一度唇に啣えていた。そして腹部で腕を組みなが
ら時間が過ぎるのを待とうとしていた。

「お前には結局、敵わなさそうだ。どうしたら良い。」

「知らん。好きなように生きてくれ。会える時が来れば会える。それ
は早くもなく遅くもない。」

「俺に帰る場所はない。傭兵家業に戻るとしようか。」

「好きにすると良い。」

青年は適当に答えていた。だが何処かに行つて欲しいというわけ
でもないのだからそれなりに答えている。その後、青年はライルの元へ
と近づくと耳元で何かを話していた。それを聞いていたライルは意
外そうな表情をして少し考え込んでいた。

「了解した。俺はこの森の中に消える事にする。ありがとう。」

ライルは地面から立ち上がると何かを決めたようですつきりとし
た表情をして何処かへと向かっていた。青年は何の言葉も書ける事
なくそして何も行動には映さなかった。煙草の灰を振り落とす事し
かしなかった。

「ルシファー、か。」

感慨深い声で珍しく呟く青年の目は上の空を向いていた。何かを
思い出しているようなそうでもないような目をしている。誰も近く

にはいなかった。

第62話

闇と光が共演している妖怪の森。紫煙を吐き出す口からつい言葉が漏れた。

「遅かったな。」

「うるさいわね。」

短めの黒髪で赤いリボンを付けているその少女は幻想郷を守る役目を持つている博麗 霊夢という人である。表裏は特になく感情の起伏が激しい。

「少し休憩は必要か。」

黒髪で長い前髪も纏めて後ろで一つにまとめている髪型をしている紫色のマントに身を包んだ青年はその口に啜えていた物を火を消してから吐き捨てていた。処理に困っているのは確かだが色々と物は無くしている。ある物とないものはどうしてもあつたりする。

「いえ。行きましよう。」

不貞腐れているような表情を浮かべる霊夢に青年は額を人差し指で軽く押していた。特に何も言わないので何をしたかったのかは一切分からぬ。

「して、あの女性は誰だった。」

「イレインと言っていたわ。ねえ、良い加減話してくれない。」

「何の話だ。」

青年はまるで話を理解していないようにとぼけていた。

「幻想郷では何が起ころうとしているのよ。」

霊夢は青年の近くでそのように言っていた。進路を妨害するようなくらいに近づいていたが青年の方は迷惑そうにしているだけで何か言ったりするようなことはない。

「アーサーはアンタの事を兄と呼んでいた。それとアレスというのが誰なのか気になるわ。何か知っていることを話してくれるかしら。」

「基本的な記憶は消えている。だがこれから国取り合戦が始まるのは確かだ。今のところ三人は倒しているのだろう。やがてこちらへと来るのは明白。」

「何をすれば良いのよ。」

「もう目は付けられている。手遅れだ。」

青年は特に抑揚のない声で話していた。それこそ、これから来る現実を目の当たりにしているかのようで悲観的に物事を捉えているように見られてもおかしくはなかった。青年は踵を返して霊夢には無言で歩き始めた。それに霊夢は合わせるように青年の左横に付いて回る。まるでコバンザメのようである。

確かに霊夢がそこまで情報を聞き出したい理由はわかる。それを青年が知らないわけではないのだが迷いのある青年にはどうしても話しくかった。

「そんな事を言ってももう無駄よ。話すまでは付いて回るわよ。」

「時間の無駄だ。」

「そんな話はしてないわ。時間稼ぎをしたいならもっと有効な方法があるんじゃない。」

「そうか。敵に悪知恵を教えるのは宜しくない。」

「そんなことを今は話しているわけじゃないのよ。」

霊夢からすれば知恵を与えるなどという事はどうでもよかった。段々と青年が話そうともしないことに苛立ちを覚え始めた霊夢だがその先にある何かを見つけるとその気は失せてしまった。

白い布で囲まれた明らかに不自然な拠点のようなものがあつた。ここが何処から来たのか分からないような人達が居るのだと思われる。青年はそのことに気付いて中に入ろうと足を進めていた。

何となくだが何か仕組もうとしていると考えていそうな青年の後ろに霊夢が付いていく。何をしようとしているのかは分からないが何かあれば知らせてくれたらいいという程度で済ませることにした。

「霊夢、上から偵察を頼む。」

青年は特に向いてもいなかつたが霊夢がいることには感づいていたようでそれ以上は何も言わなかつた。霊夢は仕方がないので気に当たらないように優しく地面から離れるふわりと浮き上がっていた。

青年も四方と真ん中に取り付けられている棒とそれらにくくりつけられている布の隙間から誰がいるのかを確認していた。どうやら

中は待機している人がいるらしい。だが人は一人だけ台の前において他は適当に散らばっている。まるで警護していないように見えるがあまり情報が入ってきていないのか警戒は怠っている。

「人は二十を越さないくらい。それと真ん中の台に簡易的な地図が置かれていたわ。矢印と地図から推測するに袋叩きにするつもりだろうね。」

「そうか。では、俺が台の近くにいる人に攻撃を仕掛ける。少し混乱させた後に霊夢が札で突っついて欲しい。」

青年は精神を統一させているか目を閉じていた。そして何かを念じているようでブツブツと霊夢には聞こえない声の大ききで何かをしていた。

「何をしているのよ。」

霊夢は青年に聞いてみたが答えるはずもなかった。青年は自分の世界に入り込んでいた。そしてある事を念じるとその中へと入ろうと準備を始めていた。

青年が立ち上がる。そして弓に見立てた左腕の剣と右腕で持っている矢のようなものを用意していた。右腕を引いていく。

そして狙いを定めて右腕を押し出した。その威力はさながら吸い込むようになっていたので白い布が簡単に破れてしまった。その中は一回の悲鳴とそれを聞いて動揺している声が響いていた。相手もまさか急に現れるとは思っていなかったのだろう。

「邪魔する。」

青年は盛大に破れた布の中へと入り込む。中の様子は作戦を立てていたであろう台は粉々になっていてその近くに人が倒れていた。黒色で青年とは似ている髪型をしている紫色のシャツと小さな白縁の眼鏡をかけている。今回の作戦を発案したのはその人であるらしい。

青年がさらに奥へと入ろうと歩みだしたところの前で周りを囲むようにその中にいたと思われる人たちが取り囲む。

特に鎧を着ているような様子はなく少数精鋭を連れてきているようにそれなりの実力はあると思われる。

「何者だ。」

その人の中でリーダーだと思われる人が口を開く。

「俺が聞きたい。」

堂々と大きな声でそう話している青年はある意味ではブレない人だった。このような状況でも一切動じる様子はない。そして更に話を続ける。

「して、貴方たちは何をしようとしている。」

「話す義理もない。」

「そうか。」

リーダー格のその人はいきなり斬りかかっていた。居合斬りにも等しいその速さで青年を襲うが見えているようで軽々しく受け止められたかと思うと簡単に弾かれてしまう。

「貴方達を斬る気はない。逃げてほしい。」

「何だよ、その言い草。」

「やるなら全員と相手する。その代わり一気にかかってこい。時間がかかる。」

青年はそうのように声で威圧するように低い声で言っていた。そうする理由は全く分からない。

第63話

一本の閃光と人々の逃げ惑いそうなそんな音がしていた。

何が起こっているかそこに居た人には何も見えなかった。黒髪で後ろで一つに束ねた一見すると女性のような髪型をしている。そして薄紫色の衣服を身に纏っていて紫色のズボンを履いている。紫色で裏地が赤色のマントを羽織っている。

「何が起こっているのですか。」

白縁の眼鏡をかけている女性で紫色のシャツと薄緑色の丈の長いズボンを履いている。台の上には一枚の地図と青色の帽子が置かれている。どうやら女性物のようなのできつと今、台の横で足を貫かれて立つことが許されない人の所有物であると思われる。

散財している椅子や武器が地面には広がっているが何か試合でもしたかのようになっていた。たまに体を動かしたくなるような気持ちになるのも分からなくもない青年は何も聞かずにそう思っておくことにした。

「何が起ころうともこれが現実。して、貴方が今回の侵略の指揮を取っていた人物で間違い無いだろうか。」

青年は適当というわけでもないが見ればわかるような事を聞いていた。それだけであるので何とも言えないような気にもならなくもない。

「それはどうでしょうか。私はもしかしたら助手の可能性もあります。」

その人は足が動かないながらも強い眼差しで青年を見ていた。これが侵略者側の意地という言い方もできるのかもしれない。だが、何処かそのような事も青年には関係のない話でありそれはまるで自分には関係ないような話でもあった。

「それはない。」

青年はその眼差しを受けながら対抗するようにその目を見つめていた。そして即答である。ある種の威圧感と圧迫感を与え続けている

る青年は腰に携えている四本の剣を触りながらその人の元へと近づいていた。

「何か根拠はあるのですか。」

逃げることは許されない状況なので抵抗などはする事なくその場に留まっていたその女性は何をされようとも覚悟は出来ていた。でもせめてそう思った理由くらいは聞いておこうと思ったのかそれとも気になったので聞いたのか。それはその人にしかわからないものだった。

「何もない。感覚で答えた。」

青年は理由を考えるために少し頭をひねった後に小さな声でそのように言っていた。もともと小さな声のためにその声は何かにかき消されるのかもしれないがそのようなことはなかった。

元々は妖怪の森という静かな場所である上に人の気配は無いに等しい。そのような場所であるために青年が小さな声で話そうとも関係ない話である。

「何という身勝手な。これ以上は何も言葉を掛けてあげられません。」
「そうか。」

青年は白縁の眼鏡をかけた如何にも冷静そうな顔つきをしているその人の目の前に腰を下ろしていた。両足を広げて膝を折り曲げているだけで地面には特に接地していない。両腕を膝の上に乗せているだけで何か危害を加えようともしなかった。

「名前は。」

「カミラよ。」

青年の突然の行動に身を震えさせたその女性は自分の事をカミラと名乗っていた。青年は一応聞くがあまりにも興味がないために特に面識が多くなければそこまで覚えていない。

「そうか。貴方はこれからどうしたい。」

青年はその人に聞いていた。足は貫かれているために動くことはままならない。カミラ自身は好みが減びることさえ想像したものが一切そのようなことはしなさそうだった。何があったのかと心配になるほどに何もしなかった。

「この命はないも同然です。貴方様の自由にして下さい。」

カミラはもう悟っているようで静かに青年の質問に答えていた。その声はさながら湖に注がれる水の音と同じである。何も聞こえてこないようだが確かにそこにはあると思える。

「霊夢、ちよつとだけ貸してくれ。」

青年は座りながら入り込んで何かしようとしていた霊夢を呼ぶ。カミラはもう自分のみがどうなるうとも関係ないために何か悟りを開いた僧のように済ました表情をしていた。

「何する気よ。」

霊夢は聞く意味もなさそうだが一応聞いていた。

「永遠亭まで連れていく。それと人里にいる人たちはそのまま住んでもらおう。」

「はっ。」

カミラは思わず声を上げてしまった。まさかの事態のようで青年の言動には追いつけなさそうだった。

「アンタも諦めなさい。この人言ったら一人で実行に移すのよ。下手に暴れられても困るから協力するわ。」

「そうか。それは有難い。」

青年は立ち上がると左腕を持って下から空へと動かして腕を絡ませると霊夢はその反対の腕で青年と同じような事をしていった。何か起こったのかは全く分からないがカミラは連れ去られるように永遠亭と呼ばれる場所へと連れて行かれることになっていた。

「どうしてそんな事をしようと思うんですか。」

頭がどうにかなりそうなカミラは自分や言葉に間違いはないかを確認しながら話を進めていた。青年からすればさらっ、と話してほしいようでありウマが合う仲ではないようだ。

「もう戦闘が終われば敵ではない。怪我人を治せる人の元へ連れて行くのに何か問題でもあるか。」

さも当たり前のように話している青年だがどうやら右腕を掴んでいた霊夢もその言動には半ばあきれていた。それでもそれだけの理由があるのだと思われる。

「そうよ。大人しく連れていかれなさい。評判は良いからきつと氣に
いるわ。」

「もう何でもいいです。」

ついに思考停止に陥ったカミラは考えるのをやめて永遠亭まで
連れていかれていた。

これによって幻想郷への侵略は一時的に止められたことになって
いた。しかし、新聞記者もネタを探すよりは自分の身を守る必要が
あるのでその為の訓練をしているようだった。

アーサーは青年は反対方向の差である北側を探していたようで小
高い山の上に登ったら黒い羽を持っている人に襲われたという話を聞
いたがそれは単なる説明程度のものであると青年が伝える。排他的
な場所だが基本的には優しい人が多い事を説明していた。

その後、青年は人を集めて話したいことがあると言っていた。ここ
で集めても仕方がないのでまた別の場所へと移動していた。幻想郷
の管理者であり境界の狭間を行き来しているようなものだった。と
ここで何押ししたのかは重えている。

第64話

周りには目の形をしている大きな模様のようなものがたまに瞬きしながらこちらを見ているようにしているようにも感じる。何とも不気味なもので何が起こっているのかは全くと言って分からなかった。黒い幕が敷かれているようになっていたので目のような模様が異様に目立つ。

そしてその中にポツン、と一軒だけ白玉楼にも似ているような佇まいをしている場所があった。どうやら管理者の住んでいる館であるようで霊夢は前に来ていたのだそうだ。

黒い髪をしている後ろに一つに結んだ髪型をしている青年と金色の髪に橙色の鎧を着ているアーサー、そして博麗の巫女でもある博麗霊夢が一つの部屋で机を挟んで座っていた。真四角に近いものを用意してもらったらしく四人が座るにはちょうどいいくらいの大きさをしていた。

「まずどこから話したらいいだろうか。」

黒髪の青年が全体の空気を読んでいたのかはどうかは分からないがいきなり話を切り出した。

「まずアンタは誰なのよ。」

霊夢はまず青年に突っかかる。

「覚えていない。戦法まで変わっているのであればもしかすると別人なのかもしれない。」

青年は静かに答えていた。まるで今居る誰にも目に止まらない時間の中に過ごしている四人のようだ。

「確かに大きく違いました。恐らく人間違いなのかもしれませんがその真相は私でも分かりません。それこそ何といえいいのかは分かりませんが力になれなくて申し訳ない。」

青年に続くように兄者と慕うアーサーという青年がそのように話し始めていた。

「そうね。どちららも嘘はついていないわ。それとアレスと言う名の意味は何かあるのかしら。」

黄金色の扇子を広げて口元を隠している八雲 紫は少しだけ笑いながら少し怪しいところを残しつつ艶めかしく聞いていた。その声はよく通る。青年はそんな事を思った。

「それは兄者が一撃で打ちのめしたからですよ。」

「何で嬉しそうなよ。」

「それと戦士として私のような鎧を着ることはなく衣服のみを身に纏っていたのです。なので狂戦士のような意味合いとしても扱われていました。」

「そんな頃から皆とは外れていたのね。今も大概だけどそれよりも酷いなんて何も言えなくなるわよ。」

呆れたような表情を浮かべている霊夢は青年に対して個人的な文句のように言っていた。大体はそれが占めている。

「かつこいいですよね。」

アーサーは霊夢のそんな反応に気付いていないのか嬉しさを前面に出していた。他の三人はそれぞれが反応が異なるがあまりいい反応ではないことは確かだ。

「アンタも大概ね。まあ、いいわ。記憶が曖昧だけど何となく理解したわ。」

霊夢は少しだけ腹を立てているようにも聞こえなくもない。その理由としてはあまりにも気付いていないからなのだろうか兄弟揃って頭のネジが何本か飛んでいるように感じる。

「それで此処に侵略をしようとしているのは如何してなのかしら。」

紫は相変わらず口元を扇子で隠したままで話を進めていた。青年は特に気にすることは無いがアーサーの方が何となく気になり出していた。

「それは私から話しましょう。恐らくの話ですので真に受けずに聞いてください。」

周りと目を合わせて心の準備が出来たかを一通り確認した後アーサーの口は再度動き出した。

「魔王はその強大な野望によって他の国を奪おうとしています。その真意はよくわかりませんがなそのように王様に言われています。そ

して王国と魔王とは膠着状態が続いているので他の世界の国を取ろうとしているようです。それを阻止するために私は極端に弱くなっている世界へと飛び込んで助けている訳です。」

「そして偶々奪おうと考えたところがこの場所だったということね。」
霊夢はアーサーの話の流れを汲み取りそのように話していた。人里を中心に流行っていた病気によって力を弱まっているところを築こうとしているのはよく理解できた。

「その通りですと言いたいです。このような会話は何回もしています。が今回はどうしても違うと思うんです。此処に兄者がいる。これは何か違う思惑があると思われれます。」

「居たとしてどうなるのよ。」

話していても進むそうもないので強引に行くことにしたらしい霊夢がそのように言っていた。

「もしかすると残党狩りというところでしょうか。非道な魔王軍は一度歯向かってきたものを全て排除しようとしてきます。そしてある程度その世界でその人を知らしめてからその後でなぶり殺すようです。」

「残党ということとはもしかしてアンタ、とても強かったということね。」

霊夢は青年に対して机を叩きながら話していた。霊夢でさえもこのような反応を見せるのならば青年も同じような反応をするしかなかった。記憶のない過去のことを話されても何か思い出すようなこともない。それに深い話をしているので余計に何を言っているのがよく分かっていない。

「そうらしい。」

青年は静かに答えていた。話がわからないので反応にはとても困っているということなのだろう。

「現在ではそのような面影はなかったのですが魔王軍に歯向かったのは記録に書き記されています。私はその頃また他の世界に行っていたもので知らないうちにいなくなっていたのもよく覚えています。」

「兎に角此処で立ち止まって猛攻を耐え抜くか。それとも直接乗り込

むかの二択になるということね。」

「はい。その通りです。そして今回はどうするのかと言われると簡単な話、直接乗り込むしか方法はありません。」

「それはどうしてよ。」

「いくら此処で耐えていようともその猛攻が激しくなるだけだからです。」

アーサーの強い視線には二人が頭を悩ませていた。一番聞いているべき人は特に聞いていなかったようで興味をなくしているが空気は壊したくないので座っているだけのようだ。

「それなら問題ないわ。総力戦でいきましょう。」

立ち上がった霊夢はアーサーの目を蔑むように見ていた。本当にしているわけではないが勘違いされてもおかしくはないほどだった。

「そうか。して、アーサーに勝てる人は何人いる。」

青年は急に口を開き出した。この時のために此処までエネルギーを蓄えていたかのように低い声が聞こえてくる。そこにいた三人もどうしようかと悩んでいた。

「そうね。何人居るのかしら。」

霊夢はその質問には頭を捻らせていた。異変の際に目の当たりにしている強さがあるので何となく言葉を濁らせていた。兎に角この場では話はまとまらないようだ。

第65話

幻想郷へと侵略したその件から一日が経っていた。人も少なくなっていたこともありそこまで大きくならなかったが新聞記者はそのネタ欲しさにあらゆるところを探していた。

しかしそれ管理者とそれに属する巫女により止められていた。それは青年の意見に賛同したアーサーの熱意に負けたからである。要はこれ以上は広げて欲しくないということらしい。

そんな訳で青年は幻想郷に西側へと来ていた。その理由は簡単なもので自分の口で話す必要があるからだ。新聞で全体に知らせることも可能だが誤解を招く事態になるとあとあと面倒くさい状態になる。そんな訳で青年は自分の足を使つて情報を知らせることにした。

此処は霧に覆われた霧の湖。そしてその中の孤島に浮かぶ赤い壁に覆われた窓のない館が紅魔館と呼ばれている吸血鬼の住む建物となっている。普通ならこの時点で驚くところだろうが随分と幻想郷に毒されているか青年は特に驚いたりするようなことはない。それこそ当たり前のような事であるので驚く気も失せるというべきだろうか。

その館の門番とはもう既に顔見知りなので後でお嬢様とメイド長を連れてくるように伝えてから紅魔館の敷地内には入り込む。中には四季に合わせた花々が咲き誇っていてそれぞれが自慢をしようとしないう謙虚な気持ちであるのには間違いないようだ。しかし満開に笑っているそれを見て青年の心は特に動かなかつた。それを受容できる程心に余裕がないといえればそれで終わる。しかし元々花々には興味のない青年がそこまで沸き立つものがあるわけでもないと思われる。花の世話はしないのかと言われるとそのようなことはない。

中庭を素通りする形で中へと入ってきた青年は大きなエントランスを誰とも話さずに右側へと突き進んだ。一面にチリ一つ落ちていない完璧な清掃をしているメイド長には感謝を心の中で述べつつ螺旋階段を飛び降りていた青年は受け身を取るように床を転がるとそのままの勢いで走り出していた。そして二階と一階を隔てている手

すりの上に飛び乗るとそのまま飛び降りた。

足を大きく伸ばしてその勢いを簡単に打ち消してからスウ、と立ち上がる。それは揺らめく陽炎。

黒髪を揺らしながらこの部屋の主人である人の前に来ていた。その騒ぎにも何も動じることのないどん、と座り込んでいる紫色の髪をしているその人は縁のない眼鏡をしていて魔道書をいつものように読み漁っていた。何が起るのかと言われるとそれは何も起こらないのだろう。見知った仲である二人が今更何かしようとも思わない。「パチュリー、少し話したい事がある。」

青年はその人がいる大きな机の前にあるふかふかのソファアールの後に立っていた。座ろうともしないのが不審に思ったのかパチュリーは珍しく人の話を聞く事にした。眼鏡を外して机の上に乗せると魔道書をしおりを入れてから閉じて横に移動させていた。どうやら古い書物であるらしく上からそつと乗せるようにしていた。「何かしら。」

机の上に膝を乗せて気持ち前へと出しているようにも見えなくもない。元々人の話になど興味を示さなかったパチュリーがこのようにしている理由はさておき何が起ったのかは全くと言って分からなかった。何が起こっているのかさえもよくわかっていない。

「話したい事がある。だが、人が集まるまでは少し待つてほしい。」

「ふーん。全員に話したい事なのね。」

「そうだ。それにパチュリーが一番理解してくれる。」

「それは貴方の事、それともこれから話す話のこと？」

「何方でもない。して、最近は何調はどうだろうか。」

青年は来るまでの暇つぶし程度に話を切り替えておいた。

「貴方が居ないおかげで元気よ。」

パチュリー派冷やかし程度に軽いジャブを見舞う。だが病弱な一撃なんて青年には痛くもかゆくもないようだ。

「そうか。それは良かった。して、小悪魔やフランは要るか。」

「居るわよ。レミイと咲夜が来てから呼ぶ事にするわ。」

パチュリーは一旦話を切り上げ迷うとしていた。二人の話は魔法

関連以外の時はそう長くは続くことはない。その理由は簡単な話、興味のない話はお互いが聞かないからだ。

「そうか。少し待つ事にしよう。」

青年はそう言いながら腰に携えているうちの二本の黒い刀身をしているものを取り出していた。此処で素振りを行うつもりらしい。青年が剣を振るそのお届けが静かな図書室の中に響いていた。パチュリーはその姿を横目に時間を無為に過ごす事にした。それよりかは忘れていたというべきだろうか。

「待たせたわね。」

「おお、元主人。」

「待ちなさい。今、なんて言ったのよ?」

青色の髪をしている短めの髪型でナイトキャップのような白い帽子をかぶっている。吸血鬼らしくその鋭い目と唇から出ているその尖った歯が気になるが青年にとって気にするにたらない事である。

「主人だった人か。何か問題でもあるか。」

「あるわよ。此処で住まわせてあげているのは誰のお陰かしら。」

「美鈴にはお世話になってた。礼の一つも言っていないかったか。」

青年は珍しく深く考えていた。それとも思い出しているようでも頭を回転させている。

「私よ。紅魔館の主人はこの私なのよ。少しは敬いなさい。」

「して、話したい内容なのだが簡潔に説明する。先日の人里の騒ぎは耳にしているか。」

青年レミイとパチュリーに呼ばれていたその人との会話をやめて自分の話を切り出していった。紅魔館の主人であり吸血鬼であるが青年には弱いところを良く見られているためにこのような会話となっている。この時ばかりは青年が何を考えているのかは誰もわからない。飽きたら捨てるそんな物なのだろうか。

「で、何の話をしに来たのよ。此処で人を集めたからには何か理由があるのでしょうか。」

「フランと小悪魔を呼んでくれないか。元主人の妹だ。」

「いい加減殴るわよ。」

「そうか。俺が失望するから辞めろ。」

「理由になつてないわよ。」

「心優しい少女がそんな汚い言葉を吐いてはいけない。」

優しい声で話している青年に変に意識してしまった主人は仕方がなく許す事にした。ニヤリと笑っている青年を尻目にパチュリーは二人を呼んでいた。

「パチエ、何があるのよ。」

小悪魔が何処からか連れてきた主人の妹であるフランドルは状況が全くと云つて理解できておらずどうしたらいいのかな分かつていなかった。目を擦つて様子からまだ起きたばかりなのだと思われる。正確には起こされたというのか。

「これから、話があるそうよ。聞いてあげて。」

パチュリーがフランの耳元で小さな声で囁いていた。それを耳を傾けたフランはふんふん、と首を振る。眠たいのとパチュリーへの相槌が重なり合い不規則なものだったがそれでもいい。

「昨日の件だがあれは俺が引き起こしたものだ。」

青年のその発言には全員がそれぞれの反応を見せていた。そういう事もあるのでしようとしてレミアア、何を言っているのかは分かっていない従者二人。興味深そうに目を覚ましたフラン。そして興味なさそうにしているパチュリー。

「正確には俺を起因として行われたらしい。記憶が曖昧なもので断片的にしか理解出来ていない。」

「そう言える根拠は何処にあるのかしら。」

「俺が此処に存在しているから。相手は次元を越えて残党狩りが行なっているらしい。」

「つまり、貴方を此処で倒せば終わるといふ話をしに来たの。」

「いや。本気を出す前にこちらから出向いて本拠地を叩く。そこで仲間を募っているというのが俺からの話だ。」

青年が皆にそう言った。その反応は多様しているがそれも仕方がないのだろう。

「そうね、私は何方でもいいわ。」

「お嬢様が行きなさいと言うなら仕方がないです。」

「同じくですね。」

「私は遠慮しておくわ。出たくないのよ。」

「パチユリー様と同じくですね。」

「面白そうだわ。暴れてもいいのよね。」

「と言うわけで俺は次のところへ行く。その他気になる事は後で知らせると思う。」

青年がそう言うと言を抜きながら走り出して素早く何処かへと消えてしまった。

第66話

静かな地。幻想郷の中で一番静かな場所とも言えるこの場所は風はあれど当たる物もない。そよ風と晴れない雲で覆われた四季のあるこの世界はなんとも不安で覆い被せようとしている。そのような場所にある白玉楼という名を持つ屋敷の中、五人がある一室に集まっていた。東側には白玉楼の住人である二人が座り、その反対側は何処から現れたのか全く分からなかったが最近になってまた違う意味合いでわからなくなっていた三人がいる。マヨヒガは知っているが今回は上に合わせる事にした。

「今日は何を話しに来たのかしら。」

淡いピンク色の短めな髪をしている白玉楼の主人らしき人が口元を扇子で隠しながら来ていた。その人の名は西行寺 幽々子。そしてその隣で静かに座っている白髪の色白いの顔色をしている従者である魂魄 妖夢が座っている。

「少し勧誘に来たわ。」

幽々子と同じく扇子で隠しているが黒色ではなくて金色にしていた。金色の髪はウェーブが掛けられていて腰の辺りまで伸びているようにも見える。そして紫色のドレスを着ている。その横では式である狐が座り、その横には狐の式である猫が座っている。クスクスと笑いながら紫色のドレスを着ている人が話を進めていた。名は八雲 紫。幻想郷の管理者である事には間違いないがつい最近までは疲労困憊で倒れていた。

「何をしようとしているのかしら。」

クスクスと扇子で口元を隠しているだけだが何かあるようにしか思えないので他の三人はこれまで以上に重たい空気を浴びていた。二人が真剣に話をしようとするのと周りにどれだけの影響があるのかはもう見ればわかるような状態だ。

「このままここに居ても仕方がないから根本を解決するという提案をしに来たのよ。それで人員を集めているわ。」

「そう。幻想郷で何が起きているのかは全く知らないけど何か嫌な

事でもしようとしているのね。」

「いえいえ、そんな事はないのよ。」

クスクスと両者は笑っているがその雰囲気は飲まれつつある三人は段々とその片鱗を味わう事になりそうだ。固く重苦しいと感じるような空気感に両者が駆け引きの様に練り出される緊張感のある対話。急に振られる会話。此処からが地獄というものだった。

「邪魔する。」

ただし、例外というのもあるようで何の影響も受けなさそうな人もいた。黒髪を後ろで一つに結んでいる青年は少しだけ血の匂いを残しながら薄紫色の服装をしていた。帽子などは特にかぶることはない。

「いつらしゃい。」

白玉楼の主人である幽々子は扇子で口元を隠しながらそのような言っていた。その隣に座っている妖夢が梅干しを食べているような表情をしている中で青年はその場にドン、と座った。その度胸もあれだが座ろうなんて頭のネジでも吹っ飛んでいるとしか思えない。

「私が居るのは見えないのかしら。」

それに対して紫は少しだけ不機嫌な状態になっていた。だが青年は気にするようなことはなかった。肝が据わっているのかある意味ではとても感心するがある意味では社会不適合者のような気もしてくる。それとも命知らずの馬鹿なのだろうか。

「小手先の俺を使ってくれ。貴方が全員揃えてきたのであれば威圧感もあるだろう。そういうのは俺は望まないから口を噤んでほしい。出来なければ俺は歯向かっても良い。」

「それはこちらの自由よ。それに口を挟むならどうなるのか分かっていてでしょうね。」

「俺は頭数は欲しくない。そう伝えているはずだ。希望する者だけを連れて来い。」

「時に非常にならないと生きていけないものよ。それでも何か口出ししようとしているならこちらにも考えはあるわ。」

「そうか。そんな同士討ちをしている暇はない。して、話を進める。」

青年は瞬時に話を切り替えた。多少強引でも行かせる必要があるということだろうか。

「本当に自由なのね。」

「そうか。それでどの辺りの話をしているのかはわからないがこれからは俺は異世界に行く。その準備はもうしている。そこで付いていきたいと思う人は後日配られる新聞に記載されている場所に来てほしいと言うことだ。」

「そういう事ね。紫も素早く話せば良かったのにね。」

「そんな事言っても段取りと言うものがあるじゃない。」

紫は余りにも予定が崩れていたのと雰囲気を持ち壊された事でもなんとも言えないような虚無感に襲われていたと思われる。そんな事はつゆ知らず青年は話を進めていた。

「幽々子と妖夢は重要な管理があるので難しそうだが如何だろうか。」

「私は今回は遠慮しておくわ。妖夢は如何するのかしら。」

「幽々子様が心配ですので同じ意見になります。」

「そうか。なら仕方がない。」

青年はふと立ち上がると襖を閉めて外へと出かけていた。外で動いている影のようなものだけがあるだけで段々と遠くなっていた。何が起こっているのかは全くと言ってよく分からない。

「風のように立ち去っていったわね。妖夢、席を外しなさい。」

「はい。分かりました。」

襖を開けた妖夢は周りを何となく眺めるがその場には勿論居なかった。どこへ行ったのかも不明である。」

目の前には医者にも説明の付けられない病でその布団の中で眠るようにしている人がいる。声や感触には反応するが食べたりする事はなく目を半開きにした状態で一日を過ごしているようだ。このようになったのはどうやら昨日かららしいがそれが起こった理由は何も分からないので此処は何も言わない事にした。

ただし記憶もないという事ではないので知っている。カメラという人物は何者かによってこのようにされていた。医者と青年が相談した結果、何となくだが寝かせておく事にした。

「そうか。つまり、少しずつ近づいているという事には変わりはないさそうだ。」

黒髪をしている青年は銀色の髪をしている赤と青のツートーンカラーをしている女医に聞いていた。月の頭脳と呼ばれる八意 永琳がこの状態なので何ともなるわけがなかった。青年は何となく考えたが思い当たる節と頼れそうな人が居ないので何とも言えなかった。

「貴方の思い当たる事よね。何が差し迫っているのかしら。」

「もう来ている。ちよつとしたものだがこれはそのうち大きなものとして俺たちの前に顔を出す事になるのだろう。」

「珍しく本気を出しているようね。頼もしいわ。」

「言うのは簡単だ。それを信じてもらうのと行動に起こすことが本当に難しい。何も褒められたものではない。」

「そう言いながらも楽しそうにしているのは何故かしら。」

「さて。分かりかねない。」

青年は適当に永琳の言葉へと返答をたぶらかした所でその場から立ち上がった。カミラには何の思い入れもないがきつとそれよりも非情な人が向こう側にはいる事になる。道具にしか思っておらずそして失敗すればその場所から切り捨てられる。

「して、俺と来る気にはならないか。」

「突然の話ね。姫様が居るのに行くわけないじゃない。戻ってきて傷の手当てはしてあげられるでしょうけど。先に言っておくけど姫様は連れて行かせないわよ。」

「そうか。それは置いておいてこれからどうするつもりだ。」

「結界は破られたわけだしどうしたものかしら。」

「蓬莱人だから心配している。死の寸前で止められたりするとそれは苦しいだろう。」

「楽に死なせてくれと思えるような状態が永遠に続くのではないかという心配ね。私が居るからそれは大丈夫でしょう。」

「ならカミラも治してやってくれ。大事な住人だ。」

「そんな思い入れがあるのはどうしてかしら。」

「敵ではない以上はそうなるだろう。帰りたいたい言うならそれでも良

い。」

青年は深くは考えていなかった。それこそ何が起ころうとも関係ないと言ひ張るような人のようなものだ。何が悪いというつもりはないがつまるところそういう事だ。

「それは好きにしてもらうとして今の所何人くらい集まりそうなの。」
「居なければそれでも良い。居るなら少し考えさせて貰う。二人か三人集まればそれでも良い。」

「そんな考えで何とかなると思っているのかしら。」
「数をそろえようとも一撃でやられるのなら時間稼ぎにもならない。そういう連中しかないと思われる。」

青年は襖を開けながら外に出ていた。そこには大きく開けた庭とウサギが一人いた。そのウサギはていという名前で何年生きているのかは全く分からない。だがそれなりに小さいので機動力はあるのだと思われる。

「何話しているの。」

「これからの話だ。」

青年は至つて普通に答えていた。

「もう聞こえているから何となく分かっているけど私は興味はあるよ。退屈なのはこれから生きていく上では要らないものだからね。」

「そうか。それは頼もしい。後聞いておきたいのは鈴仙だけか。」

青年は周りを探してみるが一切そのような姿を見るような事はなかった。何か準備をしていると思われるので此処には居ないという可能性もないわけではない。青年はそんな事を考えながら渡り廊下を通つて行く事にした。そしてそう遠くはない部屋に入る。

「それで来てみないか。」

青年は一通り永琳に説明した内容を話してからそのように聞いた。その話の結果、鈴仙は行けるなら行く、とだけ答えていた。つまりはこんな私でも行けと言われたから行つてくるといふことなのだろう。「そうか。後日記事を回して幻想郷に知らしめる事にする。それまでに鍛えておいて欲しい。」

青年はそれだけを言うと永遠亭の中庭に降りてから剣を抜いてそ

の空の先へと進んでいた。これから北側へと向かうようでその方向を向きながらその場から浮いて空を飛んでいた。

「今度は何をするのかしら。」

どこか楽しそうにしている永琳が何処かおかしいと思いだめた鈴仙はその場で首を傾げていた。

第67話

夢にも出てこないほどの非情な現実はまだこの先にある。避けるか立ち向かうのかそれは人によつて賛否評論、その他評価はあるのだろうか何も気にしない人もいる。それを運命だと、宿命だと、自分の歩んできた道の罪だと。そう信じている人はどのような現実でも立ち向かい退がる事はしない。それは自分に与えられた何者かによる試練だというのならそれはもう仕方がない事なのではないか、そんな事を今日も考えている。

固い石の上で仕方なく座っている黒髪の青年がいた。服装は何処かの仙人が着ていたものと同じく薄紫色の服装をしている。黒くこべりついた何かも今では色あせていた。そして紫色のズボンを着用していて裏地の赤い紫色のマントに身を包んでいる。

近くを流れている川は水深が深いのが浅いのかは全く分からないが清らかな音が響いている。リズムのないその音には今日も驚かさされる訳だが何か心の中のものを取り払ってくれるような気がしていた。

「お隣座りますね。」

後ろから声があったので青年は特に後ろを振り向くこともせず答えていた。もう声で分かっているのだろう。自信のない貧弱な声の中に何らかの力を感じる綺麗な声をしているので聞き間違える事はない。

「さて、後はにとりを待つだけだ。」

青年は膝を立てて腕を引つ掛けながら指を結んで倒れないようにしていた。そもそもそのような必要もないといえばない。

「そうですね。」

緑色の髪を持っていて前の方で一本に結んでいる緑色を基調としたゴスロリ長のドレスを着ている。頭や腕にはフリルの付いた赤いリボンを付けていて少しだけ自信のない感じを覚える鍵山 雛はその言葉のままに青年の右肩にもたれかかる。スカートを大きく広げているので足の形は分からないがきつと変な体勢であることには間

違いないのだろう。

「幻想郷で起こっている件については何か知っている事はあるのか。」
「何も分かっています。妖怪の山は全く負けるような気がしていませんから。その代わり言葉では言わなくても貴方からは大量の厄を感じます。如何してなのでしょう。」

雛は小さな声で耳元に囁くように言っていた。青年もそれで落ちるような事はないのだがある意味では奇妙な光景となっているのと言うまでもない。

「それは分かったものではない。これから不幸なことも起こるがその後には幸せな事もあるのだろう。なら忍耐強く時間を過ごすしかないだろう。」

青年は薄暗い雲に覆われている空を見ていた。そして少しだけ口角を上げていて不気味な雰囲気がある。だが、それでこそ青年みたいなそんな気はする。

「これから行こうと言うのですか？」

青年の左側から少し拗ねているような声がしていた。その声の正体は白い短めな髪をしていて赤い山伏の帽子を被っている少女。白いモフモフの服でこの時期にはちょうど良いものだと思える。袖は黒い紐で結んであるが何処かの巫女のように独立しているように見えた。そして黒色のスカートには赤い紅葉が描かれている。白狼天狗である犬走 椛は足を伸ばしながらその場所に居た。近くには荒削りの剣と紅葉が一枚描かれている盾が置いてある。

「どこに行こうか。俺でもそれはよく分からない。」

青年は少しくらいは驚いたのだろうが一切そのような気は起こさずに淡々と答えていた。すでにもう分かっていたかのように話しているその様は何処かの地下にいる読心術の扱える人のようだ。

「いつも通りで安心しました。」

椛はその口調は変わらないにしろその事は通りの様子を見せていた。青年はもう気にする事なく目の前の景色を見ていることにした。

「私はとても心配です。」

「そうか。何が起こるのかは全く分からないがその時は貴方達に任せ

る。」

「貴方、本当に何も起こらないと思っっているんですか？」

「思っている。何とかなくなってきているわけだし大丈夫だろう。」

青年は本当にお気楽に答えていた。それこそ目の前に殺人犯がいるのにその人が親友だったので挨拶すると言うくらいだ。まるで状況を分かっていない。

「聞き方が悪かったですね。何も起こさないと言うのですか？」

「それは聞き方は悪かった。もう起きています。その事は忘れてはならない。」

「幻想郷はどうなってしまうのでしょうか？」

「それは分からない。後で新聞を通して発表する。その時まで待っていて欲しい。」

「私、一回くらいは貴方の側でかつこいいところを見てみたいです。」

「そうか。それは嬉しい。が、人を守るほどお人好しでもない。その事は忘れるな。」

「残念ですね。」

「それで柩はどうしてみたい。」

青年は項垂れる雛を抱きかかえながら左側にいる人に話しかけていた。別に悪意があるわけではない。朴念仁のようなそんなところがあるだけである。

「私は行きたいと言われた仕方がなくついていきます。妖怪の山を守る仕事は続けたいですから。それと何を起こそうとしているのかは知りませんが妖怪の山に迷惑をかけるような事はしないでください。」

「その程度の規模で済めばこうやって話を聞きに行く事はなかった。

一通り話し終えた。俺は先を急がせてもらう。」

「にとりさんはどうするんですか？」

雛は青年の手を掴んでそう言った。距離が近かった事もありそのくらいは出来たようだ。

「二人で説明しておいて欲しい。出来るだけ早急に終わらせたいんだ。俺の為にも、な。」

青年はその言葉を言い残して河原の石の上をザクザクと歩いていく。その音は川のせせらぎしかないこの場所では確かに聞こえていた。

「待ってください。」

「雛さん、辞めましょう。青年にはその人なりの考えがあります。それを邪魔するのは良くありません。」

「そうなのでしょうか。私にはとても怖くてどうしてあんなに素早く動けるのでしょうか。」

「雛さんのように厄などという概念はお持ちではないのでしょうか。あの人のことを完璧に知ろうとする事は難しい。」

「あれ？盟友はどこに行ったのかな？」

「にとりさん、こんにちは。もう一通り話したそうで何処かへ向かっていきました。あの人にはこれからもう振り回されそうです。」

椀は近くの白い壁のドーム状の工房から出てきた河童にそのように説明していた。別に間違っているということではないので何も問題はないと思われる。

「そうなんだ。何をするのか楽しみだね。」

にとりと呼ばれたその青髪の河童はグーサインを出して元気良く笑っていた。誰も止めるような事は出来なければ防ぐことも出来ないのだろう。一応熱しやすくて冷めやすい青年の期待に応えるのは至難の技だ。

第68話

夢みたいなそんな話は転がっていない。それとも転がっていても見つける事は出来ない。それは足底にあったり回り道をしたその後に落ちていたりするからで常人には到底見つけられないものとなっている。

その中で気づいたものが何らかの地らを手に入れておくことには間違いなのだろう。それは神であつたり、英雄と称されるものであつたり、仙人になつた者などその種は多様なものだが一つ共通点を挙げるならそのようなところだと思われる。それ以外の道はないと思われる。元々生まれ持つていたりしなければ。

此処は妖怪の山の山頂にある守矢神社。きっと知っていることなのだろうが一応確認のために聞きにくいという程度だ。黒髪の青年はその髪を冷たい北風に晒しながらその山道を歩いていくことにした。その背中には何かあるのだろうが何も感じさせないという上級プレイをしているようだ。

赤い大きな鳥居をくぐり抜けた青年は参道の真ん中を堂々と歩いていた。背はしっかりと伸びているのだがその横暴な態度はとても褒められたものではない。神への冒瀆と信者から言われようとも仕方がないが青年は言われたところで適当に流してその場は終わるだろう。

「おはようございます。」

緑色の髪を一房作っている髪型をしている巫女は箒で境内の掃除をしながら青年に話しかけた。風祝である現人神なのだが青年にはそんな事は関係ない。青色の上に白い水玉模様のある下半身の格好をしていて白い服装をしている。

「参拝客や客人が来る予定はあるか。」

青年はいきなり話を始めていた。挨拶もしない。だがそれを怒ったりするような事はない。慣れている、というのが理由だろう。

「いえ、ないです。何か私にも関係のある話なんですか？」

その巫女は首を傾げながら青年に聞いていた。名は東風谷 早苗。それが本名なのか現人神としての名前なのかは一切分かっていない。「そうだ。一応話は聞いて欲しい。神殿内で一気に話したい。付き合ってくれ。」

「あ、はい。」

力の抜けた表情をする早苗だが誰からのフォローもなかった。元々二人しかいない上に用件が済めば次へと進む青年には背中目ももう一つない限りはそれに気づく事はなかった。

「どうした、早苗。」

青年は足音で気づいたのか被さらないその音が不思議に感じて後ろを振り向いていた。

「い、いえ。気にしないでください。」

急ぎ足で小屋へと行った早苗はその髪などを揺らして青年の元へと走ってきた。そこまで急がなくてもいい、と青年は言葉を返して山道を歩いていくことにした。

「邪魔する。」

青年は無断で入って一番最初にそのように言った。早苗は右斜め後ろで苦笑いをしていたがもういつも通りの光景なので何も言うこととはない。こうなければ青年ではない。

「お、よく来た。今日は何か頼み事でもしに来たのか。」

紫寄りの赤紫色の髪をしている神がいる。背中には大きな注連縄をつけていて腹や腕の各所に注連縄をつけている辺鄙な格好をしている。名前は八坂 神奈子。

それともう一人いる。名前は守矢 諏訪子その人は背はあまり変わらないがその見た目はどうしても子供のような見た目を感じる。そもそも姿を持たない神なのでこの姿が本物であるという確証はどこにもないが此処の中では一番力が弱そうに見えても仕方がないと思われる。だが、本当はその逆だ。

「そうだ。と言っても到底首を縦に振ってくれるとは思っていない。」

青年はその場にどかつ、と座って髪と同じく胡座をかいていた。まるで同等の存在に扱っているが青年にとってそのような区別がない

のでその点は気にする事でもない。

「何の話なのか興味が湧いた。是非、話してみたい。」

神奈子は体を前に寄せていた。よほど神でも楽しめそうな話題だと思われる。

「実はこれから遠くへ出かけることにした。それで仲間を募っている、という話だ。」

青年はそのように話した。

「そういう話か。ならきつぱりとお断りさせてもらう。此処からは離れる事はそうそう出来ない。その事は分かっています。どうして此処まで足を運んだ。」

「長い旅になるかもしれない。それで顔を見にきた。それと目に焼き付けて欲しい。」

「そういう話か。わざわざ来てもらって悪いが何も出すつもりはないが良いか。」

「別に構わない。俺が勝手な都合でやっているだけだ。神奈子や諏訪子が気になる事でもないだろう。」

青年は仕方がなさそうにしていた。諏訪子に関してはその中から出る事は許されないのだろう。そもそも境内に出られるのかも怪しいものである。それを無理に頼んでいるのでその返答も仕方がないものだった。

「私、行きたいです。」

早苗は青年の後ろで座っていたらしく溜めていたような声で青年に宣言した。青年からすればその事は別にどうでもいい話なので少しかだけ圧倒されたというのが一番正しい。

「そうか。また後で新聞を使って知らせる事にする。まだ話は固まっていない。今は管理者と巫女が話をしている。」

青年はそれを早苗と二人の髪に伝えるとその場から立ち上がって踵を返した。襖のあたりで止まると首だけを動かして後ろを振り向いている。

「今日は邪魔した。何処かで会えたらそれで良い。」

そこから青年の行動はとも早いものだった。何かに急かされて

いるようにも感じなくもないほどの速さで襖を出たあたりから西側へと向かっていた。このまま帰るつもりなのだろう。慌てて立っていた早苗はそう思っていた。誰も寄り付かせようとしない青年に中から断片だけを見ていた二人の神はそれなりの危機感を持っていたに違いない。

第69話

青年は何の躊躇もなく何処かへと続く大きな穴の中へと入り込んだ。その中は暗く何処に行くのかも全く分からなかった。その勢いは誰に求める事はできず蜘蛛の糸でさえ止められなかった。まるで彗星のように地底に降りた青年はその勢いとは裏腹に静かに着地した。

中は薄暗い青い炎が地底の中を照らしていた。だが青い炎の正体は怨念の塊であり触つていい代物ではなかった。一回も良いかもしれないと青年は考えていたが行動に移そうとはどうしても思えなかった。その理由は今の状況と気の乗らなさにある。

「何年ぶりだろうか。」

心の中で考えていたはずの思いが口から言の葉を使つて飛び出てきた時何の予兆もなく青年は歩き始めた。その人の目の前には何も無い。岩肌の露出した殺風景な空間と遠くの方に灯りのようなものがあるだけであつてその他には何も無い。本来は罪人の集まるような場所だがその中には自ら身を投じた人もいる事には間違いない。迫害という形で追い込まれた鬼が此処に一人いるのは事実だ。

青年は一先ず体を浮かせて一番近くにある顔の知っている人の家を訪れる事にした。その理由は特にないのだが何かあつてもおかしくないはずだ。古くなつていいる橋を抜けてすぐ近くの家の戸を勢いよく開けた。青年には常識という概念はない。己がやりたいようにやっている。

「元氣か。」

青年はズカズカと中へと入っていく。家の家主と思われる人が卓袱台に座りながら青年の方をジトツ、とした目で見ていた。あまりにも突然なので呆れてしまったのか如何してこうも非常識なのかなんて考えているだろうか。無駄である事には間違いない。

「元氣よー。」

銀色のショートボブの髪型をしているエルフのように尖った耳をしている少女は目も尖らせながら卓袱台を叩いていた。そんな少女

を青年は心配していた。

「手は痛くないだろうか。」

「其処じゃない。」

ペルシアの礼装である服装をしていてスカートの際や袖にはある橋を思い出させるような装飾が施されている。頬を紅潮させている少女の対面に青年は胡座ですわっていた。まるで住人のようである。「そうか。久しく会っていないから心配になった。今まで顔を見せなくてすまなかった。」

青年は目の前にいる少女、水橋 パルスイにそのように言っていた。正直青年に振り回されているだけである。それとも青年のその力が強すぎるだけなのだろうか。

「妬ましいわ！その言葉は私じゃなくて勇儀や他の人に言いなさい。」

パルスイは水でも沸騰させようとしているかのように声を荒げていた。正直今ならお湯がへソで沸かせそうである。

「して、温泉の方はどうなっている。お尋ね者だったりしてここには来る事が出来なかつたのでとても気になる。」

「無視すんな！私を見ろ。」

「そうか。して、パルスイは何か嬉しそうな事はなかつたのか。」

「貴方に久しぶりに会えた事よ。」

「そうか。俺も嬉しい。して、何か地上のことは聞いていないのか。」

「何があつたと言うのよ。」

「大きな異変が起こっている。其処で俺は仕返しを決行する事にした。だが俺一人では不安なので誰か一緒に行く仲間がいいるのか探しているところだ。」

青年はそのように答えた。パルスイは何か幻滅したように素顔に戻っていた。

「そんな奴だつたらここまで引つ掻き回さないでしょう。幻想郷全体を巻き込んで何をしているのかは知らないけど期待はしているわ。」

「そうか。来てくれるのか。」

「仕方がないわね。」

「では、俺は行かせてもらう。失礼した。」

青年はその場から立ち上がると小走りで家の外に出てその先へと向かっていった。この先には繁華街がある。鬼しかいないがだからこそそれで良い。青年はそんな事を考えていた。

「と言う話なんだ。」

青年は一通り流れを伝えていた。青年の声を聞く為に鬼たちは集まっていたが青年と対面しているのは女性だった。赤い角を額から一本伸ばしていき、白く透けている長いスカートを着用している下駄を履いた鬼は盃片手に青年の話を聞いていた。名前は四天王が一人、星熊 勇儀。パルスイとは飲み仲間だが鬼に付き合えるのはまた別の理由があると思われる。

「お前はそんな事をしようとしているのか。人生とは数奇なものだね。温泉を作っていたらお尋ね者になっていたり、はたまた異界の人物が侵略をしてきたり謎の感染症が流行っていたり嘘みたいな話だよ。」

勇儀は盃に入っている液体を一気に飲み干すと適当な瓶からドボドボと入れていた。その豪快な飲み方は勇儀らしいが青年は特に気にした事はない。そうでもなければ鬼も対面をとってサシで話そうなど愚の骨頂のような行動を取るわけがない。本来なら面通りする前に誰かに押し返されるのだろうが青年の場合はまた違う理由がある。

「そうか。それでも最後まで聞いてくれたのは有難いと思っっている。」「お前が話す話だ。信用しているからね。で、本題というのは何なんだ。」

勇儀は素早く質問をしてきた。青年が最初の話として手早くすませたいと一言を伝えていたのでそれに勇儀は答えるつもりなのだろうと思う。正直そうでなくとも青年は自分のしたい行動を取るの、何も関係はないと思われる。

「勇儀も俺についてきて欲しい。それだけの話だ。」

青年は口角を上げて勇儀の質問に答えていた。まるで対等に話すが種族的優位なのは勇儀なのである。だが、青年は敬語一つも使おう

とはしない。使ったら使ったでそれは気持ち悪いのだが。

「そういう話か。別にそれは構わない。一つ条件がある。」

「それは何だ。」

青年は聞いていた。

「地底温泉はもう完成している。私と一緒に入ってくれたらそれで良い。」

「そうか。別に構わない。ただしその時間は短いしまともに入るつもりはない。それでも良いか。」

「構わない。その代わり二人でだ。」

「そうか。楽しそうな事をしてくれる。行こうか。」

「おうよ。」

勇儀はその場から立ち上がると道案内をするように青年の先を歩いていった。別に青年がそのように脅迫した覚えはない。しかし勇儀がそう言うのできつと気に入っているのだろう。

第70話

誰にも使われた形跡のないその温泉は二人に使うには大きすぎると言うのかなんとも言えない虚無感を与えるものだった。そして上の方からバチャバチャと音を立てて少し黄色っぽく濁った湯が溢れている。神の啓示のようなその洗礼が青年の遠くで起こっていた。

「しかし二つ返事で出来てしまうとは。さては私を怪物だと思つてい
るのか。」

赤い角を額から大きく伸ばしている勇儀は湯船に浮かせた木製の桶の上に盃を置いてその黄色く濁った湯の中に体を入れて染み込ませていた。何かあると言うことではないが恐らく何かあったのだろう。

「そうか。生憎だが男も女も老いも若きも俺は興味ない。幼い人が
しつかりとした評論をするのなら師として仰ぐ。歳を重ねた長老が
過ちを犯せば制裁を加える。俺は神も悪魔も怖くはない。鬼でも。」

青年は膝の上に両腕の肘を乗せて上で指を重ね合わせると親指の
上に顎を置いておくことにした。その事には何も意味合いはないの
だろう。これでも濡れる部分が最小限になるようにしていると言う
事は間違いなさそうだ。

「ハハハ、それは面白い。そんな返答でもないと私は心配するところ
だったよ。」

案外面白かったようで豪快に笑っている勇儀は素晴らしいと思え
たのか手を叩いていた。湯船はそのお陰で波立っている。別に気に
する事はないが青年は変に危惧していた。

「そうか。それでどうして俺と一緒に入ろうとしている。」

「そんな事は簡単だ、私が入りたかったからさ。良いだろう。」

「そうか。光栄と答えるべきか愚鈍と答えるべきか迷う。」

「そうかい。まあ、良いさ。お前もどこまで行こうとも私はついてい
くさ。その背中にはそれだけの価値がある。その事は忘れてくれる
な。」

「忘れない。俺にはまだ見えない。その予想にもしないその場所へと

向かうまでは俺は皆に顔を見せるわけにはいかない。」

「偶には顔を見せてくれても良いんだぜ。良いじゃないか。非力な種族が逃げても誰も何も言わない。その代わりその中で気持ちよく押し返してくれる人が何人いるのかが気になるところだよ。」

「勇儀は押してくれるのか。」

「私か？私なら投げ飛ばす。逃げんじゃねえ、と言ってやる。」

「そうか。そうでもないやはり四天王はやっていられないか。」

「そうだよ、その気迫がないとやっていけない。例えばあの剣鬼はそうやって私たちの地位を脅かしてきた。本人は別にそのつもりはなかったそうだがどうだが。真相は闇の中だよ。」

「そうか。それは大変な話だ。」

「そう言ってくれるだけで私は嬉しいものだよ。」

勇儀としては少し安心したのだろう。何かを試すためだけに一緒に時間を共にしようと言ってきたのだと思われる。青年は仕方がなくそれに乗る事にしたのだがどれだけ頑張ろうとも期待に応えられない気はしない。その気もないがなぜか上手くいつている。

「そうか。」

青年は噛みしめるように返事をするだけでそれ以上は言葉をつなげなかった。何か意味などないが何かあるのだろうと勇儀は思っていた。

「それでお前は何を目指す。」

「急に話を切り替えたか。そうだな、一人の剣士だよ。昔のように影を歩くのではなくて光の中を歩けるような人物になりたい。」

「平凡な答えだな。世界なんて創造してみたらどうだ。」

「辞めておく。管理が大変そうだ。」

「断らないところがらしいね。」

勇儀はなぜか満足していたのだがその理由は青年には何もわからない。答える気も聞こうともしないその二人の距離感は遠くも近くもない絶妙な均衡の上に初めて成り立つものなのだろう。友達とも恋情を募らせる訳でも恨みを積もらせる訳でもない。

第71話

青色を基調とした寒色の建物が一軒、地底の奥に佇んでいた。まるで隠すように建てられているこの館には管理者として名のある人が住んでいる。黒髪の後ろで一つに結んでいる青年は誰にも許可を得る事なくその敷地の中へと入っていた。

紅魔館よりかは庭は広いように感じるが別にそうでもないと感じて感じる。岩肌に覆われているが壁が低い分あまり狭いと言う感想にはなりにくい。そしてシンプルに円形の花壇が置かれているだけで他には何も無いのが余計にそうさせるのだろう。不足の美という言葉の方は質素な日本造形という訳ではないので合わない。

青年はその中へと入って数歩くらい歩いていった。青色のカーペットと狭く感じる広間がその先にある。そして階段の上でいつも通り待ち構えている少女がいる。癖のある髪質らしく少しカールのかかっているように見える薄いピンク色の髪をしていて赤いヘアバンドを付けていて真紅の瞳をしている。フリルのついた水色の服装で髪と同じピンク色のひざ下のスカートをはいている。名は古明地さと。地霊殿というこの建物の主人である。

「邪魔する。」

（起きてるかー？）

「いつらしゃい。貴方は此処には何をしようと訪れたのかしら。」

「別に。」

（少し痩せたのだろうか。）

「何か目的はあるのでしょうか。早く考えなさい。」

青年を急かそうとしているさとりは何処か余裕がない素振りを見せていた。心を読むことが出来るサトリという妖怪であるが青年にそれが通じた事はない。言動と思考がバラバラで行き当たりばったりな自由な生き方をしている青年はさとりを迷わせるだけだった。

「そうか。そういえば読心が出来たのだった。」

（何を考えようか。）

「心の中で迷わないで。訳が分からないわよ。」

「そうか。ありがとう。」

(幻想郷で起こっていることを知っているか?)

「それよ。安心したわ。私は何も知らないわよ。何か流行病が流行っているのは知っているけどそれぐらいよ。それとはまた違う事なのでしょう。」

「そうだ。実は俺は旅に出かけようと思っている。」

(小腹すいた。目の前の人はどうだろうか。)

「何てこと考えてるのよ。」

目の前の人の思考に理由と考察がない事に驚きながら突飛な発想をする青年にはどうしてもついていくことができなさそうだった。

「何か問題でも。」

(あるのか、さとり。)

聞くな、と心の中で呟いたさとりは仕方がないので青年に合わせてみる事にした。

「そちらの方が好みなの。」

「男の方が良い。」

青年は急に何かを言い始めた。さとりには何を言いたいのか全くわからなくなってしまう。どうしたらそうなるのかは全く分からない。

「何と、まあ。どうしましょう。」

さとりの気が動転したところで青年がその様子が面白ようで口角を上げているだけだった。声も何も出ないがその目はさとりを見ていた。

「そうか。そんな話は置いておく。して、来るという気はないか。とても重宝する。」

青年は楽しそうな表情をしているがさとりにはあまりそのような気配は感じ取れなかった。そう大きくは変わらない青年の表情を読み取るのはなかなか難しい。

「遠慮するわ。皆に嫌われるわよ。」

「そういう人は俺がぶっ叩く。それでどうだ。」

「地霊殿の主人として止まる必要があります。其処だけは譲れません。」

何処かの主人はどのようにハッキリと意思表示はしなかったので青年としてはなんとなく嬉しそうにしているのは確かだ。

「そうか。下らない理由なら強引に連れてきていたが仕方がない。」
(にしても一切表情を変えないのは珍しいものだ。)

ようやくさとりにも余裕という物が出てきたのか青年の心の内を読み取れるようになったが相変わらず口からの言葉と心の声は全く違う。同時に処理でもしているのだろうか。それとも水泡のように浮かび上がる多くの何かの一片だけを読み取っているだけなのか。さとりにはもはや理解出来なかった。

「さとり様とアンタかい。ちょうど良かったよ。勇儀さんが呼んでいたので終わったらいつてきてあげて。」

赤い髪をしていて三つ編みをしている黒と緑のゴスロリ調の服装をしている黒い尻尾を二つ持っている猫のような妖怪が近くに來ていた。部屋を挟んで不器用に話していたので誰かに聞きとられる事は青年は承知していた。だが、それでも関係ないと言えるほどに関係性は持っていた。名は火焰猫 燐。お燐と呼んでほしいそうだが青年から呼ばれた事はなかつと思う。

「それはもう終わらせてきた。良い湯だったよ。」

「流石だね。」

お燐がそのように言っている。前に温泉を作りたいと言われた事は覚えているがまさかここまで発展するとは思わなかった。お燐の心の中は嬉しそうな感情を出していた。

「そうか。して、俺と何処かに行かないか。」

青年は急に話を切り替えて自分の話したいことを言い始めた。

「良いね、お空にも伝えておくよ。それで何処に行くんだい。」

「異世界だ。人数も限られる。だが、来てくれるならそれは嬉しいものだ。」

青年はそのように言っていた。お燐もさとりもそこまでは聞いていなかったので困惑した表情をしていた。青年はそれでも先に行く。

死に急いでいるようだった。

第72話

地霊殿からの帰り道。青年にとって全てを終わらせたつもりだったがそう思っていた矢先に青年の進行を止めるようにある人が立ち塞がる。その人は前に弱者を助けるために奮起したが良いがその方向を間違えてありえない力を手に入れた代わりに理性を失って青年をかなり追い詰めた存在がいた。

「誰だったか。」

青年は少し疲れたような口調でそのように聞いていた。それは仕方がないことであると思われるがそれでも知らないのであればどうしても起こる。

「忘れたとは言わせない。私をあそこまで追い詰めた拳句、地底に落とすとした。」

その人は黒髪に白と赤のメッシュを入れた二本の小さな角を持っている妖怪である。所々に矢印をかたどった黒、白、赤の物がある。鬼人 正邪がこの人の名なのだが青年はそう覚えていない。

「忘れた。人の名を覚えるのは苦手だ。過去の産物としてしか捉える事は出来ない。」

「姫は今はどうしている。」

正邪は青年に対して酷い剣幕を見せていたが小槌の魔力に侵されていないその人は青年にとつては何の意味も為さなかった。言い換えればどのようなにしても関係のない話だった。いつまでも経っても一人なのは変わりない。

「大きく活躍してくれたと思う。博麗神社で暮らしているはずだが姿は最近見っていない。」

「そんな事をして何が楽しい。」

「何も楽しくはない。そんな悪癖は持っていない。」

「誰がそんな事をした。」

「姫の背が小さくなり保護するように俺が求めた。それだけだ。」

「何故だ？何故、博麗に任せた。」

「簡単な話、誰かが暴れていた時に姫を救ったのは博麗の巫女だ。そ

れで俺はその人に任せる事にした。」

「姫はどうしている。」

「楽しく過ごしているだろう。ここ最近は姿を見た事はないので何処にいるのかは全く知らない。」

「そうだったのか。どうして私はこうなってしまった。」

正邪は一旦落ち着いた口調で青年に聞いていた。当たり前前のことを聞いてくるので青年は説明しておく事にした。

「貴方は暴力で強者に戦いを挑んだ。最終手段とするなら別に構わない。だが、姫は言葉の人の力を借りて戦っている。今でも話は聞かないが何処かで何らかの活動はしているはずだ。手に乗るような大きさの体で幻想郷をひた走っている。」

「だからお前は間違っていると云っていたのか。」

「ようやく理解したか。遅かったとは言わない。これからの人生で頑張っここから這い上がれ。貴方の向上心は何処かで役に立つ。」

青年は正邪の横を通り抜けていた。そして背中を向けたまま地底から出て行こうとしている青年を正邪は追いかけてようとはしなかった。青年が私の存在を認めてくれた。それだけで今の正邪には十分だった。

「待っている。必ずお前を引き摺り下ろしてやる。」

物騒なことを言う正邪だがその表情は決してそれを感じさせないほどの晴れやかな表情をしていた。これからは楽しみであるのは誰の目にもわかる。」

あくる日の昼下がり、その日は少しだけ暖かいと思える日であるが寒い事には変わりはないそんな冬の日だった。少しだけ雲が薄く広がっていて日はそこから漏れ出している。北風の吹いている幻想郷で青年は風に押されるようにある場所へと向かっていた。

暫くの間を費やして妖怪の森と呼ばれる荒れ果てた木々の生い茂る中へと入っていく。山笠を頭に被っていてさっぱりとした黒髪をかきあげて後ろで一つに結んでいる髪型をしている。白い着物の上に黒い羽織る物を被っている服装で前は開けているが風になびかないように紐がつけられている。

灯籠の置かれているその参道はとても綺麗に整備されていると思っていたが今の状況はともそうとは思えなかった。木の葉が散らばっているなら時間なりその風の影響なりの理由で何とでもなるが汚れや傷はどうしてもそれだけではなかった。何か起こっているのかと疑念を抱いた青年はその中へと入っっていこうとしている。

白い壁に覆われた敷地に建立する木造の質素な建物がその上から見えている。前にも来た事はあるので青年は何となく構造は理解しているつもりだ。まだ行ったことのない部屋や小屋はあるがそれも道くらいはよくわかる。

「門番は無しか。」

青年はそう呟いてから小さな門を通って敷地内へと入り込んだ。命蓮寺と誰からも呼ばれているこの寺はとても静かなもので誰が居るのかは全く分からなかった。寺らしい僧の姿はなく経を読む声もなかった。何があったのかは全く思い当たる節がなかったというところででもない。一種の罪悪感を持ちながら青年は縁側を歩いて部屋の様子を覗いていた。

瞬時に何が起こったのかを知る機会はなかったがそれでもぐったりとしている僧や門番だった人を見ているとそれだけで体を小さくするしかなかった。毘沙門天の弟子はよく眠っている。船長と門番はぐったりと布団に包まっていて入道使いは座禅を組んで精神を清めていると思われる。そして住職でもある聖 白蓮は身の入らない小さな声でお経を読んでいた。青年は何となく襖を開けて静かに入り込んだ。そして近くの壁に腰に携えていた四本の剣を立て掛けるとその場からは離れて行く事にした。

「こんにちは。」

青年の準備が大体終わった頃に振り向いて挨拶をしてくれた。青年は特に何か反応は見せなかった。目の下にクマを作っている頬の瘦せこけた姿を見ていれば何となく察せる。遂に負けたのだろう。

「済まなかった。少し荷が重たかったようだ。」

青年は聖と対面するように座ると胡座をかいて対面していた。金色の髪に紫色のグラデーションを入れた髪型をしている聖は正座を

して青年と対面していた。だが、目の感じはいつもとは違う。

「いえ、そのような事はありません。こちらこそ期待に答えられなくてすみませんでした。」

「謝罪は要らん。それをしてもらうためにここに来たわけではない。」青年は強引に顔を上げさせると聖の目をよく見ながら話を始めていた。少し怒っているようにも見える青年だがその真意は全く分からない。もしかすると聖の弱い部分が露見した事に苛立っているのだろうか。そもそも非を認めて欲しかったわけでもないのこのような行動に至ったのだと思われる。

「幻想郷でここ最近起きていた事は覚えているか。」

青年は視線を切ると入ってきた時に少し開けた襖の隙間から外を眺めていた。時間が経っているわけでもないのので何か変わり映えがあるのかと言われると別にそんなことはない。やるせない気持ちを何処かに発散させようとしている。それだけだった。

「いえ、全く分かっていません。最近私たちは何処にも出かけていないのです。」

「それは知っている。ここの空気は全くと言って万全なものではない。どうしたらこんな事になるのか聞きたくなる。」

青年はやつと視線を聖へと向けるとその目は確かな煌めきと鬼のような威圧を持っていた。弱々しいものではないのは見ていれば分かる。

「体調が優れないのです。寝つきが悪いのが原因だと思われます。」

「そうか。自分の体を一番大事にしろ。」

「そ、そうですね。」

今にも立ち上がり胸倉を掴みそうな勢いのある声に聖はその身をひくつかせた。青年はそれに余計に苛立ちを覚える。

「貴方はこれからも大事な役目がある。気晴らしに何処かに出かけろ。出ていけ。」

青年は怒っているようで聖の手を掴んで強引に起こすとずんずんとその体を押していた。その理由はどうであれ何をしたいのかは全く分からなかった。聖には追放のように感じたのかもしれない。

しよんぼりと何処かへと行ってくる聖の背中はとても住職とは思えないものだった。青年は特に気にする事はない。それぐらいしなないと聖が気晴らしに行こうとは思わないだろう。そんな所だ。

第73話

青年は少し疲れていたのか一眠りをしていた。襖を叩くその音に耳を澄ませながら気の休まらない時間を過ごしていた。そもそも寝ようもしない青年はある意味、聖の帰りを待っていたとも言えるのかもしれない。多少強引だったと思えるほどには反省したのかもしれない。一言ぐらひは謝りたいと思っていたのかもしれない。その真相は謎だが多分そうなのだろう。

その風の吹き荒れる中で何やら違う音が混じっている事に気づいた青年は眠たそうなその目と体を起こしていた。その様子は久し振りに目を覚ました人らしく状況がまるで分かっていなかった。随分とのんびりとしたものである。

「誰だ。」

その弱々しい間延びした声で上半身を起こした青年は静かにその場に待機する事にした。手元には心許ない武器しかないがそれでも何とか戦えるくらいにはなっているのだろう。

足音が近づいてくる。その音に耳を澄ませた青年は懐に手を入れて針を一本持っていた。息を潜めてゆっくりとした息遣いで呼吸をしていた。木の軋む音がする。そして人影が近づいてきて目の前で止まると襖が開く音がする。

「神子か。」

青年は投げそうになったその針を懐に納めるとその体勢のままその場にいる事にした。特に大きく動く必要もない。そう考えたのだろう。

「貴方ですか。貸した服の方はどうされましたか。」

金色のようなそうでもないような髪の色をしていて獣の耳のような形をしている短めな髪型をしている。和と書かれたヘッドホンを付けていて前に青年が着ていた薄紫色と紫色のスカートをはいている。マントは冬なので付けている。

「汚れたので修繕と選択をしてもらっている。」

何をしたのかは神子には説明しなかったが何となく断片的に見える

るので相手は何も気にしなかった。十欲を使って人の過去やこれから起こり得る未来を見定める正に何千年に一度の逸材であるが青年がそれを気にして敬意を明白に表した事はない。しかし神子が寛容なのかそれとも何となく理解しているのか何か文句を言う事はなく他の人に言われているだろうが危害を加えないように抑止している。「どうやら貴方の言っていた事は間違っただけではなかったようです。」

「そうか。」

青年も神子も特に多くは話す事はなかった。あまり神子が興味がないのと青年が話そうとはしないのもある。

「聖 白蓮は如何されましたか？」

「俺が強引に気晴らしして来いと追い出した。正直やり過ぎたと思っている。」

青年はそのように答えていた。もう眠たいという感情は無くなっているのかしっかりとした口調で話している。正直動きを止めていれば寝ていると言っても過言ではない。

「それはご苦労だった。実は私も不調を見兼ねて様子を偶に見に来ていたんだ。貴方が繋いでくれた縁をみすみす捨てるわけにはいかないからね。」

「そうか。何方が追い出すのかだけだったのか。」

「そのようだ。だからと言って、私もまだ安心は出来ない。これから何を起こそうとしているんだ。」

神子はしっかりとした目つきで青年を逃さないように目で訴えていた。対する青年は特に気にしていないようだがその緊張感は並大抵のものではないと思われる。普通の人なら。

「逆に何を起こしてほしい。」

青年は楽しそうにしていた。面白いことを見つけたようで興味深く観察をし続ける子供のようだ。

「何も望まないよ。結果としてあまり良い成果とは言いにくい。そうではないか。」

「それはもしも俺が何も起こさずに待つだけだったら如何なっていたかという事か。」

「そういう事だ。」

「誰も気付けなかった。そして博麗の巫女の加護を受けている人が正確の明るい馬鹿が生き残る。人間は勿論、力の弱い妖怪でさえも自らその命を落とす。その連鎖が起こればいずれ幻想郷は死ぬ。」

「その為に私を含めた全員を焚きつけたという事ですか。それはうまく言っているのでしょうか。」

「そうか。少し期間が長過ぎたようだ。」

青年は天井を向きながら神子にそのように伝えていた。実際、秋頃までは大体は持ちこたえていた。そこで青年が戻り犯人を捕まえたのならそれで良かったのかもしれない。

「それが出来たらここまで苦労する事はなかったと言いたそうだけど。万全ではなかったのならそれは仕方がない事。過去ではなく未来を考える。そうだろう。」

「そうか。神子のいう通りなのかもしれない。俺は考えていても仕方ないらしい。」

「えっ。」

「俺はこれから大きな事をやる。生きて帰る。俺の罪はそれで拭える。」

青年は急に立ち上がると命蓮寺から出て行こうと歩き出していた。神子は声を掛けたが青年の耳には一言も入らなかつたらしい。そうでもないが無視という事は決め込まない。

「あれはあれでらしいと言えらしいですが中々困ったものには違いない。聖にも協力を仰ぐ事にしよう。」

青年の代わりに聖の帰りを待つ事にした神子は青年が横になっていたその部屋で正座しながら待つ事になっていた。それはそれで別に良いのだろう。

夜分遅くに帰ってきた聖はその溜息と共に参道から一番入りやすい部屋に入っていた。其処は仏像の置かれている部屋であり人は居ない部屋なので何の気兼ねなく中へと入っていた。

「青年が一言授かっている。聞いてはくれないか。」

その中に居たのは豊聡耳 神子。前に青年によって結んだ縁の結果の産物。聖はその訪れには特に驚く事はなかった。だが、其処で青年の言葉があるのはどうしても驚いていた。

「はい、なんででしょうか。」

聖は空気を讀んだのか神子と対面になるように座っていた。その距離は人が寝転がれる程の距離だった。

「青年は謝りたいことがあるようでやり過ぎた、とだけ言っていました。」

「それだけですか。」

聖は何となく思ったこともあったのだろう。そんな感じがしていた。

「それと青年が行動を起こすのが遅ければ私が追い出していたでしょう。」

「それは如何いう理由なんでしょうか？」

聖はもう頭の中は可笑しくなっていたのだろう。

「私は貴方のことを心配していました。青年がどのように考えているのかは知りませんが私は良き友人として敢えて同じことをやっていたでしょう。」

「不器用な方ですね。」

「そうだ。だから許してやって欲しい。面倒ごとの絶えない人だが世話を焼いてくれると思ったのかもしれない。私たち二人がね。見てやろうではないか。この先何をやらかしてくれるのか。」

神子は聖の両肩を掴むような優しい感じで話していると共に熱い思いを伝えていた。それは如何やら聖には伝わったらしくその場は特に何かあったと言うことではなかった。

第74話

青年の言葉や行動によって紡がれた幻想郷は潤滑油を使いながら何とかその歯車を回していた。上手に行かなくても、途中で途切れたとしてもそれを治してくれる管理者がいた。その回転の異常はまた違う意味で幻想郷を活性化させそうだった。

ある日の晩、青年は博麗神社を訪れていた。その理由は何となく巫女には分かっていた。一通り声はかけてきたと言う意味合いなのだろうと考えていた。

「兄者、ご苦労様です。」

金色の髪をしている好青年とも呼べるその整った顔立ちとスツキリとした爽やかな笑顔を振りまいたアーサーは大分幻想郷にも慣れてきたらしく灰色の着物を着ていた。要するに置いておいた青年の古着ということである。どこで集めたのかは聞くことでもない。

「アーサーにはここに残ってもらおう事にした。」

黒髪の前ほど博麗神社の巫女が住んでいる小屋の中に入ってきた青年が開口一番に言い放った。何の前触れもなく話を進めた青年だが何か考えはあるのだと思っている。博麗神社の巫女である博麗霊夢は切にそうに願った。

「何かお考えでもあるのですか。」

アーサーは特に疑問は持っていないので青年の意見には賛成するつもりら祭。それでもそのように采配した理由は聞きたいらしい。アーサー自身も博麗神社から出ていないので青年が何をしてここに来ているのかは全く分かっていない。

「これはアーサーには関係ない。魔王から侵略を受ける幻想郷を助けて欲しい。俺が今、帰れる場所だ。」

青年は静かにアーサーの質問に答えていた。その低さや小ささにはまだ迷いがある。どうしても上手くはまとまっていけないようだ。もしかしたらまた別の理由があるのかもしれない。アーサーは取り敢えず青年の言うことを信じている事にした。

「兄者の言いたい事はわかりました。ですが一つどうして私には関係

ないと言えるのでしょうか。出来る事なら兄者の近くで持ち合わせている剣を振りたいです。」

「その気持ちは別に構わない。だが、これは俺がしなくてはいけない問題だ。貴方を巻き込んでまでやる事ではない。」

「分かりました。私は兄者に言われた通りにこの役目を全うします。」
アーサーは高らかに宣言したので青年は安堵の表情を浮かべていた。そうする理由は全くわからないが何か青年が気にしていることがあるのだろうか。アーサーは感じ取っていた。しかしそれを感じ取れなかった人が一人いた。

「アンタ達は兄弟なんでしょう。一緒に行きなさい。その方がやりやすいだろう。」

言わなくても分かるだろうが霊夢である。怒る理由はよく分からないが青年は真摯に対応するつもりなのだろう。そうでもないところわざと体を向けてその目を見て話を聞こうとはしない。その態度は切腹する前の凜々しい武士のそれである。

「俺はこれから殺されに行く。頼むからアーサーは幻想郷に残してくれ。」

青年は謝罪のつもりなのだろうが頭を軽く下げているだけだった。それだけだったので全く霊夢には伝わらなかつたのだと思われる。青年の頭上からある棒が振り落とされた。フルスイングというのが一番伝わりやすい。渾身の力で振られたお祓い棒を青年は避ける事なく受けていた。

「馬鹿じゃないの？ちゃんと生きて帰るのよ。ちゃんと帰るのよ。アンタがメソメソしていたら私たちは誰の背中を見ればいいのかよ。ちゃんと導きなさい。」

「そうか。俺は少し勘違いをしていたらしい。」

青年はいつも通りの雰囲気に戻り頭を叩かれたおかげで倒れた畳の上で寝転がっていた。アーサーはそんな青年の姿を微笑みながら眺めていて、霊夢はその様子に安心したように鼻息を鳴らしていた。実際の心情はお互いは知らないがそれなりの活力なり源なりはあるのだと思われる。そうでもなければこの三人は集まる事はない。

「頑張りなさい。アンタの頑張りで幻想郷に帰れるのかは決まるのよ。」

霊夢は満足したようなのでアーサーが今度は質問をする事にしていた。

「どうして死ぬことを覚悟しているのですか。」

アーサーはとても当たり前なことを聞いていた。

「俺が何をしていたのか知っているはずだ。」

青年は畳の上に寝転がりながら聞いていたのでそのままの体勢で答えてみる事にした。

「魔王を倒そうとした剣士でしたね。」

「俺が断片的な記憶の中で一番新しいのは床に伏せているところだった。恐らく死にかけてたところを誰かに治療を受けてここに飛ばされたのだろう。それが俺の考察だ。其処には連れていた仲間もない。恐らく気軽に倒されたと思われる。」

「今はそれでもありませんがその頃はとんでもない強さでしたね。確かに言いたい事が分かるような気がします。」

アーサーは何とか分かってくれたようでその場はそれで終わりを迎えた、と言うはずがない。霊夢は本当に呆れ返っているようで卓袱台を叩いていた。その理由は二人には何も分からない。

「アンタ達、足を引っ張り合いはやめて頂戴。そんな事に時間を潰せるほど暇じゃないのよ。」

霊夢はギラついたその目で青年とアーサーの方を見つめていた。二人は言う言葉もなく正座をしているようにも見える。実際は何もしていない。

その後、霊夢に頼まれた紫は青年の話を元に新聞記事を作り上げるように天狗達に伝えた。情報統制という言い方もあるがこれによって幻想郷はまた違う顔を見せる事になると思われる。大々的に記事を作ってもらふことで何か大きく変わることもあるかもしれない。それ以外にも何かあるのかもしれない。

大博打をかけたその球は回転するルーレットの数字で示された穴

へと入ろうとしている。様々な妨害や想いの詰まったその球は確かに何処かに入ったようで固唾を飲んでいた口からどのような声が出るのかを楽しみにするしかなかった。

青年にもこれからどうなるのかは分からない。未来を透視する又は未来人でも現れない限りは何ともならないのだろう。

これから先が青年の思い出したことの一部を繋ぎ合わせるための作業となる。これまではそのピースを探してくれる人を募集していただけに過ぎない。結果は翌朝にならなければ何も変わらない。それまでは待機してゆつくりと体を休めるしかなかった

第75話

東側から日が昇る。久しく眠る事の出来なかった黒髪の青年は博麗神社の境内と丘を分ける汚れた赤い鳥居のところで一晩を過ごしていた。その事には特に理由がないはずなのだがどうしても青年自身に気がしていた。言いにくい苦痛が体を襲う。こう何と言えれば理解出来ないが青年の中で何かバリバリと引き千切られるように心の中を破っていた。それを放置しても良いものであるのか、そうしてはいけないものであるのかは全くもって分からない。

そんな訳で眠る事も出来なかった青年は凍えた体を震わせてその目の前に広がっている鬱蒼した木々の集まりを見ていた。ザーザー、とした木の葉を当たる音が聞こえるのだがそれでも何か雰囲気の良いものではないと思われる。目がしっかりと使えていないのか何か動いているようにしか見えなかった。

「俺は、一体。」

誰も居ない場所で呟いた青年は頭の打たれたような感覚が残るのかフラフラと立ち上がるとそのまま境内へと向かっていた。何が起ころのかは全くわからない。これからどうするのかも決めていない。「兄者、どこにおられたのですか。」

金色の髪をしている橙色の鎧に身を包んでいる戦闘をやる気しか起こさないような格好をしているアーサーは弱々しく見える青年に心配の声をかけておく事にしたらしい。青年は特に答える事もなくその奥へと向かっていた。まるで状況が掴めないアーサーはその謎の行動を続ける青年に不審の目しか向けられなかった。記憶を失っているとは言え中々のショックを受ける対応である。

「霊夢、少し話を聞いてほしい。」

「何よ。」

ぶつきらぼうに答える霊夢と呼ばれた巫女の姿をした少女は結んだ短い髪を揺らしながら青年の目を真っ直ぐ見ている。

「向こうへ行く人の事だが俺なりに決めた事がある。十二人は決めたから後は任せる。」

青年は霊夢の耳元へと近づけると弱々しい小さな声でその名前を伝えていた。霊夢からすればこんな姿は見た事がないのでどうしたものかと考えていた。それを思いついたところでどうにかするとは到底思えないわけなので何とも言えない。

「分かったわ。それで何と伝えたらいいのよ。」

霊夢は少し考えてから青年の言うことを信じてみる事にした。

「死に行く。逃げたければすぐにこの場から居なくなっただけだ。」

青年はやけに気に触る事を言っていた。右手を振り上げた霊夢はその遠心力と腰を使って思い切り青年の左頬を叩いていた。抵抗もしようとしないう青年は簡単に顔を歪ませていた。ばちん、と言った音に近くにいた少し落ち込んだ様子のあるアーサーでさえもその目を見開いた。

「馬鹿じゃないの。アンタがそんなんでどうすると言うのよ。」

「俺には元々人を守れる資格はない。仲間も見捨てたのだろう。どれだけ酷い事をしてきたのか。」

「アンタはね、ここに来た時から特別な存在なのよ。私にはとても大きな星そのものだったわよ。その輝きをもう一度見せてよ。」

「貴方はこんな弱音を吐くようなお方ではありません。境遇は違いますが霊夢さんと同じ気持ちは持っています。」

すっかりとした態度で威厳のある歩き方でアーサーは青年に激励をしていた。昔の頃とは全く違う青年の姿をもう見ていられなくなったのだろう。青年は魚の死んだ目で二人を見つめていた。光のない絶望に満ちた目とその表情のまま立ち上がると二人の間をすり抜けるようにしていた。

「少し一人にさせてくれ。」

青年はそれだけを伝えると博麗神社の境内であることを示す腰くらの柵を飛び越えて何処かへと向かってしまった。アーサーは追いかけてようとしたが霊夢の右腕に止められた。振り向いたアーサーはその確かな覚悟のある目をしている霊夢から視線を外す事ができなかった。

青年のいない博麗神社では居ない人のために集まった多くの人が
霊夢とアーサーの話を目を傾けていた。そして一通り説明を終えた
後に霊夢は誰を連れて行くのかを発表していた。

「まず主戦力として戦う私と青年。そして、フランとそれを支える咲
夜に決定したわ。そして主戦力の支えとして勇儀、早苗、にとり、レ
ミリア。全体的な援護のために八雲家に任せるわ。呼ばれなかった
人は今日のところは帰ってちょうだい。」

霊夢は話を終えた後にそのように言っていた。その反応は賛否両
論ある。当然と言えばそれで終わるのだがそれでは満足出来ない人
もいた。そこで話し手はアーサーに変わる。

「幻想郷に残ってもらう皆さんには私と一緒に魔王軍を撃退にあたっ
てもらいたいです。その為に戦力を削がないように霊夢さんと兄者
が決めてくれました。それでも一言申したい方は後で私のところま
で来てください。全て受け止めます。」

その言葉に誰もが一旦黙る事にした。そして、一週間後に再度終結
をして欲しいことを伝えてそれぞれの衣服は後で紫から受け取るよ
うにしてもらっていた。

青年が不在の博麗神社ではその活気はやはり少なく説得力のあま
り感じられないものとなっていた。来るまでに青年の姿を見たもの
は居ない。それ故に何処にいるのか誰もが心配そうな表情をしてい
る事には変わりなかった。

人の少なくなった博麗神社では静かにどのような計画で進めてい
くのかを慎重に話し合っていた。勿論、その場に必要不可欠な存在で
ある青年は居ないので身の入らない話が続く。

その日の晩に青年は博麗神社に帰ってきていた。その理由は特に
ないのだが朝よりかはマシな表情を浮かべていた。肩の荷が下りた
ようににこやかな笑顔をしている。

「何してたのよ。」

「黄昏ていた。」

「はあ？時間を無駄に過ごしてよくそんな気楽に帰ってこれたもの

ね。」

「そうか。今回は必ず成功させる。期待している。」

「何処の口が言うのやら。まあ、良いわ。一週間後には向こうへと旅立つわ。それまでは気楽に過ごしていきましょう。」

霊夢はそう言つて二人の口喧嘩は終えていた。

皆が帰る時でも青年の姿を見たものはいなかった。ただ一人を除いて。

第76話

それからの一週間はとても気楽に過ごしていた。青年がしておきたい事をやっているだけの生活に誰もついてくる事はなかった。青年自体が来させないようにはさせていたと言うこともある。それにしては随分と空虚な日々を過ごしていた青年はようやく博麗神社へと辿り着いた。

その日の早朝のことだ。アーサーと青年は誰かが来るまでは待つ事にしていた。

「いよいよですね。また別れる事になるなんて私はどうしたら良いのでしょうか。」

金色の髪をその冬の風に浴びせながら博麗神社の賽銭箱の置いてあるところに座っているアーサーは目の前に立っているだけの存在である青年にらしくない声を出していた。

「そうか。貴方は今まで何をしていた。それで諦められるほど弱々しい人ではなからう。」

青年は特にアーサーの方を見ていると言うわけでもなかった。それとも何か関係があるのかと言いたくなるようなほどに幻想郷の雄大な景色を見える限り堪能しているようだった。

「そうですね。」

少しだけ笑ってアーサーは首を下に向けていた。

「勝利を告げる剣を持つ者がここで倒れてどうする。」

青年は特に後ろを振り向いていると言うこともなかった。それこそ意識があるのか分からないほどに足も曲がっている何とも言いにくい体勢をして脱力している青年はアーサーから見れば何者かと思えなくなった。

「兄者、ここで何をしていたと言うのですか。」

「たくさんの事をした。それは貴方が幻想郷に暮らしているうちに話を聞くと良い。」

「そうですね。昔と変わっていませんね。」

「そうか。俺には何の話かは分からないが素直に受け止めておくとす

る。」

「有難うございます。」

賽銭箱のある場所から立ち上がったアーサーが青年の元へと近づいてくる。一步、二歩と近づいてきたアーサーは腰に携えていたその剣を抜いて一撃を見舞おうとした。金色に輝く鞘から繰り出されたその銀色の刀身による一撃は青年の肘によって防がれた。その一瞬は何が起こったのかは全く分からない。

「刃を向ける事は別に良い。色々と思いはあるだろう。だが、元々近い実力を有していたのか。」

青年は特に何もしているようではなかった。瞬時に剣を抜いて受け止めた訳でもなければその体が硬いと言うことでもなさそうだった。アーサーにしては圧勝できたはずの青年に無刀で自分の剣が止められた事を恐れてしまった。

「まさかあの時は実力を抑えていたのですか。」

驚きの表情をしている上手く言葉にできないのか呂律の回っていないアーサーは手を震わせていた。そのおかげでその先にある切っ先が大きく揺れている。

「本気でやるとは言っていない。それに完全に忘れているわけでもない。顔と何となくの話し方は覚えていた。が、どうにもモヤのなかった状態だったので自信はなかった。アーサー、何があつたのは聞かないがその実力でよくここまで来れたものだ。」

「その言葉は聞き捨てなりません。兄者、此処で勝負をしましょう。全力で来てください。」

「そうか。三步離れる。それまでは待ってくれ。」

青年は口に出しながら足を進めていく。アーサーはその間の緊張感に負けないようにその場に止まる事に専念していた。どのような事をしてくるのかは全く分からない。そして青年は振り向く。

それを開始の合図としてアーサーは大きく地面を蹴り出していた。もう既にその闘志は限界に達している。ようやく待望の勝負が出来るとも思っているのだろうか。

剣を抜けるような体勢でもない青年はアーサーの剣を素手で止め

るしかなかった。しかしそれでも引けに劣らないほどであった。素早く切り替えた青年は左腰から右側へと水平に斬り裂いた。そのついでにアーサーの剣も軽々しく移動させている。何が起こったのかは何も分からない。ただ、言える事があるとすれば青年にそこまで力を入れずとも対等になっていると言う事だった。それだけでもアーサーが本気を出す理由はあったと思われる。

「私は兄者を超えたい。それまではどうしても負けていられないんです。」

「そうか。」

青年の言葉は短い。まさに彗星のように何処かに消えてしまう夜空のようだ。

「行きますよ。」

アーサーの目は確かに獣の目をしていた。そうでもなければ青年とは対面していられないのだろうか。

青年は右腕に持っていたその剣を地面に向けて一歩ずつ近付いていた。まるで無口な壁が近づいているようで対面の余地もなさそうだった。何もかもが規格外のように思えた青年はアーサーにはどのような見えているのかは聞いてみないと分からない。

白色へと変わったアーサーの剣は青年を狙うように左側から狙っていた。右腕に持っている青年にとって一番反応が遅くなるところを狙ったつもりだった。受け止めることも斬り伏せることもできなかった。

アーサーの周りに地面に蹴っている音がしたのかと思うといきなり胸元を蹴り出された。一瞬だけなにかの塊がアーサーの鎧の前に見えたのだが視認しようとしたところでそれはもう遅かった。

地面を転がるアーサーはその剣も簡単に手から離していた。どうしたら良いのかさえ分からないがアーサーからすれば本当に何が起こったのか理解出来ない。一度刃を交えた時にはそのような強さは全く見せなかった。つまり、アーサーの剣を止められる程度の力を発揮しているだけで偶々優ったのが一つあったので青年を倒せただけのことだと言うのだろうか。

恐れにも似たその目をしたアーサーは近くにある剣を探していた。そこで何処から声が聞こえる。

「もうそろそろ行くわよ。」

黒髪の赤いリボンを付けた赤服の巫女は二人にそう言っていた。アーサーは未だしも青年は当事者の為に早急にその場へと向かう事にした。

「済まなかった。」

青年は急いで博麗神社の小屋の前に走っていた。そしてその中に広がっているスキマに身を投じていた。博麗神社に居た皆も何処かに向かってしまった。アーサーは孤独になったのでその場から動ける気がしなかった。青年には大分痛めつけられた。それほどの実力を持つていなければ魔王軍とまともに対峙できないのだろうか。アーサーは見事な采配をした霊夢と青年に尊敬の眼差しを向けていた。

第77話

全体的に目立たない服装をしている八人は八雲 紫によって作り出されたスキマと呼ばれている異空間で最後の集会のようなものを開く事にした。

その場にはそれぞれがあちらの世界でなじめるようなみすぼらしい服装をもらう事にした。ポロポロにもらった薄茶色の布で全身を包んでもらったので何か目立つことをしなければ目をつけられる事はないのだろう。黒髪の鋭いと言うわけでもない目をしてる青年はそう思えた。

「最初に話しておきたい事があるからそれだけは聞いてほしい。」

青年は一番最後に入ってきたにも関わらず特に気にしている素振りはなく何の気なしに適当に話し始めた。荒れるかと思われたが別にそうでもない。人それぞれ反応は違えど嫌になるような雰囲気はない。

「あまり目立つ事はしてほしくない。情勢的に荒れているので変に巻き込まれると後々面倒になる。」

一番最初に青年はその事を話していた。しかし他の七人は興味もないように何もしようとはしなかった。

「そんな非力に感じるのか。」

赤い角を持っている四天王の一人である勇儀は挑戦的な笑った表情を青年に向けていた。だが純粋な力ではないので少し青年は説明を入れる事にしたらしい。

「勇儀、まさか王国にまで喧嘩を売ろうとは考えていないだろう。そうならば神隠しにあってもらう。それでも良いのか。」

青年は負けじと勇儀を睨みつけていた。お互いがお互いを見ているその雰囲気の中で怖がる者もいればそうでもない者もいる。果ては興味のない人もいる。

「つまり、行くまでは嫌な方向に目立つのは良くないと言うことね。それなら仕方がないわ。」

黒髪をしている青年とそう見た目は変わらない少女は不機嫌そう

に話していた。主導権を握るのは青年なのだがどうにも説明不足な気がしているのだろう。

「そうか。皆もそう考えてほしい。それと飛行は禁止だ。面倒だろうが徒歩でバルタニア王国内を歩いてほしい。」

「バルタニア王国はこれから私たちが向かう場所の名前よ。」

そのスキマの主人である八雲紫は青年の後ろから皆に聞こえるように話していた。驚いているわけではないが青年は後ろを振り向いた。

「説明してありがとう。して、歩き回る前に一旦王国の兵士として所属してもらおう。そこから一ヶ月間はその中で過ごしてもらおう。旅に出かける際の資金稼ぎとその場に慣れるための期間とする。」

「そう。私達なら簡単にいけそうね。一週間でやってみせるわよ。」

青い髪をしている幼い見た目をしている少女は口から牙を出しながら楽しそうに笑っていた。青年は特に何も感じていないが夜を続ける吸血鬼がここには二人いる。共に姉妹であるがそのメイドには少し面倒を押し付ける形となっている。

「そうか。無名な俺たちに来る仕事は雑用ばかりだ。その日食べられるのかどうかの話になるだろう。せいぜい頑張れ。して、最初のうちはどうしても見下される事がある。だからと言って手を出す事はしないでほしい。霊夢に言われたような理由だ。」

「お嬢様、妹様、分かりましたか。きっと一番の不安は貴方達のように。」

心を読んでいるかのように話している吸血鬼のメイドである銀色の髪をしている咲夜はナイフのような鋭い目で不信感を醸し出すような目をしている。青年は別にそこまで行っているわけではないので誤解といえはその通りだが間違っていると言うことでもない。

「そうだ。その為に咲夜を世話役として組み入れている。申し訳ないが最初のうちはしつかりとやってほしい。」

頼み込まれた咲夜は断るような事はしなかった。それでも姉妹は不満そうにしている。

「青年が一番いいたいのは見た目、と言う事ですよね。」

「そうだ。どうしても実力が知らない他人から見れば子供も同然だ。兵士として所属できるかも怪しい。その場合も考えているから心配はするな。」

「そうね。青年しかここから先は知らない景色だものね。大まかな事は貴方と管理者に任せる事にするわ。」

吸血鬼の姉であるレミリアはその真紅の瞳を輝かせてその場から身を引いてくれた。

「それともし困って紫に聞きたい事があれば二人で話しに行くように人気の少ないところへと行ってほしい。その場での正当防衛は認めない。ここまでの話をまとめる。王国に仇なす存在にはなつてほしくない。飛行は目立つので禁止だ。それと一ヶ月間は皆の調整期間として自由に過ごしてもらって構わない。紫と話す時は人気のないところで話してほしい。以上だ。」

青年は立ち上がるともう既に行けるような準備をしていた。四本の剣を腰に携えている青年はその上から皆と同じような薄い茶色の布を羽織る。それから紫に開けてもらう事にした。

開けてもらったその先には今の八人と同じような格好をしている人が下の方に見えるような場所へと出ていた。石で作られた建物と程々に舗装されている道路が敷かれている。人は多く存在しているが人間とは違う見た目の人はそう多くはなかった。危険因子はまだある。それでも行けると思えた時に行かないと先には進むような事はできない。青年は誰よりも先に外へと出ていた。

「あれが今から兵士として所属する手続きをする場所だ。もしまた来たい時があればギルド養成所と人に聞けば道ぐらいは教えてくれるだろう。」

青年は片膝を建物に付けながら下の方を向いていた。その下には人は疎らながらも露店などは出ていて楽しそうな雰囲気があるのだと思われる。青年は何となく懐かしいようなそうでもないような感覚と頭が痛くなる感覚に襲われていた。

「後の事は青年に聞きなさい。それでは。」

紫はそう言って帰り道を閉じると姿も声も感じなくなった。もう後ろの壁は閉ざされた状態となっているのだと思われる。

「で、これからあそこに行ってそこからどうすれば良いのよ。」

「今日のところは空気に慣れてくれたらいい。俺が今日の分は稼いでおく。」

青年はそう言って後ろを振り向くと建物と建物の上に降りていた。それに続いて七人も降りてくる。

第78話

七つの足音が聞こえた後にその場は静かなものとなっていた。人通りの多い路地の一本入った狭い路地では誰も人は居ない。下には下水のようなものが流れていてその上に木で蓋をしているだけの簡易的な水路が作られている。何となく臭いがきつい。

「俺が先に行っている。勇儀とレミリアと早苗にとりは付いてきてほしい。後の三人は少し待っていてほしい。」

黒髪の青年はその鋭くもない目をして霊夢と咲夜とフランを見ていた。その目からは頼み事をしているようで仕方なさそうにその指示に従うことにしたので誰も反抗する事はなかった。青年と後の四人は建物の隙間から出て目の前にある建物の中に入っていく事にした。

「読みにくいですね。ギルド養成所ですか。」

緑色の髪をしている薄い茶色のコートに入れるように後ろで一本に結んだ東風谷 早苗は遠くを眺める老婆のようにしていた。幻想郷とはまた違う文字が使われているのでそれはそうだろう。

「じきに慣れる。それまでの辛抱だ。」

青年は安心させるように優しい声で早苗に応答する。実際はそのようにするようには必要はないのだが何か意味はあるのだと思われる。「後、にとりは少し特殊な書き方をする事になる。俺が教えるから安心してくれ。」

「教えてくれてありがとう。盟友。」

青色の外ハネのしている髪型をしている河童であり職人でもある河城にとりはとても気弱そうに見える。以前、妖怪の山に君臨していた四天王の一人であるのでにとりがそのような反応をするのはよくわかっている。更に付け加えると妖怪の山の上下関係は厳しいもので失神しなただけマシかと思われる。

「もうそろそろ入る。絶対に俺より前には来てほしくない。」

青年はそう言いながら朝のギルド養成所と呼ばれる施設の中へと入っていた。中には人などは居ない。今は五人だけでここで働いて

いると思われる人もあまり気力のあるようには見えなかった。左側にはどうやら手続きをするための施設があるだけで他には何もなかった。右側には休憩スペースのように背もたれのない長椅子と本棚がある。どのようなものでも調べられるようになっていられる。

「おはようございます。今日はどのような要件でしょうか？」

しっかりとしたシャツを着ている茶髪のさっぱりとした男性は立ち上がって五人を迎えていた。青年はそこで初めて口を開いた。

「兵士として登録する手続きをしたい。」

青年はその男性に対してはつきりと答えていた。その男性はさらに質問を続ける。

「後ろの人とはどのような関係なのですか？」

「特に知らない。だがどうやら道が分からなくなったらしいので案内をする事にした。」

その返答には職人として働いているその男性も少しだけ戸惑いの目を向けていた。そもそもそんな理由で通るとも思っていない。後々修正する事にしようとした青年だがまだ動き出す事はしなかった。

「そうですね。貴方は国に住まわれる方ですか？」

「一応そうだ。少し曖昧な表現だが点々と住まいを変えている。」

「浮浪者ですか。分かりました。手続きはさせてもらいましょう。こちらに名前と職業をお書きください。分からないことがあれば私までお聞きください。」

「そうか。人も居ないしゆっくりと書くとする。それと一つ。鍛冶の出来る人がいるので一応それも欲しい。」

「それでは五枚でよろしいですね。分かりました。少々お待ちください。」

その男性は立ち上がると奥の方にあるなんらかの紙の置かれている棚を探していた。その間に青年は後ろにサインを送っているだけだった。

「お待ちせしました。ごゆっくりお書きください。」

「そうか。親切にどうも。」

青年は踵を返すとゆっくりと四人の元へ近づいていた。そして一枚ずつ渡してからペンを渡して書かせていた。

「勇儀は格闘家。早苗は霊媒師。にとりは鍛冶職人と書いてくれ。それでレミリアだがどうしたい。」

「私は吸血鬼でいいじゃない。」

青い短い髪をした背の小さい少女はそのように言った。その言葉に青年は苦しそうな表情をしていた。

「そうすると魔物扱いされる。槍使いとでもしてくれ。」

「どこに所有しているの聞かれたどうするつもりよ。」

「折れたと答えておけ。」

青年は口を隠すように出来るだけ小さな声で話していた。それに黙って書き始めるレミリアを見ていた。他の人はもう書き終えているように後は出すだけとなっていた。青年はもう一度踵を返すと職員の前へ手渡した。枚数を見て小さな紙を渡された四人は不思議そうにもらう事にした。何かに必要だろうと感じていたのかもしれない。

「皆様にはこれから似顔絵を描かせてもらいます。もしもの時に必要となりますので大事に持ってください。」

そのように言われたのでしつかりと貰ってきた四人は青年の元に集まることはなく職員の道案内に従っているだけだった。そこからは青年が出る幕はないので何もしない事にした。

「今回は迷惑をかけた。俺はこれで帰らせてもらおう。」

青年は最後に一言言ってからその建物から出て行く事にした。別にそうする必要は皆無なのだが一応という事だろう。そして青年は出口へと帰っていくと何処かへと消えてしまった。

「四人は成功した。後はどうする。」

「どうするって、書きに行けばいいじゃない。」

「そうか。少し時間を置いてから昼頃に向かう事にしよう。」

「分かったよ。」

金色の髪をしているこの中では大分背の小さいフランが青年の言

葉に元気に返事した。

「良い返事だ、フラン。」

「それで貴方はこれからどうなされるおつもりですか。」

銀色の髪をしている今回は一番苦労しそうな役目を任せてしまった咲夜は静かに声を出していた。状況に合わせて話しているのだから。

「クエストを受けてくる。浮浪者として俺は暗躍をする事にする。後は任せた。」

青年はそう言うともう一度ギルド養成所へと向かっていた。

後に三人は前に行った四人と同様に軽々と兵士として認められて雑用としてこのバルタニア王国で動けるようになっていた。その間に青年は今日中に終わる簡単なクエストを点々としながら暫く暮らせるお金を作っていた。

第79話

その後面倒な事が起こったわけでもないが青年は必死にクエストを受けて集めたのである酒場へと向かう事にした。その酒場は七人が兵士と任命された場所であるギルド養成所と呼ばれる周り比べると大きめな施設の近くにある。一軒か二軒かそのぐらゐの距離に位置する酒場である。

これから客足が伸び始めるのかその中には店主と思わしき気前のいい人がいるだけで他に人などいなかった。テーブルを並べて座った八人は顔を見合わせていた。

「今日は急な話であるが集まってくれた事に感謝する。して、一つ伝え忘れていたことがある。金の単位についてはルビが扱われている。大ききで価値が変わるのでよく見て支払って欲しい。」

一番中心人物らしき黒髪青年がその場で話していた。周りが静かなので店主にも聞こえていると思われるが別にその事は気にしていないのだろう。青年は適当に薄いピンク色の入った石をテーブルの上に散りばめた。大ききはそれぞれだが意外にも不揃いであるのには変わりない。大体でしか合っているものはない。

「それでギルド養成所にあるクエスト募集から好きなものを取って向かってくれ。しっかりとこなしていれば別に問題はない。対価としてルピが支払われる。国家のものを受けるの良いが難易度が高いか募集していない事が多いので民間からのクエストを受ける事になるが不服があればすぐに言え。後から気付いても遅い。」

青年は更に言葉を連ねていた。皆はその言葉を聞いているだけで特に反論はしなかった。そして此処から軽く別れると皆はそれぞれの兵士として分け与えられた部屋へと向かっていく。クエストで得られた報酬金を皆に平等に分けて青年はその場に残り店主と話していた。

あれは俺が此処に来たばかりのことだ。あの頃は右も左も分からない状態で知らない人しか居なかった。まともにクエストを受けて

させてもらえなかった小さな少年はいっしか闇の中へと手を染めるようになつていた。持ち前の腕と子供の頃から磨かれた感情の殺し方によつて大人たちの裏側で一人生きていた。

「これは今日の報酬だ。」

黒服のシャツを着ている大人三人と少年が一人対面していた。相手は取引のために持ち寄つた報酬金なるものを地面に落としていた。小さなものが二個か三個か。あまりにも不釣り合いな報酬に少年は手を出した。裏取引ではこのような不当な時はよくある。逆を言えばまともに払ってもらえる事は少ない。いや、ない。なので少年は素早く逃げられる前に持つている古くなつたナイフで仕留めようとしていた。

持ち前の腕で素早く声を出さずに息の根を止めた少年は呼吸をしなくなつた三人からルピを盗んでその場は逃亡していた。あの頃はとても良い思い出である。青年はそんなことを思っていた。あの頃は血で血を洗う場所だつた。余つたお金で武器を買い揃えてはまた裏側のクエストを受けていた。そんなどす黒い日々を過ごすのも別に少年は構わないと思つていた。別に何も変わらない。場所と環境が変わつただけで何もやつている事は変わらない。それに報酬も貰えるのならその方が良かった。

「ところで、アンタ。何処のものだ。」

酒屋の店主は青年に聞いていた。目を閉じていて誰からの話を拒んでいそうなその目つきはやつてしまつたと後悔させる分には十分なものだつた。それこそ何が起こつたのか店主には分かつていない。何か変なことを聞いてしまったのか、そんな事を頭の片隅で考えてしまふ。

「浮浪者だ。自由に住まいを変える必要があるからその方が動きやすい。」

青年は適当に答えていた。

「そうかい。あの人達とは何か関係があるのかい。」

店主は少し緊張した様子で青年に聞いていた。青年はゆつくりと

首を曲げて店主の目を覗く。怖いと言う感情を通り越した何かがあるのが並大抵な場面をくぐり抜けた証拠でもあった。

「全くない。今日の朝、俺が連れてきた兵士になったばかりの新人だ。偶々道端で再開したのもう少しだけ話を聞かせていた。」

青年はあまり怖い印象はない優しい声で話していた。もう品定めは終わったのだと思われる。基本的には良い人なのだろうと青年の目には映った。

「お金の話だな。確かに必要な事だ。偶にくすねたり法外にふっかける輩もない訳でもない。」

「そうか。俺は有用に使ってくれたらそれでも構わない。後は活躍してくれる事を願っているばかりだ。」

「兵士は沢山いる。出てくるのは大変だがそうなればやはり鼻は高いな。頑張るように応援するしかないな。」

酒場の店主は大きな笑顔で青年と話をしていた。元々希望のある初心者がよく集まるだろうこの酒場ではあまり悲観的になる事は話さないと思われる。青年は少し身を引いて腕を伸ばすとカウンターの近くにある背の高い椅子から降りる。

「そうか。俺は此処で帰らせてもらう。お金がないもので何も頼めなくて済まなかった。」

青年は帰り際に申し訳なさそうに言っていた。そのような事は気にしないのか店主は手を振って寛容的であった。実際のところはまだあるがそれを使うにはまだ早い。それにそれなら食材を買った方が安くつく。青年はその事は知っているので此処では何も頼もうとはしなかった。これからまた使う機会もあるだろう。

とにかく青年は今日の寝床を探すためにバルタニア王国内を歩いて探しておくことにした。浮浪者はバルタニア王国に存在して良い訳ではない。基本的には罪人や破綻した者、何かに失敗した者のなり果てである。逆をつけば何をしようとも関係ないのでよく言えば王国を一番下から支えているが悪く言えば病原体の扱いと等しくなる。それこそ浮浪者だから問答無用で命を落とす羽目になる事もある。

兵士や職人となった七人は特に今日生きれるのか考える事もあるが寝床と朝食と夕食は保証されるのでその点ではとても過ごしやすいが必然的に窮屈な生活であることには変わらない。

第80話

渾身の一撃というのはそうそう出ない。出やすいとすればその確率を引き上げる為には幸運というのを上げる必要がある。渾身の一撃を必要な時に出す為にはそれまでは溜めている必要がある。どこでどのように出すのか考えてから慎重に行動を起こす必要がある。

幻想郷から訪れた八人とそれをサポートする三人はバルタニア王国での一晚を過ごしていた。その間にいたそれぞれの思いは違えどこれからの新しい生活に希望を抱いているものもののようにしているのかは完全に任せられている。なので生活を自分の力で送る必要があるという不安もないと言えない。沢山の仕事と切羽詰まった状態でこれからを過ごす必要がある。

黒髪の青年は中心地よりは北側にある王のいる宮殿の西側にある住宅地の上でその上半身を起こした。決して眠る事は許されない床の上で青年は器用にも眠っていた。朝日が昇り眩しい光が青年を照らしていた。その光を目に入れた青年は薄く目を開きながら立ち上がりその場から下を覗き込んでいた。

これから始めるのだろうか品出しをしている人が多く居る。今から商売を始めるらしい商人たちがこの様な準備をしているわけだが青年には見ているだけで興味のないものだった。

此処では大抵の事は許される。そもそも取締る機関がない上に現行犯でもなければ捕まる事は原則ない。捕まった人は運がないか初心者ゆえの過ちを犯したという事だろう。それかこの王国の裏側で捻り潰されてこの世から姿を消すか。その三つぐらいの選択肢の中で何処かをたどる。その事はよく分かるがそれ以外のことは認知されてはいない。

眠たそうな表情をして建物の間に降りた青年はその足で表へと顔を出していた。特に意味はないが謎の場所から現れた青年を誰も見向きはしなかった。裏道の多いこの王国ではどこからどのように出てこようとあまり驚かれる事はない。

青年は腰に右手を当てて怠そうにある場所へと向かっていた。その場所とは昨日細かいクエストを多く受けた場所であり七人を王国の兵士とさせた場所でもある。少し都合が悪く青年は浮浪者という嫌な立ち位置を取る事にしたがクエストを自由に受けられるので別に困るような事はない。そういう訳で少し急ぎ足でギルド養成所へと向かっていた。

「今回はそのクエストを受けたい。誰か気にしている人はいるか。」

青年は職人に一枚の紙を見せていた。その内容はどこかの店の掃除である。そう高い報酬というものではないが素早く終わらせればそれだけ回転が良くなる。それにこのぐらいしか受けさせてもらえない。

「はい、大丈夫です。お気をつけて行ってらっしゃいませ。」

今回は女性のように昨日とは違う。その人は縁のない眼鏡をかけた仕事ができそうな見た目をしている。服装は何処でも一緒のように黒服であるのは変わりない。動きやすさを重視してなのかは聞いてみないと分からないがスラツとしたズボンを履いている。

「そうか、有難う。」

青年は踵を返すと生き急いでいるように素早く移動していた。東側のある店の掃除の手伝いだった。詳しい内容は書かれていないがきつとそこまで大きな掃除ではないと思われる。店の内装の掃除か前の掃除ぐらいだろうと青年は考えていた。

黒い筒の置かれている店先と華やかな花が咲いている見えて心の和む店構えをしている花屋の前に着いた青年は少し遠慮気味に店内を覗いた。

「店を手伝いに来た。誰か居るか。」

青年は左側に重心を傾けてちらっと見ていた。中にはそれは満開と言いたいほどの花の入った棚が置かれている。宙から吊るされたところからも笑顔を覗かせるように青年の方を向いていた。

「クエスト受けてくれたのか。あんがとよ。」

この店の店主らしき男が裏の方から出てきた。最初はそれこそ迷惑そうにしている赤いスカーフを巻いている薄い茶色の小綺麗な服装をしている女性だったのできつとその夫だと思われる。その男は豪快な性格でたくましい筋肉を持っている元々は兵士の出身なのだと思われる。

「嫌な思いをさせたのかもしれない。朝早くに訪れてしまつてすまなかつた。」

青年は一つ詫びを入れておく事にした。別に悪気があつたということではない。しかし、もしかすると不快に感じたのかもしれない。「その事は良いわよ。まさか来てくれるとは思つていなかっただけよ。」

男性の妻と思われる人は優しそうな笑みをこぼして青年を迎えてくれた。少し顔をうつむかせた青年は一步だけ前に出た。

「そうか。して、何をすればいい。」

「ちよつとした荷物運びを頼みたいのよ。夫が戦闘の時に腰を折つてしまったのよ。大事には至らなかつたけど重たいものが持てなくて困つていたのさ。今日は来てくれて本当に助かつたのよ。」

「待て。礼をされるには早い。しっかりと手伝いを終わらせてからその言葉をもう一度お願いしたい。」

青年はすぐに切り返して夫である男性に内容を聞いていた。その内容というのは荷物の運搬だった。薄々感じていたのだが花瓶を運ぶの手伝って欲しいという事であるらしい。青年は男性に指示を仰ぎながら右へ左へと花瓶を傷つけないように移動させていた。

とても気楽にできる仕事ではなかつた。朝早くからこのような仕事をしているのが一番大変である。

額から滲み出た汗を左腕で拭き取る。夫妻で経営している花屋は来た時よりも見やすくなつていた。花々の顔はそのままだが通路らしきものを作り上げる事でその見栄えも良くなつていた。これは青年の提案なのだが内装の際に不必要になつた花瓶を店先に飾つておく事にした。その中には花が入っている。そのおかげで周りからはとても目立つ存在になつていた。

「綺麗になったね。今日は来てくれてありがとうございます。」

女性が深々と頭を下げていた。そしてその隣で痛そうに腰を折っていた男性がいる。青年は男性の方に近づいて素早く頭を上げることを勧めた。

「その熱意は俺ではなくて守りたい存在のために使ってくれ。」

青年はサインをもらったクエストの内容が書かれている紙を片手にまた先ほどの場所へと向かっていた。その背中には確かな自信というものがある。

第81話

今日はとても晴れやかな日だった。その日はなんとも言えないほどに疲れた感覚を覚えた黒髪の少女は幻想郷から持ってきていた幣を右手に持って外にある演習場へと向かっていった。その場所はただ広いだけの場所で様々な道具を使って練習を行うことができるがそれを必要としない天才も中にはいる。ただし、その人が練習が必要だ、と考えさせられるほどの現実が現れたのならどうするのだろうか。

「うるさいわね。」

外からは大きな爆発音が聞こえていた。どこかの馬鹿が頭の狂ったような大きな音を鳴らしているのだろうと昨日から住み始めた一室で目を覚ました博麗 霊夢は髪を撫でてその場から雪崩を起こしたようにベツトから落ちる。元々布団で眠っていた霊夢にとっては不安でしかなくその中で初めての初日からこれである。堪忍袋の尾が切れても仕方がないことだった。

「此処から兵士として勤めることになるのね。面倒な事になったわね。」

此処から一週間はどうしてもこのような生活になるのだと此処に入る前に説明は受けていた。潜入のつもりで引き受けたのだが初日からこれではこの先が思いやられると思われる。そうでもないと外が見える雑な作りをしている窓からこんな睨んだ表情をするような事はない。そうでもなければそうなってしまうのだろうか。

「まあ、良いわ。行きましょう。きっと早苗は居るでしょう。」

霊媒師として役職を申請した霊夢には一つの懸念がある。それはもしかすると被る役職なのではないかということだ。幻想郷にいた頃でも被っていたのだ。まさか他の場所へと行くななんて事はない。それを行く前から予想していた霊夢にとってこれから起こる事は何も楽しい事ではないのだ。

窓の外にあった演習場に霊夢は訪れていた。此処では皆が各々の

技を練習しているようだ。ある者は何かを使役してみたり霊を自分の身に宿してみたり霊夢とは違う幣を振り回している人もいる。

周りからはとても浮いた存在となっているその人はどうしても見覚えのある存在だった。緑色の髪をしている少女でいつものように元気良くしていた。霊夢とは違い真面目で人の話を聞ける人柄で何事にも真つ直ぐ取り組んでいる。おまけに人の話は素直に聞いている。

「ご指導ありがとうございます。」

東風谷 早苗。それがその少女の名前だった。その人は深く頭を下げると教官と思わしきその人にお礼を述べていた。霊夢なら絶対にしたいたとは思わないので全くもって正反対な者である。

「早苗、これからどうするつもりよ。」

右手に腰に当てている霊夢は不機嫌そうに早苗に声をかけていた。周りはそれなりの人がいて爆発音が聞こえてくる。まだまだ操りきれていないので爆発するらしい。それをうまくコントロール出来るのかと言われると別にそういうわけでもない。早苗はともかく霊夢にはあまりにも滑稽な姿にしか見えていないのだろう。そんな目をしていた。

「霊夢さん、昨日ぶりですね。よく眠れましたか。」

霊夢には睨まれている早苗だが何も気にしていないようでもいつも通り快活そうに答えているので更に目を鋭くさせていた。遂には舌打ちをして態度と空気を悪くさせても仕方がないと思われる。

「眠れる訳ないじゃない。」

「ですよー。ハハハ。」

早苗はあまりにもきつぱりと答えた霊夢にどのような言葉を返せば良いのかとても迷っていた。何が起こったのかは全く分からない。何が起こるのかは言うまでもなかった。

「そういうアンタは如何なのよ。」

「私は前はベットで寝ていたので慣れていきます。どちらでもいけますよ。」

「そ、そう。まあ、良いわ。」

霊夢にはそこまで興味が起こらないのだろう。早苗はそんな事を考えながらライバルとして見られているのか謎の距離感のある話し方をしている霊夢を気にしていた。何を話したいのか、何を考えているのか、純真な早苗には何も分からなかった。逆に霊夢はどうして早苗なんかの名前が青年の口から出たのか全く分からなかった。早苗に劣ると言うわけでもない。そして元々持っている力の質が大きく違う。人間として生まれた博麗の力を持つ霊夢と現人神として神から力を授かった早苗とでは力の差は歴然だと思われる。

「あ、そういえば青年が話していた事なんですけど霊夢さんには化けるから気をつけてくれと伝言を受けていました。如何言う意味なのでしょう。」

早苗は特に考えていないのだろうか、霊夢は瞬時にそのように感じた。何を言いたいのかも全く分かっていない。馬鹿の発言を理解しようとしてもしない霊夢は踵を返してその場から立ち去った。その目は何処か寂しげで意味を知っているようだった。

「待ってください。教えてください。何に化けるんですか。狸とかですかね。」

早苗は奇天烈な事を言い始めた。霊夢でさえ全く文脈がわからないらしい。理解しようとしてもしていきいのです無駄な事であると思っ

ているのだろう。「はあ。これだから最初に名が出ないのよ。そんなのに化ける能力があったとして何に使えるのよ。」

明らかに呆れている霊夢はその冷たい目を早苗に向けながら何となく幣を振り上げた。早苗は一瞬で状況を理解したのか目を閉じて変に力を全身にこめて耐えようとしていた。だが、振り下ろす事はなくその場から立ち去った。此処の場で何をしようとも関係ないのだろうか。早苗は人の多くいる演習場の煙の中に消える霊夢の姿を見ながらそんなことを考えていた。如何したら仲良く出来るのだろうか。何を学ぶことが出来るのだろうか。霊夢さんから奪えるものは全て奪っていこうと考えていた。

「よし、一人で練習しないといけませんね。」

もう一度教えを請うらしい早苗は近くにいる教官を捕まえて様々な事を聞いていた。これが何もしようとしない生まれた時から持っている力に甘えた霊夢と悲惨な現実から立ち上がってひたむきに努力を続ける早苗の差なのである。

「成る程。心をパーン、とすれば良いですね。そうするとズドンと撃てるわけですね。」

少し頭が弱く感じるのは気のせいなのだろう。

第82話

今でも分からないことは多い。それでもやる事は少なくはない。その先に何があるとも突き進めない限りは何も変化のない現状維持でしかない。

一本の大きな赤い角を持っている鬼の四天王の一人である星熊勇儀は演習場で一人暴れていた。力自慢であるのに是不変ならないわけだがそれにしてもはだいぶ暴れているような気もする。人を殴りつけては吹き飛ばしている。青年もきつとこうなる事を熟知していたのだろう。

「その程度なのか。もつと、もつとだ。」

片手で誰でもない誰かを誘い出している勇儀は喧嘩早い訳でもないがそんな風にも見えている。段階的にまだ初歩段階なのでこうなるのは良くわかる。仕方がない事であるので何もいうような事はない。

「何なんだよ、彼奴。おっかない。」

人々の反応はこうなるのも仕方がない。攻撃を与えても何も聞いていないかのように薄ら笑いを浮かべているだけで何かおかしいことでもあったのかのようになっている。避けることもしないので全ての攻撃は受け止めているがまるで岩を殴っているようで何もかもが規格外。更には一撃でも当たればその人は吹き飛ばされる。こんな怪物が居てたまるか。そんな声が聞こえてきそうなものである。

「どうしたってんだ。こんな物なのか。」

勇儀は盃片手にその中に入っている飲み物を飲んでいた。鬼という種族なのでおそらく酒が入っているのだろうがそれにしても随分と酔っているような程度にはならない。というか朝から飲んでいてもいいものでもない。

「俺とやってくれないか。」

勇儀の後ろに立っていたその大男は同じく格闘家だと思われる。そして身長にはだいぶ違いがあるが勇儀にとっては特に気にする事でもないのだろう。その証拠によく笑っている。

「良いだろう。」

「では、行くぞ。」

その男は右腕の拳を後ろへと持っていく。そして左腕で名指しするように人差し指で勇儀の顔面を狙っていた。まるでスコープから出てくる赤外線かのようになっている。

特に構えているようではない勇儀だがそれだけの余裕があるのだと思われる。鬼が負ける事は早々ない為にこのような自信なんだと思われる。

「いつでも来てくれ。」

勇儀の目は挑戦的な視線を送っていた。その事は別にどうでも良いのだが素早く動いていたのは大男の方だった。左腕で指差した場所とはまた違う箇所へ拳を突く。それに反応した勇儀はその拳に合わせて同じ腕で押し返そうとした。

拳と拳がぶつかり合うその瞬間の破壊力というのは凄まじいものだった。しかしそれは一瞬のことで押されたのは勇儀の方だった。何が起こったのかはまだ分からない。まだ本調子ということでもないので別に構わないような表情はしていたが向こうもそれは同じだと余裕そうな顔をしていた。

「実力は五分五分ということか。」

それぐらいの余裕がないとこの場には立っていられなかった。勇儀にはそうではないと思えたのだろう。

「いつまで続くだろうか。」

大男は特に気にしているような様子ではなかった。鬼として力で負けるわけにはいかない。そう感じたと思われる勇儀だがその実力にはかなりの差があると思われる。

右腕に溜め込んだ力を乗せた大男の一撃はゆっくりと勇儀の元へと来ていた。

それを避けようとしてもしない勇儀は真正面から右腕で対応する。

お互いの拳がぶつかる。生じた衝撃波はなにもなさそうだった。勇儀の拳はいとも簡単に折れてその先へと大男の拳が通る。地面に伏した勇儀に誰も何も話しかけるようなことはなかった。騒然とし

ているというのものもあるのだろう。絶句してどうしようもない事もよくあった。

「この程度で暴れてくれるな。」

その大男はそれだけを伝えて踵を返す。それから遠くへと歩いていくその大男は誰なのかは勇儀は全く知らなかった。

緊張した面持ちで現れた外ハネした青い髪を赤い何かでツインテールにしている河城にとりはある鍛冶屋の元へと訪れていた。別に何か悪い事をしたというわけではない。単純に新しい場所に入ることが出来るのかどうかという話だ。

「失礼します。」

ある工房の前で一言震えた声で話しているにとりは奥から現れた男に更に怯えていた。実際はそんな事をする必要もない。

「アンタが昨日聞いていた奴か。まあ、良い、入れ。」

その男はにとりを歓迎しているのか否かどちらか分からなかった。しかし不器用なりにも歓迎はしていると思われる。

「でだ、何か自分が作った物は持っているか。」

その男はにとりの前に汚い手を出していた。鍛冶の際についたと思われる傷や汚れのある手だがそれでもにとりには凜々しく思えたのかすんなりと渡すことにした。それはある青年が持っている釘のようなものである。使い込まれているが使えないものではない。

「これです。」

まだ怯えているような表情と態度をしているがその事には興味がないのかかける言葉がないのかどうかは知らないが何も言わなかった。男はその代わりにその釘のようなものをじっくりと見ていた。

「磨き方もしつかりとしている。そして水平で完璧な直線を描いている。見事だ。」

その男は感嘆にも等しい声の出し方をしていた。相当にとりの腕に惚れ込んだらしい。

「それでどうなるのでしょうか。」

「こちらから頼みたい。まさかここまで腕があるとは思わなかった。」

強い力で優しくにとりの手を握っているその男は少し感動しているようにも見えた。少しだけ戸惑っていたにとりだが別に嫌そうな表情はしていなかった。

「俺はクリスだ。申請してやるから紙を出せ。」

「実は今日は持つてきていないんです。まさか決まるとは思わなかったです。」

「うーん、もう少し自信を持ってみたらどうだ。昨日来た青年はお前の事を信じていたぞ。」

クリスと名乗った男は少し怒っているようにさえ思えた。だがそれと同時に新しい仲間が出来たので嬉しそうな表情もしていた。にとりも恥ずかしがりながらも嬉しそうにはしている。別に満更でもないようだ。

「分かりました。私は河城にとりです。にとりと読んでください。これからもよろしく願います、クリスさん。」

元気よく答えていたにとりはきつとクリスの男気のようなものに惚れたのだと思われる。

第83話

闇夜に消えたその影はまさにどこから出てくるのか予想のつかないこともあり得る。その中でしつかりとした目で見定める力があれば、何の事もないのだろう。

いつも通りに目を覚ました咲夜は姉妹のために紅茶を淹れようと三人用の部屋の一角にある台の上辺りを探していたが見つかる事はなかった。それどころか幻想郷から持ち寄った記憶すら怪しく思えてきた。

そこで咲夜は今回何を持ち運んだのかを思い出そうとしていた。しかし紅茶など入れるための器具を持ってきた記憶はなかった。それどころか自分の持ち物しか身につけていなかった気がする。

考えても仕方がないので此処は何もしないことにした。それに辺りは暗さも段々と晴れてきたような気もする。何がどのように転がり込むのかは全く分からない。それでも宿命なんだと思える。

だからこそ嘆きの言葉を出そうともしなかった。お嬢様にも妹様にも弱みを見せつける事は出来なかった。

台地から太陽が昇る。

吸血鬼にとってはきつい環境ではあるがそれでも馬鹿にされるよりは幾分ましだと思える。レミリア・スカーレットは慣れない固いベットで目を覚ました。その近くではもう準備を整えたと思われる銀髪のメイドが平然とした態度で立っていた。

「お嬢様、軽いお食事を作りました。どうぞ腹ごなし程度にお食べください。」

メイドはレミリアが起き上がったタイミングで心地よい声で話しかけていた。その声には何処かやさしさのある声でレミリアの耳の中をさわやかな風が通り抜けていた。

「食材はどこで買ってきたのかしら。」

レミリアは起きたばかりとは思えないほどしつかりとした声で話

していた。そして少しだけ笑っているようにも思えた。実際のところは本人に聞いてみないと分かったものではないがそのように見えるので何とも言えない状況となっていた。

「王国では朝早くから商売を始めているようです。ですが、どうやら私たちのために売られているようにには思えないのです。」

咲夜としては完璧に答えたのだと思っっているのかレミリアは軽く馬鹿にするように答えていた。

「ここでは、朝食と夕食が出るからでしょう。」

クスクスと笑っていた咲夜は急に恥ずかしく思えてきたのか顔を赤らめていた。

「お嬢様にお食事をお作りするのが私の役目です。」

咲夜は知らなかったということを感じかねないように弁明のつもりだったのだろうかそのように話していた。

「フフ、ありがとうね。咲夜。」

赤い吸血鬼の異名を持つフランドール スカーレットは浴びることの少ない眩しい太陽の光を全身に感じていた。その光はフランドールには刺激が強かったようで弱弱しい声を上げていた。その声に気付いた咲夜はフランドールの元へと一瞬で移動する。

まるで時間を止めたような、そんな速さがあつたがそれほど驚くことではない。時間の止めることのできる咲夜には造作もないことだった。

「ゆっくりお体を起こして下さい。」

心配そうに声を出していた咲夜はフランドールの体にそつと触れるとそこから補助するように起こしてあげた後に太陽の日が当たらないような場所に移動をさせることにした。

「腹ごしらえとしてお食ってください。これから演習場に向かいます。」
事前に食事を済ませていたのかそうではないのかは全く読み取れないが咲夜は吸血鬼姉妹の間で静かな時間を過ごそうとしていた。

「ところで、咲夜の職業は何にしたのかしら。」

フランドールよりも先に食事を始めていたレミリアはフォークを

右手に持ちながら片眼を閉じていた。

その姿は吸血鬼というよりも年相応の見た目をしていて。家族としての団欒の時間を過ごしているようなので誰にも邪魔はできないと思われる。

「私ですか。曲芸師をしています。時間停止は出来ますので丁度いいものだと思います。」

ニコツ、としている咲夜。

それはいい選択と答えたレミリア。

ただただニコニコしていたフランドールは一通り食事を終えていた。

「では、行きましょう。」

一瞬で片付けを終わらせた咲夜は二人を外にある大きな広場のような演習場へと向かっていた。その場所には多くの種類の道具が置かれていて何らかの目的と全ての役職に対応できるようにしていた。それこそ何か理由でもあるようだが入る事は拒む事はないらしいのでいつ誰が入っても良いようにしていると思われる。咲夜は昨日の出来事を思い出しながら吸血鬼の姉妹の前を歩いていった。その三人は子供と親または姉のように思える構図である。実際は年齢的には全く違う。

「確かお嬢様が槍使い。そして妹様が剣士でしたね。二人ともお似合いです。」

咲夜はこれからの事を考えて褒めておくことにした。実際レミリアには魔槍 グングニル。フランドールにはレーヴァテインを持つっている。実際のところはそうではなくてそれを具現化した物を操っている。

「そうね。持ち前の武器を使うのは当たり前のことでしょう。咲夜もフランにはそのようにさせたのではないかしら。」

少し余裕のあるように笑みをこぼして下から覗き込むようにレミリアは咲夜を見ていた。吸血鬼らしい威厳よりも家族を見る親のよくな目をしている。とても優しい目をしていった。

「そうですね。」

ニコツ、と笑って誤魔化そうとはしなかった。前に喧嘩をしていたとは思えないほどに仲の良くなった二人だが自然にそのような関係を持つていたのだろう。時間が育んだ愛情というものが垣間見える。レミリアも咲夜の表情に返すように笑っていた。そんな二人を見てフランドールもまた笑っている。

「それにしても如何してこのような事になってしまったのでしょうか。」

「それは気にしないことね。まずは一週間、王国の兵士として勤めてからクエストを受けていきましょう。きつとうまく行くわよ。」

レミリアは何と無くそんな事を言っている。別に間違っているわけでもない。

「お嬢様は青年のことを信じているのですか？」

咲夜は何の気なしに聞いていた。

「それはあれよ。あれあれ。」

レミリアは変に慌てていた。まるで予想だにしていなところから敵と対峙しているようだった。」

第84話

幻想郷でもブリタニア王国でもない何処か。スキマの能力を使用した八雲 紫は彼女の式である八雲 藍とその式である橙と暮らしていた。三人は青年に言われた通りにこの場所でもちらの対応も出来るようにしていた。お互いに世界を干渉する事になるがそれを可能としている紫は相当な力を持っていると思われる。だが半分はアーサーの時空超越の力による事も多い。それも青年の指示があったからである。それを正確に伝えた霊夢にも感謝をするべきだろう。「ブリタニア王国の方はどのようにしているのでしょうか。」

金色のさつぱりとした髪型をしているアーサーは橙色の鎧を着ておらず紫から借りた服を着ている。別に着られたらそれでも良いらしくアーサーは特に文句は言わなかった。「様子を見てみましょうか。」

ひと段落ついたのか安堵の表情をしている紫は左手で頬杖をつきながら右手で軽く覗けるぐらいのスキマを出していた。その中にはしっかりとブリタニア王国の様子が見れた。「凄いですね。くつきりと映っています。」

「それは良かったわ。藍には感謝しないといけないわ。」
一応区切りをつけられたので意外と安心した日になるのかと言われると別にそういうわけでもない。理由としては簡単な話、幻想郷の方が問題が残っているのである。言いたいことも分かるが力の均衡が著しく落ちた場所もあるので何ともならない所もある。

「有難うございます。藍さん。」

書類整理をしている紫の式である短い金色の髪と背中にある大きな九つの尻尾が特徴的な藍は少し不機嫌に顔を上げて手で合図を送っていた。相当忙しいようでアーサーも声をかけようとはしなかった。

「それで貴方はあの人とはどのような会っていたの？」

「アレスですか。あの方は元々は浮浪者という王国の病原体のような存在でしたので敵同士でした。」

「敵、ね。意外な関係ね。それくらどうなったのかしら。」

「どうやら興味のあるらしい紫はアーサーに聞いていた。どうしてものか理由は知らないアーサーは別に疑う必要もない相手なので話す事にした。」

「私が追い出そうと戦っていましたが何度挑んでも相手にされていなかのよう逃げられました。」

「その頃から対処に困っていたのね。でも、どうして兄者なんて呼ぶのかしら。」

「アレスさんの強さに惹かれて弟子にしてほしいと頼みました。そして、」

「そしたら何が起こったのかしら。」

「その代わりに正式に兵士として入れてほしいと言われました。その実力もあつたので入れてあげる事にしました。」

「そこでも実力を発揮して特に相手が居なかったのかクエストをよく受けていました。王国内にいるのかさえも怪しくなった頃に魔王討伐を任命されたそうです。王国を出たその日以来ここに来るまでは会うことはありませんでした。」

「あの人らしいわね。幻想郷でもとんでもないことやらかしているわよ。」

紫はどこか嬉しそうに答えていた。その真意は全く理解できないアーサーなので別に気にしないという風にしてみる事にした。

「凄いですね。」

「これでこそ藍の許嫁よね。」

扇子で隠していたその笑みも段々と剥がれてきたようでとても良い顔をしていた。しかしそれを良しとしない人は机を叩いて抗議していた。別に怖いものではない。

「紫様、何故こちらに飛び火させたのですか？」

「良いじゃない。事実なのは変わりないわよ。」

「でも、確か妻に等しい人はもう居たような気がします。名前までは忘れてしまいましたが。」

アーサーはどうにも進言しにくそうにしている。状況が盛り上

がっているのでそれを盛り下げる事にはなるのだろう。その事を考えていた。

「良いの。どうせ何処かに出かけていくのだから何股でも許してくれるなら別に良いわ。」

その表情は穏やかなものだった。しかしどこまで許せるのかは皆の器の大きさ次第だろう。

第85話

下弦の月が空には浮かんでいる。幻想郷からこちらへと来て一週間が過ぎていた。一週間の研修期間のようなものを過ぎた兵士として王国には登録されている七人はこれから自由に過ごすのだろう。それでもまだ心配な事はないということではない。此処で如何してあと三週間の猶予を与えたのかはまだ分からないところだろう。それを話すためにある空間へと来た。

「という訳で、青年が如何してこのような期間を設けているのかを説明する必要があるわ。」

金色のウェーブをかけた綺麗な髪をしている八雲 紫は扇子で口元を隠しながらそこにいる七人に話を伝えていた。

「実際、此処で出ていっても良いものね。」

黒髪で後ろで結んだ短めの髪を揺らす博麗 霊夢は本当の意味で文句を言いたそうにしていた。その理由も分からなくもないがそれも読まれていた事なのだろうと思われる。それとも周りを煽るように霊夢が仕向けたのか。

「まず、一つ。資金の調達。これは確か最初のうちに話していたと思うわ。」

紫は一番最初に言ったことである。青年もそれに近い事は言っているのではないか、という紫の勝手な予想である。探してはいるが基本的には紫や藍でも見つけるのは困難だ。

「そう言うということはもう一つ何かあるのでしょうか。」

水色の髪をしている吸血鬼であるレミリア スカーレットはその先を予想したのかそのように聞いていた。別に間違っではないだろうと周りは言葉に出さないまでもにも言おうとはしなかった。

「それは装備の調達。クエストで稼いだ報酬で良いものを買って欲しいそうよ。」

「という事はたくさんクエストを受けたら良いのですね。」

元氣そうに答えた緑色の髪をしている東風谷 早苗は少し話の内容を理解していないようだった。

「その通りだけど一つ問題があるわ。先客があるのよ。」

「それは誰？」

誰かと被るように話されたので正確には分からないがお金に困っていた巫女か興味のある誰かなのだろうと思えた。それ以外は大体分かっていたので詮索はしないつもりなのだろう。

「簡単な話、青年よ。此処一週間で根こそぎクエストをこなしていたわ。」

少しだけの畏怖の表情をしていた紫の表情からそれがどれだけ凄惨な事であるのかは言うまでもなかった。きつと誰にも取られたくない何かがあるのかそれとももつと他の事情があるのか。それは本人に聞いても話す事はないのだろう。

「でも、最後まで話は聞いて欲しいの。クエストを受ける前にミエンの知り合いである事を伝えてほしいと伝言を受けているわ。」

「つまりその何かの為に青年は此処まで頑張っていたのね。」

霊夢は少し感心したように話していた。その理由はまた後でもわかることなのだろう。

「それともう一つ。挫折を味わった人が復帰するまでの期間だそうよ。それと代打が変わっても馴染ませる為にね。」

その言葉が心に刺さって抜けそうにない人もいないことでもなかった。しかし、周りはそのような事は関係ないようでそれなりに頑張ってみることにしたらしいが真相はどうかは分かったものではない。

「これで解散よ。時間を取らせて悪かったわね。」

紫はそう言うとすつとそれぞれの部屋の中へと送ってあげることにした。役職が変わるのでそれぞれ住んでいる箇所が変わってくる。それを正確に送ったとなればそれは相当な実力なのだろう。

「それはそうと貴方はいくら稼いだのよ。」

後ろで横になっていたその人は誰にも気付かれないように襖の裏に居た。黒い髪を後ろで一つに結んだ女性のような髪型をしている青年は青い服装に身を包んでいた。きつちりとした綺麗な服装で何かを隠すように羽織っているようだった。そして白いズボンを履いている。単純に正装しているだけなのでどこに出かけてもそこそこ

の人間にはなれるようにしている。

「数にして一万。その大半はギルド養成所の先程話していたことに使ったり、この服に使って空になった。」

「貴方は少し加減というのを知りなさい。如何してそこまで急いだのよ。」

「素早く終わらせるためだ。俺は何だっしてやるつもりだ。」

青年は素直にそして迅速に答えた。まさに突風のような。

「実際は一万で済むのかしら。」

素朴な疑問なのだろう。紫は何となく聞いていた。

「単純な話、民間からのクエストはとんでもなく安い。一日十五個、この数をこなしてやっとな稼げたのがその額になる。そんな時間がかかることをやらせる訳にはいかない。」

「そういう事ね。それは伝えておけば良いかしら。」

「辞めてくれ。自ずと気づくだろうがしばらくはこのままで良い。」

青年がそう言ったので何も言い返せなくなった紫は仕方がなく黙っている事にした。

第86話

皆がこれからの進路を何となく聞いていたその次の日、赤い角が特徴的な星熊 勇儀はとあるギルド養成所の近くにある酒場に来ていた。鬼という種族である勇儀にとってはとてもではないが美味しくもない酒だがそれでも飲めないよりは良いと思っているのだろう。それともとあるストレスを発散させるために此処でやけ酒でもしようとしているのか。本人に聞いてみないと分からないのは事実だが近寄りがたい雰囲気醸し出していて酒場の主人ですらはい、としか答えられなかった。

「隣に座っても良いか。」

とある青年は特に気にする事なく聞いていた。黒髪を一つに結んでいるだけの後ろ姿は女性にしか見えないその人は腰に四本の剣を携えている一見すれば変わった人だった。別に間違っていない。こんな状態の人に話しかけるのだ。相当な命知らずなのだろう。

「好きにしろ。」

勇儀はぶっきら棒に答えていた。もう何でも良いのだろう。そんな捨て去った過去でもあるかのように放心とした状態でその椅子には座っていた。側から見ればすごく落ち込んでいる人に話しかけるバカという構図になっている。

「そうか。して、何か嫌な事でもあったか。」

青年は特に気にする事なく聞いていた。きつと頭の回路がスパツ、と一直線にしかないポンコツなのだろう。そのぐらい言動がまっすぐだった。

「いや、気にしてくれるな。」

勇儀はカウンターに置かれているグラスを持って青年の座っている右側に視線を送りながら口元へと運ぼうとする。しかしすぐに置くのとじつと青年の目を見ていた。丸っこい子供のような目をしている青年は勇儀の鬼の形相にも人形のように変えようとはしなかった。見慣れているのか感じないのかそのどちらかである。

「そうか。何かあれば俺や他の人に聞いてくれたら良い。」

「それじゃあ、一つ聞いて欲しいことがある。最近、どうしても勝ちたい相手が居るのだがどうにも勝てない。仕方がないことなのだがどうにも悔しいだけさ。」

「そうか。仕方ない事だろう。それは演習場での事だ。よく観察されて弱点が露見されたところで相手からくる。不利な対面であるのは変わらない。」

青年はスパSPAと話を進めていた。相手の擁護もなく淡々と話している姿は逆に凛々しいとさえ思える。迷うのないその言葉なのでそうなるのだろう。店主の男性はそうように見ていた。

「それならどうすれば良い。」

勇儀は口元に運んだグラスをチビチビと飲みながら聞いていた。喉が渴いただけなのだろう。青年はそう思っておくことにした。

「今の貴方には無理だ。実力のないので此処で選択をしてもらう事になる。」

青年は急に冷たい一言を発した。酒場の店主は一応事情を知っている。頭の中は疑問しか浮かんでいない。

「非力だと言いたいのか。どの口がそれを言う。」

椅子の上から拳を振り回した勇儀だが簡単に受け止められた。その腕の先には手の甲と首に差し掛かってつけられているある器具がその力を相殺しているのだと思われる。そうでもない限りはこうにもならない程の力量差はある。

「喧嘩なら表に出よう。此処では迷惑だ。」

青年は椅子から立ち上がるとスタスタと相手に背中を見せて外へと出ていこうとしていた。背中を見せられた無防備な姿に一発入れてやろうかと考えたがそれは辞めておいた。自身のプライドがそれを許してくれそうにはなかった。何をしたいのかは全く分からないが付いていくことにした。

外にはギャラリーというわけではないが謎のショーだと思われるルピのような宝石が投げ込まれていた。その軽い円状の中で二人はその目を見ながら退治していた。片方は四天王に数えられる勇儀、もう片方は特に何か称号のない青年だった。どちらにしても周りから

見ればこの二人の実力には皆目見当もつかない。ちよつとした遊び程度に思われていた。ルピが投げ込まれたのもその一環なのだろう。

「いつでもかかってこい。前ほど簡単にはいかないよ。」

盃をどこかにおいていた勇儀は両手で構えていた。その姿に青年は首を左に傾ける。

「そうか。遂に構えるようになったのか。」

何やら意味深な発言をしたところで青年も同じように構えるのかと思われたが別にそうでもないらしい。その理由は後にわかる。

「ナメた真似をしてくれたものだ。」

勇儀は落ち着きもなく右腕の拳を青年に当てようと大きな振りをしていた。それに合わせるように青年は左腕を突き出しただけのように見えた。

刹那、勇儀の右腕は軽々しく吹き飛ばされた。持っていかにそうなほどの力があると思われる。

「力がこもっていない。」

青年は軽く一言だけ付け加えていた。青年にとってはもうなんでもない光景なのだろう。ブリタニア王国を實力で抜け出した青年の目には今の勇儀はとても弱いと思われる。

「まだまだいける。」

そういつた勇儀だが別にそうとは思っていない。そんな困り果てた表情をしている。

今度は青年が仕掛けた。

左腕を前に出して右腕を体に寄せて折りたたんでから一気に放出する。その一撃はまるで地表に落ちた大きい雹のように轟音が鳴り響いた。

何かの衝突したその場の周りにい人は此処でやっと遊びではないと分かったと思われる。この二人がどれだけの實力を持っていてまだ余力を残していると思われるこの状態を。

「何か細工しているだろう。」

勇儀は細い目で聞いていた。

「そうか。そうでないとこんな場所には居ない。」

言い終わるかそうでもないかの頃合いで流儀に合わない不意打ちを仕掛けた。そうでもないかと勝てないと本能的に思えたのだろうか。頭の方は全く追いついていなかった。青年はその拳を軽く突き上げて腕でその拳を受け止めると内側へと回転させていた。追いかける体と進み続けようとしているその拳は青年の腕の前に悲惨な姿を見せていた。

勇儀はその場に痛みで伏せてしまった。

「此処で貴方が逃げることは構わない。俺には関係のない話だし代わりはいくらか居る。好きにすれば良い。が、帰ってきた無様な貴方を誰が迎えてくれる。俺がどうして貴方を選んだのかその答えはお前が決める話だ。」

青年は右腰から剣を引き抜くと刀身を怪我したと思われる手首に当てると何かを念じていた。最近使えるようになっていた治療魔法の類。これを勇儀に見せるのは初めてだった。みるみる痛みが取れていくのが分かった勇儀はそれを終えてからその場で立ち上がった。「私はもうしばらく此処にいることにする。」

「そうか。俺は見かけたただだからまた他の場所へと向かう事にする。クエストの途中なんだ。」

青年は走り出そうとしたその足を止めて後ろを振り向いた。

「付いてきてくれる事に感謝する。その器の大きさは俺が認めたい姉御の証だ。」

「よせ。」

そういう勇儀だが別に悪いことはなかった。そんな表情をしている。

第87話

クリスの居る工房で鍛冶を行う事、一週間と一日が経っていた。その間にブリタニア王国での暮らしにも慣れてきたのか少しだけ緊張がほぐれてきたと思われる。

「にとりよ、今日は此处で辞める。」

クリスは窯の前から立ち上がるとゆっくりと消火するように何らかの作業をしていた。背面を見ていた青い短い髪をしている少女、河城にとりは金物を小槌で叩いて成型していた。カンカン、と金属が当たる音がしているので相当夢中でやっていると思われる。クリスでさえもその熱気というのは呆れるところがある。ただし、手放したいのかと言われると絶対にそのようなことはない、と言いたい程その腕は買っている。

何らかの金属を叩いているにとりを背面から何となく眺めていたクリスは道具を片付け始めていた。だが自分の物だけのようでその他のものは片付けるつもりはないらしい。にとりが終わるまでは待っているつもりらしい。外は随分と夕日が傾いてきて赤くなっていた。

「あれ？もう終わりなの。」

一時的な集中から解き放たれたにとりは自分の周りの状況を見て困惑していた。どうやらクリスの言葉は全く耳には入ってこなかったらしくキョトンとした表情をしている。

「そうだ。しかし、どうしてそこまでやろうとする。」

クリスはどうしても不思議でしかなかったのだろう。

「楽しいからね。それと認めてくれる人が居るから。」

クリスには笑って答えたにとりが一種の天才かと思っていた。それほどに鍛冶というものを楽しんでいる。

「その熱意には恐れ入る。」

クリスは最後の作業として掃除を始めていた。外はもうそろそろ夜へとなり始めていた。ロウソクの立てられているこの部屋ではゆらゆらと揺らめくその火しか光源というものはなかった。とても小

さな火だがそれでもこの工房を照らす分には何も問題はないと思われる。

「そう言やにとり、伝説の剣の話は知っているか。」

急に話を始めたクリスはふと思いついたのだろう。それとも知っていてほしいと感じたのか。その事はまた別にするとしてにとりは何となく聞いてみる事にした。

「知らないよ。」

きよとんとした表情をしているにとりはそれ以上の言葉を出す事はなかった。それでも興味があるらしくそんな目はしている。

「その剣は今はない。今では死んだしまったアレスという通り名のある少年が持っていた剣だ。誰が作ったのかも使っている本人も知っている人は少ない。アーサーという王国騎士だけは友人関係にあつたそうだがそれ以外の情報は出回らないそうだ。」

「でも、何でそんな伝説になる程有名なのに情報は全くないのかな。」

「変装が得意な人物だったらしい。そして実力は王国に反逆を起こせば必ず傾くとさえ言われている。思い出すだけでも恐れ多い。」

「と言うことは別人の情報が本物なのかもしれないね。」

「そういう事だ。しかし、男だったり女だったり、貴族の生まれとの噂とか浮浪者であつたりするからどれを信じて良いのか。果ては王国の隠し子だとも言われていた。何せ、何処にも所属をしていなかったから記録もない。」

「そんな人の持っていた剣が伝説の剣なんだね。」

「刀身の色は何の変哲も無いのだが恐らく秘めたる力があるに違いない。」

「意外と近くに居たりするかもしれないね。」

にとりはクリスからすれば意味のわからないことを言い始めた。正直な話、その人は死んだとされている。あれから生きていると言う話は聞かない。

「そうかもしれない。ひよつとしたら商人として何処かで暮らしているかもしれないか。」

クリスも何となく理解は示してくれたがその表情はそうでもな

かった。所詮は戯言だと思われているのだろう。

第88話

此処へと来てから一週間が経っていた。もう別に何処へ行くこうとも勝手な身分ではあるが事実上は縛られる形になっている。その理由は弱者狩りがあるからでそこその実力が必要になるからである。

研修として与えられた一週間で誰からも行われないようにしてあれば別に関係のある話ではなくなる。霊媒師では二人がそれに値する。一人は黒髪のセミロング程の髪の長さで一つに結んでいる髪が風に揺れている。赤いリボンを付けたその少女が博麗 霊夢。それに対するのが緑色の髪をしている白い蛇で巻かれた一房の髪を左肩の上に乗せていて髪には緑色のカエルの髪留めをしている少女が東風谷 早苗。

この二人は元々の実力があつた為、初日から弱者として狩られる対象にはならなかった。特に誰からも助けて貰えないこの環境ではお互いの足を引っ張っているようにしか思えなかったがこの二人はそのような事はなかった。時にはその場を制圧していた。と言うことである。

もし噂を聞いていて二人が対峙したならばどうなるのだろうか。

「これはこれは。博麗の巫女さんではありせんか。」

自分の二枚の紙が付いているだけの幣を振りながら早苗は霊夢に向かつて宣戦布告のようにはしていた。実際にはまだしていかないがどこからその自信が湧いてくるのかは全く分からない。

「守屋の巫女じゃない。やはりここまで来たようね。」

早苗に対して落ち着いて対応している霊夢はお祓い棒を右手に持って冷静にその場を観察していた。周りの事など何も考えていないのだろう。おどおどとしながら霊媒をしようとしている人から比べると二人はまた別の方向ですでに完成していた。

「此処でどちらが青年のいるところへと行けるのか勝負しましょう。」

「勝負を受ける意味はないけどやってあげるわよ。」

お祓い棒を逆手に持っていた霊夢は早苗の軽い挑発に乗ってあげる事にした。博麗の巫女としてのプライドが早苗と交代することを

拒んだのだろうか。そんな気はしているが何処かそこまで悩むことでもないと思われる。

「分かりました。」

早苗も同じように幣を構えるが別に何かある訳でもない。単なる指揮棒程度なのだろう。早苗にとってのこの場の幣はそのぐらいの役割しか持つていなかった。

霊夢の右足が地面から離れようのように集中しながら少しだけ間合いを詰めていた。此処から何が起こるのかは誰も分からないが早苗も一歩だけ前へと出てきていた。足が浮いていてその場を狙われなくても仕方がなかったがそれをする事はなかったのだろう。

「早く来た方が身のためよ。早く倒されるか此処で倒されるかの違いなんだから。」

何方から始まったという事でもない。霊夢が言い出したその言葉を早苗は行動に起こす事で答えるとそれに霊夢が合わせていく。演習場の地面を蹴り出した左足から霊夢は早苗へと一直線に近づいてくる。

早苗は指揮棒のように扱う幣を前へと突き進めた。カーブのかかった緑色の弾幕が霊夢を襲う。そこへ追い討ちをかけるように横へと振り切る。前方からと左側から来た弾幕に一旦足を止めた霊夢だがそれで諦めるようなこともなかった。逆にどうして諦めようなんていう考えに至るのかは聞くまでもない。聞く必要もない。

霊夢も同じようにお祓い棒を振るう。ホーミング性能のある三つの弾が早苗を襲う。早苗は咄嗟の判断で右側へと避けると前へと走り出していた。自分の背後に集めて一気に潰そうとしたのだろうかそれは霊夢の手の中からは抜け出すにはいささか力不足であったようだ。走り出した前方からホーミング性能のある赤い札のような真四角の弾が襲いかかる。

しやがみこんだ早苗は更なる追撃を受けることになる。動きを止めた獲物に容赦なく三方向から放たれた弾が近づいて来る。後ろに避ければ当たる。左右は勿論の事当たる。もう此処はやるしかないと思つたらしく地面を転がり込んで前方からの弾を避ける。そして

左右から来ていた弾が軌道を変えて早苗の背後を狙っていた。

霊夢もそうなることは読んでいた、はずだったが此処で不測の事態に陥る。早苗が滅茶苦茶に幣を振り始めていた。左右からではなく前方からも現れた無尽蔵な縦横無尽に放たれた緑色の弾幕が角度とタイミングを変えて襲ってきていた。霊夢もこれでは身動きを取ることができなかった。周りからすれば此処でナチが起こっているのはさっぱり分からないという状態なのだろう。ホーミング性のある赤色の弾と緑色のウエーブのかかった弾幕を張る二人の勝負は周りは一目置かれるものだった。それとかなり迷惑であることに違いない。

「中々やるじゃない。」

霊夢は地上に立ったまま話しかけていた。空を飛び上がることは青年によって禁止されているのでその行為はするつもりはないがしそうなほど白熱していた。

「霊夢さんも流石です。」

お互いを褒めたところは今日のところは終わるわけでもない。これから本番なのだと言いたそうにして二人に周りにいた初心者霊媒師や監視の役割を持つ兵士にも伝わっていた。こちらからは何も出来ないのか何も手を出そうとはしなかった。疲れ果てたところで入ってくるのだろうかと思われる。

「言ってくれるじゃない。これまでは肩慣らし程度なのよ。」

霊夢は更なる弾幕を生み出そうとしていた。対して負けないように準備を始める早苗がその前に立っていた。

第89話

赤と緑色の弾幕が一斉に二人の人間から放たれる。それと同時に地面を蹴り出した両者はお互いの放った弾幕を避けながら自分の弾幕の濃さが増していくようにしていた。一つだったものが二つに変わり、それが三つへと来る頃には周りは避難を始めていた。

見ているだけではもう危険だと思えてきたのだろう。速度自体は別に脅威ということはない。当たらなければどうという事は無いのだが一発の威力が凄まじいものだと察知したのだろう。そして覆い尽くすような弾幕なのである。もう周りの知らない人間は逃げるしかなかった。

二人からすればこれ以上の好機はなかったのだろう。

東風谷 早苗は右手に持っている幣を使つて覆うような段違いの弾幕を放つ。頭や胴体だけではなく当たることを予想しにくい足元まで完全に埋め尽くそうとしていた。

対して霊夢はそのような細かい事はしなかった。ホーミング性能のある弾幕に加えて放射状に米粒状の照らされた赤色をした弾を放つ。直線的な軌道だがその速さは此処にある弾幕には無いものだった。ふつうに攻撃だとしてもあり得そうなものだった。

ここまで来るといつ終わるのか、どのように終わるのか気になり始めた頭の弱い人は出てこようとしていたが簡単に倒されてしまう。速度もあれば飛んでくる場所も変わる。気にする箇所は不特定であり前後左右から狙われてはに逃げ場がなくなる。つまりは何らかの理由で止まれば其処を狙われる。

周りからすれば一切躊躇をしてくれないその横暴さに腹を立てた兵士もいなかったわけではないが出てくる馬鹿はいなかった。出たところで結果など分かっている。倒れている一人の男を見ればその様子は分かる。一発当たっただけだった。流れ弾に当たっただけであれである。誰も出てこようとは考えないのだろうか。

「おい、いい加減止めた方がいいだろう。」

ある兵士は耳打ち程度に隣の人に聞いていた。特に面識がある訳

ではないがまるで以前から知っていたかのように話を始める。

「それは辞めておこう。いつ殺されるのかはわからない。」

言うこともわからんでもない、と周りの人は思っていた。

「でも、このままだと占領された状態なんだ。なんとかしようとは思わないの。」

周りも肯定こそはすれど行動に起こす事はなかった。誰かが止めるしかこの場が収束する気がしない。

「もうこの話はやめよう。俺たちの非力さが理解できるだけだ。」

この言葉に誰もが黙ってしまった。

「どうしても勝てなさそうですね。」

早苗は肩で呼吸をしながら右肩を押しえていた。恐らく掠ったのだろう。そんな気はするが特に外傷があるわけでもなかった。

対する霊夢は余裕そうな表情とまではいかないが早苗よりかは軽症で済んでいると思われる。恐らくスタミナ切れの寸前なのだと思う。肩で呼吸する両者に誰も何もする事はなかった。終わったことを確認していつも通りの光景に戻っているだけだった。

それまで起こっていた壮絶な戦いも戦争の闇に燃えた巻物のようだった。跡形もなく失われていく。」

第90話

「お待ちください。幾ら何でも受け過ぎです。」

此処はギルド養成所、そしてそこで働いている職員がある男に注意をしていた。その男は薄い茶色の布地に身を包んでいるだけの外面からして怪しい服装をしている。

「そうか。だが、報酬が少ないのが悪いのだろう。」

青年は特に気にしている様子もなかった。しかし答えないわけにもいかなないので仕方がなく口を使おうとしたのだろう。それに此処で使わなければ後々に響くものがある。

「それは仕方ない事です。民間からの依頼はその人が払っているものです。」

女性と思われる職員は青年に話しかけていたが全く興味がないのか背中を向け続けながらどのクエストをやろうと選んでいるので全く効果はないと思われる。何が起ころのかも大体は分かってきていた。

「そうか。して、王国から出ているものはあるのか。」

青年はクエストの内容が書かれた紙の貼られている掲示板の方を向いてじつとしていた。今日のうちにどこまでやってみようか計算しながら考えているのだろう。

「全く人の話を聞いていませんよね。貴方には一切あげませんよ。」

職員は脅しを始めた。そうでもしないとこれから王国で暮らそうとしている兵士や人間にとっては簡単な仕事がない状態から始まる事になる。そうなれば大きく戦力が削がれていくのが長い目で見ていればわかる。その為にも小さな火種のうちに止めたいと思う気持ちもわからないわけでもない。

「そうか。そうなれば掃除でも始めてみようか。」

青年はその職員の前に来るとじつとその人の目を見ながら距離を詰めていく事にした。何の意味があるのかは全くの謎だがそれでも威圧感と言うものがある。

「何をしようと言うのですか。」

「先ほどの強気はどこにいった。して、今日は少なめにこれだけの仕事をやろうと思っている。」

十枚の紙をその職員の前に出していた青年は本当に興味がないのだと思われる、此処までの会話などに。そうでもなければ青年が構いなく暴れることは少ない。

「分かりました。もう好きにしてください。それと今日で此処に来るのは最後にしてください。他の人の迷惑になります。」

「そうか。他の用事なら別に構わないのだろう。」

「クエストを取らなければそれで良いです。」

職員は諦めているのかその声に抑揚というものもなく目が死んでいるようだった。此処までどれだけこの青年に仕事を取られているのかは言うまでもない。職員を含めたギルド養成所、又はバルタニア王国全体では結構な影響を与えている。

第91話

霊夢と早苗が弾幕勝負をしていた頃、こちらの方でも戦闘が始まるうとしていた。青い短い髪をしている吸血鬼はグングニルで攻撃を仕掛けようとしている。対する金色の髪をしている吸血鬼もレーヴァテインを持って対峙していた。その横で冷静に観察をしているメイドは凛々しくも表情一つ変えることなく冷淡とも言えそうな目をしながら二人の様子を眺めていた。

「向こうの方ではかなり大きな音がしていますがどうなされますか。」
完全に瀟洒なメイドは主人であるこの姉妹に聞いていた。これから始めるに当たってその前に何とかするのかを聞いているのだろう。「別に。気にしない事にするわ。こちらまでは来ないでしょう。」

青い短い髪をしているレミリアはグングニルを悠然と構えながら妹であるフランの方を見ていた。あまり他で行われている戦闘には興味がないらしくどうでも良さそうにしているのは確かだ。

「分かりました。私は此処で一旦引かせていただきます。」

二人に仕えるメイドはさっさとこの場から離れていた。しかも時間を止めていたかのように一瞬で移動しているが二人には見慣れた光景なので別に気にすることはない。そこで何が起ころうとも関係がないようだ。演習場では別に特別なことは起こっていない。いつも通りの決闘というのが起こっているだけだった。向こうでは同種の言わば、同士討ちが起こっている。こちらでは剣士と槍使いの決闘が起こっているだけなのである。しかし、周りの人からすれば此処でもあれと同じような状況は起こしてほしくないわけなので抗議しようとする人もいる。

吸血鬼のメイドをしている十六夜 咲夜にとってはもう分かりきっていたこと。近付けさせなかった。いくら歩いて、走つても一向に距離が縮まりそうに思えない事実だけが段々と重圧としてのしかかってきて足が止まっていた。

赤い発光しているように見えるグングニルを持っている吸血鬼と赤い色をした刀身をしている燃えるような剣を持つその妹にはその

ような事は知らない。しれつ、とその場に立っているメイドが全ての準備を済ませていた。

「こうやって戦うのはいつぶりかしら。」

姉であるレミリアは槍の先を地面に向けながら目は妹の方を向いていた。まるで挑発しているようにも見えないこともない。

「二度もないわよ。でも負ける気は起こらないの。分かるでしょう。」
妹であるフランドールはレーヴァティンをしっかりと持っていない。それこそ戦う意思があるのか分からないような雰囲気を出してその場に突っ立っていた。誰かの真似事なのだろうかフランドールよりも経験の少ないレミリアにはぼんやりとしか思い出せなかった。

「何のつもりかは知らないけど手加減はしないからね。」

グングニルを持ち上げて喉笛を突こうとしているレミリアだがその目の前の状況の変わりようには驚く事しかなかった。半身になりつつレミリアの攻撃を避けていたフランドールがじつ、とレミリアの表情とその手先、足先を見ていた。そして油断のない視線で一切のブレもない動きからレーヴァティンを振り上げて左足と共に地面に叩きつける。

一瞬で勝負がついてしまったかのようにも思えるほどの威力を持つていたがお互い吸血鬼なのでそのような事はない。一撃で終わるほど簡単な種族としてこの世に生まれてきたわけではない。
「やるじゃない。もしかして青年の動きを真似しているのね。」

レミリアはきつと左肩から対角線を描くように切られていたと思われるがまるで何もなかったかのようになっていた。きつと逃げたのだと思われる、コウモリとなつて。フランドールもさも当たり前かのような表情で特に反応は見せなかった。まるで分かっていたかのように笑いすら起こり始めている。側から見れば気の触れている決闘だと思われる。

「ふふつ、そうだよ。よく遊んでくれたから覚えているんだ。」

また落ち着いたように話しているフランドールだがそうとは見えなかった。理由は言うまでもない、笑っているからだ。」

「そうね。あの人、実力は持っているものね。」

レミリアは少し姑息な手段を取るようになっていた。相手が答えようと口を動かしている時にグングニルを振り払ったレミリア。フランドールは特に防御も出来ずにそれを体に受けてしまった。だが、幸いな事に体が切られるような外傷はなかった。もしかすると打ち身をしている可能性は捨てきれないが。

右足に力を入れて低く体勢を構えたフランドールは視線をレミリアの方へと向けていた。その目はそれだけで人を殺しそうな殺人鬼の目であり元々の性格が内側から出てきているようにも思える。ありのままの姿だと言うのか、本来思ってもいない深層心理からできた悪魔なのかは判断はつかない。レーヴァテインを後ろで構えているのできつとまだまだやれるのだろう。

自分の体と垂直になるように構えたグングニルをフランドールに突きつける。当たらないように避けるフランドール。反撃はせず後ろで身を引くことを選んだ。間合いの違いと冷静な判断からそのようにしたのだと思われる。賢明な判断だと思える。

「フラン、もう少し力を出しても良いのよ。」

「分かったわ。お姉さま。」

手を前に出して何かを引き寄せていたところをメイドが入って止めていた。フランドールは不満そうな表情をしていた。だが、その能力は計り知れないものがあるので使用は控えさせるべきだった。「どうして止めるの。」

フランドールは納得出来ないのか、メイドの方を見ていた。少し胸を撫で下ろしたレミリアは自身の魔力で作られたグングニルから手を離れた。正確に言えば使う必要がなくなったので魔力の供給を辞めたといえる。

「それはね、フラン。貴方のその能力がとても危険な物だからよ。」

何か論すように話しているレミリアを不思議そうな目で見つめていた。フランにはどうしても理解できない箇所があるのかもしれない。

「だって、青年には効かなかったからお姉さまで試したかったのよ。」

た。青年とは何者なのか、とふと考えてしまう二人がフランを見てい

第92話

ブリタニア王国には夜にしか現れない裏側の顔というものがある。男にとつての楽園、そして女にとつての戦いとなるある場所に黒髪の青年は訪れて楽しんでいた。

「とても良かった。」

左膝を立てて澄ました顔で肌色を露出させている青年は布に包まって座っていた。筋肉がついているという事はないが自然と鍛えられたその体には無駄というものはほとんどない。

「それは良かったわ。とっても、素敵だったわよ。」

元気をなくして青年の隣でぐったりと倒れ込んで甘い蜜を垂らすように近づいてくる女性はまた求めるようだった。だが、青年も答えるわけではなかった。面倒な事には変わりない。

「そうか。して、これから少し時間はあるだろうか。ルピの方は気にしないでいい。その分は払う。」

どこに連れていくのだろうか期待の目で青年を見つめる女性。チラツ、と見て特に答えようとはしないが期待しろ、と言わんばかりの表情を青年は見せていた。依然として澄ました表情をしているのは変わりない。

「どこに行こうとしているかだけは教えてくれませんか？」

「俺は気分屋だ。歩いて終わるか、何処かで食事して帰ってくるのか。それは分からん。」

「そうなのですか。分かりました。」

上目遣いで青年を悩殺させようとした女性だがあまりにも興味がないのか頭を上に向けていて視線が合う事はなかった。それ故に少し気を悪くしたが青年がそれに気づいていないということでもなさそうだった。

「事のついでだ。何か欲しいものはあるか。」

「欲しいものと言われましても急には見つかりません。」

「そうか。支度を始める。」

少し間をおいて答えた青年は自分が包まっていた布から出ると衣

服を着始めた。薄い茶色の衣服に身を纏うだけなので支度というほどの事はなく素早く終えていた。

対して女性はお洒落な青い布を体に巻きつけるようにしていたので時間がかかっている。しかし、青年は静かに後ろを振り向かないようにしていた。特に意味というものはないと思われる。

「終わりました。行きましようか。」

女性がそのように声をかけたので青年は後ろを振り向いた。無防備に巻かれた上半身やゆるりとした巻き方をしている下半身が女性としてのまた違う色気を見せていた。青色の布から所々見えている肌がとても素晴らしい。

「綺麗なものだ。」

簡単とも呼べる青年の声に満足したのか女性は笑みをこぼしていた。魅惑的な容貌をしている女性は青年の右腕を掴んで胸をすり寄せていた。だからと言って青年がなびくと言っこともない。

「早めに行こうか。」

がめつく金を取ろうとする輩に青年は二時間分の料金を前払いして女性と出かけた。お互いの欲を見せ付け合うように出来ている施設から出た二人はブリタニア王国の中へと溶け込んでいた。コーヒーの中に角砂糖を一つでも入れたような、そんな感じ。

「して、どこに行こうか。」

夜という病気にかかった人達があちらこちらで騒いでいる。青年の声は普通ならとても大きいものだったが今の状況では普通よりかは小さい。場所が場所と言えるかもしれない。

「まずはゆっくりと話すために路地裏へと向かいましょう。」

「そうか。」

質素に答えた青年は次の事を考えていた。どこでこの女性の身柄を渡そうとするかである。確かに近くの路地裏ではあるがここから連れていく事は可能だろうか。

青年は急に進行方向を変えて音のない静かな道へと進んだ。建物と建物に周りを囲まれているこの場所では何処から現れるのかは全

く分からない。小さな可能性を考えると女性の着ている衣服が合図となつている可能性もないという事はない。

様々な可能性を考えておいた青年はその中へと入っていた。二人は路地裏を歩いていく。

「そう言えば何を普段はしているんですか。」

「特にやっている事はない。」

「ということはその腕で稼いでいるんですよね。とても頼りになる腕をしています。」

「そうか。」

「役職は何ですか?」

「浮浪者だ。」

青年はすぱつ、と答えた。当たり前のように言うが普通ならあり得ない冗談になってしまう。しかし、そうではないと言えない理由というのものない。

「こんなお金の使い方なんて一体何者なんですか。」

「そうか。気に入ったものに使うのは良くないのか。」

「いえ、そんな事はないですよ。」

「俺は金に執着はない。それが余計にそうさせるのかもしれない。」

「かつこいいです、ね。」

路地から現れた、と言うよりは出くわしたその男は青年と女性の二人に向かつてきていた。暗さであまり分からないが来ていると思う。青年はそれには事前に感じていたのか鏢を親指で弾いていた。隣にいた女性でさえそれは感じ取れなかった。

左足を前に出して半身になると上から振り下ろす。何か嫌な音と人が倒れる音がした。それだけで済むのならいいのだがそうでもなかった。

「まさか人を殺しちゃったの。」

「いや、峰打ちだ。そのうち目も覚めるだろう。」

「そう。呆気なく倒されて何か可哀想ね。」

「そうか。そう思えるだけで良い。が、当たり前のように毎日行われている。いちいち感情を与えるだけ無駄だ。」

路地裏には人には言えない職をしている人も多い。女性のように男を相手にするものや裏金を流す仕事。悪事に手を染める人も居ないこともない。つまりは危険な道である。

「例えば。」

女性はそういつた時に素早くその場に倒されていた。何をするのかと感情を出していたがそれは無駄というものである。

「身柄は預ける。報酬は幾らだ。」

青年は前を向いて話していた。其処には人が何人が立っていた。女性はつまりは悟ったようで抵抗をしようとしなかった。

「それは後で渡す。万全の状態なら文句はない。」

「そうか。後で向かう事にする。その時までには用意していてくれ。」

青年はそれだけを伝えると踵を返して来た道に戻る。

「ふん、間抜けなやつやな。」

「そうね、まさか彼処まで馬鹿な人も見た事はないわよ。」

「お前にはまだまだ稼いで貰わないといけない。頼んだ。」

「分かったわよ。それじゃ、また後で会いましょう。」

女性は嫌らしく笑っていた。それに答えるように暗闇に紛れた人も同じような表情をその顔に浮かばせていた。

腰を振りながら歩き去ろうとした女性。その上から覆いかぶさったそれには誰も気付かなかった。女性の悲鳴にも似た痛みにも耐えている声が漏れ出していた。

「闇では裏切りが横行する。そして其処に裏切りを重ねて、復讐を重ねて。それを逆手にとつて潰して。」

上から現れたその謎の聞き覚えのある声を出している男はゆつくりと女性の上から退こうとしていた。

「報酬か命かどちらか選べ。」

男は静かに聞いていた。この後何の声もしなくなったがどうなったのかは本人ぐらいしか知らない事だろう。

第93話

挫折を味わってからもう二週間。十四日の間、考えていた事があ
る。どうすればあの男に勝つことができるのか。

その意味合いには確かに多く存在するのだろうが星熊 勇儀とい
う独りの鬼からすれば十分な死活問題となっているのだろう。

しかし、最初の内はだからと言ってどうすればいいのか迷っていた
ところはある。剣士の青年には拳に正面から負けたといっても過言
ではない惨敗を喫した。だから、どうした？最初はそんなものであ
る。

そこから勇儀は発想の転換を得た。どうして剣士である青年がわ
ざわざ拳で戦ったのか。口下手な事は知らないが何か意味があると
思い始めていた。そう思えてからはあの時のことを思い出して何が
あったのかを思い出していた。そう言えば、まともに勝負をしたと言
える状況だったのだろうか。どういう理屈で話すかによって変わる
だろうがそうではないと思えた。考えてもみれば真面目にやってく
れたことなどなかった。

そしてイメージをして十日程だったと思われる。久しく訪れた演
習場では何やら騒ぎがあったようにも思えるほど声があらゆる場所
から出ていた。お祭り騒ぎなのかと言われると顔の知っている人が
居るだけであまりそうとは思えなかった。楽しそうな事には変わり
ない。

「私と決闘したい奴はいるか？」

赤い角が特徴的な星熊 勇儀は付けていた鎖をチャラチャラ鳴ら
しながらその場を歩いていった。もちろんのことながら誰も近寄って
来ようとはしない。当然と言えば当然だろう。

「誰がやるか。」

皆は勝てないのは分かっている。それは言うまでもなく勇儀でも
分かっていた。誰かが向かってきてくれるだろうと淡い考えは勇儀
はしていなかった。

「それなら仕方がないな。」

悠然と構えていたので何の影響も受けていなさそうな勇儀はその感情を表に出しているだけだった。何か気品さも感じられるような雰囲気にも誰もが道を開けていた。

勇儀の心の中にはもう焦りや怒りといった不満に思える要素はなくなっていた。その心には余裕と呼べる隙間が空いていてどのような物事が転んで笑って何とかしようとはするのだろうか。

「お前の顔はよく覚えている。また打ちのめされに来たのか。」
以前にも会ったことのあるその大男は薄ら笑いを浮かべながら勇儀の近くまで来ていた。見ている分には特に怖くはない。

二日前の話になる。勇儀は初めてギルド養成所でクエストを受けた時のことだ。討伐のクエストで熊の討伐を受けていた。鋭い爪と力が強いので掠るだけでも致命傷になる可能性は捨てきれない。だからこそ少々報酬金は高めになっている。

勇儀からすればこれ以上絶好の機会というものもないらしく見た瞬間に即決していた。

「いいや。己が目的のためにここまで来た。」
「ほう。それは楽しみにしている。」

六尺はありそうな身長をしているその大男は勇儀の前に立っていた。勇儀も小さい部類ではないはずだがそれでも子供のように見られても仕方がない身長差があった。

「こう久しぶりに見ると何故私が負けたのか分からなくなってきた。」
「何？そのような戯言を。」

「だろうな。でも、あいつに比べたらなんて事も無い。お前は本気でやっていたと思うがあいつは遊んでいた。それが根拠だ。」

ヘラヘラと笑っているだけのようにも見える表情。だが、絶対にそうではないと確信するほど油断のない目をしている。大男はそれを見落とした。

「そんな奴は見たこともない。虚言は程々にしろ。」
「試してみるといい。」

力だけでは勝てない相手ではあるがそれで良い。鬼としての種族の特徴を青年によって失われたがそれと同時に遊びを取り入れるこ

とを覚えた。正確には遊びではなくて遊び心、要は回り道を事前に作っておいた。

大男は左手の人差し指で出す場所を指定している。そして右腕は体に絡ませるようにしている。前回と特に構え方を変えていない勇儀は周りからはきつと戦意がないと思われるのだろう。それもそのはず。手足の力を抜いた勇儀はあらゆる所をふらふらとさせている。隙というものがまるでない。それだけは感じたのか慎重に近づいて拳の当たる距離まで来た時、仕掛けた。

大男の右腕の拳が指定した通りに勇儀の頬を狙っていた。

だが、当たる事はない。勇儀の左手の中に吸い込まれていた。

その場で何が起こったのかは全くと言って分からない。何をしていたのかも何もかも。

「最初からこうすれば良かったか。」

勇儀は満足そうな表情をしているだけだった。よほど嬉しかったのかと言うよりは安堵の方が強いのかかもしれない。

「この程度で何を感じたというのだ。」

拳を止められた大男でも目の前の勇儀の異常性にはどうしても賛同できなかつたらしい。

「分かる奴には分かるだろうな。制限を突破する事が感じるその解放感を。」

「好き勝手言えればいい。」

ぐらっ、としたその体を訳もわからずに止める。そこで鳩尾に一撃を受けた大男はその強烈な一撃に足や手の力が抜けてしまった。立ち上がるのも大変だと思えてくる。

「ひどい様だな。ここで身を引くなら私は何もしない。もし向かってくると言うなら、手加減はしない。」

両膝に両手を乗せている大男からすれば目の前にいる赤い角をしているその女性は脅威でしかなかった。空を見上げるようにその人の表情を眺めていた。どちらでもない顔をしている。

「命の保証はない。」

決断をしない大男に一喝入れた勇儀。その声に反応するように体

をビクつかせている身長に似合わないほど態度を小さくしている。勇儀は見えていて少し可哀想に思えてきたのかそのような表情をしている。

「分かった。投降する。」

力なく背中から倒れた大男。勇儀は仕方がなく手を出す事にした。「ほら、立て。手貸してやるから。」

左手を差し伸ばした勇儀。それを掴もうと大男も手を伸ばしていた。強い握力で握り合ったその手に導かれて大男は何とか立ち上がる。

「みつともない姿を見せた。」

「いいや、私が最初だ。これで一勝一敗という事だ。続きはまた後でやろうぜ。」

力強い握手をした二人はお互いに背を向けあう形でその場からいなくなった

第94話

もう慣れてきた頃合いだろうか。幻想郷から連れ出された七人はブリタニア王国の兵士として過ごすようになってから三週間が経っていた。ある人は自分の強さを求める。またある人は裏側でルピを荒稼ぎしていた。そしてある人達は王国での買い物を楽しもうとしていた。

「で、私と行きたいという事ね。」

黒髪を一つにまとめているだけの簡素な髪型をしている少女、博麗霊夢はいい加減薄い茶色の服装に嫌気がさしていた。だが、買うためのルピもなければ何もするような事は出来なかった。一人で出かける気も起きない為に誰かから誘われるのを待っていた。

「そうです。行きましょう。」

緑色の髪を以前よりも短くしていた少女、東風谷 早苗は可愛い服装を求めていた。少女としていつまでもその服装でいるのは少し気が進まないらしい。だが、道が分からないのではいく場所も見つからないので誰かと行きたいと願っていた。

「良いわよ。さっさと行きましょう。」

スタスタと歩いて兵士の寝泊まりしている建物から外へと出る霊夢。それを急な事に驚きながら小走りに霊夢の背中を早苗は追っていた。

外は随分と明るく感じる日中だった。しかしこれから太陽が落ちていくようなのでこれからは暗くなっていく一方なのだろう。人通りは少ない訳ではないが多いと言うには足りないような気がするくらいでそこそこ賑やかな雰囲気があった。穏やかな風と心地いい声が聞こえてくるそんな環境だった。そんな中であまり周りに溶け込んだ服装で少女二人は王国の街中を歩いていた。

「アンタは何が欲しいのよ。」

「服装を変えたいんです。」

理由は言わなくても分かるだろう。

「そうね。そうなるのが必然だわ。」

「ですが足りないのはわかっています。75ルピでどれまで買えるのか見てみたかったです。」

終始、調子の悪そうにしている早苗は小さな声で霊夢と話していた。一体何が言いたいのか、色々と考えをしてみた霊夢は何が目的なのかは全く分からなかった。そして明白に考えるのはやめた。

「二人で行けば良いじゃない。それとも青年と一緒に行きかけたけど仕方なくなの。」

「いえいえ。そんな事はありませんよ。」

「そう。アンタはああ言う感じの世話のかかるのは好きそうよね。」

含みのある笑い方をしてしている霊夢は早苗の前を歩いていて表情は全ては読み取れなかったがそんな口角の上がり方をしていた。不審に感じた早苗だがそれよりもいじられた内容の方が気になるらしい。

「あの人、神奈子様も諏訪子様にも敬意を払ったところを見たことはありません。来てもらっても困ります。」

「困るわね。で、アンタの気持ちはどうなのかしら。一番やる気があるのはアンタらしいわね。」

ふふつ、と笑っている霊夢。どうしようもなくなった早苗は仕方なくなつて何も話せなくなつていた。霊夢もこちら辺で早苗をいじるのは辞めるつもりらしくスタスタと無言で歩いていった。早苗はその後ろを眺めながら少しだけ考えていたこともある。しかし他愛もない事であり叶うと思つてもいない。どれだけ願おうともどうなる事でもない。

「なんでこんなに高いのかしらね。」

霊夢は少し商人を睨みつけながら悪態をついていた。所持金の少ない二人にとってはその金額というのは死活問題という事である。つまり二人の持ちルピを合わせても到底及ばない値がつけられていると言う事である。

「そう言うなら買わなくていいんだ。冷やかしながら帰りな。」

霊夢と同じく悪態をつく商人にしても売る気があるのか全く分からないその人はギラリとした目で二人を見ていた。正しく霊夢の今

の態度を鏡で映しているだけのそんな表情をしている。

「幾ら何でも高過ぎでしょ。少しくらいは下げなさいよ。」

「それでこの街を渡り歩けると思ったら大間違いだ。嬢ちゃん。悪い事は言わない。此処らへんで帰った方が身のためだ。」

「そう言える根拠は何処にあると言うのよ。」

狂犬のように噛み付いた霊夢。それを横目でどうしようか迷っている早苗はオロオロと自信のない様子であるのには間違いなかった。しかしそのまま許されることもなく霊夢にきつい言葉をかけられる。

「どう思う?こんな事を言っているわけだけど。」

「は、はい。そうですね。」

一瞬手間取った早苗の右腕を引っ張り出して強引に連れ出すと王国の住民の中を掻い潜っていく。何が起こったのかは全く分からない。

「アンタね、しつかりなさい。そんなんじゃ帰らせるわよ。」

「それだけは辞めてください。」

「あ、そう。500ルピなんて高いと思わない?どうやって買え、と。」

「それならクエストを受けて稼ぐしかなさそうです。」

「そうなるでしょうね。こうなったら一気に稼ぐわよ。」

霊夢が急に意気込んだのでその熱にやられたのか早苗もいつも通りの元気を取り戻していた。

「分かりました。早速行ってみましょう。」

「行動が早いわね。まあ良いわ。さっさと終わらせるわよ。」

霊夢は人の中を強引に突き進む。来た道に戻るだけ、そしてやれる事は何でも挑戦するつもりなのだろう。

第95話

深い森の奥。

その奥にはどうやら魔物が住んでいると言うことでクエストを依頼を受けた三人がいた。その人達はまだまだ名の知られていない人達であり、ある人によって簡単なクエストがなくなっただけにこのような危険なものしか無くなっていた。ギルド養成所の職員としては大変申し訳ないと思っっているのだろうが青年によって導かれている事に気づくのはまた後の話である。

「一旦休憩しましょう。」

銀色の短めな髪をしているメイドが前を歩いているある姉妹に話しかけていた。ここまで随分と脚を使って歩いていたのとどのような魔物と出くわすかは全くの未知数なので此処で休んでおくつもりなのだろう。

「分かったわ。」

優しそうな瞳と幼い顔立ちをしている青い髪をした少女はゆつくりと立ち振る舞いでメイドの言う事に耳を傾けていた。幻想郷から連れ出された紅魔館の主人であるレミリア スカーレットは近くに休む事の出来そうな場所を探していた。しかし周りは木ばかりなのでもたれかかる事しか出来ないと思われる。

「まだいけるよ。」

金色の髪で左側にサイドテールをしているレミリア スカーレットの妹であるフランドールは少しだけ状況を理解出来ていないのかそんな事を言っていた。実際のところ、そこまで疲れているような様子はなく実力も姉よりも高いことからの発言だと思われる。子供らしいところから始めてのところで気分が上がっているだけと思われる。

「此処に居る以上は生き残る必要があります。例えば今日は勝っても次の日に負けてはいけません。なのでゆっくりと歩んでいきましよう。」

「今は咲夜の言うことを守っていれば良いわ。それとね、フラン。貴

女に足りないのはそういう目の前のことしか見ていないことよ。」
「分かったわ。」

二人には対抗できないフランドールはその場は渋々ではあるが言葉に甘える事にした。別に本意ではないので不満そうな表情はしているが言い分も理解していない訳ではないようで反論する気は無いのだろう。

「さて、お嬢様。周りに休憩できそうな場所はありませんがどうなされますか。」

「マツトがあれば敷いて欲しいけれど持っていないわよね。」

レミリアは咲夜に申し訳なきように聞いていた。確実に上ではないと知っているのも何とも言えない態度をしている。

「はい。そのような物は持ち合わせておりません。」

同じく申し訳なきようにしている咲夜。そこまで気を落とす必要はないのだろうがお嬢様に答えられない今の自分が恥ずかしくて仕方がないと言ったところだと思われる。本当はそこまで気にする事でもない。

「仕方ないわよ。木でも使いましょう。」

フランドールの提案に二人は賛成する事にした。と言うよりかはそれしか方法がないと思っただけである。

「それにしてもどうしてこんなに報酬が高いのかしら。」

「どうやら簡単なクエストがなくなったので少しでも高くしないとやってくれる人がいないのだそうです。それと緊急性のあるものらしいです。」

レミリアの質問に簡単に答えた咲夜。確かに魔物とは言うが一匹に対して5000ルピの報酬というのはどのような計算をしたのか全く分からない。

「どうしてこうなったのかしら。」

レミリアが地面に座り込んで周りを警戒している咲夜に聞いていた。

「それはですね、」

話は少し前に戻る。

日の登りそうなそんな時間、正に朝飯前の時間帯にギルド養成所を訪れた咲夜は小遣い稼ぎ程度に出来るクエストを探していた。別に困窮していると言う訳ではないがこれから三人分の装備等を買えようと思うとそれなりの金額は必要だと咲夜が考えているだけである。

しかし、掲示板にはクエスト内容を示す紙が十枚以下しかなかった。何があったのかと内容をよく見ると高額な報酬のクエストしかなかった。どうやら王国の方から出されているクエストしかないようである。その期間も多岐に渡る。咲夜はじっくりと内容と報酬を見比べていたところで職員と思わしき人が近くに寄ってきた。

「本当に申し訳ありません。民間から出されているクエストは全部なくなってしまうました。ご迷惑をかけています。」

平謝りしている女性の職人に一瞬困惑した咲夜は頭を上げるように言った。

「それで今は高額で難しいクエストしかないと言うことね。」

「そうです。申し訳ありませんがまた別の機会にお越しく下さい。」

職員は再度頭を下げる。それだけその気持ちが出しているのだがその理由や根拠となるものは何も分からなかった。

「少し聞きたいのですが、誰がこのような状況を作ったのですか。」

「黒髪の青年です。一日に十五から二十個はクエストを受領していました。その結果がこのような状況になってしまいました。」

「そう言うことね。少し考えさせて。」

一旦をここから離れた咲夜は何か聞いた事のある特徴であり何処かで聞いた事のあると思っていた。

面倒な事であるのは間違いないがだからと言ってやらないわけにもいかない。こちらには後二週間程度で出る必要がある。それまでにはしつかりとやっておく必要がある。

「好都合ね。」

キリツ、とした目つきで自信有り気と言った咲夜は有無を言わせぬ勢いで一枚のクエストの内容が書かれている紙を掲示板から取る。

「今から行ってくるわ。」

「お気をつけて。」

職員の方も気が動転しているのか止めるような事はしなかった。本来なら名の知らない人にあのようなクエストは受けさせないが今回ばかりはどうしてもそのようにはうまくいかなかった。

「と言ったところですよ。」

「貴女も随分と青年みたいな事をするようになったのね。感心しないわよ。」

咲夜の話聞いていたレミリアはそのように答えた。決して仲のいいとは言えない仲なのでどちらかと言えばに欲しくないと言うのがレミリアの本心なのだろう。

「多少強引なのですがその点に関しては目を瞑ってください。早くやっておく必要があります。」

「そうですね。早めに行きましょう。時は有限よ。」

レミリアはそう言うのと立ち上がっていた。そして隣で軽く目を閉じて休憩をしていたフランドールを起こして此処からの道を歩いて行く事にした。

第96話

夢になんて思わなかった。そんな日々が続くはずの新たな世界での潜入はある青年の指示によって安全なものへと変わっていた。しかし全ての危険を回避させることができるのかと言われるとそれは全くと言って違う話である。仕方がないが超えていく必要があるものもある。

鬱蒼とした視界の通りにくい森の中を三人は歩いていた。フランドールは眠たそうな顔をしているが他の二人が支えているので全くと言って危険な事はなかった。しかしどうしてこうなったのかは子供らしい理由があると思われる。魚で言えばマグロが一旦止まるとどうなるかと言うものと同意義だとお漏れる。

「それにしても何処から現れるのかは全く分かりませんね。」

「そうね。まずどのような魔物なのかも知らないわね。」

毒を吐くようにレミリアは一言余分なものを付け加えた。それを聞いた咲夜はすぐに謝り、クエストの内容が書かれている紙を見せながら説明を始めた。

「背の低くて四本足で尻尾があるようです。噛み付くといった行動を取るようです。」

咲夜の説明を聞いたレミリアはふーん、と声を出すだけで何か驚いたり、感心するような反応を見せようとはしなかった。そうなる理由は分からないがレミリアの中で落胆があったのかもしれない。思っていた魔物とは違うと言ったそう言う感じだ。

「気を引き締めていきましよう。」

「ええ。分かっているわよ。」

レミリアはその言葉の通りに理解していた、理解しているつもりでいた。かさつ、と草むらから音がした左横から今回の目的らしきものが現れた。咲夜は自身の能力で時間を止めて避けていた。咄嗟の判断にしては随分と悠長な気もしている。それほどに自分の能力には自信があると言ったところだろうか。

対してレミリアは妹であるフランドールを庇ったので傷は負って

いないがいきなり不利になっている事には変わりなかった。地面に伏しているがいつも通りの雰囲気だけは存在していた。

「咲夜にはフランを任せたわ。」

「分かりました。」

まだ眠気が取りきれしていない妹を戦わせまいとする姉としての威厳とある条件によって妹の持っている能力を使わせないとしているその複雑な発言には何の戸惑いもなく咲夜は答えていた。素早く距離を取るとレミリアの後ろに立っていた。

「もしもの時は頼んだわよ。」

レミリアは後ろにいる咲夜に背中を預ける。それこそが信頼の証とも言える。何年の付き合いであるのか数えてもいないが子供の頃から見ているのには変わりなかった。そこから出てくる信頼なだろう。

「援護くらいしませんが期待はしないでください。」

と言う咲夜だがその手の中にはしっかりとナイフを握っていた。もう任せる事しかなかったレミリアは自身の魔力で作り上げたグングニルを右手に持ってから両手で構える。赤く発光しているこの槍はレミリアにしか扱う事はできなかった。

目の前にはトカゲのような見た目をしている正しく先ほどの咲夜の説明通りだった。薄い茶色で固そうな鱗を纏っている魔物はその低い身丈を利用して下から這い寄ってきた。その速度と不規則な動き方は比にするものではなくレミリアは対応に遅れた。それは正しく致命傷とも言える。

一回刺してみたグングニルは見事に鱗にかするような形で避けられて下から襲いかかってきていた。口が大きく開く。レミリア派の一瞬だけだが嫌な予感と何かから解放されるものを感じた。その出どころは全く分からないが何も無い根拠である事には違いない。

実際のところレミリアに危害が加わる事はなかった。それは後ろを任せていた咲夜のナイフが大きく開いていた魔物の口の中に入っていたからである。一瞬で何が起こったのか分からなくなっていた魔物はその場でのたうち回っていた。そしてあつけないほどにレミリア

のグングニルの一撃で葬られた。

その時に発せられた奇声は耳を塞ぎたくなくなるほどの高音であった。キシヤー、といった鳴き声というところだろうか。

「死んだのね。」

脳天を貫かれた魔物は本当に呆気なくその場から動けずにいた。

「お怪我はありませんでしたか。」

「全くないわよ。任せてよかったわ。」

レミリアは特に後ろを見る事はなかったがどうやら満足そうな表情は浮かべていると思われる。それぐらいの事はよく分かっていたので咲夜は何かいようとはしなかった。

「帰りましょうか。」

「そうね。帰りましょう。」

レミリアのグングニルが貫いた頭と尻尾を持ち帰る。いつのまにか終わっていたフランドールは帰っても不機嫌である事には変わりなかったが時期や運が悪かったとしか言いようがなかった。

その日の夜。咲夜はクエストの報酬で食材を買っていた帰り。ある男に話しかけられた。

「調子はどうだ。」

黒髪で後ろに結んだ髪を垂らしている青年は建物の間で壁にもたれかかっていた。どうやら来るのを待っていたらしい。

「おかげさまで今日は助かったわよ。でも、人を困らせるのは褒められないわよ。」

「それは言っではいけない。して、期日も近くなっているがどうだ。」
「装備等の話よね。着々と進んでいるわよ。」

「そうか。して、あの二人の世話を任せているが負担に思っていたりはしないか。」

「別に今の所はそう思っていないわ。ところでこれから仕事でもするのかしら。」

「人に言えるような事はしていない。して、どうしてそう思う。」
「血の匂いがするわよ。それと私と同種に思えるのよ。」

「そうか。勝手にするが良い。」

青年はぶつきら棒に答えていた。が、別に機嫌が悪いということではなく偶にそんな反応を見せるだけである。

「そう。別に答えなくても良いのだけど手は汚して欲しくはないわよ。」

咲夜は心配そうな声で青年に話しかけていた。しかし、その忠告はもう遅かった。

「そうか。此方ももしもの時に備えて準備はしている。」

踵を返して建物の中に入っていく青年はその闇の中へと消えていった。薄気味悪いので入ろうとは思わないが少しだけ興味が湧いたらしい。しかし今は二人のことが心配なので咲夜が入るのはまた後の話になるだろう。

第97話

躊躇いの中の譲歩というのはあまり良くない。それが正しいか間違っているかを感知する理性が揺らいでいる。その状態では何をしようとも何も上手くはいかないが時間だけが過ぎていく。しかし、経験と情報から一步下がって見てみた同じ状況は何もかもが大きく変わっている事だろう。

黒髪の後ろに結んだ髪のある青年は青い礼服のような見た目の服に着替えて拳には赤色の装備をつけてある場所へと来ていた。ブリタニア王国の中心に位置する宮殿に住んでいる国王が直々に呼び出したので行かない訳にはいかなと言ったところだろう。しかし、そのなるまでの努力という名の遠回りな人助けは誰も知らないはずだ。

全ては王国内の動き方から予想した国王が相当な手練れだと感じたのか直々に呼び出されたという経緯だろうか。青年は宮殿へと歩いて進んでいる間に恐らくこうだろうと簡単な予想を立ててみた。恐らくでしかないためにどのようになればいいのかは全く分からないので青年は深くは考えておかない事にした。どうしても気になることと言えば何処からそのような噂が漏れていたのかということである。

「お勤めご苦労。して、国王より呼び出された者だが入ってもいいか。」

宮殿の門の前、護衛と思われる男性が二人立っていた。槍を持ち厳つい顔つきをしているが青年は特に気にする事はなく中へと入っていくとしていた。何が起こったのかは全くと言って分かっていないがすんなりと通してくれた。

流石は基本的にはどのような理由でも通さないとこころであるが国王の命令には敵わないと言ったところだろうか。宮殿での身分の差を目の当たりにした青年はその中へと入っていった。

その中は庭というものはないが建物の大きさは悠然としている。高さを比べるなら紅魔館よりかは遥かに高い。五階建てぐらいだろうと低めに予想した青年は真っ直ぐに敷かれた細かい石で作られた

道を歩いていく。その間は特に音もなく誰かの気配もない為に不審に思えた。何が起ころうとしているのかは見なくても分かる。もう既に息を潜めるように王宮内にいると思われる。

青年は扉の取っ手を掴んで少しタイミングを遅らせてから自分側に開けて中へと入り込んだ。

刹那、横槍を入れられた青年は開けた扉を蹴り飛ばして槍を折る。しかしそれだけは終わらなかった。

再度反対方向から飛んできた槍に素早く反応して蹴り上げた脚を下げた。その上を槍は通り抜けていく。その空振りを起こさせたという反応をしている間に中に入り込むと剣は抜かずに構えていた。

「俺は反逆を起こしにきたのではない。」

青年は軽くそのように答えていた。

「どうぞお通りください。」

国王の命令でしていたと思われる二人はその場で一步退いて元の役職である門番の役目に戻ったと思われる。

宮殿の大広間であり謁見の間であると思われるこの場所は上から小さな赤い旗が幾つも飾れている。紋章はライオンが右手に剣を垂直に持っているそんなマークが施されている。黄色を基調とした明るい見た目と潔白を意味する白色のカーペットが敷かれている。その先で待ち構えるのは赤色の背もたれの無駄に高い椅子に腰掛けている男性だ。その人こそが国王である。

青年は一度立ち止まって周りを見渡すとゆっくりと白色のカーペットを歩いていく。ある程度行けば止めてくれるので反抗をしなければ何も問題はない。それどころか円滑に物事は進んでいくと思われる。

「おはようございます。この度はこんな私をお招きいただき有難うございます。」

「堅苦しい挨拶は抜きじや。貴殿の最近の活躍はよく知っている。そこで任せてみたい仕事がある。」

国王はそのように話した。歳としてはそこまですべていいと思いが長年の余裕というのか風格のようなものがある。

「それは魔王の討伐でしょうか。」

青年はそのように話を始めた。

「そうじゃ。貴殿には特に説明はいらんようじゃ。ならば、一人で行ってくるといい。」

「私には仲間が居ます。せめてその人達といかせてはくれませんか。」
「そうか。それならある試験を受けてもらおう。貴殿が仲間だと認めらるならそれなりの腕は持っているかと予想する。みすみすここで失う訳にいかんのじゃ。」

そこで言葉を途切れさせて国王は考えていた。青年はその間は何も話さずに相手の出方を冷静に見定めていた。面倒な事になろうがそれは仕方がないので何も言わない事にした。

「演習場で決闘をしてみようのじゃ。実力を見定める為にも少し不利な対面なるが何とかやってくれるじゃろ。」

手配しろ、と大きな声で部下達に命令した国王は少しだけ笑っていた。何を持ってそのような笑みを出したのかは分かっていないが何か企んでいる事は青年は知っていた。そんな表情をしている。

「分かりました。国王の期待に応えられるように善処します。」

「その調子じゃ。では今から演習場へと向かうのじゃ。ついて参れ。」
国王がそう言うので青年は素早く立ち上がり国王の近くへと寄っていく。基本的には守るべき立場にある兵士だが今回は動きはなかった。出ようと思ったところで青年が立ち止まるからである。演習場というのは宮殿の西側に位置する場所では此処からは一直線に通じているところだろう。青年はそう思つて国王の後ろを歩いていく。背中を見せるとはどれだけの信頼を持っているのかと思うが実力はないとは言えないので宮殿で支えている兵士も下手に邪魔はできないのである。

「わしはシャルロット・A・ベヒモスじゃ。気軽にベヒモスと呼んでくれて構わない。」

「私にはまだそのように親しく呼ぶ権利はありません。せめて国王に認められてからにしたいです。」

「そうかそうか。そう言うのなら仕方ないのじゃ。こちらの準備が済

み次第順次始めていく。しばし待つのじゃ。」

ベヒモス国王はそう述べるとスタスタと自分専用の椅子を腰掛けると日差しを避けるための傘のような大きな葉を持つ女性が近くに寄ってきていた。王なのでそのくらいの待遇の差があっても仕方ないと思つた。

第98話

周りには各職業の宿舎があり何処からでも見る事は出来る。まるで闘技場の参加者のような気分になった青年はこれから起こり得ることを考えながらその場に佇む事数分。呼び出されたような気分になってふと意識を現世に戻した。急に重たくなった体がその周りに起こっている音や景色を蘇らせた。

「用意は済んだ。貴殿が右手を上げたら始まる。それまでは絶対に誰も手を出す事はせんのだ。」

国王であるベヒモスが椅子に座りながら偉そうに話していた。実際のところ、反抗する気の起こらなかった青年は仕方ないのでその場から踵を返して離れておく事にした。その近くに腰に何かを携えている剣士と杖を持っている魔術師か回復術師が居る。どちらにしても面倒な事には変わらないが青年はやらなくては出ることはできないので挑戦しなければならなかった。

青年は右腰に携えている剣の柄に触れると右手を上げながら剣を抜いた。瞬時に動き出した二人。青年は冷静に状況を見定めていた。前方から火の玉が飛んでくる。それで後ろにいるのは魔術師であると思えた。簡単な魔術なのでまだ判断はつかない。それと前方から突っ走ってきたのは剣士である。何が起こったのかと言われるとまだ判断は付かない。

青年は先に火の玉を無力させてから剣士の居合にも似た一撃を受け止めていた。この時ばかりは二刀持ちで良かったと思える。相手の攻撃の勢いを利用してその場から離れる青年。それを追いかける剣士。それに合わせて攻撃を仕掛けようとする後衛の人。しかし、完全に動きを封じていた青年は後ろなどを見ていなかった。

剣士にびったりと張り付くことで後ろからの攻撃を避け続ける。もし誤りが起こればどうなるのかは全くわからない。

剣士はそんな事は構う事なく青年に攻撃を仕掛けようとしている。攻撃的なのは別に悪い事ではないがそれがどれだけ協力関係において邪魔になっているのかは判断が出来ないと思われる。それともそ

ここまで信頼関係を築けていないのだろうか。青年は余分な事を考えながら後衛の人に動かさないようにしていた。

「お前、手を抜いているのではないだろうな。」

「いや、そのような事はない。」

青年は余分な会話をしながら右手に持っていた剣を振っていた。黒い刀身で綺麗に磨かれているのでそれなりの愛情を剣に注いでいるのだと思われる。

危なげなく避けようとしていた剣士だったがもう一本潜んでいた事は見えていなかった。まるで影を作っているだけのような動きに惑わされてその場に転んだ。こうなれば青年は二方向からの攻撃の警戒をしないといけない。自分の下と前方からの攻撃だ。

魔術師としてはここで失うのは良くないと考えたのか素早く出せる魔術を使った。先ほど出した火の玉とは違い、鋭い先で貫こうとする氷柱のようなものを一本飛ばしてきた。青年は目の前に倒れている剣士を起こしてその身に隠れていた。剣士の悲痛な叫びが聞こえてくるが青年は状況が状況なので気にしなかった。

演習場で暴れ出した青年は猪でも宿しているかのように猛進をしていた。誰も付いてこれない。

魔術師は素早く魔術を発動させる。軽く出せる火の玉は青年の剣に触れるとふんわりと消えてしまった。まるで吸収しているかのようで何をされたのかは全く分からなかった。その間にも青年との間合いは詰められている。

剣を振るう青年。杖から何か魔術を出そうとするが一切の猶予は残されていないかった。上から振り落とした青年の剣は魔術師の脳天に直撃して押しつぶされるかのようにその場に倒れ込んだ。どうやら躊躇も残されていないかったようだ。

「もう一戦じゃ。」

不敵な笑みをこぼす国王に特に反応を見せなかった青年は次の相手を待ったために歩いて距離を取ろうとしていた。

第99話

こんな事がいつまで続くのだろうか。幻想郷からこちらへと来てからもうそろそろ一ヶ月が過ぎる。それまで何をしようとも関係ないと言えるがそれぞれがどのように過ごしているのかは気になる。何処まで干渉するのは人の自由ではあるがそれでも何ともならないところもある。考えていたところでそれが伝わることもなければ伝える気もないのなら何も始まらない。

「貴様が王国内で活躍したと言われている実力者か。それにしても王も酷い事をしてくれる。」

青年は後ろから聞こえたその声に首だけで振り向いていた。別に来ていたことに気づいていないと言う事ではなかったがどうやらまた違う物があると思われる。

「そうか。」

何処か他人事のように答える青年に槍を持っているその人は少しだけ戸惑ったと思われる。青年が完全に振り向くまで何も話す事はなかった。

青色の鎧で竜を象った槍を持っているその人は槍の蕪巻のところを持って地面に穂先を向けていた。いや、刺しこんでいたようにも見える。素槍でシンプルな形をしている。顔の部分は覆い隠されているが目は見えていた。

「俺の一槍を受けてみよ！」

相当な自信があると思われる。青年に向けていきなり向けた穂先を垂直に投げつけるかのように振る。間合いなども読み取れていないが何処までやれるのかは知る必要もないのだろう。相当見くびっていた。それだけは言える。

青年は左脇腹を通り抜けて何処かへと行く。槍は簡単に避けられたが湾曲した矢の軌道は読み取れなかった。かなりの距離からの確に射られた矢は当たる事はなかったが近くを通っていた。やはり今回も二人であることには間違いないと思えた。

油断していた、それが青年の率直な感想だった。言葉として口から

出るような気がしないのは確かだが何もかもが侮辱されたような気分になる。青年は左手に持っていた剣を鞘の中に納めていた。そして両手で持っていた。

「さて、いつまで避けられるかな。」

少しだけ余裕そうに話している。青年はそれでも自分の流れは忘れないようにしていた。

「短時間で済ませる。まだ先はあるのだろう。」

青年は答えていた。まるで聞いていないかのように身勝手なその立ち振る舞いには敬意さえ感じる。

「ああ。ここで終わろうともどうなるうとも関係ない。国王には認められる事はないだろう。」

「そうか。」

抑揚のない単純な声が辺りには響いていた。と言っても演習場の広さでは誰にも聞こえる事はなく二人の間での会話でしかない。

「いつまでその余裕があるのかな。」

槍使いは挑発に言っているが何をしたいのかは全くと言って分かっていない。

青年は目を見開いた。突如として舞い出した槍使いはクルクルと槍を回していた。どうやらその感じの戦法であるらしい。相手に攻撃させるタイミングを分からせない。そしてその間に矢が飛んでくる。目の前と周りを同時に警戒していないといけなかった。それを瞬時に理解した青年はその場からゆっくりと離れていた。まるで囲まれた気分になっている青年は何処から飛んでくるのかは分からない矢を警戒していた。

槍使いからすればそのような都合な事は無いわけで幾らでも待ち続けるつもりなのだろう。それがどれだけの時間を有しようとも勝てると思っているなら続ける。もう其処は決闘と言う名の付いているだけの処刑であり、同時に見せしめでもあった。どうにかしないとどうしようもない。

「さあ、早めに降伏でもしたらどうだ。」

「そうか。ならば、俺はこうさせてもらう。」

青年は走り出していた。降伏するなんて言う選択肢は元からなく青年は頭の中で何かを考えていたと思われる。何かがあるのかと思われるがもう既に何が起きているのかは言うまでもなく槍使いにも理解出来ていた。まさかの突撃である。愚鈍な判断にどうしようもなくなくなった槍使いは少しだけ槍の回転の速度を弱めた。

青年は鞘から引き抜いた剣で槍の動きを完全に止めると上から逆手持ちにしていた剣を鎧の頭部と胴体部の隙間を狙っていた。突き刺されば致命傷なんていう話ではないほどだった。

それでも防ごうとする人はいない訳でもない。後ろでずっと潜伏していた弓兵が威嚇とばかりに素早く射っていた。多分だが青年が動き出していた頃にはもう弓を引いていたと思われる。青年も別に見えていなかった訳でもなかったので額にかするその感覚も全て楽しむことにした。そうでもしていないとこの先ではやっていけないと思われる。

青年は取り敢えず槍使いを蹴り飛ばしておいた。嫌な隙を突かれるのも癪だが警戒する人を減らすのには丁度いい。ついでに倒れてしまったその人に追撃とばかりに頭部の兜の隙間から剣を通しておく。そして寸前で止めておいたのもう何もする気も起きないだろう。勝手な想像だが青年は切っ先を目の近くで止めておいた。

「逃げるなら今のうちだ。」

青年は下に寝転んでいる槍使いに聞こえるように囁いた。目の前に剣がありもう少し動いていれば顔面に傷を負わされるどころでは済まなかったのもその場から逃げようとしていた。兜を脱ぐように足と手を使って地面を這う。その後ろ姿を見ながら青年は目の前にいる弓兵の方を見ていた。

青年はどこから来ても良いようにしていたが実際のところどちらに分があるのかと言われると向こうにある。ここからどうにか出来ると思えなかった。相手ももしかするとそのように考えていたのだろう。真っ直ぐな軌道で青年を狙っていた。宮殿から出てきた通路から放たれた矢は青年の前まで一直線に飛んできた。

右腕で剣を動かして矢を軽々しく弾いた青年は目の前にいるはず

の弓兵に向かつて走り出していた。距離にして演習場の縦の三分の一程度はあるが其処まで時間がかかることもなかった。

潜伏している弓兵は今度は軌道を変えていた。何かあるのかと言われると何もないのだろうが先ほどよりかは読み取りにくいと考えていた。

しかし、逆手持ちにしていた青年の持っている剣の刀身に弾かれた矢は全く違う方向へと飛んでいた。もう既に何が起こったのか全く理解出来なかった。そもそも矢を弾くという発想はなかなかない。避けるのが精一杯なところである。

「辞めじゃ。見ていてつまらん。次じゃ次。」

国王は本当に飽きている様子でその場に居た。特に面白くない展開をしているからだろう。青年は自分勝手なその王に敬意を払ったふりをするために一礼だけはしておいた。不満そうにしているここまで戦っていた四人の気持ちなど全く知らないのだろう。

第100話

「分かりました。」

初めて話した弓兵は声の質から女性だと感じた。しなやかな軌道はそのような体から生まれるのだろう。そんな事を考えていた青年は剣を鞘の中に納めてしばらく何もしなかった。何も目的が見えてこないのもそうなるのは仕方ない。

「貴殿にはまだまだ残っておる。そちらを先に片付けるのが良からう。」

国王は得意気に話していた。話を聞くには飽きていたのは自分の用意した方であり情けないと思えたのだろうか。それならまた違う視点から考えてみるのが一番良いと思えた。

「失礼します。」

青年は踵を返して辺りを見回していた。周りには本当に何もなかった。演習場と言われていたが人の気配も何もない。王としての威厳は確かにあるようでこのように見せしめとして場を用意するのが素早かった。きつと頭の悪い奴が変な事をしたと思われるのだろう。別にそのような事はないがあまりにも目立ち過ぎたのかもしれない。青年は軽くそのように考えていた。

「国王様、一つお聞きしたいことがあります。」

首だけを後ろに向けて背中を見せていた一見失礼そうに見える青年だが国王は特に気にしているそぶりは見せなかった。それなりの實力を持つているとは思われているのだろう。青年は本当に失礼だと周りが思うような事をしていた。

「何じゃ?」

「此処からは期待出来ますか。」

「正直分からのじゃ。貴殿の本当の實力というのが全く見通せないんじゃ。」

国王も珍しく困っていると思われる。日除け用の大きな葉を持っている女性が小刻みに震えていた。怒ると怖いのかそのような雰囲気は周りを見るとあると思われる。だが、青年は気にしない。

「そうですか。」

青年はにっこりと薄い笑みをこぼしておいてその場から立ち去った。もう目の前には二人立っていた。見た目からして武闘家と霊媒師といったところだろうか。面倒な組合せであるのには変わりない。霊夢や早苗を入れさせた霊媒師だが本来は味方の悪いものの除霊や相手に悪霊を取り憑かせる事を目的としている。死体を従えさせたりすることも可能となるがそれはまた別の職業として分類分けされている。体で勝負する武闘家にとってそれ自体の強化をするということは何を示しているのかは全くもって未知数となる。

青年は兎に角後ろにいる霊媒師を何とかしたいがその前に壁のように立っている人を倒す必要があった。何も持たない最低限の装備しかないので身軽さは誰よりもある。それはある意味何とか通り抜けたとして背後から攻撃を受ける可能性がある事を示していた。「ほう。誰かと思えば弱そうな見た目をしている。」

武闘家として青年の目の前に現れた大男はブーツと固そうなパンツだけ履いている。手にはグローブを着けている。青年からすれば見上げるほどの身長差であることには変わりない。しかし負けるのかと言われるとそれはまた違う話である。

「そうか。見た目で人を判断しないほうがいいとだけ言っておく。」

青年はそんな事を気にするそぶりはなさそうだった。それよりも何となくだが期待しているような純粋な目をしていた。何をしたいかと聞かれるとまた違う話になると思う。まさかの反応にどのようなにして良いのか分からなくなったのか特に話すことはなかった。

「して、何か気になる事はないか。」

「何かあると申すか。」

「勝負はもう始まっている。来るなら早く来い。」

何か見覚えはあるのか何となくだが分かっていたのだろうか。青年には勝てると思っているのだろうか。

「そんな冗談はよせ。剣士であろう。仕方ないから抜くまで待ってやろう。」

大男はそんな風に答えた。青年は気にする事なく先を急いでいた。

そこから何が起こるのかは全く予想つかないがそれは大男からすれば未知数の次元となるだろう。

青年は地面を蹴りだすと左脚でステップを踏んで右腕を引き寄せながら真つ直ぐに拳を貫いた。大男には直接胴体には届かなかったが手で受けるのがやつと言ったところだろう。そして何かを悟ったのか大男も構え始めていた。青年の実力を見くびっていたとすぐに改めたのだろう。とは言え、青年も実力は見せていない。そこは二人の中での駆け引きともいえよう。

「剣士にしては中々見ぬ実力だ。何処でそんな事を学んだ。」

大男は興味があるのか聞いていた。色々とその興味は尽きないところなのだろう。

「そうか。これは独学だ。習得するのは面倒だった。」

青年は軽く答えていた。何も考えていないようで何をしていたのかは何も話さない。話す気もないのだろう。

「ふむ。これは興味深い。ならば、私も盗んでみるとしよう。」

「そうか。」

青年は一步下がって相手の動きを見ていた。そして冷静に何処から来るのかを見ていた。目の前で指さしをしている一見愚直な行動にも何も反応は見せなかった。意識を全体に行き渡らせて目の前だけに集中しない事にした。

大男は右腕を体に引き寄せてから思い切り振り抜く。岩を砕くが如く、それぐらいの気力を持ち合わせていたが青年の前には全くの無力だった。真正面から受け止めた青年な右拳は大男の一振りを原動力として回し蹴りを見舞う。正に同じ、いや確実に優っている一撃を与えた青年はスタツ、と着地していた。

対して大男はまさかの一撃に全く予想していなかったのか脇腹を抑えて地面に片膝を付けていた。どうやら霊媒師によつて随分と取り憑かれているらしい。耐久性が向上しているのは目に見えていた。

「やりおる。だが、それで勝てると思うのは間違っている。」

「そうか。して、どうして地面を手で触れた。」

「そうだったな。何を考えていたのかわからないものだ。」

青年はゆつくりと構えていた。一般的な構え方とは違い、左腕は垂らしているが直線を描いている。そして右腕は顔の前にして構えていた。大男は左手の人差し指で青年の顔面を指していた。堂々とした挑発だが青年は乗る事はないのはよく分かっている。その指には力はなかった。青年は素早く走りだすと大男の間合いの中へと入り込んだ。

夢にも思わなかったのだろう。

そこから大きく振り上げられた左脚が大男の顔面を的確にめり込ませていた。正にありえないと言った表情を浮かべている事だろう。

青年は膝を使って着地する衝撃を最小限にしていた。まるで何が起こったのかは全く分かったものではなかった。霊媒師も両手を上げて降参を示していた。目の前の光景がまるで理解出来なかったのだろう。それでもなければ恐れた表情を浮かべることもなくそんな馬鹿げた行動を国王の前で見せることもなかった。

大男は顔面を蹴られて意識が飛んでしまったのか地面で伸びていた。地獄絵図と説明するのが一番理解されやすい事だろう。

第101話

外は晴れていて何もない空からは太陽の光がこれでもかと降り注いでいる。青い正装をして赤い手の装備をつけている腰に四本の剣を携えた黒髪の青年はその光に片目を閉じながら何かを考えているようにその場で立ち止まっていた。何が起こったのかも全くわからないが何をしたいのかも理解される事はないのだろう。

「呆気ないのじゃ。最後のを出せ。」

ガムでもあればくちやくちやと行儀悪く噛んでいると思われる態度で国王は片膝を椅子の手すりに乗せながら脚を組んでいた。国としては最大の戦力で挑んでいるはずだがそれでも一人で片付けていくのでどうしても自信を失ってしまうとすれば理解はできる。しかし、こう腹を立てているだけならば理不尽としか言いようがない。何となくそう思えた。

「はい、かしこまりました。」

国王の右腕である女性が素早く対応に回っていた。一番最後の兵器として眠っている。その肉体は鋼にも勝るとも劣らないものでその剣の腕は達人とも言える。そして力は武闘家にも勝るとされている。そして攻撃的な動きから全てが繰り出される、正しく国の秘密とも言えるだろう。

「今に見ておれ。」

右口角だけを上げて不敵に笑みをこぼすだけの国王を悪人と捉えるか試したくなった、というだけの純粹な気持ちであるだけなのかは人の判断による。しかしながらそれだけで済む話なのかはまた話題の方向性が変わる。

青年はしばらくの時間を自分の中で過ごしていた。恐らくは己との対話の時間に当てていた。穏やかな表情で両目を閉じているだけの青年はそれこそ太陽光で光合成をする植物と何も変わらないと思われる。それ程の精神の深層部まで到達していた青年を今の現実

押し戻したのは言うまでもなく自分だった。

耳から聞こえてくる嫌な重たい音。目で見える鉋物かのような肉体。荒削りの剣のような何かを背負っている怪物。前にも見た事はあるがそれが何かであるのかは全く分からない。しかし国王が本気を出してきたのは言うまでもない。

「して、会話は出来るのだろうか。」

目の前に岩のような存在感のある者が現れていても何も感じていないような青年は上を見上げながらそのように言っていた。どのように説明すれば伝わるのか、それさえも不明。

目を細めてゆっくりと獣へと変えていく青年は左手で抜いた剣を口で啜えると右手も手で抜いてから逆手に持ち替える。啜えていた剣を左手の中に納めると切っ先を下に向けている細い目をした青年がその怪物と対峙していた。一切口を動かす気のなさそうのだがそうでもないといけないような感じがする。そして重心を下へと落として地面に根を這わせる。しっかりとした足取りでその場に立っていた。そして体は空気ののように軽くさせていた。まるで本能で動く獣となった青年はブレない意識の中で戦おうとしていた。

目の前にあった岩はその荒削りの剣のような何かを振りかざしていた。青年は素早い判断で振りかざそうとする前から避けていた。見えていたとしか思えないほど完璧で鮮やかな感じがしていた。それこそ本能がそれを悟ったと言う説明をすると一番じっくり来るかもしれない。

もう人間をやめたような青年にとって何かの言語を話すことも許されなかった。

剣を振るう狂戦士。青年と思われる人間はそれを受け止めていた。逃げられないのではない。それを越えてこそ、そんな風に感じたのだろう。やや低めに振られた剣の上を転がるように体を回転させて地面に降りてから剣を振るう。

その鋼と思われる肉体には通る事はなかった。まるで痛みを感じていないように何の影響もなさそうに青年の方を向いていた。その

場では何が起こったのかは全く分からないが二人は既に自我というのは無くなっていると思える。

青年が剣を振り上げる。その回答を行うように怪物は右手に持つ片手にはかなり大きい荒削りの岩で作られた剣を下方方向に掬い取るように振った。

その下、一気にしやがみ込んで一瞬だけ地に伏せた青年は四肢の力を使って飛び上がる。短距離で行われる捨て身の一撃。腹部の辺りに当たったそれは怪物には多少なり効いたようだ。しかし、多少でしかない。

青年も何かを感じたのか酷く怯えた様子で間合いを開ける。左手を逆手にして前に掲げ、右手の切っ先が地面を指差していた。後戻りも出来ないがそれよりも何が始まるのかも到底理解出来ない。

刹那、怪物の方から攻撃を仕掛けた。逆襲とばかりに足を進めたがある一定のところで止まった。

青年が大きく前へと出ていた。左手を前にして応戦を始めた。上から振られたのと合わさる。その音は軽やかなもので当たっていたのかさえ怪しかった。何が起こったのか見ただけでは何も分からないだろう。

右足を軸に後ろへ振り上げた左足を起動力として半身になりながらも宙へと舞う。そして薄く刃だけを当てるように逆手持ちにしている左手が異様に近くなっていった怪物の胴体に当たる。薄く開いたところから鮮血が滲み出ていた。

そして優しく地面に着地すると音もなく一回転後ろへと下がった。もう既にそれでさえ遅かった。斜め左から怪物の腰を使った一撃が入り込む。相手に痛みという概念はなく押された事や引つ張られた事でしか行動を止める事はできない。

しかし、あまりにも酷なものでどうしようもなかった。何とか受け流そうとはしていたがそれも虚しく終わる。まるで打者が低めの球に必死に捉えて打った時のようにふんわりとした軌道で地面に叩きつけられる。しかし、球のように転がることはなかった。四肢でしっかりと着地して足を伸ばして衝撃を吸収している。

そして青年は何事もなかったかのように立ち上がり、何かあったかのように血迷った行動に出た。止めても無駄だと誰かは言うのだろう。

左足で地面を踏み込んだ後に下から振り上げる。何もかもがもう終わってしまいそうだった。

怪物の脚に突き刺さった剣。後ろからそれを邪魔しそうと振るう荒削りの岩に青年は全体を持っていかれた。辛うじて致命傷は防いだ。

受け身も取れなければ衝撃を何とかしようとしなかった。ただ吹き飛ばされる距離を短くしようと両手、両足の指先や全体を使って耐えている事しかできなかった。

勝敗結果は引き分け。青年の剣が怪物の脚を貫き何とかそこまで持ち込んだ形となった。

第102話

晴空の下、国王であるシャルロット・A・ベヒモスは自ら立ち上がり青年の元へと近づいていた。それこそ華やかな気分をしているその表情で地面に寝転んだ青年の目の前に立っていた。

「君の実力は認めないといけないのじゃ。行って来るが良いのじゃ。」

国王としてはきつとまた違う思惑があったのだろうが精神も身体も擦り切らせた青年にはそこまでは読み取れなかった。

「そうですね。ありがたきお言葉です。」

青年は上を向いていた顔を左横に向けてから両腕を使ってその場から立ち上がっていた。言葉ではそのようなようにしていたがひしひしと口角が震えているのを青年は感じていた。その出所は全くと言って何もわからない。青年が分からなければ周りにいる人は余計にその気持ちを膨らませることだろう。

「貴殿の頑張りは期待しているのじゃ。これでさらばじゃ。」

国王はすぐに何処かへと消えてしまった。まるで死期を悟った猫のように雲隠れをした国王の存在を青年は最後まで気づけなかった。そうなる理由は説明するまでもない。暫く青空を見ていた青年は右手に持っていた剣を胴体部分に当てながら上半身を上げながら周りを見渡す。それから一旦どこから出るのかを迷ってすんなりと立ち上がるとなんとなく目星を付けた目の前の宿舎を指していた。

思いをつぎはぎの状態で体も十分とは言えない状況だが動くしかなかった。やる事も不十分であり、目標も曖昧なもの。何もかも中途半端で何処にもいかない方向で何も起こらなさそうにも思えなかった。

「そうか。俺にもまだやる事がある。」

青年はそう思えた。だからこそ、今が何を起こそうとも関係なかった。

その日の晩。その日の仕事は全て取りやめた。歪みは起こさないようにしているが裏切りと復讐の横行影の世界では異端とされるそ

の行動は正しく相手の行動を起こすための思考をフリーズさせるには十分なわけで青年は手早く終わらせていた。

「紫、俺はまだ力不足だ。だからこそ、何か考えて欲しい事がある。」

「話の展開が読めないわよ。何が起こったのかは説明しなさい。」

「そうか。」

青年は話の経緯を話しておいた。

「そうね。そのまま焦らなくても良いんじゃない。」

「そうか。何をたどってそう考えるに至ったのは聞かないでよくして、俺には何が足りないと思う。」

「人としての性格かしら。貴方に感情なんてあるのか不思議で仕方がないわよ。」

「そうか。考えてみた事もない。俺に足りないのはそんな心の部分なのか。」

「夢とか持っていないでしょう。今では彷徨う死霊と何も変わらないわよ。」

口元を隠してふふふ、と笑うだけの紫に青年は目を向けているだけだった。何も起こそうとしても何も出来ないでは青年自身は何か化ける事もない。

「そうか。」

落胆でしかない。もう何も理解できていない。青年には初めての領域であり今まで目を向けてこなかったところでもある。

「後は貴方に任せるわ。それで期日は何日にするつもり。」

「三日だ。それで俺は突破させる。」

「そんな簡単に終わればそれで良いけど。」

紫にとってそれは難しいだろうと思っていた。そんな簡単なものでもない。そんなことを知らない訳でもない。

第103話

「今日の夜、皆様にご伝えておきたいことがあります。自分の宿舎の部屋にてお待ちください。―管理者より―」

各々が集まり、管理者の能力によってブリタニア王国とも幻想郷とも言えない場所へと飛ばされた七人。少なからずいると思われた青年は姿はなくまた気配もない。完全に話を聞くことは遠慮しているのか、それとも今日のことになった気になっているのか。

「皆さんよく集まってくれたわ。」

扇子で口元を隠した怪しい魅力のある女性は襖を開けて大広間の中へと入ってきていた。ツヤのある金色の長い髪をしていて紫色のドレスを着込んでいる。どこの世界なのかははさておき人とは違うセンスを感じる服装をしていた。

「早急に準備が必要な事が出来たわ。三日後に出発する事になったわよ。」

急な事に驚くのは仕方ないが声には出さずにふとどうして急に話が決まったかを博麗の巫女は聞いていた。

「青年がそのように言ったからよ。」

管理者は軽く答えていた。元々つかみどころのない節があるのでどのような言葉が飛び出そうともあまり驚かれないのだが今回ばかりはそうでもなかったらしい。

「それでこっちの事は何も考えていないわけ。いい加減にしなさいよ。」

「その気持ちも分かるわ。そうなるのも分かっているから青年からは一人10,000ルピずつ配って欲しいと頼まれたわ。それでも文句はあるかしら。」

「その本人がいないのが気になるが何かあったか？」

額にある赤い角が特徴的な鬼は少し穏やかな表情で聞いていた。本人がいない事には少なからず腹を立てていたとしても文句も付けにくい状況となっていた事であり感情を露わに出来なかったのだろう。

「あまり綺麗なお金とは言いにくいそうよ。真相は闇の中に葬りたいよね。」

意外と明るく話す管理者だが周りにはあまりついてきている感じはしなかった。

「どのような事情があるのでしょうか。」

緑色の髪をしている左肩に一房の結んだ髪を乗せている少女は心配そうに聞いていた。気になることは大体合っているが気になることであるのは間違いないらしい。

「私には到底理解出来ない話だわ。」

「案外冷たいのね。貴女。」

「どんなものでも金は金なのよ。それが今更ねじ曲がることはないわよ。」

博麗の巫女はそう叫ぶ。言わんこともわからんでもない。事情は知らないわけだ。

「早めに貰って明日に備えていなさい。」

管理者は手早く炎上する前に話を終わらせた。用がなくなればそうなるのは仕方がない。

「分かったわよ。」

もう仕方がなさそうに答えているだけの博麗の巫女だが何があるのかはやってみないと分かったものではない。

第104話

紫の屋敷での話から三日が経っていた。各々が自分でできる最良の選択を青年から譲り受けた10,000ルピを使って行っていた。誰が正解でどれが不正解なのかの判断はここにはないが最善を尽くしたという言葉に最終的にはたどり着く結果となっていた。

黒い髪を後ろで短めに一本にまとめている博麗 霊夢は袖の広がった赤色の衣服を身に纏い中には白い服を着ていると思われる。下半身も肌を見せない長袖のズボンである。

そして霊夢の競走馬である東風谷早苗は緑色のピツシリとした服装で動きやすさを優先させていたと思われる。安直な対抗意識であるがそれを汚す事はないと思われる。

今回挫折を味わったが心の奥底から湧き上がる高ぶる感情によってここに残ることを決めた星熊 勇儀はきつと多くの苦難があっただろうが持ち前の明るい性格によってその難は逃れていたと思われる。ノースリーブの白色の服装で指から肘までを隠している装備が気になるところだがそのほか特に変わっている様子はなかった。

にとりは特に服装は変えていなかった。自分の発明品でもある服なのでそれなりの自信は持っていたようである。それにしてもどうしても気になるのが背中に背負っているバックだがなんでも入っているので事実上の荷物持ちとして働くことになりそうである。

紅魔館組は特に服装は変えていなかった。と言うよりは光沢のある衣服から新調したと思われる。咲夜には感謝しか浮かんでこないが彼女の分もきつと新調しただけだと思われるが足に付いているナイフの本数は増えていた。

後は青年の到着を待つばかりとなっていたブリタニア王国の最西端にある少し歪んだ場所ではそのような七人が待っていた。主役の登場はいつも遅いと言うがそれにしては何かと遅いと思われる。

「何しているのかしら。良い度胸よね。」

博麗 霊夢は不機嫌につぶやいた。きつと彼女なりに言い出せない皆の鬱憤を晴らしていたと思われる。だが、そう思っていたのは霊

夢ただ一人だけだった。

「気長に待ちましよう。」

「何しているのかしら。」

「何かあるのかな。」

「自由人だね。」

人それぞれ反応は違えど誰も青年のことを汚す人はいなかった。もう慣れていると答えるのが一番わかりやすいと思われる。その点では同じような道を辿っている霊夢には理解できない鏡の領域である事には間違いない。それに気付くのか、気付かないのかはまた後の話になる。

「待たせた。」

声の方向からして明らかに外からだった。上からではなく横から、つまりはブリタニア王国からではなかった。その理由は誰も分からないがそれよりも分からないのは何故そのような場所から現れたのかに限る。だからと言って誰も聞こうとはしなかった。聞くまでもなかった、と言う事だろう。

「まさかまだ稼ごうなんて考えていたのね。」

霊夢は見ただけで状況を理解し、そして冷静に言葉を連ねた。それはまるで予知していた未来だったかのようで必然だったと返されそうな自信のある目つきをしていた。

「夜明け前には帰るつもりだった。予定も守れない俺だが貴方達は付いてきてくれるのだろうか。」

青年は不安そうに聞いていた。

「決まっているじゃない。行くわよ。」

「そうか。」

「早く行つちやいなさい。」

霊夢は手を軽く振って見送っていた。その夫婦漫才が誰の干渉を受けなかった事も知らず。

第105話

雲も少し太陽の光が鬱陶しく感じて妬んでいると思える天候だった。時々、見え隠れする太陽が母なる大地を照らしたりそうでもなかつたりしている。何があつたのかといえれば青年がギルドに報告するまでの時間を待っていた。

先程ブリタニア王国の外から現れた青年は魔物を肩に乗せながらのそのそと歩いていた。ギルド養成所まではそれなりの距離がある。道を間違えてもなければこうも遅くなるようなことはない。

「遅いわね。」

いきなり呟いたのは博麗の巫女だった。今ではそのような面影はなくなっているが元々はそうだった。赤い服装でゆつたりとした服装で袖が広がっている民衆から買うのは所詮はそんなものしかない。「どうやら、料理をしているみたいね。」

空中に浮いているスキマから上半身だけを出しているその人は扇子で口を隠しながらゆつくりとした口調で話していた。何を言いたいのかは全くと言って意味がわからない。

「何を作っているのよ。」

「何も分からないわ。元々分かるような人間でもないでしょう。」

管理者であるその人はとても面倒そうに答える。それを示すかのように目を細めてため息をついていた。

「そうなんだけど。何が違うと思わないかしら。」

「そう言うことは本人に聞きなさい。また来るわ。」

「待ちなさい。と言っても待ちもしないけど。」

霊夢は一旦そう思えたところでもうしばらく時間を待つことにした。そもそも料理なんてどんなことをしているのか。想像もつかない。

それから四半刻が過ぎた。いつまで待たせるんだ、と皆がそれなりに思い始めていた頃、青年はやってきた。8つの不透明な袋を持って。管理者の言っていた通り、料理はしていたのだろうと思える。

「これは持っていてほしい。俺が作った保存食だ。」

青年は特に謝罪の言葉を述べずに素早く皆に配っていた。

「これは、何。」

「肉団子だ。保存用に濃い味になっているが気にしないでくれ。」

「まさかこれを作っていたとは思わなかったけど。美味しいのかしらね。」

「味は保証しない。酢の味だ。」

「つまりは漬物という事ね。」

霊夢は笑いにもならない声を出しながらそう言っていた。正直に言えばどうしてそんなものを作ったのかは全くと言って意味は分かっていない。単純に考えるだけでは全く前には進まない。

「そうだ。では、行こう。」

青年が歩くにしては早いが走るのには遅いような速度で前へと進み出していた。特に誰か送り出してくれるわけでもない。とても寂しいこの雰囲気を感じ払うだった。それに七人は付き合っただけのことにした。

第106話

あくる満月の夜のことだった。俺は仕事を終えて一人で街中を歩いていた。すっかりとした服装というわけではないので酒場に寄る事はなかった。

しかし今日は飲んでみたい気分だったので仕方なくだ。仕方なく酒瓶を一本無駄に買う事にした。別に気分という事ではなかったが虚しい気分であつた。そして薄暗い路地裏と明るい街道の真ん中で俺は飲む事にした。うるさい場所というのは嫌いだが路地裏は身を投じている自分がよく分かっている。だからこそ入ろうとは思わない。

一人孤独に飲む事数分。項垂れていた俺に心配そうな声をかけてくれた女性がいる。その人はアホなのか、と言ってみたかったがそれは心の中にしまっておいた。ふざけているわけでもないので青年はそういう気になれなかつた。

「大丈夫ですか？」

その女性は短い髪をその空気に晒しながら薄く開いているものの宝玉のような目をしていた。髪の色は暗くて見えにくいピンク色と思われる。突っ返しても良かったのかもしれないが俺は言葉を投げ返してみた。

「そういう貴女はここには来たばかりなのか。」

「どうして。」

「こんな俺に話しかけるのは恨みがあるか知らないかだ。」

俺はあまり話さないようにした。王国にとっての汚点とされる浮浪者と話していれば自ずと噂が立つ。これからを案じてみる事にした。

「何も知らないです。一週間しか居なくて、えっと、今日初めて街を歩いたんです。」

女性はどうかやらほとんど初めてであるらしい。王国で一週間過ごすという事はつまり、兵士として訓練を行ったという事である。何をしているのかは知らないが聞く事でもない。

「そうか。俺はまだ優しいが人は間違えるな。その命、消えてしま
う。」

「そ、そんな。私、どうすれば?」

「慌てる事はない。まだやり方はある。」

「何かあるんですか?」

「俺よりも強くなる事だ。そうすれば誰にも負けん。」

俺は適当な事を言っておいた。相手がどの程度の実力があるかは
知らない。だからこそ本当に気にも止めていなかった。

「私、回復術師です。どうしたらいいですか?」

「そうか。それは済まなかった。そうなると問題外だ。」

回復術師と言うのは回復を主とした後衛向きの職業である。攻撃
手段というのが何もないのが基本で攻撃は本当に不向きである。無
力と言っても仕方がない。

「ですよ。えっと、これからどうすれば良いですか?」

女性は俺に聞いてきた。あまりにも冷静な判断が出来ていないと
思われる。俺はどうしたらこうも慌てるのか気になってしまった。

「さて。俺にはわからん。」

「あの、私とパーティを組んでくれませんか?」

頬を紅潮させたその女性はこういう気持ちでそれを言ったのか理
解出来ないが俺は何故か受けてしまった。

女性と会った夜の次の日、話は転々拍子に決まり、ギルド養成所
のメンバー登録が行われた。こうなれば回復術師として宿舎には居
られなくなり、出て行く事になる。どうやらその事も知っていたわけ
ではないのでイーラはかなり焦っていた。昨日の女性の名前である。
本当はもう少しあるのだが俺は忘れてしまった。それに自身も気に
しているようでこのように呼んで欲しいと言われている。

「家探しから始まるわけだが、俺は野宿でも構わない。」

俺はあまり実感がなくそのように言ってしまった。本当に他意は
ない。

「そんな、初めてです。」

何処か挙動が不審な部分があるがイーラには何かあったのかと思えるほど怯えているようにも見えた。理由はよく知らない上に会ったのは昨日なので俺も特に分かっていない。

「そうか。無理に付き添う必要はない。」

俺は一旦ここでイーラとは別れる事にした。ベットで寝るのはどうにも落ち着かないのはここまでの生活が原因なのかもしれない。それに向こうが嫌がるなら強制する道理もない。

第107話

あれから幾日か経っていたような気がする。俺はいつも通り浮浪者として王国の病原菌としての生活を送っていた。別に俺は見限ったという理由ではなく単純に誰かといえるのを嫌っている。これは俺が慣れるまでかどうかの話であるので向こうが謝ろうと何をしようかと許す気はない。何も非のない謝罪など無価値。

しかし、本当に本拠地となる小屋を見つけ出して、譲り受けて現在では俺が家に帰ってくるのを待っている。向こうの勘違いと言って突っぱねるのも出来たのだろうかああいう純粋な眼差しでこの紙を渡されては返すこともできなかつた。俺が招待状を受け取らなければ向こうはならないだろうがもう遅い。これが運の尽きだつたと考えておこう。

遂にけじめのついた幾条なしの俺は重い腰を上げることにした。それと来る分には対応するが俺から闇の中へと入るのはやめることにした。イーラにもしものことがあつたときの原因となるのはごめんだ。しかし根強く残る影が付きまとうだろうが必ず俺が守る。

イーラの見つけ出した小屋は王国の外にある。何故かといえば、森の中にある廃屋であるらしい。俺は屋根があるだけで十分だが本当にそれで良かったのだろうか。俺は一度聞いてみるつもりであつた。いつ聞くとはいっていない。

見た目は人が住んでいるような気はしない雰囲気をしていた。家の建材として使われている木材は汚れで木目を見ることはできず、隙間が空いていて外とあまり変わらないようにも感じる。それでも見つけてくれただけでも嬉しいものだ。俺は開いている扉を叩いて誰かいるか一応確認することにした。

「おかえりなさい。」

「まだ早い。」

少し慣れていないのかイーラが気恥ずかしそうに迎えてくれた。俺はどうにも気分が乗らず、そう返しておくことにした。正直どうしてこうなったのかは何もわからない。まだ何回と数えられる程度の

回数しか会っていないが何故か親しそうに話してくれる。

「これからご指導お願いします。」

そういえばそういう約束だったのかもしれないと俺は思ってしまった。酒を飲んでいたのがまず間違いだったのかもしれない。

この後の後悔も含めて俺はこの状況を楽しむことにした。

そこから俺は後衛として度胸試しのために俺一人なら倒せる程度のクエストを受けてみることにした。結構有名だった為かすんなりと行けてしまったが本来は序盤のうちには簡単な誰でもやれる仕事しかやらせてくれない。だが、俺は信頼に足る浮浪者だったからこそうまく行けたと自分で言っておく。

環境にも慣れてきた頃、俺はその実力を買われて国王に呼び出されたことがある。今回のようなもので三回戦、計六人と戦った。結果としては随分な力を示せたようで魔王の退治へと向かう資格をもらった。

俺はその事を伝えた。

「私を連れていってくださいますか。」

イーラの回答はこれだった。俺は少し角度の変わった回答だったので迷ってしまった。

「良いのか。俺なんかについてきて。」

「はい。私、頑張ります。だからお願いします。」

俺は迷ってしまった。一人ぐらい連れていても良いのではないだろうか。だが、何が起るかわからないのに連れていけば責任が問われる。

「そうか。俺には少し荷が重たい。」

「分かりました。私はここで貴方の帰りを待っています。」

イーラはそう言っつて椅子と呼ぶには相応しくない場所に座り始めた。俺はどうしたら良いのか本当に思っていた。ここまで迷ったことも人生生きていて、なかったはずだ。だが、原因が何か分からない。何故ここまで迷っているのかさっぱり分からなかった。

「待て。俺はお前に傷を負わせたくなかった。だから連れて行きたく

ない。それでも貴方は付いてきてくれるか。」

「ええ。一緒に居たいもの。期待しています、よ。」

少し控えめなイーラがここまで言ったこともなかった。俺はその気持ちを受け止める。そして優しく包み込んでから自分の中に入れてあげた。

「そうか。少し王国で支度をしてから向かうことにしよう。」

俺はそう言っただけで開いている扉を更に開いて外へと出た。周りは森であるが人気はなく静かな場所であるが王国からもそう遠くもない。俺はイーラと一緒に王国を探索してから魔王の討伐へと向かうことにした。

「誰も送り出してはくれないか。」

俺は周りの様子を見てから独り言かのように言っておいた。右隣にはイーラが居てもしもの時は回復をしてもらおうと思う。

「良いですよ。私はこれで満足なんですから。」

「そんなに嬉しかったか。」

「はい。」

「そうか。それなら嬉しい。」

俺はこうして一回目の魔王討伐へと向かった。今回は仲間を多く連れてきた。どうなるのかはまだ分からない。

第108話

視界の通らない森が続く。辺りは薄暗く灰色と言っても過言ではない色のない世界が続いていた。何処から何が来てもおかしくはないという状況の中で八人は道とも言いにくい草が踏み固められているだけの場所を歩いていった。

「道はあっているんでしょね。」

黒い髪をしている袖の開いている赤い服装をしている少女は黒髪の青年に聞いていた。青年の服装はこれと言って特徴のない薄い茶色の布地だけだった。まるでさなぎのようで変身するのを待ちわびているかのような気もする。

「多分な。不安か。」

青年は後ろを振り向きながら答える。道を知っているわけでもないのが大体の方角は覚えているため青年が前を歩く事にした。その後ろに赤い服装の霊夢、そしてメイドであり、吸血鬼の姉妹を保護するメイドが歩いている。

「いいえ、そういう意味じゃなくて。飛んで向かった方が早いのにどうして歩いて行こうとしているのかよ。」

「そうか。だが、後ろにも居るのに誰がどこに行ったのか把握出来るか。俺は出来ん。それに吸血鬼も居ればできるだけ日光の当たらないようにするのが当然だ。」

「そうね。一理あるわ。けど、先に見ておくのは当たり前じゃない。」

「そういう言い方もある。だが、果たして戻ってくることは可能か。」

「何時間かあれば戻ってこれるわよ。」

霊夢は強気な姿勢を無くすことはなかった。そうでもなければ霊夢でもないが青年はそろそろ鬱陶しく感じ始めていた。気が立っているわけではない。

「そうか。その間俺たちは待機する事になるがその時間は返してもらえないのか。」

「それは無理でしょ。」

「そうか。なら、辞めてくれ。」

青年はそこで口を閉ざす事にした。あまり会話を長引かせるわけにもいかない。不安なのはわかるがそれを煽るようなことはしたくない。それに情報伝達もやすやすと出来る距離ではない。

「全員で一切に飛べば問題ないじゃない。」

霊夢は妙案を閃いたらしい。だが、それは青年には都合の悪い事だった。それとも最後にこれを出すつもりだったのかそれは定かではない。しかし、どうしてもそうなのではないか、という疑念は頭の中に残る。

「そうか。あまり異世界に干渉する事を是とはしたくない。それで諦めてくれ。」

「そんなの勝手じゃない。幻想郷を守ることがかかっているのにそんな悠長では駄目でしょ。それはアンタが一番わかっているはずよ。」

確かに、青年はぐうの音を出せずにその場で黙ってしまった。何とかが言って欲しい霊夢は焦らせるが自分の殻にこもろうとする青年を引き戻すことはできなかった。

「アンタは救いたいのか救いたくないのかはつきりしない。」

「怖い。俺が一度負けたことがある相手にもう一度など。」

青年は怯えた表情を包み隠そうとはしていなかった。否、隠すことが出来ないほどにそのようになっていたと思われる。もう精神的におかしくなっているのかもしれない。

「何言ってるのよ。」

霊夢の声には感情というものがなく何も無い虚無のような声をしていた。まるで宣告された時に聞くお告げのようである。

「アンタには期待してるんだから。」

「そうか。勝手にしていれば良い。」

言いかけた口を止める。青年はまだ言いたそうだがここでは出さない事にした。まだ持つておく札か今は出してはいけない札なのか。「やってられないわね。」

霊夢は呆れ返っていた。

第109話

青年と霊夢が言い争っていた組の後ろの方では音が聞こえる程度の距離を開けている四人のまた別の組があった。そこでは比較的平和にことが進んでいる。先頭を歩いているのはノースリーブの白色の服装をしている額には赤い大きな角がある勇儀が歩いている。その後ろを動きやすい服装にしている緑色を基調とした服装をしている早苗が続く。

「楽しみですね。」

前の組とは全く違うテンションでいる早苗だが勇儀は特に付いてきてはいない。元々早苗のテンションに合わせられるほどの人物でもない。多少なりこうなるのは仕方ないことである。

しかし、後ろにいるにとりとその後ろにいるレミリアは余計に何ともならなかった。元々臆病な性格かそう多くは話さない人物である。青年とはあまりそのような面は見られないが本来は気品のある高貴な種族である。

「魔王さんはどういう方でしょうか？」

早苗はまた違うことを聞いている。それがどうしたと勇儀は言い返したかった。

「知らないよ。楽しみにしといたらいいんじゃないか？」

勇儀は無難に答える。だからと言って何かあるという事ではない。「そう言っても気になりませんか？」

「いや、別に。」

勇儀もいつ終わるのか分からない旅の途中で余分な体力は使いたくないと思われる。対して早苗は少しでも楽しくしようとしているがタイプの相性は悪い方だと思われる。青年なら別に気にしないで話は聞いてくれる。

「えー、楽しくいきましょよ。」

「辞めとけ。後ろの奴と話したらどうだ。」

「そうですね。わかりました。」

「にとりさん、ブリタニア王国では何をしていたんですか？」

「工房で武具とか作っていたよ。」

外ハネしている癖のある青い髪で赤い紐で軽く結んでいる髪型をしている背中には大きなカバンを持っている少女は少し控えめに答えていた。

「にとりさんは本当に凄いですね。青年さんにもきつとそういうところを見ていたんですかね。」

「どうだろうね。」

あまりの勢いににとりは苦笑いを浮かべながら答えていた。何があつたのかそれさえあればまだ何とかなつたのかもしれない。

「貴女は少し口を慎んだ方がいいかもしれないわよ。」

にとりの後ろを傘をさしながら歩いていたレミリアが一言言っていた。吸血鬼として夜に君臨する王と言つても過言ではないが今回は年長者として落ち着いた雰囲気があつた。早苗は特に話そうとはしなかつた。

「こういう時は静かに歩いているのが一番良いわ。」

「暇じゃないですか。」

「そういう話じゃないわよ。青年に迷惑かけても良いのかしら。」

「それは困ります。」

その言葉を聞いた早苗は急にしおらしくなっていた。レミリアの言葉が聞いてしまったらしい。

「と言うか、レミリアさんはどう思っているんですか?」

「別に。居ると鬱陶しいだけよ。」

「居なければどうなんですか。」

「静かになるだけよ。」

レミリアは特に抑揚もなく平然と答えていた。何も思っていないのは確かだがそれだけではないはずだと早苗は思っているらしい。

「でしたら、私が。」

「それは無理ね。せめて咲夜に勝ってから物を言いなさい。」

「私が負けるとでも。」

「家事全般をこなす咲夜に敵うとでも?」

「うーん、そうなると話は別ですね。」

「でしようね。」

レミリアは人のことなのにも関わらず自慢しているのがどうにも子供くさい。若気の至りということで片付く年齢でもないのものでそれはそれでまた面倒な事になる。

「二人とももうそろそろだから静かにしておけよ。」

前から聞こえてきたドスの効いた声が聞こえてきた。気怠そうな声であるが元気がないということではない。

もう着くのだ。人気のある場所へとたどり着いたのでそこで一休みでも入れるつもりなのだろう。ここまで約一日。昼頃から出て早足で夕暮れぐらいにある村へと足を踏み入れることにした。

第110話

時間的には夜というのは不適切だが昼間かと聞かれるとそうではないと答える。じゃあ、夕方なのか、と聞かれるともう少し時間を待って欲しいような説明の難しい時間帯であった。

木造であり、心許ない建て付け方をしている見るからに貧しいこの村では点々と家が建っているだけで畑が少々、と言った具合ののどやかな雰囲気の色が辺りには広がっていた。

大きく開けているのでその点ではまだ人の住める土地として最適なかもしれない。

青年が率いる八人はその村の人々から家を貸してもらえ事になった。寛容的であり誰も拒まないその人たちの性格のおかげでそのようなになったと思われる。雨風をしのげるのかと聞かれると微妙なところだが無いよりは良いのだろう。満点の星空の人で川の字を描いて寝るのは誰もが嫌がるだろう。青年自体は別に気にしないが男女の割合がおかしいので易々と通るわけがないと思っていそうだった。

「俺は外に居る。貴方達は充分に体を休めて明日に備えてほしい。」

黒髪の青年はそのように言っていた。別に他意などなく純粹にそのように言っていた。邪な考えを青年がするわけがない。

「あれなら他の場所に行けば良いじゃない。」

「それが嫌なら一緒に寝てください。」

青年はその様に言われたが心が揺れる事はなかった。まるで壊れたメトロノームかの様になっている様で正確なリズムを刻んでいなかった。

「そうか。だが辞めておく。」

「どうしてですか。」

ある一人は少し不貞腐れていた。まあ、男一人引っ掛けられない様では自信を失うのは確かである。

「簡単な話、誰かと寝るのは好まない。それとあの場所が優遇されそうで気に触る。」

「意味が分からないわ。」

当然の反応とも言える。

「そうか。理由はあまり聞かないでくれ。そう言うものを持っているのは誰もがそう言うものだろう。」

青年は扉を開けながら人の声も聞かずに出て行ってしまった。誰しもが追いかけてやろうとしたがお互いがお互いを止めていた。何となく察してきたのだろう。ああなった青年を止める手段はないと言う事に。怒っているのかどうかも定かではない。それでは何ともならないので手段を講じる必要があるのだろう。

「何か理由でもあるんですね。」

緑色の髪をしている少女は少し考え込みながらも話していた。

「知らないわよ。」

大分ご立腹な様子の霊夢はその場で座り込んで横になってしまった。自分の領地を占領したことを示すかの様に大きく陣取っていた。「そう言えば紅魔館に居た時はどうしていたのかしら。」

レミリアは一番この中で付き合いが長いであろう咲夜に聞いていた。

「あの人は布団に入った形跡はありません。それに寝ているところもそうそう見る事はありません。」

淡々と答える咲夜にレミリアはふーん、と唸っただけでどうしようもない納得感で自分を覆う事にした。

「彼奴らしいか。好きにさせてやろうぜ。」

この中では一番男気のある勇儀はこの会話には入る事はなかった。

俺は俺の中の自分に聞いていた。

青年の中にいるその人物は何処か他人から見た視点を持ち合わせていて少し馬鹿にしたような変わっている人物像をしている。だからと言って青年の相談に乗らない事はなく真摯に答えてくれるが捻くれた回答の仕方をすることもあり、宿主有りきの性格だと思われる。

「俺はこれからどうしたら良い。」

青年は心の中で誰にも聞けない質問を投げつけていた。一輪の花を探す少女の様な眼差しを見せる青年に中に居る自分は低俗な物を見る様な蔑んだ目をしている。だからと言って自身の中にある隠れた闇に対して嘆きをぶつける事もしない。

「そんなに怖いのか。逃げてしまえ。そうすれば気が楽になるだろう。」
夢を見ているかの様で周りは暗かった。ろうそく一本も立つ事はないがしっかりと相手の姿、形、動きまで見えている。常識には囚われないからこそ沢山の心の膿を出してしまっても問題はない。

「そんな訳にはいかない。俺はやる必要がある。帰る場所を守りたい。だが、その一步が中々出ない。」

「なんだ背中を押してほしいのか。このままにしている方が面白いと言うのにそんな事をしてたまるか。」

滑稽だ、と笑われているかの様だったがそれと同時にそれも仕方がない事だと言わざるを得なかった。自分でも矛盾している発言である事には変わりない。そしてどれだけ醜い存在でありながら羞恥を晒している発言であるのかはもう自覚している。

「自分が止まっていることがそんなに面白いのか。」

少し声音を荒げている青年は自身の中に眠っているその様な感情に憤りを感じている雰囲気があった。そして腰に携えている剣を抜き取ろうとしていたが寸前で抑えた。これは今ではない、そう思えたのだろうか。

「面白い。それにお前が誰かの手で動く人間でもあるまい。どこまでも高く羽ばたき皆からは羨ましがられる存在だ。それがこの様では笑うほかあるまい。」

「そうか。やりたい様にやれ、とそう言うのか。」
「やて。」

自分の中にいるその存在は静かに答えた。その表情には一切蔑んだ様な表情はなく穏やかな顔をしているだけだった。青年はそこで自分の中に意識を向けている事をやめた。そして小さく目を開ける。

第11話

日も居なくなり、外の空には大きな月が浮かんでいる。何処からか鳥の鳴き声が静かに辺りから聞こえていた。薄くそして全体的に仄暗く照らしている月光をその目に入れた青年は肩の痛みを感じながら起き上がる事にした。夢なのか現実なのか区別のつかないこの感覚には慣れないがそれも楽しむ事にすれば何の問題もない。

黒髪の一見女性のような髪型をしている青年は大きく腕を伸ばしてから急に脱力していた。今よりも少し先を生きているつもりなのだろうがそれが許されるのはきつと子供までなのだろう。

青年は気晴らしに村の中に歩いてみる事にした。だからと言って商店があるわけでもなければ灯りというものは住宅から溢れたもの程度で予想に反して暗くなっている。そしてまばらに建てられているのでより一層そのように感じる。その中でもしつかりとした足取りで歩いていった。

腰に携えている剣がかしやかしやと音を立てている。今頃、どうしているのだろうか。そんな疑問が浮かんできたが自分が怠った事であるので気にしないように思考の檻から放してあげる事にした。何処に向かうのかは全く分からない。

火花のように思考を炸裂させては線香花火のように儂く散らせていく青年の頭の中は何処へと飛ばたくのかは誰も何も予想はつかなかった。人に限らず自分でさえも制御出来ないでいる青年はその足をふらふらとさせたまままで何をどうしたら良いかさえ忘れてしまったかの様だった。

「アンタ、冒険者だろ？ちよつと頼みたい事があるんだ。」

月光に覆われた大地の何処かから少し元気のない声が聞こえていた。青年は首だけをその方向へと向けながら抜きやすい右腰に携えている剣の柄を握っていた。戦闘体制だと言い張るのなら別に問題はないがそれ以外ならどう言い訳も出来ない。

「頼みたい」と言うのは最近この辺りで夜に暴れている魔獣が住んでいると言う噂なんだ。如何にか原因ぐらいは確かめてくれないだ

ろうか。」

青年の沈黙は肯定として認知されてしまったらしく警戒心もなくその人は話していた。薄い茶色の色褪せた布地を着込んでいて簡素な革の靴を履いている初老と思われる白髪混じりの男性は青年の前に現れた。少しだけ息を弾ませているところを見る限りどうやら相当困っていると言うことだけは伺えた。

「そうか。何処に住んでいる。」

「この村の北側の森の中と思う。私が連れていくから討伐をしてくれないか。報酬は用意出来る限り用意する。」

初老の男性は落ち着いた口調で話していた。しかし、それなりにぎわっているのか言葉からは震えと言うものを感じる。何が起きているのかはさておき青年は何となく足を向かわせてみる事にした。何があるのか、探検家として心が疼くのと同意義だと思われる。

「そうか。無理はするな。」

青年はそう言うのと左足から動かし始めていた。そして少し先行しかけたところで男性が前へと小走りで向かい、それからはゆつくりと歩いていた。

「所で、どうして冒険家になろうと思ったんだ？」

男性は着くまでの時間潰しとして話しかけてきた。青年は答えられない質問でもないのので口を動かしていた。

「成り行きだ。少し昔に守り損ねたものがあるから今回こそは自分の手で達成しようとしているだけだ。」

「ご立派な志だね。何が原因だったのかは聞いても良いか？」

「あまりお勧めしない。少し今でも剣を抜こうとしている右手を抑えている。」

そこからどうなるのかは分からない。背後を取っている故にどの様にされるのかは全く分からない。青年は地の利を活かして物事を進めていた。

「おっかないね。辞めておくよ。」

男性は素早く青年の言葉に返答する。身がすくんでいる事を見て青年は口を開く。

「そうか。冗談だった聞いていい事といけない事は誰しも持っている事を忘れてはならない。」

辺りからは少し足音が重複している。青年は出来るだけ気づいていないふりをしてそのままの歩調で歩いている事にした。何が起るのかは何も分からない。それ故にいつでも抜ける準備はしている。「そうだったな。これはいけない。それにしてもこの先に何かがあると言うのだ。」

「さて。王にはこちらの方向に来る様に言われている。それ以外は何も知らない。」

「冒険者と言っても使い走りの捨て駒なのかい。」

「そんな所だ。別に構わないがこう手荒な真似はやめておいた方がいい。」

青年の周りには主に男性が囲んでいた。別に気づいていないわけではないが農具である道具を両手に持っているところを見るとどうもこれから魔物を倒しに行くとは思えない。全ての刃の向きが青年に向いていた。だが、青年が気にする事はなく何が起こったのか理解していないかの様だった。

「前にアンタみたいなクズが現れてからこの村は荒れ果てた。誰も来なくなつた。挙げ句の果てには誰にも認知されなくなつた。」

「それで俺に復讐か。それをして何になる。」

「憂き晴らしぐらいにしかならないだろうさ。それでも良い。俺らは負けない。誰も失わない。」

初老の男性は右手を月に掲げていた。そしてそれに答える様に雄叫びをあげる男が続く。青年は面倒な事になつたと思つていた。だからと言つて、無理に逃げるのもそれはそれで面倒な事になる。大人しく受けておく事にした。

「そうか。今寝ている七人の小屋を燃やした方が良かったと後悔する。それでも良いのか。」

青年は素早く剣を抜いて刀身に月光を反射させていた。鈍く、そして薄暗く光っているだけの剣。それに対するのが夜陰に乗じて襲おうとする村の男達。

「やってやる。俺たちがどれだけの恨みを持っているのか思い知らせる。」

初老の男性が何かを投げる。だが、目の前の攻撃に青年は何の準備もなく弾いた。

分かっていった、と言うには暗いが青年の目がその暗さに慣れていないと思っていなかった男性は唾然としていた。形状的には細く尖らせた石の様なものを投擲したと思われる。その狙いからして腕は確かであるらしい。青年はそう感じて少しだけ身構えていた。威嚇は効かず、それ相当の実力を持っている様子である。

「口だけの人間ではないか。では、魔物というのは貴方達で間違いないだろうか。」

青年は手の中で剣を右回転させていた。手の力は十分に抜いていて今には抜け落ちそうだがそうはならない様になっていた。どうしてなのかはさておき青年は何処から来ても何とかしようとしている。

「その例えは全く理解出来んな。行くぞ、お前ら！」

その声と共に周りが動き始めた。最早連携など関係なかったがその様に見せているのかそれとも偶々息があつたのか、青年のいた所には鍬が突き刺さっていた。そしてどこにも当たっていないところを見ると距離感是完全に掴んでいると思われる。

その頃、青年と言えば人の間を抜けて走り出していた。そして屋根の上に昇っていた。意外にも傾斜のある屋根だったが青年が飛行していれば何の問題もない程度だった。

青年の下ではどこに行つたのか知っている組と知らない組で右往左往していた。暗闇の為に起こってしまった誤算は青年にとつてそこそ有利な状況へと傾いた様だ。そう考えた青年は素早く飛び出して近くに居た人の後ろに着地した。

それに反応した男性が鍬を振り上げて一気に地面に突き刺す。きつと何かの感触を得たのだろう。嬉しそうな声を上げていたが青年からすればどうしてその様になるのかは全く理解出来なかった。

「楽しそうだな。」

青年は急に声を出した。その声には流石に村の人々は恐れおの

く。倒したと思っていた人物の声が聞こえてくる。

「何なんだ。確かにこの鍬に感触はあった。」

「そうか。同族殺しは楽しかったか。」

青年の目の前には鍬によってぐしゃぐしゃにされた若い男性の亡骸があり、血の池を作っていた。顔面は口の辺りを大きく開いていた。そしてべったりと倒れてしまったのでそれから動けるのかと言われると確実に不可能である。

「私は、何を倒したというのか。」

「さて。夜が明けてからその目で見てみると良い。」

青年には戦う意志というものはなかった。もう既に剣を納めている。

そこで男性の叫び声が聞こえてくる。限りなく近いが遠くから聞こえているかの様に段々とその声は小さくなっていった。何が起こったのか、誰もが理解出来ていない。

「命が惜しいなら逃げると良い。俺からは斬らん。が、向かうならどうなるかは示した。」

青年の声がどこからか聞こえてくる。それはまるで吹いている風に紛れていて何処にいるのかは全くと言って分からない。何をどうしたらそうなるのか、頭の処理が追いついていなかった。それさえも青年の手のひらで転がっているだけなのだろうか。

誰かが向かっていく。それは儂く散っていく。

太陽が起きてから少しばかりか経っていた。その時間はきつと一刻も過ぎていない頃だろう。ある地面には赤色の大きな池とその場に横たわる死体の数々。その場に座っていた青年は何の気なしにその場に存在していた。

「何があったのよ。」

ある女性が声をかけていた。青年は瞼を開けてその方向を見ると安心した様な表情を浮かべている。

「さて。」

「アンタのせいでしょう。」

「人は醜いということだ。そうでなければその様な惨状は生まれな
い。」

青年は平然と答えている。わかっていた未来かの様に。

第112話

あの日も確か今回と同じような旅路だったと思う。夕暮れにたどり着いた俺たちは現在と同じ様に空き家を借りることが出来た。人当たりは良く、心優しい村の人々は俺だけではなく連れ添っているイーラにまだ優しくしてくれた。例えば、郷土料理の作り方を教えてくれたり、何かしていたのを覚えていて。対して俺は肥沃な土地を耕しては種を植えていたりと主に力仕事をしていた。

だが、俺にはひとつ、懸念というものがあつた。村の長を務めているレイチエルという人だけは一切の油断というのも見せたことはなかった。きつとそれは今いる立場故にその様にしている思うが度が過ぎる。犬猿の仲というには少し意味合いが変わってくるのだろうがそんな関係であつたことには間違いない。

肥沃な土地があり、村の人々は笑い合つて楽しく過ごしている。何か大きな物があるわけでもないが近くには森があり、木の実を採取したり、はたまた狩をして自給自足をしている。其処に二粒の異端が混ざれば排除する事に尽力するのは仕方がない事だと思う。

それから時日が過ぎる。俺は森の方へと狩へ向かうことにした。どうやら干し肉の貯蓄がなくなつたらしく、早めに取つていきたいということだ。村の男性を集めて行われたその狩についてとばかりに混ぜられていた俺をどうにも許せないという感じで見ていたレイチエルだつたが村の危機と比べればそんな事はどうでもいいらしく、不機嫌ながらも文句は一つ言わずに向かう事になった。

俺も気付いていないわけではないがそれよりも気になることがある。が、その根拠となる様なものはなく何を話しかけようとも向こうは答える様な気はしなかった。俺が勝手にそう思っているだけだが恐らく間違い無いと思われる。

「でだ、ここら辺で班を分けよう。丁度半分で前は俺について来い。後はその反対に向かつてくれ。その後の判断は任せる。」

レイチエルが静かな森の雰囲気を崩した。村の男性は特に反論を

申し立てる様なことはなかった。英雄かそれともカリスマというのが一番ふさわしいのか。俺は今考えても仕方がない事を思案しているところで話がまとまっていたらしく、そろそろと歩いていくのに少し遅れながら付いていくことにした。

それからと言うもの、特に収穫のない時間を過ごしていく中で方向を変えて戻る様にしてみた。俺に発言権はあったのだろうが何も言うことはなく出来るだけ肯定し続ける事にした。その他は疑問を投げかけては人を迷わせた。的確な助言などと自負するつもりはない。

いつ終わるのか、誰しもが少なからず疲れを見せたところで微かな音を聞きつけた俺は制止を振り切って走り出した。俺がどうしてここまで全力で走るのかは自分さえ理解出来ない。言葉にして伝えるとするならば考えるよりも先に動き出していた、と言う事だろう。

木が倒れ込んでいる。そのおかげで光が差し込んでいて見やすくはなっている。そして多少の土煙と見たことのある装飾を取り付けている男と相手をするには分の悪い状況でとても大きい魔物が現れていた。俺は暫く静観をすることにした。あまりにも理解出来ない状況なのでそうなってしまふのが当たり前と言える、そんな所だろう。本人に聞いたら良いが今のところ、そんな余裕は彼には残っていない。周りを見る限り、彼一人でその他の仲間を守っていた。全ての攻撃を止めて絶対に危害を加えさせようとはしなかった。

その精神と行動は賞賛するが自分の犠牲を見積もっていない行動にはどうにも賛同はできなかった。俺は歩きながら近づいていく事にした。怖がらせる事もあるだろうし、そもそも走りたくもない。

「畜生！村の人も救えないか。」

村の長であるレイチエルが叫んでいる。俺はその声に何か妙なものを感じたがその時には何も分からなかった。

レイチエルにとって目の前に居る魔物は絶望に心が汚染されるには十分なほどの威力を持っていた。疲弊している短剣を持った男は無謀にも目の前の敵に向かっていった。その背中にはきつと村

の長としての自覚が重くのしかかっている事だろう。何もかもが綺麗に亡くなるには俺は早いと思えた。

俺は全力で走り、レイチエルの前に立った。そして魔物の攻撃を受け止めていた。その時間の記憶はなくながむしやらになっていただけなのが後から来る脳の補完で理解出来た。

「貴方が死ぬにはまだ早い。」

俺は手早く魔物の攻撃を弾いた。固いものと鋭いものが当たっている事には間違いないが何処か違う様にも感じる。何か違うと言うことだけは理解出来た。

「何をしにきた。」

「助けに来た。」

魔物は二人の会話も気にする事なく反撃とばかりにその前脚を振るう。右斜めから地面に落とす。俺はその勢いに任せて下から剣を振るう。右腕に持っていた剣が魔物の前足に刺さっている。当たった肩も致命傷ということでもなかった。

しかし、魔物にとっては致命傷となるらしく逃げていたがすぐに追いつけるだろう。

「して、イーラという俺が連れてきた人はどう思う。」

「藪から棒にどうした。」

レイチエルは俺の質問が分かっている様子でキョトンとし表情を見せていた。

「イーラの見た目に一目惚れしているのか。」

「そう見えるのか。」

「さて。俺は知らない。」

「お前は何を話したいのかよく分からん。一つ言いてえ事は邪魔だから出ていけ。」

レイチエルはやつとの事で地面にすると不貞腐れた眼差しを俺を向けていた。背中越しであるが伝わってくるその圧は中々なものだった。

「そうか。だが、元々仲間であるイーラを連れていくが問題はないだろう。」

「ああ。好きにしろ。」

「そうか。」

「いや、待て。」

レイチエルは俺を声で止めた。どうして欲しいのかは何も言わないので俺はその言葉を無視して前へと進む事にした。

「待てよ。俺も連れて行ってくれないか。」

「どうしてそう思った。」

「お前に付いて行きたいんだ。」

俺からすれば仲間が増えようとも減ろうとも関係なかった。結果として俺はすんなりと承諾して旅へ出かける事になる。

第113話

黒髪を後ろに結んだ青年は何処か達観したような眼差しを目の前にいる人に向けていた。

「人と言うのはいつも浅はかで醜い。人のものを奪っては奪われる。」
青年は自分の言葉に続けてそんなことを言っていた。全くと言って度し難いがそういうものだ。

「アンタがそんなことを言う根拠は何？」

青年と同じく黒髪をしている感の鋭い少女、博麗 霊夢はゆったりとした赤色の衣服を激しく揺らしていた。

「俺には昔がある。そのツケだと思えば何の問題もない。」

少しだけ口角を上げている青年に霊夢はどうしようもない何かが進み上げるがそれでさえ何かは分からない。こう形のないものを追う虚しさにも似たその何かは青年にも伝わっているのだろうか。

「アンタは何があつたのよ。過去に何をしていたのよ。私は、知りたいわよ。」

「そうか。まず俺のいた幻想郷が襲われた理由は何か、それは知っているか。」

「ええ。復讐というのが手っ取り早い回答だということもね。」

霊夢にも何か疑念というものがあつたのだろう。少し曇った眼差しを青年に向けていた。

「そうだ。村の人々は確実に忘れているが俺が起こした事だ。」

青年も何も隠そうとはしていないと思う。だが、何か見え隠れしている札があるのにも関わらず突き止められなかった。

「で、結局のところ何があつたのよ。」

「俺がこの村を壊滅まで追い込んだという事になっていたらしい。」

「何を話しているのか全くわからないわよ。」

「そうか。俺は間接的にこの村を衰退の一途へと導いた、村長である男を連れて行った事で。」

「アンタ、まさか目の前の火の粉を払っただけだと言いたいの。」

霊夢には到底信じられないような事である。

「いや、違う。俺は罪を償おうとしたが出来なかっただけだ。」

青年はその場から離れようとしていた。それを止めたのは霊夢の右手だった。青年の着ている袖を小さく掴んだその手を一度は振り払おうとした青年だったがそれは許されなかった。小さいながらも強い力で掴んでいた。

「どうして。どうして、私達を頼ろうとしないのよ。」

「それを素直に受け取らないほど心が荒んでいるからだ。」

「そんなの関係ないわよ。私にとって、アンタは頼り甲斐のある人なのよ。だから頼って。お願いだから。」

「そうか。考えておく。何を持って貴方がそのような言葉を伝えたのかは知らない。だが、答えることは今のところは出来ない。」

「どうしてよ。」

「やりたい事がある。回答はそれを終えてからでも良いだろう。」

「墓場まで持っていこうとしていないでしょうね。」

「さて、どうだろうか。」

青年は少し荒く腕を振って霊夢の右手を離すと少しだけ歩いていった。放浪というのにはそこまで距離はない。

「アンタはここまで何も話さなかった。何か特別な事でもあるのかしら。私に頼ろうとしないのは何故？」

「俺にとつて他人は利用するものだ。生きるために奪って、奪って、奪って、搾り取れる一滴までそのようにしていた。それをしたくはない。そう思ったただけだ。」

青年は来た道に戻ってきていた。

「誰か起きているか。ここから先は少し道が長い。野宿は嫌だろう。」

青年は小声で話していた。周りには誰もいないはずなのにどうしてそのようにしているのかは全くわからなかった。

第114話

皆はもう準備を済ませていた。青年がしておくべきことは先に霊夢ができてくれた。少々付け焼き刃の気がするが先にやっておいてくれた事には感謝するしかない。

「ここから次の所までは距離が長い。それと隠密に頼む。魔王のいるところへと確実に近づいている事は忘れるな。」

青年はそれだけを伝えてから踵を返すと小走りに等しいほどの速度で歩き出した。皆はそれに追いつこうとしているが少々無理がある。

その足腰は劣った白狼天狗にも等しい。それ程に妖怪の山では鍛えられていた。今もそれは衰えていないだろう。

「何に焦っているのでしょうか。」

誰かの声が聞こえてきたが青年が足を止めるようなことはなかった。まるで耳の中に入らないかのように周りの情報を遮断している。

「強欲なのよ。己が信念のためにここまでやろうとしているの。」

それを妨害するように一人が口を開いていた。

辺りは再び森の中へと戻る。何も特徴のない静かな雰囲気を持ち合わせた怪しい場所であるが、一番前を少しペースを落として歩いている青年には何も効果のない事だった。まるで気にしていない、というよりは気づいていないと言っているのがふさわしい。

青年からすれば少しだけ盲目になっている頃合いなのかもしれない。何も感じなくなる程に違うものを宿している青年にとってみれば何もかもがどうでも良いものとして映るらしい。

その結果として、後ろではすでに疲れかけている人やもう疲れている人が必死になって追いつこうとしている異様な光景となっていた。

暴走と言うべきなのは別として青年の勢いは最早知能の失った猪にも匹敵するようなもので愚直にも前に進んでいた。貪欲に一つの物事を追いかけているその様がどうしても危ないものであることは後ろに誰もが気づいていた。しかし、それをものともしない青年は

少し歩く速度を落としながら微妙に合わせている。

「いい加減止まれ。どうしたんだ。」

その手に青年は左肩を強く後ろへと戻された。

「勇儀か。離してくれ。」

青年がそう言うがその力は弱く何の威圧もなかった。もう何をしても仕方がないと思われる。

「そうはいかない。少しぐらいは何をするか話せ。そんなに私たちは信用出来ないのか。」

「信用はしている。が、話す気は起こらない。」

青年は冷たく言った。これこそ氷のようなもので背筋のゾクつとした感覚が走る。そして少しだけ怖かった。

「どうしてなのか理由は聞かせてちょうだい。」

「俺は昔から他人は利用するものだと思っていた。だからだ。」

「それは昔の話でしょ。今はどうなのよ。」

「そうだ。私達のこととはただの道具してしか見ていないのか。それとも仲間として側に置きたいのかどっちなんだ。」

「俺は、」

青年はそこで言葉を詰まらせた。それからどうすれば良いか、考えているのだろうかそれも無駄だと思われる。

「この人はこれまで通り奪えるだけ奪う生活からは足を洗ったのよ。私達は見守ってあげることしか出来ないのよ。」

そこへと割り込んだのは霊夢。青年に聞いていた勇儀とレミリアはその口を閉じていた。誰も霊夢が口を出して青年の代わりをしたのかは知らない。

「まあ、良いわ。」

第115話

石造りの薄汚れた白色の壁が多く立ち並ぶ。前に寄ってきた村とは大きく違い、繁栄しているのが目に見える。

村というよりは小さな王国となっているこの場所は人々はよく笑い合いながらも、何処か寂しい雰囲気のあるところだった。そして、何処かブリタニア王国にも似ている。

夕暮れという時間にはもうそろそろ終わりを迎えている。薄暗い中で青年が率いる七人はそれぞれ楽しむ事にした。

それぞれがバラバラの時間を過ごそうとしている。

青年は一人でこの街と呼ぶべき場所をただ歩く事にした。何も目的はないが一日を過ごす分には何も問題はないと思われる。

青年は月の仄暗い灯りの下で一人で歩いていた。その影を追うものではなく、青年は一人、細切れの記憶が疼くのを感じた。淡い記憶が花開く。

一方その頃、借りた空き家の中で七人は集まっていた。何かあるのか、何も聞かされていない皆の不安は相当なものであり、ここで急いで向かっている事もその事を助長させる要因となっていた。何もかもが消えかけている。

「あいつは今から何をしようとしている。」

「それは全く分からないわ。何も話してくれなかったわ。」

赤い服装をしている霊夢は少しいかつい口調で話していた。実際にそうする理由は分かっていない。

「何も知らないのですか。みなさんは何か聞いていることはありませんか?」

緑色の服装をしている青年が言うには霊夢の競走馬である早苗は皆に聞いていた。が、その反応は悪く誰もが俯くことになった。

「霊夢、一ついいかしら。貴女が何か持っていると言うことはないでしょうね。」

クスクスと笑っているだけのレミリア。その右横では静かに状況を見定めている咲夜がいた。

「ある、わよ。けど言わない。」

目の辺りを暗くさせた霊夢のその様子に誰もが絶句した。何を
持っているのかがなんとなく伝わってくるからかもしれない。

「霊夢さん、一体何を聞いたのですか？」

不審そうにそしてたどたどしく聞いてくる早苗に霊夢はむっ、とし
た不機嫌そうな表情を見せていた。そうならない理由も分からない
が周りからすれば異端であると言う目をされていた。

「私は青年の覚悟を聞いてきたのよ。これからどうしたいのか。そし
て結果としてどうするつもりなのか。」

「盟友はなんて言ったの？」

青色の髪をしているにとりと言う少女は勇気を振り絞って聞いて
いた。その顔から伝わるのは必至であると言うことだけである。

「殺されにいく。私はそれを止めようとしているわ。」

「そんな話は信用出来ません。あの人はとてもお強いんですよ。そん
なはずがありません。」

「早苗の気持ちは分かるわよ。でも、彼奴は私に確かにそう言ったの
よ。」

霊夢も少しづつ感情が高ぶっていた。それこそこれから始まろう
としている闘争に胸躍らせているようであるがそれがどこまで通用
するのかは全くと言って謎というものである。

「皆さんもこれは嘘だと思えますよね？」

早苗は嘆きにも似た声でそのように言っている。何とも悲しい光
景であるが誰も何も言わなかった。致し方がなく飲み込むしかない
条件、と静かに言っている。

「私が見るにとても自由に周りをかき回して生きている。そして腕も
確かにある。そんな奴がそう言うのなら根拠はなくても信じる。」

「私も大体同意見よ。いけ好かないけど腕は認めるわ。」

落ち着いた雰囲気でレミリアは言葉を添えた。

「お嬢様がそのようにおっしゃるのなら私は言われた通りにするまで
です。」

「お姉さまと同じなのは嫌だけど早く会ってみたいね。」

「盟友の力はよく知っている。それでも敵わないからこうやって人を集めたんじゃないかな？」

「アンタは如何するのよ。早苗。」

霊夢は一通り皆の意見を聞いてからゆっくりと早苗の方を向いていた。それはまるで鬼のようで何もかもを恐怖で覆い隠すような表情をしている。それと同時に博麗の巫女として多少なり慈悲がある優しい顔にも見えてしまう。

「信じたくありません。本人の口から言われないと信じません。」

早苗は目を閉じながらゆっくりと呼吸をした後に溜まっているその力で言葉を紡いだ。喉に詰まっていたが何とか取り出したようなその声。誰も反論というのはなかった。

皆、同じように不安がある。だが、大抵は青年に振り回される予定でついてきている人だった。今更、それは変わらないだろう。

青年がどのように考えてどのようなように霊夢に伝えたのかは残された六人には一切分からない。それでも青年が何も考えていないわけでもない、と信じていた。

「この事は青年には内緒にしている。面倒なことにはなりたくないわ。」

霊夢は静かに言っていた。いけないことを話しているように感じるかもしれないが一切そのようなことはない。

夜も遅くなった時間でも青年は帰ってくることはなかった。物事は動くのは朝方となりそうだ。

第116話

俺はここで身体を休めていた深夜の時間だ。決して古くはない教会ではあるが人の気配などない寝静まったこの建物の屋上。特に寝泊りのために借りたわけでもないが俺はここに居た。教会の主には一言伝えているので快く承諾してくれた。別に物を盗るようには輩には見えなかったのか、それとも盗まれても神の賜物とでも言うような雰囲気ですごく笑いながら背を向けてくれた事を俺は覚えてる。

此処ではどうやら魔術というものが発達していて駆け出しから達人まで腕の上達具合はまちまちであるが楽しく励んでいる様子だけ見て取れた。とても楽しそうにしているのは分かるが何処か寂しくも感じるこの街で俺は一人の駆け出しと言う腕であるが秀才である人を仲間にした。名前は今の所思い出せない。元々自分がどうでも良いと思っていたのか、それとも覚える気もなかったのか。本当に一文字を思い浮かばない。

今日の月はとても明るい、当然ながら太陽には劣る。しかし、俺にとってはこのぐらいが一番活動しやすい。どうしても体が動きそうになるが此処ではそれをしようとは思わなかった。イーラも居るし、レイチエルも居る。変に動揺させる事を起こすのは俺の気に触る。

「此処にいたんです、ね。」

ぎこちない足音が聞こえていた。そつと現れたつもりだったのだが足音をかき消す事は出来ていなかった。それはそれで可愛らしい。近づいていくごとに大きくなる木の擦れるギー、という音が大きくなり続けていた。

「どうした。」

そもそもどうして此処に居ると分かったのかは聞かなかった、いや、聞けなかった。それよりも緊張した面持ちをしているイーラを見ていて自分の口から出ようとしていた言葉が様子を見始めていた。奥に潜む込みつつある言葉を俺は飲み込む事にした。

「いえ。一人というのは寂しいもので。」

特に了承は与えていないがイーラは俺に近付いていた。正直な話、俺も断るつもりもなかった。ゆっくりと近付いてくるイーラを俺は床に寝転んで月を見ながら待つ事にしていった。

辺りはもちろん薄暗く月明かりを頼りに歩いてくるしか出来そうになかった。少し心配そうに手を動かしているイーラの様子を眺めながら俺はまた別のことを考えていた。これからどのような相手に出くわす事になるのか。此処までは特に何と言って起こることはなかった。強いて言うなら食料に困ったという程度で済んでいる。少し自分の腕に霞が入ってしまったようだ。

「そうか。好きにすると良い。」

「分かり、ました。」

ところで気付いているのだろうか。元々掃除もされていない教会の屋根裏にはゴミと一概には言えないが廃棄物にも等しいものが転がっている。今、イーラの足元にある木材に気付いているのなら少しは迂回をしようと思う。俺はとっさに飛び込んだ。

「ああ。」

俺は転んだイーラの右腕を掴んで自分の方へと引き寄せた。少し力を抜いた左手で下から肩を掴んでおく。転んだ勢いそのままに窓に当たりそうになっていったが俺はそれを未然に防いでいた。

「気を付けろ。貴方一人の身でもない。」

俺はそんな事を言っていた気がする。

「分かりました。気を付けます。」

俺は不機嫌そうに座るとイーラの手の上にさせる。今日、どうして此処へと来たのかの理由は特に聞こうとは思わなかった。

「一つ、お聞きしたいことがあるんです。」

イーラは暫く時間を開けてからポツリと雨の降り始める音のように言っていた。俺は顔だけを動かしてイーラの方を向いておく事にした。

「私の事、大切にしてもらえますか。」

俺は特に答えようとは思わない。

「パートナーとしてお側に居ても宜しいですか？」

まだ俺は答えなかった。

「私、最初に会った時からずっと気持ちは変わっていません。沢山のことを教えていただきながら、私ができる事をしようと奮闘しました。迷惑かも、と考えた時もありましたが全て受け入れてくれました。だから、私、まだまだ沢山恩返ししたいんです。お側に置かせてください。」

「そうか。」

俺はその一言だけでイーラの言葉に答えた。その時は気づかなかったがもつと深い意味があると感じてしまった。これが感情で言うところのどう言うものであるのかは全く分かっていない。

兎に角今日は帰る事にしよう。

転寝をしていた青年は夢なのか現実なのか区別のつかない夢を見ているようだった。

第117話

石で造られた家屋の並ぶこの街にもようやく朝日というものが出始めた。一見、何でもないようなものだがそれぞれになんらかの意味を持つているものに見えた時、それがどうしても大きく開けた道のようにも感じれる。

黒髪で暗い色の服装をしている青年はいつもと変わらずにいつも通りの表情で皆の前に現れた。今回は何も起こしていない。

起こす理由もなければ食い止めるべきことも起こらなかったのだから本来はそのようなことを嫌う青年がやるはずもなかった。

「お帰りなさいませ。いつも通りの時間に帰宅されたようですね。」

銀色の髪をしている耳元に三つ編みを作っているそのメイドは青色の服装で腰には白色の前掛けをしている如何にもな格好をしていた。本職に言うのもアレだが、場違いなコスプレとも呼べるほど状況には似合わなかった。

「そうか。皆は起きていると言うわけではなさそうだ。丁度いい。昨夜には話しておきたいことがある。」

青年は小さな声で話そうとしているため、咲夜の耳元まで自分の口を近づけていた。艶めかしく囁くような声に内容の全てを把握できなかった咲夜は青年を言葉もなく送り出してしまった。

完璧で瀟洒なはずのメイドだったが何処か人間らしいところを取り戻しているためにどうしてもいつも通りの冷たい表情をすることはなかった。

「せめて一矢報いてくれ。」

言いかけた言葉を濁した後に青年はさらりとそのように述べていた。さらつ、とじていてあまりにも弱々しいその言葉に咲夜は不安を覚える。

「生きてよ。幻想郷には貴方が必要になるわ。」

「そうか。忠告ありがとう。」

青年は咲夜の言葉など耳には入っていないようだった。何があつたのかは全く分からないが青年は確かに隠し事をしているのはよく

分かる。

「何かあつたら言いなさい。出来る限り応えてみせるわ。」

「そうか。貴方達は生きて帰す。」

咲夜の言葉を鼻で蹴飛ばした青年。何か思惑はあるのだろうか見るからに怪しいことであるのは変わりない。何かあつたのかは誰も何も聞かないだろう。聞けるような雰囲気でもなければ聞かせようとしなかった。

「待ちなさい。」

咲夜は思わず大きな声で話した。

「それは時間にも言えるのか。」

青年はそれを返して何処かへといつてしまった。気晴らしなのだろうか、単純に居づらいのかは本人にしかわからないことだろう。

「何なのかしら。」

「彼奴は覚悟を決めている。」

「何処から聞いていたのよ。」

「最初からだ。」

「そう、それでどうしてそんなことが言えるのかしら。」

「簡単な話、最初から死ぬ気だった。それが自分の命と引き換えになろうとも厭わないらしい。」

「冗談でも、辞めなさい。」

「事実だ。逆に長く暮らしていてそんなことも気づけないのか。」

「そんな、はずはないわよ。」

「経験の浅い人間には分かるわけないさ。諦めな。」

「そんなことで諦められるものですか。」

「それならどうしたいのか、自分の心に聞くといい。きっと見つかるだろうさ。」

「善処するわ。」

咲夜は少し朝の風に当たっていた。

第118話

青年は何の気配もなく帰ってきた。いつの間にか居たわけだが驚いたのは当事者の方だった。

一旦帰ってきたあの時間からはそれなりの時間が経っているが人があまり活動的ではない、そんな時間である。何もかもが動かし始めようとしている歯車であるが八人だけはその中では異端子である事には間違いない。それを自覚するのはまた後の話になるわけだ。

「準備の方は済ませています。生きて帰りましょう。」

銀色の透き通った光沢のある髪を揺らしている青いメイド服を着ている咲夜が他の七人を早めに出そうとしている。それに青年以外の六人は何も文句は言わずに素直に話を聞いたので青年だけが中に残っているだけだった。

「何かあったのか。」

キョトンとした置物のような柔らかい表情をしている。まるで状況を理解しているようには見えないが何処か違う。

咲夜は何も答えない。

そのままの調子で出る事にした青年は雰囲気にも飲まれて前に出る事を躊躇っていた。いつもの青年の様子ではなく、何処か子どもらしい迪々しきを見せている青年は何か疑問が拭い切れていない、謎が深まっているような顔を見せている。

「さっさと行くわよ。アンタしか道を知らないんだからしつかりしなさい。」

「さあ、早く行きましょう。」

「いつまでメソメソしている。そんな時間があるのか。」

「一緒に頑張ろうね。」

「仕方がないからついていく事にするわ。」

「命を断とうなんて思わないでね。またトランプで遊ぼうよ。」

「そうか。」

青年は静かに答えていた。そして風が止んでいる。辺りには人は居ない。そして音が鳴るものもない。

「貴方達に問う。幻想郷に帰りたいたいと思うか。」

その回答には人の個性が出ていた。丁寧に行く意思を示した者、何を今更聞いているのか少し呆れている者、聞くこともないと青年の背中を叩く者。そして、最後に手を引っ張って早く行きたそうにしている者、それを見守る姉をしている者。

「そうか。ありがとう。」

「一人で溜め込むんじゃないわよ。」

博麗の巫女として権威を示しているが、一切の賽銭が集まった事がないと思われる霊夢が軽く肩を叩く。

「頑張りますよ。」

手を振って応援しているようなそぶりを見せる霊夢の対抗馬、早苗が青年の目の前に居た。

「行きましょう。白紙の運命は此処では終わらないわよ。」

右手で軽く頬杖を付いているレミリアは艶めかしく言っている。赤い爪がとても綺麗に輝いていた。

「元気を出せよ。一人じゃないんだ。」

豪快に笑っている。だが、それに邪気などなく心の底から励まそうとしていることだけが伝わってくる。赤い角を持っている勇儀が青年の肩に腕を伸ばしていた。

「帰ったら沢山話さないかね。」

勇儀の反対側、青い髪をしているにとりはぎこちなく笑っていた。「幻想郷を巻き込んでいるのです。その背中には何かがあるのですか？」

一人、厳しい口調で後ろから囁く咲夜。こういう毒もあってもおかしくはなかった。

「お兄さん、早く。」

右腕を引っ張っているフランドールが今回は先導してくれた。特に抵抗する意志もない青年はついていく事にした。

「必ず幻想郷に帰す。」

青年は全員に答えるように静かに宣言した。

それに何の異論もなく付いてくる。今までそんな事はあつたのだ

ろうか。

その頃、幻想郷。

「特に襲撃は無いわね。」

「そうですね。みかん、頂きますね。」

金色の髪をしている顔を整っている好青年はテーブルの上に置かれている橙色の果実を一つ手に取っていた。どうやら大分、生活には慣れてきたのか怠けているように思える。

「どうぞ。」

金色のウェーブがかかっている長い髪をしている女性が青い扇子で口元を覆い隠しながらそのように答えていた。

最近特に大きな事は起こっていない。それこそ、このような日常を過ごせるほど平和であった。

第119話

夢、という言い方が一番似合っているのだと勝手に思っている。

何処でこのようになったのか、黒髪の少しぼさついた髪をしている後ろで一つに結んでいる青年は思っている。その理由を青年は知っているはずもない。秘密裏に動いている七人のおかげである。そして何よりここまで集めてしまった方にも責任というものがあるのかもしれない。

青年が歩いていく中でそこそこ高い壁に覆われている見るからに頑丈そうな見た目をしている場所へとたどり着いた。青年は一旦足を止めて上を見上げながら一言呟く。

「見つからないように飛び越えろ。」

目の上に右手を当ててよく観察しているようなそぶりだけをしている青年がそれだけを後ろにいる人たちに伝えていた。何がしたいのかは全く分からないが青年の中では腹積もりができているとでも言うのだろうか。

「そこからは予定なんでもものはない。行こう。」

さらに青年はそのように言葉を連ねた。特に返事というのは全く聞いてなどいなかった。まるで壁を走っていくように上へと登っていく。

「仕方ないわね。」

霊夢がそう呟く。本当にそのような表情を浮かべながら青年についていく。少しだけ文句は言いつつも他の六人も付いていく。

石の壁の上で少しだけ顔を出しているだけで止めた。

石壁で出来ているが単色ということではなかった。青色や、緑色、その色合いが薄くて淡いものであるがまるで宝石が埋め込まれているような見た目をしている建物が多く活気のあるいい場所であることには違いなかった。そして道はしっかりと整備されていてぬかるんでいる場所はなく、様子を見る限り普通の街である。

到底、魔王が住んでいるとは思えない場所であるので青年以外は明らかに表情を歪ませていた。自分たちは一体何をしようとしている

のか、なんて考えているのだろうか。

「平和そうな場所じゃない。」

「いや、そうでもない。」

青年は何処からか聞こえてきた声に素早く答えていた。

「どうしてそんなことが言えるのかしら？」

「見た目で判断するのは良くない。それだけだ。」

「そうね。それでこれからどうするつもりなのよ。」

「計画していない。」

青年はそう言うと言導するかのように地面へと降りていた。その音はなく、まるで猫のようだと上から見ていた七人は思ったことだろう。それほどに綺麗な着地である。

「行きましよう。待たせるわけにもいかないわ。」

博麗の巫女として幻想郷の重要な役割を持っている霊夢が青年についていく。それにつられるように皆が降りていく。

城壁に囲まれている一見安全そうな見た目だが防犯面で言えばまだまなどころである。その点は文明の違いというのか飛行を可能としている人間などに対しての対抗策が思いつけなかったと言うのか。そんな訳で中に入ることは成功した。

整備されている道とは違い、土のある地面である。家屋と家屋の間にいる青年達は、ゆつくりと一人ずつ出てきて人々に怪しまれないようにしていた。そろそろ居るのも面倒なので青年はそのような方法を取っていた。

地理的には円形の城壁の中に街が形成されているようで小高い丘の上に城のような大きな建物があるという事だった。あまりにも質素という表現では可笑しいがその言葉が一番合っていた。

「此処からは単独行動を取る。それと紫に頼る事は難しい。気を付けてくれ。」

青年は誰の目も見なかった。ただ一点のなんらかの建物の間から見える小高い丘の場所を見ていた。何かがあるのか、それを聞くことは御法度のようにだ。それだけの雰囲気醸し出している青年はまるでこれからの事を予知しているようだった。

青年は不意に剣を抜く。腰から鞘ごと抜いた後に左手で柄を握って引き抜く。同時に金属音とともに高らかな悲鳴が辺りから聞こえていた。

青年の握っている剣の刀身にはしつかりと矢が吸着していた。前にも見た事のある感じがする。しかし、青年以外に何か危機感を感じた人は居なかった。ただ、凄い人がいる程度に楽しそうに見ていた。「散れ。固まっていると狙われる。逃げ。」

青年が矢を弾いたと同時に空気の抜けるような声を漏らした。その瞬間にそれほど嫌なことが起こっていると感じた七人がバラバラに移動していく。

しかし、左右にバランスよく別れていく様はどうしても微笑ましいところがある。いつ、何処でそのようなチームワークをつけたのかは青年には全く分からない。そして戦力的にもバランスが良いのがどうしてもきになるところだがそれを気にしていられるほど敵も待つてはくれなかった。

更なる矢が青年の前に現れる。

頭を狙ったそれは青年の横を通り抜けて地面へと向かっていく。

しかし、突き刺さる事はなく、軌道をその場で急に変えて青年を背中から狙っていた。まるでホーミング。

地面の方から青年の脳天を狙っている矢がまた青年の近くを通る。当たらないようになっていのかと言われるとそれではなく、全て青年が自力で避けている。まさに背中に目が付いているかのように完璧な隙のない動きをしている。

しかし、状況というのはよくはならない。あまりにも遠くから、しかもよく知らない地形の中で対峙している。相手から誘われるように裏路地へと逃げて道なき道を進んだとしてそれに終わりはない。

白紙の地図を描いていく途中で全てを覚えながら矢を避け続ける、或いは受け止め続けると言う大業を為し得てやっと対等に等しい立ち位置となる。

青年は抜いている剣を持っている左手を下に向けて家屋と家屋の間に入り込んだ。まるで箱を積み上げただけのような見た目で屋根

は平たくなっているとされる。少し考えるためか剣を鞘の中に納めてから左手で耳元を搔いていた。

正に相手からは死角となるその場所で壁を蹴り上げた青年はその調子で隣の壁を蹴り上げるとさらに上へと上った。身のこなしは正に猿のようだ。

建物の縁を掴んで腕の力で屋根の上に登って身を伏せていた青年は暫くその場から動こうとはしなかった。理由としては簡単な話。相手に自分の位置を簡単に知られないためだろう。そしてそれによって生まれた時間によって何処に行こうか考えていた。

素早く小高い丘の上に行くためには一旦地面に降りて走ってみた方が良いのか。それとも屋根の上を潜伏している暗殺者のように伝って行くか。そんなところだろう。

かきあげただけの前髪が目の辺りに垂れてきたので右手で再度上に持っていくと足を折り曲げて膝を立てると腰を上げてから腕を伸ばして上半身を起こした。そして後ろへとゆっくりと下がると助走をつけて前にある少し高い建物へと飛び移る。

左腕をかりうじて屋根の上に乗せると両脚と右腕の力で体を浮かせてから屋根の上に再度身を屈ませて同化させておくことにした。息を潜めているカメレオンとはいかないがそれに近いものはあった。息を止めて体を動きを止め、思考も何もかも止めた青年がその場でじっとしていた。この先には大きな道がある。

その道は多くの人が行き交い、この街の中心地であることには間違いないかった。人々は物を売り、自分の商品をアピールするために大きな声を出して客引きをしている。それにつられて買いに来る客が居て少しの会話を済ませた後に取引を終えてまた何処かの店へと向かう。いたって普通の生活が営まれている事には間違いない。

青年はゆっくりと体を起こすと屋根の縁から下を覗き込んだ。案の定、人が多い。

青年は少し顔を歪ませながら走り抜けようと決意した。しかし、時間稼ぎもここまでのようだ。

相手の手から放たれた矢が青年を狙っていた。

真つ直ぐな軌道で恐らくだが今のところは水平線であることには間違いない。青年はそんな事を考えつつ、一回転体を右へと向けると手を使って屋根から降りた。

空中に身軽にも縦に一回転を加えた後で建物の壁を蹴り出して地面へと降りた。

受け身を取り、最小限の傷で済ませた青年は周りの評価には目をくれずに前へと突き進んだ。何も見えていないと言うわけではなさそうだが迷惑であることには間違いなかった。

そして青年が居た上から矢が一本降ってくる。どうやら上へと軌道を変えて青年とは逆方向に一回転を加えたらしい。

青年はゆっくりと体とその矢の距離を測りながら身を翻していた。そしていつのまにか抜いていた剣の刀身で更にその先へ行くのを防いだ。刀身を傾けて地面へと一直線に向かせた青年の手腕によって周りにいた人に直接的な外傷は与えなかった。

青年は冷静に小高い丘の先にいるのであろう矢を放った人物に軽く睨みを利かせていた。

第120話

辺りからは冷たい視線を浴びている。冬の雨のような気分の青年は一旦息を整えてから再度人の迷惑にならないようにこの場から離れようとしていた。そこを狙ってくるかと思っていたがその必要はなかった。

まるで生きていているように意思を持った地面に刺さっていたはずの矢が青年の方を向いていた。

片目で視認した青年は間髪入れずに自分の体を左側へと倒した。

その横を顎を砕こうとするボクサーのアップパーのように天へと昇ったそれが急降下と共に青年の方へと向かってきていた。

何度も何度も獲物を捕らえようとするその技はさながら鷹のようで鋭い眼光と食い殺そうとする獰猛さが現れていた。もう既に獲物として捉えられているのだろう。

獲物として認識された青年は横に転がり勢いそのままに起き上がりながら地面を蹴って小高い丘へと向かっていった。後、路地を何本か行った先に小高い丘がある。青年はひとまずそこまでは向かっていく事にした。何となく相手の意図が汲みとれるので行くだけはしてみろつもりなのだろう。

青年は走り抜ける。まさに流星となって道突き進んでいく様は視認できるレベルというのを超えていた。低空飛行と蹴り出す脚の力のサポートとして風を起こしている。微妙な力かも知れないが確実に速度を上げているのはよく分かる。

相手から矢が飛んでくる事はなかった。もう視認出来ないというよりかは打つ必要が特に無いからだ。言葉を口で交わす事が一応可能な距離まで詰めていた青年は特に挨拶などはしなかったがポツリと一言だけ話す。

「イーグルアイ。」

小高い丘にいる一人の男性に近づいていきながらその足取りそのままの早さでそのように言った。何かを潜ませているようなその声に対面したその人は何処か拳動がおかしくなっていた。

「こうしたことには理由がある。」

黒色の眼帯を左目にしている深緑色のつばのあるハットを被っている。服装は小高い丘に合わせた色をしていてハットの色と変わりはない。正に潜伏するための服装であるが青年にはそのようなことは通じなかった。

「そうか。手荒な真似は辞めろ。何人傷を負わせることになったのか見当もつかん。」

青年は半ば呆れているようだがそこまで気にしている様子はなく、淡々とした軽口のような口調で話していた。

「それは申し訳なかった。」

自分の非を認めたとところで青年は何かしようとすることはなかった。

「して、どうして手紙を括り付けた矢を放たなかった。」

「聞かなくても分かるだろう。」

「そうか。」

青年は腰に携えている鞆を右手で持つ。そこからそのまま抜き取り、引き抜こうと親指で唾を弾いた。今から戦闘を行ってもいい、と感じさせるが相手が乗っては来なかった。青年は雰囲気だけ出していただけで本気にはしているわけでもなかったのですぐに納めた。

「実力を試したかったと言うことか。」

「恥ずかしい話がそうなる。」

「して、ライル。そちらの生活はどうだ。」

青年は急に話を変えて聞いていた。

「別にいつも通り変わらない生活をしている。」

ライルも一応答えるが二人の間には何か溝というものがあるような気がした。

「そうか。」

青年が聞いた割には興味のあるような返答はしなかった。適当に受け流しているだけのその返答は何処か虚無感のあるものでスカスカであった。感情も何もこもっていないただの言葉に過ぎない。

「二つ変わったことがある。」

「何だ。」

「今日をもって自由の身になった。」

「そうか。何日かは楽しむといい。」

「そうさせてもらおう。」

「狩人として山奥で暮らすのか。」

「いや、街中に出没してただ一点を狙うつもりだ。」

「そこまで荒れているとは思いたくなかった。」

青年は何処かデジャヴを感じているのか仏のような暖かい表情をしていた。どうしても気になることがあるのだろうか。

「これから魔王に仇なすのだろうか。それなら万全な準備をすることだ。」

「その言葉、有難く頂戴する。」

青年はそう言って踵を返す。その横を通り過ぎながら一人の狩人は野ばらに放たれた。

第121話

夕暮れ時、もうそろそろそのような時間という人が現れてもおかしくはなかった。日は段々と傾いてきている。紅く染まりつつある体を労わりながらもゆっくりと歩みを進めている。

名は今の所なく、誰かから又は自分で名乗った愛称でしか語ることのできない人物は魔王の居るとされる街の中で四人と戯れていた。

何か目的があるわけでも、これから城の中で侵入しようとも考えていない。計画のけの字もない頭で黒髪を後ろで結んでいる青年はその時間を思うがままに過ごしていた。

「これからはどうする。」

青年は短絡的に聞いていた。

「食事なのか、寝る場所なのかはつきりとして。」

「霊夢、俺は両方聞いている。今の所無くて困る事もない。それに明日には向かっている事だろう。」

青年はのらりくらりとした動きで霊夢の言葉をかわしている。

「何か名物を食しましょうよ。」

「そうか。悪くない選択だ。」

青年はまたも短い言葉で答える。

「ですよね。早速聞いてみましょう。」

緑色の髪をしていて、左肩に一房乗せている髪型をしている元気そうな見た目をしている早苗が見知らぬ人に名物について聞いていた。

別に怪しまれる事もなく、何も起こらなかつたその会話に一人だけが殺気立った視線を青年に向けていた。青年はそれに答えることにしたのか、首だけを向ける。

「ここは思ったよりも治安が良いようだ。」

「そんなことを聞きたいんじゃないの。魔王が住んでいるのにどうしてこんなに平和な雰囲気があるのよ。」

霊夢は胸ぐらを掴みそうな勢いで顔を近づけた後で青年は罵声のように浴びせていた。それを聞いていた青年は霊夢の唇に指を押し付けて黙らせていた。

「ここでは禁句だ。」

それだけだった。

青年はそれ以上の情報を与えることはなく、霊夢は仕方がなく黙っておくことにした。決して満足しているわけではなく、いつになく反抗的な目を青年に向けていた。

「皆さん、この近くにどうやらあるようですよ。」

快活そうに近づいてきた早苗に道を案内される四人はその背中を追っていた。

「何が名物なのかは聞いてきたのか。」

「はい。どうやら山の幸をふんだんに使った炒め飯のようです。」

元気そうにそう答えた早苗の視線は霊夢の方に向いているのを青年は気づいていたがここでは何も言わないことにした。面倒なことにはしたくないのだろう。

「そうか。それは楽しみだ。」

青年は霊夢から離れるように早苗の近くまで歩いていった。その後ろに三人がついてくる。旅人として扱うのには幾分か不審な点がある。それを気にするほど青年は繊細な人でもないので何も言うことはなかった。

後の三人はといえば、少し嫌な役をしてもらっているので別行動と なっている。しかし、良い感じに溶け込んでいるに違いないと青年は 考えている。

時間としては3時間ほど遡る。昼は過ぎていないと言う頃合いで 青年は街の中の風景に溶け込んでいた。辺りからはどうしてもひそ ひそ声が出ているがそのようなことを気にしていても先には進めな いので何か行動を起こすことはなかった。

まずは誰か見つけることが先決となるだろう。まるでゲームのよ うに始まった突如として行われたもてなしによって散らばったので まずは一度適度に集めておく必要があると思った。面倒なことにな ったと思いつつながら青年は街の中を歩いていく。

まず最初に見つけたのは一際目立つ格好と見た目をしている人だった。額から大きな赤い角が出ていて、ノースリーブの格好と腕には何かをはめていた。そして、その横で淡い水色の服装をしている鍛冶職人として武器の修繕のために連れてきた河城にとりが居る。鬼と河童は本来なら上下関係があり、厳しいらしいが今の二人の様子を見ている限りではあまりそのようには感じなかった。まるで友人のように話している二人に青年は空気を悪くしてしまうことを承知で割り込むことにした。

「迷惑をかけた。怪我はないか。」

青年は落ち着いた言い方で二人に言っていた。

「別に問題はない。しかし、あれは何だったんだ。」

四天王の一人であり、挫折を味わった星熊 勇儀は少しお気楽そうな表情で青年に言葉を返した。

「盟友、ちゃんと説明してよ。」

なんて事を言ってくる辺り、前よりかはしっかりとしているらしいにとり。青年は答えておくことにした。

「そうか。あれは多分宣戦布告と考えるても良かった。が、あれは適当に放たれたものであり、俺の勘違いだったようだ。」

少し悩みながらも言葉を選んだ青年はそのように二人に説明していた。それを聞いて不審そうにするも、すぐに表情を変えて青年の肩を組み始める。

「細かいことは気にしない。まずは霊夢か早苗でも見つけないな。」

青年はそれに賛同する。元々そうするつもりであったので何か反論を起す必要もないのだろう。

「のんびりと探す事にしよう。」

青年は少し疲れた後の声を出して未知なる道へと進む事にした。

第122話

青年が勇儀、にとり、と合流していた頃、霊夢と早苗は行動を共にしていた。

別にこれといった理由はないが巫女であると言う役職的な特徴に惹かれ合い何となくこのようにつながりがあるのだと思われる。実際のところは全く分からない。

「ここはなんて言う場所なのかしらね？」

博麗の巫女として幻想郷で存在していた博麗 霊夢はその場で少しだけ不安そうな表情を浮かべていた。しかし、口ぶりから顔ほどでもない。

「そういえば何も聞いていませんでしたね。」

守矢神社の現人神でもなりながら巫女でもある東風谷 早苗は霊夢の質問に少し首を傾げながら答える。特に話すことでないが気にならないと言うところだろうか。

「いつも肝心なところは伝えないのは変わらないわね。まあ、あの状況では無理もないわ。」

「あの矢は何を意味していたのでしょうか。」

「さあ。杞憂に終わる事を願うわ。」

赤い服装をして街の人々に紛れ込んでいる霊夢が何となく他人事のように言っていた。

「少し面白くなりそうですよね。」

対する早苗は何処か頭のネジの飛んだような発言をしている。まるで状況を分かっていないのではないかと疑ってしまうが決してそのようなことはないと言いたい。

「面倒ごとには巻き込まれたくないわよ。」

息を吐き、早苗の言葉を吹き飛ばしたところで状況が変わることはなかった。

「良いじゃないですか。ここでは常識にとらわれてはいけないのですよ。」

「何自信たっぷりになっているのかしら。」

「冷めた目を向けなくてください。」

「良いじゃない。減るものは何一つないわよ。」

霊夢は平つぺたい目をしていた。少し小馬鹿にしているようにも見えるのだが、別にそのようなことはないのかもしれない。面倒なことには巻き込まれたくないだけなのかもしれない。

「何か怖いですよ。」

「常識には囚われないのでしょ。人によってその範囲は変わるものなのよ。」

少し胸を張っている霊夢に返す言葉のない早苗は黙ってしまった。そして、悔しそうな表情を浮かべる。少し涙を溜めているが男性には効くだろうが霊夢には見向きもされなかった。

「何処かに居ないかしら。」

「青年さんですか。」

「そう。早めに合流はしておきたいわよね。」

「確かにそうですね。でしたら、街の中心へと向かうのがいいと思いますよ。」

「その必要は特になさそうね。」

どうしてですが、そう聞こうと早苗が口を動かしていたが何処かで聞いたことのある慣れた声にひっそりと息を潜めてしまった。

「無事だったか。後は紅魔館組だけか。」

「そのようね。別に気にする必要はないと思うけど。アンタは見つけておくのでしょうか。」

「そのつもりだ。」

黒髪の何処か懐かしい雰囲気のある灰色の服装をしている青年は後ろに束ねたものを揺らしながら首を縦に動かす。

「早く見つけなさい。私は此処で待っているわ。」

「そうか。異論はないなら俺はすぐにこの場から離れる。」

青年はそこに居る皆に聞いていた。その意思が伝わったのかどうかは分からないがどうやら何となく伝わったらしい。

「任せろ。待ってやるよ。」

「早く帰ってきてくださいね。」

「待つてるよ。」

「そうか。なら、俺は行く。」

踵を返して街の雰囲気という波に潜っていた青年は姿、そして存在感まで消えていた。

「待ちましよう。」

霊夢はそう言う。壁にもたれかかり人を待つ姿は如何しても巫女という感じはなく、何を隠しているのはよくわかる。

それからは少し時間が経っていた。片目を閉じながら青年の帰りを待っていた霊夢は誰かに話しかけられた。

「誰かを待っているのかね。」

全身を薄茶色のコートに身を包んでいるその人は何処か怪しい雰囲気を持っていた。そして急に話しかけられた事による不信感から何となく霊夢は警戒心をむき出しにしている目を無意識に作り出していた。

「アンタは誰よ。」

「私は名乗る名のないこちら辺では有名な情報屋だ。」

「どうして私に声をかけたのかしら。」

「気になったから、と言う理由では不満かね。」

「ええ、そうね。」

「基本的に治安がいいので問題はないが気を付けてくれ。私のように声をかけるだけの行為では済まない人もいる。」

「忠告は素直に受け止める事にするわ。」

「それは助かる。では、私は此処で去る事にしよう。」

「早く行きなさい。」

「そうさせてもらおう。」

その人は家屋と家屋の間にある道を通って何処かへと行ってしまった。まるで風のような身のこなしであるが胡散臭さの取れないあれには如何しても反応し難い。

「今、帰った。」

「タイミング悪いわね。で、紅魔館組はどうしたのよ。」

「お嬢様姉妹と世話役のメイドとして別の所に行かせた。」

特に青年は何が起こっていたのかは触れなかった。

「そう。立ち疲れたわ。何処か行きましよう。」

「そうか。」

青年は何も気にしていなかった。特に詫びることもなければなにか思っているような表情はしていない。

「これからどうする。」

第123話

夕暮れの空の下、女性三人は歩いていた。真ん中には銀色の髪をしている耳のあたりで三つ編みをしている青い服装をしているスカート丈の短い服を身に纏い、腰には白いエプロンを巻きつけている。目はほんの少しだけ鋭いが愛想がないと言うわけでもない顔つきをしている失礼な言い方をするとカツコ可愛いと言う感じである。

その女性の左手を掴んでいるのは青い色をしたショートボブの髪型をしていて白色のナイトキャップ帽をしている。背中には大きな細い黒い翼があり、吸血鬼という種族である事を示していた。そして口元から収まりきらない歯が二本、唇の両端から出ている。

対して右手を掴んでいるのは金色の髪の色をしているサイドテールをしている髪型で先ほどと同様に赤いナイトキャップ帽をしている。全体的に赤色の服装で背中には宝石のような煌びやかな色をしているものが付いている翼と呼んでいいのかさえ危うい見た目をしているのを付けている。どうやら姉妹か親戚、という見た目をしている。

「咲夜、食事をとりましょう。」

青色の髪をしている人が手を繋いでいる女性が話しかける。咲夜、と呼ばれたのは紅魔館のメイド長を務める十六夜。咲夜のことなのだ、今はほんの少し立場が入れ替わっていると思われる。

「姉様の意見に賛同するわ。」

反対側にいる金色の髪をしている女性も同じように嘆いていた。「分かりました。何を食べたいですか？」

咲夜は二人に視線を合わせながら聞いていた。本来ならこのような事はしないのだが、青年に言われていることがある。

三人で近くに住んでいる屋敷の世話役と子供という設定だ。見た目や言葉遣いから何となく誤魔化せそうなところであるが上手いのかと言われると何ともいえないところである。しかし、やらないわけにもいかないので此処では役目を全うするのみである。

「咲夜のものなら何でもいいわ。」

「宜しいですか、妹様。」

「うん。」

元気に返事した金色の髪をしている女性はまるで子供のように答えていた。演技というのか素なのかは分からないがうまく出来ていると思われる。

「それでは、食材の方を買いましょうか。」

少し時間は戻る。

青年に建物の上から呼び出された時の話だ。

大きく賑わっている道沿いを歩いていた三人は上から落ちてくる水滴に気付いた。空は晴れていてまずありえないと感じたが青年がしたというのならばそれは仕方がないと思われる。誰にも気づかれたくはなかったのか、それとも何か違う理由があるのか。咲夜はともかくあまり考えないことにした。

「何か用？」

「少し面倒な事になった。そこで貴方達には変装を行ってもらおう。それと、誇りを傷つける事になるが一つ提案がある。」

青年は咲夜とほとんど視線を合う高さにいた。ただし、身長的に青年の方が低い。

「考えぐらいいは聞いわ。」

「そうか。ここで衣服を変えるのは期間的にも悪手になる。それにレミアとフランと同じ身長は居ない。其処で敢えてそのままでもいいかと思っている。」

「どのような手段でもやるつもりよ。お嬢様と妹様が良いと言うのなら私は何なりと。」

「そうか。それは良い忠誠心だ。ならば、咲夜が世話役となってくれ。レミアとフランには子供役をしてもらう。」

「承知しました。」

「どうして私に話を伝えてくれないのかは分からないけど今はそんな小さな事を気にしているわけにはいかないわよね。」

「楽しみにしているわ。」

「そうか。それでは頼んだ。」

青年は壁を登りながらどこかへ向かっていった。まるでトカゲのようであるがタネがわかればなんてことも無い。

第124話

友好なる灯火は明るく、そして暖かく人々を起こしている。まるで母性溢れる人の抱擁のように優しく起こしてくれそうなその陽が此処、シソー国に降り注いだ。

一人、その前から起き上がっていた人もいた。

黒髪で灰色の服装で身を包んでいる何の変哲も無い市民のような青年は廃墟と化した建物の上でゆっくりと小高い丘の上にある屋敷を見ていた。その目には確かに復讐に燃えているように目をしていながらも穏やかな木々のような雰囲気併せ持っていた。

随分と長く眺めていたので見飽きたのか、すぐに降りていく。

「此処からは何もすることは出来ない。」

青年は立ち上がって右腰から剣を抜くと切っ先を上に向けてゆっくりと空間を引き裂くように動かした。

八雲 紫のように上手くいくことはなく、プツリと糸を切るだけだったかのような徒労に終わった。

その様子を眺めてから青年の表情が柔らかくなると建物から飛び降りた。

「貴方達は太陽と月。どちらになりたい。」

後ろで髪を結んでいる青年はゆっくりとした落ち着いた口調で話し始めた。だが、その質問の内容は理解されなかった。

「そんなこと聞いてどうするつもりよ。」

黒髪で青年と同じく後ろで結んでいる赤い服を着ている少女はいつも通り青年に突っ掛かる。

「そうか。して、解答は。」

「太陽よ。」

「そうか。他は何かあるか。」

「私は月よ。」

「お嬢様がそうおっしゃるなら。」

「仕方ないけど月よ。」

「フランがそう言うなら仕方ないな。」

「その言い方やめなさい。」

「して、勇儀と早苗とにとりはどちらがいい。」

青年は最後に残っている人に話を聞こうとしていた。

「私は太陽だ。」

「私はそうですね。太陽の方が好きです。」

「盟友と同じにするよ。」

「それは俺か。それともそれ以外か。」

「太陽が良いです。」

少し戸惑いながらもしつかりとした口調でそのように言ったことを見て青年は頭を一回だけ縦に振った。

「そうか。ならば支度を済ませた後、向かうことにする。」

「何処に、なんて野暮なことは聞かないわよ。」

「そうか。ならば、行こうか。」

青年は踵を返して建物の中から出て行った青年の背中を追いかけるように七人が追いかけていく。しつかりとした足取りで向かっていく。偽装とかそんな事はしない。

「今回の作戦としては二手に分かれて敵を倒して行くルートを取る。その過程で面倒な敵の足止めをレミアアとフランドールと咲夜に頼みたい。無視しても構わないのが先ほども伝えた通り面倒な事になる。背後を取られる前に先に潰してくれ。」

「分かったわ。」

「そして、後の四人には俺について来てもらいたい。が、一つ忠告がある。自分の身は自分の力で守ってくれ。」

「後、面倒なのは何人居るのか全くわからないと言う事だ。もしかしたらその後で二手に分ける可能性がある。そこだけは注意してほしい。」

「それでは、武運を祈る。」

青年はそこで真っ直ぐに行く。レミアアには左側から攻めてもらうように伝えた。

此処からはどうなるのかは全く分かっていない。殺伐とした気持
ちとは裏腹に皆は胸を騒がせていた。

第125話

六人がけのテーブルがこじんまりとした部屋の中に入っている。そのテーブルで食事をしている人が居た。

その人は陽の光の入らない蝋燭の明かりだけを灯した場所で赤色のスープをスプーンで食していた。

「今回はせっかく頂いた野菜をトマトで煮込んでみました。如何ですか？」

黒い服装をしている執事がそのように聞いている。物腰の柔らかい口調で波の立たない話をしている。

「とても好みの味だ。いつも有難う。」

食事を摂っている人は笑みを少しこぼして落ち着いているのか優しい声をしている。スプーンを右手に口元から舐め取るように取り出していた。

「大体の好みは把握しております。ある程度は準備させてますので何なりと。」

一回頭を下げて腰を45度に曲げる。そして一瞬、その場で止める。それからゆっくりと頭を上げた。

「今日は遠慮しておく。」

「理由をお聞きしてもよろしいですか？」

「昨日の話だ。私は街を散歩していた時に見かけた。我が宿敵を。顔は知っているだろうから直接は話していない。」

「そうですね。承知いたしました。スープはこちらで処分させていただきます。」

「私が責任を持って食す。それは譲れない。」

「承知しました。一つだけ伝えておきたい事があります。毎度の事で聞き飽きたでしょうが、明日はお出ししません。もし体調を崩された際、責任を取ることが出来ない事を知っておいてください。」

「分かっている。」

少し不機嫌気味に答えているがそれを何回も聞いているので何とも言い返す事はできなかつた。お互いに主張をしているので折り合

いを見つけるのは困難かと思われる。

「三食同じでも構わない。それにしても毎回言っているが飽きたりする事はないか。」

「執事としての気遣いです。飽きたりする事はありませんよ。」

執事はしつかりと目を見て話していた。その言葉に嘘はない。

「少し一人にさせてもらえるか。」

「分かりました。」

執事は一礼してから部屋から出て行った。

「ふう。とても疲れる。しかし、よく此処までうまいスープを作れる。」

食事をしている人は右手に持っているスプーンでスープをすくい出すと鼻の近くに持って行ってからその香りを嗅いでいた。

そして目を閉じる。満足したかのように顔を上げてから口の中に流し込んだ。

「至極である。」

そう叫んだところで誰からも声をかけられる事はない。一人の世界だからこそ自我をむき出しにしていられる。この人は美味しい食事を摂る事を幸福と考えている人だった。しかし、味が良ければ何でもいと言わなくてもない。どのような作り方をしているのか、食材はどこのものか。そのような点も加味して総合的に食事としている。

執事である人はそれを知っているためにわざと先ほどのように口うるさくしているのかもしれない。

本来ならば誰も入らないはずの部屋である場所にある扉が何の前触れもなく開いた。そこで発生する音は全くないが部屋の空気を乱したのは言わずもがな分かるはず。

「なあ、少し外に出ても良いか？」

黒色の髪を風に遊ばせた後のようになっていた髪型で紫色のシャツを着ている。薄茶色の短パンを履いていて右手にはなぜか白い枕を持っている。少し眠たげな目をしている少年が立っていた。

「構わない。昼前には帰って来てくれ。」

「また食事に誘うのか。僕はそこまで必要としないのは知っているだ

ろう。」

「一回ぐらいは付き合ってくれても良かろう。」

「面倒なんだよ。もう、行く。」

その人は扉を閉めて何処かへと行ってしまった。

「うーん、友人との食事が一番楽しいのだが。彼処を気に入ってくれたのは嬉しいものだが。」

またもや静寂の時間が流れ始めた。スープの中をスプーンが泳いでいる音しか聞こえてこない。スープから発生する湯気を鼻の中に吸い込みながらその時間を堪能していた。

「主君、少し貸してはくれないだろうか。」

「私に今の所、そのような予定はない。好きに使ってくれ。」

「了解した。」

その人は扉からひよっこりとした顔を何処かにしまつてまつた。

「あの人はいつも最低限しか話さない。もう少し言葉を交わすにはどうすれば良いだろうか。」

「良いんじゃない。あの人は元々口数は少ない人よ。」

「貴女はせめて扉から入って来てほしいものだ。」

「良いじゃない。」

黒いローブで顔と体を隠した魔術師が部屋の中に入ってくる。

「貴女のその自由加減には困つたものだ。」

「裏切らないから何も問題はないわ。利害は一致しているでしょう。」

「そういう問題ではないが。ところで、何か用があつて来たのだろうか。」

「そうね、頼みたい事があるのだけど良いかしら？」

「良いだろう。」

「後でリストを持ってくるわ。暫くしたらまた来るわ。」

「厄介なものだ。」

食事をしているだけの人は一つため息をついてスープの入った皿を持ち上げて一気に流し込んでいた。シソー国国王であるラーはいつも通り朝食を食べ終えた。

第126話

悠然とそびえる白い壁で出来ている城が城壁の向こうで立っていた。青年にとつては前日に来た場所であるが何か変わっていると感じてしまったのは気のせいかもしれない。

「これから月と答えた人が左側から回り込んでほしい。側面から侵入して奇襲をかける。」

黒髪の青年は静かに風景に溶け込むながら話した。周りは木陰という名ばかりのひらけた場所であるがなにか問題があるという風には見えなかった。まるで一本の木か、大きめの岩。

「厄介事を任せられたわ。」

薄い青色の髪をしている幼い容姿をしている白色の服装をしているレミリアがそれに答える。後に続く2人も同様の意見であるが反対をするような事はなかった。

「そうか。ではもう行く。後で会えたら会おう。」

青年はそう言つて城壁に取り付けられている黒色の鉄製の重たい門を開ける。ゆっくりとした動きから金属の擦れる音が聞こえてくる。本来ならば客として招かれていないので開いていない。

「此処からどうなるかは全く分からない。心してかかれ。」

「分かっているわよ。」

少し厳つい口調で文句でもあるかのように答えると霊夢は青年の右横を歩いている。

「頑張りましょうね。」

霊夢とは引き換えに優しく楽しそうに答えている早苗は青年の左横を歩いていた。何をもって此処にいるのか、それを聞く事はしないが共にしたいと思つたのだろうか。

「何が待っているかは知らないが何処へでも行くつもりだ。」

勇ましくも聞こえるその野太い声が聞こえる。鬼としてこの世に生を受けた勇儀は自身の持つている性格がこのような言葉を出させている。

「そうか。だからこそ、嫌なんだ。」

「何か言った？」

「いや。何でもない。」

「弱音吐いたらただじゃおかないわよ。」

「そうか。」

青年は気軽に話したところで一旦止まった。それに合わせて皆が止まる。

城の中に入って中庭と呼べる場所に来ていたがそこに居たのはまさに岩と呼べるような怪物だった。

ハゲ茶色の体と岩を粗く削っているだけのような色をしている打撲用の武器と言葉も話せなさそうな雰囲気を漂わせて青年たちの目の前に現れた。

「隻眼の狩人がこのような怪物に化けるか。」

青年はボソリと呟きながら右腰に携えている剣を抜いて切っ先を地面に向けながら歩いていった。その姿は孤高の剣士でありながら無謀にも命を散らせようとしている愚者でもあった。

「行くわよ。」

「空を飛ばうともう関係ない。やれる事はやってくれ。」

青年は後ろで動き出した二人にそのように言葉を投げかけた。もう覚悟は決まっている、その証拠でもあった。

「私は地上からあいつの足を止めていれば良いんだな。」

肩を見せている勇儀は手につけているその装備を鳴らしながら青年の右隣へと向かってきていた。青年は特に反応は見せなかった。隣に来ようとも何もしなかった。

「そうだ。力の限り戦ってくれ。」

「分かっている。私の方が信用出来るんだろう。」

「ようやくか。余力がある勇儀を選んで良かった。」

「今更だ。」

左腕を前にして、構え始めた勇儀の横で青年は面倒になりそうなこれからの事を考えていた。

「グアアアアア！」

雄叫びをあげたその怪物が青年の前へと持っている鈍器を振りか

ぶる。青年は止める事はなく前転をしながら前進して勇儀は後ろに飛び退いて避けた。

上からは二人が札を投げて注意を前と目の前と頭上の三点に分散させた。何も相談などしていない。

「中々な力だな。」

地面を抉り、青年の頭上すれすれを通った鈍器が振り上げられる。どうやら一番危害を加えられそうな目の前から先に対処するつもりらしい。

振り上げた鈍器の影の下に青年はいたが慌てる様子はない。まるで星でも眺めているかのように一点だけを見ていた。そして少し靄がかかっているようで状況がまるで分かっていないかのようだった。

轟音が鳴り響く。

何か硬いものと地面にある石畳が割れる様な音がした。その右横では跳び退きながらもすんなりと鮮やかに避けていた。

地面に届いた足先に力を入れて捻りを加えた後で持ち替えていた剣を怪物の腹部に当たる様に水平に動かした。右肩を内部に入れてから両手で振ってみたがあまり効果というものはなかった。まさに鋼鉄、そして頑丈な体には傷一つ付いている様な気がしなかった。

青年は一気に間合いを開けて様子を見ることにした。その判断の速さは並大抵なものではなく怪物がどこに行ったのか一瞬見失うほどだった。

「勇儀、今の力を見て受け止めれる自信はあるか。」

怪物の居る場所の後ろからのそりと現れた青年が聞いていた。その返答に一瞬だけ戸惑った勇儀。言い出そうとしたその言葉を青年に邪魔された。

「それなら早めに離れた方がいい。」

青年は辛辣にもその様な事を口に出した。そして勇儀には背中を向けて警戒心が無いことを露呈させた。

「邪魔だと言うのか。見くびられるのが一番嫌いなのは知っているだろうな。」

受け止める姿勢を作り上げた勇儀の前で青年は静かに佇んでいた。状況とは似つかないほどに優しい時間を過ごしている。

「霊夢、早苗。少し距離を開けて左右から挟みこめ。」

「仕方ないわね。」

「分かりました。」

2人の返事を待ち、青年は前へと歩き出した。敵の間合いに入り込んでいるがまるで見えていないかのように剣を地面に向けたまま動かそうともしなかった。石像が地面を滑っているだけの様で一種の才能かと思われる。

怪物が持つている鈍器を振り回す。青年の左側から地面に叩き落とす様に振られた物を青年は体を小さくさせながら下へと潜り込ん で受け流した。

キュツ、という靴と地面の擦れる音以外には怪物の出している吐息と周りの息遣い、そして地面に当たって行き場の失った鈍器の嘆きが聞こえる。

右手の指先を地面につけて後ろで隠していた剣を出しながら右脚を前に出して振り抜く。一直線に放たれた一撃が何も無い場所へと当たる。それでも一切の傷はつきそうにはなかった。精々、打撲になりそうな感じである。

なんともなかったかの様に振り向いた怪物が何か気に触ることをされた様に鈍器を振り上げる。其処を青年は動く事なく一点に集中させた。

横からの刺客を忘れた怪物は爆発する札に全て当たった。多少なりダメージは与えられたと思われる。

しかし、青年は何も行動には映さなかった。

と言うよりかは動こうとはしなかった。爆発の中で怪物の声を聞いた時、青年は本能的にまだ戦える、と悟ったのだろう。近づいてくる勇儀を右腕で防いだ。一瞬判断を鈍らせた勇儀だったがそれが功を奏した。

勇儀の腹部辺りを絡めとるように振られた鈍器が札の爆発の中から現れた。

止められたかどうかは判断しないとして勇儀は予想もしていなかった。

「手間を掛けた。」

「魔法は基本的に受けないのだろう。せめて気を紛らわせることぐらいしかする事がない。それに比べれば勇儀は前に立って盾になることも出来る。今は必要だ。皮肉な言い方だが許してはくれるだろうか。」

「そうかい。私が前に出る。その間に準備しておけよ。」

左手を上げてじゃあな、と別れの挨拶をするように前に進んだ勇儀が煙の中からうっすらと見えている影を捉えていた。左腕を前にして構えた勇儀は腰を屈めながら左側へと飛び退いた。地面すれすれで横に流していく。今までなら受け止めていたのだろうが今はその様な事はしなかった。結果は分かっている。

「任せる。にとり、あれを取り出してくれるか。」

後ろにいるはずのにとりは背負っていたカバンの中をぐそぐそと漁り始める。荷物というよりは持たせたものが多くなってしまうがにとりは気にする事なく此処までついてきていた。不満があるだろうが今のところは表に出ていないので青年は問題外だと考えていた。

「霊夢、早苗、時間を稼いでくれ。倒そうとムキになるな。」

青年が静かにそのように言う。雲の流れのある空がふと笑みをこぼした。

「早速やってみるか。」

勇儀が前へと走り出した。

鈍器を持っている手の甲を狙った一撃は何も障害なく当たった。しかし、此処で油断をしなかった。勇儀はすぐに身を引くと相手の間合いから抜けた。まだ掴めていないのだろう。相手の戦法はたしかに単調だがだからこそ、怖いという相反する要素を持ち合わせている。勇儀もそれに気づいているのかと青年は感じた。

青年はもしもの時のために技を貯めておくことにした。今のところ

ろは全く使おうとは思わなかったがここら辺で使っても良いのかもしれないと青年は考えている。

もし、勇儀が命を落としかける様なことがあればこれを使うつもりだ。

「勇儀、遊ぶなら俺が後で付き合う。」

「そう見えるか。仕方ないね。」

勇儀の脚が右側から弧を描く様に進み始めた。目に見えて素早くなっている動きに青年は感動しつつ、最後の一步から飛び上がり、怪物の頬を思い切り殴りつけた。怪物の足がよろめき始めたところで空中から一方的に札を投げている二人が最後とばかりに投げってくる。

避ける手段のない怪物がまともに札の爆発の中に巻き込まれた。視界も開けることもないが青年が剣を一振りしてその札が爆発した後の煙を晴らした。

これで怪物が何処にいるのかも分かりやすい。しかし、勇儀はなんとなく目星をつけていたのか奇襲にも等しい速度で怪物の腹部に拳が刺さる。

あまりの威力に腰を曲げて飛び上がった怪物が全身に力が入らずに前へと倒れ込んだ。

しかし、地面につく事はない。後ろからは札が集中的に浴びせられて前からは青年が剣を振り上げて倒れない様にした。焼き焦げた様な匂いがする中で勇儀が最後の一発をぶちかます。

青年がつけている装備とあまり変わらないものを両腕に付けている勇儀が真っ直ぐで強烈な一撃を見舞う。

倒膝を折り畳んで地面に足をつけた怪物は最後の一撃によって瀕死寸前まで追い込まれた。

ズシン、という音と主に勇儀の息遣いが聞こえてくる。青年は息一つあげない。

「勇儀、少し休憩したら早苗とにとりと共に右側へと向かってくれ。霊夢と俺が中に入る。」

青年は次の指令を出していた。あまり時間のない青年にとって此処で長く居られるのも気に触るらしく、勇儀の肩に刀身を乗せて念を

届けている。通じるのかどうかは分からないがどうやら通じたらしい。

「霊夢とお前に中は任せた。私達は右側から、スカーレット姉妹とメイドが左側から挟み込む。任せるぜ。」

「そうか。」

青年がその様に話した時には勇儀の体は傷ひとつない完璧なものとなっていた。

第127話

青年たちが丁度カミラの代わりとして選ばれたリヴァイアサンを倒していた頃、当事者の指示で城の壁の左側から侵入する役目を受けたレミア率いるフランドール、咲夜はその道を歩いてある場所へと辿り着いた。壁の向こう側からは何やら大きな音が聞こえるがレミアは特に気にすることはなかった。仲間を信じているから。そして特に心配するような人ではないから。

「誰か居ます。此処でお待ちください。」

緑色の草が生い茂っている城が建っている小高い丘よりかは低いと思われる場所に一本のもたれかかるなら十分なほどの太さのある幹の木が生えている。その木漏れ日の中で白い枕に頭を乗せて横になっっている男性がいた。青年と同じで黒色をしているが特に手入れをされていないのかボサボサになっっていると思われる。紫色の生地、薄そうなシャツと薄茶色の短めのズボンを履いている。靴は革靴なのかどうかは不明だがしつかりとしている作りであるのは確かだ。「おや、初めてか？好きに使えよ。此処はその為に作って貰っているからね。」

何とも子供らしい見た目相応の声を出しながら気の入らない声で話しかけていた。何も障害物はないので見つかる事は承知していたが頭を少しも動かす事なく此方の気配を察知しているのは確かなので多少なり警戒した。

「それは魔王が作ったのですか。」

一番最初に前に出ていた咲夜がその人への回答をレミアの代わりにした。

「その呼び方は冗談か。それとも本気か。」

「褒め言葉ですので冗談はないと思いますよ。」

「旅の人か。昨日の件があるから多少なりピリピリとした空気が流れているから気を付けろ。」

「分かりました。私は十六夜 咲夜です。」

「そっか。僕はベルゼブブ。昼寝をするのが好きでね、彼奴がこの場

所を作ってくれたんだ。」

「それは何か理由があるようですね。」

「うん。あまりにも寝るから良い場所で寝て欲しいと言っていたかな。それから街の人が偶に訪れるようになったよ。」

「部下思いの素晴らしい方ですね。」

「ああ。本当はブリタニア王国を納めているはずだったけど。おつと、話し過ぎた。もう眠るから静かにしていれば何をしても良いよ。」

ベルゼブブはそう言うのと全く起こそうとしなかった体を反転させて右肩を地面に当てていた。

咲夜は手招きで声を出さずにレミリアを呼び出した。そして、自分も少しずつ降りながら何となく様子を伺ってみる事にした。

「これからどうしましょう。拍子抜けです。」

咲夜はそうに言った。

「仕方がないわ。こうなれば素早く抜けていきましょう。」

レミリアは簡易的に言った。正直寝ているのならばそれでも関係はない。レミリアは遠くへと逃げるように遠回りする。その後ろを音を立てないように咲夜、フランドールが歩いていく。丁度、幹の太い木がある箇所で声をかけられた。

「そこから先は辞めてほしい。敵とみなして退治しないといけなくなるから。面倒だからそれ以上は進まないですよ。」

「行くわよ。」

レミリアの一声に後ろの二人はついていく。

刹那、腹部に強烈な一撃が見舞われた事に気づいたのはその時だった。何かがこみ上げるような感覚と何が起こったのか理解出来ずに脳の処理が追いついていないことにより思考力が落ちている事に気づいた。何も考えられない、そうレミリアが感じた時には膝が地面に付いていた。そして少し傾斜があるのを感じる。

「彼処から先は城の領内になる。如何なる客も通さないように言われているから正面から入ってね。」

レミリアは手に掴めそうな草を手の中に入れて指に力を入れると其の場に立ち上がった。その横ではフランドールが立ち上がった。

た。しかし、一人だけ気を失っているようで丘の上で眠ってしまった。

「なんて強きなのかしら。こんな強烈な一撃が出来るなんて只者ではないよね。」

「王の右腕が弱くては駄目だろう。最低限の力は持っているつもりだよ。それと睡眠に入ろうとしているところだから気が立っているから制御を誤ったかも知れないね。」

ベルゼブブが立ち上がる。その動きは全く見えなかったが右腕と体で白い枕を抱きかかえているのだけはよく分かった。だからと言って何があるのかは全く分からない。それでも危機的状況であるのはレミリアでも感じ取っていた。

「貴方が青年が厄介と言っていた人で間違いなさそうね。」

「それはどうか。何もしたくないんだけどね。面倒な事をしてくれだね。」

ベルゼブブが動き出した。レミリアが自身の魔力を使ってグングニルの形を作り出していた。しかし、投げる先には誰も居ない。その代わりに右頬に殴られたような感触と右腕の肘に当たっただけの感触が残っていた。

「遅いよ。もつと本気で来ないと通りたいなら、ね。」

「やるじゃない。似ている能力の人が近くにいるから何も驚かないわよ。」

「ふーん、そうなんだね。」

気の抜けているやる気のないと言うことが露呈している態度を取るベルゼブブは拳を握りしめていた。そしてレミリアの前に向かっていった。

ベルゼブブが右腕の拳を振り抜く。

レミリアがグングニルで返しに突き返す。

何故か、フランドールが痛がり、グングニルをすれすれに交わしているベルゼブブが気にする事なく向かってくる。

わかっている、これは身近に居る人と同じ能力なのだから。味方のうちはとても頼もしいが敵となると此処まで厄介なものになるのか。

だからこそ、絶大な信頼を持っていたがどうやって青年は突破したのだろうか。レミリアは関係ないところまで思考を飛ばしていた。その事については何も問題はない。

「不思議な力ね。その華奢な体からどのようにその力が出ているのかしら。」

「さて。昔からこんなもんだったよ。彼奴にちゃんと力を見定められた時にはね。」

「それは運が良かったわね。私も人は違うけど同じような経験があるわよ。」

「それは良かった。でも、早く帰ってくれないかな。面倒臭くなってきたよ。」

「そう面倒な事でもないわよ。諦めたらそれで良いのよ。」

「それが出来たらどれだけ良かったことか。」

ベルゼブブが本気を見せてきたのはこの時だった。

左フック。

レミリアの体を失せるほどの威力を遠くから放ったベルゼブブはその場から動いてはいなかった。レミリアは片目を閉じてゆっくりと膝から崩れ落ちた。

「フラン、今は能力の使用、認めるわ。」

「お姉様、でも掴めない。」

「それは、どう言う意味よ？」

「追い付けない。私ではとても追い付けない。無理だよ。」

「厄介な事を押し付けたわね。」

レミリアは腹部の痛みを我慢しながら舌打ちをした。精一杯の力でそのように言っていた。フランは少しだけ耳を傾けていた。あまり興味が湧かないのか、それともそんな事を気にしていられるほど余裕がないと言う事なのか。おそらく後者だろう。それでも無ければ絶望に血塗られた表情を見せる事などない。

「でも、やるよ。」

「いや、だからさ。帰れば僕も何もしなくて良いの。」

「姉様と兄様のために頑張る。」

フランがそう意気込んだところでベルゼブブの姿が一瞬だけ消える。少しだけ肩で息をしているようにも見えるベルゼブブだったがそれを気にしていられるほど悠長な事ではなかった。フランも同じくレミリアと同じ様に、いや、だからさそれ以上に打ちのめされていた。再起不能という事ではないがそう言われても仕方がないと思われる。

あまりにも敵が強過ぎた。それだけが二人の脳内に流れていた。それと同時に舐めてかかった自責の念が込み上げてくる。青年に聞かれた時に月と答えなければこうはならなかったとも。

「もうさ、帰れよ。面倒なんだよ。力の差は歴然だろう。辞めておけよ。」

レミリアとフランドールが並ばされて説教を受けてしまった。そもそも如何してここにいるのかがレミリアには全くわからなかった。段々と頭の回転が悪くなってきた様で何となく視界も霞んでいると思われる。白い靄がかかっている。

「まだ、よ。私はまだやれるわ。」

「何？ かつたる。」

「約束は守らないといけないでしょ。」

レミリアがグングニルで素早く突く。

フランドールがレーヴァテインで横に振り抜く。

それでも届くことはなかった。ベルゼブブはそれでも攻撃が当たるところにはいなかった。

「面倒だ。寝よ。」

踵を返した瞬間に頬を裂くようなナイフが投げられた。

「面倒だね。立ち上がるとまた痛い目に遭うよ。」

「別にこのぐらいはどうということはありませんよ。私と続きをしましょう。」

銀髪のもみあげを三つ編みにしている咲夜が指の間にナイフを持ってその場に立っていた。両手で八本。何処から、どのように飛ばすのから無限。

「もつと強くしておくべきだった。」

ベルゼブブはまたもや面倒臭そうな表情をしている。気持ちからは分らない。

「それが最後の言葉でよろしいかしら。」

咲夜はその場から消えていた。白と黒のモノクロの世界へと入り込んだ咲夜を追えるものはない。ただ一人を除いて。

不審そうに眺めていただけのベルゼブブでさえその急激な環境の変化にはついてこれなかった。正に隠されていたかのようにここで見せてきたということだろうか。

周りには刃先がベルゼブブに向いているナイフが何十本も向いていた。

色素の薄くなった世界へと入り込んだベルゼブブがその場から移動する。見えていたという事ではないが流石に避けざるを得なかった。

「危ないな。まったく、面倒だよ。」

「私と同じ能力のようね。」

「それはどうかな。合っているといいね。」

ベルゼブブは他人事のようにそう言う。咲夜の投げナイフを軽々しく避けた後なのでそのような余裕が生まれているのかもしれない。地面に散らばったナイフが落ちていく。白と黒の世界から咲夜がそれを拾うと上の方へと投げ返していた。

後ろから襲いかかる謎の牙を色素の抜けた世界の中で動き出した。もう面倒だと感じたのか思い切り殴る覚悟が出来たのか近くに行つて右腕を体を寄せる。そこからかなりの威力で殴りつける。確かな感触と確かなダメージを感じたベルゼブブ部だがそこには当てた相手がいなかった。

白と黒の世界に入り込んで腹部を抑えてながら連続で入ったり、出たりを繰り返している咲夜が背後からベルゼブブに向けてナイフを投げつける。まるで見えていないかのようなだがベルゼブブもいつもの相手ではないとようやく感じた。

しかし、後ろを振り向いた時にはもう遅かった。雨のようになっていたナイフの束が襲いかかる。その先には油断ない視線でベルゼブ

ブを見ている咲夜が居た。そこでやつと気付いた。

「時間停止は便利な能力ではありません。誰にでも聞くといいことはありませんよ。」

金色の懐中時計を取り出した咲夜が一気に近づくことなく不規則に後ろに下がりがりながらベルゼブブに近づいてくる。徐々に詰められる距離と不意に近づいてくるその一瞬だけの間合いに入られたという感覚がベルゼブブの中で侵食していた。

「スパイラル・ゲート。」

ベルゼブブの色褪せた世界と元通りの世界が交互に広がっていく。そこで足を止めた咲夜。

時間停止の使い方は相手の方が卓越している。このようにコントロールする技術があるとは思えなかった。徐々に範囲を広げていく時間停止とそうではない渦が咲夜の周りを包み込んだ。下手に身動きの取れなくなった咲夜を襲ったのはその中で自由に動けるベルゼブブだった。行動制限のかけられた咲夜にとっては避けるだけでも大変だが逃げようものなら必ず捕まる。蜘蛛の巣の蝶の状態である咲夜を八本足の生き物が捕まえようとしている。

刹那、上から降りてくるように放たれた一本の矢がベルゼブブの腕を貫通して体の部分に刺さる。そこで一気に渦の勢いがなくなり、自由に動けるようになった咲夜は前に飛び出して押し倒しながら躊躇なくナイフを急所に当てていく。心臓、首、脳。三箇所を何回か刺した後で絶命したのを確認してふと立ち上がる。青色の服と白色の腰に巻いている前掛けが血飛沫で汚れていた。赤く染まったナイフを太腿のホルダーの中に納める。

「助けてありがとうございます。」

「良いのよ。本当は此処じゃないから。」

銀色の髪を三つ編みにしている髪型をしている女医のような赤と青のツートーンカラーの服装をしている女性が丘の傾斜の上に寝転がっていた。

「永琳じゃない。身を張ってくれたことに感謝するわ。」

「効果は効いているようね。私は青年がこれから何をしようとしてい

るのかは知っているわ。そして隠している理由も。」
レミリアに永琳と呼ばれた女性が話し始める。それはひっそりと
した声で淡々と語られていく。

第128話

無限の回廊。

シックな黒塗りの壁で明るめな赤いカーペットが敷かれている廊下と片側にある古くからあるような木で作られた年季のある扉がある。左側から差す日光が少しだけ気になるところだが黒髪の青年は気にする事はなかった。

それよりも気になることが右側の扉から感じる。何やら気配を感じる青年はその方向へ向ける視線を外せないままだった。

「ちよつと、聞いているの?」

隣を歩いているのが博麗 霊夢。幻想郷では数多くの活躍をしていたが見ている限りでは何処からその様な事が出来るのか謎である。少女らしく青年よりも小さめな体からは博麗の巫女として受け継いだ力を持っている。

「あまり。」

青年は素直に答えた。

「あ、そう。なんでそんなに動きが遅いのか聞いているのよ。」

「そうか。一つ、扉から何かを感じる。二つ、道順が分からない。そんなところだ。」

「そんなの退治すれば何も問題はないわよ。」

「そう簡単に言ってくれるがそれは可能か。」

「今の状況じゃ何処に撃てば良いか分からないけどね。可能よ。」

「そうか。それは頼もしい。」

青年が振り返る。目の前には小剣を構えていた男が一人こちらへと走ってきているところだった。

当たるはずだった小剣が弾かれたのもその時だった。

青年がくるりと避けた残像を追う様に小剣を振るがそれは届く事はなく、虚しく空を切った。

体に回転を加えて背中を蹴り出した青年の一撃に男は訳も分からずの前へと倒れこむ。目の前には霊夢が居たが容赦なくお祓い棒で叩かれた。

「これでも頼りにされていると思われるか。」

「何処から現れたのか全く分からなかったわ。」

「透明化だ。音さえ消せれば完全に周りに溶け込める。それで気付けなかったのだろう。」

「厄介な敵ね。」

霊夢がいつもよりも静かになっていた。気が沈んでしまったのかそれとも感情が起伏の激しさが露呈しているのか。青年には見えても分からなかった。

「そうか。」

青年は言葉を短く切り、その場での会話を終わらせた。別に青年にとっては厄介でもなんでも無かった。本当はもう少し先にある。

「扉には気をつけましょう。何処からどの様に現れるかは予想出来ないわ。」

「どうしてそう思った。」

「簡単じゃない。そこからしか現れないでしょう。」

「その考えは痛い目を見る。」

何処か達観している青年はこの先のことをわかっていた様だった。左腰に携えている剣の柄に触れると親指で唾を弾く。すぐさま抜いた。

目の前から現れた赤い鎧をで全身を隠している如何にも実力者らしい格好をしている人が立っていた。金色の肩にかかる長めの髪をしている少し優しそうな中に少しの厳つさというスパイスが加わっている表情をしていた。

霊夢には何が起こったのかは分からないが当たらない間合いのはずなのに大きな音がした。それはまるで柄の赤い槍と青年の持っている剣が当たったような金属音がしていた。それが急に真横から聞こえた霊夢は理解不能だった。

「騎士、イフリート。参る。」

「話し合おう。別に危害を加えるつもりはない。」

青年はそのように言うがまるで耳に入っていないかのように槍を振るう。動く事はなくひたすらにその場にいつ続けるのが確かに攻

撃は与えていると思った。

真横では先ほどと同じような金属音が聞こえている。霊夢は何も分からずにその場に立ち尽くしていた。相手がどのような技を使っているのか、何も分からなかった。

「霊夢、援護に回れ。」

青年は素早くそう言ってその場から走り出した。赤いカーペットを上をしつかりとした足取りで走り出す。しっかりと踏み込む事はなく軽く踏みつけながら次の足を出す。爪先だけで蹴り出した後で反対の足を同じようにした。

イフリートの持っている槍が素早く二回動いた。その動きについてこれないのか、霊夢が確実に狙われていた。

青年は進路を思い切り変えて霊夢の前に向かうと持っていた剣で弾いた。少し無茶をした為にバランスを崩した青年が今度は狙われた。

よければ後ろには霊夢が居る。左手で先ほど抜いた剣で一撃を防ぐ。

その後、前に左脚を一步出しながら右手に持っている剣で持ち上げる。

左手に持っている剣で横に弾くとさらに一步進んで間合いを詰め始めた。

あまりにも早過ぎる一撃に霊夢が置いていかれることになったがさほど問題ということでは無かった。

「持つてる物を床を這わせろ。」

青年は素早く後ろを向くことなくそのように言った。あまりにも早口であまり聞き取れなかったが霊夢は何となく札を投げしておくことにした。

そこでスイッチが入ったのか、青年が走り出す。今までとは比にならないほどの早さでイフリートの近くまで寄った。

一步引きながら素早く一振りを繰り出したイフリートだがそれは惜しくも空振りに終わる。しかし、当たることが目的ということでは無かった。

何が起こったのかは霊夢はもう考えないことにした。もう既に終わっている。それよりもこれをどう倒すつもりなのかを知りたかった。

「アンタ一人で行かないですよ。」

「霊夢が付いて来い。逃すと面倒だ。」

前半の部分は霊夢は聞き取れなかった。丁度イフリートの謎の一撃と青年の剣の当たる音でかき消された。しかし、後半は何となく聞こえた。

「分かったわ。なんとか倒しましょう。」

「そうか。」

青年の返答は淡白なものだった。まるで興味のないかのようだがそれでも良い。

「暇は与えん。」

「させない。」

青年とイフリートの間合いを超えた競り合いが続く。一見防衛に徹しているだけの青年だが確かに少しずつ前へと進んでいた。確実に一歩ずつ。一歩ずつ進んでいた。もう見えないようなほどに綺麗なものである。

ジリジリと後退を迫られるイフリートは踵を返して逃げ出した。そして地下にある通路へと逃げていく。

半ば罨だろうと感じた青年だが後で出てきて後ろから突かれれば一たまりもない。青年が走り出した時、霊夢もその後ろについていくことで今度こそは一矢報いようとした。

地下へと進むその階段からは真っ暗であった。光の入らない地面の下の迷宮では明かりというものが必須だった。その状況を察知して青年はいきなり懐中電灯くらいの光が出るように念じていた。刀身は青年の声に応えて光り始める。段々と明かりが灯るにつれて周りの壁の感じも何となく理解できた。

「得意分野らしい。」

青年は冷静にそう言うと言ふと平然と歩き出した。霊夢は状況に飲まれて何も出来そうにはなかった。右腕に寄り添う霊夢は何処か子ども

らしく、幼げな感じを憶える。それでも青年は気にすることなくその道を進むことにした。行動を誤って敵の罠にかかるのなら歩いてみてなんとかしようと考えていた。

青年からすればどちらに転ぼうとも楽しい事であるのには変わりなかった。

「こんなところで大丈夫なの。」

「音は立てるな。何処からくるのかは全く分からん。」

青年は足元に集中しながら霊夢の言葉を答えていた。少しだけ滑っている床と湿気っぽい空気がどうしても気になる青年は霊夢の事も気にしていられるほど余裕というものがなくなっていた。

「少し傾斜がある。一点に向かった方が良くもしれん。」

青年は一人で呟いていた。狭い道の中ではその声もかなり遠くまで響いていると思われる。何も変わらないはずだが何か変わっている。そう思えた頃にはもう遅かった。

後ろからの一撃。まともではないが霊夢の右肩に当たったそれは赤く燃えている槍の使い手が放ったものだった。炎のように燃え上がっている槍が直線上の先から見えた。

「手荒い出迎え痛み入る。」

「即刻去れ。さすれば何もしない。」

「このまま帰るのは癩に触る。押し通させてもらう。」

「こちらも行く。」

きつとイフリートだろう。間合いなど関係ない一突きだけの連弾が素早く青年の周りを囲った。勢いで霊夢を投げ飛ばして戦闘に巻き込まれないようにした青年は両手に持っている剣で弾いていた。人が二人通れるかどうかと言う狭さの中で突きを主体としたイフリートの攻撃が連発している。それを刀身で止めながらじりじりと後退を始める。青年にここでの戦闘は荷が重たかったらしく、この場から離れたがっているのが目に見えて分かる。

「霊夢、爆発を起こせ。」

「ん、分かったわ。」

一瞬戸惑った霊夢だがもう青年に任せるしかないので言われた通

りにしていた。

「そうか。」

それを青年は短く返答する。

「させん。」

大体何をするのか、大体理解しているイフリートは素早く間合いを詰めていた。ここでそのようなことをされれば大きく地形が変わる可能性がある。それだけは避けたかった。

霊夢が札を投げる。

イフリートが一突きだけして霊夢を止めようとする。

青年がそこをカバーしてその場から逃げ出した。

走る音だけが地下の迷宮の中を響いていた。イフリートは右手に持っている赤く燃えているような槍を持ちながら息を整えていた。

青年は走る。

「なんとなくだがどうにかなるかもしれない。」

「根拠はあるの?」

「ない。」

青年は堂々としていた。本来なら出来ないはず、なのだが何故か霊夢は納得していた。

血で塗られている暗赤色の壁と滑りのある床がどうして雰囲気を作り出していた。それでも青年は動じる事なく吸い込まれるような感覚を覚える何かを探していた。

霊夢は文句を言う事なく本気で走る青年の後ろを必死について行っていた。少しだけ飛行して置いていかれそうになるのを防いでいる。出口の見えない壁の連なりがそれなりの不安を感じさせる。

青年が走っている途中で立ち止まる。霊夢を受け止めながら途中で見つけた穴に滑るように足をかけた青年は真っ直ぐ行こうとしている霊夢の手を引つ張りながら向かっていく。

その場所は籠が四つある。そして真ん中には明かりのようなものが差していた。上からの日光で間違い無いと思われる。金属製の籠がある場所で白骨した骸骨を見ながらある人を待っていた。それま

では詳しくここがどのような場所が眺めていた。

「牢獄か。これはまた面倒臭そうな場所に来たものだ。」

「それより、飛んでいきましよう。」

即刻出たいらしい霊夢は青年に頼み込むがそれは無駄な事であった。

「待っている人がいる。それまではいけない。先に行くなら行っている。止めはしない。」

「私が行かせない。」

本気の片鱗を見せ始めたイフリートが青年の来た箇所とは反対方向の場所から向かってくる。そしていきなり攻撃を見舞う。今度は左肩と右足を貫かれた霊夢がその場で踞る。青年は霊夢を守りながら場所を移動していた。射線の通らない籠の奥。その辺りまで行くまでは青年が前に立ち塞がっていた。

「貴方の攻撃は槍の突きによる空気の振動。中々威力があるのは驚く。」

「そこまで読んで。ここに来た理由が分からない。」

「そうか。ならば教える。来い。」

「死など怖くはない。王に命は捧げている。」

イフリートの槍が左手の中で滑り出していた。青年から遠ざかるように動かされた槍が一気に向かってくる。

刀身に弾かれた攻撃は代わりに青年の放つ扇状の一撃として返された。

自分の技で相殺するイフリート。

お互いに一步も譲ることはなかった。

青年が一步前に出て間合いを詰める。

素早く突きを見舞うイフリートだがその攻撃は止められる事もなかった。後ろにある壁を砕いていた。

避けられた、と感じ取りながらも次の一撃を放つ。間髪入れない攻撃の連鎖に青年は参っているようにも見える。避けてばかりで段々と追い詰められていると感じれる。

一步、二歩と一気に飛び出したイフリートは近接戦を仕掛けた。

青年は横から来た槍を自分の上を通らせるように受け流していた。ガツン、と当たる槍。がら空きのところを狙った青年が懐へと飛び込んで斬りつけた。

鎧を着ている分、通りにくいはずだがそれは関係ないとばかりに刀身をぶつけていた。

振動を伝えることによる麻痺を起こさせた青年の攻撃は意外と効いていたらしくイフリートが膝をついた。

そしてニヤリ、と笑い始める。

「ここで死ぬのならば本望。」

「そうか。俺は此処では嫌だ。」

ピチャピチャと青年は足元にある液体を軽く踏み付けていた。

「そう言えるのは今のうちだ。もしこの水をどうにかして、私に勝てなければ貴様は死だ。」

「そうか。」

青年は切っ先を液体につけて何か一つの事に集中していた。

何をしようとしているのかはともかく止めようとしたイフリートだが鎧から伝わった振動の後遺症から立ち上がれなかった。

「始めよう。男の戦いを。霊夢、早く逃げておく方がいい。」

「良いのか。」

「良いさ。無駄な犠牲は不要だろう。」

「やろうか。」

イフリートの槍が燃え上がる。紛れもなくそのように見える槍を右手に持って適切な間合いから槍を向けていた。

青年の剣はパチパチと音を立てていた。何をしているのかはさておき、何か不味い事であるのは確かであるようだ。

先に動いたのはイフリートだった。

燃え上がる槍の突きを始めに近付き、飛び上がりながら下に打ち付ける。

半身になりながら避けつつ、青年はくるりと回ると折り畳んだ右脚を当てて蹴り出した。

ピチャピチャと足音を大きくたてるイフリート。一瞬の出来事を

理解するのには少しばかり遅かった。

「少しだけ近付けた剣から放電したものが鎧に流れていく。」

「悪手だったか。」

青年はそう呟きながら剣を水の中へと入れながら自分に近づいてこないようにその場で回転を始めた。少しだけ水量が増えているが此処から出る手段は上にしかなかった。水のかさが増すを待つのか。何か違うことをするしか此処から出る方法はない。

暫くの間、青年は回り続けた。それはこの部屋が段々と蒸し暑くなり、気味の悪いベタベタとした感覚と重たい空気が流れていた。正に蒸し風呂となっていた。それでも青年は回転することをやめなかった。更に水量が増して青年が対応しきれなくなった。そこでもう辞めることにした。

青年は剣を両手に持つて自分の前で擦りつけた。火花のような物が出来上がった時、それはカウントがゼロになった時限爆弾と同じであった。

第129話

悠久の時を過ごす獣がいる。誰とも群れず一人、ヴァイオリンを弾く獣面。ただ静かに木陰で弾く姿には何か惹かれるものがあつた。その姿に醜い獣の顔はなく、美女が優しく弾いているだけのようにも思えた。卓越した技術で誰をも魅了するその術に何となく押し込まれていた三人が居た。

一人がノースリーブの服装で腕に補助装備をつけている額に赤い角がある星熊 勇儀。

もう一人が緑色の髪を右肩で一房に纏めている少女は巫女でありながら現人神でもある東風谷 早苗。

最後に青年に連れてこられた中では一番足手纏いとなるはずの青い外はねしている癖のある髪をしている河城 にとり。

三人は青年とは別行動を取るように言われていた。しかし、何が居るのかは何も言われていなかった。まさかヴァイオリンを弾いているこの人が此処に住んでいるとは誰も思わなかった。

高貴な白シャツと青色のズボンを履いている。ジャケットは折り畳んで近くに置いてあるだけで着るつもりはないらしい。目を閉じながら弦を擦り付けて美しい音色を出しているだけだったその手が不意に止まった。

「何かご用件ですか？」

獣面の男はゆっくりとした落ち着いている声で話しかけていた。その声自体には何も悪意もない。特に侵入したことに対する何かを聞き出そうという感じはない。

「用はあるが、関係ない話だ。私が居たことは忘れてくれ。」

止まっていた足を動かしてその場から離れようとする勇儀の前に獣面の大男が立ち塞がった。この中では一番高い身長である勇儀も軽く超えている。

「用がないなら立ち去れ。」

「何だ、観光も許されないのでか。」

「それが出来るのは西側だけだ。」

勇儀はふとレミリアを筆頭とする紅魔館組の事を考えていた。どのようなにかわしたのだろうか。そんな関係ない事を考えていた。

「そうかい。それは置いておくとして、何者だ？」

「私か？幹部であるプルソンド。」

「そう簡単に名前を明かすのはどうかと思うぜ？」

勇儀は素早く右腕の拳を繰り出した。プルソンには案外簡単に止められた。

「無益な殺生は好まない。どうか此処は穏便に済ませたい。」

一つ息を吐いたプルソンはそのように言った。勇儀と対等に力を持ち合わせているだけではなくそれ以上の力を持っているとも思える。

「それは難しい。信念を貫いてこそ生きている証だろう。」

「同意する。」

拳を受け流した後に、ヴァイオリンを専用のケースを入れてからどこに立て掛けられていたのか全くわからない大剣を持っていた。こうなれば歌人から戦士へと早変わりしていた。

「これは此処を通したくはない私と通りたいお前の意思のぶつかり合いでよろしいか？」

「ああ、良いぜ。来な！」

勇儀の腕に付けている装備が赤く発光し始める。それに合わせて何となく勇儀の自信というのが大きくなっていくようにも思えた。そして笑みをこぼす。

「楽しそうだ。」

プルソンが呟いた時にはもう動き出していた。右脚を地面に踏み込ませながら思い切り振り切る。

対する勇儀は防御の体勢を取っていた。前から知っている人にはその行動の意味がどれほど重要であるのかは分かっていた。特ににとりは言葉を失っていた。

「弾けー！」

ガツン、という音を立てて受け止めた勇儀。しかし、宣言通りに弾くことはできなかった。相手の力が想像以上に強かった。と言う

ことである。

予想とは異なる結果に苦しそうな表情を見せる勇儀がどうしても見ていられなくなつたのかもしれない。加勢が加わつた。

「後ろにいる事、忘れないでください。」

巫女としての早苗が札を持ちながらプルソンに攻撃を仕掛けていた。あまり効いている様子を見せないプルソンは半ば無視をする形で居ることにしたらしく、何か言葉を出すような事はしなかつた。

何か起こつたのかとばかりに無視を決め込んでいた。プルソンが再度剣を構えた時には勇儀が仕掛けていた。

咄嗟に大剣の刀身で防いだプルソンだがその威力には驚く点があつた。ぐつ、と持っていた大剣がプルソン側へと倒れこむ。油断していただけと言うことかもしれないがそれは何が起こつているのかは全くわからなかつた。ただ目を見開く。

そして、思つたのだろう。

「まやかしを見ていたようだ。」

「まだまだ此処からだ。」

そういう勇儀は両手を前にして顔面を守りながら素早く間合いを詰めていた。

真つ直ぐ突き進んだ左腕の拳が相手の大剣の刀身に当たる。

傾いた大剣の隙間から右腕の拳を入れ込んだ。そちらに気が取られているうちに左腕に力を入れて押し倒した。

プルソンを倒し込んでその先へと進もう押したが少し問題が発生した。

「油断した。」

勇儀の右腕の手首から少々血が垂れていた。本来なら別に気にする事はないが装備まで切られていたということが大分問題だった。まるで効力を持たない包帯のようなものとなつたそれは無力にも等しい邪魔なだけの存在となつた。

「ぐつ、強烈な一撃だった。」

プルソンが立ち上がる。服についた土埃を手で軽く払いながら勇儀に向けて大剣を向けていた。

「少し時間を稼げ。」

「頼まれしたよ。」

入れ替わるように早苗が前に出てくる。そして持っているお祓い棒を構えてプルソンと対峙していた。しっかりと相手の一挙手一投足に注目して油断ない目をしているがあまり効力はないらしい。

「辞めたまえ。すんなりと帰ればヴァイオリンを弾いているだけの悲しい男なのだから。」

大剣を地面に差し込んで何もする気のないプルソンはその場で立っているだけだった。折角構えたお祓い棒が無駄となった早苗は微妙にふてくされながらもその場に対峙していた。いや、勝手にやっているだけなのかもしれない。

「ただし、一つ伝えたい事がある。主人に手は出さないでくれ。あの人は私を救った恩人だ。」

「何をしてくれたんですか?」

早苗は聞く。敵の話に耳を傾ける気はさらさらないのだがそれを判断するのは後でも良い。

「主人はヴァイオリンの練習する場を作ってくれた。この顔だ。誰もが怖がり、嫌われてきたのだがあの人は私の演奏を聞き入り、拍手をくれた。挙げ句、あの人は私を仲間として見てくれた。今、あそこにある切り株だが主人が自らの手で作ってくれた。座り心地も良いし、木の葉が揺れる音も心地いい。今では感謝しようにも言葉をどう伝えたら良いのかわからない。」

「そんな事があつたのですか。魔王なんて呼ばれ方は間違っているのかもかもしれませんね。」

「ああ、本当だよ。主人が居なければ私は誰かに殺されていたさ。」

「良い話を聞きました。血で汚したくないから殺生は好まないんですね。」

「血が嫌いなんだ。いや、誰かを傷ついているのを見るのが。前に来た事のある人間は最後まで立ち上がり、気絶したところで手当てを試みたが、この後は聞かないでくれ。」

「魔王と呼ばれる理由は何処にあるんですか?」

「それは口止めされている。主人との約束だ。墓場まで持つていくつもりだ。」

「何だ、昔話までして。何で泣いている？」

勇儀は軽いノリで話の中に入ったがあまりの状況の変化についてこれていなかった。声は聞いていたが様子は見ていない。

「いや、これから殺生を行わないといけないうと思つと、どうしても、な、泣けてくる。」

「元氣出せよ。私たちは此処を真つ直ぐ通りたうだけなんだ。」

「それで何をしたい。それに正面から屋敷に入れば良いだらう。」

「それは難しい。任されている事があるんだ。通らせて貰いたい。」

「それが駄目だ。何が目的だ？」

「私たちは知らない。ただ、こちらから城の中に入るように言われているだけだ。殴り飛ばしても通るつもりだがその面見るとその氣も失せる。」

「そうですね。どうします？此処から戻つて正面から入りましようか？」

「それなら文句はない。客人として招かれているかどうかは知らない。」

「その事は心配するな。」

「ならば、私が案内しよう。」

プルソンが立ち上がる。そして、誰よりも前を歩くと皆を連れて城の中へと入れた。寛容的で優しい獣面の男はかなり鈍感のようである。場の状況を完全に無視していた。

第130話

とてつもなく大きな音がした。そして地下どとつながっている穴から空気のようなものが一瞬だけ放出されたようでブワツ、と吹き上がる。

一瞬だけ目を取られた男だったがすぐに左手でつかんでいる少女に目をやった。黒髪で赤色の服装をしている街の人々の中に居てもさほど見分けのつかないだろう見た目をしている。

その少女が力なくぶら下がっているのがどうしても無様にしか見えないう人が居ないので誰もそのような事を言う人はいなかった。

「その辺にしておいてくれ。」

「何者だ？」

何処かからか現れた男が独り言のように呟き始める。赤い鎧に身を纏ったその人を肩に抱えながらゆっくりと壁の方に近づいてもたれかかるようにしてあげていた。

「俺は通りすがりの者だ。」

黒髪で後ろで一つに纏めている髪型をしている灰色の目立たない服装をしている青年が立ち上がっていた。何もする気はないのかその場にいただけだった。

「そうとは思えないがそうするとしよう。して、何用だ？侵入者の殲滅をしているだけだというのに。」

「そうか。それはご苦労な事だがその人を離してくれ。何をしたのかは知らないが仲間だ。」

「良かろう。此奴の身は貴方に預ける。」

「それは助かる。が、貴方も後ろにおいてみてはどうだ。」

「敵に塩を送ると言うことがどれほど危険なものであるか知らないわけがない。」

「そうか。知った事ではない。」

少し笑みをこぼした後、ゆっくりと壁に近寄る。青年は斜めに視線を送りながらその様子を見届ける事にした。そこから何をしたのかといえば、青年と同じく少女を壁の前に横たわらせる。そして何か一

言加えてその場から立ち上がり青年とは真正面のところで止まった。

「何が目的だ？」

「何も無い。強いて言うなら遊びに来た。」

青年は軽くそのように言った。

「このような遊びが近頃では流行っているのか。知らないこともあるもんだ。」

「そうか。調査不足という事か。落ちぶれたものだ。」

「そう言われる筋合いはない。が、それが挑発のつもりなら乗る気はない。」

その人は走り出した。青年の抜いた剣とその人の剣がぶつかる。キシキシ、と音を立てている青年の剣はもはや限界を迎えていた。寿命というのも尽きそうになっていた。

「もう乗っていると答えたのか。」

青年は剣で受け止めつつもそのように口を動かした。

「そうだ。この勝負はお前がここに来た時点で始まっている。」

良い笑顔でそういうその人は何処か楽しげにしているだけの子供でそのの相手をするのも同じような子供だった。

その人の剣は青白く光っており、愛情を持って丁寧に使われているということが見て取れる。青年よりは多少なり長めの直刀で反りがなかった。金色の唾の部分が頑丈な方らしい十字でありながら太めとなっていた。両刃剣でどちらからでも何かを斬ることを可能としている。

「そうか。いきなり斬りつけてくるのは新鮮だ。」

「受け止めているではないか。」

その人が後ろに下がりながらそのように言った。青年は離れたところまで振ってみるものの軽く止められただけだった。

「何の目的でここまで来た。」

「魔王討伐。」

「まだ怒っているのか。」

青年に魔王と呼ばれたその人が少し悲しげに答える。一回転手の中で剣を回してから調子を整えたかのように上から斜め左下へと振

り下ろす。

青年は左脚に体重をかけてから地面を蹴り出して難を逃れた。そして振っている剣の先を走るように前へと転がり出した。それを追う事はない。

「何があつた。」

「話したことはあるだろう。」

「うろ覚えだ。」

「ルシファーからは逃げたと聞いていたがそこで何があつた。」

「俺はあの時、ここで色々あつた。」

青年はそう言って口を結んだ。それは前に来た時の話で対いで競り合いを行なった後の話だ。

第131話

あの時というのは両者の刃に苛まれて倒れてしまったことのことだ。お互いに力を振り絞りながら立ち上がるようにするがその場で立てたのは侵入した俺だけだった。頭からは血を出し、腹部からはタラタラと止まりそうにない滝が流れている。体全体に傷をつけた青年だがかろうじて立っていた。ここでやっとな魔王を倒したと思えた瞬間だった。

黒いローブを被って口元と鼻先が少し見える程度の女性としか分からない服装をしている人がその場に現れた。剣を突き刺しながら立っているのもやっとな俺はその人からかけられた言葉に答えていく。

その中で確か選択を迫られた。その選択の内容は覚えてなど居ないが何かはあった。

「そのような事が。これは失礼なことをした。」

「謝る事はない。して、どうしても俺と戦いたくて仕方がないのか。」

「そうだ。私はこの時を待ちわびていた。」

「そうか。」

両手の剣をぐるりと手の中で回した青年は話しかけたその人の元へと向かう。走り出しながらも何処か悲しげに見える走り方がどうしても気に入らないらしいその人は左手で動きを止めた。術などは使う事はなく、単純に手で静止を促しただけだった。

「全力で来て欲しい。」

「そうか。」

青年は今、持っている剣を鞘に納めてから赤い服を着ている少女の横に立てかける。それからゆっくりと立ち上がると何か言葉を発してから剣を向けている人の方を向いていた。腰に携えている剣を両手で掴むと一気に抜いた。

刀身の色は黄色で発光しているように見えるが色合いからそのように見えるだけだった。その他は特に代わり映えはしない。スカスカの薄い睡と独特な巻かれ方をしている柄であった。睡の近くに指

にフィットするように巻かれていて、後ろの方はしっかりと巻かれている。

青年はゆっくりと近づきながら何かを念じていた。地面からは足裏があまり離れる事はなく、のっそり、と徐々に間合いを詰めていくように歩いていた。

「では、行こう。」

青白く光る剣を向けているその人が地面を蹴り出して青年に近づいていく。その速さは尋常ではなかった。

青年は横から来る一撃を逆手に持った右腕の剣で受け止めた。金属音が鳴り響き、少々擦れた。キシキシと腕の震えに共鳴して両者の剣が軋み始める。

青年が相手の力を利用して下へと潜り、跳ねあげられた剣を追ってその場から離れる。間合いにして、足を一步踏み出せば相手は当てられるような距離。それにしても両者が緊張感のない笑みを不敵にもこぼしていた。この環境を楽しんでいるのか、それとも目の前の敵になんとなく興奮を覚えるからなのか。

緊張感のある雰囲気ですう感じられない表情を見せつける二人は不意に剣を振り始めた。

青白く光る剣を持つ人が上から下へと斬りつける。

青年の手はそれに合わせて踊る。やんわりと柄を握っていた手は接触の反応を見せた時に、一気に力を出し始めた。

二本の剣で受け止めた青年は出てきた力そのままに相手の剣の軌道を変えて地面に叩きつけた。

そしてその勢いで体を捻ってから自身の背骨を軸に剣を動かした。弾かれた剣を元通りにしてから青年の剣を受け止める。片手では受け止められないと感じてなのか、無意識に両手で受け止めていた。一撃の威力はあるがそれを受け止めたので実力としては互角に等しいのかもしれない。

魔王と呼ばれた人が弾く。青年は仕方なくその動きに合わせて。また一刀足の間合いである。

「少し実力が劣っている。休んでいたわけではあるまい。」

「そうか。そう思えるなら幸せな事だ。」

青年はそれから一步前に足を出して威圧するようにした。そして両手からバラバラに放たれた剣が魔王の元へと向かう。

青年の剣の交点で止めた魔王は力ある限り押し返した。青年も負けじと押し返す。ジリジリと距離を近づけていつて鏢迫り合いにまで発展した。お互いの吐息と体から伝わる熱意が空气中に発散されていく。歯を食いしばる為に口を閉じた両者はその場では何も話さなかった。

不意に魔王が更に力を加える。青年は素早く離れて後ろへと地面を蹴りだす。その隙は狙わないらしく魔王はその場に立ち止まっていた。

「中々な力だ。だが、私を満足させるまではまだ遠い。もつとだ、もつと込めてみよ。」

「そうか。」

青年はまた何かを念じていた。それは突風、誰もが恐怖し、慄く。そして自分の無力さに嘆くような自然。剣の周りに風を纏わせた青年は少しだけ聞こえる空気の振動に耳を澄ませながら魔王の目を見ていた。その場からは動く事はなく、相手から来るのを待っていた。「私も始めようか。」

正にテンペスト。雷雲を纏いし青白く光るその聖剣には同じような風を感じさせる。だが、少し黒く、空気が鳴いている。

夢とは違う。ここは現実であり、幻想ではない。

青年は自分の剣と相手の剣が当たるのを恐れた。

とつさに避けた青年はその場から右脚に体重をかけてそのまま倒れようにした。

その場から離れた青年を追いかけようかのように魔王の剣が上から覆い被さる。地面を滑り出すように青年は駆け抜けていく。

魔王の剣は何も目標のない地面を斬り裂く。咄嗟に自分の体の前に剣を動かしていく。

青年の右脚が一直線に鳩尾を狙っていた。まるで槍のような動きで急所を一点突こうとしていた。

「うぐっ、」

魔王は抑えきれずに地面を滑らせながら声を漏らした。青年は浮きあげた右脚を地面につける。そして一息ついてから両手に持っている剣を手の中でクルクルと回した。上下左右、何も考えていないようだが滑らかな動きをしている。逆手に持ち、順手に持ち、地面に擦り付けて、天を仰いで、青年の周りを回り始める。一種の惑星のように剣が動いていた。

「俺もこの年月は悠々と過ごしているわけではない。」

「その通りだ。私もそれなりに鍛えていたつもりなのだが足りなかったらしい。」

「いや、俺は悪に手を染めた。それでこの結果なら成果はある。」

青年はピタリ、と剣の動きを止める。

「私に効くと思っているのか。」

「だから、直接与えるつもりはない。うろ覚えながら効かないのは知っている。」

「それなら安心した。前とは戦法が大きく変わっているが何かあったか。」

「何、関係ない事だ。剣士が有効的に体を使っただけだ。」

吐き捨てるかのような発言の仕方をしている青年だが、その気迫が変わるような事はなかった。

「私も真似してみようか。」

魔王がそう呟きながら蹴り飛ばされた距離を思いきり詰めていた。下から右上へと走る剣に青年は受け止める事はなく、素早く後ろに下がる。

そして青年が動くようなそぶりを見せてそれだけに留めた。

ふと何かを感じた魔王はもう一歩進んでから剣を振る。適当、という事ではないが甘い一撃だった。

しかし、青年はその隙をつくような事はしなかった。

相手を苛立たせるのか目的なのか、それとも休憩しているだけなのか。魔王は少し考えてしまった。

そんな難しい事はしていない。

青年は単純に間合いを空けて待っていた。

「前とは違い、少し慎重な気がする。何かあったか？」

「あまり心配する事はない。して、なぜ攻撃を止める。」

「お互い様だ。」

青年はふと体を真っ直ぐに立てて直立不動となった。ここで好機、と感じて突っ込むのならその人は二流以下、魔王は止まったままだった。

ジリジリと地面を擦りながら魔王は青年に近づいた。

青年はその場から動く事はなく、ゆらり、と今いる光景の中に溶け込んでいた。

敵なのか、友好的な人物なのかはもう既にわからなくなってきた。

魔王が間合いを詰める。そして剣を振った。右側から攻めていく。

その下を潜り抜けて魔王の周りを地面を蹴る音が聞こえる。一回、二回、三回、四回、五回目で大きくなった。

それに合わせて腕で防御をした魔王は意外にも強い力に圧倒された。腕がピリピリする、そう感じているかのような表危機的な情をしている。

「これは元々の力だけではないな。」

「俺は人間だ。こうなる前に言った。悪に手を染めた、と。」

「そういう事か。何がお前をここまでさせるのかは知らないがよく分かった。」此処では戦いにくい。玉座まで案内してやろう。」

魔王はそのように言った。正直、そこまでして欲しいわけではないが、青年は断る気にはなれなかった。

「そうか。」

短絡的な返事の中からは何処か闘気を感じる。

第132話

これは前に俺がここにやってきたときの話だ。あの時は今のよう
に仲間を散らばらせていた。分かれ道で決まりがつかないのでどち
らにもいけるようにした、というのがその理由となるがまた別の理由
もある。奇襲として何処から現れるのもあり、だと思えた。

その結果として俺はどうなったのかは知らない。その代わり、魔王
の元へは一人でたどり着いた。切った張ったの勝負の結果、俺は魔王
に勝てたが決して余裕があったわけではない。立っているのがやつ
と。溢れる血と飛び出しそんな意識の中でその場から離れようと立
ち上がったその時にその人は現れた。

「私の愛しき王様をこんな無残な姿にして。」

悲しげに言葉を連ねるその人は何処か空虚な存在のようにも思え
た。詰まる所、生気がない。ルシファーという名前をしている魔術師
であるが霊媒師の方がやっている事はあっているかも知れない。こ
の時は知らないがその後でなんとなくそう思える。

「これは済まなかった。して、貴方は誰だ。」

「名前なんて言うわけないじゃない。」

「そうか。」

俺が聞いて答えてくれるわけもないので仕方ない。

「ところで、この人は知っているかしら。」

黒い布で全身を覆っているその人は魔法である人を浮かせていた。
その人は俺の仲間の中で唯一回復魔法を覚えている人で一番最初か
ら旅を続けていた人だった。今、思えば確実に好意を抱いているがそ
の時は何も気づいていない。

「イーラ。どうしてこうなっている。」

俺は聞いた、いや、聞いてしまった。目の前のことがどうしても信
じられなかったから。そしてその姿が見るに無残だったから。

「この人はじっくりと私が殺すわ。そこで君には選択肢をあげるわ。
ここで死ぬのを眺めているか、君の記憶と引き換えにこの人を生かす
か、勿論部分的よ。残りカスぐらいは残してあげるわ。そして異世界

に飛ばす。どうかしら。」

「異世界とはどこの事だ。」

「今のところは何もわからないわ。大丈夫よ、過去にも未来にも飛ばさないから。けど、どの世界かなんて言うものでもないわ。」

ふふ、と気軽に笑ってくれるがその選択はどうしても選ばないといけないものだった。俺がこの人に勝てるかと確信できればなんとかなるかも知れないが勝てる気がしない。そもそも近づく事は可能だろうか。俺は掠れた意識と消えゆく蠟燭の火の状態で頭を使って答えを導き出した。しかし、聞きたいことがある。

「この傷は治してくれるのか。」

「治すわけないと答えたいけど良いわ。今回だけは特別よ。王様のついでにしてあげるわ。」

「そうか。して、少しは顔を見せてみても良いのではないか。声は綺麗なんだ。どのような顔立ちをしている。」

「愛しき王様の前でしか私の顔は見せないわ。」

「そうか。戯言だったがしつかりと付き合ってくれるだけ有難い。」

「意外と天然なのかしらね。」

　　またもやふふ、と笑うその人の声は確かにガラガラ声ではなかった。楽器のような声をしている。

「独り言として捉えておく。」

「答えは決まったのかしら。」

「話を切り出さないから忘れたのかと思った。」

「そんな事はないわよ。」

「俺の記憶は無くしてくれ。それでイーラが助かるならそれで良い。」

　　この時になんとなく、自分の気持ちに正直になれたような気がする。

「承知したわ。」

「俺はもう立っていられない。」

俺はその時になんとなく安堵したのか、一瞬だけ気を抜いてしまった。それ以来立てる気がしない。前に倒れこんで支えようとした剣が上手く刺さらず峰で自分の体を受け止められる形になった。無意

識に自分が助かるようにしていたのか、それとも最後に持っていたのがそうだったのか、この時ばかりは助かった。

「さて、何をしてあげましょうか。」

「何の話だ。」

「イーラとか言う小娘がどのように変わっていか知りたくはないかしら。」

「いや。興味ない。」

「意外と冷たい人ね。」

「そうか。して、回復して元気になるだけなのだろう。何か特別なことでもする気か。」

「今更気付いたの。」

その人は口元だけを見せて大きく笑みをこぼしている。その姿はさながら魔女であつたのを覚えている。

そこで俺の意識は吹き飛び、木漏れ日の少ない森の中に来ていた。近くには情けなのか、刀が日本落ちていたと言うことだ。あれからイーラがどうなったのかは全く知らない。

記憶の曖昧な俺は幻想郷という地で興味のある事をして年月を過ごしていた。その中で巻き込まれた事もあつたがなんだかんだ楽しかったとは思っている。

そして、その場に戻ってきた。魔王に連れられるがまま玉座のある大広間のところに着いた。

真ん中辺りには床に刺さった剣が二本ある。

刀身の色は銀の色で少し白くなっているようにも見えるが何も変わったところは何もない。

「ここが私たちの決戦場だ。」

「そうか。かなり広い場所だがついてこれるのか。」

「本気を出して欲しい。私も短期決戦で終わらせるつもりだ。」

魔王の体からは鬨気が立ち込めている。今までとは大きく違い、遊びという領域は超え始めた。

第133話

赤いカーペットと黒色の床。そして目の前には大きなスタンドガラスに男性に抱かれている女性がハートを渡しているところが描かれている。何かを示しているとは思いますが青年には何が示されているのかは全くわからない。

「準備は整ったか。」

青白い光を出し続けている剣はさらなる光を辺りに撒き散らしていた。

青年は魔界の職人に作ってもらった黄色の刀身を持ちながら腕を微妙に下に下げつつ、切っ先を天井に向けていた。闘気だけはお互いに十分なようで答えないが青年はいつでも良さそうにしている。どこからどのように来ようともお互いに斬り伏せ合う、そんな気がした。

辺りは蝋燭による仄暗い灯りとスタンドガラスから透き通る色のある太陽の光によつて彩られていた。しかし、どこまで綺麗な言葉を並べても薄暗いことには変わりなかった。

「何を使っても文句は言わない。」

「そうか。」

「お前はいつまでも変わる事はない。」

魔王が間合いを詰めるために走り始める。青年も近づきながら段々と無表情へと変えていく。その顔は狼のような感覚を思わせる。

二人の剣が合わさる。

今までとは違う深みのある音が聞こえてくる。そして金属の音が何かに変わる時、お互いの体が同時に離れた。

青年は膝をクッションにして衝撃を抑える。それから腰を曲げて踵を浮かせていていつでも走り出せるようになっていた。

魔王は悠然した姿勢で青年を見下ろしていた。まるで見定めるかのように上から目線である。

両手を交差させてから一気に駆け抜けた青年は腰を屈めながら間合いを無くすように詰めた。足音というのはなく、宙に浮いているか

のように走り抜けていく。その姿の奇妙であるがいちいち気にしていられるほど頭が回る時間を与えてくれるわけでもない。

青白く光っている剣を自分の前に構えた魔王が刀身で二本の剣を受け止める。

あまりにも素早く正確な一撃に冷や汗をかく。確実に喉元を狙っているのが目に見える。青年の視線はそこを向いている。

力を急に抜いた青年は相手の剣の勢いを利用して手の中で踊らせる。逆手持ち、から順手に変えた青年の剣が魔王の前に向かっていく。

上へと跳ねあげた魔王の剣が青年の一撃を止めていた。そして前に突き出す。

半身になりながら左脚を後ろにして回転して避ける青年。

飛び上がりながら攻撃を加えようとしたが相手の方がそれをするのが早かった。

青年の左腰には既に魔王の剣が存在していた。視覚では捉えられない位置ではあるがそこはもう勘で当てに来ている。

まともに受けて、抵抗する事もできなかった青年は床を転がる。右腕で着地して肘を使って衝撃を吸収した青年は剣を床に刺して滑るのを防いだ。着地した後、足裏でも踏ん張ってみたがやはり魔王というだけの力は持っていた。

到底届かない距離からでも魔王は近づいてくる。守りを捨てた戦法へと切り替えたのか、素早い動きであった。

床から抜いた剣でそれに応戦する青年。しかし、そう安安と攻撃が通ることはなかった。

攻撃を弾かれた青年は魔王からの一撃を逆手に持っている剣と右脚で止める。その場から浮かせた左脚で剣の柄を蹴り飛ばそうとするが持ち手はそれを読んでその場からは居なくなる。

空を蹴る左脚。

身体の体勢は元より捨てた一撃であるため、その場に転げ落ちるようになってしまった。そこを魔王は容赦なく剣を振り下ろす。

青年は右肩を浮かせて避ける。そのまま床を転がり、立ち上がろう

とするがそれは叶わなかった。

魔王がそれを阻止した。それはもう読まれていたようだった。間一髪で感じて避けていた青年の首筋には切り傷が入り込んだ。まさかとは思わないが当たっていたらしい。青年は首筋を触って温かいその液体を感じ取っていた。暫く触っていたが魔王は手を出すことはなかった。

青年はピタツ、と手を止める。そして前触れもなく訪れたその狂気に魔王が押しつぶされそうになる。

凶暴になり、理性を失った青年は己が欲のままに獲物を狙う。その姿は血に飢えた獣である。

止める事のままならない獰猛さには何処か冷静さを失いつつあった。魔王でさえここまで変貌するとは思っていなかったのだろう。それらしい表情を浮かばせている。

走り出した青年は相手の近くまで寄り添った。

そして剣を振り切る。両手に持っていた剣は既に下に向かっていた。後ろに避けたはずだが逃げられなかった。

たしかに青年の牙はしっかりと相手の腹部にあたる。しかし、かすり傷であるので致命傷というわけではなかった。

ただ一撃としては重たかった。

魔王でさえそれには負けないように間髪入れずに振る。

避ける事も忘れた獣は右脚を振り上げていた。もう避けるなんて選択肢はない。止めて、受け流して、攻撃を与える。逃げもしない。

「うむ、最後だ。」

魔王は不意に力を溜めている。刀身に自身のエネルギーを流し込んで何やら形を作り上げていた。その形とは正しく刀。闘気として纏わせたその一撃を青年に向けて振る。

風の吹いている中に雷が合わさったような旋風が捲き上る。青年もそれには負けないような風を起こしていた。

お互いの全身を使った一撃がぶつかり合う。今までの比ではないほどの勢いがあり、お互いの剣を滑り出して顔を極限まで近づけさせていた。

青年は両手に力を入れて前へと押し出す。

魔王は腕に力を入れて体重をかけながら押し出す。

お互いの力が暴発。

そして吹き飛ばされた。

両者が床へと転がり込む。お互いのエネルギーに負けた二人はその場から離れていく。

ハラハラ、と床と擦れた際にできた埃のような粒が舞っていた。音はなく、お互いの息遣いが何となく分かる。生きていると言うことはよく分かった。

しばらくして魔王は重たくなった体を上半身だけ起き上がらせながら周りの環境がどのようになったのか見ている。

「これはどういうことだ。」

周りには誰がいるような気はしない。そしてその場から届きそうな位置に自分が愛用している剣が転げ落ちていた。体は何となく重たいがまだ動けることを指を折って伸ばすことで確かめていた。

「そういえば、あいつは。」

ただ一人、床に立てかけられた剣に身を任せている一人の男がいた。両手には黄色の刀身を持っていない。何処かに飛んだと思われる。

灰色の目立たない服装に黒い髪を後ろで一つにまとめ上げていて、髪の色が何となくそんな感じに感じる。

前髪は適当にかきあげられているだけで何か洒落た髪型はしていない。戦闘に不必要なものは全て投げ捨てたような格好をしている青年がその場にはいた。

魔王は目の前のその姿を見ながら自分が愛用している武器で立ち上がる。意外にも体の方は言うことを聞いてくれない。指は特にそのようなことはなかった。

ゆっくりと立ち上がるだけだった。ふと目の前から鋭い殺気を感じた。それは人を殺したことがある人のもの。

「なあ、始めようぜ。ラー。」

青年はそう言った。

第134話

青年が剣を握り、ラーと呼んだその頃ではない。もう少し時間軸は戻る。

それは丁度、プルソンが半ば仕方なく勇儀と早苗、にとりを連れてきた時だった。庭先で大きな音がしていたはずだが、それが止んだ時だった。普段から修練場として扱われている真四角の建物の中にある中庭では主にイフリートが自分の鍛錬のために使っている。だが、たまに行う演習では模擬的ではあるが凄まじい威力のぶつかり合いの為に大きな音が出る事がある。だからこそ、中庭を使い、静かな環境が必要なプルソンと休息の場が必要であるベルゼブブには東西で場所を与えてられていたりする。その事は内情であり、青年が連れてきた七人は知らない。

その場には確實誰か居るだろうがそれが誰であるのかは全く分かっていない。ここからは全く判断する事が出来ないからだ。

「此処からは自分達で向かってくれ。」

獣面ので厳つい表情はしているがそれは見た目だけであり、心は誰にでも優しく出来る人だった。故にヴァイオリンの練習をしていたはずだが此処まで道案内をしてくれた。

「ありがとうございます。」

大きく頭を下げた緑色の髪をしている少女、東風谷 早苗。その人は他の二人よりも早く行動を起こしていた。その後、二人が同様の言葉を言った。プルソンはその事にいつでも助けになると言葉を残してその場からは離れた。勿論、門番が地面に伏せていようと彼には関係のない事なのであまり気にしていない。と言うよりかはあまり珍しい光景でもない。

「さて、これからどうされますか？」

早苗は戦闘を終えた後で少し疲れているような気がする勇儀といつも大きなリュックを背負っているにとりに話しかけた。早苗としては中庭で起きた音の正体を気にしているようで何だったら一人で行きそうに足を動かしていた。

「取り敢えず青年と霊夢を探そう。後はその場で決める。」
「同じだね。」

概ね意見が揃ったところで早苗は魔王が住んでいるとされている館へと入り込んだ。中は赤いカーペットが敷かれているあまりらしくはない作りをしている場所だった。窓などの外を眺めるものは特にないのはすでに分かっていたが蝋燭があるので薄暗いと言うわけでもない。陰湿で恐怖で押し潰すような場所であるかと思われたがそれでもなかった。

「何ですか、普通の感じなんて拍子抜けです。ですが、斬新で面白いかもしれません。みなさん、中庭へ向かいますよ。」

何処か間隔が二人と外れている早苗は一人で先行していく。歩いている左側には扉があり、何処から中庭に行けるのか知らないのです。礼にも一つ一つ丁寧に開けていた。特に誰かいると言うわけでもなく、使っていないと思われる部屋が多くある。その他には住む上で必要な場所があるだけであまり面白そうな狡猾な罫はなかった。

「そんなもんだ。その辺りで詮索はやめておきな。」

勇儀はそんな早苗の姿を見ながら少し保護者目線で話しかける。早苗はあまり解っていない様子であるが先を急いでいた。

扉の先では何やら大きな音がする。そして此処に集結した六人は静かにいつ入るかを相談していた。扉の向こうは今までとは違う雰囲気のある重みのある扉で戦闘を行っている音がする。見られないと言う抑制が衝動を掻き立てる。が、それを誰も入ろうと思う勇氣はなかった。

第135話

混沌とした重たい空気が流れている。それだけには留まらず、両者の吐く息がどうしてもそんな風を感じる。疲弊しきった二人に何が出来るのかといえはこの戦いを終わらせること。そしてその先の結末を目の当たりにすることのみ。

少し癖のある白色の髪で顔色は悪いのか白色だったが今では少しだけ赤みを帯びている。漆黒の鎧に身を包んでいたが今ではそのような面影は全くない。砕け散った破片が辺りには散らばっている。そして赤いマントを羽織っているが今では何処にあるのかは不明である。先程ラー、と呼ばれた人は目の前にいる悪魔のような殺気を放つ青年をマジマジと見ていた。名はまだ知られていない。

「思い出したのか。それは良かった。」

妙な興奮にかられたラーが仕方なく体を奮い立たせる。

「そうだな、気分が良い。それだけだ。」

「それが本気と言うことか。」

ラーは確認している。それをする必要は皆無である。

「自分の本当の力をぶつきたいと思えただけだ。」

青年はかなり冷静で淡々と言葉を並べているだけなのだが少しだけ恐怖心を煽られるような話し方をしている。

「ならばそれに答えよう。」

ラーは青年の元へと向かっていく。青白く光っている剣から放たれた一撃は青年の何の変哲も無い刀に受け止められた。昔からこの場に刺さっていたが誰も抜こうとはしなかったその刀は見た通りで特徴など何もない。それどころか、何処にでもあるような刀でしかなかった。

「まだ、兄弟喧嘩は続いているのか。」

青年は魔王の剣を受け止めているが何も力を出すような事はしなかった。それこそ受け止めているだけで離す気も流す気もなかった。

「今は関係ない。」

「そうか。話しかけた身であるが気にせず楽しもう。」

青年は少しだけ楽しそうにしている口調をしているが表情自体は特に変わりそうになかった。まるで自分の言葉に耳を塞いでいるような、そんな感じ。

「話が見えてこないが今はそう言うことにしておこう。」
「そうか。」

青年は思い切り相手の攻撃を弾いてその場から離れた。ふわり、と床に着地した青年は手で持っている刀を縦方向にクルクルと回していた。まるで刀が持っている肌触りを感じを確かめるように。少し奇妙な気もするがしつかりと回っていた。

対する魔王は両手に力を入れていないが切っ先が上を向いていた。闘気としては十分にあるがそれを発散する場がないと言う状況である。先ほどのことを思えば尚の事動こうとは思わない。

青年の手がピタリ、と止まる。左手には逆手持ちにした刀を自身の腰の後ろに回して右手は相手の立っている床を切っ先が指し示していた。これから向かうと言いたそうにしている。魔王はそこで覚悟を決めた。やるしかない。

青白い剣は一旦腰近くまで下ろす。そこから足に力を込めて蹴りだす。その速さは今までの比ではなかった。楽しげにそして、娯楽の一つとして本気でやり始めた魔王は青年に真っ向から勝負を挑んだ。

青年の前に届く前に一旦立ち止まり攻撃する方向を変えた。横から来ていたものを下から打ち上げるように振った魔王だがそれが綺麗に当たるようなことはなかった。

刀で押さえつけた力を使って優雅に宙を舞う。見切っていたとしか言いようがないほどの行動の素早さだった。

だからと言って、魔王が慌てるような事もなかった。その先で待つていれればいい。体を浮き上がらせた青年が床に着地するタイミングを上手く利用して攻撃を与えればいい。

青年は華麗に体をひねって押された力を中和してからゆっくりと床に足をつけようとしていた。魔王はその場に居合わせるために脚を動かして向かっていた。

そして渾身の力で振り切る。しかし、空を切ったことは自分の腕が

分かっていった。更にもう一度振ってみるが今度は受け止められただけですぐに流されてしまった。

「威厳はどうした。悠然としているお前と俺は戦いたい。」

青年は後ろから言葉を並べていた。余裕のあるように見えるその話し方がどうしても許せなかったがそれは仕方がないことだった。

「ならば、使いたくはなかった奥義を見せよう。」

「そうか。俺は少し歩いている。」

スタスタ、と歩き始めた青年の背中を狙っても良かったがそれはしようと言う気は起こらなかった。どうしても見たいのだろう。昔から挑戦することが好きな性分だったのをラーは覚えている。

「承知した。」

白色の髪を逆立たせて顔色をさらに悪くさせた魔王は青くそして白く輝く剣の眩さを一層強めていた。鼓動が早くなり、息遣いも荒くなっていた。

青年はその様子を眺めながら構えることはなかった。ただ相手の変わっていく姿を見ているだけで何か対策をしようとしているのかさえ分からない。

「して、こうやって戦うのは久しいが笑って終わろう。」

「そうするつもりだが手加減をしようとは思わない。」

「そうか。」

青年はいつも通り答えるが表情は笑っている。今までになく笑っている。これでもか、という程笑っている。

十分に時間をもらったラーが床を蹴り出して青年の元へと向かっていく。床に擦り付けながら低重心で近寄った魔王が一気に振り上げて攻撃を与えた。

青年は左脚を後ろに運んですなりと避けていく。右脚に重心をかけて青年は剣の軌道から外れるようにしていた。まるで予知していたかのように無駄のない動きである。

そこだけでは終わらず、反撃とばかりに右腕を伸ばして魔王を刺していく。

寸前のところで避けた魔王。その返しに上にあげた剣をそのまま

振り下ろした。

押し潰された青年はその場で倒れる。そのはずだが後ろへと滑るように下がった青年は何ともなさそうにしていた。

魔王は走る。

青年も走る。

魔王が前へと重心を運んで剣を振り下ろす。

青年はそれを見ずに刀を交差させて受け止めた。そして弾く。

左腕を伸ばして右斜め下方向に振り下ろす。

魔王は右脚を出してそれを軸に回転を加えながら床と水平に剣を動かす。

青年は左腕に持っていた刀で一旦止めてから右腕をその場に合わせず、後ろに回した。

逆方向から来た攻撃に自身の剣の下を通しながら後方へと下がって相手の攻撃を避ける。間一髪で鎧の側面を掠ったのでその音が耳に残る。

回転に合わせて振った剣に青年は下へと潜る。

そしてバネのように縮こませた脚から繰り出されたのはとんでもない威力を持った一撃だった。

手にあらかじめ付けていた装備が無ければ今は手が転げ落ちていただろう。傷口からは大量の血が吹き出して戦闘どころではなくなる。

魔王の白い肌からは赤色の綺麗な色をした血が流れている。しかし、その傷は浅く、切れ味自体も相当ある為、あまり痛みは感じなかった。薄皮をサラッ、と向けてしまったような感覚に陥るのだろう。

確実に首を狙っていただけに冷や汗をかくものだった。

だが、そんな安堵に浸れるほど生易しい戦いはしていない。青年がよろけた魔王に対して右足での蹴りを食らわせる。軽い一撃ではあるが後ろ方向へとよろけていく。

鎧を通して何となく伝わる衝撃にラーは謎でしかなかった。

「ストレートフラッシュ。」

青く光っている剣から光線のようなものを出した魔王の一撃は先

ほどのお返しとばかりに青年の元へと向かっていく。

右脚を下ろして次なる準備をしていた青年だが計算違いのことが起こっては何ともならなかった。

両腕に持つている剣を交差させて光線を受け止めた青年だがあまりの威力に足元が滑る。少しずつではあるが移動させられているのは確か。

上手く弾いたか青年だがその前にはズルズルと滑らせた後が残っていた。もう既に体にも限界というものが来始めた。

「まだいけるのか。」

ラーは青年に聞いていた。

「やってやる。」

青年はそれでも眼の光を失うことはなかった。最早体の限界なんていう概念はなく、目の前の楽しそうな事に一生懸命になっているようだ。

「楽しませてくれ。」

「そうか。」

ゆつくりと近づいてくる両者。

足元は既におぼつかないが体に鞭を打つても前へと突き進んでいるのだけはよく分かる。

前には倒すべき相手がいて、同時に楽しめる相手がいる。それだけだった。

「行くぞ。」

「来てくれ。」

お互いが後一步動いたら間合いに入り込むぐらいの近さまで来ていた。それからは無言で居たがふと言葉が交わされる。

それだけで両者の意思が通じたのかそれ以降は何も話さなかった。

そしてどちらも動かない。睨み合いの膠着とした状況とどれも入らせないようになっている雰囲気が出ている。

あまりにも動かない両者。

石の像にでもなつて誰かに見られているかのような感じがある。目を見開いて両者が同じような動作で己が武器を相手にあてた。

両者はその場で自分の武器を手から離すとその場で後ろに倒れ込んだ。

腹部には一本の青白く輝く剣が突き刺さっている。そして床に刺さり、上手く動けないようだった。

もう一方は少し熱くなっているのか、苦悶の表情で同じく腹部に刺さった二本の何の変哲のない刀に苦戦していた。

二人が悶え苦しみ、立ち上がることも出来なさそうになっていたが二人は根気だけで立ち上がり、自分の身に刺さっているものを持って相手に向けていた。

傷口からは血が流れている。本来ならすぐに手当を必要とするが痛そうにしているものの、それだけで終わらせていた。

これから、と思えた時には遅かった。
失神した。

魔王であるラーが魔法を付与した刀に身を焦がされていた。その痛みに耐えることが出来ずに自己防衛反応を脳が判断して引き起こした。

青年は自分の持っていた刀を奪うと、愛用の剣を返した。鞘のない刀はどこまでも彷徨う。

第136話

コツコツ、と響くハイヒールの音。灰色のパツとしない服装をしている青年はその音を聞いて何となく振り向いた。其処には月が存在していた。

黒いローブで顔の上半分を隠しているその人は少しだけ笑みをこぼしながらゆっくりと青年の元へと向かってきた。全身の肌は手の先と顔の下半分。薄暗く分らないが髪は長めだ。髪の色は明るいわけではないと思う。

「あらあら、私の王様をこんな姿にしてくれて。」

「これは望んだ結果だ。」

「そんな事を言えるのは本人だけよ。それは分かるわよね？」

「そうか。して、その方法は今あるのか。」

「ないでしょうね。回復を待つか、それとも心を抜き取って聞き取るか。そのどちらかでしょうね。」

黒いローブを被っているいかにも怪しい人は格好相応の言葉を出してくる。青年は一種の疑念を抱きながらも表情は変えずに立ち向かう。

「物騒な方法を取るものだ。して、それが王に対する貴方なりの敬意というものか。」

「今のままではこの国は終わってしまうわ。正にこの時のように攻められたらどうしようもないわよ。」

「そうか。して、ルシファー。俺は初めてここに来たわけではない。完全に記憶を消しておくべきだった。」

「これは妥協してしまったわね。まあ、何方でもいいわ。」

コツコツ、とハイヒールの高い音が鳴らして適度に距離をとる。その場から何を出すのかと思えば、人を出してきた。

黒いレオタードを着用している明らかに男を誘っている格好をしている見たことのある風貌をしている女性が現れた。右腕での先には短めのダガーのような武器を持っている。魔術師のルシファーの事だ、警戒しておくに越したことはない。

「この人が何方なのかはご存知でしょう。」

「イーラか。予想通りなので驚く気はしない。」

「あら、そう。」

短い言葉で返したルシファアだが明らかに動揺の色が隠せていなかった。逆に青年はいつも通り冷たい目をしている。

「また記憶を奪うから命は助けてあげると言いたいだろうが今回は乗る気はない。」

帰る所のない刀を持ちながら青年は淡々と答えた。そして根拠のない淡い期待などはにじみ出ていなかった。確実に居ると確信していて、自信に満ち溢れている。

「さあ、イーラ。お行きなさい。」

こくり、と首を縦に振ったイーラは音もなく素早く青年の元へと向かっていた。青年は刀を落としてしまった。

イーラもまさかの対応に驚きを隠せなかった。そしてルシファアでさえその行動には次の指示を出せなかった。

右腕から放たれた凶刃を手に持ち、身を翻して後ろから腕を組む。そして耳元で囁いていた。腕は動かせるわけでもないイーラは半ば拘束されていたが逃げようと思えば逃げれた。だが、それはしない。

そして頬を赤らめていたイーラはその場から動こうとはしなかった。いや、動かしてくれなかったと言うのか。

「イーラ、俺はもう離す気はない。して、ルシファアはここからどうするつもりだ。」

「反魂蝶。」

ルシファアは魔術師らしく高速詠唱から魔術を繰り出した。

青年は不意に口を開けてしまったがすぐに閉じた。何か考える事もない。無表情でゆっくりと目を見開いた青年に最早慈悲というものはない。

「イーラには何もさせない。」

青年はそれでも淡々とした口調をしていた。自分から口を閉じてあげた青年に何か違うものを感じたのか、ルシファアが逃げ出しそうになる。

「なぜ絶望しない。」

「信用しているからだ。」

青年は即答した。

「答えになっっていないわよ。」

「してみせる。今に見ている。」

「何処にその自信があるのかしら。」

「予感がする。それだけだ。」

青年の目は確かに信じていた。それを覆す方法が見当たらない。虚偽の自信なのか本物なのかが全く分からない。

「嘘は通用しないわよ。」

「そうか。貴方の頭を貫く一撃を見舞おう。」

イーラに抱きついたままの青年はそんな戯言にも聞こえなさそうな自信に溢れた事を言う。

「死相術。」

また詠唱を始めたルシファーだが青年は微動だにしなかった。落ち着いて呪文を聞いているだけで青年自体は動こうとはしなかった。代わりに裁きの矢が降り注ぐ。

一本だけしかなかったが正確で無慈悲な一撃にルシファーは見事にやられた。呆気ないとは思われないが青年は虚無感に浸る結果となった。

「見事だ。」

「状況が何も分からないけど良い合図をくれたから撃っておいたわ。」

「そうか。」

青年は酷く疲れたような掠れた声で話していた。抱き抱えていたイーラをゆっくりと床に倒すと青年も尻餅をついた。

「それで魔王という人は何処にいるのかしら。」

銀色の髪をしているゆつたりとした雰囲気のある女性、八意 永琳は青年に聞いていた。幻想郷で唯一青年が行うことを把握していた人である。

「此処には居ない。」

「そう。それで今抱き抱えている人は誰かしら？」

「この人は保護していてくれ。洗脳が解けたから疲れたのだろう。」
「これで終わりなのね。」

「いや、これからだ。しばらく時間をくれ。」

不意に自分の体に刀を当てた青年はゆっくりと休養をとっていた。ゆっくりと息を吐いて心を落ち着かせてからまたゆっくりと息を吸う。

「永琳。扉の向こうにいる人達も後で呼んでくれ。」

「分かったわ。二人にさせた方がいいかしら。」

「そうしてくれ。」

永琳はその言葉を聞いてその場から離れた。上品な足音が青年の後ろから聞こえていた。

自分の傷を治してから自分の唾を刀に付けてから魔王の体に優しく当てた。

「体の調子はどうだ。」

「何が起こった？」

この城の城主であるラーは上半身を起こして状況を確認していた。まるで何が起こったのか分かっていない様子だが自分の体が貫かれたと言う記憶はあるがその傷は見当たらないと言う点に特に不思議に感じていた。青年にはそれを聞いた。

「俺もただ生きていたわけでもない。簡単に死ぬるような環境にいたから自己回復する術を見出した。それだけだ。」

「私みたいなのうのと生きていたわけでもないか。」

「貴方も十分強かった。だが、余裕がなかった。見えていない部分が多くあったのだろう。」

「そこまで言われては返す言葉もない。」

魔王はそれでも冷静だった。青年はその様子を静かに眺めながら更に言葉を続けた。

「兄弟喧嘩に終止符を打たないか。」

「記憶は戻ったようだが、私は否定的であるのは知っているだろう。」
「知っている。だから俺が決めてくる。こんな所で潰せる才ではない。」

「その評価は前から変わらないか。どうして其処まで褒めるのが理由が知りたい。」

「一つだけある。興味があるからだ。」

「其処まで私の統治している国が見たいか。自分がしたいとは思わないのか？」

「それは俺には向かない。」

「一人が好きか。」

「そうだ。」

「お前らしい。だが、根拠が欲しい。」

「例えば貴方がルシファーを両腕のどちらかにしないと言うことだ。」

「一理ある。仲間を殺されたのは憎みが悩みのタネを消してくれた。」

「それは申し訳なかった。」

「戦争とは哀しいものだ。だから復讐はしない。」

「心が優しい人だ。その結果、お前は追い出されたのだろう。もう一度ブリタニア王国に戻る気はないか。」

「折角だ。お前の口車にまんまと乗せられよう。」

「決まりだ。行こう。」

「お前は単純な人だ。」

その後、扉の向こうに居た人達にもその事を話した。しかし、誰も反論を唱えるものはなく、それどころかやる気の人が多く居た。青年はその見えていた結果には特に満足する事なく、前へと突き進んだ。

第137話

魔王との契約を終えた後、親睦を深める意味とぜひ食卓を囲みたいと言う強い意志のある願いによってテーブルを囲むこととなった。

六人がけの椅子には城主であるラーと発案者である青年。そして計画の手助けをする八雲 紫と八意 永琳がテーブルに座る。後は空いている席となった。多分、スキマの中で待機していると思われる。

「と言うわけで行くことになった。」

料理が運ばれてくる間に青年は軽く説明をしておいた。これからのようなシナリオを描くのか、それによってどのような結果が生まれるのか。どこで誰がどのような役割を担うのか。主にその辺りの点だ。

「簡単に言ってくれるけどどれだけ難しいことか分かっているでしょうね。」

紫はあまり乗る気ではないようで苦言を呈している。

「私は好きにするといいと思うわ。」

対して永琳は意外とすんなりと了承した。何かあったわけではないがそれだけ信頼に足る人物である事を見通したのか、それとも興味がないのでどうでも良いのか。

「それでも助けてはくれるだろう。ならやる。」

「仕方ないわね。」

紫も半ばこうなるだろうと諦めていたようだ。

「暴君とまではいかないが横暴ではないか。」

「俺は自分勝手だ。だから誰かの上に立つのは好ましくない。その点ではラーは向いている。」

「だが、こうやって突き進めてくれたのは間違いなく貴方だ。それだけは感うことなく真実だろう。」

「そうか。褒め言葉として受け止めておく。」

其処で扉を叩くノックの音が聞こえた。ラーは入るように促した。「失礼します。王様の仰る通り王国民から頂いた野菜と私が収穫した

トマトを使ったスープでございます。」

四枚の皿を目の前に運んだ後に、一人ずつスープを分けていく。量こそは少ないが王がどれだけ慕われているかを示すには十分な代物だった。

「ご苦労。今回は申し訳ないが下がってくれ。」

「承知しました。」

音もなく去ったその人は執事のような格好をしていた。

「それでは私のここまですに至った経緯を話そう。料理は冷めないうちに食べて欲しい。毒味が必要なら私がする。」

ラーは静かだが、他の三人には聞こえるように話した。真面目な表情をしているので固唾を飲んで言葉が出るのを待っていた。

「昔の話だ。もうそろそろ兄弟のどちらかに王様として座らせようとしていた。兄はとても大口なところがあり、それを実行する力が大きかった。しかし、乱暴なやり方には私はどうしても賛同出来ないので意見をしてみることにした。」

青年は手拍子のようにそれで、と返した。

「内容としてはもう少し国民の声も取り入れたらどうだ、と言うことだ。私は王子でありながら国民と会話を行うことが好きな性分で顔は知っている人が多かった。その中でもよくしてもらっていた人がいるがその人は今は関係ない。」

お兄さんとは意見がバラバラだった言うことね、と永琳が聞く。

「そう言うことだ。今は亡くなったと思われる王は実行力のある兄を選んだ。私としては実績を挙げていないので仕方ないと思った。それに怒らせると怖いのはよく知っている。どのような方法をとっても陥れてくる。まだ、弟として手加減されていたかもしれないが怖くなった私は友と私に賛同してくれた人々と逃げてきたと言うことだ。」

ここでラーの話は終わる。

「簡単な話、紫。俺達は兄弟喧嘩を終わらせようとしている。」

「簡単に言ってくれるけどどれだけ自分勝手なことなのかは分かっているのだでしょう。」

「分かっている。そうでもしないと動いてはくれなさそうだ。仕方ない。」

「助かる。」

「まあ、良いわ。」

紫が本当に不服そうにしているが管理者として難色を示しているだけだろうと勝手に解釈してこの話は幕を閉じた。

「では、行こうか。紫、隙間を繋いでくれ。永琳はバックアップを頼む。ラーはしっかりとしてくれ。」

第138話

黒い空間と大きな目のある初めて見るのにはかなり気分を害する光景が広がっていた。しかし、全ての視線を目の前にしても堂々としていたのが一人だけいる。

「戦況はどんな感じだ。」

黒髪で後ろで一つに結んでいて前髪を手でかきあげただけの青年は疲弊している皆の前で話した。

「取り敢えず、こっちは片付いたとしか言えないね。」

額に赤い角を一本だけ生やしている星熊 勇儀が少し気怠げに答えた。それなりに傷は負っているのだろうが鬼という種族がここで負けるとも思わないので青年は何もその辺りの言葉はかけなかった。

「此方は少し痛手を受けましたが無事です。」

銀色の髪をしている紅魔館の主人に仕えるメイドである十六夜

咲夜が主人とその妹の代わりに答えた。見る限りではそう見えるがまた青年はその点の言葉は言わなかった。

「そうか。して、霊夢はどうしている。」

「其処で気絶しています。現在は永琳という医者が治療を行っているそうです。」

「そうか。大体は無事か。」

「ところで後ろにいる人は誰ですか？」

先程霊夢の安否を教えてくれた守矢神社の巫女であり、現人神の東風谷 早苗が聞いた。青年は後で説明するつもりだったが今しておくことにした。

「この人は魔王だが、本物ではない。」

青年はそう説明した。

「待て。ここは私から説明する。」

会っていない七人にとつては謎である人物が青年の横へと移動してきた。一種の緊張感に苛まれるがそれは意外と早く解けた。

「私はラーというシソー国の王をしているものだ。ブリタニア王国の国王であるベヒモスとは兄弟関係にある。昔、内乱が起こった際に私

が逃げた事がある。それから魔王と呼ばれて今に至る。これまで三回襲撃を受けたがまさかこうなるとは思わなかった。」

「ここからは俺が説明する。今からブリタニア王国に行き、ラーに太陽となってもらおう。」

「話についていけない。」

「そうか。その辺りの意見もあるだろう。素早く説明すれば同盟を結んだ。俺のやる事に反対するなら幻想郷に帰って欲しい。其処まで命を賭す必要はない。」

青年はそのように説明した。

「帰る？目的も終えていないのにどこに帰ればいいんだ？」

鼻で笑った後に少しずつ言葉を出していった勇儀は青年を舐め回すように、挑発するように聞いた。あまりにも露骨に行うが青年は全てを受け止めた。

「別にここで戦力を無駄に削り合うのも良い。だが、それなら俺を憎んだままこの場から消えて欲しい。」

「まさか。その命を捨ててくるなんて言わないでしょうね。」

「そのつもりだ。」

青年は思い切り力を込めて叫ぶように答えた。それだけで並大抵の意思ではないことは伝わる。

「私からもそれは反対する。せめて生きて皆の元に顔を出してはくれないか？」

「それは無理だ。」

ラーはここで引き下がった。

「そう言う命の散らかたは汚くはない。しかしな、それで満足する奴がここに居ると思うか？」

「人の事に関心はない。」

「イーラはどういう気持ちなんだろうな。」

「何故、知っている。」

「一部始終は見ていた。とても大切に思っている人なんだろう。なら、そいつを幸せにしてやるのが一番正しいんじゃないのか？」

「そうか。ならば、善処する。ラー、本気で俺を殺せ。それでも生き延

びてやる。」

「それでももう行ってしまおうのか。」

「そうするつもりだ。」

「戻ってこいよ。」

青年はその言葉を聞いてスキマから飛び出した。残された七人はその場で待機して見守ることしかしなかった。

第139話

青年が飛び降りた目の前には明るい黄色を基調とした部屋で白色のカーペットが敷かれていた。周りには赤い小さな旗があり、ライオンが右手に剣を持っている紋章がされていた。その剣は入ってくる者を拒むように切っ先が向けられているようだった。

白色のカーペットの上に降りた青年はすぐに頭を上げて対面にいる人を向いた。シャルロット・A・ベヒモス。ブリタニア王国の国王にしてシソー国王のラーの兄である。ラーの意見とは相反する意見の為に追い出した張本人でもある。今はどのようにしているのかは全く分からないが何もしていないと言うことはないと言断言出来る。

「魔王は倒したのか。ぐ苦勞じゃ。」

「魔王は今生きています。俺の目の前でな。」

青年は裸の刀を両手に持ちながらゆっくりと近づいていく。

「何を妄言を言っておるのじゃ。」

「そうか。例えば、ギルド制で稼いで私腹を肥やしているそうさ。さぞ、溜まっているのだろう。」

「何処にその証拠があるのじゃ。言うてみよ。」

「俺の目が見てきた。そして国民の目にも見えてくるだろう。」

「どのように見えてくるのじゃ。」

「俺が歪みを作り出した。もうそろそろ爆発するだろう。」

「それで現れるとは思えないのじゃ。」

「さて、どうなるか分からない。」

青年はそう言うときぐさま体を前に傾けてベヒモスに刀を向けた。しかし、ベヒモスの何かに施された手によって防がれた。

「ここで戦うのは辞めようではないか。」

「そうか。なら、出してみたらどうだ。」

「良かろう。戦うのは久しい。」

ベヒモスの手によって弾かれた青年は一步だけ飛び退いてから再度飛び込んだ。一気に間合いを詰める辺り、前の慎重さがない戦法を取り始めた。

左脚を軸にして二刀を振り切った。

特に武器を持たないベヒモスは魔法で強化した手によって受け止めるしかなかった。

だからと言って劣勢かと聞かれるとそうではない。

青年の刀を防いで弾いたベヒモスは口で何かを話していた。

「根底より出でし混沌よ。我が身に力を宿せ。紅蓮の炎で地を焼き尽くし、空を焦がせ。」

青年は瞬時に反応して相手の動きを合わせてしゃがんだ。距離にしてはそんな遠くはない。

「オーバープロミネンス。」

扇状に分かれた火球が王宮の壁を破って外まで出ていた。青年の後ろからは何が起こったのか全く分かっていないであろう人達が悲鳴をあげていた。

青年は混沌とした空気の中で匍匐しながら攻撃範囲から逃げ延びる。青年は転がるように白いカーペットの上を走った。

不測の事態というのは意外とすぐに起こった。

ベヒモスから放たれている火球は意外にも範囲が広がった。全てを飲み込むような一撃に青年は対抗した。

髪を暴れさせるような風と木を燃やせそうな威力を持つ炎を念じてみる事にした。片方の刀からは炎が上がり、もう片方からは風が巻き起こる。その風に煽られた炎がその勢いを増す。

見るからに威力は負けているが弱めることができるのならそれでも構わないと思われる。青年はそのまんまの事を考えながら自分の実力が劣っているのを感じた。

流石に実力が優っていると常に思っているのは傲慢かもしれない。だが、だからと言って卑屈になる必要もない。青年は何となく後者の方に傾き始めていた。

「鬱陶しい蠅がいたものだ。」

オーバープロミネンスを発動している間に外にある訓練所からは悲鳴が聞こえる。こうなればどうすればいいのかは全く思い浮かばない。

「そうか。」

青年は他人事のように答える。そしてギリリ、とした鋭い視線をベヒモスに向けながらゆっくりと行動を始めた。トス、トス、とカーペットを踏みつける足音がかすかに聞こえてくる。しかし、その瞬間のことではベヒモスを対応はできなかった。脚を狙った一撃に飛び退く。フェイントのように動かした青年の刀が訓練所のある広場へとベヒモスを吹き飛ばした。その場には未だに逃げ回っている人もいる。どれほどの被害が出たのかは見れば分かるはずだがそれでも少くなるのを願うしか無かった。

「やりおる。じゃが、まだ足りん。」

「見れば分かる。」

青年は本当に素っ気なく返した。まるで理解していたかのようになんともなさそうにはしていた。ベヒモスは言葉通りに鋼鉄の鎧でも着込んでいるような気がしなくもない。

ゆっくりとした歩調で悠々と外へと出る青年だが自信があるのかと言われるとそうでもなさそうにしている。あまりビジョンというものが見えていないのだろうか。

「何が目的だ。金か？名誉か？」

「友の作る国を見たいだけだ。」

「己が欲望の為に動こうとは思わんのか？」

「常に思っている。だからこそだ。」

「世の中は力こそが全てだ。」

「そうだ。力は必要だ。何かを守る為には必要になる。が、平伏せさせる力ではなく、皆を照らす力。それが不可欠だ。」

「何を言うのかと思えば。良かろう。この私に刃向かったことを後悔させてやろう。」

ベヒモスの手の中には大きな光が灯されていた。青年はそれを注視しながら周りの雑音を無くしていた。慌てふためく声、そして部外者として現れた青年の事を言っている声、何もかもが青年の意識の中から消えかけていた。

黒に染まったその時、ベヒモスの秘めていた力が解放された。

何処かで見たとのことのあるような弾幕を見せられた青年は特に考える事なくその場を切り抜けることにした。湾曲した軌道から出てくるだけの一撃には何処か懐かしさというものがあるがそれだけでは済まされなかった。

確実に倒しにきているホーミング性の高い弾が青年の前に訪れる。黒色の光のない弾は素早くそして無慈悲にも狙っていた。前に避けた青年の後ろからグイン、と軌道を変えて襲ってくる。

正に違反行為とされそうなものではあるが戦いの上で勝てばその人が正義となる。

左手の刀を逆手にして回転を加えながら空中で一気に切っていくがそれこそ相手の思うツボであった。

地面に着地したところで突風のようなものに煽られた青年は体勢を大きく崩した。足元がおぼつかない。そして倒れそうなどころで更なる追撃を与えてきたベヒモス。

青年は刀でなんとか弾いて自分に当たることはなかったがその威力は凄まじい。転がりだした自分の身体を止めるのがやつとという状態だった。

「これが力というものだ。」

余裕綽々と歩いてくるベヒモスを低い姿勢で睨んでいた青年だがそれほど力は残っていない。無謀なことをした、というのが正しい。

「力には屈しない。そういうのは小競り合いにしかない。」

「今、どちらが押されているのか理解する必要があるのじゃ。」

「そうか。して、トドメは刺さないのか。」

「良いや、その前にやることがあるのじゃ。」

何か唱え始めたベヒモス。それを機に何か準備を始めた青年。まだやる気はあるようだ。

「そうか。なら早めにやっておくことだ。」

「後悔すると良いのじゃ。」

「俺はしない。」

逆手に持っていた刀が自身の頭上に上がる。青年はここからでも

諦めなかった。外ではあるが刀を振り回しながら細かい弾幕を飛ばしていた。見せる気のないようなものだがそんなものはベヒモスには関係ないことだった。全てを通さない障壁を体全身に張っているようで何ともなさそうである。例えば身長ほどの弾を当てようとも何の変哲も無い事になるのだろう。それ程にベヒモスの張っている障壁というのは大きかった。

「色々と驚かさされることはあったが、もう飽きたのじゃ。」
「そうか。」

青年は落ち着いていた。このような状況でも何も動じるようなそぶりはなく、堂々としていた。

「いつまでそのような態度がとっていられるのかななのじゃ。」

「この命、尽きるまで。」

青年は刀を構えて戦闘を行う気迫を見せた。そして目の前から消えるような勢いで走り出した青年は地面すれすれから逆手に持った左腕を振り上げようとしていた。

ベヒモスは当然の如く腕で止めようとしている。交差させた腕の下側に青年の放った一撃は微かに触れただけだった。

刹那、首筋に何らかの感覚を感じたベヒモスは一瞬だけ恐れた。

青年は両脚を広げながら地面に足裏を擦り付けて方向を変え、その間には逆手に持っている刀が二本見える。サソリの尻尾のようになっているそれは的確にベヒモスに狙いをつけている。

脚を曲げた時に溜まっていた力を使って走り出した青年。

後ろを向いているベヒモスはいつものように障壁を張り始める。不可視であるが当たれば現れる。動きを読まれなければ別に当てることはできるがそうなれば満遍なく守れるように全身に張り始める。

青年の目はベヒモスの顔を狙っていた。そのように刀を動かしたのが飛び上がる。

悠然と超えていく青年は体を丸めながら背中を狙っていた。しかし、障壁に弾かれる。

青年は左足から先に地面に付けると膝を折り曲げて右足の裏を地面に付けた。そして音もなく立ち上がる。

「ラーが逃げる理由が分かる。」

青年は呟く。静かにそして冷静に。抑揚のない声になっていないような音が青年から発せられていた。

「魔王の名を知っているのか。」

「そうだ。だが、一つ疑問がある。何故そこまで弟を潰そうとする。」

「彼奴は弟ではないのじゃ。」

ベヒモスは堂々と答えていた。そしてその後に関口をもごもご動かしていた。

「そうか。して、何をしようとしている。」

「理由なんて要らないのじゃ。」

「そうか。」

青年はそれだけをその場に残して地を駆ける。

「お前は待ち過ぎた。それは過ちだ。」

青年は何故かその場でピタリ、と足を止めた。何の前触れもなく行われたそれにはなぜそのようなことをしようと思ったのかは疑問でしかない。

「ロスト・ワード。」

ベヒモスはそれだけを残す。青年は動かない体の中の意識を保っているだけだった。

第140話

動きがないからといって生きていないと言うことではない。口から吐き出しそうになる何かを何となく理由もなしに押さえつけていた。勿論のことながら手は動かす事はできないが意識だけが身体の中に残っていた。自分の意思だけで口から吐き出されそうなものを止めていたがそれも何となく限界であると感じた。

どの方角からも歌が聞こえてくる。その曲の意味や言葉は何も分からない。ただ、徐々に距離が削り取られているのだけは理解出来る。止めれたらそれはよかったと思う。

手の先や足の先、その辺りは既に感覚などない。今は立っていると身体、主に胴体が教えてくれる。視界は特に晴れてはこない。神経を断ち切られているようで全くといって反応は見せてくれなかった。それだけではない。何が起こったのかは全く分からない。大体の感覚と感触を失われている。

それは生きている意味そのものを掻き切られているようだ。細い爪でキリキリと優しく当てられているだけなのにビリビリと皮膚が破れる音が聞こえる。

そもそも生きている、とは何だろうか。その糧となるものは。信仰か友情か行動か怠慢か。居るだけの存在なのか、生きるだけの存在なのか、その垣根は。

俺に何が残っている。

「俺には俺が付いている。信仰に値するものはそれであり、友情が発生する心が熱くなったり、冷めたりするものだ。だからこそ俺がやりたい事だけの為に、その衝動を満たす為に行動を起こす。」

拳の中に握っていた刀がカタカタ、と音が鳴り始める。その瞬間に暗闇の牢獄はいとも簡単に壊れた。まるで土、押せば倒れる。

「つまり何が言いたい。」

「俺に名前是要らない。俺は自由に生きる。俺は己の欲望に溺死する。」

青年の脚はいとも簡単に動き出した。根の張った大木から抜け出

した青年がベヒモスとの間合いを詰めた。一種の興奮状態である青年は口角を上げているだけではなく、息さえ荒げていた。まともに息など吸えていない。

「お前はそうやってどれだけの人を貪り食ったんだ。生きる意志を奪ってお前は何をしている。」

解答の隙はなかった。

青年の持つている刀が襲いかかる。右斜め下から振り上げるように動いた。

同時に左斜め前からも動かし始める。

二方向からの攻撃に全身に障壁を張る事はできなかった。微妙に軌道を変えた刀は二本合わさった状態で突き刺す。

それだけで終わることなく、合わさった刀を引き剥がす。ベヒモスが気づいた頃には姿などは見えなかった。そして此処がどこであるのかも全く分からなかった。

微かな足音が頭上から聞こえてくる。地上という縛りを受けない青年は壁を走りながら現れた。それは一見すれば何の変哲も無いものでしか無いが特別なものとしてベヒモスの目には映った。想定外であるのは確か、それに加えて未知数である。

会話の余裕さえなかった。

頭上から現れた青年の持つている刀は切っ先から地面に刺さりに向かっていた。強烈な一撃にはベヒモスでさえ何ともならなかった。一本の針を通したただけだった。それだけのはずなのに両腕の制御を不能にまで追い込んだ。両肩からはただならぬ量の出血をしていた。出している本人は見たことがないのか、状況が全く理解出来ていなかった。

「待て。この私倒して何を望む。」

ベヒモスは聞いていた。

「ラーの作る国が見たい。それだけだ。」

「このまま私を倒して誰が納得する。」

「だからこそだ。」

青年はそこで言葉を止めた。空中から静かに落ちてくる。

「何かまだあるのか。」

言葉は自身と同じように二つに切り裂かれた。

「全く、血に汚したくはなかったが仕方がないか。」

「そうか。」

青年は膝から崩れ落ちる。そして足の力を失ったように地面に座り込む。腕はダラン、としたままで收拾のつかない状態となっている。身体だけは何とか起こしているだけで根気で何とかするしかないさそうだ。

「無茶をしてくれる。」

「俺はお前の作る未来が見たかったただけだ。月に沈む日々とはおさらばだ。」

「私は貴方の言う太陽となれるのかはまだ分からない。だが、その資格があると言うのなら応えてみせよう。」

「俺はもう月に沈む。後は任せた。」

青年はそれだけの言葉を太陽神と同じ名前を持つ男に託した。